

---

# 英霊達とリリカルマジカル頑張ります

MRZ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

英霊達とリリカルマジカル頑張ります

### 【Nコード】

N6636V

### 【作者名】

MRZ

### 【あらすじ】

それはまだジュエルシード事件と呼ばれる騒動が起きる前の事。高町なのは、フェイト・テストロツサ、八神はやて、ユーノ・スクライア、月村すずか、アリサ・バニングス、クロノ・ハラオウンはサーヴァントと呼ばれる存在と出会う。

それが導くのは幸せへの道かそれとも……？

始まりの夜 (N & a m p · F & a m p · H & a m p · Y) (前書き)

これは自作の”英霊達とリリカルまじかる頑張ります”の再構成も  
のです。

故にそちらと大きく違う点はユーノとクロノにサーヴァントがいる  
部分だけです。

結末等が大きく変わる事はありません。ですが、展開や細かな差異  
はあります。

そちらを見たい方はどうぞ。

始まりの夜 (N & a m p · F & a m p · H & a m p · Y)

「サーヴァントセイバー、召喚に応じ参上した」

ワケがわからない。それがなのはの感情だった。自分はただ、いい子でいなくてもいい相手が欲しかっただけ。だから神様をお願いした。

(私が本音を言い合える『誰か』が欲しい)

いい子でなくても傍に居てくれる誰かが。父が入院している現在、なのはは家族の邪魔にならないように『いい子』を懸命に努めている。でも、なのはも子供だ。甘えたい時やワガママを言いたい時もある。

だから、本音を言い合える相手が欲しい。それがなのはの偽らざる気持ちだった。それもあってのちよっとした神様へのお願い。なのは自身叶うとは思ってなかった。

「でも、こんなのではないよ……」

そんな願いをした途端、目の前に金髪の女性が現れ、しかも鎧や剣といったおとぎ話のような出で立ちときている。驚きよりも残念と言う面持ちのなのはに対し、セイバーはその凛々しい表情のまま、なのはにこう問うた。

「問おう。貴方が私のマスターか」

「……違うよ。マスターじゃない」

幼いなのはに、マスターの意味は理解できなかった。でも、それは自分の求めるものじゃない事だけは、なんとなく感じ取っていた。そう思つての返答はセイバーを軽く驚かせた。

それもあつてセイバーは、幼い少女の言葉に先程までの表情ではなく、どこか不思議そうな顔をして、なのはを見つめた。その顔は、では何なのですかと問いかけているようだ。それを受けてなのはは意を決して告げた。

私は、なのはは……あなたと、ともだちになりたいの！

自分の言葉に軽く驚くセイバーを見て、なのはは嬉しく思った。自分はそんなものじゃないくらい驚かされたのだ。その十分の一でも返す事が出来たと感じ、満足したのだ。

そんななのはの笑顔を見て、セイバーも笑みを浮かべた。二度目の召喚時は月光の中であの忘れえぬ人物と出会い、今回は星光の中、幼い少女に呼ばれた。彼女が記憶しているイリヤスフィールよりも幼い彼女からは、人としては強大な魔力を感じる。

だが、それはどうでもよい事だった。今のセイバーにとっては、なのはから予想だにしない言葉が返ってきたのだ。マスターではなく、友人になつてほしいと言われたのだから。なので、セイバーもならばと思ひ表情を和らげて口を開いた。

「友、ですか……。なら、失礼ですが貴方の名前を聞かせて頂けますか？」

セイバーは、自分が出来る限りの優しい声でそう言った。その声になのはも笑みを返し、頷いた。

「あ、はい。私はなのは。高町なのはです」

「ナノハ？ ……なのは、ですね。私はセイバー。セイバーと呼んでください」

こうして少女は、初めての友を得るのと同時に、永遠の友をも得た。星の光が差し込む部屋に、二人の笑みが輝いていた……。

突然の出来事に、フェイトは戸惑っていた。それは傍にいたアルフヤリニスも同じ。フェイトが様々な魔法に挑戦していた最中、転移魔法を構成した時、それは突然現れたのだから。

「おいおい、今度は子供かよ。ま、十年後に期待か、こりゃ」

相手は全身を青いタイトのようなものでつつみ、手には紅い槍を所持している。その気配は常人ではないと分かる者には分かっただろう。アルフとリニスは全身で警戒感を示しているが、男はそんなものはどこ吹く風とばかりにフェイトを見つめている。

一人男の異常さに気付けないフェイトは、二人の雰囲気やや戸惑いながらも眼前の相手を見つめていた。気のせいかな男の視線はフェイトを値踏みしているというより、どこか苦笑している。

「そんな警戒すんな、って言っても無駄だわな」

やれやれと両手を挙げて、男はフェイトの前で膝をついた。それにフェイト達が揃って疑問符を浮かべた。何をするのかと、そう思ったのだろう。すると、それに答えるように男はそのままの姿勢で

告げる。

「サーヴァントランサー、召喚に応じ参上した。お嬢ちゃんがマスターって事でいいか？」

だが真面目だったのは途中まで。名乗りを終えると再び立ち上がり、フェイトの頭に手を乗せたのだ。それをなぜか不快に思えない事に、フェイトは驚いていた。その手は暖かく、自分を安らげるように、ぶつきらぼうではあるが優しく撫でている。

そんなランサーの態度に、まず安堵したのはリニスだ。本能も、理性も、勝てない、と判断した相手。それがひとまず敵ではない。それがわかっただけでも良かった。

(フェイトも無意識に甘えているようですし、安心ですね)

リニスの視線の先では、ランサーに撫でられる事へ違和感を感じない事に、逆に違和感を覚えているフェイトと、そんな彼女にどこか楽しそうな笑いを浮かべるランサーの姿があった。その微笑ましさにはリニスは一人小さく笑みを浮かべる。

本来ならば異常な存在であるランサーへもつと警戒をするべきだろう。だが、何故かそんな必要はないと思えてしまうのだ。それだけの安心感をランサーから感じるのが一番の理由。それだけではなく、フェイトがどこか嬉しそうなのも大きいのだろう。

「え？ え？ ランサー？ マスター？」

「ああ。ま、主人って意味だ」

「主人？ ……えっと、多分違うと」

「フェイトから離れる！」

フェイトの言葉を遮るようにアルフがランサーへ叫びながら噛み付いた。それにランサーは微かに驚きを見せたが、それは噛まれた事ではなくアルフが声を発した事に対してだ。

一方、そんなアルフの行動自体に驚いたのはフェイトだ。ランサーが敵ではないと理解出来たが、そんな彼へアルフが起こした行動は問題しかなかったからだ。もしここで喧嘩などになっては不味い。そう考え、フェイトは何とかアルフを止めようとした。

「あ、アルフ?! 駄目だよっ! ランサーが怪我しちゃうから！」

そんなフェイトの言葉にも決して放すまいとするアルフ。そして噛まれているにも関わらず、笑みを浮かべてフェイトを撫で続けているランサー。そんな中、頑張つてアルフを引き離そうとするフェイト。

その傍から見れば小さく笑みを浮かべる光景を眺め、リニスは思う。この男ならば、もしもの時に二人を守り抜いてくれるのでは、と。そして、願わくばその時が訪れないようにと、強く強く念じながら微笑みを浮かべて三人の傍へと歩き出すのだった……

「えっと……」

「ふむ、今回はまともな召喚のようだ」

はやては唐突な現状に、必死に頭を回転させていた。冷静になれ、



とまだ十歳にも満たない少女が自分に言い聞かせていた。両親が亡くなり、独りになってまだ日も浅い。そんな中、突如として現れた謎の男。は yet は冷静に、いたってシンプルな結論に辿り着く。

「うん。ケーサツや」

「ちょっと待て」

何やら呟いていた男を無視し、電話をしに行こうとした途端、不審者が若干焦りを帯びた声で待ったをかける。は yet はそれでも止まらない。不審者がそう言うのは当然だと思い、その制止を聞き流して車椅子を動かそうとしようとしたところで 既に男が目の前にいた。

「君の考えは理解出来る。だが、私の話を聞いてほしい」

「おじさん、ドロボーやろ」

「こんな格好の泥棒がいるかい？」

そう言われて、は yet は改めて男を見る。赤いコートのようなものに、黒い服。おまけに白髪ときている。確かに、泥棒には相応しくない格好だ。泥棒は、渦巻きのような模様の袋を背負って、頭巾をしているものだった。

は yet はそう思い出し、男をドロボーとは言わない事にした。だが、ならば目の前の相手は何なのだろうと思ったのか、は yet は小首を傾げて男へ問いかけた。

「ならなんや？」

「サーヴァントだ」

即座に返された男の言葉に再び頭が混乱し出すはやて。そんな少女の姿に男は何かを思い出し、微かに笑う。かつて自分も『あの時』こうだったのだ、と思い出したのだ。日常に非日常が入り込んだあの日。何も知らぬに近い自分がある”聖杯戦争”の事を聞かされた思い出を。

なら、自分がすべきは赤い彼女の役割だ。そう思った男はどこか諭すような声ではやてへ声を掛ける。それは、どこか妹へ声を掛ける兄のような響きがあった。

「まあ落ち着け。サーヴァントは使い魔の最上級だと思ってくれればいい。そうだな……つまり分かり易く言うのなら」

そこまで言って、彼は言葉を濁す。目の前の少女にわかるように説明するには、あの時自らが拒否した言葉しか浮かばなかったからだ。そう、即ち召使い。だが、それは己の誇りに賭けても使ってはならない。

そこまで考えて、男は何か気付く。先程から少女以外誰も出て来ない事に。既に自分がここではやてと話し出して数分。にも関わらず両親のどちらも出てこない。寝ているとしても、視線を動かして見た時計が示す時刻は、まだそんな時間には早すぎるのだ。

「なあ……」

そんな彼を思考から引き戻したのは、消え入りそうなはやての声。見れば、俯いて膝に置かれた手が震えている。それだけで男にはこの家の事情を大体察する事が出来た。

「何かな」

だからだろう。出たのは彼でも少し驚くぐらいの穏やかな声だった。思えば初めから気配が少女以外なかった。それから導き出される答えは一つ。かつての彼が味わった孤独感。それをこの目の前の少女も感じながら生きているのだろうと。

そう思ったからこそその声。自分には姉代わりをしてくれた相手があった。だが、きっと目の前の少女にはそれさえいない。と考えれば、彼がはやてへ抱く気持ちは決まっていたのだ。

「おじさんは……ツカイマさんなんか？」

「そうだよ」

「それって、わたしのそばにいてくれるって事？」

「君が望むなら」

「なら　っ！！」

勢いよくはやてが顔を上げると、そこには男の笑顔があった。見る者を穏やかにするような笑顔があった。思わず言葉を失うはやてに男はしゃがんで、はやての震える手にそつと自分の手を重ねた。

「選んで欲しい。このまま一夜の夢として忘れて一人で生きるか、私と共に二人で生きてみるか」

我ながらズルイと、男は思う。こんな聞き方を一人で暮らす子供にすれば、後者を選ぶに決まっている。だが、男はどんな形であれ、少女に決めて欲しかった。

車椅子での生活。まだ小学校に通い立てかその直前か。どちらに

しろ、この少女に待っているのは大人でも辛い生活だ。それを支えてやりたい。だが、押し付けではなく、少女の意志でそれを選んで欲しい。それが男の問いかけの真意。

そう、彼女が望むならどんな相手にも立ち向かおう。彼女が願うなら、どんな事をも成し遂げよう。この身は一振りの剣。故に己が望み等はなく、主の望みが我が望み。それが今までの彼の在り方なのだから。

だが、これからの彼は違う。あの少女に思い出させてもらった誓い。あれが今の彼にあるのだ。だから、はやてを守りながら彼はあの日の夢を追いかけるのだろう。

「一人か、二人か……」

「どうかな？」

噛み締めるように繰り返すはやて。それを聞きながら男は小さく笑みを浮かべるも、答えを聞くべきかと思いつきに問いかけた。そんな男の声に、はやては我を取り戻したように数回瞬きをした。そして、男の予想通りの答えを……

「どつちも嫌や」

言わなかった。それどころか、両方とも蹴った。

「忘れるのは無理やし、共に生きるってのも何か違う思う」

「では」

どうするのか？　そう続けようとしたのだろう。が、それははや

ての言葉に遮られた。

家族になる。

はつきりした声で言い切ったはやて。それに男は一瞬呆気に取られた。

「……は？」

「わたしの家族になって、一緒に暮らす。共に生きるって、それは結婚みたいやんか。一緒に暮らすって言う方がしっくりくる」

先程まで弱々しい雰囲気をしていたとは思えない程の断言。はやては男の目を見つめたまま、そう言って笑った。その力強さに男も黙った。何故なら、その言葉にある女性を見たから。

(ああ……どうやら俺は、よっぽど気の強い女性に縁があるらしい)

穏やかな表情を浮かべ、どこか遠い眼をする男を見て、はやては不思議そうに小首を傾げた。その男の眼差しが何を意味するかなど、まだ幼いはやてでは知る由もない。しかし、それが不思議と悪い感じがしない事だけは、確信を持って言えた。

「そういえば、まだ名乗っていなかったな。私はアーチャー。サーヴァントアーチャーだ」

「あ、わたしははやて。八神はやてや」

そうやって互いに名乗りあったところで、何故だかはやては笑い出した。それを不可解そうに見つめるアーチャー。どうかしたのか

と尋ねても、はやてはただただ笑うのみ。

ややあつて、はやては笑うのをやめ、なぜ笑い出したのかを話し出した。曰く、アーチャーの名前を聞いた時、くだらないダジャレを思いついたらしい。それがツボに入り苦しかったと、そうはやては語った。

「あまり聞きたくはないが、どんなものだ」

「ぶくつ……ア、アチャーなアーチャーや」

そう言つと、再びはやては笑い出す。どうやら相当気に入つたらしい。一方のアーチャーは「やはり聞くのではなかった」と言つて苦い顔をした。それがますますはやての笑いを刺激する。

そんなはやてを見ながら、アーチャーは小さく微笑む。この日、孤独だった少女に、久方ぶりの笑いと共に家族が戻つた……

「むく、今度は随分小さいマスターですねえ。でもおく……うん、将来に期待出来そうです！」

彼　　ユーノ・スクライアは困惑していた。彼が暮らすスクライア一族は、遺跡発掘などを生業としている部族。彼も幼いながらも知識などを身に着け、こうして仕事を手伝っているのだ。

今回はちよつとした遺跡の探検。とはいえ、既に部族の大人達が調査を終え安全などは確保されているのだが、それでも彼にとって探検だった。

故に慎重に慎重を重ねて行っていたのだが、やはりまだどこか未熟だったのか、脆くなっていた床を踏んでしまいそこが抜けてしまったのだ。幸い怪我をする事もなく済んだのだが、その落下の最中彼は願った。

誰か助けてっ！

飛行魔法をまだ習得していないため、ユーノは混乱して恐怖から心底そう願った。その直後彼の体を何かが支え、無事に下の階へ降りてくれたのだ。それをしてくれた相手こそ、今の彼の前にいる獣耳の女性だった。

「え、えっと……まずは助けてもらってありがとうございます」

「いいんですよ。貴方は私のマスターなんですから。助けるのは当然です」

女性の言葉にユーノは更に困惑。自分が主人とはどういう事なんだろうか。と、そこで彼は一つの可能性に気付いた。女性の耳と尻尾を見て獣が変化していると気付いたのだ。そこから導き出された答えは、一つだったのだから。

「もしかして……君は使い魔？」

「おおっ！ 正解ですよ、マスター。うんうん、これは中身の方も期待出来そうですね」

ユーノの指摘に感心したように頷く女性。そんな様子を眺めながら、ユーノは自分の推測が当たっていた事に納得していた。だが、同時に新しい疑問が生まれてもいた。

( やっぱりそうなんだ。でも、僕は……狐かな？ そんな使い魔を作った覚えはないんだけど……？ )

そもそも使い魔自体を彼は持つていない。なのでおかしいのだ。どうして自分を助けてくれた相手がいるのかが。そんな風に考え込み始めたユーノへ、女性は少し穏やかな表情を浮かべて笑みを見せた。

「そういえば、自己紹介がまだでした。私はキャスターのサーヴァントです。気軽にキャスターって呼んでくださいね」

語尾にハートマークでもついてそうな言い方のキャスター。それにやや不思議に思いながらも、ユーノもならばと自己紹介を返した。

「あ、えっと……僕はユーノ。ユーノ・スクライア。でも、キャスターが名前だとして……サーヴァントって何？」

「厳密には名前じゃないんですけどね。それにしても、サーヴァントと言って分からないですか？ もしかして、まだ魔術師としてのお勉強はしてなかったり……？」

自分の告げた単語に首を傾げるユーノを見て、キャスターは不思議そうな声を出した。その中の魔術師との表現に、ユーノは内心違和感を覚えるも申し訳ないと頭を下げた。そんな彼の対応がどこか可愛らしく思えたが、キャスターは少し慌てて頭を上げさせた。

その後、ユーノの真面目さに微笑んでキャスターは丁寧に説明を始める。それを聞いてユーノはキャスターの異常性を理解した。彼の知る使い魔とは違う成り立ちに用語。それに出現した状況などが



らある推察が出来た。なので、確認も兼ねてキャスターへ彼は問いかけた。それは一点。魔法を知っているかとの質問。

その質問でキャスターが自信満々に頷いた。当然だと言わんばかりの態度で。だが、それも少しの間だった。ならばとユーノが見せた魔法陣にキャスターは沈黙したのだ。

「……………これが僕らの使う魔法なんだけど」

「僕らの使う……………そうですか。あのマスター、魔法って割と誰でも使えます？」

「うん。リンカーコアのある人ならちよつと勉強するだけ出来るよ。というか、マスターじゃなくて名前ですんで欲しいんだけど」

「名前です、ですか？ いやん、どうしましょう。マスターとキャスターじゃなくて、名前で呼び合いたいなんて真名教えちゃいたくありません！ でもでもお、それはまだ早いですし……………でも、マスターの要望ですからあ……………」

そう言っただけでキャスターの告げた呼び方は”ユーノ様”だった。それにユーノはそちらの方が照れるからと慌てて拒否。結局少しの口論の後、マスターで通す事になった。そこでついにてキャスターが尋ねたのは、リンカーコアの事。ユーノがその説明をすると、キャスターは若干黙り込んだ。

そう、彼女の知る知識と違う点が多いのだ。”魔法”についての考え方がそもそも違う。更にリンカーコアなどは彼女の知る限りはない。そこから彼女は一つの結論に辿り着いた。

「……………分かりました。どうやら私は異世界へ召喚されたようで

すね」

ユーノの告げた内容からキャスターは正しく自分のいる場所を理解した。そこからキャスターが詳しい質問などをしようとしたのだが、突然ユーノが視線を上へ向けた。

それにキャスターも後を追うように視線を動かすと、ユーノが落ちてきた穴の周囲に何人かの男性がいたのだ。それにユーノが安堵したような息を吐いた。スクライアの者達なのだ。

彼らはユーノがいない事に気付き、もしやと思ってここへ来てくれたのだ。上から聞こえる念話を忘れていたなどの指摘に一瞬情けない声を出すユーノ。そんな彼にキャスターは微笑ましいものを感じ、一人小さく笑う。

それに気恥ずかしさを感じるも、これで助かると思ってユーノは安堵した。キャスターはそれを理解し内心微笑むも、微かに不満そう表情と声でユーノへ文句を告げた。

もう、私がいるんですから助け出す事なんて簡単ですよ。

あ、その……ごめん。つい……

ふふふ……仕方ないですね。今回は許してあげます。でも、今後は気をつけてくださいね、マスター。

部族の者達が降ろしてくれたロープを前にしながら、二人はそんな会話をする。こうしてユーノとキャスターは出会った。両親を亡くして部族の中で孤独と戦っていた少年は、この日を契機に孤独を感じなくなっていく。そして、これがまた新しい物語を紡ぎ出す事になるのだった……

- - -  
 - - -  
 - - -  
 - - -  
 - - -  
 - - -  
 - - -  
 - - -  
 - - -  
 - - -  
 - - -  
 - - -  
 - - -  
 - - -  
 - - -  
 - - -  
 - - -  
 - - -  
 - - -  
 - - -

英霊達の別ヴァージョンネタ。原作の再構成の再構成という異質な  
 ものですが、良ければ楽しんでもらえると思います。

次回はすずかとアリサに加えてクロノの描写を予定。

## 始まりの夜 (S & a m p ; A & a m p ; K)

その日、すずかは不安の只中にいた。来月から、すずかは小学校に通う事になっている。一般的な子なら、不安よりも期待が強いのだろう。だが、彼女は一般人と呼ぶ事が出来ない理由があった。

「私は……吸血鬼」

『夜の一族』と呼ばれる吸血一族。それが、彼女の心に重くのかかっていた。初めは、何が何だか分からなかった。次は、どうしてそんな事を教えたのかと、姉の忍に怒鳴り、終いには喚き散らして部屋に籠った。

先程、ファリンが様子を伺いに来たが、放っておいてと追い払った事からも、すずかがどれ程平静でいなかったかが分かるというものだ。普段は声を荒げる事さえないすずか。そんな彼女が家族同然のファリン相手に癩癩を起こしたような声を出したのだから。

すずかも、そろそろ知っておいた方がいいと思ってね。

思い出すのは夕食後の姉の言葉。それに嫌な予感はどこかでしていた。そして、その話を理解した時、少女の頭にはある単語しか浮かばなかった。そう、即ち”化物”だ。

「普通の子は血なんか飲まない。なら、私は？ 私はどうして普通じゃないの!？」

そう泣きながら叫んで、すずかは部屋のベッドへ飛び乗った。スプリングが軋み、嫌な音を出す。この時の彼女はしらないが、この異様な身体能力の高さも彼女を特殊たらしめている要因の一つだっ

た。

感情に任せた動きが、ベッドに六歳が乗ったとは思えない程の負荷を掛けているのがその何よりの証拠だ。すずかはそんな事に意識を向ける事もなく、ただ顔を伏せて涙を流していた。

（普通じゃない私は、他の子みたいに生きていけないんだ。だって、私は……）

「化物”なんだから”

そう呟くと同時に、風がすずかの頬を撫でる。それがすずかには、自分の言葉を肯定しているように思えた。そう　　彼女を見るまでは。

風に視線を上げて窓際へそれを向けたすずかが見たのは、綺麗な髪をたなびかせ、見た事もない眼帯のようなもので両目を隠し、胸元が露わになっている黒い服を着こなしている女性の姿。

そんな恐怖を抱いて叫んでもおかしくない状況だったが、すずかが一番驚いたのは彼女の雰囲気だった。何故かはこの時の彼女には分からない。しかし、直感的に悟ったのだ。

（私に……似てる気がする）

驚きで動けないすずかに女性は無言で歩み寄って行く。何か声を出さなければと思うのだが、何故か声を出してはいけない気がしている自分がある事にすずかは気付いた。

そんな事を考えているうちに女性はすずかの前に辿り着き、おもむろにその手をすずかの頬に当てた。その手の温かさがすずかの中にある微かな恐怖心を薄れさせていく。

「泣いて……いたのですか」

綺麗な声だった。女性は優しく涙を指で拭くと、視線の高さをす  
ずかに合わせる。瞳は見えない。でも、見つめられている。すずか  
は確かにそう感じた。

女性は呆けるような表情のすずかに、微かではあるが笑みを浮か  
べた。それにすずかは魅入られるような眼差しを返す。それに女性  
の笑みが更に深くなり、声にもそれが溶けたように優しい言葉が告  
げられた。

「似ていますね……」

「えっ……？」

「ああ、いえ、気にしないでください」

「……私、似てますか？」

「……………ええ。とても」

その女性の言葉に、すずかは自分が間違っていないと確信した。  
誰かは分からないが、この人なら自分を受け入れてくれる。何せ、  
自分を似てると言ってくれたのだから。そう考え、すずかの心に喜  
びが生まれていた。

実は、厳密に言えば女性の指した似ていると言うのは、すずかと  
自分ではなく別人と彼女なのだが、それを指摘する程、女性はすず  
かを知らなかった。だから女性は、目の前のすずかを見ながらある  
者の面影を重ねていた。

(本当に似ています。マスターとサーヴァントはどこか共通点があると言いますが、まさかここまでとは)

あの暗い地下室で出会った相手を思い出し、ライダーはどこか感じ入るようにすずかを見つめ続けた。そこからどれくらい時間が経ったのだろう。二人はお互いを見合ったまま、一言も発せずじつじつと待っていた。時計の秒針が刻む音だけが部屋の中に響いていく。そして、すずかが意を決して話を切り出そうとしたその時……

「すずかちゃん、寝ちゃいましたか？ そろそろお風呂に入った方がいいですよ」

聞こえてきた心配そうなファリンの声に、すずかはやっとの思いで固めた勇気を完膚無きまでに砕かれた。そんなすずかを見て女性が小さく微笑む。

未だに声を掛け続けるファリンに、すずかはどこか疲れた声を返していた。それを聞き、先程の声よりは普段のものに近いと思っただけ嬉しそうに返事をするファリン。そんな会話を、女性はただ静かに聴いていた。

やがてファリンが下がるとすずかは拗ねたような顔をした。おそらく、自分の決意を見事に無へ返してくれた事を思い出しているのだろう。そんなすずかの顔を見て、女性は嬉しそうに語りかけた。

「良かったですね」

「何がですか」

「先程より、いい表情をしています」

そう言われてすずかは気付いた。あれほどあつた不安が、今は微塵もなかったからだ。だがその理由が分からないため、不思議そうな顔をするすずか。そんな彼女へ女性は笑みを浮かべてこう言った。

「貴方は、自分が一人ではないと気付いたからです」

女性は語る。自分にも、人とは違う事に悩み苦しんでいた”家族”がいた事を。その女性も、最後には自分を受け止めてくれる人達がいる事を思い出し、強く生きていった事を。そして、自分もまたそうしてもらった一人であると。

その話を聞いて、すずかは己の状況を改めて考え直してみた。姉がいる、ノエルがいる、ファリンがいる。例え、自分が何であろうと受け入れてくれる”家族”が自分にはいる。すずかがそう思った時、女性がその髪を撫でながら言い切った。

「それに、世の中には色々なヒトがいます。私や彼女を友人と言ってくれた者だっていたのですから」

そこで女性は一旦言葉を切った。そして万感の思いを込めてすずかへ告げる。

意外と、世界は捨てたものじゃないですよ。

そう言い切って、女性は優しく微笑んだ。その微笑みにすずかもまた笑みを返す。そして、先程女性の名を聞こうとした事を思い出した。

「あ、あの……私！ 月村すずかといいますっ！」



そう言いながら、すずかは自分に驚いていた。大声を出す事などほとんどない彼女にとって、自分が出した声量は他人のものに感じられた程だった。それでもすずかは、自分の動揺を隠せないままに女性をただ見つめて問い掛けた。

「あ、貴方の名前を教えてください」

聞き様によっては、初心な口説きにも取れそうな声。だがその瞳に映る輝きは、女性を少し驚かせた。先程までは少しも見られなかった力強さ。それをそこから感じ取ったからだ。そんな一瞬の間の後、女性はその口元を緩めて答えた。

「私はライダー。サーヴァントライダーです」

その声に込められた想いを、すずかは知らない。そしてライダーも、それに気付けない。何故ならそれは、姉が妹を得たかの様な嬉しさが滲んでいたのだから……

突然だが、アリサ・バニングスは言葉を失っていた。誘拐されたからでも、今から乱暴される所だったからでもない。誘拐などは、ここまで危ないものは初めてだがもう何度も経験しているし、乱暴されるのも覚悟していたからだ。

そう、アリサが言葉を失っているのは視界に映っている光景だった。何せここは無人の廃墟。住む者など誰もいない廃ビルなのだから。

そんな廃ビルの窓。そのむき出しのコンクリートに腰掛け、長い刀を抱えている侍がいた。折から吹く風に、着物が微かに揺れて音を立てる。そんな何かの映画のワンシーンのような景色に、アリサの周囲にいた誘拐犯達も同じ様に言葉を失っていた。

それもそうだ。何故なら、確かに先程まではそこに誰もいなかったのだから。気が付けば突然そこに彼はいた。だから、誰も言葉がなかったのだ。そんな周囲を他所に、まるで自分しかないように侍は静かに口を開いた。

まことよい月夜よなあ。

誰もが言葉を失う中、侍はそう言い出した。まるでそれは独り言でも漏らしたように。

「俗世は様変わりしておるが、月の美しさは変わらぬ」

ずっと左手を上へ上げ、その形を何かを持つように変えた。アリサには、それが何か理解できた。父親がよくお酒を飲む時にする仕草だったからだ。

「このような時は静かに杯を傾け、雅を感じるがよいのだが……」

そこまで言っつて、侍はアリサ達を初めて見た。それだけでアリサは安心感を感じていた。侍が何者かは知らない。もしかしたらこの廃ビルの幽霊かもしれない。それでも、それでもだ。

（ああ、アタシ助かったわ）

そう心から確信してアリサが安堵したのを契機に、誘拐犯達は侍に向かって動き出した。その手にはナイフや拳銃と言った凶器が握

られていたが、侍はそれらをまるで気にも留めず、ただ一言だけ告げた。

無粋よなあ。

それだけ言うと、いつの間にか彼はアリサの傍へ立っていた。何が起きたか分からぬため、戸惑う誘拐犯達を眺めて侍は静かに手にした刀を構える。

たったそれだけ。それだけにも関わらず、誘拐犯達は誰一人として動けなくなつた。彼らは誘拐のプロフェツショナルチーム。当然、修羅場等も経験している。今更、刃物を所持した男が一人現れた所でどうという事はないはずだった。

だが、現実には誰も動こうとしない。いや、出来ない。本能が、理性が告げる。コレからは助からないと。逃げるとさえ思えない。ここにいる全員が同じ心境だった。ああ、ここで自分は死んだ。そう心から思ったのだ。

一方の侍はまったく動かない誘拐犯達を見て、僅かに、傍にいたアリサさえ気付かない程の声で呟いた。それは微かな気遣いから出たものだ。

「幼子には目の毒よな」

そして放たれた斬撃は、誘拐犯達を全員倒した。”死”ではなく”気絶”という形を以つて。事の全てを見ていたアリサだったが、流石に一撃で終わると思っていなかったのか、何度も目を瞬かせていた。

すると、アリサは急に体が軽くなるのを感じた。見れば体を縛っていた縄が綺麗に切られている。どうしてと思うとその答えはすぐ

に告げられた。

「これで動けるであろう」

視線を動かせば侍が平然と刀を手に佇んでいた。彼が縄を見事に切断したのだ。アリサはその技術に驚きながらも日本の礼儀に則り、起き上がると同時に彼へ頭を軽く下げた。

「ありがとうございます。誰だか知りませんが、ひとまずお礼を言わせて頂きます」

そんなアリサの言葉に侍が軽く驚いた。自分のどこかに変な所でもあったのだろうか。確か日本の礼儀はこれでいいはず。そんな風にアリサが思っていると、答えは予想の斜め上をいつていた。

「なんと、異国の娘が流れるような日本語を」

「ちよおおおっと待ちなさい！」

あまりの言葉に、アリサは装うとしていた良家のお嬢さまの仮面をすぐに捨て去った。古風だとは思っていたが、どうやら目の前の侍は本気で時代錯誤の存在らしい。簡単な話を聞けば、気が付くところにいる、自分が襲われそうになっているのを見つけたのだと言う。

アリサはそんな事を飄々と語る侍を、心底胡散臭いものを見るように見つめていた。だが、それでも自分の恩人には違いない。そう思い直し、アリサは自分の感情にけりをつけた。

「まあいいわ。とにかく助けてもらったんだし、お礼はちゃんとするから」

「ふむ、私は別に構わぬが……」

「アタシが構うの！ とりあえず名前を聞かせて。いつまでもお侍さんじゃ呼びにくいわ」

「それもそうよな。私はアサシンのサーヴァント。名を佐々木小次郎と言う」

「アサシン？ サーヴァント？ 何でそこだけ外国語なのよ。ま、いつか。じゃ、小次郎でいいのね」

そこからアリサが色々と質問しようとした時だ。俄かに下の方から声が出てきたのだ。その中の声の一つに、アリサがよく知るものがあった。傍付きの鮫島のものだったのだ。

本当にこれで助かった。そうアリサが思った時、小次郎がゆっくりとその頭に手を置いた。何を、と言おうとしてアリサは言えなかった。視界が滲んできたからだ。それに何だとアリサが疑問に思う前に小次郎が呟いた。

「幼き身でよく耐えたものよ。だが、恐怖に涙するは恥ではない」

「べ、別に……っく……アタシは……怖く、なんて」

「そうであろう。そなたが涙するは嬉し涙よ。なら、何を躊躇う事がある。思う存分流せばよい。私と月以外は誰もおらぬし」

私は何も見ておらぬ。

それが切欠だった。アリサは流れ出す涙を止める事が出来なかつ

た。ただ声を押し殺して泣いていた。それを視界から外し、小次郎は月夜を眺める。彼の手から伝わる温もりと、流す涙の暖かさに、アリサはある決意を固める。

（アタシを泣かせてタダですむと思わない事ね！ 絶対お返ししてやるんだからっ！）

余談だが、この後現れた鯨島達が小次郎も誘拐犯と勘違いし、取り押さえようとしたところをアリサが一喝するのだが、その様子を見て小次郎が大いに笑った事だけ記しておく。

クロノ・ハラオウンは足元に転がる男達を眺め、小さくため息を吐いた。彼らは違法行為に手を染めていた犯罪者。質量兵器の密輸をしていたのだ。その証拠を掴み逮捕する事。それが今回の執務官として与えられた彼の仕事だった。

だが、これをやったのはクロノではない。彼の目の前で退屈そうにしている女性がやったのだ。それも、魔法を使わず肉体のみで。クロノはそれを改めて頭の中で整理すると、ため息混じりに視線を女性へ向けた。

「それで……一体君は何者だ？ 突然目の前に現れ、僕の制止を聞かずに突撃し、しかも魔法も使わず相手を制圧するなんて正気の沙汰じゃない」

「最後の言い方はちょっと気に障るけど、ま、いっか。私は……一応まだバーサーカーって事になるのかな？ そのサーヴァント。」

よろしく頼むね、坊や」

クロノはそんなバーサーカーの言葉に眩暈を感じた。色々と尋ねたい事はある。だが、一番にはつきりさせる事が出来た。クロノは努めて冷静にと自身へ言い聞かせながら、彼女へ問いかけた。

「まさかとは思うが、その”坊や”とは僕の事か？」

「以外に誰がいる？」

即答。しかも、声にはどうしてそんな分かりきった事を聞くのかとの疑問も混じっていた。それを感じ取り、クロノは湧き上がる怒りを抑えて一旦呼吸を整えてもう一度口を開いた。

「坊やは止めてくれないか。名乗るのが遅くなったが、僕はクロノ・ハラウンと言うんだ。それで、君の名はバーサーカーでいいの？ もし違うのなら、名前を教えてくださいと助かるんだが」

「あー、つまり子供扱いは止めてって事か。分かった。じゃ、クロノって呼べばいいのね。それと名前はそれでもいいよ」

「ちょっと待て。それでもいいとはどういう事だ？」

予想外の返事にクロノは心から疑問を浮かべて問いかけた。言った事をそのまま受け取れば、目の前の女性は名前を軽く考えている事になる。それはあまり好ましい考え方ではない。

そう考え、クロノはそんな事をそのままにする訳にはいかないと思った。なので、バーサーカーへその意図を問い質した。彼女はそんなクロノにやや楽しそうにはあったが、簡単に説明をしていく。サーヴァントの事や真名の事にバーサーカーとの名の意味などを。

その説明を聞き終えたクロノは、はつきりと理解した事があった。それは目の前の存在が自分の常識を超えた存在だという事。ある種の死者蘇生のようなサーヴァントの仕組み。彼女自身は違うとは言ったが、本来はそうなる事だと説明したのだ。

彼の知る使い魔は動物を素体として生まれるものだ。決して人を指して使い魔などと呼ばない。大体、人を使い魔にするなど前代未聞。そう考えれば、彼女の異常さが分かると言ったものだった。

しかも、使い魔に低級上級などの概念はない。その点からも目の前の相手が自分とは違う概念を有している事は明らかと言えた。次元漂流者に近いかもしれない。そう判断した故にクロノは彼女へこう言い切った。

君の話は分かった。だが、僕は君を使い魔などと思えない。だから、出来る事ならバーサーカーと呼びたくない。

へえ、真面目なんだ。いいよ。なら私の名前を教えてあげる。私はアルクエイド・ブリュンスタッド。アルクエイドでいいから。

クロノの言葉を好ましく取ったアルクエイドは、どこか懐かしむように笑顔で言葉を返す。会話は一先ずそこまできとなり、クロノは倒れる男達へバインドを施して拘束していく。それを眺め、アルクエイドは不思議そうな声を漏らしていた。

「……どうかしたのか？」

「いや、私の知っている魔術とは大分違うなあって」

「魔術？ いや、これは魔法だ」



「え？ クロノは”魔法使い”なの？」

「まあそう言えなくてもないが……いや少し待てよ。アルクエイド、君のいた世界の事を詳しく教えてくれるか？」

何か認識がずれている気がする。そう判断し、クロノは男達の拘束を終えてアルクエイドへ詳しい話を聞こうとする。だが、それを遮るようにクロノの頭へ念話が聞こえてきた。

【クロノ君、大丈夫？】

【エイミーか。ああ、無事に制圧したと報告しただろう。心配しなくていい】

アルクエイドの話を聞きながら、エイミーへ現状を出来るだけ告げていくクロノ。ちゃんとアルクエイドへ相槌も打ちつつ、エイミーへの念話もこなしていた。マルチタスクと呼ばれる技能だ。

やがてクロノはアルクエイドの話から彼女の世界の恐ろしさを知る。魔法と違い非殺傷などが無い魔術。更に彼女は管理外世界である”地球”出身である事も把握出来たのだ。それがクロノとしてはある意味一番大きな問題だった。管理外である地球には魔法文化はないはず。クロノはそう記憶していたからだ。

（グレーム提督から聞いた話でもそれは間違いない。とすれば……地球には管理局が知らないだけで、密かに魔法と似たようなものが存在しているのかもしれないな）

これは一度個人的に調べてみる必要があるかもしれない。そんな風に思いながら顎に手を当てるクロノだったが、彼女はそんな彼に

不思議そうな表情を見せていた。

「どうしたの？」

「いや……アルクエイド、君は地球で生まれた事に間違いはないんだな？」

「そうだよ」

クロノの確認にアルクエイドはそうあっさり返して視線を動かす。向けた先は天井。そこには先程の戦闘で出来た穴があり、星空が見える。しかし月が二つ見える事に気付き、彼女はその景色に小さく呟いた。

ふうん、やっぱりここにある地球は私が暮らしてた場所とは違うんだろうなあ。これはまた面倒事になるかも……

その呟きはクロノには聞こえなかった。しかし、表情から寂しいとの気持ちは伝わったのだろう。咳払いを小さくすると、アルクエイドへ真剣な表情で告げた。

「いきなり知らない場所に来たんだ。不安になるのも無理はない。だが、執務官の名に誓って、君を絶対に地球へ送り届けるから安心してくれていい」

それにしばらく目を開けたまま呆然となるアルクエイド。そんな彼女にクロノは力強い眼差しを返す。次元漂流者と思い、安心させなければならぬとの使命感があったからだ。

そんな彼の気持ちを知ってか知らずか、アルクエイドはややあつてから嬉しそうに笑い出した。それは子供が出すような無邪気な笑

い声。クロノはその声に少しだけ馬鹿にされたように感じたのが、表情に苛立ちが混ざる。

「あゝ、笑ったなあ。うん、ありがとクロノ。でも、すぐに送ってくれなくていいよ。それよりも頼みがあるの」

アルクエイドはそう言って、クロノへある提案をした。その内容にクロノとしては少し不安があつたが、本人の希望なので可能な限り善処すると返した。こうして二人は男達を現地の陸士達へ引き渡してその場を去る。

アースラへ戻った後は、アルクエイドの事を現地で遭遇した次元漂流者として周囲へ理解を得ると共に、念話で母であるリンディと補佐であるエイミィへ事実を告げた。

こうしてクロノは真祖の姫と出会う。クロノの雰囲気から、どことなくあの眼鏡の青年を思い出すアルクエイドは、この後エイミィと共に彼をからかう事となる。それにクロノが頭を悩ます事になるのだが、今はまだそれを誰も知らないのだった……

- - - -  
- - - -  
- - - -  
- - - -

クロノは彼女と出会いました。まあ、ユーノがキャスターだったからバーサーカーと予想は出来たでしょうけど。

赤セイバーを期待された方、申し訳ないです。彼女はややこしいの

で無理でした。セイバーとセイバーじゃ出会った後が大変なので。

## ファーストデイズ（S & a m p · R）

「ではスズカ、ファリンと買い物に行つて来ます」

「うん。ライダー、ファリンをよろしくね」

「ふふっ、わかっています」

笑みを浮かべるライダーにつられる様にすずかも笑う。最近序列変更があり、ファリンはライダーの妹分になってしまっている。まあ、本人もライダーお姉様と呼んでいる辺り満更でもないようだが。

「では……」

「行つてらっしゃい」

メイド服を翻し、ライダーは歩き出す。歩きながら少しずれた眼鏡を指で直して。既に違和感がなくなりだした格好を思いながら、ライダーは思う。自分も変わったな、と。

あの日、彼女に似た面影を持つすずかに出会った『始まりの夜』から既に半月。月村の家にも慣れ、メイド服にも慣れた。清楚な雰囲気はどこか妖艶さが漂うのは、ライダーが着ているせいだろう。しかし、当初家主である忍はミニスカートタイプを着せようとしたのだ。それはライダーとすずかの抵抗&弁護により阻止され、ノエル達と同様のロングとなった経緯がある。

（あの日の朝は……色々とありましたね）

思い出すのは出会いの日の朝。ライダーとすずかの二人が強く結びついた時の事……

柔らかな日差しと鳥のさえずり。それを目覚ましに、すずかはゆつくり目を覚ます。すると、何か違和感を感じた。

「あれ……？ 何で……」

窓とカーテンは開いていたはず。そう続けようとして、すずかの意識が覚醒する。

「そつだ！ ライダーは！？」

「呼びましたか？」

どこか不思議そうに答えた声に、すずかは慌てて振り向く。そこには、昨夜と同じ格好で眼鏡を掛けたライダーの姿があった。その手にした絵本がどこかシユールだ。

「えつと……」

「はい」

「お、おはよう。……ライダー」

「おはようございます、スズカ」

その何とも言えない光景にすずかは若干戸惑うも、何とか挨拶を交わす。ライダーはそれを平然と受け入れ、返した。そして、またその視線を絵本へ戻す。ちなみに、手にした絵本はすずかのお気に入り、のファンタジー物だったりする。

しばらくライダーのページをめくる音だけが部屋に響く。その光景を見つめ、すずかはある疑問を浮かべた。そう、何かが違うのだ。昨夜会った時とは違う。そう感じるすずかは、それを確かめようとライダーへ視線を向けた。

「ライダー……」

「はい？」

すずかの声にライダーは再び視線を戻す。その瞳の美しさにすずかは魅入られそうになるものの、何とかそれを抑え付けた。そう、疑問はそこにある。

「その眼鏡は？」

「以前いた場所で頂いたものです。思い出の品、といえ品ですね」

まさか、残っているとは思いませんでしたが。そう言って、ライダーはそう感慨深そうに呟いた。すずかは、そんなライダーに何故最初から眼鏡ではなかったのかを尋ねた。それならあんなにビックリしなかったのに、と思ったのだ。

その言葉に、ライダーは笑みを浮かべて答えた。仮にこの状態ですずかは驚いたはず。そう返したのだ。それは否定できない推理だったが、すずかは反論する。ビックリの度合いが違う。それにライダーが反論する。するかと思っただが、彼女は申し訳なさそう

な顔をした。

「そうですね。それは確かに……。すみません、スズカ」

「えっ？」

想像した事と違う反応にすずかは戸惑う。違う、そうじゃない。自分は謝ってほしかった訳じゃない。ただ、ライダーともしっかり話したかっただけなのだ。そう思い、何か言わなければと思った時だった。

ライダーが、笑っていたのだ。それはどこか悪戯を成功させたように。だけど、どこか詫びるような笑み。そこですずかも気付いた。

「もしかして……」

「はい、少しからかってみました。ですが、スズカ相手ではあまり気分はよくないですね」

そう言うと、ライダーは心底後悔しているのだろう。顎に手を当て何事かを呟いている。セイバー相手ならばとか、リンはなぜあんなにも嬉しそうに……等と言っているのだ。

その中に出てくる名前は、全てすずかには聞き慣れない名前ばかりだったが、それよりも聞きたい事があるとはかりに彼女は口を開いた。

「ねえライダー……」

すずかがそう声を掛けた瞬間、ライダーが少しだけ固まった。どうしたんだろうとすずかが見つめてみると、ライダーは何か慌てた



ように視線を動かした。

「な、なんですか？ スズカ」

「何で眼鏡を掛けるの？」

「いえ、それは……えっ？」

想像した言葉と違ったのか、ライダーは何かを弁明しようとして聞かれた事を理解した。だが、それがどうして気になるのがライダーにはわからなかった。故にどこか不思議そうな表情をすずかへ向ける。

「目が悪いって事じゃないんでしょ？ ならどうして眼鏡を掛けるの？ すごくキレイな瞳なのに」

もっとはつきり見たいな。そんなすずかの言葉に知らずライダーは喜んでいた。そして同時に悲しんでもいた。何故なら、その事を話す事はすずかの望みに応えられない事を意味するのだから。

それでも教えるべきかもしれない。そう判断し、ライダーは小さく息を吐くと真剣な眼差しをすずかへ向けた。それにどこかすずかも息を呑む。それに内心微笑みながら、ライダーは話し始めた。

「分かりました。何故私が瞳を隠していたのか、それを教えます」

ライダーは静かに語り出す。己の本当の名と、それにまつわる事実を。

蛇の怪物メドゥーサ。その名はすずかも聞いた事があった。見た者を石に変え、恐ろしい姿をした化物。ライダーはすずかに理解し

易いように、難しい言葉や単語は使わず、簡単に話した。その語り口には何の感情もなかったが、姉が出てくる話の箇所だけは、懐かしむような響きがあった。

すずかは、その話をするライダーを見て酷く心が痛んでいた。ライダーは何か悪い事をしたわけではない。それなのに怪物にされ、実の姉をその手にかけさせられた。自分の意思に関係なく、望まぬ状況に置かれた。すずかはそこでやっと気付いた。自分が感じた感覚はこの事を無意識に感じとっていたんだと。

そして、それを理解したすずかは、自分の最後を語りだそうとしたライダーに……

「もういい！ もういいよっ！！」

遮るように叫んだ。聞きたくないと言わんばかりに。怒りの感情そのままに、すずかは激しく首を振る。そんなすずかにライダーは言葉がなかった。わかったからだ。何故すずかが怒っているか。何に対して激怒しているか。

（優しい子ですね、本当に）

すずかは泣いていた。それは怒りの涙。理不尽に対する抗議の証。神様という存在に、少女は初めて憤りを感じていた。ただ愛された。その相手に奥さんがいて、怒りが愛した夫ではなく、ライダーに向かった。ライダーが誘った訳でも、近付いた訳でもない。

なのに、悪いのはライダーにされた。住む場所を追われ、姿を変えられ、大切な姉達を亡くし、最後には命さえ奪われた。しかも、それを行った者は英雄とまで称えられて。

自分が泣く事で何かが変わる訳じゃない。それでもすすかとは思った。自分がライダーの味方になるうと。例え世界を、神様を敵にしても、自分だけは、絶対に自分だけはライダーの傍にいようと。奇しくも、それはライダーの二人の姉が出した結論と同じだった。そして、すすかはライダーに抱きつき、強く抱きしめる。

「スズカ……」

「もう大丈夫だよ。ライダーには、私がいるから」

ずっと傍にいるから。その言葉にライダーも優しくすすかを抱きしめる。自分の事を我が事のように感じ、泣いているすすかへありったけの感謝と想いを込めて。

それは、すすかを起こしにきたファリンが来るまで続いた……

「あの後大変だったなあ……」

あの日の事を思い出さずかは笑う。部屋に入ってきたファリンが、ライダーを侵入者と判断して大騒ぎになったのだ。ノエルに忍までやってきて、すすかは説明に苦労したのを思い出す。

更に困った事に、ライダーがファリンとノエルに勝ってしまったため、余計にややこしい事態になったのも要因の一つだ。結局、すすかの言葉とライダーの態度で理解はされたが、そこからがまた大変だった。

ライダーが伝説の存在だと言う事。現れた理由が分からない事。そして本当は違うが、ライダーがそうした方がいいと判断したために、彼女も吸血種である事がわかったからだ。

そんな突然の事に戸惑う忍ではあったが、すずかの様子からライダーが既に彼女の中でどういう存在か把握し、それに免じて不問とした。この判断にライダーは忍にあの赤い少女の姿を重ねた。

その後、例のメイド服に関する話となり、そこでも色々あったのだが……

(でも、ライダーはどこか楽しそうだったよね)

無理難題をふっかける忍とそれを助長するファリン。それを落ちて着いて嗜めるノエルに慌てるすずか。それを眺め、ライダーは確かに笑っていたのだ。それを思い出し、すずかは小さく微笑む。

すずかは知らない。そのやりとりがかつての衛宮邸を彷彿とさせていた事を。ライダーがそれを思い出し、自分の立ち位置に内心苦笑してたのを。

そして、ライダーはすずか付きのメイドとなって、忍の悪戯めいた提案によりファリンが教育を担当したのだが……。

「これはですね……」

「……ですか？」

衛宮邸での暮らしで家事をある程度していたライダーに隙はなく、ファリンが逆に教わる方が多かったのだ。

それでも、先輩としての意地を見せようとするファリンだったが、持ち前のドジを如何なく発揮。それをライダーがフォローする結末になり、見かねたノエルがライダーの教育を変える事となって今の形へ納まるに至るのだ。

「それにしてもサーヴァントかぁ。私だけの護衛みたいなモノだつてライダーは言ってたけど……」

すずか付きなのは、ライダーがサーヴァントの意味を周囲へそう語ったからだ。そんな事を思い出しながら、ふとテーブルの上にある写真立てを眺めてすずかは思う。

（来週からは小学生だな）

あの時あった不安はもうほとんど消えた。色々なヒトがいるから、友達だつてできるはず。初めから打ち明ける事は出来なくても、いつかそれを打ち明けたい友達が出来る。それで嫌われてもいい。いざとなれば自分には家族がいる、ライダーがいる。それに……

意外と、世界は捨てたものじゃないんだから。

ライダーの言った言葉にすずかは勇気付けられた。ライダーがそう思ったのなら、きっと世界はそうなのだと。テーブルの写真立てには、月村家全員で撮った写真と、慣れないメイド服に照れているライダーとの2ショットが飾られていた。

どちらも共通しているのは、すずかが笑顔だという事。そしてすずかとライダーの手が繋がれている事だ。それを嬉しそうに見つめながらすずかは心から呟いた。



## ファーストデイズ（F & amp; L）

腕に付いた噛み痕。それにやや違和感を感じるも、それを付けた狼を眺めてランサーは目を細めて納得した。その体から感じるのは魔力。つまり、狼はそれを持つ存在。

（使い魔、か。それもかなりのモンだ。こりゃ、本気で今回は当たりだな）

サーヴァントである自分へ傷を付けられたのもそれ故だろう。そう理解し、小さく笑みを浮かべるランサーの視線がその狼の隣へ移る。その先には金髪の少女がいた。名はフェイト。彼を呼び出した存在だ。

その身に宿す魔力は並外れたモノがあり、ルーン魔術の使い手である彼から見てもやや驚くものがある。そんなフェイトだが、今彼女はリニスのお説教を聞いていた。まあ、本来はアルフに対するものなのだが、自分が止め切れなかったのも悪いとフェイトが言っ二人揃って仲良くリニスに怒られていたのだ。

（あれじゃあ姉妹だな。にしても、あの女の方も魔力を感じる。だがこいつは……あの狼に似てるだど？）

その様子を眺め、ランサーはリニス相手に違和感を感じた。使い魔だろう存在と似た気配をしているリニス。その正体を知らぬ彼は、少し思案顔をした後、後で聞く事で決着する。

そして、彼はそのフェイト達の関係を把握した。どうやらフェイトは立場が一番上だが、リニスの弟子のようなもので、アルフはフェイト付きの使い魔だが、リニスにも使役されているのだろうと。よってリニスが現状一番上にいるようだ。そうランサーは理解し、

苦笑を一つ。

その様子は、やはりどこから見ても姉に叱られる妹とペットに見えなかったからだ。しかも聞こえてくるのが、無闇に人を噛んではいけないとか、フェイトの言う事をキチンと聞きなさいなどくれば、それはもう微笑ましいものだ。

自分は場違いだな、とも思いながらランサーは周囲を軽く見渡し、槍を両腕で抱えて退屈そうに呟いた。

「で、俺はいつまで突っ立ってிரいやいいんだ？」

しかし、その声は当然フェイト達には届かない。それに苦笑を深めつつ、ランサーはため息を吐いた。だが、その表情はどこか呆れるようで楽しそうに見えた……

お説教が終わった後、ランサーを待っていたのは質問攻めだった。しかし、それらはランサーにとっては予想通りのものばかりだったため、比較的早く済んだ。ただ彼が気になったのは、サーヴァントの説明をした際のリニスの反応だ。どこか驚きながらも、最後には悔しそうな顔をしたのだ。

だが、一番の問題は別にあつた。それはランサーがフェイトに質問した事。ここはどこだ、と言う問いかけ。それにフェイトではなく、リニスが答えた事から始まった一連の流れだ。

「ここは時の庭園です」



「あ？ そりゃ何だ？」

そこからリニスはランサーへ簡単にこの世界の事を説明していく。次元世界、管理局、ミッドチルダに魔導師とランサーの聞き覚えのない言葉ばかりが出てくるそれ。更にとどめとばかりにランサーを襲ったのは、試しにとリニスがやってみせた『バインド』と呼ばれる拘束魔法だ。

突然現れた光の輪に驚くランサーだったが、それが魔力で出来ている事を認識した途端、音も立てずにバインドを消した。

「……っ！？」

「中々便利な代物だが、構造が甘いんだよ」

ランサーがやったのは、バインドの魔力に自分の魔力を加えただけ。ルーン魔術の使い手たるランサーから見れば、基本デバイスありきの魔法は穴だらけなのだ。この身がキャスターとして召喚されていれば、おそらくもっと早く解除できたと語るランサーに、リニスは心の底から思った。

（（ランサーが敵でなくて良かった））

そんな事を知るはずもないランサーは、驚愕の表情を見せるフェイト達へどこか自慢げに笑みを見せているのだった……

長い通路を歩くフェイト達。向かう先は、フェイトの母親であるプレシアのいる部屋。母さんに紹介しなくてはとフェイトが思い立ち、現状に至るのだが、ランサーには気になっていいる事があった。それはアルフ達の雰囲気とリニスの忠告。

決して過去から来たなどと話してはいけません。

周囲に強く告げるその表情は普段の彼女にはないもの。故にフェイトとアルフは戸惑いながら頷き、ランサーさえ鬼気迫るモノを感じたのだ。更にランサーの話聞いていた時や現状を説明していた時と違い、今は明らかに不安そうな顔をしているのだ。

それもフェイトが母親の事を語るたびに、何とも言えない表情を浮かべていたのだから、ランサーとしては余計に気になるところだ。なので、聞くべきか否かと思っただが、会えば原因も分かるだろうとランサーは結論付けた。その考えは良くも悪くも的中すると知らずに。

やがてランサー達は大きな扉の前へ辿り着く。そこでフェイトはやや緊張したような面持ちとなり、アルフとリニスはやや辛そうな表情を見せた。ランサーはそれに疑問符を浮かべるも、何も言わずにフェイトの後を追う。

「入るね、母さん」

何故かアルフとリニスは外で待つと言って扉の前に残り、フェイトとランサーは中へと進んでいく。その先にいたのは黒髪の女性。その身体に宿る魔力はフェイトを凌ぎ、全身から他者を圧倒する気配を漂わせていた。

彼女の名はプレシア・テストロッサ。フェイトの母であり、大魔

導師と呼ばれた女性。だが、ランサーが反応したのはその威容ではなく、別の部分だ。そう、一目見ただけで彼には感じるものがあったからだ。

（魔力が安定してねえだと？ これは……さては病か？）

魔力探知に長けるサーヴァントだからこそ分かるのだ。その体が弱っている事は。しかし、目の前のプレシアはそんな様子を一切見せず、フェイトとランサーを見つめる。

その視線はどこか威圧するようにも見え、ランサーは見知らずの自分を警戒しているのだろっと思っただ。まだこの時は、そう考える事が出来たのだ。それが間違っていたと、彼はすぐに知る事になる。

「……その男は？」

「あ、ランサーと言って……その、私が召喚しました」

詰問するようなプレシアの聞き方に、少し怯むようにフェイトは言葉を返す。その実の娘に話しているとは思えない態度に、ランサーは怒りを通り過ぎて驚いていた。何せプレシアはまったく表情を変えず、ただモノでも見るかのようにフェイトとランサーを見ていたからだ。

今も経緯を説明するフェイトを、路傍の石でも見るかの如き目で見下ろしている。そんな異常な光景を見て、ランサーは目を覆いなくなった。

（おいおい、マジかよ。やっとマシなマスターかと思えば、こんなところに厄介事が隠れてやがった）

そう思うも、内心でランサーは納得していた。何故リニスとアル

フが部屋に入らなかつたか。何故フェイトが母親の事を話すたびに  
気まずそうにしたのか。その答えが眼前にあつたのだ。

そんな風にランサーが自分の運の無さを嘆いている間にも、フェ  
イトはプレシアへ先程あつた事を話していく。そのフェイトの話に  
プレシアが興味を抱いたのはバインドを壊した方法だった。

人であるランサーが使い魔である事にも興味があつたようだが、  
それよりも相手の魔力に自分の魔力を加えるという聞いた事がない  
技術へ意識が向いたからだ。

その話を詳しくと言われ、フェイトは嬉しそうに語り出す。ラン  
サーに説明された事を懸命に思い出しながら、精一杯フェイトは語  
る。合間合間にプレシアが聞く事に詰まりながら、ランサーに助言  
をもらつて答えるフェイト。

それをランサーは支えた。途中、プレシアがフェイトを通して会  
話する事を面倒に感じ、自分に直接尋ねた時には一計を案じたのだ。

わりいが何言ってるかわからねえ。フェイトの言葉しか俺の  
知ってる言葉に聞こえねえんだ。

それにフェイトが驚きつつ何か言おうとするが、それより先にプ  
レシアが彼女へ通訳するように促し、フェイトが無視される事を回  
避させる事に成功する。ランサーは気付いていたのだ。プレシアが  
どんなに冷酷な態度を取ろうと、フェイトは嬉しそうにしていると  
まるで会話出来る事自体が嬉しくて堪らないとばかりの表情を見  
て、ランサーはフェイトがプレシアと長く言葉を交わせるようにと  
したので。例えそれがどれだけ会話と呼べるものに見えなかつたと  
しても。

そうして十分ほど話し、プレシアはもう聞く事はないとばかりに

二人を追い出した。それでもフェイトは、愛する母と長く話せた事に喜んでいた。そんなフェイトを、ランサーは複雑な心境で見つめていた。

そう、リニスもアルフも、今日初めて会ったランサーでさえ気付いている。プレシアはフェイトを何とも思っていないと。娘どころか人として見てるかすら怪しい。にも関わらず、フェイトはプレシアを慕っているのだ。

(かなり色々ありそうだが、それは俺が何とかする問題じゃねえ)

自分がするべきは、来るべき戦いに備えてフェイトを鍛える事。まだまだこれから伸びていくフェイトを一人前の戦士にする。それだけが自分がすべき事だと、ランサーは分かっている。分かっているが……

(だからってほっとけるかよ)

そう思うのは、彼が今まで一度も召喚されて報われた事がないからだろうか。そう、このままではフェイトは報われない。プレシアはフェイトが強くなっても立派になっても何も思わないからだ。

彼女はおそらく自分の役に立つモノにしか興味を抱かない。だがそれもすぐになくなる。アレは人として壊れた奴の目だ。ランサーはそう考え、ある男を思い出していた。

忘れようのない相手。自分の誇りを踏み躪り、利用価値がなくなった途端あっさりと捨てる事を選んだ男。その男の目に、プレシアの目はどこか似ていたのだ。

「今日は母さんがたくさん話してくれたんだ」

「そうですね。それは良かったですね」

笑顔で告げるフェイトに笑みを返すリニス。アルフはどこかその会話に複雑な表情をしていた。その光景を眺めて歩きながらランサーは誓う。それは声にならない想い。それは誰も知らない誓約。

(フェイトの想いを、あいつの努力を報われるようにしてやるか。この……槍に賭けてっ！)

槍騎士はそう誓い、苦笑を一つ。我ながら、らしくない。そう思いながらランサーは歩みを速める。まずはこの妙な雰囲気はどうにかしよう。そう思っ

「な、話してるとこ悪いが何か食わせてくれよ。腹が減ったんでな」

「ラ、ランサー、頭が重いよ」

フェイトの頭に腕組みし、そうリニスへ告げるランサー。その表情は少年のようだ。そのランサーの行為に、弱くだが抗議の声を上げるフェイト。そんな彼女もどこか嬉しそうな表情を浮かべている。それに気付き、やや意外そうな顔を見せるリニスとアルフだったが、すぐに苦笑してそれぞれに反応を返した。

「ええ、分かりました。じゃあ、食事の支度をしますね」

「ったく、いい加減腕どけな。フェイトが嫌がってるだろ」

不思議な男だと思いながらも、楽しそうな声を返すリニス。アルフはフェイトに笑みを浮かべさせている事が嬉しいのか、声にどこか優しさが滲んでいる。それを聞いてランサーは不敵な笑みを浮か

べると、アルフへこう返した。

そう思うんなら力づくでどかすんだな。

その挑発に乗るアルフを嗜めるリニス。戸惑うフェイトから離れ、笑みを浮かべて逃げ出すランサー。それを見て逃がさんとはかりに追いかけるアルフを止めないといけないと言いながらフェイトは走る。そんなランサー達を見つめてため息を吐きつつ、それでも笑みを見せるリニス。

ちらりと後ろへ視線を向け、それを見ながらランサーは思う。

ああ、こういうのも悪くねえ。

おまけ

「出来ましたよ」

「「待つてました！」」

「ふ、二人共、落ち着いて」

リニスが運んできた最後の料理を前に、今にも掴みかかろうとする二人をフェイトは何とか宥める。それにリニスが小さく笑い、静かに食卓へその皿を載せた。

「じゃあ早速……」

それを合図に食事へ手を伸ばそうとするランサー。同じようにアルフも食べようとして、何かに気付いたのか動きが止まった。それに気付いたランサーがふと手を止める。何をするのか気になったのだ。

「さすがにこのままじゃ食べにくいね」

その言葉と同時にアルフの姿が変わる。狼から人間の女性へと。ランサーはその光景に口笛一つ。視界に映っているのは、美人と呼んで差し支えない女だったからだ。

「で、どうなってたんだ？」

口笛を吹いておきながら、ランサーは悪びれもせずリニスに尋ねる。その手には、アルフが狙っていたチキンステーキがしっかりと握られている。その野性味溢れる姿に、フェイトは「手掴みなんて……」と驚き半分憧れ半分の視線でそれを見つめ、アルフはそのキレイな顔を歪めて唸っていた。

それを視界に入れながら、リニスはランサーの質問へ答えた。その表情は微かに笑みを浮かべている。

「使い魔は、アルフのように動物が素体です。ですが、主の魔力を消費する事で人の姿になることが出来るのですよ」

ちなみに私もそうです。そうリニスが告げると、ランサーは納得したような顔をした。最初感じた違和感。その答えを聞いたからだ。だが、それによる感心も一瞬。すぐにいつもの顔に戻して呟く。



「ま、しかしそう考えると……」

言いながらアルフとリニスを交互に眺めるランサー。その視線にリニスは恥ずかしがり、アルフは首を傾げた。やがて彼は何かを納得するように頷くと、二人へ人懐っこい笑顔を向けてこう言い切った。

いい女だよな、お前ら。

っ?!

軽い調子ではあるが、ランサーの声に込められたものは本音の称賛。生まれてこのかた口説かれる事などなかった二人に、ランサーの一言は強烈だった。そんな二人の様子にランサーは一瞬だけ意外そうな反応を見せるも、すぐに面白がって言葉をかける。

本気で自分の女にならないかと言ってみれば、リニスは赤面しアルフは怒鳴る。そんな反応に、ランサーが初心だなとからかえば、二人揃って首を横にし無視の姿勢をとるのだ。

そんな風に盛り上がるランサー達を、フェイトは一人不思議そうに眺めて呟いた。

早く食べないと、食事冷めるよ？

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

ファーストデイズ二本目をお送りしました。こちらも加筆修正版となります。

今回、魔法に関して独自解釈がありますが、寛容な心で見てください。ください。

ほのぼの分がなさすぎたので、おまけで投入したらフラグ化してしまいました。

## ファーストデイズ（A & amp ; A）

淡く日差しが大地を包み、穏やかな風が心地よい早朝。バニングス邸に大きな違和感が存在していた。まるで時代劇から抜け出してきたかの如き格好の男は、“物干し竿”と呼ばれる刀を縦横無尽に振り回す。

いや、それはただ振り回しているのではない。一見無秩序に見えながらも美しい剣舞をなしていたのだ。それをしばらく続け、男は最後に刀を払うと小さく息を吐いた。

「ふむ、西洋の庭もまた良きモノよ」

そう呟く男の名は佐々木小次郎。アサシンのサーヴァントにして、アリサの命の恩人であった。あの後、彼は是非お礼をさせて欲しいと言うアリサの招きを受け、ここバニングス邸に厄介になった。

昨夜はアリサの両親からお礼を述べられた。その際、名乗った名前に驚かれはしたが、二人は親が佐々木小次郎のファンだったのだらうと勝手に納得し、名前による騒動は未然に防がれたのだった。

その後は、豪華な晚餐を味わった小次郎だったが、当然のように見た事無い料理ばかりで戸惑った。しかし、今の彼はそれよりも気になっていいる事がある。

「よもや”ぼでいーがーど”なるものになってくれとは……」

昨夜の宴席で、彼はアリサの両親からそう提案されたのだ。行くあてがないと告げた途端の申し出。しかもアリサが即座に賛同したため、小次郎がそれを断ろうとすると、すかさず彼女は疲れたから寝ると言って、彼の断るキツカケを無くしてしまったのだ。

（あの時の娘、女狐と同じ匂いがしておった。まこと女というのは油断ならん）

立ち去る時のアリサの顔を思い出し、小次郎はそう断じた。その顔は不敵に笑っていたのだ。どこからか「にひっ」と聞こえそうなくらいに。そうやって笑うアリサを思い浮かべると、それがキャスターの笑みに重なり、知らず小次郎は懐かしむように笑みを浮かべる。そんな彼を、朝日だけが見つめていた……

「いい天気ね！」

窓を開け、伸びをし終えたアリサはそう言い切り、着替えを手取る。本来、大財閥の令嬢ともなれば手伝い等をするメイド等がいともおかしくない。しかしバニングス邸には、いやアリサの周囲にはそのような者は敢えて付けられていなかった。

その理由はアリサが望まなかった事と、両親の教育方針でもある”人の上に立ちたいのならば、立たれる者の気持ちを知る事”の精神で、アリサは同年代の子が自分でする事は全て自分でこなすように育てられていた。

着替えを終え、アリサはすぐさま部屋の外へと出た。そして出迎えた鮫島への挨拶もそこそここつ尋ねた。

「小次郎はどこ？」

昨夜からこの家に滞在する事になった居候。いや、今のところは来賓といえる。だが、アリサにとってはあまり大差ないので興味は無い。今興味があるのはその現在地だ。色々と聞きたい事や言いたい事がある。

そのため、アリサは小次郎に会いたかったのだ。鮫島は、そんないつも以上に元気なアリサに微笑ましいものを感じつつ、小次郎の居るだろう場所を教えるのだった。

そんな風にアリサが捜しているとも知らず、小次郎は庭を散策していた。柳洞寺にいた頃は山門から動けず退屈していた事もあり、自由に動き回れる事に小次郎は喜びを噛み締めていた。

それにバニングス邸は西洋式の庭園であった事もそれに拍車をかけた。日本庭園にはない味を、雅を感じながら小次郎は歩く。時に呆れ、時に驚きと表情をこころと変えながら。

「いささか侘び寂びが足らぬが、これはこれでまた良いモノよ」

小次郎が特に気に入ったのは庭の中心にある噴水だった。枯山水とは正反対の発想に、小次郎は驚きと感心を抱いたのだ。

「水をこつも惜しげなく……贅沢ではあるが、これもまた文化の違いか」

ま、雅には違いないと呟き、小次郎はそろそろ屋敷に戻ろうとして、その動きが止まった。

その視線の先には、仁王を思わせるような雰囲気の腕組みしたアリサの姿があった。無論、小次郎にとってアリサがそんな姿勢をした所で脅威でも何でもない。だが、その目に宿った光が小次郎を止めるに至った。

「勝手にウロウロするなああああ！ はあ……はあ……つかげで、庭を走り回るはめになつたじゃないっ！！」

鮫島から小次郎が庭へ出て行つたと聞いたアリサは、早速とばかりに庭に出た。だが進んだ方向が彼と逆だった事と、小次郎が既に玄關へ戻り始めていたため、彼女はそのまま庭をほぼ一周するはめになつたのだ。

勿論、その最中に何度もどこかに行つてしまつたのでは、と言う不安を抱き続けた。それもあつて走る事にしたのだが、その疲れと苦しみを全て小次郎へと叩きつけたのだ。

そんなアリサの剣幕も小次郎には微笑ましいものにすぎない。それどころか、面白がつて顔に笑みさえ浮かべて答えた。

「それは健脚であるな。幼子にしては大した者よ」

「幼子つて呼ぶな！ 名前で呼べつて言つたでしょ！ ったく、居候なんだから少しは言葉つてもんを……」

「はて？ 私は構わぬと言つたものを、礼だと言つて連れてきたのはそなたではなかつたか？」

どこかからかうように問いかける小次郎の言葉に、アリサは小さく呻き答えに詰まる。小次郎が言っている事は事実だった。目の前の侍は、確かにあの時礼には及ばないと言つた。それを強引に連れてきたのは自分である。ならば、小次郎の立場は居候ではなく、丁重に扱う客人が妥当になる。

幼いながらもアリサはそこまで考え、そして悔しがつた。それは

もう誰の目からも明らかな程に。悔しさから俯き、手を握り締めているアリサを小次郎は楽しそうに見つめる。

昨夜のお返しにと、少しばかり大人気なく理屈で攻めたのだ。しかしアリサはいかに頭の巡りが良いとはいえ、まだ子供。小次郎もそう思つて、少しやり過ぎたかと反省したその瞬間。

男のくせに細かい事気にするなあああっ！

アリサが吠えた。それはもう見事に。獅子か虎かと思わんばかりの咆哮だった。小次郎は、その声で確かに空気が震えるのを感じたぐらいだ。その証拠に、表情は啞然としている。そして耳鳴りが小次郎を襲い、頭を鈍く痛めつけた。

一方、肩で息をしながらアリサはどうだと言わんばかりに胸を張る。その光景を眺め小次郎は思う。ああ、この女子は虎の子であつたか、と。だから髪が黄金色をしているのだと納得したのだ。

「と・に・か・く！ もう朝食の時間なんだから、早く来なさいよ」

「承知した。さて、異国の朝餉はいかなモノか」

「だから、ウチを異国扱いするのやめなさい」

そんな会話をしながら並んで歩く二人。時代がかつた姿の小次郎と西洋人形の如きアリサの組み合わせは、違和感を感じさせながらも、どこかしっくりくるものがあった……

用意された朝食は洋風だった。パンにスープ、サラダにベーコン。それにサニーサイドアップと呼ばれる半熟の目玉焼きが並んでいた。こんな一般的なメニューが選ばれた裏には、昨夜の食事を見た小次郎があまりにもあれこれ聞いた事を受け、アリサの母が誰でも知っている料理の方が気を遣わずに食べられるだろうと考えたからだ。

まさしく気を利かせてくれた手配だったのだが……

「この汁物は？」

「コンソメよ。野菜や鳥なんかを一緒に煮込んで作るはずよ」

「この菜物の盛り合わせは？」

「サラダ。色んな野菜を食べ易い大きさにして、ドレ……タレをかけて食べるの」

ほらこれとアリサに手渡され、小次郎はドレッシングのビンを眺める。日本語と英語が書かれたそれを、面白そうに小次郎は眺めた。そう、結局同じ結末になったのだ。小次郎が知っている料理となれば、確実なのは昔ながらの精進料理ぐらいだろう。

アリサは小次郎の様子を横目で見やり、ため息一つ。母の気遣いはどうやら無駄に終わったようだ。そう感じたのだ。小次郎にしてみれば、洋風なアリサの家にある物全てが珍しいからだ。純日本と呼べる物でない限り、小次郎の興味は尽きない。

そこまで考え、アリサはふと思う。知らない物を尋ねる時、小次郎の顔はどこか幼く見えるのだ。純粹に未知との触れ合いを楽しん



でいるように見える表情。だからだろうか。彼は子供のアリサにさえ、素直に聞く事が出来る。

そう思つてアリサは自問する。それに引き換え自分はどうかと。大人に負けじと物を知ろうとし、塾や習い事をし共に遊ぶ相手もなく、同じ年の子とは違つて生き方をしている。そんな自分がもし小次郎の立場なら、素直に子供に物を聞くなど出来ないだろうと。

それは彼女のプライドが邪魔をするから。そう結論付けると、アリサの中で浮かび上がる公式は、小次郎「プライド無し。だからそう出来るのだとアリサは納得する。それは大きな間違いなのだが、生憎それを指摘する事は誰にも出来ない。

「どうかしたか？」

「……へ？」

どうも考え込み過ぎたらしい。小次郎がアリサへ不思議そうに問いかけた声で彼女は意識を戻したのだから。故にアリサの反応はどこか間拔けたもの。だが、それに小次郎は特に何か言う事もなくさりりと言葉を返した。

「いや、何やら思い詰めた顔をしておつたのでな」

そう言つて小次郎はスープを啜る。れっきとしたマナー違反だが、日本人たる小次郎にそんな事は関係ない。堂々と両手で皿を持ち、静かに啜るその姿はどこか浮いていた。ちなみに小次郎の手元にもスプーンやフォークは置かれている。

その光景を見てアリサは頭を抱えた。

(教える事が多すぎる!)

物の名前や使い方。果ては文化やマナー等、これではまるで先生ではないか。そう思った時、アリサの脳裏にある提案が閃いた。うまくいけば、自分を子供扱いする小次郎に一泡吹かせられる作戦を。

以下、アリサのイメージ。

「いい、小次郎。あんたは外国の事を知らなさ過ぎ」

「ふむ」

「だから、アタシが教えてあげるから感謝なさい」

「おお、それはかたじけない。よろしく頼む」

「うむ！ じゃ、これからアタシの事はお嬢様と呼びなさい」

「畏まりましたお嬢様……これでよいか？」

「よいよい。苦しゅうないぞ」

「これだ！」

アリサがそう思い、小次郎に声を掛けようとした時には、もう小次郎の姿はなかった。

「嘘っ?!」

慌てて周囲を見渡すも小次郎の姿はどこにもない。見れば小次郎の食事は綺麗に平らげられていた。何時の間にと思いながらも、なら外だろう。アリサはそう結論付け、席を立って食卓を後にしようとした所で。

どうした？ もう食べぬのか？

意外と少食なのだたと失礼な事を平然と言いながら、小次郎が厨房の方から現れたのだ。その手にしているのはコンソメが並々と入った皿。それを見て呆気にとられるアリサを横切り、小次郎は静かに席に着く。

そして先程のようにスープを啜り出す。一切ぶれる事のないその所作に、アリサは感心すら覚え始めていた。そんなアリサを小次郎は一瞥すると、視線を彼女の食事へ向ける。それは、アリサに食べないのかと言わんばかりであった。

それに気付き、アリサも咳払いをしてから席に着く。そして残っていた食事を下品にならない程度に急いで食べ、アリサは隣へと視線をやる。小次郎はゆっくり味わうようにコンソメを飲んでいく。その表情は心なしが嬉しそうだ。

「そんなに気に入ったの？」

「うむ。先程板前に聞いてきたが、そなたの言う通りの作り方であった。大地の恵みをふんだんに煮込んで作るとは、贅沢よな」

そう答え、小次郎は空になった皿を見つめる。アリサの気のせい

だろうか。その横顔がどこか悲しそうに見えたのは。その理由を尋ねようと声を掛けようにも、アリサにさえその悲しみが深いだろう事が分かるくらいだ。そうしてアリサが迷っていると、小次郎が口を開いた。

「しかも色が琥珀とくれば、目にも雅なモノよ。大地の恵みに人の知恵、二つの結晶には恐れ入る」

まさに珠玉の一杯よ。そう語る小次郎は、既にいつもの小次郎であった。アリサはそれに軽く安堵するが、同時に先程見せた表情が気になって仕方なかった。

アリサは知らない。小次郎は元々百姓の出で、佐々木小次郎という存在ではなかった事を。元百姓だからこそ、己の現在を鑑みてその不条理さに思いを馳せたのを。それらを、今のアリサには知る事が出来なかった……

食事を終えたアリサは、さっき思いついた提案を小次郎へ告げた。それを聞き、願ってもないと応じる小次郎。と、ここまではアリサのシナリオ通り。だが、そうは簡単に運ばないのが世の中というもの。

「じゃ、これからはアタシを」

お嬢様と呼びなさい。そう続けようとした。だが、それを遮るように小次郎は言った。

「分かっておる。ちゃんとありさと呼べばよいのであるう？」

その小次郎の言葉にアリサは何も言えなくなった。名前で呼べと言ったのは自分だ。なら、この流れでそう言われてもおかしくないお嬢様ではないが、それでも十分だ。しかし、その顔にはありありと怒りが浮かんでいた。

その理由は一つ。名前の発音が違う。それが怒りの訳。だが小次郎は気付けない。西洋の言葉も、彼は一部を除き片言に近いのだ。

「如何したありさ。名前で呼んではならぬのか？」

「それでいいけど、そうじゃなああああいつ!!！」

そのアリサの心からの絶叫は、屋敷全体に響き渡ったのだった……

.....

ファーストデイズ三本目です。こちらも加筆修正。

五組の中で一番漫才のような関係になるはずだったんですが、やはりやて達に取られてしまいました。

ですが、結構この二人も賑やかです。

## ファーストデイズ（H&Amp;A）

淡く太陽がアスファルトを照らし、その日差しを浴びながら一人の男が走っていく。新聞配達だろうか。一台の自転車が駆けて行く。そんな朝が動きだす音でアーチャーは目を覚ました。

「む、少し寝すぎたか？」

そう小さく呟き隣の少女に視線を移す。そこには安らかな寝息をたてて眠るはやてがいた。

あの後、詳しい話は明日にしようと告げ、アーチャーは居間で寝ようとしたのだが、それを幼い少女が消え入るような声で阻止したのだ。

一緒に、ええんやけど……あかん？

最後には小首を傾げてまで言われてはしょうがない。アーチャーは渋々ながらはやての要望に応じる事にした。それにはやては久しぶりに誰かが居てくれるという状況となったのだ。きっと甘えたいのだろう。そうアーチャーは自分へ言っただけで聞かせたのだから。

その際、二人の間でこんなやりとりがあった。それは、完全に漫才の様相を呈する会話。少し前まで、消え入るような声を出していた少女とは思えぬ程の見事な返しだった。

「わかった。ただし、今回だけだぞ」

「え、ええんやんか。わたしが大きくなるまで一緒に寝よ」

「一応聞くが、大きくとはいくつまでだ？」

「十二！」

「断る」

「ぶーぶー」

「膨れてもダメなものはダメだ」

「ケチ、アホ、イジワル、人でなし、カイシヨウナシ、ドロボーネ  
コ、ウワキモン！」

「待て。今、最後の方は聞き捨てならぬものがあつたぞ」

「お昼のドラマでよー聞くんよ。ちょう意味は知らへんけど」

「……そのドラマは君には早い」

そのやりとりを終え、ベッドにはやてと共に横になるアーチャーだったが、彼女は興奮しているのだろう。はやては一向に眠る気配なく、アーチャーの腕に抱きついて質問を続けていた。

どこの出身等のアーチャー自身の事から、明日はどうつすると言った事まで様々だ。相手をしていればその内眠るだろう。そうアーチャーは思っていたが、その勢いが弱まる事がなかったため、仕方ないとはかりにある提案をした。

もう寝た方がいいぞ。何故なら……

それは、翌朝自分より早く起きたら質問に何でも答えると言うモノ。はやてはそれを聞き、たった三分で寝た。それを見てアーチャーは苦笑する。やはり自分という存在と出会った事で精神的に疲弊していたのだらうと思ったのだ。

しかし、はやての寝付く前の意気込みを思い出し、何があっても絶対負けられないと決意したのだった。何を聞かれるか分からない。はやてが普通の少女だったのなら、アーチャーもここまで思わない。だが、彼女が年齢よりも妙にませている事を気付いた以上、変な事を聞かれては堪らない。

「……さて、食事の支度でもするか」

そんな事を思い出しながら、気を取り直して息を吐くアーチャー。寝息をたてるはやての頭を軽く撫で、アーチャーは静かに部屋を後にするのだった……

八神家のキッチンに佇むアーチャー。その背からは、戦場を詳細に観察するかの如き雰囲気が漂う。否、ここは戦場なのだ。彼にとつて家事　それも料理とはまさに戦いと呼べるもの。故に敗走はなく、必勝こそが彼の必然。

しかし、彼はキッチンをしばし眺めて呟いた。足りんな、と。彼の腕を十全に振るうためには、この調理器具だけでは力不足。ならばどうするのか。簡単だ。ないのなら創ればいい。

トレスオン  
「投影、開始」



自分にとって言い慣れた言葉と共に魔術回路が動き出す。そして、アーチャーの手から。

「ふむ、こんなところか」

包丁や鍋などが手品のように現れていた。それらは世間では高級品と言われるモノばかり。どこかの万年金欠宝石少女がいれば、間違いなく売り飛ばして資金にする事請け合いの光景だ。

アーチャーはそれらと元々あったものと交換する。そして、それらを邪魔にならぬよう収納スペースへ入れた。処分するしかないはずのそれらを大事そうに扱って。その理由はただ一つ。

（彼女の母親の形見かもしれんしな）

捨てずにしたのはそれ。この家についてアーチャーはまだ知らぬ事が多すぎる。それもあって、彼は手始めとばかりに食事を作ろうとしていたのだが、冷蔵庫の中を見て固まった。

そこには、飲み物や調味料以外何も入っていないかったのだ。まさかの事態にさしもの皮肉屋も沈黙した。若干の間。その後、彼はゆっくり冷蔵庫の扉を閉じ、片手で目を覆いながら天を仰いだ。

（よもや食材が無いに等しいとは……）

はやては一人で暮らしている。そして車椅子での生活。そこから考えると、おそらく食事等は配達で賄っているのだろう。そう判断し、アーチャーはその顔を歪ませる。

早朝から開いているスーパーはあるにはある。だが、それがどこにあるかわからない今、どうする事も出来ない。だからといって諦めるのは許されない。何もせずに諦めるなど、彼には決して出来な

い結論だからだ。

「不本意ではあるが、最早それしかあるまい」

苦渋に満ちた声。活路はある。だが、それは彼の中では苦肉の策。しかし、今の彼にそれを拒否出来る余裕はない。ならばもう道は決まった。

「時間は有限。ならば、急ぐとしよう」

そう結論を出し、彼は静かに走る。はやての部屋へ消え、即座に戻り玄関へ向かう。そしてドアを開け、閑静な住宅街を駆けるアーチャー。幼き少女のため、そして己の信念のために……

包丁が野菜を刻みながら軽快な音を響かせ、コンロにかけられた鍋が僅かに震えている。黒い無地のエプロンを着け、無言でアーチャーは調理をしていた。

彼が向かった先はコンビニエンスストア。最近では生鮮食品も扱っていた事を思い出し、何軒か梯子したのだ。結果として食材は手に入ったものの、その鮮度などは納得のいくものではない。しかし、しかしである。

（食材を生かすも殺すも腕次第。ならば、私の腕で足りぬ分を補えば済む事っ！）

無論目利きをし、少しでも状態の良いものを選んではきている。

ギリギリ及第点なら、後は工夫と技術で勝負。それがアーチャーの結論。持てる全てをぶつけ、彼はこの調理に挑んでいた。

一方、アーチャー視点では静かな死闘が行われているキッチンから離れたはやての部屋。そこで心地良い眠りに浸っていたはやてだが、漂ってくる匂いと音に意識が覚醒し始めた。

(あれ……？ ええ匂いや……お出汁の匂いやな。この音は……包丁か)

そこまではんやりと思い、次の瞬間目が覚めた。誰がこれをしているのか。そして、それが何を意味するのか。

「負けてしもた……」

聞きたい事は山ほどあった。でも、答えてくれないかと思うような事もある。だからこそ、アーチャーに勝って色々聞こうとはやては意気込んでいたのだが、結果は見事に惨敗だ。

しかし、どうやってアーチャーは料理をしているのだろうかとは思ってはいない。食事は宅配にしているから冷蔵庫には使える物は何もないはずだ。それに買うにしても、近所のスーパーはまだ開いていないし、お金も持つてるとは思えない。

それだけ考え、はやてはまず着替える事にした。身体をベッドから動かし、車椅子へ。そして、タンスの中から着る物を引っ張り出していく。

(でも、朝ご飯か……。こんなに楽しみなんは久しぶりやな)

知らず鼻歌混じりに着替えるはやて。そんな時、ドアがノックさ

れ。

起きたのか、はやて。何か手伝う事はないか？

アーチャーの声がした。ノックのみで開けない所に彼の気遣いが見える。はやてはそれに少しビックリしながらも、嬉しそうに笑顔で答える。

「特にないわ。おおきにな、アーチャー」

「そうか。なら、顔を洗ったらテーブルに着いてくれ。食事の用意が出来ている」

「うん。すぐ行く」

はやてがそう答えると、アーチャーは待っているとあっさり言い残し、またキッチンへと戻っていった。その足音を聞きながら着替えを再開したはやてだったが、何故か視界が滲んでいる事に気付いた。どうしてと思った時、はやてが思い出したのはアーチャーの一言。

待っている。

両親を亡くして以来、一人で済ませていた食事。それが今日からは違う。自分を待ってくれる人が、食事を作ってくれる人が、”家族”がいる。それが涙の理由。昨夜から出来た新しい同居人、アーチャー。彼は自分の”家族”になると言ってくれた。

それがこんな形で証明されるとは、はやては思っていなかった。流れる涙もそのままにはやては小さく苦笑した。ある事を思い出したのだ。それはあの両親を亡くした日の事。

(神さまに謝らなアカンな。アーチャーと会わせてくれて、ホンマにありがとうございます)

両親を亡くした日、はやては何故自分も一緒に死なせてくれなかったのかと神を恨んだ。たった一人で生きていく。それが幼い少女にどれ程辛い事は言葉に出来ない。だが、神はやてを見捨てなかったようだ。

(でも、もしかしたら恨んだからアーチャー連れてきたのかもしれないなあ……)

はやての脳裏に、手を合わせペコペコと謝る白髭の老人の姿が浮かぶ。そして、そんな事を思っただけで涙を拭く。許してやろう。相手はよぼよぼのおじいちゃんだから。そうはやては思い、また一人笑う。そして車椅子を動かし、泣いた事を誤魔化す事も含めて洗面台へと向かうのだった……

用意された食事にははやては目を疑った。豆腐の味噌汁、だし巻き卵、ほうれん草のおひたしに焼き海苔と、実に純和風の献立が並んでいたのだ。ただ、白米だけは既製品をほぐしただけ。それでも驚くはやてにアーチャーは語る。

自分がかつとも得意とする和食を作る事は夜の内から決めていた事。そして、食材を揃えるためとはいえ、申し訳なかったがはやての財布を黙って借りた事を。

けれど、自分が苦勞した事などは一切触れない。はやての性格をアーチャーは既に把握し始めていたからだ。下手な事を言えば、顔を曇らせてしまう。だからそれらの事を聞き、はやてが笑った時アーチャーも笑った。

「ま、御託はこれぐらいにして、まずは食べてくれ」

「せやな。いただきます！」

後にはやては語る。あの時の衝撃は一生忘れないと。

「う……」

だし巻き卵を口にし、はやては固まった。その反応に僅かだがアーチャーにも緊張が走る。秒針の音だけが静かにリビングに響く。どちらも微動だにしない。ややあって、はやての口が咀嚼を再開する。

心なしかゆっくりに見えるそれを、アーチャーは真剣な眼差しで見つめる。今ならばランサーの神速の突きさえ見切るのではないかと言わんばかりの眼力で。

やがて名残惜しそうに嚙下するはやてを、アーチャーはただ黙って見守る。

「ど……」

「……ど？」

ゴクリと息を呑むアーチャー。想像と違う出だしの言葉にその顔は戸惑いを隠せない。

「どうしてこんなに美味しいんや　　っ!!」

はやての魂の絶叫にアーチャーは小さく安堵し、笑みを浮かべる。

「当然だ。私にかかれば、この程度の味など造作もない」

すまし顔で語るアーチャー。だが、その内心は安堵している事ははやては知らない。その表情からは絶対の自信が溢れているからだ。そんなアーチャーを他所に、はやては既に他の物を食べ始めていた。それも美味しいと目を輝かせながら口へ運ぶはやて。その光景を見て、アーチャーはただ嬉しそうに微笑む。あまりに美味しいため、はやてがアーチャーの分まで食べたいと言った時は、彼もどこか呆れながらも嬉しそうに少し食事を分けたのだから。

そんな食事もあり、はやては久々の心からの満腹感を味わっていた。そんな彼女を見て、密かにアーチャーは微笑ましいものを感じるのだが、それを顔には出さずに食器を持って流しへと向かう。

「ホンマにアーチャーは料理が上手いんやなあ……」

食後のお茶を飲みながら、ぼんやりとはやては呟いた。その視線の先には、手早く食器を洗うアーチャーの姿がある。本当は色々話しながら食べようと思っていたのに、あまりに美味しい食事に会話も忘れて食べ続けてしまった。結局、話は片付けが終わってからになっただけの言うまでもない。

（意外とガンコなんやな、アーチャーって。今日は全部自分でやる！　なんて……）

視線の先で洗い物を続けるアーチャーを見つめ、はやては小さく苦笑。そう、手伝いを申し出たはやてにアーチャーはこう断つただ。

気持ち嬉しいが、今日は私に全てやらせてほしい。家事自体久しぶりの事なのでね。勘を取り戻しておきたい。

でも……

その代わり明日からは頼む。

そう笑みと共に言われては、はやても引き下がるを得なかった。仕方ないので自分でお茶を淹れ、こうして寛いでいるのだ。

(なんや、変な感じやな。まるで歳の離れた兄妹や)

ふとそんな事を思い、はやては笑う。そして、もしここに両親がいたらなどと思ってしまう。屈託なく笑う母と微笑む父。二人に手をつながれて歩く自分。それを後ろから呆れながらもついてくるアーチャー。

そんな光景を幻視し、はやては慌てて瞼を強く閉じる。涙がこぼれないように、アーチャーに気付かれないようにと。そんなはやての肩に何かが触れた。

「どうした。埃でも目に入ったか？」

アーチャーの手だった。その問いに無言で首を横に振るはやて。声を出さないのは、それで泣いている事がアーチャーに分かってしまふと思っただからだろう。しかし、それはアーチャーには無駄な事だった。彼はそれだけで何かを悟ると、笑みを浮かべて語り出した。



「はやて、君は確かこう言ったな。私と”家族”になってほしいと」  
無言で頷くはやて。それを確認しアーチャーは続ける。

「なら、我慢しないでくれ。言いたい事なら言えばいい。やりたいならやればいい。ダメならそう言うし、出来るのなら力になるう。何故なら」

そう言って、アーチャーは一旦言葉を切る。そして、優しく宣言するようになろうと締め括る。

何故なら、支え合い分かち合うのが家族だから。

まるで、一人で抱え込むなど言っているようなその言葉に、はやては涙が止まらなかつた。抑えていた声も、もう限界だった。流れる涙も拭わず、ただアーチャーの手の温もりを嬉しく思いながら泣いた。

そんなはやてをアーチャーは黙って見つめた。今必要なのは言葉ではない。自分以外の温もりなのだ、アーチャーも知っているから。故に黙って自分が傍に居ると告げるように肩へ両手を乗せる。それをはやてがそつと握り返す。

こうして、二人は”家族”としての第一歩を歩き出す。二人は知らない。その姿を、一匹の猫が注意深く見つめていた事を……

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

- - - - -

ファーストデイズ四本目。これも加筆修正。

はやてがおマセになった理由は、良くも悪くも保護者がいなかったからだと自分は思っています。

## ファーストデイズ（N & amp; S）

突然だが、セイバーは困っていた。最優のサーヴァントとして名高きセイバーが、なす術なく固まっている。そんな状況を作りだしているのはなんと。

「ふみゆう……」

なのはだった。その手はセイバーの服の袖をしっかりと掴んでいる。さすがに鎧姿では寝れないので、それだけを消して青いドレス姿になったのだ。

早朝に目覚めたセイバーだったが、身体を起こそうとしてこの状況に気付いた。振りほどくにも、なのはが強く掴んでいる以上手をすれば起こしかねないと判断したのだが、ずっとこのままという訳にもいかなかった。

（退屈なのですが……何かないでしょうか）

元来体を動かす事が好きなセイバーはこの状況が中々辛い。必要であれば平気だ。自分は王を務めていた事もある。その程度は造作もない。はずなのだが。

ただ何もせず、じっとしているのは耐え難い。本を読もうにも動けないし、あの冬木での日々で知った瞑想をしようにも正座も出来ない。まさに進退窮まったその時、家の中の気配が動くのを感じた。しかもただの気配ではない。それは戦士の類だとセイバーは知っている。

（この家の気配は、なのはを除き三つ……その内二つがソレとは）

その二つの気配は家を後にし、外へと出て行った。遠ざかる気配にセイバーは思う。なのはに聞く事がまた増えたと。あの出会いの後、ここが日本である事と、海鳴という町である事をなのはから聞き、時間を考えセイバーが寝る事を勧めたのだ。

そのため、セイバーは高町家の事を何も知らない。と、そこでセイバーはふと思う事があった。それは自分の体に関する事。”世界”と契約する前に近いのだ。まるでマスターによる影響を受けていないように。

(まさか……しかし、なのはとのラインを感じない。どういう事でしょうか?)

真剣な表情で考え込むセイバーだったが、そこへなのはの可愛らしい寝言が聞こえてきた。

「むにゃ……えへへ、お母さ〜ん……」

「ふふつ、仕方ありません。私ももう少し寝ましょう」

可愛らしい寝顔のなのはを見つめ、セイバーは笑みを浮かべるとその目を閉じる。そうやって眠ろうとするセイバーに対して世界は残酷だった。

「さ、朝食の支度をしなきゃ」

なのはの母である桃子が、普段よりも少し早くから食事の支度を開始。その音と匂いに、セイバーはすぐに目を覚ます事となったのだった……

(何があつたんだらう?)

気持ちよく目を覚ましたなのは「待て」を極限までさせられている犬の様な雰囲気を感じているセイバーの顔だった。そんな事を考えていると、なのははそのセイバーと目が合った。

その視線はまるでこの時を待っていたとばかりに鋭い。しかも、どこか殺気さえ感じさせるのだ。そんなものを小学校へ上がったもない少女へ遠慮なくぶつけるセイバー。故に、それを受けてなのはが示す反応を一つしかない。

「あつっ」

「お早うございます、なのは」

怯えるようにたじろくなのは。そんななのはの様子に気付かず、セイバーは挨拶と共に体を起こす。全身から怒気とも呼べる空気を漂わせ、彼女はなのはを見据えた。その目は何故か昨夜よりも真剣だ。何を言われるのだらう。そうなのはが覚悟した時だった。

「朝食の時間です」

「へっ? ……あ、そうだね」

「早く着替え、居間に行きましょう」

「そ………そうだね」

セイバーの有無を言わさない雰囲気に、なのははただ頷くしか出来なかった。家族がセイバーの事を知らない事も忘れるぐらいに、今のなのはは動揺していた。それはセイバーも同様である。昨夜から今まで何も食べておらず、更には食欲をそそる匂いを一時間以上嗅がされていたのだ。そのため、騎士王は食いしん王に変化していた。

急かすようなセイバーの視線を受けながら着替えを終えるなのは、それを確認するやなのはを抱き抱えて部屋を出るセイバー。一分一秒さえ惜しい。そんな思いがその行動に出ていた。

そんな早業に声を出す事も叶わず、なのはは初めてのお姫様抱っこを同性にされるといふ、非常に稀有な体験をした。一陣の風となつてリビングへと降り立つセイバー。なのははあまりの事に呆然としていた。

「着きました」

「あ、ありがとうセイバー」

唯一の救いは、家族がそれぞれ用事があり居なかった事か。恭也と美由希は学校の日直。桃子は太郎の世話と出掛けていて、テーブルには桃子の字で「あたたためて食べてね」と書いてあるメモが一枚と、ラップをかけられたまだほのかに暖かい料理の数々。

それをなのははどこか寂しそうに眺めるが、セイバーは既に今か今かと彼女の言葉を待っている。そんなセイバーに、なのはは犬の姿を再び重ね、笑みを一つ。

「セイバーは座ってて。私にご飯よそうから」

「わかりました。では、大盛りをお願いします」

「にゃはは。あ、ラップ取ってくれるとうれしいな」

「ええ、心得ています」

そんな事を言いながら嬉しそうにラップを外していくセイバーを横目に、なのはは茶碗を取り出す。自分用のものと、父の使っていたものを手にジャーを開け、ご飯をよそう。

それをそわそわしながら待つセイバー。そして、なのははから茶碗を受け取り、彼女が席に着いたのを見計らってその手を合わせる。それになのははどこか意外に感じる。西洋人然としているセイバーが日本の作法を知っている事に意外性を感じたのだ。

(セイバー、日本で暮らした事があるのかな?)

そんな事を思いつつ、なのはは笑顔でセイバーへ視線を向ける。

それにセイバーも頷き、二人は呼吸を合わせて

「いただきます」

そんな風に始まった食事は比較的早く終わりを告げた。元々なのはは分しかご飯がなかった事に加え、セイバーが凄まじい速度で御代わりした事が重なり、ご飯が綺麗になくなったのだ。

空の御釜を見せられた時のセイバーは、まさに青天の霹靂といった顔を浮かべた。なのははそれを見て、乾いた笑いを浮かべるしかなかった。その後は、なのはと二人でセイバーが茶葉を探して淹れた。

それを飲みながら、なのははセイバーに様々な事を話した。家族

の事、家庭の事、自分の事。それをセイバーは黙って聞いた。時に脱線し、思い出話になっても遮る事無く相槌を打ち、言葉に詰まりそうになるのはをただ優しく待ち、全てを話し終えた頃にはお昼近くになっていた。

「……よくわかりました。なのはは、お父上が良くなってくれば、また家族で過ごせるのですね」

「うん。お母さんもお兄ちゃんもお姉ちゃんも、お父さんが入院してるから、なのはの相手ができないんだと思うの」

どこか悲しそうに答えるなのはに、セイバーは何かを決意すると静かに立ち上がる。

「なのは、その病院に行きましょう」

「え？　なんで？」

突然の申し出になのは目を瞬かせる。自分が行っても邪魔になるだけ。その考えが脳裏をよぎる。そんななのはの思考を読み取ったのだろう。セイバーは微笑むと、力強く断言した。

私にいい考えがあります。

そのセイバーの言葉を信じて、なのはは家を出た。セイバーを連れ立って、なのはは聖祥大付属病院へと向かう。見舞いには何度か来ていたため道に迷う事はなかったが、セイバーの格好が目立ったせいで道中好奇の目で見られた。

それがなのはには少しだけ恥ずかしかったが、セイバーの方はもっと恥らっていた。しかし、それは彼女達だけの認識。やや赤面し



ながら、俯き加減に歩く姿は道行く者達がどこか微笑ましく思うぐらい可愛かったのだ。

「お姉ちゃんの服借りてくればよかったね」

「ええ。今更ながら後悔しています」

そんな会話をしながら二人は土郎のいる病室へと向かう。なのはセイバーに、道すがらどんな事をするのかと尋ねたのだが、それに彼女は答えなかった。ただ、任せてほしいとだけ告げるのみ。

結局なのはセイバーの考えを知る事が出来ぬまま、こうして病院まで来ていたのだ。やがて二人の足が止まる。そこは土郎の病室そのドアの前に立ち、なのはは恐る恐るノックする。そして意を決して声を掛けた。

「お父さん、お母さん。なのはだよ。入るね」

「えっ？　なのは？」

想像もしない娘の来訪に驚く桃子。その声に若干の罪悪感を感じるも、肩に置かれたセイバーの手に勇気を出してなのははドアを開ける。そこには、こちらを見て驚く両親の姿があった。

生死不明の重症を負いながらも不屈の精神で一命を取り留めた土郎だったが、意識は取り戻したものの未だに退院のメドは立っていない。そんな夫を献身的に支える桃子。それを聞いたセイバーは、なのはにかつてのイリヤスフィールの姿を重ね、ここまで来たのだ。

愛娘と共に現れた金髪の少女に二人は言葉を失うが、セイバーは出来る限りの柔らかな声で自己紹介を始めた。

「初めまして。私はセイバー、なのはの友人です。今日はそのお父上のお見舞いに来ました」

その言葉に再び両親は驚く。家から出た事がないはずのなのはが、年上の、それも外国人の友人を作ったという有り得ない事に。一方のなのはは、セイバーの友人という言葉に喜びを隠せず、満面の笑顔だった。

そんな簡単で疑問の尽きない挨拶だったが、娘の初めての友人が見舞いに来てくれた事に士郎も桃子も笑みを浮かべて歓迎した。そして、セイバーはそんな二人の対応に喜びを見せるも、意を決して表情を変えると真剣な面持ちでこう切り出した。

「そして、その怪我を治しにも」

セイバーはそう言うとその手を掲げて呟く。

「アヴァロン全て遠き理想郷」

次の瞬間、眩い光がセイバーを包み、その手に何かが現れる。それは聖剣の鞘にして万物から身を守るセイバーの切り札。セイバーが死後辿りつくと言われている理想郷の名を冠した癒しの力。

何が起きたのか戸惑う三人。セイバーはそれを気にも留めず、アヴァロンを士郎の体に置く。やがてそれが淡い光を放ち、士郎を輝きが包む。それを見ながら、桃子もなのはも動けずにいた。

その光はとても優しく、暖かな気持ちにさせてくるのだ。そんな光を眺め、ただ黙って見守る二人。そして輝きが消えた先には、何も変わらぬ士郎の姿とアヴァロンがあった。だが、しっかりと目に見えぬ変化は起きていた。

「……痛みが消えた……？」

信じられないとばかりに呟く土郎。そこから恐る恐るゆっくりと起き上がり、自身の体を動かし始めたのだ。それを見てセイバーは笑みを一つ浮かべアヴァロンを回収する。

やがて完全に体が治った事を理解した土郎が桃子に笑顔を向ける。それで全てを理解したのだろう。桃子も両目から涙を浮かべ、その胸に飛び込んだ。

互いに涙を浮かべ抱き合う両親の姿に、なのはも知らず涙を浮かべる。そんななのはにセイバーは優しく寄り添うのだった……

両親に手を繋がれ、嬉しそうに歩くなのは。その後ろには、それを見つめ微笑むセイバーがいる。その後、土郎は担当医を呼び退院したい旨を告げた。無論そんな事が許される訳はないのだが、再検査の結果確かに完治している事が判明し、医師達は不思議に思いながらも土郎たちの懇願と根気についに折れ、退院の運びとなって現在に至る。

「ね、お父さんお母さん。お願いがあるんだけど」

なのはの言葉に土郎は分かっていると云わんばかりに笑みを浮かべる。桃子も同様だ。

「セイバーちゃんの事だろ？」

「勿論いいわよ」

「部屋をどうするかだな」

なのはの言葉を待たずして、二人はそう言って考えを巡らせる。驚いたのはセイバーだ。まさかこんなあっさりと結論を出されるとは思っていなかったからだ。

「ま、待ってください！ 貴方達はそれでいいのですか!？」

それは暗に、あんなものを見ても何も聞かないのかと問いかけていた。それを感じたのだろう。士郎は真剣な眼差しでセイバーを見る。

「確かに色々と聞きたい事はある。でも、それは君が話したくなったらで構わない」

「そうよ。不思議な光景だったけど、それが？ 貴方はなのはのためにああしてくれた。だったら、大切なのはあれが何なのかって事じゃなくて」

そこで桃子は表情を一変させて笑顔を見せた。それにセイバーが息を呑む。本当に一瞬だが、彼女は桃子にアイリスフィールを重ねたのだ。そんなセイバーに構わず、桃子はその綺麗な笑みを浮かべたままこう断言した。

セイバーちゃんがなのはのお友達って事よ。

そう言って、桃子はセイバーにウィンク一つ。それに士郎も応じ、微笑みを向ける。なのはも微笑み、セイバーを見つめる。三人の笑

顔にセイバーは一瞬呆気に取られるが、そこにあの親子の姿を幻視して笑みを浮かべ頷いた。

「そうですか。ならば、貴方達の気持ちに感謝を……」

「そんな固い態度はなし。これから一緒に暮らすんだから。私、桃子よ」

「そうだな。俺は土郎。土郎で構わないよ」

二人の雰囲気にはセイバーは面食らうが、土郎の名を聞いた時に軽い驚きを見せると、小さく呟く。

何かの縁なのでしょう……？ よもやまた”シロウ”をアヴァロンが癒すとは……

そんなセイバーに三人は顔を見合わせる。どこか懐かしむような顔に遠い視線。そして、そこはかたない哀しみを湛えた雰囲気、何か気になる事でも言ったのかと思っただからだ。

そんな三人に気付かず、セイバーはそうしてしばらく立ち尽くす。そんな彼女を現実に戻したのは、自分の体が訴える空腹の声だった。恥ずかしがるセイバーに、笑いながらも早くお昼の支度をして、と言いながら歩き出す桃子。それに苦笑しながら同意する土郎となのは。

そうして歩き出す四人の顔に浮かぶは満面の笑み。仲良く歩く親子と、それを眺めて微笑む少女。誰が見ても幸せそのものの光景がそこにはあった……

おまけ

ただ沈黙のみが高町家のリビングを支配していた。呆気に取られる土郎と桃子に苦笑いのなのは。そして、もくもくと食べ続けるセイバー。その勢いは止まる事を知らず、既にご飯は四杯目だったりする。

「モモコ、御代わりを」

「え、ええ」

さらりと告げられた言葉にやや圧倒される桃子。しかし、土郎は違う。もうこれで終わっただろうと思っていたのだ。自慢ではないが、彼もよく食べる方だ。だが、セイバーのそれは常識を超えていた。

まだ食べるのか!?

そんな心境で見つめる土郎にもう開き直ったのか笑みさえ浮かべる桃子。ちなみに、なのはも土郎も既に自分達の食事を終え、セイバーの食事を見守っている。

そして桃子が茶碗を受け取り、ジャーを開けて 動かなくなつた。どうしたのかと思うセイバー。だが残りの二人にはその理由が想像が出来た。

「ごめんなさい。もう、なくなっちゃって……」

夕食時と同じぐらい炊いたのに、と呟く桃子。それにセイバーは驚きのち照れの表情だ。土郎はそんなセイバーに苦笑いを浮かべ、なのはは笑う。

「これは、もう一つジャーを買った方がいいかしら？」

「そうだな。それにセイバーの服なんかも必要だし」

「じゃあ今度のお休みにみんなで買い物に行こう！ お兄ちゃんやお姉ちゃんも一緒に！」

はしゃぐなのはに笑みで応じる土郎と桃子。セイバーはそれを聞き、辞退しようとするが踏み止まる。なぜなら。

みなでお出かけるの、楽しみだなあ。

そんな風に笑うなのはを見たから。そして、その”みんな”に自分も入っている事を理解したから。

(それでは友ではなく家族ですよ、なのは)

そんな事を思いながらも、セイバーの顔はどこから見ても嬉しそうだった……

.....  
.....  
.....  
.....

なのはとセイバーの初日でした。加筆修正版だと、少し三人がセイバーへあの親子を思い出させました。

これで次はユーノのファーストデイズとなります。



## ファーストデイズ（Y & amp ; C）

部落へ戻って大人達から叱られたユーノは、やや肩を落としていた。キャスターはそんな彼を叱った大人達へ怒りを抱くように、眉を吊り上げる。大の大人が少年を口々に責め立てたように見えていたからだ。

実際は彼らの言い分は正しく、ユーノはそれに心から納得していたので彼女の怒りはお門違いのだが、生憎それを気付ける程、彼はまだ余裕がなかった。

「もう、小さい頃なら誰だって抱く冒険心を理解しないなんて！あの連中、少し痛い目を見てもらいましょうか」

「え？ あっ！ や、止めてよキャスター！ 確かに僕が悪いんだから！ ……少しいい気になってたのかもしれない。大人達から多少なりとも信頼され始めたからって、一人で遺跡の中へ足を踏み入れるなんてね」

ユーノは最後に自嘲気味に声を出し、キャスターへ再度告げた。だから、みんなへ何かするのは止めて欲しいと。それにキャスターもユーノがそう言うならと納得し、怒りを静めた。

そして二人はユーノがあてがわれているテントへと向かう。ある意味でスクライアは遊牧民族と同じように暮らす。遺跡発掘や調査などをする世界へ移動しているのだ。とはいえ、彼らが腰を落ち着けている世界はあるので、移動するのは仕事を請け負っている者達だけ。

ユーノもその一人だったため、一人用のテントを用意されていたのだ。しかし、いくら大人用とはいえ子供一人と女性一人で過ごす

には些か狭い。どうしようとユーノが考え出した時だ。

キャスターは事も無げにあっさりと言った。そう、共に寝ればいいと。それにユーノは同意するように頷いた。彼はまだ子供。確かに多少同年代よりは精神面がませているかもしれないが、それでもまだこの頃は年上の女性と寝る事に抵抗はなかった。どこか少し緊張はしていたが。

「じゃ……お、おやすみ、キャスター」

「はい、おやすみなさい」

ユーノの雰囲気から緊張している事を悟り、小さく笑みを浮かべるキャスターは、それを解すように優しく彼を抱きしめた。それに一瞬驚くユーノだったが、すぐに安らぎを感じて目を閉じた。そのまま、遺跡探検による肉体的疲労と説教による精神的疲労からユーノはすぐに眠りに落ちる。

その寝顔を眺め、キャスターは微笑んだ。愛おしいと思えたのだ。言わば男女愛というより姉弟愛。突然の事に懸命に対応し、自身自身に納得や理解を与えたユーノの事を思い出し、彼女は微笑んだ。

（最初は色々驚きばかりでしたが、今度のマスターもアタリみたいですねえ）

あの聖杯戦争で共に戦ったマスターとムーンセルの中で消えたはずの自分。それが何故か記憶を持ったまま、異世界へ召喚された。しかも、何故か仮初めではない肉体を得て。その理由は理解出来ないが、もしかすると最後にやった事が原因かもしれないとキャスターは考えていた。

明確な根拠はない。云わば女の勘だ。しかし、本音を言えば彼女

としてはそんな事はどうでも良かった。ユーノから感じる同族に近い匂い。それが彼女が一番気になっている理由なのだから。

（最初はマスターも化けている種族かと思ったんだけど違うみたいですよし……だとすると一体この親近感は何なんでしょう？）

自分に全てを預けるように眠るユーノの髪を優しく手で梳きながら、キャスターは一人そんな事を考えながら疑問符を浮かべる。そんな彼女もやがて感じた睡魔に身を委ねて目を閉じる。ふと感じるユーノの息遣いにくすぐったくも心地良さを覚え、キャスターは微かに微笑みながら眠りとへ落ちていくのだった……

翌朝、キャスターはユーノと共に遺跡調査の手伝いをしていた。

周囲にはキャスターをユーノの使い魔として通す事にした。キャスターの獣耳がそれを納得させる要因となった事もあって、それに疑いを持つ者はいなかったのだ。

妖術を使って照明代わりをしたり、或いは邪魔な物を燃やしたりと魔法と同じ事やっつてのけるキャスターに、周囲は思わぬ戦力が出来たと喜んだ。ユーノは、キャスターが褒められる度に自分の使い魔との部分を強調する事に苦笑しながらも、どこか嬉しく思っていた。

（キャスターは僕がいるから自分もいるって言いたいんだ。つまり、僕の価値を高めたいんだろっな）

昨夜のユーノの失態を補うようにキャスターは働いた。時に若者

達から向けられる視線に鋭い睨みを返す事などはあったが、概ね平和的に時間は過ぎていった。

そして、一旦休憩となった昼食の時間。キャスターは何を思ったのか、自分が腕を振るうと言い出したのだ。それにユーノは驚くも周囲は喜びを前面に出した表情でそれを応援。ユーノはキャスターが結構働いていたため、そこまでしなくても思っただけで止めようとしたのだが……

マスターに私の手料理を食べてもらいたいです。

そう女神のような笑みで言われてしまえば、それも出来るはずがない。結局ユーノはキャスターの言葉に甘え、他の者達と料理を待つ事になった。やがて出て来た料理は、ユーノ達が見た事もない物ばかりだった。

それもそのはず。キャスターが作ったのは和食だったのだから。とはいえ、食材が違うため比較的似ている物で再現しただけ。味なども調味料などが足りない上に色々と異なるために本来とは違う物となったが、キャスターとしては及第点の出来だった。

「さ、マスター。遠慮なく召し上がれ」

「うん、頂くね」

我先にと手を出す周囲を他所に、ちゃっかりユーノの分だけ別にしてあるところにキャスターの心遣いを感じ、彼は笑顔でそれを食べる。その未知の味に驚きながらもユーノは心からキャスターへ告げた。

キャスター、これ美味しいよっ！

ふふん、当然です！ さ、まだありますからどんどん食べてくださいね。

ユーノの言葉に満面の笑みで胸を張るキャスター。しかし、それはやはりどこか母性を感じさせるもの。ユーノが夢中で食べる様を眺め、ニコニコと微笑んでいるのはまさしく姉か母のようだ。

今まで彼女は愛する異性は出来ても、子や弟や妹などは出来なかった。だからなのだろう。ユーノがどこかそういう風に見えるのだ。自分かもし母になったのなら、もし姉になったのならこんな気持ちなのだろうか。そう思いながらキャスターはユーノを優しく見つめた。

(いいですね、やっぱり男の子はこうじゃないと。でも、どこか調子が出ませんね。やっぱりもう少し年齢が上にならないと本領発揮とはいかないなあ……)

(キャスターって料理が出来るんだ。しかも、食べた事のない物ばかりだし……どこの出身なんだろう……？ あ、そういえばキャスターは食べないのかな？)

ユーノは口に広がる旨味に表情を緩めながらも、ふと気付いた事に意識を向けた。そう、作った張本人であるキャスター自身は一度も料理へ口をつけていないのだ。ユーノはその疑問を解消するために、自分を眺め微笑むキャスターへ視線を向けた。

「ね、キャスターは食べないの？」

「え？ あー、いいんですよ。私はあまりお腹空いてませんから」

ユーノの問いかけに小さくしまったと思いながらも、キャスター

は笑顔でそう返した。だが、それをそのまま信じる程ユーノは鈍くなかった。キャスターが嘘を吐いていると察し、どうすればいいかと考え始めたのだ。

素直に言っても食べてくれないかもしれないと思い、一人ユーノは悩む。何故なら、ユーノの分以外の料理は既に食べ尽くされていて残っていないかったのだ。つまり自分の分しか残っていない。だからユーノは考えたのだ。キャスターが食事をしてくれる言葉を。

(どうしよう？ どうすればキャスターが僕の分を食べてくれるかな？)

(これは私に食べさせようとしてますね。んもう！ 嬉し過ぎますよ、マスター！ で・も……優しいのはいいですけど、私に気を遣うなんて十年早いです)

互いに相手の気持ちに気付いている二人。やがてユーノが何かを思いついたのか、一瞬だけ表情を変えた。それをキャスターは見逃さない。それでも、気付かぬ振りをしてユーノの出方を待った。そこに彼女なりの優しさがある。

「あのさ、キャスター」

「何です？」

「僕、もうお腹一杯なんだ。でも、残すのは勿体無いから……食べ残しで悪いんだけど」

「私にそれを食べて欲しい。そう言っんですね、マスターは」

「うん。ごめんね」

どこかからかうような笑みを見せるキャスターに違和感を覚えながらも、ユーノはそう言っただけにしていた器と匙を手渡した。それをしっかりと受け取り、キャスターは嬉しそうにこう告げた。

「いやん、マスターったら幼いのに大胆ですねえ。こゝれ、間接キスですよ？」

えっ？ …… あっ！？

クスクスと笑うキャスターと指摘を理解して慌てるユーノ。無論周囲は、キャスターが子供故に純情なユーノをからかっていると理解している。なので、どこか微笑ましく思いながらも「もう嫁さんをつまえたか」や「大したもんだ」とからかうように囁き立てた。それにアタフタしながらユーノは顔を真っ赤にして違うと言いつつ、今度はそれにキャスターが悲しそうに着物の袖で顔を隠し、泣き真似をするのを見てそちらのフォローに入る。

そんな賑やかでどこか微笑ましい昼食風景だった……

日も暮れ、テントに戻ったユーノ達。調査は無事完了し、明日には撤収となったためどこかユーノの顔は明るい。キャスターはそんな彼を不思議に思い、その理由を尋ねた。それに返ってきたのは、予想だにしない言葉。

戻ったら、みんなにキャスターの事を紹介出来るからね。

自分の家族として周囲に認識してもらいたい。ユーノはそう続けて締め括った。それにキャスターは少し呆気にとられるも、ゆっくと表情を緩めて笑みを浮かべた。

嬉しかったのだ。自分を使い魔ではなく家族と捉えてくれている事が。周囲に使い魔と告げるが、ユーノはそれだけで終わるつもりはないと理解してキャスターは笑みを見せる。

一方、ユーノはユーノで分かった事がある。たった一日だが、彼なりにキャスターの事を理解したのだ。自分をどこからかう事が多いが、心の底では大事に思ってくれている事。軽いノリに見えるが、ちゃんと深い思慮と鋭い観察眼を持っている事を。

「あ、そうだ。キャスターはどこ出身なの？ 今日の料理は見た事も食べた事もなかったから」

「えっと……こちらにあるか分かりませんが日本という島国です」

「にほん？ 島国か……機会があつたら調べてみるね」

「ホントですか？ じゃ、見つかったら本当の和食を作りますね。調味料とか私の知る物に出来ますから」

キャスターの言葉にユーノは不思議そうな表情を浮かべた。本当の和食との意味を理解出来なかったのだ。そこでキャスターが語る料理話。それを面白く思いながら耳を傾けるユーノ。

そこからやがて話は変わり、キャスターが話すのは昨夜出来なかったサーヴァントに関する詳しい話。宝具について話し出したのだ。その部分を聞いてユーノが抱いた感想は、宝具とはロストロギアではないかとの気持ちだった。



なので、キャスターの話が切れた瞬間を狙って、ユーノはロストロギアの事を教えた。それを聞いたキャスターは微かに驚きを示すも成程と納得する。何せ、自分があの聖杯戦争で戦った相手が有していた宝具は、どれもこれも恐ろしい物ばかりだったのだから。

（思い出だけでも、どうやっているのか謎の物ばかりでしたからねえ。あれを失われた技術で作られた物と言うのかも）

意外とロストロギアとはこの世界の宝具ではないだろうか。そんな事を考えつつ、キャスターはふと思う事があった。それは、もしかするとこの世界が自分の本来いる世界の平行世界なのではないかという事だ。

魔術が進化或いは変化し魔法となり、本当の”魔法”は本当に失われてしまった。それに伴い、魔術回路もリンカーコアへ変質しているのでは。そう予測を立てたのだ。

しかし、それはすぐに否定した。ユーノが教えてくれた使い魔の事実。それはキャスターの知るこれとはまったく異なっていたからだ。であれば、平行世界ではなく完全な異世界。そこでキャスターが導き出した答えは……

（まさか……私はマスターじゃなくて”世界”に呼ばれた？）

受肉している事。有り得ない世界にいる事。そして、運良く面倒を見てくれる相手に巡り会えた事。それらが仕組まれていたとすれば辻褃が合う。キャスターはそう冷静に考えながらも、それを受け入れる事はしなかった。

それだとしても、自分がマスターと思う相手は目の前の少年だ。

そう強く感じているからだ。何せ彼女はあの聖杯戦争で逆らつてはいけない相手にさえ抗い、マスターのために勝利したのだから。

それを思い出せば今更と言える。そう、常にマスターのために戦う。しかも、今回のマスターは自分を家族とまで言ってくれたのだから。その弟のような少年を微笑ましく見つめ、キヤスターは静かに心の中で呟く。

この出会いをありがとうございます、マスター。そして、出会ってくれてありがとう、マスター。

かつての主人と今の主人へ感謝を告げるキヤスター。それに当然気付かず、ユーノはキヤスターへ熱弁を振るっていた。今は管理世界と管理外世界について話している。それに相槌を打ちながら疑問をぶつけていくキヤスター。それにユーノは知識を総動員して精一杯応えようとした。

「じゃ、管理局って言う組織を知っているのが管理世界なんですか？」

「簡単に言えばそんな感じだったかな？ でも、管理外だからって管理局を知らないとは限らないんだ。中には介入を拒否してるだけの世界もあるって聞いた」

「あらあら、意外と複雑ですねえ。そうだ！ マスターは管理局には入らないんですか？」

「え？ 考えた事も無かったよ。正直、僕は魔導師よりも考古学者みたいな仕事が向いてると思うし」

そこでユーノがキヤスターに頼んだのは、色々な魔術を教えて欲



## ファーストデイズ（K & amp ; A）

「……以上が僕と彼女の出会いです」

話し終えたクロノは静かに席へ着く。ここはアースラ内の艦長室。そこでクロノは、リンディとエイミィにアルクエイドの詳しい説明をしていた。さすがに色々と問題がある内容だったが、それでもクロノの仮定をアルクエイドが肯定したり或いは補足する事で理解を得る事が出来た。

リンディはやや困惑し、エイミィはどこか嬉しそうな表情を浮かべていた。当然リンディは局員として考え、アルクエイドの話を重く見ての顔。エイミィは局員としてよりも個人としての考えからの顔だ。

（次元漂流者……そう上に報告するしかないわね。歴史に名を残した故人を使い魔と出来るシステムなんて、それを知れば変な事に利用する者達が現れるかもしれない。とにかく、それも含めて彼女の話は秘密にするよりないわ）

（クロノ君を助けてくれた、かぁ。しかも魔法も無しで。さっき少し話した感じは気さくな人だったし、あたしとしては楽しくやっていきたいな）

共通点は二人してアルクエイドを見ている事。当の本人は艦長室の装飾を面白そうに眺めている。クロノはそんな彼女に視線を送るも、どこか呆れた顔をしていた。そう、一度もアルクエイドは動きを止めた事がないのだ。

ずっと動き回り、クロノが説明をしている間もそれを補足しながら室内を歩き回り、視線を常に動かしていた。彼女にとってアース

ラ自体も珍しければ、艦長室の妙な和風染みた装飾の数々も楽しかったのだ。

あの街での日々。そこでも色々な景色や物を見てきた彼女だったが、今回は異世界ときている。見た事のある物も何か違うかもしれない。そんな風に思い、彼女は心躍らせながらこの場にいたのだ。

「ね、クロノ。仮にもマスターになったんだから、私の面倒はちゃんと見てね」

「さつきも言ったが、僕は善処するだけだ。大体この世界への滞在を望んだのは君自身じゃないか」

そう、あの時アルクエイドがクロノへ頼んだ事はそういう事。彼女は異世界に興味を持ち、そこで飽きるまで暮らしたいと思ったのだ。それにもうサーヴァントではなくなった自分を召喚したような形になったクロノにも興味がある。

更に彼女の勘が告げているのだ。ここに残れば面白い事に出会えると。実を言えば、アルクエイドはその気になれば自分が本来いた世界へ戻れる。彼女は”世界”のバックアップを受けている。その感覚を辿れば行けない事はないのだ。

(でも……今は無理に行く必要ないかな？ 何となくまだここにいた方が良さそうだし)

席に戻り、リンデイが用意してくれた緑茶を手にして、アルクエイドはそれを見つめて不思議そうに小首を傾げた。かつて彼女が見た緑茶と色が違うのだ。それは当然だ。それには普通の緑茶に砂糖とミルクが加えられているのだから。

疑問符を浮かべるアルクエイドへクロノは無言。エイミイもそれ

を楽しそうに眺めている。リンディは一人不思議そうな顔をしていた。何故なら、この緑茶は彼女が考案した物なのだ。

「どうしたの？」

「私が前見たのと違うみたいだけど、これが緑茶？」

「艦長の特製なんだ。一度飲んでみなよ」

アルクエイドの言葉に、エイミイがやや悪戯っぽく笑みを浮かべてそう勧めた。それにクロノが若干鋭い視線を送る。母親の好みを否定する気はないが、それを人に押し付けるつもりもなかったからだ。

「アルクエイド、別に飲まなくてもいい。これはもてなしなんだ」

「うーん……でも折角用意してもらったし、ちょっと飲んでみるね」

その瞬間、妙な緊張感が艦長室に漂う。クロノとエイミイがどこか窺うように見つめ、リンディはどこか興味深そうにアルクエイドを眺めていた。やがてアルクエイドが手にした緑茶に口をつける。その喉が確かに動き、緑茶を嚥下していく。

それはクロノの予想を超えて長く続いた。そして、アルクエイドは手にした湯のみを口から離し、小さく息を吐いた。その表情はあまり普段と変化していない。それにクロノとエイミイは意外そうな表情を浮かべ、リンディはその第一声を待った。

結構独特な味だね。嫌いじゃないよ。

その瞬間リンディが嬉しそうに「そう」と声を出した。エイミイ

はアルクエイドへどこか感心するような眼差しを向け、クロノはその言葉が社交辞令の類ではないと察し、小さく落胆のため息を吐いた。

リンデイが好む緑茶は正直砂糖が多すぎる。あれを少量にすればクロノとて構わないと思う。なのでエイミイが作る際はリンデイ用と他者用に作り分けるのだが、本人が作る場合はそうもいかない。

(母さんが作ったにも関わらず、アルクエイドは平然としているなんてな。彼女も母さんと同じぐらいの甘党か?)

そう思いどこか疲れた顔をするクロノ。リンデイはアルクエイドの評価に笑顔だ。エイミイはそんな彼女に合わせて笑みを返している。それを見てどこか笑うクロノだったが、そんな彼へアルクエイドが静かに近付いて耳打ちする。

「あれ、凄いね。私、嫌いじゃないけど好きにはなれないよって…  
…何でホツとしてるの?」

「君があれに関してまだ許容出来る答えを出したからだ」

そんな二人は共に視線を前へ向ける。そこには、楽しげにあの緑茶をもう一杯作ろうとするリンデイと、それをやや苦笑しながら止めようとするエイミイがいたのだった……

あれから場所を変えて、クロノはアルクエイドと共に自室へ来ていた。正直あのまま艦長室で続けたかったのだが、リンデイは艦長

として色々と仕事があるため一旦中断となったのだ。エイミイはクロノの代わりに今回の報告書を作成している。

クロノもエイミイの手伝いをしようとしたのだが、彼女がアルクエイドともう少し詳しい話をしておいた方がいいと断ったのだ。年上の頼れる補佐官の言葉に甘える形で、クロノはこうしてアルクエイドと二人で向き合っ座っているという訳だった。

「……アルクエイド。君の話有疑问じゃないんだが、確かめておきたい事がある」

「何？」

「君は本当に地球人なのか？」

クロノはその質問を執務官としてではなく個人として尋ねた。考えようによっては怒りを買ってもおかしくない質問。それにアルクエイドは特に何かを思う事もなく、顔を上に向けて顎に指を当てて考え出す。

「そうだなあ……地球人と言えば地球人だよ。でも、普通の人間じゃないから」

「……差し支えなければ、それはどういう意味か教えてくれないか？」

「クロノ達の世界にいるか分からないけど、私ね、吸血鬼なんだ」

アルクエイドはそう軽い口調で告げる。その内容の重さにそぐわぬ声。それにクロノは少し呆気にとられるも、驚く事もなく息を吐いた。アルクエイドが常人ではない事を彼はどこかで察していたの



だ。吸血鬼との言葉の意味も分からぬではなかった。

かつてこの次元世界にそういう種族がいたとの言い伝えもあるのだ。故に彼は大きな驚きを浮かべる事なく、冷静にアルクエイドへ対処する事にした。こういう異種族間の揉め事は、まず無条件に相手を差別したり恐怖したりする事から始まると理解しているからだ。

「では君は人を襲うのか？」

「それは起こさないようにしてる。心配しないでいいよ」

そこからアルクエイドが告げる自分の話。本来ならあまり話したくない事だが、ここが異世界である事もあり彼女は比較的あっさりと話していた。ただ、クロノが真面目な性格である事を理解しているため、嘘は吐かないようにしながら、あまりいい気分にならない部分を話す事はしなかったが。

クロノはアルクエイドの話を黙って聞き続けた。判断するのは最後まで話を聞いてからだ、そう考えているのだ。確かに色々と思う事はある。それでも、彼は最後まで何も言わずにアルクエイドの話へ耳を傾けた。

そんな彼の姿にアルクエイドは少し嬉しそうに笑みを浮かべ、最後まで話し切った。クロノの姿勢に好感を抱いたのと、真摯な気持ちを感じたために。

「そうか……アルクエイド、君の話はよく分かった。色々と聞いた事もあるが、要は、君は自分の力のほとんどを使い、血を吸いたいという衝動を抑えているんだな？」

「そう。そのおかげで全力を出す事は出来ないんだけどね」

「それでもあの動きか。本当に君は凄いな」

クロノは心から呆れるようにそう告げた。そんな彼の反応にアルクエイドは小さく驚き、表情を無表情にして問いかけた。

……ね、怖くないの？

そこには、微かな不安があった。彼女が力の半分以上を使って抑えている吸血衝動。それは、裏を返せばそれだけしないと抑える事が難しいという事。それを考えれば、いつそれを抑え切れなくなってもおかしくない。

クロノはそれを分からないような相手ではない。そうアルクエイドも思っていた。だからこそ聞いたのだ。怖くないのかと。その言葉にクロノは正直な気持ちを返した。

確かに怖いさ。

その言葉にアルクエイドは驚いた。それはクロノの目に言葉とは違って恐怖が見えなかったからだ。まだ何か言いたい事がある。そう思ってアルクエイドはクロノの言葉を待った。それをクロノも感じ、その凜々しい表情のまま言葉を続けた。

「でも、それを今も君は見事に抑えている。それに、君はこの事実を隠す事も出来たはずだ。でも、しなかった。なら僕はそれに応えたい」

「クロノ……」

「とはいえ、今の僕に出来るのは君の事を信じるだけだろう。まあ、たった一日だが君がどういう人間かは……僕なりに分かったつもり

だ。だから君を信じるよ、アルクエイド」

そう言っただけでクロノはアルクエイドへ手を差し出した。それを見てアルクエイドは呆気にとられるも、ゆっくりと表情を笑顔へ変えてその手を握り返す。クロノが自分を指して”人間”と言った事に気付いたのだ。だが、その顔が何かを理解し微笑みに変わる。

あはは。でも手が震えてるよ、クロノ。

……仕方ないだろう。僕だって怖いものは怖いんだ。

その答えに心から楽しそうに笑うアルクエイド。それに恥ずかしそうな表情を返すクロノを見て、余計笑みを深めてアルクエイドは笑う。そんな彼女を見て、クロノもやがてつられたように小さく笑い出す。部屋中に響く二つの笑い声。それを聞きながらクロノは思う。

誰が何と言おうとアルクエイドは大丈夫だと。その証拠にもう手の震えは止まっている。この手に感じる温もりが教えているのだ。アルクエイドは決して人を襲わないと。その気持ちを強く込めるようにクロノは手を握り直す。それからクロノの気持ちを感じて、アルクエイドも手を握り直す。

しっかりと繋がれた手と手。そこには明確な何かが生まれていた。単なる握手ではない意味。それを互いに感じながらも、それを口に出す事はない。そんな穏やかで温かな雰囲気にも包まれる室内。すると、部屋のドアが突然開いてエイミーが顔を出した。

「あれえ？ 何か楽しそうだね。と言うか、クロノ君が笑ってるの結構レアかも」

「あ、エイミー」

「っ?! …… エイミー、何か用か?」

クロノの慌てる反応に同じような笑みを見せるアルクエイドとエイミー。それでもすぐにエイミーは表情をいつもの顔へ戻すと、自分が作成した報告書のチェックをクロノへ頼んだ。それに返事を返し、クロノは素早く部屋を出て行く。

それが照れ隠しにしか見えず、苦笑するアルクエイドとエイミー。それを感じているのだろうが、それでもクロノの歩みは速いままだ。その遠ざかる背中を見つめ、アルクエイドはエイミーへ視線を向けて問い掛ける。

「いつもあんな感じ?」

「うん。普段はもう少し大人っぽくを意識してるかな。今は……珍しく素に近いね」

「そっか」

「うん。あたしはああいうクロノ君が結構好きなんだけど……あまり見せてくれないからさ」

どこことなく寂しそうに笑うエイミーを見て、アルクエイドはその理由が気になり尋ね始める。それにエイミーが訓練校時代の思い出を話し出した。それをキツカケに二人は仲を深め始める。

話している内に、互いが似た者同士と気付いて意気投合するアルクエイドとエイミー。クロノへの評価がまったく同じだった事もあってか、その表情がどんどん輝いていく。



とある一日（S&a m p・R）

「ライダーは聞いた？」

突然の忍の言葉に、紅茶を注ぐライダーの手が止まる。時刻は午前十時になるかならないか。日差しは柔らかく、風も春らしく爽やかに吹き抜けていた。そんな中、庭でのちよつとしたお茶の時間の世話を忍に頼まれたライダーは、見事な手つきで給仕の仕事をこなしていた。

「何をですか？」

「さすがが喧嘩の仲裁したって事」

忍の意外そうな表情にライダーは笑みを浮かべて応じる。そう、ライダーは知っていた。さすがが喧嘩を止めた事も、それがキッカケで友人を作った事も。昨夜、寝る前の他愛のない雑談の際、本人から聞かされたのだ。

だからライダーは詳しく知らないであろう忍に、取っておきの情報を教える事にした。その声に嬉しさを滲ませて。

「ええ。それに友人が出来た事も」

「へえ、そうなんだ」

「アリスとナノハと言っらしいですよ」

その顛末を話していた時、さすがはこの上なく上機嫌だった。ライダーに何度も何度も語っては、嬉しそうに名前を呟いていたから。

そして、今日はその一人であるアリサの家へ遊びに行っている。

出掛ける際のすずかの笑顔は、ライダーにも分かる程に輝いていたのだ。それを見ていた忍もライダーの話に合点がいったとばかりに笑みを浮かべると、手にした本を閉じる。そして残っていた紅茶を飲み干して空を仰ぐ。

「そっか。今頃は仲良くしてるかしら？」

「スズカなら大丈夫でしょう」

少しすずかの性格を考えたのか、不安そうな顔をする忍。そんな彼女の言葉にライダーが即答してみせる。それに忍は苦笑しながら、それもそっかと呟くのだった……

帰宅したすずかは、夕食後にやや興奮気味にバニングス邸での事を話した。自宅に負けぬような邸宅だった事、SPと呼ばれる人達がいた事、洋風の庭なのに、作務衣と呼ばれる和服を着た小次郎と言う専属庭師がいた事等、話題は尽きなかった。

ライダー達はそれを嬉しそうに聞き、すずかの話に相槌を打つ。アリサが習っているバイオリンに興味を覚えた事も告げ、それを自分も習いたいとすずかが言い出すと、忍達は揃って軽い驚きを見せる。しかし、忍はすぐにそれを許可した。

自主的にすずかが何かをやりたいと言い出す事は珍しいと思ったからだ。その姉の快諾に笑みを浮かべて礼を述べるすずか。そして最終的に今度は自宅に呼びたいと言うすずかにノエル達が笑みを見

せる。

「では、屋敷の大掃除をしなければいけませんね」

「後は庭の手入れも重点的に、ですね」

「ファリンはあまり張り切らぬ方がいいと思いますよ」

かえってドジを踏みますから。そう断言するライダーにファリン以外が笑う。言われたファリンはやや拗ねた表情でライダーを睨んだ。それを見て忍が放った「子供みたい」との一言で、ファリンの怒りの矛先が変わると同時に叫んだ。

「忍お嬢様あ！」

怒り心頭のファリンに忍も謝るが笑ってはしょうがない。ノエルがそれを見かねて嗜めるが、そんな彼女もどこかも楽しそうだ。ライダーはそんな光景を眺め、視線をすずかへ移す。

すずかも笑みを浮かべ、三人を見つめている。だが、ライダーの視線に気付いたのか、視線を彼女へと移した。

「どうかした？」

「いえ、賑やかだと思ひまして……」

すずかの問いかけにどこか懐かしそうに答えるライダー。衛宮邸の時間を思い出したのだ。その微笑むような声にすずかは笑顔で答えた。

ライダーが来てからだよ？　こんなに賑やかなのは。



そのすずかの言葉が意外だったのか、ライダーは驚いた顔で彼女を見つめた。それを微笑ましく思い、すずかは笑みを返す。ライダーが来てからというものの、月村家には笑いが絶えない。

確かに以前からフアリンと忍がムードメーカーだったが、ライダーが来て以来、それが余計に際立っていた。ライダーの的確な意見や鋭い指摘に、二人がリアクションを返すからだ。それにノエルやすずかまで笑い、それが更なる笑いに繋がる。

今もフアリンに詰め寄られて忍が困っているが、いつもなら仲裁役のノエルも、どこか楽しそうにそれに参加している。そんなやりとりを横目で見ながらすずかは告げる。

「本当にライダーが来てくれてよかった」

ライダーがもし居なければ、すずかはアリサやなのはと友達になれなかった。その友人を得るキツカケ。それは、クラスの一人がアリサの髪の色をからかった事に端を発したのだから……

クラスの自己紹介が終わり、担任の教師がいなくなった途端、一人の少年がアリサの髪を指差し、外人色と言い出した。無論、アリサはそれを無視していたが、あまりにもしつこいためについて彼女も我慢の限度を超えた。

その少年へ無言で近付き、勢い良く蹴り飛ばしたのだ。たまらず後ろへ倒れる少年に追い討ちをかけるようにアリサは言った。その顔は怒りを宿すように赤くなっていた。

「男のクセにしつこい！ 自分が日系色だからって、外人外人うるさいのよ……！」

蹴られたシヨックで少年は呆然としていたが、自分が馬鹿にされた事は理解できたらしい。その言葉に顔を真っ赤にしてアリサへ掴みかかるうとしたのだ。

だが、そんな少年を止めた者がいた。すずかである。彼女はアリサを馬鹿にするような少年の言葉を止めようか止めまいか迷っていた。だが、その踏ん切りをつける前に現在の状況となってしまうのだ。そのため、彼女はいち早く動いた。自分の勇気の無さを反省して。

「ダメっ！ 気持ちは分かるけど、手を出したらいけないよ」

「そうだよ！ それに、先に人を怒らせたのは君なんだから」

少年を諭すすずかに同調する声がある。それがなのはだった。なのははずかの前に立つと少年にこう言った。

「自分がされたり言われたりして嫌な事は、人にもしちやいけないの。でも……」

そこまで告げ、なのははアリサへ振り向く。その視線にアリサは僅かに怯む。なのはは怒っていたからだ。

「嫌なら嫌って言わなきゃなの。言葉にしないと、何も伝わらないんだよ」

そうはつきりと言い切るなのははアリサは言葉がなかった。そし

て何かを考えた後、バツが悪そうに少年へ顔を向ける。彼女が嫌う子供っぽさ。それが今の自分の行動そのものだったと理解したのだ。故に大人らしい対応を心がけ、素直に謝る事にした。

「……アタシが悪かったわ。その、蹴って……ごめんなさい」

それを聞いて、すずかもなのはも笑みを浮かべる。少年も毒気を抜かれたのか、それに謝罪で応じた。そんな事があり、その後すずかは、なのはとアリサから少年を抑えた事を感じされたのだ。

それにすずかは照れながらも、お返しとばかりになのはとアリサを誉めた。自分の意見をはっきり告げたなのはと、素直に間違いを認めて謝ったアリサを。そんなやりとりを経て、三人はそれぞれの名前を再確認し、友人となったのだ……

（あの時、私が動けたのはライダーと出会っていたから。自分を動かす勇氣。それをもらったから）

すずかは思う。あの時、少年を抑えなければ二人と友達になる事はなかったと。そして、あの時そう出来たのは、ライダーから勇氣を貰ったから。何かを待つのではなく、自分で何かを起こす。

そのための勇氣をライダーからもらったから、自分は動く事が出来たのだとすずかは思っていた。そこにすずかを現実へ引き戻す声が響いた。忍の絶るような声だ。

「ねえライダー、ちょっと助けてよ！」

さすがに旗色が悪いと判断したのか、忍がライダーに助けを求めたのだ。それにライダーは口の端を歪めてこう言った。

「欲しい本があるのですが……」

それを買ってくれるなら助けると言わんばかりの声であった。ライダーは月村家で養われているが、メイドとして働いている扱いにもなっている。そのため週に一度僅かだがお金を貰い、書店まで本を買いに行っているのだ。

そのジャンルの雑多さにはさすがと忍も驚いたものだったが、ライダーとしては以前からそうだったために特に何か言う事は無かった。そして、今彼女が欲しがっているのは女性向けのファッション誌を始めとした三冊。なので、渡りに船とばかりにライダーはそう告げたのだ。

「い、いいわ。来週は二倍出す。だから　っ！」

助けて。その言葉を言う前にライダーがファリンを取り押さえていた。正確には、二倍ののに音辺りで動き出していた。そのあまりの素早さに、助けを求めた忍だけでなく、ノエルやファリンも言葉がなかった。

驚く周囲を他所に、ライダーはファリンの耳へ口を寄せると静かに囁きだす。それはどこか妖艶な光景だった。見ている忍が思わず顔を赤めてしまうほどに。

「ファリン、それぐらいでいいでしょう……」

「ら、ライダーお姉様……あの、息が……」

「あまりシノブを困らせてはいけません。もう十分反省しています

……」

「は、はい……」

「では　　後片付けは私とノエルがやりますので、ファリンはお茶を淹れてください」

ファリンが頷いたのを受けて、ライダーは妖艶な雰囲気を一変させてそう言い放ち、食器を手に厨房へと消える。後に残されたファリンは、顔を真っ赤にして床に座り込んでいた。

ノエルもそんなライダーを追うように食器を手にして動き出し、すずかと忍は呆然とそれを眺める。そんな呆気に取りられている忍へ、ライダーは厨房から舞い戻ると、さらりと告げる。

「約束をお忘れなく」

それだけ告げ、再び厨房へと消えるライダー。それに再び呆然なつて見送るすずかと忍。ファリンは小さく「脈拍が……血圧が……」と呟いているが、その顔がどこか嬉しそうに見えるのはきつと気のせいだろう。

そんなファリンが再起動したのは、ライダー達が食器を洗い終わった後だった。ライダーからお茶の支度はどうしたのかと言われるまで、ファリンはその場で放心していたのだから……

ファリンの淹れた紅茶を飲みながら、再び穏やかな雰囲気にかまれる月村家。それぞれの手には本があり、忍は工学関係、すずかは

推理小説、ライダーが礼儀作法、ノエルは心理学、ファリンがドジをなくす百の方法であった。

元々月村姉妹は読書家だった。それにライダーが加わり、読書の輪が広がったのだ。忍はライダーへ、ライダーはすずかへ、すずかが忍へと本を薦めあう事が盛んになった結果、月村家全体が読書家になっていった。

ノエルはライダーのように感情溢れるヒトになるために、ファリンは初めは三人の話についていくためだったが、最近は思うところがあったのか、自分を変えるなどの自己改善系の本を読んでいる。

「ね、ライダーはどんなジャンルが好きなの？」

「ジャンル、ですか……？」

忍の問いかけでライダーは困ったように表情を曇らせる。ライダーにとって好きなのは読書そのものであり、ジャンルにこだわり等ないのだ。しかし、最近特に読み漁っているものを思い出し、ライダーはそれを答える事にした。

「本屋さんがオススメするものです」

「……は？」「……」

ライダーの返答に忍だけではなく、何気なく聞いていたすずか達も声を出した。そんな四人の反応に不思議そうな顔を返し、ライダーは自分の言った言葉が正しく伝わっていないのだろうかと思っただのか、更なる説明を告げた。

「本のプロが読んだ方がいい、と宣伝されているものです」

そのライダーの返しに忍は言葉を失う。それは聞いていたはずかとファリンも同じだ。戸惑う三人にライダーはどうして分かってもらえないのかと言わんばかりの顔をする。

そこへその雰囲気から脱したノエルがピシヤリと言った。

「ライダー、それはジャンルではなくコーナー名です」

そのノエルの的確な突っ込みに全員が頷く。ライダーは、そんなノエルの言葉に「そこまで大差ないと思いますが」と不思議顔。だが、ノエルが首でそれを否定すると、忍とファリンがそれを援護するように頷いた。

そんなライダーとノエルを見つめ、すずかはある事を思い出していた。よく二人が互いに薦めあうのが、部下のうまい操縦法等の本である事を。そして、それを見てファリンが軽く凹んでいた事も。

「では、ノエルは何なのですか？」

「私は人間心理です」

「あ、私は恋愛小説です」

「私は……ま、ファリンと同じでいいわ」

「私はファンタジーかなあ」

ノエルの言葉を皮切りに、次々と好きなジャンルを告げていく月村家。それを聞き、ライダーは何やら悩みながら問いかける。

「私も……何か絞った方がいいのでしょうか」

「いいんじゃない？ 別になくても」

あっけらかんと忍はそう告げた。彼女としては軽い雑談として聞いたのであって、ここまで大袈裟に捉えられるとは考えてなかったのだ。だからこそ、忍はライダーに微笑みかける。

「だってライダーは、読書は好きなんですよ？」

「……はい」

「なら、それでいいの。無理に話合わせようとしなくて、ないならないって言うてくれればそれでいいから」

こんなの他愛のない家族の会話よ。そう告げた忍に、ノエルとフアリンも頷く。すずかもライダーに笑って頷く。彼らにしてみれば、これはほんの話題提供のようなものだ。それをキツカケに互いの事をもっと知れたらいいな。その程度の事なのだから。

だが、その忍の言い方にライダーは心に迫るものを感じた。この月村家に来て一月弱。まだそれだけしか経っていないのに、自分を家族と言い切る忍達に言い様のない感情を抱いたのだ。

（これが感動と言うのですか……？ ああ、涙が溢れそうとはこんな気持ちなのですね）

最後に泣いたのはいつだったか。そんな事を思いながら、ライダーは微笑む。その目に、微かに光るモノを浮かべて……





とある一日（A & a m p : A）

作務衣を着た長髪の男が洋風の庭で作業をしている。その横にアリサが寄り添うように立っていた。男の名は小次郎。なぜ作務衣を着ているかというと、あの格好は流石に目立つのでアリサがスーツと共に普段着として用意したのだ。

実はここだけの話、作務衣姿の小次郎をアリサは気に入っている。本人としても動き易いので好んで着ているので、スーツはおそらくこのままクローゼットの中で眠り続けるだろう。

「ほう、友人が出来たか」

「そ、すずかとなのは。明日、早速すずかが遊びに来るから」

なのはは予定があつて無理らしいわ。そう告げる表情はどこか残念そう。そんなアリサを横目に、庭の植木を手入れしながら小次郎は笑う。その笑みにアリサは嫌なものを感じた。

そう、それは確実に自分を不快にさせる兆候だったのだ。まだ共に暮らし出して長くないが、それでも互いの事を多少とはいえ理解している。そこからの経験上、アリサは自分の直感は当たると踏んだ。

「それは重畳。その娘にはここは虎の巣だと分かったか」

「誰がトラだああ！たくつ、とりあえず粗相のないようにね」

やはり予想通りだった。そう思いながら、アリサは小次郎へそう告げると屋敷へ戻っていく。その後姿に小次郎は思う。

(余程嬉しいのであろうな。足取りが踊っておるわ)

笑みを浮かべて植木に視線を戻し、小次郎は普段よりも更に丁寧に手入れをしていく。普段よりも念入りに景觀を整えておこうと思つたのだ。それはアリサの言葉を意識してだろう。

アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎。すっかり庭仕事が板に付きだした彼は、なんだかんだでアリサに優しい。何せ、屋敷の者達が揃つてこう告げるのだ。共にいる時は兄のようだ、と……

門の前で立ち尽くす一人の少女。彼女　月村すずかは生まれて初めて自宅以外の豪邸を見た。その横で自慢げに立つアリサだったが、彼女は知らない。自分が月村家に訪れた際まったく同じ反応をし、すずかに同じ事をされる事を。

「ま、こんなとこで立つてるのもなんだし、早く行きましょ」

「そ、そうだね」

アリサについていきながら、すずかは辺りを見渡す。西洋風の庭は見慣れている。それでも他人の家だと思つと、どこか違うように見受けられたからだ。だが、そんな中に完全に浮いている存在がいた。

それは枝きりバサミを手にし、肩にタオルをかけた作務衣姿の小次郎だった。そんな違和感全開の姿にすずかは呆然と立ち尽くす。それに気付いたアリサが視線の先を追い　原因を認識するや否やその場から駆け出した。

「こんの、バカモノおおおお!!」

叫びと共に繰り出された跳び蹴りを、小次郎は逃げるでもなく、上体をそらし空いている手で受け止める。跳び蹴りの状態で固定されるアリサ。しかし、そのまま終われないと思ったのだらう。足首を掴まれながらも、何とかしようとバタバタと暴れたのだ。

そんなアリサだったが、小次郎に何かを言われ急に大人しくなった。ただ、その顔を真っ赤にしていたが。それを眺めるすずかは、何があつたのだらうと不思議顔。

以下、そのやりとり。

「放しなさいよ!」

「それは出来ぬ」

「どっしてよ!??」

「服に土が着いてしまつのでな」

「いいから放せ!」

「暴れるでない。すかーとがめくれあがっておるぞ?」

「なっ ?!」

そこで小次郎に静かに降ろされたアリサは、ブツブツ文句を言いながらもどこか恥ずかしそうにすずかの所へ戻っていく。そんなアリサにすずかは尋ねた。あの人は誰なのかと。

それにアリサはやや怒りを込めた声で答えた。小次郎と言って、住み込みの専属庭師であると。そして、この家の人間で唯一自分を丁寧扱わない奴だとも言った。

「その割にはアリサちゃんと仲がいいんだね」

「べ、別にそこまでってワケじゃないけどね」

そう答えて、アリサは急ぎ足で玄関へ向かって歩き出す。それはどう見ても照れ隠し。そんなアリサをすずかは小さく笑みを浮かべて追いかける。意外といいところのお嬢様と言うよりも、自分と同じで庶民的かもしれない。

そんな事を思い、すずかはアリサへ話しかける。それを受けて隣り合いながら会話を始めるアリサを眺め、小次郎はおもむろに植木の手入れを始める。

どうやら親しみを持たれたようだな。

そんな独り言を呟きながら……

その後すずかと色々な話をし、アリサがやっている習い事の一つであるバイオリンに彼女も興味を持った事で、会話は更に盛り上がった。今度はなのも一緒にと約束し、アリサがすずかを見送った時には時計が六時を過ぎていた。

初めて同年代の、しかも同性と長時間話した事はアリサにとって大きな出来事であった。その興奮冷めやらぬ彼女は、夕食時にもすずかとの話をし小次郎を呆れさせた。だが、それを顔に出さない辺りに小次郎の優しさがある。しかし……

「それでね……」

「ありさ、手が止まっておるぞ」

食事が始まって既に五分が経つが、未だにアリサの食事は一品たりとも手を付けられていない。さすがに小次郎もそれは見過ごせないのか、手にしたナイフとフォークでハンバーグを一口大に切断し、それをフォークに刺すとアリサの口の前へ持って行く。

その見事な所作に感心するアリサだったが、それもそこまで。何故なら、そんな風に小次郎の事を見つめていたアリサへ彼は極自然にこう声を掛けたのだ。

ほれ。

まるで餌を与えるようなその言い方にアリサは青筋を浮かべるが、ここで怒ってはまた小次郎を喜ばせるだけだと思い、黙って口を開ける。入れられたハンバーグからは濃厚なソースの味と肉の旨味が口一杯に広がり、それがアリサを笑顔にする。

それを眺め、軽く笑みを浮かべて小次郎も同じ様にハンバーグを口にする。こうして彼が肉を食べるのは初めてではない。しかし、肉食文化があまりなかった頃の人間だった彼からすれば、現代の食事はやはり驚きが多いもの。

「肉を食すのはまだ些か慣れぬが、これも美味よな」

「でしょ？ 今度はステーキやトロットロに煮込んだビーフシチューを食べさせてあげるわ」

驚くような小次郎にアリサはそう勝ち誇るように言った。小次郎が未だに慣れない事の一つが食事。菜食中心だった時代の小次郎からしてみれば、肉を食べる事などほとんどなく、しかもそれが洋風になれば更に珍しいものとなる。

そのためアリサは小次郎にもっと驚いてもらおうと、シェフ達に頼んで様々な料理を出させている。おかげで食事は小次郎のこの上ない楽しみとなっていた。

どこかの騎士王と違い、味ではなく食材や見た目などの雅さに重きを置いているのが小次郎らしさだが。

そんな小次郎は、アリサの挙げた料理名に心底不思議そうな顔をしていた。それがアリサには堪らなく優越感を感じさせる。何しろ、小次郎は基本アリサを小馬鹿にしているので、こういう時でなければ彼の上に立てないからだ。

「すてーきとは何だ？」

「牛肉を厚切りにして炭火で焼くものよ。専用のたれをかけたり、塩をかけたりして食べるの」

「ほう……ただ焼くのみとは単純よな」

「でもお肉の味が純粹に楽しめるわ」

「それも然り。では、ビーふ……？」

「ビーフシチューよ、シチュー。そうね……」

自慢げに語るうとしてアリサはふと思った。考えてみれば、シチューを説明するなんてした事がないと。シチューはシチュー。そう片付けてしまうのが普通だから。

そう、それはアリサが小次郎に出会ってから常にしてきた事だった。世の中の事を説明する時、自分が如何に『常識』と言うモノに縛られているのかを実感するのだ。

これはこういうものだから、こうなんだ。その一言で深く考えない。どうしてそうなのか。誰が決め、なぜそれを誰も不満に思わないのか。何が正しいとか間違っているなんて、本当は誰にも分からないはずなのに。

(まあ人を殺しちゃいけないとかは絶対正しいだろうけど、そこまで極端な事は中々ないもんね。状況によっては正義が悪になるとかあるだろうし……)

そう考えた所で彼女は小次郎の言葉によって現実引き戻された。

「如何した、ありさ」

そこに若干だが戸惑いの色が見える。何せシチューの事を考え出した途端、真剣な顔をしたのだ。そこまで深刻に考える物ではないだろうと小次郎さえ思う事だったが、予想に反してアリサが悩んでいるように見えたためだ。

「別に……少し他の事を考えてただけよ」

「左様か。で、しちゅーと言うのは如何ようなものか」



アリサの答えに納得するものがあつたのか、小次郎は話題を変え  
る意味も込めてそう聞いた。

「ま、簡単に言えば牛肉と野菜の煮込み料理よ」

詳しくはシェフに聞きなさい。そうアリサは言つて締め括つた。  
その顔は既にいつものアリサであつた。それに小次郎は笑みを浮か  
べ、目の前のハンバーグへとフォークを伸ばしてため息を吐く。

「ありさが他事を考えたおかげで、せつかくのはんぱーぐが冷めて  
きておる。急いで食べねばならぬか」

「ムカツ！ 何よ、あんたが説明させたんじゃない！」

「む、ばたーじゅに膜が出来始めたか」

「聞け！」

「おお、この人参は菓子であるか。野菜で甘味とは恐れ入る」

「無視するなああつー！」

まさに虎の咆哮。しかし、既に小次郎も慣れたもので、アリサが  
叫んだ瞬間耳を塞いでいる。それを見たアリサは、自分が完全に遊  
ばれている事を理解した。だが、そこで終わる彼女ではない。それ  
ならとフォークを手にし、小次郎のハンバーグを奪つたのだ。

一瞬、何が起きたか分からぬ顔をした小次郎だったが、アリサが  
自分の食事を盗つた事に気付き、微かに笑つた。子供らしい反撃の

仕方だと思ったのだ。

「…………手癖の悪い事よ」

「ふんつ。…………アタシを無視するからよ」

ハムツと盗ったハンバーグを口に入れ、美味しいと言わんばかりに笑顔になるアリサ。そんな彼女を小次郎は眺めて呟いた。

やはり、女子は笑顔が一番よ。

そんな小次郎の呟きには気付かず、アリサは食事を続ける。その顔に満面の笑みを浮かべながら…………

おまけ

「で、これが時間」

アリサが小次郎に見せているのは携帯電話。寝る前の僅かな時間、毎晩行われるアリサの現代教室。本日の教材は文明の利器。

「なるほどな。科学、と言つのは凄まじいものよ」

手渡された携帯をしげしげと見つめる小次郎。先程までアリサに



- - - - -

すずか編の裏と云うか、その頃のアリサ達というか。これも加筆修正です。

アリサもすずかからライダーの事は聞いていますが、今は共通の話題で頭一杯で小次郎に話していません。

本格的に彼らが出会うもしくは知るのは、もうしばらく後になります。

## とある一日 (N & a m p . S)

麗らかな春の日差しが差し込む公園を、サッカーボールを蹴りながら走る一人の金髪の少女がいる。その額には汗が浮かんでいるが、そんなものを感じさせないような動きで躍動感を前面に押し出し、見事なドリブルを続けていた。

そんな彼女を追いかける少女が一人。ぜえぜえと肩で息をしながらその背に追いつこうとしているが、距離は縮むどころか離れる一方であった。それでも諦めずに追いつこうとしているのだろう。彼女を見て少女は少し速度を調整している。

だが、それも空しく彼女は追いつく事が出来ない。やがて、少女は地面にへたり込んで動かなくなる。それに気付いたのだろう。少女が彼女の下へと戻ってきた。

「大丈夫ですか？　なのは」

「にゃ、にゃはは……何とか、ね」

「そうですか。大分体力がつかましたね」

「そ、そうだね。……初めは転んではかりだったし」

そう呟いてなのは思い返す。彼女がセイバーとこうして運動するようになって、もう一年以上になる。あの頃に比べれば今の自分はかなり体力がある。運動神経は良くなっていると信じたい。そうなのは切に願う。

「さ、ではそろそろ帰りましょう。モモコの朝食が待っています」

「うん。それにお出かけの準備もあるしね」

差し出されたセイバーの手を掴み、なのはは立ち上がる。今日は日曜日。学校は休みで、高町家は全員で出かける事になっていた。なのはとしては、本当はつい先日出来た友人の誘いを受けたかったが、家族全員で行動するのは中々出来ない事もあり、断らざるを得なかったのだ。

その際のアリサの残念そうな顔を思い出し、なのはは思い出す事があった。それは、セイバーから教わったある言葉。

(セイバーに教えてもらったもん。言わなきゃ何も伝わらないって)

あの日、士郎が退院した日の夜。セイバーは高町家の全員にそう告げた。子供だからとか大人だからとか関係なく、家族として思っている事を正しく伝えるべきだと。なのはへ我慢を強いてしまっただけになっていた現実。それに気付けなかったのはそこに原因がある。そうセイバーは言い切った。

その言葉になのは達は何も言えなかった。セイバーが責めているのではなく、優しさを正しく向けてほしいと純粹に願っている事を誰もが感じ取っていたからだ。

セイバーは思う。この家族は優しいからこそ、自分の苦しみを他者に知られまいとして余計苦しめる結果になってしまったのだと。それをセイバーはもう繰り返させたくなかった。他者を思いやる事は大事だが、そのために自分を犠牲にする事だけはさせたくない。

セイバーは王をしていた頃の自分の姿を、幼いなのはに見てしまったのだ。他者のために望まれる姿であろうとしていた自分と、ま

だ幼いなのはが重なって見えた。そこから彼女がかつての自分と同じ境遇にさせないためにと動くのは当然だったのだ。

(あれでみんな変わったよね)

士郎と桃子は以前にも増して休みを大事にするようになった。それは、家族との時間を大切にしたいから。恭也と美由希は鍛錬を厳しくした。それは恭也の期待に美由希が応えたいと願ったから。

そしてなのはは、思った事を隠さず伝えるようにした。ただしセイバー優先で。友達であり、姉であり、他人であるセイバーは、一番客観的に意見を述べてくれるからだ。

セイバーと並んで家路を歩くなのは。その表情は朝日に負けぬ程に輝いていた……

「ただいま〜！」

「只今帰りました」

二人は家に着くとまず玄関からそう声を掛ける。それに、おそろくキッチンにいるであろう桃子が声を返す。

「お帰り〜！ もうご飯だからお父さん達も呼んで来て〜！」

これがいつもの日常の始まりの合図。これを受けて二人は揃って言葉を返した。

「了解っ!」

どこか凜々しく、だけど可愛く答えるのはに対し、真剣そのもののセイバー。そして二人は庭にある道場へ向かう。そこからは、時折固い物がぶつかり合う音が聞こえてくる。中で土郎達が鍛錬をしているのだ。

なので、それを邪魔しないようになるべく静かに戸を開けるのは。その視線の先では恭也と美由希が睨み合っていた。それを横目にしながら、なのはは見守っている土郎へと近付いていく。セイバーもそれについていく形で歩き出す。

「お父さん」

「ん？ もうそんな時間か」

なのはが来た事で全てを察し土郎は呟く。そして、膠着しそうな二人に向かって告げた。

「後三分だ。引き分けなら今日のセイバーの買い食い代は二人持ちだな」

「っつ?!」

その声により二人が動いた。一瞬だがセイバーが目を輝かせたのを見たからだ。沈着冷静な雰囲気を持つセイバーだが、食の事になると別人のようになる。それは高町家全員の認識だ。

セイバー泣いても飯やるな。それが高町家の教訓。それが出来なければ、彼女に食事を与えてはならない。同情すれば、必ず自分に返ってくるのだ。主にその財布に。現に高町夫妻は経験済みだ。



神速を使いぶつかり合う二人。それをキョロキョロと視線で追うのはと、静かに見つめる土郎とセイバー。無論、なのはには見えていないが、それでも必死に追いかけようとする所が可愛いものだ。そんななのはと違い、セイバーはそれを一つも見逃さぬようにしている。御神の剣士は彼女にとってこの上ない相手なのだ。以前戦った小次郎の剣。アレと似たものを感じていた事と、魔力も使わずこれ程の動きをしてくるのだ。その事が持つ意味は大きい。

既にセイバー自身、恭也や土郎と戦っている。未だに魔力を使わない状態では、セイバーも容易に勝ち越す事が出来ない相手。それだけでも土郎達の異常さが分かるうというものだ。

「む……」

「決まりましたね」

恭也の大振りを好機と取った美由希だったが、それは彼の誘いだっただ。だが美由希もそれは覚悟の上であり、迫り来る小太刀を敢えて流さず受ける事で勢いを殺し、己の小太刀を叩き込んだ。

しかし、それすら読んでいた恭也は打ち込まれた一撃を耐え切り、再度残りの小太刀で斬りつけた。堪らず痛み表情を歪める美由希へ、恭也は容赦なくとどめの一撃を振り下ろしたところで、それを見事に寸止めする。

それを見つめて肩で息をする恭也と美由希。恭也の勝利にどこか残念そうなセイバー。両者が自分の飲食代を持つてくれればと考えていたのだろうか。なのははそんなセイバーに気付く事もなく、隣の土郎から勝負が決まるまでの一連の流れを教えてもらっていた。

「っ…………お前…………はあ…………持ちだからな」

「わかっ…………はあ…………ってるよ」

どこか嬉しさを滲ませる恭也と悔しさと寂寥感が漂う美由希。気のせいか、その背中からはどんよりとした空気が出ている。

（これで今月のお小遣いパー…………トホホ）

そんな事を思いつつ、美由希は道場の後片付けを始める。それを横目に恭也が視線を動かせば、なのはとセイバーが道場から出て行く所だった。去り行くセイバーの背中を眺めて恭也は思う。

一瞬だが、俺が動いた時にセイバーが残念がっていたような

…………

それが事実か見間違えかは分からない。それでも、恭也はどこかでこう願う。出来れば見間違えであってほしい、と…………

高町家の食事はある意味スゴイ。料理や素材ではなく、量がスゴイ。ご飯の量もさる事ながらオカズの量も多いのだ。原因は育ち盛りの子供達ではない。一年以上前からいる家族同然の少女であった。

「モモコ、御代わりを」

「はい」

もう誰も何も思わない。まだ食事が始まって五分と経過してないとしても、それが当然なのだ。しかし、これが十分経過してなら話は別だ。大丈夫かや具合でも悪いのかだけではなく、病気かもしれないとセイバーを心配するだろう。そういうものなのだ。食事時に関するセイバーという少女の評価は。

「なのは、今日は何を買った」

「えつとね……」

「あ、父さん。醤油取って」

「ああ、ほら」

「シロウ殿、私にはソースを。目玉焼きにはかかせない」

「セイバー。はい、御代わりよ」

賑やかな食卓。ちなみにセイバーは全員から呼び捨てを望んだ。それに応えてセイバーと皆は呼んでいる。セイバーも同じく呼び捨てなのだが、士郎だけは殿付きとなっている。

セイバー曰く「家長だから」との事だが、深い理由があるのだろうと桃子と士郎は考えている。そこにあの目見せた彼女の表情の謎もあると思いつながら。

常人が見たら驚くような量の食事でもセイバーの前では普通の食事。二つあった御釜のご飯も綺麗になくなり、テーブルの上のオカズも残っているものは何もない。

それを満足げに見つめる桃子。なのは達は揃って笑みを浮かべて

いる。そして食後のお茶を啜り、セイバーは静かに告げた。

「ごちそうさまです」

「お粗末様」

既に食べ終わっているのは達も、それを聞いて片付けに動き出す。それぞれが各々の食器を持って行き、それを桃子が洗う。洗われた食器を美由希が拭いて元の場所へ。恭也はテーブルを拭き、なのははその手伝い。土郎はセイバーとサッカー評論。

いつもは仕事や学校などで忙しい朝だが、たまの休日はこんな風にゆったりと時間を過ごす。出掛けるのはお店が開き出す十時からなので、それまでは自由時間。

「ここでラインを上げれば……」

「いや、でもここからクロスに振る方がいいんじゃないか？」

サッカーチームの監督をしている土郎が、セイバーとサッカー談議をするようになったのは半年前。欠員が出た際、セイバーに代理を頼んだ事がキツカケだった。

土郎の頼みに応えなくてはとばかりに見事な運動能力を如何なく発揮したセイバーは、そのために永久出場停止という名誉の処罰を受けた。しかし、そのプレーには多くの人間が賛辞を贈った。

テーブルに目をやれば、恭也となのはが掃除を終えて雑談していた。二人の雰囲気はとても穏やかなものがある。

「学校は楽しいか」

「うん。友達も出来たし、お勉強も楽しいよ」

満面の笑みで答えるのはを見つめ、頭を撫でながら恭也は思い出す。あの頃、どこか自分の意見を述べる事に臆病だったなのは、恭也は気付いてやれなかった。それを悔いる自分をなのははこう言っただけ許したのだ。

自分が淋しいと言わなかったからだ。悪いのは恭也ではなく、本音を言い出せなかった自分だから。そう告げたなのはに恭也は思った。強くなつたと。幼いながらも、セイバーという友を得て妹は成長したのだな。そう感じた事を。

そして、キッチンからセイバー達の様子を美由希と桃子が見ていた。

「しっかしさ」

「んっ？」

「セイバーもすっかり『高町』だよ」

「そうね。まさに、高町セイバーね」

食器をしまいながら笑う美由希と桃子。実際、セイバーを養子にしたいと桃子は提案した事があったのだが、彼女はそれをやんわりと断った。その時セイバーに言われた一言が、今も桃子の心に残っている。

セイバーはこう言った。桃子の気持ちは嬉しいが、自分にも親はいた。だから、桃子を親と呼ぶ事が出来ない。でも、許されるならもう一人の母と思って桃子に接してもいいだろうか。

その申し出に桃子は喜んでと応じ、それまではなのはの母という立場で応対していたセイバーが、急にどこか甘えるようになってくれた。そう言っただけで桃子ははしゃいだものだ。もっとも、その違いは桃子にしかなじられないものであるが。

概ね、高町家は平和。この日もそうだった。郊外に出来た大型ショッピングセンターに行ったまでは……

「じゃあ、お昼にここで合流って事で」

桃子の提案に頷く一同。まずは女性と男性に別れて散策し、お昼を食べてからそれぞれに別れて行動。最後に食料品を買って帰宅。そういう手筈になっていた。ちなみに集合場所は、二階にあるフードコート。先程から、セイバーの視線がせわしなく動いている。解散の一声で動き出す高町家。セイバーはフードコートに未練がましい視線を送りながら、美由希に引きずられるように歩いている。それになのはと桃子は苦笑するしかない。

「後でまた来るから」

「それはそうですが……」

仕方ないとばかりに告げられた桃子の言葉に、セイバーはそう返して言葉を濁す。そんなセイバーになのはがほんの悪戯心で告げた一言。それが少し困った事態を引き起こす。

あんまり駄々こねると、おやつ抜きなの。

それを告げられたセイバーの顔は、驚愕の一言に尽きた。それだけではない。掴んでいた美由希の手を振りほどき、心からの許しを得るかのように桃子に縋り付いた。その光景に否応なく周囲の視線が集まる。

「ちょ、ちよつとセイバー……」

「ごめんなさいごめんなさい。もう言いませんので許してください」  
周りの視線などお構いなしに懇願するセイバーを眺め、美由希はなのはへ呆れた視線を向ける。

「どうすんの、なのは……これ」

「じゃ、じゃはは……どうしよう……」

そんな二人の目の前で、捨てられた子犬のようなセイバーの懇願は続くのだった……

「これなんかどうだ？」

「いや、これは少し派手じゃないか？」

セイバーが落ち着きを取り戻し、なのは達が安堵の息を吐いた頃、  
士郎と恭也は女性向けのアクセサリーショップにいた。なのはのた  
めの小物を選ぶためだ。

初めはそのファンシーな雰囲気にとじろいた二人だったが、な  
のはの入学祝いと友人が出来た事を兼ねたプレゼントを選ぶためにと  
突撃したのだ。まあ、選び出したらそんな事を忘れてしまった二人  
ではあったが。

「髪飾り……？」

「お、それはいいな」

恭也が目をつけたのはリボン等の髪飾りだった。様々な色や形の  
物を見ながら、二人は悩む。ちなみに、成人男性がファンシーショ  
ップで真剣に物を見定めるのは、かなりシユールである。周囲の女  
性が先程からじっと二人を見つめている事からもそれが分かるとい  
うものだ。

結局、二人は淡いピンクのリボンを買った。これをなのはは大変  
気に入り常に身につけるようになるのだが、ある時から身につける  
事がなくなる。その理由はまた別の話。

こうしてお昼の集合までに女性陣が見ていたのは衣服や小物類。  
男性陣はスポーツ用品や日用品。それらの話をしつつ、フードコー  
トを歩く高町家。中でもセイバーは目にする物全てに反応を示し、  
そのたびになのはが説明していた。それを見ながら、美由希は気が  
気でなかった。今からセイバーが食べる物は、全部自分の払いにな  
るのだから。

「それで、どうする？」



「せっかくだ。皆好き勝手に店を選ぼうじゃないか」

士郎の言葉に異議はなく、それぞれが思い思いの物を頼みに行く。ただし、当然セイバーだけは美由希の後をついていった。それがどこか尻尾を振る犬のようにも見えて、密かになのは達が笑っているとも知らずに。

やがて、テーブルに様々な料理が並んだ。士郎は海鮮丼。しつかりと食べたかったようだ。桃子はドーナツが三つにパイが二つ。それにジャワティだ。甘味系なのは、やはり仕事柄気になるのだろうか。

恭也は盛りそばと天麩羅。本当はざるそばにしようと思ったとは本人の談。美由希はカルボナーラ。その表情は少し安堵している。セイバーへの出費が予想以上に少なかったためだ。なのははオムハヤシ。子供が好きなものを掛け合わせたそれを前に、満面の笑みを浮かべていた。

そして、肝心のセイバーはと言えば……

「す、すごいねセイバー」

「ええ。色々あつて迷いましたが、これだけにしました」

どこか自慢げなセイバーの前にあるのは、ナポリタンに石焼ビビンバ。それに石狩汁という体育会系もびっくりのメニューだった。ちなみに回った店で軽く五分はメニューを凝視している。

「……大丈夫か？」

「うん。……意外と少なくすんだ」

バランスを考えましたと語るセイバーの横で、美由希はあははと乾いた笑いを見せた。それに心で手を合わせる恭也。そんな様子を眺めなのはは呟いた。

「まだおやつを買ってないから、問題はこれからなの」

その呟きに美由希が顔を勢い良く上げ、セイバーを見る。その視線に気付きセイバーが美由希を見返した。その美由希の視線に含まれたものにセイバーは首を傾げる。嘘だと言ってくれと聞こえた気がしたのだ。

「どうしました？」

「ねえ、セイバー？ これで満足だよね？」

お願いだからそう言って。そんな想いを込めた問いかけに、セイバーは笑みを浮かべて答える。

「何を言っているのですミユキ。後は甘味を買わねばなりません。一階にたい焼きが売っていたので、それを買わねば」

嬉しそうにそう返し、スパゲッティを頬張るセイバー。その言葉に完全に打ちのめされる美由希。そして、それを同情の眼差しで見つめるのは達。こうしてお昼は過ぎていくのであった……

お昼を食べて自由行動になったのだが、なぜか二人組になってしまうのが高町家。土郎と桃子、恭也と美由希、なのはとセイバー。話し合ったわけでもないのにそうなってしまるのは、仲が良いからなのか。ともあれ、三組はそれぞれに歩き出す。

「ね、セイバーはどこに行きたいの？」

フロア紹介を眺め、なのはは隣のセイバーへ問いかける。そのセイバーはそんなのを見つめ、優しく微笑んでいた。

「私は特にありませんよ」

「え〜っ、つまんないの」

「では、なのはの行きたい所に」

そう笑みと共に言われては、なのはも黙らざるを得ない。結局、三階にあるアミューズメントコーナーへ向かった。様々な機械が並び、雑多な音を響かせるそこは、セイバーにとっては初体験の連続だった。

UFOキャッチャーで苦戦し、クイズゲームに唸り、レースゲームに興奮し、メダルゲームで大勝した。そんなセイバーとなのはも一緒になって楽しんでいた。一番二人が気に入ったのは景品のウサギとライオンのヌイグルミ。

セイバーはライオンが欲しかったのだが中々取れず、なのはが何とか取ったのだ。その際、手前のウサギも一緒に落ちたのだが……

「これはなのはに」

「ふえ？」

「お礼です。私には、これで十分ですから」

今日の思い出に、とセイバーがなのはに手渡した。しばらくそのウサギを眺めていたのはだったが、言われた事を理解したのだから。満面の笑みでそれを抱きしめ、感謝の気持ちをなのも告げた。

「私こそありがとう！ セイバー！」

それにセイバーは柔らかな微笑みを返して頷いた。その後、二人は手を繋いで歩き出す。笑顔で会話する互いの脇には、可愛らしい思い出の品が抱えられているのであった……

その後、再び合流した高町家は食料品の買出しを終えて帰路に着いた。勿論、セイバーは帰り際にたい焼きとみたらし団子を購入し、美由希の財布へ最後の一撃を与えたのは言うまでもない。

家に着いた時には既に日が暮れていたため、すぐに夕食の支度となったのだが、珍しく桃子の手伝いをセイバーが買って出た。それは、セイバーなりの感謝の気持ち。何も話さぬ自分を受け入れ、家族同然に良くしてもらい、今日もまた思い出をくれた事に対する精一杯の恩返し。

「さ、まずは何をすればいいですか？」

「そうね。じゃあ……まず」

手を洗って来て。

その言葉にセイバー以外の笑いが起こり、言われた本人は恥ずかしそうに手を洗いに行く。その途中でセイバーはふと思った事がある。それは遠い記憶の彼方に眠っていた記憶に近い感想。

(ああ、これがこの時代での普通の家庭なのですね。シロウ達とも義父上達とも違う暖かさを感じます)

養父達と過ごした頃を思い出し、セイバーは懐かしむように笑う。でも、とそこでセイバーは呟く。まだどこかで衛宮邸の記憶を引きずっている。そう考え、セイバーは誓う。いつか全てを話して、キチンと現在と向き合おうと。

この暖かさを愛しいと思っているから。だから、必ず機会が来れば明かす。その想いを強く心に誓って。そんなセイバーの耳に聞こえてくる声がある。それはなのは達の楽しそうな笑い声。

「……さて、早く手を洗って手伝わねば」

意外と思ったよりもあっさりと受け入れられるかもしれない。そんな風を感じながら、セイバーは笑みを浮かべて歩くのだった……

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

リボンの登場。何のためのものかは、皆さんのご想像通りです。これも加筆修正です。

そのためだけに書いたわけではないですが、肝心なのはそこだったりします。

とある一日(H&a m p・A)

(またか……)

そう思い、アーチャーはため息を一つ。のんびりとした朝の時間洗濯物を干していたアーチャーが感じたのは、視線。それも、あまり良くない類のものだ。ちなみにアーチャーの格好はTシャツにジーンズと、至ってラフなものだ。残っていたはやての父親の服を修繕した物である。

はやては新しい服を買うべきだと主張したのだが、アーチャーがそれをやんわりと断ってそれを提案したのだ。もし許されるのなら、残った故人の服を有効活用したいと言って。

それにはやてが一瞬沈黙し、嬉しそうに許可したのは言うまでもない。そう、アーチャーは気付いたのだ。自身が既に霊体ではない事を。だからこそ、こうして服を手に入れて過ごしているのだから。

受肉した原因は定かではないが、今までの例から考えればこの召喚は”世界”によるものだな。その割には私個人としての行動が許されているのが不思議ではあるのだが……

この八神家にアーチャーが来て既に一週間。その三日目にして、監視されている事に気付いた。だが、その相手が誰かまではアーチャーの力を持つてしても未だ掴めていない。それでも、一つだけ確信している事がある。

(サーヴァントクラスの者ではないな。そうならば、既にはやてへ何らかの行動を起こしているはずだ。だが、それ以外なら何が……?)

そう、その相手は彼が警戒する相手ではない事。可能性はかなり低いが、もしかするとはやてがこの世界の危機に関っている存在かもしれないと思い、アーチャーはその動向を窺っていたのだ。

しかし、車椅子で魔術師でもない少女であるはやてがそんな存在には思えず、アーチャーとしてはこの監視される理由がまったく分からなかったのだから。

何か手がかりでもあればと、はやてへそれとなく聞き込みをして得られた情報は、彼女には後見人のような存在がいる事。その相手であるギル・グレアムという人物へは、既にはやてがアーチャーの事を伝えている。

父方の遠い親戚ではやての事を偶然知ったと嘘は吐いているが、それを調べる事があれば、アーチャーはその人物がこの監視に関係していると踏んでいた。

聞けば、親の古い友人というだけではやての後見人をしてもらしい。美談ではあるが、アーチャーは当然疑っていた。無論、はやてにはそんな素振りも欠片として見せていない。

初めは八神夫妻の遺産関係かと思っただが、驚く程健全に運用されていて、これは違つとすぐに判断。ならばと、はやてにグレアムの人物像をそれとなく聞いてみたものの、手紙でのやり取りしかない彼女に詳しい事が分かるはずもなく、結局アーチャーは独自で調べるしかなかった。

(いつものように周囲に人はなし。いるのは……)

周囲をごく自然に窺うアーチャー。そこにいるのは。

(いつもの猫、か)



この家で暮らすようになってから、アーチャーがよく見かける猫がそこにはいた。初めは魔力を感じたので使い魔かとも考えたが、この世界に魔術師がない事は把握したため、その可能性を無くした。今は、偶然魔力を持つてしまった特殊猫として接している。

「またお前か」

アーチャーの声に可愛らしい声で鳴く猫。その近くまで近付き、彼はポケットに忍ばせてある小魚を取り出す。

「ほら」

それを手に乗せて差し出すと、猫は嬉しそうに食べ始める。それを眺め、アーチャーは思う。

(ここまでなるのに苦労したものだ)

最初は視線が合っただけで逃げられ、次は近付こうとして逃げられ、三度目は警戒されながらも、小魚を与えて現在に至る。その理由ははやてがこの猫を飼いたいと言い出した事が原因。

アーチャーが二度目に逃げられた際の話をした所、はやてが是非飼いたいと言い出したのだ。当然アーチャーは止めた。野良猫のようだし、人に深い警戒心を持っているから無理だと。それでも、はやては退かなかった。

数十分に渡る口論の末、結局アーチャーが色々試して、それでだめなら諦めると約束させたのだが……

(まったく……こつもつまいくとは思わなかったな)

三度目の際、試しに声を掛けてみたのだ。通じる通じないはともかく、動物に敵意がない事を表すにはそういうのも効果があると知っていたからだ。そして小魚を与える事に成功し、アーチャーがそれを無表情ではやてに伝えると、彼女は満面の笑みでガッツポーズしてこつ言った。

よっしや！ 首輪と名前やな！

気が早い。

アーチャーがそんなやり取りを思い出していると、手に乗せた小魚が無くなった。見れば猫は満足そうに舌なめずりをしている。それを見てアーチャーは手を引つ込めた。

それに構わず、猫は身だしなみを整えるように前足で顔を掻いている。それを見てアーチャーは小さく笑う。もしかしたら、この猫もはやてと同じで温もりに飢えているのかもしれない……

その後、猫はまたどこかに行ってしまった。だが去り際にアーチャーを見ていたので、おそらく明日も来るだろうと彼は踏んでいた。

「アーチャー、ちょう来て〜」

「分かった。すぐ行く」

リビングからはやての声に、アーチャーは空の洗濯籠を手に家

の中へと戻る。すると、そこには鉛筆を手に白紙と向き合っはやての姿があった。その紙には、何やら文字が書かれている。

「どうした？」

「これなんやけど……」

そう言うてはやてが見せたのは、猫の名前らしきものが書き連ねられたチラシの裏。みけ、たま、しゃむ、ぽち等様々だ。それを認識し、アーチャーはこめかみを押さえた。

「まさかとは思うが、これは」

「ねこの名前や！」

「……だろっな」

自身の言葉を遮って告げられたはやての元気一杯の声に、予感的中とばかりに頭を悩ませるアーチャー。それを見ながら不思議そうに首を傾げるはやて。

そんな彼女へアーチャーは告げる。懐き始めてはいるが、まだまだ飼うのは早いと。それにはやては反論する。飼う事になってからでは遅いと。そんな討論をしばらくし、結局折れるのはアーチャーだった。

「……致し方ないが、名前を決めるのは協力しよう。だが、首輪やトイレ等の準備はダメだ」

「ええやん。ここまできたら全部」

「それでは君の思い通りだ」

そこは折れる事は出来ないとはかりの断言に、はやてはケチと吹き口を尖らせアーチャーを見つめる。それを気にも留めず、アーチャーは洗濯籠を手に動き出す。

今日の予定は買い物と図書館への本の返却となっているのだ。そのためはやての部屋に入り、目当ての本を手に取りうとした時、アーチャーはある本に目を奪われた。

(何なのだ、この本は……?)

それは鎖で縛られていて、開く事が出来ないようになっていた。だが、その本から感じる魔力はどこか不気味ささえ漂わせている。何となくだが、不幸を呼ぶような雰囲気さえある。

「どないした？」

アーチャーが中々戻ってこないのも、はやてが様子を見に現れたそれを幸いとアーチャーは件の本を手に取り尋ねたのだ。この本は何だと。はやてはその指し示す本を見て、どこか納得した表情で答える。

よくは知らないが物心ついた時から家にあり、一度も開いた事がない事を。そして妙な愛着があり、捨てずに取ってあるとも。それを聞き、アーチャーは密かにある事を試みる。

「トレスオン  
解析、開始」

だがその瞬間、彼へ本能的な『何か』が告げる。コレは危ない。手を引け、と。それと共に一瞬ではあるが、何か邪悪な気配が強く彼の体を駆け巡った。

「っ?!」

「アーチャー？」

その恐怖感に思わず手を引つ込めてしまふアーチャー。それをどこか不思議そうに見つめるはやて。何故なら、その時のアーチャーの顔は恐怖に歪んでいたのだ。

一方のアーチャーはある確信をする。未だ分からぬ監視者。その目的はこの本だと。確証はない。それでも彼の勘がそれを強く肯定していた。故にアーチャーは迷わない。少しでも可能性があるなら、徹底的に。それが、彼のやり方だ。

「はやて、この本を私に預けてくれないか？」

「ええけど、何で？」

「何、少し気になってね。それに見た目もある。君には似つかわしくない」

そう言つて、アーチャーは鎖で縛られた本を手に自室へと向かう。使われていない部屋を掃除し、その一室をアーチャーの部屋としてはやてが使わせているのだ。

手にした本を棚に入れ、それを外から容易に見える位置に置く。そして、気付かれないようにトラップを仕掛け、念のために簡易結界を敷き、準備を終える。

アーチャーは監視者の目的を明確にするためにこの罫を仕掛けた。もし、この本の入手が目的ならば必ずここに侵入する。だが、それ以外の目的ならば自立つ動きは起こさない。まずは、相手の目的と実

力を知る必要がある。そのための畏、そのための結果。

「な、ほんまにどうしたんや」

「別に何でもない。さ、そろそろ出掛けるぞ。まずは図書館からだ」

はやての声に反応するようにいつもの顔へ戻し、アーチャーは車椅子を押し始める。それにはやては何か言いたそうだったが黙る事にした。アーチャーの表情がどこか怖かったからだ。

（一体、何があるんやろ？ あの本に）

そのはやての疑問に答えが出るのは、ここからかなりの時間が必要となる。そう、九歳の誕生日。その忘れられなくなる日まで待たねばならなかったのだ……

「今日は何にする？」

「そうだな……。む、鳥が安いかな。なら、チキンカレーでどうだ？」

「おっ、ええな。ならわたしが野菜の皮むきするわ」

「頼む。後はサラダでも作るか……」

スーパーのカゴを抱えるはやてと車椅子を押すアーチャー。その姿はこのスーパーで知らぬ者はいない程の有名人であった。何しろ

そのアーチャーの日本人然としない容姿が目立つし、更にはやてが車椅子と来ている。

事情を聞いた人達は皆揃って、今時珍しい話だと思って応援してくれていた。そこには、はやての人見知りしない性格とアーチャーの主夫ぶりも関係している。結果、ご近所で知らぬ者はいない有名兄妹となってしまうのだ。

「な、それわたしが作る」

元氣良く手を挙げるはやてに、アーチャーは笑みを浮かべる。そう、アーチャーの料理を食べた日以来、はやては急に自立心が芽生えたのか、彼から家事を教わりだしたのだ。

車椅子なので危険だとアーチャーは言ったのだが、はやてはそれを承知で頼み込んだ。現在、はやてはもっぱらアーチャーの手伝いをしながら炊事や掃除を教わっている。

「ほう……サラダとは言え大変だぞ？」

「ふふん。わたしやって、いつまでも手伝いだけやないって教えたる」

アーチャーの言葉に自信たっぷりに戻すはやて。それを聞き、アーチャーは笑みを深める。

「ならば任せよう。マカロニサラダを、な」

「な、なんやって　　っ!？」

突然のはやての大声に周囲の視線が動く。それでも、それがはやて達だと気付くと誰もが微笑みを浮かべて視線を戻した。つまり、

今のような事はよくある事と認識されているのだ。

おや？ どうしたはやて。先程までの自信はどこへ行った？

皮肉屋スマイルではやてを見つめるアーチャー。それにはやては悔しそうな視線を向ける。だが、それも少しすると一転、同じような笑みを浮かべてこう言った。

「ならアーチャー、お手伝いたのむな。わたしはまず野菜の皮むきあるから」

「なっ……」

「任せるって言ったな？ せやからサラダに関してはわたしが指示出す側や」

その台詞にアーチャーは嫌な既視感を覚える。何かこの論理の仕方は覚えがあると記憶が訴えるが、同時に本能が思い出すなど叫んでいるのだ。そして、その言いようのない不安はとどめのはやての言葉で的中する。

あれ？ どないしたアーチャー。さっきまでの余裕はどこ行っただ？

そうにつこりと微笑むはやてに、アーチャーはあかいあくまの姿を重ね、首を振る。そんな事はあるはずないと、強く強く言い聞かせるように。そこで彼ははたと気付く。はやての声が彼女に似ている事を。

そこから付随して開きかかる記憶に蓋をし、彼は今までの会話を忘れる事にして買い物へと意識を移す。そんなアーチャーを楽しそ



うにはやては見つめていた。やり返せたと思いながら……

楽しくも騒がしい食事を終え、二人は後片付けをしていた。今日のカレーは美味しかったとはやてが言えば、アーチャーがサラダはまだまだと返す。それにむくねながらも食器を洗うはやて。そんな彼女をさり気なく気遣い、アーチャーは次の食器も手元に差し出す。たった二人の家族。だが、不思議とはやては淋しくなかった。それはアーチャーがいつも傍にいるからだろう。彼女が何かをする時、アーチャーは必ず見てくれている。安易に手を貸すのではなく、見守る。はやてが言い出さない限り、アーチャーは手を出さないのだ。

それが本当の優しさだと、はやては知っている。何故ならばやてが危険に晒された時は、すぐさまやってきて助けてくれるのだ。

「明日の朝はカレーやな」

「ふ、一晩寝かせた私のカレーは驚くぞ」

「お、なら驚かんかったら罰金百万円や」

「どうしてそうなる」

そんな会話をしながらはやては思う。こんな時間がずっと続きますように、と。強く、強く、心から願いながら……



## とある一日（F&amp;L）

額から滝のような汗を流し、フェイトは目の前の相手を見つめる。まだ三分も経過していない。にも関わらず、ランサーはフェイト達三人を圧倒していた。

初めにアルフが襲い掛かった。それを槍で一蹴、その隙を突いてリニスが幾重にもバインドをかけたが、それも三十秒と持たずに消され、まるで計っていたかのように飛び掛っていたフェイトとリニスを蹴散らしたのだ。

離れては槍で、近付けば体術で。魔法を放つてもフォトンランサーではまるで効果なく、それにまず当たらない。そんな絶望じみた状況でも、フェイトは諦めなかった。彼女には切り札とも呼べる魔法があったからだ。

【アルフ、リニス、少しだけ時間を稼いで】

【いいけど、何する気だい？】

【試してみたいものがあるの】

フェイトの指すものが分かったのか、リニスが若干上擦った声で叫ぶ。

【まさかっ！？ ダメですフェイト！ それは今の状態で使ってはっ！！】

そんな制止の声を振り切り、フェイトは目を閉じて手にしたデバイスを掲げて何かの詠唱を始めた。それにランサーは面白そうに口

元を歪め、槍を地面に突き立てる。その行動にアルフとリニスの表情が驚きに変わる。

何するかしらねえが、面白え。見せてみる、フェイトオ！！

咆哮。それをまるで意にも介さず、フェイトは詠唱を続ける。それは今の彼女では到底出来ない大魔法。フォトンランサーファランクスシフト。彼女の使える魔法でも最大の威力を誇るものだが、使用条件があつた。

それは万全の状態である事。無論、今の彼女が万全であろうはずがない。身に纏ったバリアジャケットは傷付き、魔力も三分の一程消費している。そんな状態でフェイトにとつての大魔法を使えばどうなるか。それを思い、リニスとアルフが同時に息を呑む。

「フェイトっ!?!」

その視線の先で詠唱を続けるフェイトが一瞬よろめく。それを支えようと動くアルフとリニスだったが、それが叶う事はなかった。ランサーの視線がそれを踏み止まらせたからだ。手を出すな。そう告げる眼差しで二人を睨みつけるランサー。

そのあまりの気迫に二人は微動だに出来ない。そんな中、フェイトは何とか詠唱を終え、その名を告げる。それに自分のありつただけの願いを込めて。

「フォトンランサー、ファランクスシフト……ファイア！」

それは雷光の雨。ランサーを撃ち抜かんと殺到するフォトンランサーの群れ。それをフェイトは必死に見据えていた。ランサーへ届け。そんな気持ち胸にして。ランサー目掛け降り注ぐ魔力の槍。それが次々とランサーへ殺到し、その姿を隠していく。

やがて、舞い上がった煙が晴れて行き、ゆらりと人影が現れた時、フェイトは絶望した。全身に傷を負っていたなら良かった。せめてかすり傷でもあれば、フェイトはまだ希望を持てただろう。

だが、無情にも現れたランサーは無傷だった。彼は、顔面蒼白となったフェイトとアルフ、言葉を失うリニスを見やってその手にした槍を振り、にやりと笑みを浮かべて

「やるじゃねえか」

そう言った。どこか嬉しそうに、でも悔しそうに。

「え……？」

困惑するフェイトと同じような表情のアルフ。ただ、リニスはランサーの表情の意味を悟った。

(槍を使ったから……ですね)

「俺は避け切るつもりだったが、一発だけかすりそうになったもんでな」

槍を肩に担ぎ直し、苦笑い。それでフェイトも理解したのか、その顔に喜びが浮かんでいた。アルフだけは未だに事情を理解出来ないのか、やや難しい顔をしている。

「じゃ、じゃあ……」

「おう。合格にしてやらあ」

「「やったあ〜！」」

からからと笑うランサー。その言葉がよほど嬉しかったのか、アルフはフェイトを抱き上げながら喜んでいる。フェイトも笑顔を浮かべていた。その光景を横目に、リニスはゆっくりランサーへ近づく。それに気付き、ランサーはいつもの笑みを浮かべた。

「何だ？」

「優しいですね」

そのリニスの言葉にランサーは驚きもせず答えた。

「へ、そんなんじゃないよ」

そう答えるランサーはどこか楽しそうだ。リニスはそんなランサーに自然と笑みを浮かべる。ランサーが告げた合格との意味。それは、フェイト達がランサーに戦い方を教えてもらえるかどうかだ。

無論、ランサーは初めからそのつもりではあったが、リニスがそれに待ったをかけたのだ。出来ればフェイト達の実力を知ってからにしてほしいと。そこには、ランサーとの実力差を確かに行いたいとの考えがあった。

それを悟ったのか、ランサーはこの試合を行った。結果として合格になったが、本来はランサーに一撃当てなければ合格とにならないにも関わらず、ランサーは当てていないフェイト達を合格させた。

それを指してのリニスの優しい発言。だが、それにランサーはこり返した。最初から合格させるつもりではあった。しかし、それは自分達の全力が通じない相手がいると教えてからだ。その意

味で、あの魔法は締め括りとして丁度良かったとも。

そんなランサーにリニスは嬉しそうに笑みを見せた。それと同時にある決意を固める。それは今後のフェイト達を思つての事。そして、考えられる最悪を避けるための行動だった……

あの訓練の後、フェイトは念のために休む事になり、アルフはその付き添いも兼ねて傍にいる事を選んだ。それを好機と捉えたりニスは、ランサーへ話があるとデバイスルームへ案内した。

「へえ、中々面白いな」

初めて見るものに興味を示しながら、ランサーは視線を動かしている。それをリニスは可笑しそうに笑う。先程の戦闘で見せた表情とまるで別人だったからだ。戦士でありながら少年。そんな表現がぴったりの存在。それがランサーなのだ。

「で、話つてのは何なんだ？」

「……私がフェイト用のデバイスを作っている事は話しましたね？」

リニスの言葉にランサーは頷く。今日の戦闘で使つたものもリニスが試作したものだからだ。もっとも、リニスからすればあれは未完成。完成すれば、今よりもフェイトの事を支える事が出来るはずと彼女は断言していたのだ。

「それが私にプレシアが与えた最後の指示。おそらくそれが終われ

ば……」

私は役目を終え、消えるでしょう。そうリニスは告げた。ランサーは僅かに驚きを見せるが、それもすぐに消える。リニスがまだ何かを伝えたそうだったからだ。

ランサーの視線にリニスは意を決して語り出す。ここからは決してフェイト達には言わないでほしいと前置いて。そこからリニスが語ったのは、プレシアの目的とフェイトの秘密に関わる全てだった。その内容は、ランサーにとっても衝撃だった。

プレシアには娘がいた。名をアリシア。夫を亡くし、女手一つで育てていたのだが、ある時プレシアの行っていた研究実験が事故を起こし、大惨事を引き起こしてしまった。

そして、それに愛娘であるアリシアも巻き込まれ、覚める事のない眠りについたのだ。だが、プレシアはその現実を受け入れなかった。愛娘を生き返らせるために様々な生命工学や研究を調べ、模索し、実験を繰り返したのだ。

「例えば、あの時にプレシアも死んでしまったのかも知れません」

リニスはそう言って話を戻す。その一つである『Project Fate』に目をつけ、アリシアの記憶や外見などを完全に模倣した存在を作り出したのだ。しかし、それもアリシアには成り得なかった。そのアリシアと為り得なかった存在。それがフェイトなのだ。リニスは告げた。

「結局プレシアは現存の技術に望みを持てなくなつたようです。今は失われた超技術の象徴アルハザードを追い求めています」

おそらく、フェイトはそのために利用され、捨てられるでしょう。



それだけ告げ、リニスはランサーを見据える。その目は、貴方はどう思いますかと問うていた。その視線にランサーは何でもない事のように言い切った。

関係ねえ。

その答えに絶句するリニス。ランサーは続けてこう言った。アリアがどうのプレシアがどうのなんて興味ない。自分がすべきはただ一つ。フェイトを守り、立ちほだかるモノを全て突き穿つのみだと。

その言葉にリニスは安堵と悲しみの感情を同時に抱いた。この男ならフェイトだけでなく、プレシアも助けてくれるのではないか。そんな期待があったからだ。

しかしそれは、今打ち砕かれた。ランサーはフェイトは助けても、プレシアは助けない。そう思い、俯くりニス。それを見てランサーはただ、と続けた。リニスがその声に顔を上げてランサーの顔を見る。

「あの女に、フェイトの頑張りを認めさせなきゃ癪だしな。だから、ま……」

簡単には死なせねえよ。そうランサーはリニスに告げた。その顔は普段の人懐っこいものではなく、真剣な漢の顔。そこに込められたのは、戦士としての誓い。決してこのままにはしない。

そんな強い気持ちを感じさせるその眼差しにリニスは見惚れた。そんなリニスの横を通り過ぎ、ランサーはドアの前で立ち止まる。

「それに、お前も消させやしねえ。何せお前は……」

良い女だからな。背中越しにそう言っただけで部屋を出て行くランサー。部屋に一人残されたリニスは、流れる涙もそのままにただ感謝していた。ランサーを遣わせてくれた存在に、神と呼ばれる存在に初めてリニスは感謝したのだ。

(本当にありがとうございます。ランサーと引き合わせて頂いて。フェイトやアルフと出会えて。プレシアとアリシアに助けてもらえて)

これまでの全てを感謝するように、リニスは涙を流しながら祈り続けていた。ランサーがテストアロツサ親子を助け、守り抜いてくれる事を心から信じながら……

リニスと別れたランサーは、ある考えを持ってプレシアの元へと向かっていった。リニスとの約束を果たすために。そして、フェイトの頑張りを無駄にしないためにも。

長い通路を走り、ようやく目的の場所に辿り着いたランサー。そしてその扉を勢い良く開け放つと、躊躇う事なく中へと足を踏み入れていく。そこにいる女性と話をするために。

「……何の用？」

「あなたに良い話を持ってきた」

「良い話……？」

突然の来訪者に怪訝な顔を見せたプレシアだったが、ランサーの言葉に僅かだが興味を示す。それを食いついたと言わんばかりに思い、ランサーは告げた。先程リニスから聞いた話を。そして最後にこう付け加えた。

「で、仮にアリシアが生き返るとして、あんたは今のままでいいのか？」

「……どう言う事？」

「例えばだ。せっかくアルハザードとやらに行く方法が見つかったも、今のあんたじゃただで済まないだろ？」

ランサーの指摘にプレシアの表情が僅かに変わる。実際失われた世界と呼ばれるアルハザードへ行く際、何が起きるかはまったく分からないのだ。ランサーの指摘通り、そこへ行くための手段が体に強い負担を強いるとすれば辿り着く前に死んでしまってもおかしくないのだから。

そんな事を考え、やや顔を曇らせるプレシアへ更にランサーは続ける。術があっても、当の本人が耐え切れないのでは意味がない。だから、今は自分の体を労わる事が必要だと。

それにプレシアが何か反論しようとして、出来なかった。ランサーが床に何か文字のようなものを刻んだその瞬間、プレシアは体が少し軽くなった感じを受けたからだ。

「力を象徴する『太陽』のルーンを刻んだ」

「……すごいわね」

ランサーはそう告げ、プレシアに視線で訴える。体の調子はどうか。それを感じ取って答えるプレシアは、いつもの表情ではあったがその声には驚きが若干含まれていた。

それを理解し、ランサーはプレシアを見つめ続けた。ここからが本番だと思つて。今、プレシアは自身の知らぬ力に感心している。おそらくそれを使った自分の事を使える奴だと考え出しているはずだ。

「せつかく娘が生き返つても、母親にすぐ死なれちゃ救われねえ。だから、俺に考えがある」

「何かしら」

今までと違つて返事が早い。そう思うも、ランサーは今までと同じような態度を貫く。

「おっと、教えてやってもいいが条件がある」

「……言つてごらんさい」

ここだ。そうランサーは感じ、獰猛な表情で告げた。

リニスをくれ。

その瞬間、プレシアの表情が変わつた。何故そんな事を言い出すのか分からない。そんな理解に苦しむ顔だ。室内に少しだが沈黙が訪れる。だが、プレシアとしてもランサーの考えに強い興味を抱いている。

故にその内容次第では、使い魔であるリニスを与えるくらい構わないか。そう判断し、彼女は内心の気持ちを微塵も出さずに冷淡な

声で答えを告げた。

「……話次第ね」

「そうかい。ならここで終わりだ。精々娘を泣かすんだな」

あっさりとしたランサーの一言にプレシアの余裕が消えた。不治の病と言われている自分の体を文字を刻んだだけで症状を軽くした。その事実がプレシアにランサーの重要性を訴える。

アルハザードに近づく術を知っているかも知れない。そんな期待を抱かせるにはランサーの行為は十分だったのだから。だから、彼女に珍しく焦りの色が生まれる。ランサーが再度話を持ちかけてくるとは思えなかったからだ。

「っ?! 待ちなさい! ……いいわ。好きにきなさい」

少しも未練はないとばかりに、足早に立ち去ろうとしていたランサーをプレシアは引き止めた。その言葉に含まれた焦りに、ランサーは自分の賭けが成功した事を悟った。

「俺に無断で勝手に消したりしねえだろうな」

「そこまで聞いているのね。ええ、しないと誓いましょう」

ランサーの鋭い視線に微かに息を呑むプレシアだが、それでも平然と言葉を返せるのは重ねた年齢の為せる技か。その彼女の返答に満足そうに頷き、ランサーは自分の賭けが上手くいった事を喜んだ。

そんな彼を眺め、プレシアが聞こえるか聞こえないか程度の声である事を呟いた。それは、彼がプレシアと初めて会った際の出来事を思い出したからだ。



そして、それが思いもよらぬ結果への布石になっていく……はずで  
す。

## とある一日(Y&amp;P.C)

「ここがミッドチルダですか……」

「うん……」

キャスターの感心するような言葉にユーノも呆気に取られるような声を返す。今、二人はミッドチルダの転送ポートにいた。管理世界で一番の賑わいを誇るだろう世界。そこを一度見てみたいとキャスターが言い出した事がその原因だ。

スクライアの者達に許可を取り、ユーノはキャスターと共に覚えただばかりの転送魔法を使ってここへ来たのだ。周囲に行く人々はいかにも初めて来ましたといった雰囲気の間二人を見て、微笑む者や軽く馬鹿にするような笑みを浮かべる者と反応は様々だ。

「とりあえず動きましょう、マスター」

「え？ あ、ああ。そうだね」

並び立つ高層ビルを見つめていたユーノを現実へ引き戻すキャスター。そんな彼を微笑ましく思いながら、キャスターはその手を繋いだ。

「キャスター？」

「これだけ人が多いとはくれるかもしれませんが、なので、こうしましょうか」

キャスターの言葉にユーノは周囲へ視線を動かした。今まで見た



事がない程の人が動いている。確かにキャスターの言う通り、下手をすればはぐれてしまうだろう。そう判断し、ユーノは握られた手を嬉しく思っ握り返す。

「みたいだ。キャスター、ありがとう」

「どういたしまして。でも、これぐらいでお礼を言われてると少し照れちゃいますね」

「そんな風には見えないけどなあ……」

「ムッ！ 私の言う事を疑うんですか、マスター」

歩きながらそんな会話を交わす二人。その後姿はどこから見ても仲の良い姉弟だ。まあ、キャスターが狐耳と尻尾を出しているので、使い魔然としているのでそう思われないかもれないが、ユーノの感覚としては彼女は姉にも似た存在と言えるので間違いはない。

見る物聞く物が初めて尽くしのキャスターと知識はあっても見るのは初めてのユーノ。ミッドチルダという都会で過ごす二人の時間は、こうして始まったのだった……

二人がまず訪れたのはユーノが通う事になる魔法学院。実は魔法の才能をユーノに見い出した一族の長は、外出のついでに入学手続きをしておけと言っていたのだ。既に細々とした事は終わっていたようで、ユーノはただ言われた通りにサインをしたりするだけ。

最後に軽い説明を受け、彼の初登校とも言える事は終わった。思

ついていたよりも簡単に事が終わったため、どこか拍子抜けしているユーノだったが、キャスターはそんな彼へ段取り自体はもう終わっていたからだろうと告げた。

きつとマスターが来た時点でほとんど手続きは終わっていたんでしよう。で、後はマスターが署名するだけで良かったんです。

そっか。だから族長も誰でも出来るって言うってたんだ。

公園で談笑する二人。ここでこれからどうするかを相談中なのだ。まあ、相談も何もお互いにミッドチルダに関しては無知に近いので、先程の学院で簡単な観光案内に近い説明を聞き、一応と小さな冊子をもらってそれを眺めてはいたのだが。

とはいえ、ミッドは元々観光地ではない。そのため、案内に書かれているのもベルカ自治区や郊外の方などの都心から離れた場所ばかり。二人としてはクラナガンを見てみたかったので、どうしようかと思案中。

「やっぱり観光となると郊外ばかりだね」

「ですねえ。ま、普通は景色や食べ物などを楽しむものですから」

「じゃ、郊外へ行く？」

そのユーノの問いかけにキャスターはやや困った表情を見せた。郊外へ行くのは構わない。だが、それには時間と何よりお金が掛かる。歩いて行くには距離がありすぎるのだ。

（マスターが渡してもらった資金はそこまで多くありませんし、散財はさせたくないですからね……）

それを正直に言えば、優しいユーノは気にするなと返すだろう。それではいけない。それにキャスターとしては、彼と一緒にいるだけで楽しいのだから。そう考え、ならばとキャスターはユーノへ告げた。

「それもいいですけど、今日はクラナガンの街を見て回りましょう。正直、郊外の景色はスクライアで見る物と大差ない気がしますし」

「……そうかも。じゃ、そうと決めれば早速行こう！」

キャスターの答えに納得し、ユーノは席を立つとその手を普通に彼女と繋いで歩き出す。その行動にキャスターは小さく笑みを零すと、ユーノに合わせるように動き出すのだった……

あの後、街に出た二人だったが、ユーノの予想に反してはしゃいだのはキャスターの方が早かった。元々色々な事に興味を持ち易い彼女。故に目に映る物全てに反応を示したのだ。

だが、それが自分への配慮だとユーノは何となくだが気付いていた。周囲にはキャスターは使い魔と見られている。主人である自分がおのぼりさんと見られないように、自身が興味を抱きそうな物へ彼女が真っ先に反応してくれているのだと。

「あ、見てくださいマスター。あんなに大きなモニターが壁に埋め込まれていますよ」

「ホントだ。凄いなあ……」

「おっと、あつちにあるのは何かのお店のようです。おおっ！車を改造しての移動式とは……理に適った事を考えましたねえ」

「アイスクリームだね。折角だから買っついでいこうか、キャスター」

「さすがですマスター！女心を分かってますね。甘い物は大抵女性の好物ですから。ここ、テストに出ますよ」

そんなキャスターの言葉にユーノは苦笑。一体何のテストだろうと思っただけではない。後ろの尻尾が上機嫌の犬のように動いていたからだ。どうやら、少なくとも目の前の相手は甘味が好きらしい。そう判断してユーノは記憶する。

今や家族となった姉代わりの存在の好みをまた一つ。こうして少しずつではあるが、キャスターの事を知っていくユーノ。対するキャスターはユーノの事をほとんど言っていない程知っていた。

何せ、彼女は愛らしい外見の女性。男の扱いも慣れたものだし、ユーノから家族のように思っていると説明されたキャスターに出来ない事はなかった。

スクライアの者達からユーノの事を聞き出す事。それにもう何の障害も無くなっていたのだから。こうして自身の事を大半知られたユーノとあまり知られていないキャスターという構図は出来上がった。

ちなみにユーノがキャスターの事をもっと教えてと頼んだ際、彼女は恥ずかしそうにこう返した。

女の秘密を知りたいって言うのは理解出来ますけど、もう少

し時間を置いてくれませんか？ 具体的には、後十年ぐらい。

えっと、それは逆に具体的過ぎない？

理由はよく分からないが、何となくその時のキャスターの目が危ない光を宿している気がして、ユーノはやや怯えるような声を返したのだ。そんな事を今でも思い出せるユーノだったが、それでもこう思うのだ。

（キャスターって、本当に僕を大事にしてくれるんだなあ）

周囲からユーノが見下されたり、或いは侮られたりしないように。そんな風に思ってくれているキャスター。その気持ちを感じ取り、ユーノは嬉しく思いながら歩く。既にキャスターは店先でどのアイスを頼むかを思案中のようで、楽しそうに色とりどりのアイスを眺めていた。

「ね、ね、マスター。どれも美味しそうですよ。迷っちゃいますねえ」

「迷ってるならダブルにすればいいよ」

「ダブル？ 二つ頼めばいいって事ですか？」

「違うよ。二段重ねにしてもらうんだ」

ユーノは苦笑するように店員へミントとチョコのダブルと注文した。それに笑みを返し、手馴れた手つきで店員が見事に二つのアイスを一つのコーンの上に載せた。

それをやや食い入るように見つめるキャスター。それをユーノは

受け取り、代金を渡す。そしてキャスターへ視線でこれがダブルだと告げた。それに頷きを返し、ならばとキャスターも店員へ注文した。

じゃ、じゃ！ 私はストロベリーとバニラでお願いしますっ！

その様子がいつもと違って本当に子供のように見えて、ユーノは少し呆気にとられるもすぐに嬉しそうな笑みを浮かべた。

（キャスター、もしかして今は素直な反応を見せてるんじゃないかな？）

そうだとすると意外な一面を見れたと思ってユーノは笑う。それを不思議に思いながら、キャスターは手にしたアイスへ舌を伸ばす。それを店員がやや苦笑気味に眺め、ユーノへ代金を払ってくれようように告げたところで彼の笑みは終わりを迎えるのだった……

食べ歩きは行儀が悪い。そう思ったユーノは、店の近くにあったベンチに座ってアイスを食べていた。キャスターとしては別にそこまで煩い事を言うつもりはなかったが、ユーノ自身が決めた事ならと何も言わず従った。

先程から、少し興味本位でユーノへ見えるようにアイスを舐めているキャスター。それがどこか卑猥な印象を受けるのは、ユーノをからかっているつもりなのだろうか。だが、生憎この時のユーノにそんな知識は当然皆無なため……

キャスター、そんな変な食べ方してると溶けちゃうよ？

不思議そうにそう彼女へ告げるだけ。それにキャスターはやはりかと小さく呟く。

「今のマスターが理解したらちよつと不安になってましたけど、やっぱり分かりませんよねえ……」

「えつと……ごめん」

「あ、謝る事はないですよ。私としては、マスターがこっちは完全に歳相応と分かったので色々と楽しみが出来ました」

私がしつかりと教えてあげないと。そう言つて気合を入れるキャスター。それが何故かあまり良い意味ではない気がして、ユーノはやや不安そうに彼女を見つめた。そして二人はアイスを食べ終えた後、その場を後にする。

街中を再び歩くユーノとキャスター。しかし、その会話はもう浮かれたものではなくなっていた。話題にしているのが、ユーノが来年度から通う事になる魔法学院に関してだったからだ。

キャスターは使い魔扱い。無論、学院へ連れて行く事は出来ない。そのため彼女は、ユーノが学院へ通う間しばらく会えなくなる。それをどうにかして解決する術はないかと考えていたのだ。

ユーノとしては、キャスターのその気持ちだけで嬉しかった。正直一人で心細いとの思いはある。それでも成長を期待し、帰りを待つてくれる相手がいるのは、何よりの励みとなると考えていたのだ。

「むむむ……やはり私はお留守番しか道はないですか」

「ごめんね、キャスター。長期休みになったら会いに戻るよ」

「それは嬉しいんですけどお……こうして過ごせるのが当分お預けになるのが……」

「……入学すればそうなるもんね。でも、まだ三ヶ月ぐらい先だから」

キャスターの寂しそうな声にユーノも同じような声を出すものの、最後は明るい声を出してそれを振り払おうとする。その空元気にキャスターが小さく微笑み、繋いでいる手を少し強めに握る。

「そうですね！　なら、それまでに魔術のお勉強を可能なだけしておきましょう」

「うん、お願い」

笑顔を向け合う二人。それを少し強くなってきた日差しが照らす。その光を受けながら、二人はクラナガンの街を歩く。あまりスクライアではお目にかからない最新機器などを眺めたり、本屋ではキャスターが日本語の本を見つけて少しだけ喜びを見せたり、そこから派生して日本がある地球の存在を確認し、いつか二人で行ってみる事を約束したりと、様々な出来事を経験して。

日差しが色を変えて、やや物悲しい雰囲気を漂わせるようになって、ユーノとキャスターは転送ポートへとやってきていた。半日近く歩き続けたが、元々遺跡発掘などを生業としているスクライア一族のユーノにとっては、そこまで肉体的には大した事はなかった。精神面はそうでもなかったが



キャスターの方もそれは同じ。さすがに疲れたのだ。とはいえ、それはユーノと同じく精神面だったが。異世界の、しかも大都会ともあり、キャスターとしては予想以上に珍しい物が多かったのだ。

（意外と疲れましたねえ。でも、収穫もありましたし……もし行けるのなら日本へ行って確かめたい事が出来ました）

（キャスター、軽く疲れてるみたい。これは帰ったら、揃ってすぐ寝ちやうかも……）

互いにややお疲れの顔をしている二人。それでも、視線を動かして相手を見るなり笑みを返す。それは、今日の時間がとても楽しかったという証。その気持ちを現すように、繋いだ手へ優しく力を込めるキャスター。それに気付いて、ユーノも嬉しく思っけて力を込める。

感じ合う温もりに笑みを深めるユーノ。キャスターはそんな彼を見て、姉の如き雰囲気です小さく頷いて歩き出す。

帰ったら汗を流して早く寝ましようね、マスター。

そうしたいけど……それまで起きていられるかなあ……

ふふっ……じゃ、私と一緒に汗を流しましょうか？

そ、それは遠慮しておくよ。うん、頑張っけて起きておく。

キャスターの提案に少しだけ顔を赤くして慌てるユーノ。そんな彼に表面上は不満そうにしながらも、内心で微笑むキャスター。そ



とある一日（K&Amp;A）

「着いたぞ。ここがグレーム提督の家だ」

「へえ、凄いね。一瞬で着いちゃうんだ」

「そ。と言つても、転送魔法は座標がちゃんと分かってないと安心して使えないからね。どこにでも簡単に行けるって訳じゃないからさ」

エイミイの言葉にアルクエイドが納得するように頷いた。彼女としてはエイミイが言った感覚で捉えていたからだ。相変わらず自分の考えを理解するのが早いと思いつつ、アルクエイドは視線を周囲へ動かした。

周囲に民家はなく、少し離れた位置にある家らしい。庭もそれに広く、中々広い一軒家。彼女が抱いたグレーム邸の感想はそんなものだった。

あれから二ヶ月程が経ち、クロノは長期休暇になったのを利用して、アルクエイドを連れて一度地球へやってきたのだ。目的は魔術の存在を探るためと、アルクエイドの一度行ってみたいと言った街へ出かけるためだ。

そのために彼はもう一人の父とも呼べる”ギル・グレーム”提督へ許可を得て、ここイギリスにある彼の自宅庭に設置された転送ポートを利用してもらったのだ。

「それにしても……」

「ん？」

クロノのため息混じりの言葉に揃って視線を動かす二人の女性。

「本当についてくるとは思わなかったぞ」

クロノはそう言つてエイミーを見つめた。その視線に彼女はあははと軽く笑い、アルクエイドへ視線を向ける。それにアルクエイドは一瞬不思議そうな表情を返すも、エイミーがそこでウインクすると何かを理解したのか楽しそうに頷いてみせた。

「私と一緒に来てつてお願いしたんだよ。ほら、クロノは見知らずの相手と話すの不得意そうだし、私はちよつと世間知らずでしょ？

エイミーなら人懐っこいし、機転が利きそうだから」

「そーそー。それにあたしはアルクの友達だからね」

アルクエイドのフォローに笑顔で続くエイミー。あの日からアルクエイドと仲良くなったエイミーは、彼女をアルクという愛称で呼ぶ事にした。アルクエイド自身もそんな事は初めてだったため、喜んでそれを受け入れたのだ。

そんな二人を見つめ、クロノはやや疲れた顔をする。よくもここまで仲良くなったものだと思つて痛感していたのだ。しかし、即座に立ち直つて反論する事も忘れない。

つまり君達は、僕を役立たずと言いたいんだな？

その声に微かな怒りが混ざっていると気付き、アルクエイドとエイミーは揃つて苦笑するもすぐに謝つた。そんなつもりはないと言つて。無論クロノも本心から二人がそう考えていると思つていないし、二人も彼が本当に怒つているとは思っていない。

だが、男としての面子を軽く潰した形になったのは事実。故に謝罪をしたのだ。クロノへ少し言い方を考えるべきだったとの思いを告げて。それを理解し、クロノもそれを長く引っ張る事はしなかった。彼も立场上怒りを見せただけで、そこまで気にはしていなかったのだ。

それでも、やはりどこか歳相応の反応を見せてしまった。そんな彼の少年らしさに二人が内心で微笑んでいると知りつつもだ。

「まずは時計塔とやらへ行こう。そこに何か手がかりがあるはずだ」  
「頼むね、クロノ。魔術師って結構性質が悪いからさ。上手く隠れてると思うんだ」

「ま、何とかなるでしょ」

「分かった。それとエイミィ、緊張しないのは構わないが気を抜き過ぎないでくれよ」

揃って歩き出す三人。向かうは一路ロンドン。時に新暦六十五年の事。地球では皇月と呼ばれる時期になったばかりだった……

時刻は昼を過ぎ、日は高く昇っていた。その日差しを浴びながら、クロノ達はロンドンにある一軒のオープンカフェで休んでいた。

「見事に何にも無かったねえ」

「そうだな。魔力反応はおろか、それらしい人物もいなかった」

気楽に笑うエイミーとやや思案顔のクロノ。その視線は揃ってアルクエイドへ向けられている。その相手であるアルクエイドはアイステイーを飲みながら空を見上げていた。

そう、彼女はもう確信したのだ。ここには魔術師はいないと。真祖である彼女の感覚でも、ここからは魔術的なものを一切感知出来ないのがその理由。今はそれをどうクロノ達へ切り出すかを考えていたのだ。

(どうしよっかな？ まだ絶対って訳じゃないけど、多分そうだよな。他にも魔術師がいる場所に心当たりがない訳じゃないけど……)

そう思い視線を戻すアルクエイド。そこには彼女の言葉を待つクロノとエイミーがいる。

「あのね？ 多分だけど……もう、この地球に魔術師はいないと思う」

「……そう、か。いや、そうじゃないかと思ったんだ。何せ、君は時計塔へ近付くにつれて不思議そうな表情をしていたし、今もどこか違和感を感じているように見えた」

「あー……そっか。アルクは色々凄いもんね。その関係であたし達には分からない事が分かったんだ」

アルクエイドの言葉から大体の事情を理解する二人。その頭の回転に感心しつつ、アルクエイドは肯定するように頷いてみせた。ちなみに彼女の体質についての詳しい話はクロノしか知らない。

「エイミーとリンディは彼から”生まれながらに普通とは違う特殊な体質”とだけ説明した。その中に魔力反応を感知する事も含めてエイミーは考えたのだ。」

「まあね。後は……もしかして、私が生きてた時代とは違う時代に来ちゃったのかも」

アルクエイドはそう明るくふざけ半分で告げた。すると、それを聞いたクロノが至って冷静な声でこう返し、彼女を驚かせた。

もしくは違う地球かもしれない、か？

その声はただ思った事を素直に問いかけただけに聞こえた。エイミーはやや呆気にとられ、アルクエイドはクロノを驚いたまま見つめていた。その視線を受け止めながら、クロノは手にしたアイスティーを一口飲んで言葉を続けた。

「君の話聞いた時からどこかで思っていたんだ。君の知る地球と僕の知る地球は本当に同じ場所なのかと」

彼はアルクエイドと出会ったあの日にその正体を聞いた時から思っていたのだ。地球の平行世界から来た存在ではないか、と。その根拠は何と言っても魔術というシステム。

秘匿されているとはいえ、そんなものが存在していれば魔力反応などで分かる。それに、魔術を使うにも関らず魔力保有者が未だに珍しい地球。そこから考えても妙としか言いようが無かったのだ。

だからクロノは確かめに来たのだ。魔術などの話を自分とエイミー、それにリンディだけに止めて。そしてどうやらその推測が正しいらしいとクロノは感じていた。管理外世界である地球。そこに存

在するはずの魔術と呼ばれる力。それは自分達の知る地球にはないと。

しかし、それはクロノへ一つの問題をもたらす。そう、アルクエイドの事だ。平行世界への行き来など見た事もなければ聞いた事さえない。その存在自体怪しまれていたのだから。

「……アルクエイド、君の住んでいた地球へ帰る方法なんだが」

言い難いが、きっと相手もそれを既に理解しているはず。そう判断し、クロノはやや真剣な声を出す。今から告げる事は非常に重いと考えながら。だが、そんな彼の気持ちを受け止める前にアルクエイドはあっさりこう告げた。

ああ、それなら大丈夫。私、その気になれば帰る事出来るから。

……………なんだって？

あまりの衝撃発言にさすがのクロノも耳を疑った。今、目の前の相手は何と言ったのか。そんな気持ちが表情にありありと浮かんでいる。エイミイなどは既に話が見えない場所へ行ったからか、いつもの調子でアイステイーを飲んでからアルクエイドへ問いかけた。

「帰る事が出来るってどうやって？」

「うんと……私、一言で言うなら”世界”と繋がる事が出来るんだ。その”世界”の反応を辿ればきっと帰れるはずだから」

「詳しい事を聞くと頭痛がしそうだが、詰まる所、君が僕へ滞在を希望したのは旅行のようなものか？」



「そんなとこ」

呆れと怒りと悲しみと、とにかく色々な感情を込めた声でクロノはそう問いかけた。それにアルクエイドがあっさりとした声を返したので、力無く項垂れる。それでもアルクエイドへ文句を言わないのは彼自身理解したからだ。勝手に自分が勘違いをしていたと。

アルクエイドは帰る手段に心当たりがあつた。だからこそ余裕があつたのだろう。あの時見せた寂しさのようなものは、きつと望まぬ場所に来た不運を嘆いたようなものだ。そう彼は結論付けた。

しかし、そこでふと気付く事があつた。それはアルクエイドが言った言葉。帰れるはず。それは断言ではなく予想。そこからクロノはある事に思い当たる。そのために顔を上げて彼女へ視線を向けた。

「少しいいか、アルクエイド。君は帰る方法に心当たりがあるだけで、それが確かかまでは分からないんじゃないか？」

その問いかけにアルクエイドは少しだけ意外そうな顔をして、すぐに嬉しそうに笑ってみせた。

「よく気付いたね。そうだよ。絶対とは言えないけど、可能性は高いだろうから心配しないでいいよ」

そんな風にどこまでも明るくあっさりと返すアルクエイド。だが、そんな彼女へ待ったをかける者がいた。

「そうなんだ。でも、駄目だよアルク。あたしは絶対大丈夫ってならないと行かせたくない。だって、アルクの方法って平行世界を渡るんだよね？ そんな大きな事をするのに、アルク自身も不安要素

がある時点であたしは反対。それに、それでアルクに何かあったら帰りを待つてる人も悲しむ事になるんだからね」

エイミイはアルクエイドの言葉に対してそう言い切った。それはいつもの声だが、どこか有無を言わせない力が込められている。それは友人となつた相手への心配。更にアルクエイドを待つている者達の気持ちの代弁だった。

確かに会えないのは寂しいが、それでも危険な方法を使つてまで戻ってきて欲しいとは思えない。確実な手段が見つかるまでは、安全に暮らしていて欲しいと思うだろう。エイミイは少なくとも自分ならばそう思うからこそ、アルクエイドへ言い切れたのだ。

（あたしだって大事な人がそうだとしたら、無理に帰ってこさせようとして何かあるよりも安全に戻ってこられるまで待つよって伝える事を選ぶし）

生きていればいつか会える。なら、少しでも危険性が有る内は簡単にさせる訳にはいかない。それがエイミイの考えだった。それを感じ取り、アルクエイドは呆気にとられていた。自分とエイミイは赤の他人。それにも関わらず、ここまで自分の事を思ってくれる事にそのお人好しさと純粹さにアルクエイドは心から笑った。それを聞いてクロノとエイミイは怒るでもなく、ただ黙ってそれを見つめた。分かっているのだ。何故彼女が笑っているのかを。

【アルクって、もしかしてあまり誰かから心配された事ないのかな？】

【かもしれないな。周囲とは違う力を持ってしまったようなものだ。それで疎まれていたのかもしれない】

アルクエイドの事を知っているクロノは、エイミーの問いかけに迫害されていた可能性を考えて答えた。明るく笑みを絶やさないアルクエイド。その影にはどれ程の闇があるのか。それをクロノは思い、一人息を吐いた。

元の世界には彼女を待っている相手がいるのだろう。だが、同じように待っている苦労や試練もあるのだろう。彼女と知り合った自分は、それを乗り越える手助けをしてやりたい。しかしそれは出来ない。そう考え、彼は無力感を感じていた。

(アルクエイドの行く道は彼女だけで進む道だ。それは分かっている。それでも、こうして知り合ったんだ。何かの力にはなってやりたい。彼女の事を知った以上は余計に……)

そう思うも、自分からそれを言い出す事は出来ない。アルクエイドはそれを喜ぶだろうが、きっと断るだろうと予想出来たからだ。だから、クロノは思うだけにする。それでも何か力になれるのなら、出来るだけ手を貸そうとは決めていたが。

そんな事を思うクロノの前では、アルクエイドが笑うのを止めて息を吐いていた。エイミーはそんな彼女に楽しそうな表情を見せている。アルクエイドがいい笑顔を浮かべていたからだ。

「あー、うん。やっぱりエイミーもクロノと同じだね。じゃ、とりあえずどうしても帰りたいって思うまでは帰らない事にするよ。で、その時は協力してくれると助かるかな」

「仕方ないなあ。じゃ、その時は友人としても執務官補としても手を貸すから」

「僕もだ。仮にもマスターらしいしな」

「お願いね。頼りにしちゃうから」

そこで会話も終わり、三人は店を出た。エイミイの提案で買い物をする事になったのだ。もう魔術がない事は確定に近い。次に向かうのは、それでもアルクエイドが行ってみたいと言う日本。そこへ行くための準備と題しての行動だ。

それが建前と知っているクロノだったが、それでもエイミイだけでなくアルクエイドまで乗り気となれば止める事は出来なかった。結局女性二人に連れられるまま、あちこちの店を回るはめになるのだった……

日も暮れ、辺りを夕闇が包む。クロノはグラム邸のリビングから外の景色を眺めていた。当初はホテルに泊まろうと考えていた彼だったが、それを見越したグラムが転送ポートとしてだけではなく、自宅を宿泊に使ってくれて構わないと気を遣ったのだ。

クロノはそれをすまなく思いつつも感謝を述べ、現状に至る。エイミイはキッチンで料理中。アルクエイドもその手伝いをしているが、その様子はさながら子供が初めて手伝っているような状況だ。

「ね、エイミイ。これはどうするの？」

「ん？ あ、それはね……」

楽しそうな二人へ視線を動かし、クロノは自身も気付かぬうちに小さく笑った。姉妹のように見えたからだろうか。それとも微笑ましく思えたからだろうか。どちらにせよ、クロノが浮かべた笑みは

優しいものだ。

あの買い物最後の最後を飾ったのは食料品店だった。それは、イギリスでの外食はあまりオススメ出来ないというリンディから忠告を受けたため。そう、かつて彼女は夫であるクライドと共にイギリスを訪れた事があった。

その目的は、長期休暇で自宅へ帰っていたグレアムに結婚式の仲人を頼むためだ。その際、二人で食べた昼食があまり美味しくなかったのだろう。故に彼女はクロノへその事を告げていたのだ。美味しい店があっても高いだろうから、出来る事なら自分で作った方がいいと。そこには、グレアム邸を使える事とエイミーが同行する事を見越したリンディの推理力があつた。

「なあ、僕は本当に手伝わないでもいいのか？」

「「「いいよー」」」

一度断られた申し出だが、やはりする事がないと思つてクロノは再度手伝いを申し出た。しかし、それに二人は即答で返す。それがどこか幼く聞こえ、クロノは小さく苦笑し「そうか」と返してソファへ向かつて動いた。

邪魔してはいけない気がしたのだ。女性二人での楽しい料理教室。そんな風に見えたからだろう。微かな寂しさを感じるも、クロノはそれでも静かにソファに座つて料理が出来るまで待つ事にした。

後ろの方から聞こえるエイミーとアルクエイドの楽しそうな声を聞きながら、彼は軽い暇潰しとして買った新聞を読み出す。それと同時に一人今後の事を考えていた。



らが動いたのはあの次元震があればこそ。今回はまじかると違う原因でジュエルシード事件が起きるので、ユーノは行方不明と言う訳ではありません。

これでクロノの無印への介入が変化します。それがどういう形になるかは無印開始をお楽しみに。

## 遭遇編その1

「いらっしゃいませ。二名様ですか？ ……では、こちらへ」

どこかぎこちない接客。その言葉遣いも少したどたどしい。それでも対応された側が笑顔なのは、相手が金髪の可愛い少女だからだろうか。案内し終わり立ち去ろうとした時も、頑張つてと声を掛けられている。

「は、はい。ありがとうございます」

戸惑いながらも笑顔で答える少女。それはエプロンを着けたセイバーだった。なのはが学校に通うようになり、時間を持て余したセイバー。そんな彼女へ桃子が翠屋の手伝いを持ちかけたのだ。

初めこそ「接客は……」と渋っていたセイバーだったが、桃子の提案した新作優先試食権を聞いて即座に合意。こうして、セイバーは翠屋で働き出したのだが……

「お姉さん」

「え……？ あ、はい！ 今行きます」

かつては王として多くの要人や人と接していたため、そこまで難しくないだろうと思っていたセイバー。だが、それが客商売ともなると話は別だと理解するのにさして時間は掛からなかった。

「すみません。注文いいですか？」

「し、少々お待ちください」



まだ二組しかいないのに既に困惑気味のセイバー。それを眺め、桃子と士郎は小さく苦笑するのだった……

朝の時間を終えて軽い休憩をもらったセイバーは、休憩室の椅子に座ってテーブルに突っ伏していた。そんな彼女を桃子と士郎は微笑ましく見つめる。

あの後もオーダー提供やお会計等、セイバーは戸惑いながらもそれらをこなし、無事に朝の時間を乗り切ったのだ。勿論、桃子や士郎の手助けだけでなく、お客さんの暖かい気持ちもあればこそだが。

（接客とは、ここまで疲れるものなのですね）

そう思いながら、セイバーが考えるのは相手をした客の事。皆、セイバーの事を微笑ましく見つめ、頑張つてと声を掛けてくれた。その一言がどれだけ自分は嬉しかったか。自分には向いていないと思っても、その一言で頑張ろうと言う気になった。

（私も、単純なのかも知れません）

どこか笑みを浮かべ、セイバーはそう思った。なのはが帰ってくるまでまだまだ時間がある。なのはに笑われないようにしなくては。セイバーはそう自分に言い聞かせて立ち上がる。

「シロウ殿。教えてほしい事があるのですが……」

少しの時間も無駄にすまい。そんな思いを胸にセイバーは店内へと戻る。一方、その頃なのはと言えば……

「ね、今日学校終わったらウチのお店に寄らない？」

「翠屋に？」

「でもいいの？」

場所は学校の屋上。いつものように昼食を三人仲良く食べているなのは達だったが、突然の彼女の提案にアリサとすずかはそう不思議そうに返す。何気ない弁当をつつきながらの雑談。その中でなのはの言葉は二人にとって意外なものだった。

なのはの家が自営業なのは二人も聞いていた。そして、そこが翠屋という人気店である事も知っている。海鳴では結構な有名店なのだ。だからなのか、あまりなのはも翠屋の事は話さない。自慢しか出来ないから、となのはは苦笑してその理由を二人へ告げていた。

そんななのはがわざわざ自分からお店の話をするのは珍しい。アリサとすずかはそう考え、なのはを見る。その視線の意味する事に気付き、なのははやや楽しそうな顔を見せて口を開いた。

「実はね、今日からセイバーが働いてるんだ」

「へえ、あんたの言った年上の友達が？」

「そうなんだ。あ、それで？」

「にやはは、うん。一人で行くと、何だかお客さんじゃないみたいで気が引けて……」

身内ではなくお客さんとして行きたい。そうなのは言った。それに二人も納得し下校時に寄り道する事で話は纏まった。それがセイバーにとって大きな出会いに繋がるとは知らずに……

「ありがとうございます。またお越し下さい」

笑みを浮かべ、カップルを見送るセイバー。お昼のピークも過ぎ、店内も落ち着きを取り戻し始め、セイバーも僅かだが息を吐く。初めこそ戸惑う事も多かったセイバーだったが、忙しくなるにつれ、そんな事もなくなっていった。

厳密にはそんな余裕がなくなったのだ。やって来る客、怒涛の如きオーダー、それらの洗礼を受け、否応なくセイバーは鍛えられた。習うより慣れるとはよく言ったもので、セイバーは持ち前の集中力で教えられた事を全て覚える事が出来たのだ。

「セイバー、少し休憩していいわよ」

「そうですね。分かりました」

桃子の言葉にセイバーはまた一息吐き、奥へと向かう。そんなセイバーを土郎と桃子は嬉しそうな笑みを浮かべて見つめる。予想以上だったのだ。今までの暮らしでセイバーの事はそれなりに二人も知っている。

だから、初日も自分達が支えれば問題なく終わるだろうと思っていたのだ。だが、蓋を開けてみればそれ以上の動きをセイバーはし

ていた。いや、しようと努力した。それを感じ取り、二人は笑みを浮かべたまま互いを見つめる。

「……すごいな」

「ええ。集中力は家の誰よりもあるわ」

お客さんの反応も上々だし、と笑う桃子。その言葉に土郎も頷き、呟く。男性客が増えるだろうと。それに桃子が当然よと答える。それに自信満々だなとばかりに視線を桃子へ向ける土郎に、彼女はウインクと共に言い切った。

私の自慢の娘だもの。

そう断言する桃子に土郎はただ笑うしかなかった。しかし、内心では彼もそう思っているので否定もしない。故に、静かに注文のコーヒーを淹れ始めるだけだった……

校門を出て、翠屋へ向かうなのは達。歩きながらの雑談も、内容は翠屋とセイバーに関するものばかり。何が一番のオススメなのか、どんな性格の人か。それになのは常に答え続けるのみで、話題を振る事が出来なかった。

そんな事を取りとめもなくしているうちに、目的の翠屋が見えてきた。その外観にアリサもすずかも一度足を止め一しきり眺める。落ち着いたと言うよりは、どこか洒落た雰囲気のお店構え。でも、決して若者向けかと言えばそうでもない。万人を受け入れるような温

かさも感じるのだ。

「あ、あれだよ」

「へへ、オシャレじゃない」

「うん。すごく良い雰囲気」

それを感じ、笑顔で誉めるアリサとすずか。友人二人に褒められ、なのはは照れくさそうに笑う。それを恥ずかしく思ったのか、なのはは急ぐように店のドアを開ける。

「いらっしゃ……あら？　なのはじゃない」

「えへ、来ちゃった」

「お邪魔します」

軽く驚く桃子へなのはは照れくさそうに笑う。丁度そこへ後ろからアリサとすずかが顔を出し、小さくお辞儀した。それだけで何かを悟った桃子は、笑顔を浮かべ言葉を返す。

「いらっしゃい。それと初めまして。なのはの母で、桃子って言います」

「初めまして。アリサ・バニングスです」

「初めまして。月村すずかと言います」

礼儀正しく挨拶する二人に、桃子は内心良く出来た子達だと感心

していた。きつとちゃんとしたしつけを受けているのだろう。そんな風を感じる事が出来たのだ。そんな感心する桃子へなのは今一番気になっっている事を尋ねた。

「ね、お母さん。セイバーは？」

「えっ？ ああ、奥で休んでるわ。お昼は頑張ってたから」

そう告げると桃子は何か悪戯めいた笑みを浮かべ、なのはにこう言った。

「奥のテーブルに座って待ってなさい。すぐにオーダー聞きに行くから」

「いいの？」

「うん。なのはのお友達が来たんだから、今日は特別よ」

その言葉に嬉しそうな声を上げる三人。それを見て、微笑む桃子。やはり子供だなど、そう感じたからだろう。そんな微笑ましい光景を眺める桃子。それに気付かずなのは達は言われるままに店の奥へと歩き出す。

そんな一部始終を苦笑しつつ土郎は見ていた。桃子の考えている事が分かったからだ。案の定、桃子は店の奥へ消えて行く。セイバーに接客させるつもりだろう。そう予想し、土郎は小さく息を吐く。

（ま、なのはもそれが目当てみたいだな）

我が娘ながらいい性格をしている。そう土郎は笑いながらも考え、これからの事に思いを馳せる。セイバーは一体どんな反応を見せる

のだろうと、どこかで彼も楽しみにしながら……

「ゴメンね」

「いえ、十分休みましたから」

桃子の声にそう答え、セイバーは再び仕事へと思考を切り替える。桃子は、ちよつと厄介な電話対応でしばらく動けなくなりそうと言つてセイバーに手助けを願い出たのだ。

無論、セイバーはそれを断るはずがなく、素早く店内に戻ると言われた通りに水を三つ載せたトレーを手に奥のテーブルへ向かう。そこには、なのはと同じ学校の制服の少女が三人。一人は背を向けているが、二人はセイバーを見て　　何故か頷いた。

(? ……何かあるのでしょうか、私に)

その行動の意味が分からず、セイバーは首を傾げるものの、相手が子供でも仕事をしっかりこなさなければと、テーブルの横に立ち　　言葉を失った。

「にゃは、頑張ってるねセイバー」

「な、なのは? どうして……」

そう、なのははセイバーにこう言った。冷やかしには行かないから安心してと。それを聞きセイバーは内心安堵していたのだ。自分

が接客に不慣れだとしても、無様な姿を見せずにすむと。

なのはの前では、セイバーはしっかり者でありたかったのだ。既に、そんなイメージを自分で崩していると知らなくて。そのため、目に見えて動揺するセイバーに、なのはは笑みをこぼすとアリサとすずかに視線を移す。

「アリサちゃん、すずかちゃん。この人がなのはの一番最初に来たお友達のセイバーです」

「初めまして。アリサ・バニングスです」

「初めまして。月村すずかです」

「あ……は、初めまして。セイバーと言います」

二人の挨拶にセイバーもやっと思考を取り戻し、挨拶を返す。その態度はまだ落ち着きを失っていたが、それでも声は普段通りだったのだから大したものだろう。

そんなセイバーに二人は笑みを浮かべる。なのはの話していた通りだと改めて感じたからだ。年上だがどこか同じ歳ぐらいに感じる時があり、キリツとしているものどこか可愛い。なのはが簡単に話したセイバーの人物評。それは、実に的確に言い当てていた。

そんな事を思い出して笑う二人にセイバーは困惑顔。なのははその理由が分かるのか、同じように笑っている。だが、セイバーは完全に思考をリセットし、水をテーブルに置くとなのは達のオーダーを聞こうと伝票を取り出した。

「それで、ご注文は」



「あ、私はアイスレモンティーとチーズケーキ」

「なら、アタシはアイスミルクティーにショートケーキ」

「私もアリサちゃんと同じもので」

なのはが慣れた感じでオーダーを告げると、それに続けとアリサが告げた。すずかはそんなアリサと同じだったため、セイバーは既に慣れつつある手つきでそれを書き込むと再度それを読み上げる。

それが間違っていないかを確認し、なのは達が頷いたのを見てセイバーは伝票をしまつと、そこで軽く一礼した。それがどこか様になっていて、思わずなのは達は言葉を失う。

「かしこまりました」

その去って行く後姿を見て我に返る三人。凜々しいという表現がピッタリのもだった。おそらく、あれがエプロンではなくちゃんとした正装ならばもっと映えるだろう。そう思い、ふとアリサとすずかは自分達にも同じような存在がいた事を思い出した。

（小次郎も髪型さえいじれば洋装いけるのよねえ……着たがらないけど）

（ライダーのメイド服も似合ってるし、ドレスとかも綺麗だと思うなあ。一度着てもらおうかな？）

同居する家族のような存在。その事を思い出すと同時に、いち早くすずかは思いついた事があった。

「そうだ。なのはちゃん、アリサちゃん、今度うちに遊びに来て。」

是非会わせたい人がいるの」

「あ、もしかして、それってこの前言ってたライダーさん？」

「ライダーさん？」

アリサの口から出た人物名に小首を傾げるなのは。どこことなくセイバーと似た印象を覚えたからだ。すると、そんな三人へやや上ずった声が聞こえてきた。

何ですって?! ライダー!?

それはオーダーを告げ、なのは達の所へ戻ってこようとしていたセイバーの声だった。その顔は信じられないものを聞いたと言う表情だ。だが、周囲の目を考えたのかセイバーは小さく咳払いをする。と、小さく頭を下げて謝り出す。

騒がしくして申し訳ないと思ったからだ。そんなセイバーがペコペコと頭を下げる様が可愛らしく見えたためか、周囲の客達も何か言う事はなく苦笑や微笑みを返すだけだった。

それに安堵すると、セイバーは素早くなのは達のテーブルへ近付いた。そして、やや困惑するすずかの目を見て問いかけたのだ。その人物は女性か。その髪の色は紫で、恐ろしく長くないか。そして最後に、妙な眼帯をしていないかと。

その問いにすずかは驚きながらも、全てを肯定した。どうして知っているのだろうとさえ思ったのだ。その質問にセイバーは驚きを隠せぬまま、こつ答えた。

「その前に頼み事をされてくれませんか、スズカ。ライダーへこつ

伝えて欲しいのです。セイバーが話したい事がある、と」

「えっと、いいですけど……」

「先程の問いかけの答えを聞きたいのですね。わかっています。私は、以前彼女と共に暮らしていました」

それだけ告げると、セイバーはどこか遠い目をしてテーブルから離れていく。その後姿を見てなのは胸が締め付けられるような感覚を覚えた。セイバーは自分の過去を話したがらないのだ。

それを土郎達は特に気にせず暮らしている。だが、なのはだけは少しかセイバーの過去を聞いた事がある。そのキツカケは外国人であるはずのセイバーがやたらと日本慣れしている事。

その理由を聞かれたセイバーが教えたのは、衛宮邸での日々の一部。高町家と同じように自分を受け入れ、家族同然に接してくれたとセイバーは懐かしそうに語ったのだ。

その時、確かにセイバーは言ったのだ。戻れるのなら戻りたいと。勿論、なのは達と離れたいと言う事ではない。もう一度会えるなら、会ってみたいと言う事だとセイバーは優しく告げた。

(でも、セイバーにとってそのお家は……大切な思い出なんだよね)

なのははそんな事を思い、浮かんでしまったある考えを必死に否定する。

(違う！ セイバーは私を置いてどこかに行ったりしない。だって……)

思い出すのはあの出会いの夜。友達として名前を名乗り合った後、



## 遭遇編その2

「セイバー、ですか」

「うん……」

すずかから告げられた内容はライダーを驚かせるには十分だった。それは、自分以外のサーヴァントがいたという意味だけではない。近くにサーヴァントがいたにも関わらず、今日までその存在に気付かなかった事でもあるからだ。

それが彼女の中にあつたある答えを肯定しているように思え、ライダーは一人思案する。それはセイバーもまた、自分と同じ状態になっているのではないかとの考えだ。

（もし私だけでなくセイバーもそうなっているとすれば、この召喚は厄介な意味を持つ事になりますね）

ライダーの中に生まれた一つの推測。そして、それはある意味あつてはならない事。それを確かめるためにも一度会う必要がある。そう思い、ライダーはすずかへ視線を向けた。

「話がある、と言っていたのですね？」

「う、うん」

「そうですか……」

やはり会わねばならない。仮に推測が外れているとしても、セイバーと情報交換をしておくに越した事はないと判断したのだ。だが、

その前にすべき事がライダーにはあった。

不安そうな顔で自分を見ているすずかを安心させる。それが今ライダーがしなければならぬ事だ。そう思っただけで優しい笑みを浮かべ、ライダーはすずかの髪を撫でる。それにすずかがくすぐったような笑みを見せたのを見て、彼女も笑みを浮かべた。

そして、心からの想いを込めて告げる。スズカの考えているような事にはなりません、と。だから心配いらぬとライダーは微笑む。すずかはまだ不安が残っているものの、そのライダーの笑みに笑みを返す。ライダーを信じよう。それがすずかの想いであり、導き出した結論だったのだから……

いつものように午前の仕事を終えると、ライダーはノエルとファリンに許可を得て屋敷を出た。向かう先は翠屋。そこに居るのである。うせいバーに会うためだ。

忍にねだり、創ってもらった専用自転車を駆り、ライダーは疾走する。その様はまさに風。凄まじい速度で道を駆け抜けるライダーは、その視線の先に目当ての建物が見えるや否やブレーキをかけると同時に自分の足を地に着け、車体を斜めに傾ける。

土煙さえ上がりそうな勢いで、自転車は店先で見事に停止。周囲がそんな光景に言葉を失っている中、ライダーは何事もなかったように鍵を締めて店の中へと入って行く。

「いらい……」

「お久しぶりですね、セイバー」

思わぬ来客に笑顔のまま固まるセイバー。ライダーはそんな彼女へあっさりとその答えた。セイバーが固まった理由はライダーのメイド姿にあった。見事に着こなしているからではない。その裾が擦り切れ汚れていたからだ。それも、尋常ではないほどに。

未だ固まるセイバーにライダーは首を傾げる。そして、その視線を追い理由を理解した。自分の服が汚れているからだ。店内を汚す訳にもいかないと、わざわざそれを払いに外へ出るライダー。その際に鳴った鈴の音で、セイバーはようやく我に返った。

「桃子、すみませんが少し外します!」

「え、セイバー?」

「このお詫びは必ずします。では!」

戸惑う桃子にそう一方的に言い放ち、セイバーは店を出た。そして、店先で汚れを払っているライダーの前に立つと、その手を掴み走り出す。その後ろから桃子の声がしたのを感じ、セイバーは更に速度を上げた。

「何を急いでいるのです?」

「私にも色々あるのです!」

「やれやれ……」

その色々を教えて欲しいのに。そう思うもセイバーの表情にどこ

か懐かしさを感じ、ライダーは密かに笑う。やがて、視界に海が見えてくる。どうやら向かっている先はその近くにある公園らしい。そのライダーの予想通り、海が一望出来る公園へ着くとそこにあるベンチへセイバーは座った。ライダーもそれに倣うように座った後はただ黙った。その視線は共に海へと向けられていた。

しばしの沈黙。互いに言いたい事や聞きたい事が沢山あるのだ。しかし、どこから話せばいいのか切り出しかねているというところだろう。だが、このままでは埒が明かれないと思ったのか、ややあつてセイバーが意を決して口を開いた。

「私がここに来たのは、もう一年以上前になります」

セイバーの独白にライダーは視線を送る事で続きを促す。それに応じるように、セイバーは召喚されてから今までの事を簡潔に、そして噛み締めるように語った。

その内容にライダーも思わず聞き入ってしまった。それは、高町家の対応が月村家と同じだったから。突然現れた異常な存在を家族として扱ってくれる。そんな共通点を見出し、ライダーは思わず咳く。

「……似ていますね」

私の所もそうなのです。そう言って、ライダーは自分の事を語りだした。召喚された時、目の前の少女に間桐桜の姿を重ねた事。彼女も人には言えない悩みを抱えていた事。そして自分を受け入れ、家族だと思ってくれている事。

それらの話を聞き、セイバーはどこか楽しそうに咳いた。



「……似ていますね」

「ええ。まったくです」

そう言い合う二人。その表情は苦笑い。そりが合わないのは互いに認めるところではあるが、なのは何故こつも現状が似ているのか。それを考え、同じ結論に行き着いたからだ。

「シロウ達のせいですね」

「それを言うならおかげですよ、セイバー」

そう、二人が久しく忘れていた人との繋がりとその温もり。それを思い出させたのは衛宮士郎。そして、凜や桜、大河にイリヤといつた衛宮邸の面々。あの場所で得たその暖かさが自分達の中に残り、きつと寂しい想いを抱いていた少女達の下へ呼んだのではないか。そう二人は結論付けた。

その後、しばらく二人は無言で景色を眺めた。その沈黙は初めとは違い、どこか穏やかなものを漂わせていた。しかし、ライダーがその雰囲気破る発言をした。それはあの推測を確かめるため。

「セイバー……」

「何です?」

「おかしいとは思いませんか?」

ライダーは憶測に過ぎないと前置きしたが、ある一つの結論を告げた。自分達の記憶が残っている事や、魔力供給を受けていないの

も関わらず、未だに現界出来る事。そして、これはライダーしか分からなかったが……

「霊体化出来ない、ですか？」

「ええ。召喚された当日に霊体化しようとはしました。魔力供給を受けていない事は、スズカとのラインを感じない時点で把握してしましたから消耗を抑えようと思ったのです。しかし……」

何故か出来ず、そこでライダーは確信した。即ち 受肉していると言つ事を。

「ば、馬鹿な……では我々は、守護者として召喚されたと言つのですか!？」

「私はそう考えています。それ以外にこの状態を説明出来ないのです」

信じられないといった顔のセイバーに、ライダーは無表情でそう返す。霊体化はライダーにとっては出来て当然の行為。だが、当然例外がある。それは”世界”によって召喚された場合だ。

消滅の危機から世界を救うために召喚される場合、サーヴァントは生前と同じような状態となる。つまり、肉体を与えられるのだ。セイバーはそれが分からなかった。彼女は特殊なサーヴァント故に肉体を持ったままだったからだ。

しかも、あの衛宮士郎に召喚された際、セイバーはラインが繋がれていない状態だった。それもあってなのはどのラインが繋がれていない事も平然と受け止めてしまっていたのだ。

「もし貴方の考えが正しければ、なのはやスズカは……」

「ええ。いずれ世界の破滅に関するのでしょうか。私達はそれを守るのか、下手をすれば……」

そこでライダーは口を噤んだ。その理由はセイバーにも分かる。もしなのは達が世界を救う人間ならば、彼らはそれを守護する立場だ。しかし、もしなのは達が世界を破滅させる人間ならば、彼らはそれを排除する立場へ変わる。

現時点ではどちらとも言えないのだ。なのは達が世界を救う可能性を持つ人間なのか。それとも破滅に導く可能性を持つ人間なのか。願わくば前者であって欲しい。そう二人は心から願った。

「……とにかく、もしかするとこの街に他のサーヴァントも呼ばれている可能性があります」

「そうですね。自分だけならともかく、こうして貴方もいた。ならば、七騎全員が呼ばれていても納得します」

「まずはスズカやナノハの周囲です。可能性が高いのはその辺りでしょうから」

「分かりました。では、アリスにもそういう存在がないかをなのはに聞いてもらいます」

セイバーの言葉にライダーの思考が止まる。そんなライダーに、セイバーはどこか不思議そうな表情を返す。何か気になる事でもあったらどうかと思ったのだ。ライダーはやや考えた後、躊躇いがちに口を開く。

スズカの話では、アリスの家には最近住み込みとなった小次郎と言う名の男がいるそうです。

その瞬間、セイバーが息を呑んだ。小次郎との名を聞いて彼女が思い出すのは、柳洞寺で戦ったあの侍だったからだ。

「……アサシンがその名を名乗っていました。佐々木小次郎、と」  
そこまで言っ、セイバーは深呼吸をしてライダーの方を向いた。その目には何かを決意したような光が宿っている。

「私に任せてくれませんか？ 彼とは、少し因縁がありますので」  
「そうですね。ではお任せします。ですがセイバー、これだけは言っておきます」

ライダーはそう言うことや優しげな表情を浮かべる。それがセイバーには少々意外だった。今までライダーが自分へそんな表情を見せた事が無かったからだ。

そんなセイバーへライダーは囁み締めるように告げる。それはあの衛宮邸での日々を過ごした相手への気持ちを込めたもの。親しいとは言えなかったが、それでも時には笑みを浮かべ合った事もあった友人への気遣い。

決して怪我などしないでください。ナノ八達が悲しみますので。

……ええ、約束します。貴方の気持ちを受け取った私は決して負けません。

セイバーはそう言ってライダーへゆっくりと右手を差し出す。それを不思議そうに見つめ、ライダーは尋ねた。これは何のつもりかと。それにセイバーはやや恥ずかしそうな顔で答えた。

ライダーと友になりたい。その気持ちを受け入れてくれるのなら、その証に握手をしてくれないかと。それに呆気にとられるライダーだが、小さく笑みを浮かべるとそれを握る。

「フフツ、貴方も可愛らしい事を言うんですね」

「い、いけませんか？」

「いえ、良いと思いますよ。ナノハの影響ですか？」

「きつとそうだと思います。さつきも言いましたが、出会っていきなり友になりたいと言われたので……」

そこから二人は今までにない程笑顔で話し出す。どこか嬉しそうに、そして懐かしむように。その手はもう離れていたが、心はしっかりと繋がれている。そんな事を互いに思いながら昔話に花を咲かせる二人。その横顔を春の日差しが照らしていた……

学校から帰るとすぐにすずかはライダーを捜した。いつもなら一番に出迎えてくれるはずのライダーが出迎えてくれなかったからだ。洗濯物を取り込んでいるファリンを見つけ、ライダーの事を尋ねるすずかへ返ってきたのは出かけているとの答え。

それでもすずかはどこか落ち着けなかった。セイバーに会いに行

つっていると理解したからだ。すずかはライダーが絶対に戻ってくる  
と信じている。信じているが、怖かったのだ。もしかしたら、ライ  
ダーが昔の知り合いの下へ行ってしまうんじゃないかと。

(早く、早く帰ってきてライダー……っ！)

そんなすずかの願いが届いたのか部屋のドアをノックする音がす  
る。それに飛び跳ねるように反応し、すずかはドアを開けた。そこ  
には、彼女が待ち望んでいた姿があった。

「どうしたのですか、スズカ。そんなに慌てて……」

そこには、驚いた顔のライダーが立っていたのだ。その手には翠  
屋と書かれた箱がある。セイバーとの話を終えたライダーは、自転  
車を取りに戻るついでにと翠屋でシュークリームを人数分買って帰  
ったのだ。勿論セイバーへ対応を頼み、その様子を見てライダーは  
色々とからかった事は言うまでもない。

すずかの反応と表情から何かを悟ったライダーは、小さく微笑む  
と手にした箱を見せてこう告げた。

「これからシノブ達とティータイムと洒落込もうと思いましたが、ス  
ズカを誘いに来たのです」

もう三人共待っていますよ。そうライダーに告げられ、すずかは  
嬉しそうに頷いて部屋を出た。前を歩くライダーと並ぶようにすず  
かは歩く速度を速める。それに気付いたライダーが、歩調を少し緩  
めすずかに合わせた。

するとすずかはその気遣いに気付いて嬉しく思い、ならばと空い  
ているライダーの手を握って微笑んだ。その手に感じる温もりにラ



### 遭遇編その3

「で、よく分かんないけど、セイバーさんとライダーさんは知り合いらしいわ」

寝る前のいつもの時間。現代教室を終え、今日の出来事を語るアリサ。そのアリサの話を聞いた小次郎は驚きを顔に張り付けていた。端正な顔立ちを固め、幽霊でも見たのかと言わんばかりの表情だ。それはそうだろう。もう会う事などないと思った相手の名を聞かされたのだ。それも、一人は彼にとっては好敵手と呼べる相手。あの山門で剣を交え、初めての昂りを味あわせてくれた存在の名だったのだから。

「ありさ、もう一度言ってくれぬか？」

「ん？ 何を？」

「今日翠屋なる店で出会った者の名を」

初めて聞く小次郎の真剣な声に、アリサは戸惑いながらも答えた。

「……セイバーさんよ」

一体何なのよ。そう呟くアリサ。そんなアリサから視線を外し、小次郎は外の月に目をやり、内心で喜びを溢れさせていた。己が好敵手と認めた相手が、もう二度と会えぬと思っていた相手がこの町にいる。それが小次郎の眠っていたものに火を付けた。

ふつつつと燃え上がる内なる炎を感じながら、小次郎は笑う。中々世の中は狭く、そして粹な計らいをすると思いながら。その表情



を今までした事がない程に輝かせて。

（待っておれセイバー。あの時の楽しみを、喜びを今一度味わおうぞ）

再戦を想像し高まる気持ちを抑える小次郎。そんな彼をアリサはどこか寂しそうに見つめていた……

あくる朝、小次郎は日課の庭仕事を早めに終わるとセイバーに会いに行こうとした。だが、一つ大きな問題があった。そう、小次郎は屋敷から出た事がないのである。

その一つの理由として、バニングス邸の広さがある。つまりその庭だ。その庭を世話している小次郎としては、のんびり世話をしていれば時間が過ぎていく。早朝に剣の鍛錬をし、朝食後はアリサが帰宅する夕方近くまで世話をする事。それが彼の一日の過ごし方だったのだ。

勿論、一番大きな理由がある。それはアリサが外出を禁じたからだ。アリサはいつか自分が小次郎を案内してやろうと考えて、そう命令した。それに小次郎が従う義理はないのだが、それを少し匂わせただけでアリサが涙目になったため、彼は今まで庭弄りをして過ごしてきたのだ。

「ふむ、道を聞こうにも鮫島殿はおらぬし、下手に出かけ迷いでもすればありさが笑うのみ。はてさてどうしたものか」

そう考え、結局小次郎はこの日出掛ける事を諦めた。それはある事を思い出したからだだった。

（セイバーは、今翠屋なる茶屋で働いておるとありさが言っておったな。ならば、昼間行ってもあしらわれるだけか）

こうして、小次郎は残念そうなため息を吐くと庭へと戻っていく。会えぬならせめて刀を振り、邪念を無くそうと決めたからだ。本来の格好に戻り、愛刀の物干し竿を構えて小次郎は刀を振るう。その姿は内心を反映してか、美しくもどこか悲しそうに見えた……

学校からの帰り道、アリサは習い事に向かう車の中で、一人不安に駆られていた。原因は昨夜の小次郎の様子。小次郎はあまり物事に執着しない。そんな小次郎がセイバーの名前には異常な反応を示した。

無断外出は禁じているが、元々小次郎はそれに従う必要がない。それをアリサは理解しているからこそ不安だった。おかげで今日の授業中は、指名されたにも関わらずそれに気付かず軽く叱られたのだ。

（あいつ、セイバーさんと知り合いだっていうのかしら？ 時代錯誤待のくせに英国女性と知り合いなんて……）

本人が聞けば、それとこれがどう関係すると呆れる所だろうが、今のアリサに正論は意味を持たない。そう、アリサはきつと認めないだろう。その感情が嫉妬と呼ばれるものだと言う事を。

矛先こそ小次郎に向けているが、不安の原因はセイバーが可愛ら

しい女性だった事ともう一つある。それも人が聞けば呆れるか、もしくは微笑ましいと感じるもの。

(あいつ、アタシの名前は片言っばいのに、セイバーさんの名前は綺麗に発音してた！)

昨夜、無意識に小次郎はセイバーの名を呟いた。それをアリサは確かに聞き、余計に腹を立てていたのだ。自分はどこか違和感を感じるにも関わらず、同じような響きのセイバーは流暢に発音した事。それがアリサには不快だった。

「帰ったら……絶対色々聞き出してやるんだから！」

そんなアリサの決意に比例するように車も速度を上げる。そして自宅に到着するや否や、アリサは怒りを抑えぬままに車から降り立った。そんな彼女に小次郎は困惑していた。

いつものように帰ってきたアリサを出迎え、いつものようなやり取りがあるかと思えば、彼女は彼に何も言わず屋敷の中へと向かって行ったのだ。こんな事は今までなく、しかも小次郎には原因が分からない。ただ、恐ろしい程不機嫌である事だけは察していた。

「すまぬが鮫島殿、ありさの事について何か知っていれば教えてくれぬか？」

「……それが、私にもさっぱり」

「そうか。……つまらぬ事を聞いたな、許せ」

アリサの傍付きである鮫島に分からないとなると、小次郎に取れる方法は一つしかなかった。その方法を考え、小次郎は苦笑い。と

言うのも、それは直接尋ねるといつ至ってシンプルなもの。

(私も変わったものよ)

そう思い、小次郎は食堂へ向かう。もうすぐ夕食の時間だ。アリサが来るのを待ち、そこで何に怒っているのか聞こうと小次郎は思っていた。

一方のアリサと言えば、自室のベッドに横たわって小次郎に対して自分が取った行動を後悔していた。せつかく小次郎が普段と同じように接してくれたにも関わらず、アリサは何故かそれを無視して逃げるように部屋まで来ていたからだ。

あそこですいつものように会話していれば。そんな思いが先程から頭を巡る。もし、これが完全に自分が悪ければ何の躊躇いもなく謝罪する事が出来るのがアリサである。しかし、今回はアリサの中では小次郎が先に悪さをした。

よって、アリサは自分だけが謝る事はないと思っている。故に悩み苦しんでいた。

(悪いのは小次郎なのよ！……でもでも、アタシの態度も問題よね……)

「あゝ、どうしたらいいのよっ!!」

そこにアリサのお腹の鳴る音が響く。ふと時計を見れば夕食の時間。どんな状況でも正確に栄養摂取を要求する体へ、呆れたように小さくため息を吐くアリサ。結局、未だに結論を出せぬまま食堂へ向かう。その表情は、まるで死地に赴く戦士のようだった……

普段ならば出てきた料理を小次郎が尋ね、それにアリサが答えたり、あるいはその日の出来事を互いに語ったりするのだが、この日は珍しくそうではなかった。

理由はアリサが言い出せなかったのでも、小次郎が聞かなかったのでもない。この日は、たまたまアリサの両親が揃って食事に参加できたのだ。

「どうだいアリサ。学校の方は？」

「すごく充実してるわ、パパ」

久しぶりに会う娘に満面の笑顔で接する父。彼も愛娘と過ごす時間を多く取りたいと思っているのだが、仕事が忙しい身では中々そうもいかない。そのため、こういう機会がある時は一秒さえ噛み締めるように過ごすのだ。

父と笑顔で話すアリサの横に座る小次郎は、彼女の母と会話をしていた。アリサの事を夫同様気にかけている彼女としては、その変化を目ざとく感じ取っていた。その原因となっているのが小次郎だろうと、そう確信しながら。

「小次郎さんはどうです？ 少しはウチに慣れましたか？」

「そうさなあ……。未だにまなーと言うものには戸惑うが、大体の事は理解したかと」

ただのボディガードに過ぎない小次郎が、こうしてアリサの両

親と食事出来るのは、彼らが恩人である小次郎を大層気に入っていたからだ。言動が古風ではあるが風流を理解し、今時には珍しい程義理堅い。

その剣の腕が立つにも関わらず、それを自慢もせずただ愚直なまでに高みを目指している事も高評価だ。何より、アリサが慕っているのが一番大きい。

仕事であまり傍にいてやる事が出来ない自分達に代わり、兄のようになりサを見守ってくれている。それに伴ってか、アリサの笑顔が増えたと言う報告も二人には入っている。

それを二人は聞き、こうしてアリサへ会う度に実感するのだ。故に小次郎へ言葉にならない感謝の気持ちを抱いていたのだ。もう本人へそれを伝える事はしない。それを以前一度言った事があるのだが、小次郎はそんな事はないと言って否定したのだ。

私がありさを変えたのではない。ありさ自身が己を変えただけにすぎん。そして、それは両親の教えと日々があればこそであるうよ。

その言葉を聞いて、二人が益々小次郎へ好感を抱いたのは言うまでもない。だからこそ理解したのだ。小次郎の在り方がアリサへ良い影響を与えているのだらうと。

「そう言えば、毎日小次郎君は庭の手入れを良くしてくれているそうだが」

「私の単なる気晴らしよ。気にする事もない」

「あらあら、でも本職の者達が中々の腕だと誉めていましたよ?」

「それは重畳。私の気晴らしが役に立って何よりよ」

後は、自分達に対して特別な対応をしない事。誰を相手にしても己を崩さず、乱さず、淡々と振舞う。それが小次郎の良い所だと二人は思っている。

こうして久しぶりの家族揃ったの食事も終わり、アリサは早速と上機嫌なままで帰宅の際の事を謝ろうと小次郎の下に駆け寄った。しかし、それに小次郎は、たまにしか会えない両親との時間を大切にしろと告げて与えられている部屋へ歩いて行ってしまったのだ。

その背中を見つめ、アリサは少しだけ言葉を失っていた。それはつまり自分のした事を気にしていないと言う言外の宣言と受け取ったのだ。自分が散々悩んだのが馬鹿らしく思えたが、その言葉を実行する事にした。

何故なら、そう告げた時の小次郎はアリサの良く知る表情だった。リビングへ向かおうと小次郎へ背を向けるアリサだったが、一度だけ振り返った。視線の先にある少し離れた背中へアリサは小さく呟く。

……ま、今回はこれでキャラにしとくわ。

アリサはそう呟くと、笑顔を浮かべて来た道を戻る。両親に色々と話したい事がある。まずは最近出来た友人の事を話したい。その思いを胸にアリサは駆け足で通路を駆けて行くのであった。その離れていく足音を聞いて、小次郎がどこか微笑みを浮かべていると知らずに……

翌日、アリサは普段の彼女に戻っていた。小次郎は結局昨日の不機嫌の理由が分からぬままだったが、機嫌が良くなっていたのでよしとした。

「じゃあ、行ってくるわ」

「気をつけてな。おお、そうであった。ありさ、少し頼みがある」

小次郎のその声に元氣良く歩き出していたアリサの足が止まる。振り向き、視線で用件を尋ねるアリサ。それに小次郎は神妙な面持ちで切り出した。

「翠屋なる茶屋へは、どのような道で行けるか教えてくれぬか？」

「……やっぱりそれか。教えてもいいけど、アタシが帰ってきてからね。それまで待ってなさい」

そう言い切つて、アリサは小次郎の答えも聞かずに歩き出す。それを何も言わず見送る小次郎。その顔にはいつもの笑みが浮かんでいた。やはりこうでなくては。そんな事を考えているような笑みだ。こうして小次郎はいつものように日課を終えてアリサを待った。そしてアリサが帰宅すると、小次郎は無言を言わず彼女を連れて屋敷を出た。車で送ると鮫島が言ったのだが、アリサは歩きで構わないとそれを断った。それを聞いて、鮫島はその理由を察したのだろう。どこか苦笑気味に「お気をつけて」と見送ったのだ。

アリサに連れられて歩く小次郎は、初めて見る海鳴の町を興味深そうに眺めていた。目に映るもの全てが小次郎にとっては未知のものばかりだったのだ。街灯に電信柱、信号機に横断歩道。



目に映るそれらを子供のよ様な表情で不思議そうに尋ねる小次郎。そんな彼に、アリサは呆れながらもどこか嬉しそうにそれに答える。端から見れば、それは滑稽にしか見えないだろう。だが当の本人達には楽しい時間であった。特に、この機会を狙っていたアリサにとっては。

そんな時間もやがて終わりが来る。翠屋に着いたのだ。そして、その店先にセイバーとなのはがいた。セイバーはエプロン姿ではなく、普段着で。アリサがなのはを通し、小次郎の事を伝えておいたためだ。

実は、もしアリサがなのはへ小次郎の事を伝えなかったとしても同じ結果になっていた。何故なら、なのははセイバーからアリサへアサシンという名に聞き覚えがないかを確認してくれと頼まれていたのだ。

そんな事も知らず、小次郎は目に映るセイバーから記憶に残っている雰囲気と同じものを感じ、静かに笑みを浮かべる。きつと自分と同じ感覚を相手も抱いているはず。そう思いながら、小次郎はセイバーへ声をかけた。

「久しいな、セイバー」

「ええ、アサシンも変わらぬようで何よりです」

「……何処か良い場所はあるか？」

「……こちらへ」

挨拶もそこそこに小次郎の申し出を受けて、セイバーは内心でやはりと思いつつもそう返して歩き出す。アリサはその後を追おうと

して、その手をなのはに掴まれて止められた。

疑問を浮かべるアリサになのはは無言で首を横に振る。邪魔になるから行ってはいけない。そうなのはが言っているようにアリサは思った。思わず残る片手を握り締める。悔しいのだ。見れば、なのはの空いている手が強く握られているのか小刻みに震えている。

(そっか……なのはもアタシと同じ気持ちなのね)

視線を戻せば、既に二人は見えなくなっていた。アリサはそれをどこか寂しく思いながらも、やり場の無い怒りと共に吐き出した。

小次郎の……バカ。

その眩きは夕闇の風に溶けて消えた……

町外れの山の中。士郎達が朝の鍛錬に使っている場所に二人はやってきた。人気のない場所であれば問題がある。それを互いに理解していたからだ。

「まさか貴方までいるとは思いませんでした」

セイバーはそう言って本来の鎧姿へと変わる。その手には風を纏った聖剣を携えて。

「それは私の台詞よ。よもやお主が居よう等とは思わなんだ」

小次郎もそれに応じるように本来の着物姿へ変わる。その手には愛刀の物干し竿を携えて。

「一応確認を。どうしてもやるのですね？」

「応よ。試合うぞ、セイバー」

その声で小次郎の雰囲気が変わる。同時にその構えがセイバーも良く知るものへ変わる。

”燕返し”と呼ばれる小次郎の必殺剣。本来”魔法”である多重屈折次元現象を引き起こし、同時に神速の斬撃を三発叩き込むもの。簡単に言えばただそれだけ。しかし、それがどれ程恐ろしい技かはその身で受けた事のあるセイバーには分かる。

何しろ、あのセイバーですら二度は避け切れないと言わしめた技なのだから。故にセイバーにも緊張が走る。覚悟はしていた。だが、まさか試合開始の合図のような扱いで放たれるとは思いもしなかったのだ。

「いきなりですね」

「致し方あるまい。あまり時間をかけると騒々しいのがおるのでな」

此度は急がねばならぬ。そう小次郎は苦笑いで答える。セイバーはそんな小次郎を見て微かに笑みを見せると、意を決したのか聖剣を構え直す。それは小次郎も初めて見る構え。どこか居合いを思わせるそれに、小次郎は恐怖と感動を覚えた。

「ほう……何か新たな技でも会得したか」

「……私も以前のままではない」

「それは重畳。ならば……」

そして、時が止まる。いや、正確には止まったかのように二人が動かなくなつたのだ。風が静かに吹き抜けていく。木々を揺らし、木の葉が音を立てる。そして、その揺れが収まった瞬間

「っつ！」

空間が爆ぜた。セイバーの動きを見て刀を振るおうとする小次郎だが、その瞬間、その目が見開かれた。まるで小次郎の呼吸を外すようにセイバーが加速したのだ。

それに驚く小次郎へ迫るセイバー。そして、その姿を見て小次郎は直感で理解した。何故セイバーが加速出来たのか。彼女は鎧を纏っていないかったのだ。

「……見事。鎧を消して身軽にするとはな」

「いえ、これは私だけの力では成し得ませんでした」

小次郎の喉元に突きつけられた聖剣。小次郎の刀は振り抜かれる直前で止められている。刹那の間の後、小次郎が我に返って燕返しを放とうとした時には、セイバーは既にその懐に入り込んでいたのだ。

自身へ向けられた聖剣を見つめながら告げた小次郎の言葉。それへセイバーが返した言葉を聞き、疑問を浮かべる小次郎。そんな彼へセイバーはその理由を答えた。そう、確かに鎧を消したのは速度を上げるためだと。

だが、それだけではない。彼女は小次郎の俊敏性を警戒し、もう一つ速度を上げる手段を講じたのだ。それは御神の技である”神速”だった。しかしそれは本物ではなく、あくまでセイバーが模倣したものだ。

無理矢理無意識下にある肉体の能力制御を外させ、その力を全て引き出させるのだ。その上に魔力開放して得られる元来の爆発力と鎧分の魔力を速度へ変換して上乘せし、ようやく小次郎の上をいく速度を出す事が出来たという訳だ。

だが、セイバー版神速には一つ欠点がある。セイバーは当然ながら神速の状態などに慣れていない。そのため、現状では直線的な動きしか出来ないのだ。士郎達に何度も挑んで、耳で聞き体で覚えた奥の手だった。しかも、これの使用には大きな問題がある。それは

……

「ぐっ……」

セイバーの強靱な体を持ってしても、これを使っただ後はしばらく満足に動けなくなる事。故に、セイバーはこれを神速ではなく”諸刃”と名付けている。相手には恐怖を、使う者には尋常ではない負担を強いる事を皮肉っての命名だ。

地面へしゃがみ込むセイバーを見て、小次郎もその使った方法があまり良くないものと察したのか、どこか苦笑するように声を出した。

「成程な。私と同じく真つ当な剣ではないか」

「え、ええ。私が模倣した技を使う者達は御神と言う流派の剣士です」



空白期（A & a m p ; A）

「どうした？　それで終わりか恭也」

「くっ……まだだ！」

再び神速を使つて小次郎へと迫る恭也。だが、それを小次郎は完全に見切っている。迫り来る恭也を見つめ、迎撃として再び打ち込まれる小次郎の剣閃。それが恭也を捉え　　ながらも彼の動きは止まらなかった。

「なんとっ?!」

「はあああああっ!!」

小次郎の剣閃は確かに鋭い。だが、恭也は何度も受ける内に理解したのだ。それは鋭いが重みにやや欠ける事を。故に考えたのだ。敢えて意識を刈り取られないように、小次郎が木刀を振り切る前に自らの体を使つてそれを止める事を。

更にそこから必殺の一撃を決めて勝負を着けるしかない。その作戦を恭也は実行したのだ。小次郎が驚いたのはその発想を理解したからだ。肉を斬らせて骨を断つ。それを迷う事無くやってのけた恭也の剣士としての在り方。それに対する称賛と驚愕。そして、そんな小次郎へ恭也が放つは……

「あれはっ!?!」

恭也の放とうとする技を理解し、美由希が思わず上ずった声を上げた。それは恭也の得意とするもの。だが、試合などで見せるよう

なレベルの技ではなかったのだ。土郎もそう考えているからこそ、恭也が何故それを選んだかを悟って眩く。

「薙旋、か。恭也の奴、本気だな」

御神の奥義の一つである薙旋。それを使ってまでも恭也は小次郎に勝ちたかった。その気持ちを噛み締め、美由希も土郎も恭也の勝利への執念を感じた。そして、その一撃を小次郎は。

「……見事よ」

耐え切った。いや、正確には直撃の瞬間自分から後ろに跳ぶ事で衝撃を逃がしたのだ。柳の如きその動きに、恭也だけでなく土郎達すら驚愕した。御神の奥義。それを喰らいながらもしつかりと二本の足で立っている事。それが三人にとってどれ程恐ろしい事か。

更に恭也は今の一撃で力のほとんどを使い切ってしまった。その気持ちも今の状況を見た事で萎えてしまっている。小次郎もそれを理解しているのだろう。静かに構えた。

その瞬間、道場の空気が張り詰めた。それと同時に三人は悟る。もう万が一にも勝ち目はないと。それだけの”何か”が小次郎の構えにはあった。

「これも武士の情け。せめて我が秘剣で終いとしよう」

その言葉に恭也はどこか心が震えるのを感じた。これ程の剣士が自分を認めその奥義を見せてくれる。それを理解し、恭也は身体と心に力を入れる。萎えていた戦意を取り戻し、小次郎から感じる圧迫感を振り払い、立ち上がって小太刀を構える。

その恭也の姿に小次郎も笑みを見せ「やはり強き剣士よ」と眩い



た。自身が生きた時代とは違い過ぎる現代に、自分も相対した事がない程の立派な剣士がいた。それが小次郎には嬉しくて堪らないのだから。

「恭也、受け取れ。我が秘剣、燕返しを！」

放たれるは三つの剣閃。それが同時に襲い掛かる。逃げ場無きその攻撃を、恭也はかわすのではなく敢えて受けた。

静かに崩れ落ちる恭也。それを素早く土郎が駆け寄って支えた。そして、そのまま視線で小次郎へ礼を述べる。剣士として小次郎の行為に感じるものがあつたからだ。

奥義を見せた恭也へ、自分の奥義を見せる事で返礼とした小次郎の在り方に心からの敬意と感謝を込めて。美由希も感じ入るものがあつたのか、小次郎と恭也へ頭を下げた。剣士としての在り方を見せてもらえたと思つた故に。

だがそんな彼らと違い、なのははただ驚いていた。負ける事などないと思つていた兄の敗北。セイバーと土郎以外には無敵と信じていた存在。それを見事に倒した小次郎に。

それと同時に分かつた事があつたのだ。剣士の礼儀等はなのはには理解出来ないが、それでも小次郎が恭也を認めたからこそ最後の技を出した事を。

（小次郎さんって……ホントに凄い人だったんだ）

なのはの抱いた思いは、美由希や土郎の思いでもあつた。セイバーはそんな高町家の面々の表情を見てその考えを察して呟く。

「……私といい勝負をすと言つたはずです」

それはどこか拗ねるような声。その声に対して苦笑を返すのは達。そんな光景を眺めながらも、セイバーは視線をなのは達から小次郎へと合わせていた。

（アサシンも召喚されていて、尚且つ受肉している。こうなると、私達七騎が全員召喚されているという予想もあながち冗談では済まないかもしれません）

あの戦いの後、帰り道で話した事を思い出してセイバーは気を重くなるのを感じた。小次郎が自由に歩ける事から薄々感じていた。そして、アリサからは魔力を一切感じなかった事も含め、ライダーと話した事が徐々に真実味を帯びてきたのだ。

出来れば外れていて欲しい。特にバーサーカーは元々理性を失っている存在だ。それが”世界”に使役されたとしたらどうなるか。そう考えると、セイバーには現在いる戦力でも止め切れるか自信がない。

ランサーもいれば何とかなるのでしょうか……

自分やライダーに小次郎と加えてランサーも居れば、いかなバーサーカーと言えども勝てない相手ではない。逆に言えば、バーサーカーとなったヘラクレス相手にはそれぐらいではないと勝てないのだ。

そんな状況にはなあってほしくないと思いながら、セイバーは小次郎との試合を始めようとする土郎の背を眺める。もしなつたとしても、この一家は必ず守ってみせると強く誓いながら……

あのセイバーと小次郎の再会と再戦を兼ねた次の日の事。小次郎は早速とばかりに高町家を尋ねた。目的は一つ。セイバーが会得した”御神”の剣技を見るためだ。

セイバーから既に事情を聞いていた土郎達だったが、小次郎の技量を知りたいと恭也が言い出してそのまま試合となった。だが、結果は前述の通り恭也の敗北に終わった。本物の神速に初めこそ小次郎も驚いたが、それだけだった。

セイバーと互角の戦いが出来る小次郎からすれば、恭也達の神速の速度は見えぬ程ではなかった。あくまでも御神の技は人の身だからこそその脅威。サーヴァントとして存在する小次郎からすれば、それは十分対処可能な範囲だったのだから。

だが、恭也の放った雑旋だけは小次郎も心から驚き、そして同時に称賛したのだ。人の身でありながらそこまでの技を会得し、更に研鑽する姿に。そして、飽くなき向上心と勝利を諦めない恭也の姿勢へ応えるために、小次郎は敢えて燕返しを放ったのだ。

小次郎の心に、現代の剣士も捨てたものではないと思わせた恭也に対する最大限の礼として。それを瞬時に汲み取り、恭也も受けて立ったのだ。最後まで挑戦する姿勢を崩さないように、と。そして、今小次郎は土郎と戦っていた。

土郎は手強かった。理由として戦闘の経験量が違う事と、恭也と小次郎の試合を見ていたのが大きい。小次郎の剣閃を紙一重で防ぎ、防げないと分かるや自分へのダメージを最小限に抑えるべく、恭也よりも見事に受け流す。

小次郎の戦い方に近いものがありながら、土郎は恭也と違う力もある。恭也でさえ未だ追いつけない姿が、御神の剣士の一つの完成

形がそこにあった。

「やるな、流石は恭也の父上と言ったところよ」

「小次郎さんこそ恐ろしいですよ。もう御神の剣を見切り出してますね」

互いに浮かべるは笑み。土郎は、ここ最近感じていなかった高揚感から。小次郎は、恭也よりも洗練された土郎の強さから。それぞれが喜びと楽しさを表情に浮かべている。それを見ながらなのははぼつりと呟く。

「何でお父さん達って戦うのが好きなんだろ……？」

それはなのには分からない感覚。誰かと戦う。それは、自分も相手も傷付ける事になる。何か理由があり、仕方ないならまだ納得出来る。だが、ただ強くなりたいだけで戦う事はなのには理解出来なかったのだ。

(強さって、誰かと戦わないと持てないものなのかな?)

その答えをなののはが得るには、この日からかなりの時間が必要となる。本当の強さとは何か。戦う事の持つ意味とは。それらを彼女なりに見出すキツカケ。それは、これより二年近く経ったある日に訪れる事になるのだ……

結局、勝負は土郎の敗北で幕を閉じる。勝負を決したのはやはり小次郎の放った燕返し。それを土郎もかわしきれず、何とか耐え切るうとしたのだがそれも叶わず床に伏した。美由希はその光景に驚愕すると共に、小次郎の強さを改めて感じていた。

セイバーは、土郎の傍に駆け寄り心配そうに声を掛けるなのはを見つめていた。恭也は土郎が敗れるところで気が付いたらしく、呆然とそれを眺めて呟いた。

見えなかった……

その呟きに美由希も頷き、視線を小次郎へ向ける。最後の剣閃、燕返し。それを離れた場所から二度も見ていた美由希だったが、それを見切る事は出来なかった。

美由希も恭也も知らない。彼らは本当は見えている。だが、それが同時に見えたために見切れていないと思っただけなのだ。それを土郎達を知るのは、この日の夜。なのはがセイバーに燕返しの事を尋ねた際の答えを聞いてである。

（”御神”の剣士。そして、その技……か。中々興味深いものよ。良い修練相手にもなりそうだが……さて）

小次郎は視線を土郎からなのはへ移し、しゃがみこんでその頭に手を乗せた。それになのはが顔を上げると、小次郎は真剣な表情で告げる。

「すまぬな。つい加減をし切れなんだ、許せ」

「小次郎さん……？」

「私らしからぬ事よ。つい、そなたの父上が強いものでな。熱くな

りすぎてしまった。だが、心配いらぬ。土郎殿は……ほれ」

なのはに安心させるように軽く笑みを見せる小次郎。その視線を受け、なのはが振り向くと土郎が目を覚ましたようで、その視線が合った。それに土郎がどこか申し訳なさそうに笑い、なのははそれに喜びながらも文句を言い出した。

そして、それを聞きながら恭也達も笑みを浮かべて道場内が和む。それを感じながらセイバーは小次郎へと近付く。先程のなのはとのやり取りを聞いて思った事があるのだ。

「やはり変わりましたね」

「よく言う。そなたが一番変わっておった」

「そうですね……そうなんでしょう」

二人して笑い合うセイバーと小次郎。そんな二人の視線の先では、心配したと怒るなのはに謝っている土郎と恭也がいた……

アリサは不機嫌だった。朝起きた時、小次郎は外出していたからだ。無断ではない。鮫島に言伝を頼んでいたから。だが、それでも納得いかなかった。何故なら行き先は高町家。目的はおそらくセイバーだろうと思ったからだ。

（アタシが起きるまで待ちなさいよ！）

今、アリサは食堂で小次郎を待ちながらある事を考えていた。それは、どうすれば小次郎が高町家から早く帰ってくるかである。現在の時刻を見れば、いつもなら朝食を食べ始めている頃となっていた。それにも関わらず、小次郎は未だに帰ってきていなかったのだ。小次郎の性格上、朝食を向こうで食べる事はしないと思うが、それにしても不安なのだ。先程からアリサはなのはへ電話しようという度思った事か。

そして、アリサが六度目になる携帯での連絡を結局断念した時、小次郎が食堂へ現れた。それに一瞬笑顔になるアリサだったが、すぐにそれを消し、不機嫌な表情でそっぽを向いた。

それに小次郎は不思議顔。だが、まだアリサが朝食を食べていないのを悟り、笑みを浮かべて椅子へと座った。自分を待っていてくれたと悟ったのだ。

「先に食べておればいいものを」

「……別に。アタシの勝手でしょ」

「然り。だが、待たせたようですまぬな。高町の者達とこれからの事を話してきたのだ」

「そ。まあいいわ。食事にしましょ」

小次郎の謝罪に若干機嫌が良くなった瞬間、彼の告げた”これから”に再び機嫌を悪くし、アリサは素っ気無く会話を打ち切った。それに小次郎はアリサの不機嫌を悟るが、原因にまでは思い当たらないように首を傾げるだけだった。

そうして最初は不機嫌なアリサだったが、食事をしている内に段

々といつもの調子になり、小次郎もそんな彼女に笑みを見せた。特に、小次郎がフレンチトーストの由来を尋ねた時に、フレンチはフランスの事でトーストは焼いたパンだと聞いた途端、彼が言った一言がアリサの不機嫌を根こそぎ持っていった。

「……随分と近い異国なのだな。まだこんなにも温かいとは」

一瞬言葉を失うアリサ。しかし、小次郎の言った言葉の意味を理解した後はもう爆笑だった。アリサの中ではこれ以上ない程のヒットである。小次郎の言った奇妙キテレツな言葉の中でも、これは中々ない。

そんな風に笑うアリサに小次郎は小さく笑みを浮かべるも、何も言わずに手にしたフレンチトーストを口にする。こうして、その日の朝食も笑顔で終わりを迎えた。それでも、アリサの心の底にはまだ不安が燻っているのだった……

「トレーニング？」

「うん。セイバーと一緒にね」

「そうなんだ。それで今日から始めるの？」

いつもの昼休み。屋上で風を感じながらの食事時、なのはが言い出した「これからあまり遊べなくなるかも」の発言にアリサとすずかが尋ねた事に対して返ってきたのがそれだった。

アリサが確認するように問いかけ、それに答えたなのはの言葉を



聞いたすずかが遊べなくなるとの言葉から、今日からとそう判断したのだろう。そのどこか寂しそうな言葉になのはは無言で頷く。それにすずかは何も言わずやや顔を伏せた。

一方、アリサはなのはが何故そんな決断をしたのか何となく察していたため、その表情は暗くはなかった。

(なのはも不安なんだ……)

自分が感じた取り残される感覚。あれをきつとなのはも感じたのだろうとアリサは思った。だからこそ、アリサは力強く言った。

「いいじゃない！ 自分が決めたなら頑張ってやりなさいよね！ アタシも何か始めてみるから」

(アタシも負けない！ 絶対置いていかれるもんか！)

「あ、アリサちゃん……うんっ！」

(アリサちゃんもなんだね……一緒に頑張ろう、アリサちゃんっ！)

その言葉に込められた思いを察し、なのはも笑顔で頷く。互いに笑顔を見せ合う二人をすずかだけが不思議そうに見つめていた。セイバーと小次郎の一件を知らないすずか。しかも、彼女の傍にいるライダーはそういう勝負とは無縁である。

そのため、彼女は今のままではライダーと同じ場所にいる事が難しいとは感じない。故に二人の心情などを理解出来るはずもなかったのだ。だが満面の笑顔のなのはとアリサに、すずかも結局笑顔になるのだった。

それでも、すずかはせめて一週間に一度は三人で遊ぼうという提案を出した。それが二人に受け入れられると、すずかは安堵の表情を浮かべる。その後はもういつもの時間だ。他愛の無い事で話す三人。それでも、その話題に上るのはセイバー達サーヴァントの事ばかりだったか……

その日、家に帰ってくるなりアリサは小次郎に対してある事を告げた。それはなのはの告げたセイバーとのトレーニングに影響を受けた事。

「じょぎんぐ?」

「そ。早朝の運動って体にいいらしいの。だから、明日からするわ」

アリサの提案に小次郎は何やら思案顔。それを見てアリサは断言する。そう、それは自分の決意。そして、子供っぽい抵抗。

「でも、早朝って子供が動くには何かと物騒でしょ? だから、あんたが護衛なさい」

その瞬間、小次郎が理解出来ないとばかりの顔を見せた。そして何かを考え、アリサへそれを伝えようと口を開いた。

「……護衛なら鮫島殿がおる」

「あんたがやるのっ!」

だがその考えは即答で却下された。その声の感じからもうこれはどうあっても変わらないと理解し、小次郎は苦笑しつつ息を吐いた。

「承知した」

裂帛の気迫で告げるアリサ。それを見て小次郎は従った方がいいと思ひ、反論を諦めたのだ。早朝にやるという事は、高町家での鍛錬に行けなくなると考えた小次郎。その事が顔に出たのか、どこか寂しげな表情をしていた。

そんな彼の考えを読んでいたのだろう。アリサはその表情を見ると、恥ずかしさを隠すように小次郎へ顔を背けてこう告げた。

「でも、それはあんたがなのは家で訓練してからでいいわ。ただし、それが終わったらすぐに帰ってきてアタシの護衛よ。いい？」

その発言に小次郎はアリサの考えのキツカケを悟ったが、それが彼女の嫉妬から生まれたものとは思わず、ただ帰りが遅くなった事に対して寂しくなったと勘違いしていた。

とはいえ、アリサの不安を感じ取った事に変わりはない。だから大人らしく小さく微笑んで、その心遣いに感謝しつつ優しく声を掛けたのだ。

「……………気を遣わせてすまぬな」

「別にいいのよ。それと……………明日からよろしくね」

そう言っただけでアリサは屋敷の中へと入っていく。その後ろ姿を見送るながら小次郎は笑みを浮かべる。出会った当初はどこか不安定な心をしていたアリサ。それが、今や当然のように他者へ気を配るよ

うになっている。その成長を感じ、笑っていたのだ。

(男子、三日会わずば剋目して見よとは言つが、女子も似た様なものよ。ふむ、子を持つ親の気持ちとはこうであるか)

自分の考えが親のように思え、小次郎は心底おかしそうに笑う。それを夕日がただ黙って見つめていた……

.....

空白期という幕間。こんな感じに書いていこうと思います。やはり戦闘描写が苦手です。書けてもこんな感じに短い……

やはり書いて思つのは、こんな日常を書く方が俺にはまだ向いてると感じる事です。

鼓動編（無印ver）

「バルディッシュ、セットアップ」

”セットアップ”

フェイトの体を包み込む魔力の光。それがほぼ一瞬で衣服へ変化し、フェイトを包む。それを見て、ランサーはしきりに感心していた。無論、バリアジャケットにはなくバルディッシュにである。リニスが完成形だと胸を張っただけあり、それはランサーの目から見ても良い出来と思えたからだ。そして、ならばランサーが抱く気持ちはただ一つだった。

「じゃ、早速やるか」

フェイトがバルディッシュの感触を確かめたのを見計らって、ランサーはそう笑って言った。その雰囲気は早く戦ってみたいというものだ。それにフェイトも頷き返す。

行われているのはいつもの訓練。ただ、実際の試合は最後。それまではリニスとランサーによる戦術の講義。死線を何度も越えたランサーの話は何にも勝る生き残る術であり、リニスはもとよりアルフですらその話に聞き惚れる程の英雄譚なのだ。まあ、ランサー本人はそんな気は更々ないし、意図的に話していない部分もある。

ランサーの話が終われば、次はリニスによる魔法を用いた戦術の話に変わる。これはランサーも興味を持っていて、特に設置型の魔法を聞き、ルーンと組み合わせられないかと本気で考えているくらいだ。しかし、ランサーは魔法が使えない事が分かり、それは幻と

消えた。

そして講義が一段落すると、ランサーとアルフが食事を要求する。それに苦笑しながら動くリニスと手伝いを買って出るフェイト。と、ここまでがいつもの流れ。ランサーとアルフによる肉の奪い合いがあり、それを何とかしようとするフェイトとリニスが楽しそうに見つめるのもいつもの事。

そんな風に時間は過ぎる。しかし、その穏やかさと温かさはフェイト達にとって欠かす事の出来ないものとなっていた。だが、その時間は確実に何かの始まりを運び始めていた……

「ま、今日はここまでだな」

「……ですね」

ランサーの視線の先には、大の字になって倒れているアルフとバルディッシュを支えに何とか立っているフェイトの姿がある。リニスは床に座り込み、疲れながらもランサーの言葉に笑みを浮かべて応じていた。

ランサーとの戦いは、フェイト達にとって得る物ばかりだった。魔法が通じない相手にどう対処すべきか。もし勝てないならどうすればいいのか。そんな事を即座に判断し、実行しなければ、待つているのは敗北という名の死。

無論、非殺傷の概念や次元世界の常識はランサーもリニス達から聞いて知っている。だが、彼は本当の戦場を知っている。故に彼女

達へこう告げた。

追い詰められた奴が、そんな事に構ってくれると思うな。

そうバツサリと切って捨てたのだ。そもそも、戦うのに自分の命を賭けない事自体、ランサーには信じられない事なのだ。戦いとは互いの生死を賭けたもの。ならば、傷を付けられるどころか命を失う事が当然である。

その事を身を以って知っているランサーだからこそフェイト達へ教えたかったのだ。戦場に出してしまえば男も女もなく、また常識などは無視される事さえあるのだと。

故に、ランサーが叩き込んでいるのは勝つ方法ではなく負けない方法。如何にすれば、格上を相手にしても負けずにすむか。どうすれば逃げられるかを徹底的に教え込んでいた。

フェイトはランサーに持ち前のスピードを見出され、アルフと共に前衛としての心構えと役割を教え込まれた。リニスには司令塔としての重要性和後衛としての弱点を示唆された。

「撤退は負けじゃねえ。立派な戦術だ。どんなに笑われても、侮辱されてもいい。とにかく生きろ」

ランサーは訓練を終えて休む三人にそう告げ、最後にこう締めくくった。

「生きて生きて、最後に勝って笑うのさ」

獰猛な笑みでそう言い切ったランサーにフェイト達は何も言えず、ただその顔を見つめるだけだった。三人は知らない。それがランサーの本来の戦い方ではない事を。誰よりも逃げを打つ事を好まない

事を……

突然だが、ランサーは戦いが好きだ。それと同じぐらい宴会が好きだった。気に入った相手との語らいは、何にも勝るランサーの楽しみの一つなのだ。そしてこの日はそんな彼が好きな宴会の口実があった。

「「バルディッシュ完成おめでとう！」」

「お、おめでとう……」

バルディッシュ完成祝いである。揃って製作者であるリニスへ向かって声を掛けるランサーとアルフだったが、そのテンションの高さに若干気後れ気味のフェイトがいた。そんな三人にリニスは微笑みを浮かべて応じる。

「ふふっ、ありがとうございます」

テーブルには、リニスの作った料理が所狭しと並んでいる。肉料理が多いのは、ま、ご愛嬌という奴である。言い終わるや否や思い思いに手を伸ばすランサーとアルフ。その標的は肉料理。まさに肉食獣そのものだ。

「まったく、少しは落ち着いて食べてください」

「いいじゃないか。本当にめでたい事なんだか……って！ それ、



「アタシの！」

「へ、余所見する方が悪いんだよ」

子供っぽい笑みを浮かべ、アルフの手にしていた鳥の唐揚げを口に入れるランサー。それに怒り心頭と言った顔で迫るアルフ。そのやり取りは、まるで似た者同士というか兄妹みたいというか。とにかく、それをフェイトもリニスも呆れながらもどこか笑顔で見つめる。

そしてフェイトは思う。この場に母が居ればどれだけ楽しいのだろうか、と。しかし、今プレシアは体調を崩し、自室で療養している。リニスとランサーが世話しているので大丈夫だとは思っているが、それでも会いたいと思ってしまうのだ。

（でもダメ。ランサーが言った。母さんは私を大事に思ってる。だから、病気がうつらないように滅多に会っちゃいけないんだ）

ランサーからそれを告げられた時、フェイトは嬉しくて思わず泣いてしまった。それをランサーが気まずそうにしながら、優しく頭を撫でてくれたのをフェイトは今でも覚えている。

だからだろうか。フェイトはリニスが姉なら、ランサーは兄だと思っっている。共に自分を教え導いてくれる存在。優しくもあり、厳しくもある二人はフェイトにとって愛しい家族なのだ。そこまで考え、ならばとフェイトは思う事があった。

（アルフは……どうだろうか？）

そう考え、フェイトは笑みを一つ。何となく友人という答えが一番近い気がしたのだ。そして一人強く思う。いつか必ず、この輪の中に母を加えてみせる。そんな事を心に誓うのだった……

「具合はどうだ？」

「良くはないわね」

ランサーの問いかけにプレシアは寝たままで応じた。そう、ルーンを刻まれた部屋の中央にあるベッドにプレシアは横たわっているのだ。内側には力の太陽を、外側には守護を意味する大鹿を刻み、免疫力と生命力を増加させている。

ランサーはルーン魔術を使ってプレシアの体を出来る限り休め、アリシアの事をリニスに任せる事を提案した。無論、自身が持つ魔術の知識を教え、それと魔法技術を組み合わせる研究も既にリニスが始めている。

ランサーが狙ったのはプレシアの暴走阻止。それとフェイト達との和解だった。体を病魔に蝕まれ、精神的にもプレシアは追い詰められていったのだとランサーは読んだのだ。

故に愛する娘を突破口に自分を見つめ直す時間を与え、以前の状態に近付けようとしていた。勿論それだけではない。可能ならばアリシアもどうにかしたいと考えている。何故ならば、彼女は……

（フェイトの姉ちゃん、だからな）

未だに互いの存在を知らない二人ではあるが、もし可能ならおそろく助けたいとフェイトは思い、アリシアもまた彼女に会いたいと願うだろう。アリシアが喋れるのなら、きつとそう告げる。

そうランサーもリニスも思っていた。だからこそ余計プレシアを死なせる訳にはいかなかった。プレシアの状態が今のようになった背景には、アリシアの蘇生を目指した事が大きく関係しているからだ。

(母親が自分のせいで死んじまうなんて……させるかよ！)

もしアリシアが目を覚ました時、母親が余命幾ばくもなく、それが自分のためだと知ればどうなるか。今度はアリシアがプレシアと同じ気持ちになるかもしれない。そこまで考えランサーは首を振る。そんな事はないと。自分が絶対に阻止してみせる。例え、この身が朽ち果てようとも。そんな事を思っているランサーをプレシアは黙って見つめていた。

自分が人形と内心呼んでいるフェイトを守り、使い魔でしかないリニスを欲しがり、煩いアルフをからかい、そして。

(私を助けようとする、なんてね)

プレシアはそう思い、微かに笑う。それは嘲笑。自分に対する嘲り。己を省みず、ただアリシアの事だけを考えていたはずだった。でも、ランサーの一言がそれを間違いだと言わせた。

アリシアが生き返っても、自分が共に過ごせないならそれに何の意味がある。あの楽しかった日々を取り戻すために自分は行動していたのではなかったのか。そう気付いた時、プレシアはやっと冷静に自己を見つめる事が出来た。

そして思い出したのだ。かつてアリシアと約束した事を。だからこそランサーの提案を受け入れ、こうして療養しているのだ。

「おかしなものね……」

「あん？」

「何で、今までこんな簡単な事に気付かなかつたのかしら」

プレシアの言葉にランサーは理解出来ないでも僅かに推測するべく考える。そして、心底呆れたように返した。

何でも難しく考えすぎなんだよ、てめえは。

そんなランサーの言葉にプレシアはそうねと返し、思いを馳せる。あの失った日々。それが取り戻せる。そんな予感を感じながら……

アルフは困惑していた。ランサーから話しておきたい事があると  
言われ、彼の部屋に呼び出されていたからだ。その理由にまったく  
見当も付かず、更にその時の真剣な表情を思い出してアルフは顔を  
赤める。が、それを首を振る事でいつもの状態へと戻して呟いた。

「一体何だつてのさ……話ならリニスとでもすればいいだろ」

この前、久しぶりにフェイト達の前に現れたプレシアはこう告げ  
た。リニスは今後ランサーを主とするようにと。その理由が分から  
ないフェイトとアルフは困惑したが、リニスはその瞬間目を閉じて  
嬉しそうに頷いたのだ。

そして、現在リニスはランサーの傍でプレシアの世話にあたって

いる。今のリニス様子は見ていて分かるぐらい嬉しそうなのだ。アルフもリニスと同じく元は動物だ。だからこそ余計分かる。リニスが女としてランサーに惹かれていている事は。

(バカらし……何でアタシ、こんな事考えてんだろ)

アルフにとって、ランサーはフェイトや自分を鍛え、食事を取り合い、よくちよっかいを出してくる奴でしかない。決して、戦っている時は恐ろしいけどカッコイイとか、何だかんだで自分の好きなものは譲ってくれて優しいとか、たまに可愛いとかいい女だとか言われて嬉しいとか思っていないのだ。

そんな色々を思い出し、アルフは再び首を振る。そして、意を決してランサーの部屋へ入った。

「呼ばれたから来たぞ〜」

「おう。ま、ここに座れよ」

ランサーの部屋はほとんど物が無い。正確にはベッドと時計以外ない。物欲がないのか、ただ何かを置くのが嫌いなのか知らないが、とにかくランサーの部屋は綺麗だった。

そんな事を思っているのが分かったのか、ランサーは笑って告げた。同じ顔を一度訪れた際、フェイトもしたのだ。故にアルフの考えている事はお見通しと言う訳だった。

「欲しいもんはあるが、暇がなくてな。何せ、今は色々忙しいしよ」

「そんなもんかい？」

「そんなもんだ」

その割にはよく昼寝している所を見かけたりする。そうアルフは思つて、言うのを止めた。これではいつものように雑談とからかいの流れにいく。そう感じて視線をランサーに送る。

それをランサーも分かつたのか、先程までの軽い雰囲気は鳴りを潜め、たまに見せる真剣な表情に変わる。それだけでアルフは話とというのが重要な部類と理解した。

「話つてのは、簡単に言えば今後の事だ」

ランサーはそう言つて、低い声でただしと付け加えた。その前にしなければならぬ話がある、と。そこでランサーが話し出すのはフェイト誕生に関する一連の出来事。

アルフはそれを聞きながら、何故ランサーが精神リンクを切つておけと前置いたのかを理解していた。とてもではないが、フェイトに対して自身の動揺を隠せないだろうとランサーが読んだのだと。

やがて話は終わり、アルフは感情のやり場に困つていた。大事なフェイトを道具としか考えていなかったプレシア。その彼女がフェイトの姉に当たる少女を想つて行動し続けていた事。そして、その無理が祟つて体を弱らせている事。それを何とかするべく、リニスとランサーが努力している事。

それらを聞いてプレシアへ怒りを心から抱けなくなったのだ。無論プレシアへの怒りは今も当然ある。だが、ランサーに言われた言葉がそれを素直に出させないでいた。

アリシアがフェイトで、お前がプレシアならどうする。

そう。どうしようもない怒りを出せないでいたのは、理解出来てしまったから。なぜプレシアが凶行に走ったか。どうしてフェイトを見てくれなかったか。

(辛かったんだ……あの女も)

自分が失った愛する娘そっくりの存在。それから慕われる度に、心配される度に、己の過去を突きつけられている気分になっていたのだ。だからフェイトを娘ではなく道具として見なければならなかった。そうでもしなければ、自分の心が壊れてしまうと。

それだけ考えて、アルフは涙を浮かべた。理解も納得も出来た。しかし、それでも言わねばならない事がある。そんな心のままにアルフは叫んだ。

「でも！ 辛いのはあの女だけじゃないっ！ フェイトだって辛いんだよ！」

頑張っても頑張ってもプレシアはフェイトを見てくれない。どこまでいっても声さえ掛けてもらえない。それでもフェイトはいつも決まっつてこう言うのだ。

きつと、今度は笑ってくれる。

そんなフェイトの表情を思い出し、アルフは突然立ち上がると喉が張り裂けんばかりに吠える。それは最早言葉になっっていない。しかし、そこに込められたものはランサーには伝わった。

フェイトの想いがプレシアへ届けと。純粹な願いが、無垢な祈りが叶うようにと言わんばかりの強い思い。それが、アルフの全身を通して流れているように感じられたからだ。

そんなアルフの咆哮を聞きながら、ランサーは静かにその頭に手を置き呟く。

「もういい。もう分かった。だから、泣くな」

女に泣かれるのは、苦手なんだよ。

その言葉にアルフは我に帰る。ランサーはただ気まずそうに頭を手を置いていただけ。それだけ、それだけのはずなのに、アルフは涙が止まらなかった。

それは、さつきまでの涙とはまた違う涙。先程のものが悲しみの涙なら、今流れているのは嬉しさの涙。自分と同じ思いを持っている奴がここにいる。フェイトを、リニスを、自分達を絶対に裏切らない存在がここにいる。そう思って、アルフは流れる涙を拭いながら笑みを浮かべるのだった……

ややあって、アルフが落ち着きを取り戻したのを確認し、ランサーは本題を告げた。それはこれからの事。フェイトの地力を上げ、どんな相手にも負ける事がないようにしていく。そして、アルハザードなどという不確かなものではない方法でアリシアを助けられるものを見つけて出す。

それと同時にプレシアの体を治す術を見つけてはならない。ルーンで出来るのは、精々延命治療のようなもの。根本的な解決策を見つけてはいけないのだ。

「で、お前にも協力してもらいたくってな」



「フェイトに教えないのはやっぱり……?」

「あゝ、まあ、なんだ……出来るなら最後まで知らねえ方がいい」

そうアルフに告げるランサーはどこか遠い目をしていた。その目にアルフが感じたものは哀しみ。きつとランサーも、この事で思う事があるのだろう。

アルフはそう考えて不敵に笑う。それはアルフなりの励まし。いつも自分をやり込めてくれるランサーへの、ちよつとした返し。決して泣いたところを見られた気恥ずかしさからくるものではない。そう自分を納得させてアルフは口を開いた。

「とか何とか言つてさ、話すのがメンドーなだけだろ」

「はっ、んなワケね〜だろ」

「いや、そうだね。大体あんたはさ……」

そこから愚痴を言い始めるアルフ。それをあしらいなながらも、たまにムキになって反論するランサー。それにアルフもヒートアップし、口論は三十分も続いた。

その終止符はアルフのお腹の音。揃つて時計を見ればそろそろ夕食時。そのため、毒気を抜かれたからかランサーも笑みを浮かべてアルフを見る。そのランサーの笑顔が気に入らなかったアルフは、鋭い犬歯を見せて尋ねた。

「何さ?」

「何、やっぱり可愛らしいって言うんだよな。この場合はよ」



## 鼓動編 (A・sver)

朝の日課である洗濯物を干しながら、アーチャーは視線を感じ振り向いた。そこには既にお馴染みとなった猫の姿があった。やはり今日も来たのかと思いつながら、アーチャーはそれでも笑みをみせて猫へ近付いていく。

「待っていたぞ」

アーチャーはそう言うと、以前の小魚ではなく用意してあった御椀を猫の前に置く。そこには俗に言うねこまんまが入っている。朝食の残りを使ったものだが、アーチャーは捨ててしまうよりは有効活用するべきと考えて用意したのだ。

「残り物ですまないが、味は保障する。食べてくれ」

そうアーチャーが言うとそれを理解したのか、猫は渋々と言った雰囲気では食べ始めるが一口食べて動きが止まる。それにアーチャーの表情が強張った。まさか自分の料理は動物には通用しないのか。そんな考えが一瞬過ぎり、思い直す。

いや、自分の料理はあの冬木のトラにも通用したのだ。ならば、同じ猫科の生き物に通じぬはずはない。そんなどこかピントのずれた事を考え、アーチャーは猫を見つめた。

そんな風にアーチャーが自分の料理へ絶対の自信を取り戻すと同時に、猫が先程よりも速い速度で食事を再開した。それを安堵の表情で見つめるアーチャー。だが、今日はこれで終わりではない。はやてに頼まれた事を遂行しなければならぬのだ。それは、昨日のとある会話から始まった……

「な、アーチャー。聞きたい事があるんやけど」

「どうした？ 分からない問題でもあったか」

そう答えてアーチャーは畳んでいた衣服をテーブルに置く。今年、本来なら学校に通うはずだったはやては、通信教育という形で勉強に励む事にした。学校に行けない事もないが、無理して何かあったら大変だとはやて自身が決断したのだ。

本音はアーチャーと離れたくないという事だったのだが、それを素直に言える程はやては精神的に幼くなかった。まあ、アーチャーにはどこかで気付かれているのだが。

「ちやう。勉強の事やなくて、猫の事や」

「……問題に集中しないか」

「それがちやう気になってな。あの猫ちゃんって、オスなんかメスなんか聞いてなかったって思い出したんよ」

そんなはやての言葉にアーチャーは呆気にとられるが、確かに自分も確かめてはいない事を思い出し、呟いた。

「言われてみれば確かに確認していなかったな」

「な、そやから名前決めるためにも明日確認しといて。もう、大分

「懐いたんやろ？」

はやての言う通り、この三週間小魚や干物などを与えてかなり警戒心は薄れているが、それも以前と比べればだ。まだどこか心を許していない気がアーチャーにはしていた。

理由は猫の視線。大分マシにはなったが、未だにこちらを見る視線はどこか鋭い。おそらく人間に余程酷い目に合わされたのだろうと、アーチャーは推察していた。

密かに飼い猫にしようと思ははやてに対し、何度となくアーチャーが釘を刺しているのもそれが根底にある。距離を置いて接するべきだ。それがアーチャーの結論。よって名前をつけるのは反対しいが、飼い猫になるとなると話は別なので……

「分かった。明日何とか確認を取っておこう」

「うん。頼むな、アーチャー」

「だが、性別が分かったからと言って首輪を買うのはダメだ」

そのはつきりとした断言にははやてがやや動揺を見せる。

「な、何言つて」

「ホームセンターのチラシに赤丸が打ってあった。これは君の仕業だろう」

「しもた！ ……隠すの忘れとつた」

はやての言い訳を遮ってアーチャーが提示したのは一枚のチラシ。

そのチラシのペット用品のあれこれに見事赤のマジックでチェックがされていた。それを見て言い逃れは出来ないと悟り、はやては意気消沈して頂垂れた。

そんな彼女を見てアーチャーは軽く笑みを浮かべていたが、それをはやてが知る事はなかった。その後もはやてと雑談しながら、アーチャーはいつものようにその日を過ごしたのだ……

(さて、そろそろいいか)

昨日の出来事を思い返している間に御椀にあつた餌も綺麗に無くなり、猫は満足そうに舌なめずりまでしている。それを好機と見たアーチャーは、出来るだけ猫を怖がらせないように持ち上げた。

そしてその陰部を確認して 暴れ出した猫に手を激しく引つ搔かれた。じわりと血が流れる。受肉したため、簡単に傷を負う事になったと思ひながらアーチャーは猫を見つめた。

「……やはりまだ触るのは早かったか？」

威嚇の声を上げアーチャーを睨む猫。心なしか、顔が赤いようにアーチャーは思った。

「猫とはいえ、女性は女性か。すまない。故あって性別を確認したくてな。許してくれると助かる」

なんとなく感じた罪悪感を振り払うようにアーチャーは言った。その言葉に気を落ち着けたのか、猫は幾分か機嫌を戻したようであ

アーチャーを見る目がいつものものに近くなった。

それにアーチャーは息を吐く。これで猫が二度と来なくなれば、はやてに何を言われるか分からなかったからだ。とは言え、冷静に考えればはやてのせいとも言えなくもないのであるが。

安堵するアーチャーに猫は一鳴きすると、塀へ飛び移ってそのままどこかへ消えてしまった。ここ最近の去り際はこんな感じだな。そんな風に思いながら、アーチャーは残りの洗濯物を干していくのだった……

「それで、メスなんか」

「ああ。おかげで名誉の負傷だ」

「いや、チカンしたから当然やる」

「誰のせいだと思っている」

「まだ危ないから私に任せておけ……」って言ったアーチャーのせい」

微妙に似ているモノマネをして告げるはやてに、アーチャーは反論を諦めた。こうなると結局はやてのペースになり、自分が折れなくてはいけなくなるからだ。

最近、アーチャーははやてとの論戦勝率が七割を切ったように感じていた。まあもつともそれは彼自身のせいなので、自業自得なのだが。ともあれ、猫の性別が判明したのならばはやてが張り切らぬは

ずはない。

「じゃあ、名前は女の子っぽくせなあかな！」

「……好きにしまえ」

もう何を言っても無駄だ。そうアーチャーに思わせる八神はやて。現在、小学一年生。

「うーん……キティは……外国っぽいなあ。ルナ……って黒猫やないし……」

あ〜でもないこ〜でもないと言いながら、楽しそうに笑うはやて。その顔を見てアーチャーも笑みを浮かべる。すると、そこへはやてが問いかけた。何かいい案はないかと。それにアーチャーはやや考え、ある事を思いついて冗談交じりにこう答えた。

「リン、と言うのはどうだ？」

アーチャーにしてみれば、それは他愛　いや悪意しかない冗談だったのだが、凜の事を知らないはやてが気付くはずはなく、何度かその名を繰り返して満足そうに頷いた。

「よし！ それや！」

「なっ?!」

驚くアーチャーを尻目にはやては綺麗な名前だと凜の名を誉めている。このままでは猫の名がリンと言う名で決まる。そう考えた途端、どこからかあかいあくまの声で「猫に私の名前付けるなんてい



い度胸してるわね。待つてなさい。すぐそっちに行つてあげるから」と幻聴が聞こえた気がした。

そう思ったアーチャーの行動は迅速だった。まずはやての前に立ち、その両肩に手を置いて真剣な眼で告げた。

「すまないが、その名はやはりやめてもらえるか」

「なんで？ 綺麗やし、ええ」

「頼む」

はやての言葉を遮り、アーチャーは有無を言わせない口調で告げた。その初めて見るアーチャーの真剣な表情に、はやては顔が火照るのを感じ、急いで俯いた。

何故かそれをアーチャーには見られたくないと思つたのだ。更にそれを悟られないために普段よりも大きい声で告げる。

「わ、分かった。なら、他の名前考えてな」

その言葉に安堵したアーチャーは善処しようとして返してはやてから離れていく。その足音を聞きながらはやては顔を押しさえていた。やはり少し熱い気がすると、はやては感じた。

（何やる……？ 風邪やるか？ でも、体はダルないし……）

きつと見つめられて恥ずかしかつたのだろう。そう結論付け、はやては再び勉強に意識を向ける。いつか歩けるようになった時、学校の授業についていけるように。そう考え、はやては強い志を胸に問題集へと挑むのであった……

図書館の前で立ち尽くすアーチャー。彼は今はやてを待っていた。本来ならついでに行くのだが、はやては自分で行ける所は一人で行きたいと、アーチャーを待たせて、中へと入っていったのだ。

（用件は返却のみだし、そう心配する事もないか）

そう考え、アーチャーは笑みを浮かべる。少々過保護かもしれないと思っただからだ。時折吹き抜ける春風が日差しを浴びる体に心地良い。そうアーチャーが感じた時、周囲の空間が色褪せて一切の音が聞こえなくなった。

「ほう……結界の類か。この世界に魔術師はいないはずだったのだが、私も耄碌したかな？」

解析せずとも、アーチャーにはこれが結界である事はすぐに理解出来た。過程こそ違い、世界が変わるように感じると言う点では彼の切り札と同じなのだから。

そんな風に軽口を叩きながら、周囲を警戒しつつアーチャーは気配を探る。相手が自分に対し友好的な存在とは思えなかったからだ。もし仮にそうだとすれば、こんな事をしないで接触してくる。そう判断したからだ。

「お前は何者だ」

そんなアーチャーの目の前に仮面を着けた男が突然現れた。その

視線を受け、アーチャーは思い出す事があった。

「貴様か。ずっと私を監視していたのは……」

「答える。お前は何者だ。なぜあの少女の下にいる」

仮面の男の言い方にアーチャーが微かに表情を変える。それは怒りと嘲り。自分達を監視しておきながら何も理解していない。そう感じたからの感情。あの少女が望んだ在り方。それは決して上下関係など有り得ないのだから。

「下にいる、だと？ 違うな。散々監視しておきながら、そんな事も分からなかったのか？」

「何？」

「私ははやての下にいるのではない……共にあるのだ！」

気合一閃。アーチャーは投影した干将・莫耶で男に斬りかかった。その鋭い一撃を前にして男が取った行動は、回避でも防御でもなかった。ただ、その手を前に出しただけだったのだ。しかし、それにアーチャーは驚愕する事になる。

「何だと?!」

男の前にバリアとでも呼ぶべきものが展開されたのだ。それが干将・莫耶の切っ先を防いでいる。と、そこで男から何か嫌なモノを感じ取ったアーチャーは即座にその場から離れた。

直後、そこに光の弾が殺到した。それを察知したアーチャーの行動に男は感嘆の声を上げる。だがアーチャーはそんな声に反応を返

さず、鋭い視線を向けるのみ。

「良く気付いたな。もう少しだったんだが」

「生憎、悪運は強くてね。こういう時の勘は良く当たる」

「成程な」

アーチャーの答えに苦笑している男だったが、その体に然程隙はなく、アーチャーも攻めあぐねていた。あまり手の内を晒したくないという思いと相手の魔術が問題だったのだ。

詠唱もなく、瞬時に展開出来る防御魔術などアーチャーも聞いた事がなかった。それでもあのまま押し切っていれば、おそらくあの盾は壊せる。しかし問題があったのだ。

（先程のやり方といい、戦い慣れしていると見ていいだろう。ならば、他にも何か手を打っていると思っただ方がいいな）

魔術師には二つのタイプがいる。一つは学問として魔術を研究している者。もう一つが魔術を実践的に研究している者だ。おそらく目の前の相手は後者だろうと踏み、アーチャーは警戒した。

戦い慣れした未知の魔術師相手に戦うには状況が悪すぎたのだ。何しろここは相手の展開した結界の中。故に何が起きるかも分からないためだ。

それでもアーチャーは現状を打破する術を模索する。宝具クラスを投影すればこの結果を破壊出来るだろう。だが、それはリスクが大き過ぎる。それは自分が異能者と相手へ告げ、妙な興味を抱かれる事になりかねないからだ。

「……一つ答える」

結界を突破する術を考えていたアーチャーへ、仮面の男はいきなりそう切り出した。それを無視しようかとも考えたアーチャーだったが、何か情報を得られるかもしれないと思いついた。

「何かな？」

「お前は……守護騎士ではないのか？」

「守護騎士？ 君にはこの身が騎士に見えるかね？ 私はただのしがない弓兵だよ」

「つまり守護騎士ではないのだな」

「さてどうだろうな。実はそうだとしたらどうする」

アーチャーの音が一段と低くなる。そして、その身に纏う闘気がより濃いものへと変わっていく。それに男は静かに頷き、何故か構えをといた。それに警戒を強めるアーチャーだったが、それを気にせずに男は言った。

「もうお前に用はない」

「おや……逃げるつもりか？」

「ああ、そうさせてもらおう」

アーチャーの挑発をアッサリと男は受け流し、その場から空に向かって。

「飛んだだと……」

「一つだけ忠告する。あの本には関わるな」

「待て！ あの本が狙いなら何故奪いに来ない。いや、そもそもどうして監視に留める。その気になれば」

アーチャーの言葉に答える事なく、そのまま仮面の男は姿を消した。それと同時に色褪せていた景色が戻り、日常の音が甦った。そんな中、アーチャーは先程の戦いで得た情報を整理していた。

（得られた情報は、守護騎士と言う言葉に……謎の魔術）

それに、とアーチャーは呟き、視線を空へと移した。

「あの本に関わるな、か」

それはつまりはやてに関わるなと言う事だ。そして関わり続ける限り、またあの仮面の男が現れる。だとしても、アーチャーは構わなかった。あの得体の知れない攻撃は厄介だが、勝てぬ相手ではないとアーチャーは感じていたのだ。

故に次に戦う事があれば必ず倒す。それだけの確信が出来る要因があるからだ。それは相手から感じた魔力量。確かに中々のものだが、それはあくまで人間としては、だ。加えて戦い慣れはしているようだが、接近戦は不得手と見たのだ。

その証拠にアーチャーの剣撃をかわせなかった。様子見と情報収集をするために加減した一撃だったのだが、相手はそれに反応できなかったからだ。ならばこの身で勝てない者ではない。



るので楽しみに。



## 交流編その1

その日、すずかは図書館に来ていた。読書好きのすずかは買うだけでなく、こうして手軽に本を読める図書館にもよく顔を出すようになった。それに付き添う形でライダーも来ているのだが、最近すずかはむしろ自分がその付き添いで来ているような感覚があった。

それは読書好きのライダーへ図書館の事を教えた事に端を発する。彼女は個人では買う事が難しい蔵書を持つ図書館を気に入ったのだ。今も難しい専門書の辺りで本を探している。

「……また貸し出し不可なんだろうなあ」

すずかの視線の先には、大きな本をその場で読み始めたライダーの姿があった。ライダーがその場で本を読むのは、大抵そういうケースなのだ。

どうして座って読まないのかとすずかが尋ねた際、ライダーは座りに行く時間ももつたいたいと答えた。なので、今のライダーは完全に読者モード。おそらくすずかが声を掛けるか、本を読み終わるまでその場から動かないだろう。

そんな光景に笑みを浮かべ、すずかも再び周囲の本を見渡し、興味が湧く物がないか探し始めた。その時、視線の先に車椅子の少女が映った。その少女はすずかも何度か見かけた事がある。

どうやら棚の中段にある本を取ろうとしているらしい。だが、車椅子の上に背丈が低い事もあり、当然ながら手が届かない。それでも何とか取ろうとしているため、先程から見ているとはらはらするような体勢をしていた。

「あのままじゃ危ないよね」

そう思うや否やすくは踏み台を探した。そしてその少女の近くに立って、目的の本を手に取ると彼女へと差し出した。

「はい。これだよな？」

「あ、どうもありがとうございます」

その独特の訛りを含んだ喋り方にすくは若干驚き、そして笑みを返す。

「どういたしまして。でも、ダメだよ。見てて危なかったから」

少しドキツとしちゃった。そうすくは続けた。それに少女は少しバツが悪そうに頬を指で掻く。どうやら自分でもそう感じていたらしい。

「あはは、ほんま助かりました。実はわたしも、これ、ちょう危ないかなって思ってた」

「ホントにね。何もなくてよかったよ」

「ほんまにありがとうございました」

そう言っ頭を下げる少女にすくは微笑みを浮かべた。そして、ある事を思いついて名前を尋ねる。

「ね、お名前教えてもらってもいい？」

「えっ？」

そんな事を聞かれるとは思わなかったのか、少女の顔が驚きに変わる。自分も逆の立場ならそうなるだろうなと想像し、またそんな反応を好ましく思いながら、すずかはまずはと自分の名を告げた。

「私、月村すずかって言います」

「あつ……ええつと、わたしははやて。八神はやて言います」

「はやてちゃん、だね。……うん。可愛い名前」

「そんな……。それ言うたら、月村」

「すずかでもいいよ」

はやてが苗字で呼ぼうとするのを聞いて、笑顔で遮りながらすずかは名前と呼んでくれる事を願った。その申し出に再びはやてが驚きを見せるも、ならばと一度軽く咳払いをしてから言葉を紡いだ。

「こほん。えつと、すずかちゃんもキレイな響きやんか」

はやての綺麗との評価にすずかは思わず照れ笑い。それを見てはやてが更に誉め始めて数分で二人のやり取りはお開きとなる。はやての背後にライダーが現れたのだ。

だが、まったく気配も感じさせずに現れた事に驚き、その場で固まるはやて。しかし、小声で「メイドさんや……」と呟いているので原因はそれだけではないようだ。更にその目はしっかりとライダーの胸部に注がれている。

「スズカ、そろそろお昼です」

はやての視線を意に介さずライダーはそう告げた。すずかはその言葉に手元の時計へ目をやった。確かに時刻は正午を告げようとしていた。確かにそろそろ帰宅しなければ昼食を食べるのが遅くなり、忍辺りが文句を言いかねない。

そう考え、すずかは小さく苦笑する。ライダーも同じ事を考えているのか、その表情は笑みを浮かべている。すずかはそれを見て、先程とは違う笑みを浮かべるとはやてへ視線を向けた。

「ごめんね、はやてちゃん。また今度会おうね」

「え？ あ、うん！ またな、すずかちゃん！」

それを合図に互いへ手を振り合い別れる二人。はやてはすずかの今度との言葉に、驚きと嬉しさを感じたために反応が若干遅れた。ライダーはそんな様子を眺め、不思議に思っただけを傾げた。

すずかの交友関係を既に把握しているライダーにとって、はやては未知なる存在だったからだ。まだ把握していなかった友人がいたか。そう思い直し、確認をとライダーはすずかへはやての事を尋ねた。

「スズカ、彼女も友人ですか？」

「そうならいいかな。はやてちゃんって言って、今日知り合っただけの子なんだ」

「そうですか……」

ならば納得です。そう呟きライダーは歩く。その手はすずかと繋

がれていた。彼女達は知らない。それが、とても大事な出会いになる事を……

「少し遅くなってしまったか」

今日は休日という事もあり、はやてを図書館に送った後にアーチャーは一人買い物を買わせていた。本当ははやても行きたがっているのだが、アーチャーとしては、休日は混雑が予想されるため周囲の迷惑になりかねないと言って彼女を説得していた。

そのため、祝祭日や休日等の日は自分一人で買い物を買わせる事になっている。まあ、その反面はやてが色々と要求する事になり、アーチャーに迷惑を掛けているのだが、彼も彼女もそれを互いに楽しんでいる節があるのでいいのだろう。

そして、この日ははやてが欲しがっているゲーム機を買いに行く事になっている。そのため軽く摘める物と思い、アーチャーはサンドイツチを作ってきたのだが、そのために少し時間を食ってしまったのだ。

「ん？ ……上機嫌だな」

そう呟くアーチャーの視線の先には笑顔で手を振るはやての姿があった。その様子に軽く意外性を感じたアーチャーは、疑問を浮かべたまま車椅子の後ろに立つ。

「ちよう遅刻や」

「すまない。簡単な昼食を作っていたのでね。後で公園でも食べよう」

「そか。ま、今日は気分がええし、大目に見たる」

そう言っではやては再び満面の笑顔を見せる。それはアーチャーの見たバスケットの中身に期待しているだけではない。アーチャーはそう思い、聞いて欲しそうに自分を見つめるはやてに苦笑しつつ、その思惑に乗ってやる事にした。

何か良い事でもあったのか、と。それにはやては、よくぞ聞いてくれましたとばかりにすずかとの出会いを語り出した。それを合図に車椅子は動き出す。柔らかな日差しを浴びながら、カラカラと音が響く。その音にはやての楽しげな声が混ざっていた。

「で、今に至るっちゅーわけや」

「成程、良く分かった。で、もうそろそろお目当ての店だぞ」

どこか笑みを浮かべ、アーチャーは視線ではやてを促す。その先にはゲームシヨップがあった。それを見てはやては急かす様に視線をアーチャーに向ける。それに応じ、アーチャーは車椅子の速度を上げた。

それに楽しそうな声を上げるはやて。その声に悪戯じみた笑みを返し、アーチャーは更に速度を上げる。それにはさすがにはやても驚く。と、そこで即座に急停止を掛けるアーチャー。それでもはやてが落ちないようにしている所が彼らしい。

「おわっ！……何してくれるんや!？」

「何、君が楽しそうだったのね。少しばかり刺激を増やしたただだ」

満足して頂けたかね？ そう笑うアーチャーにはやては頬を膨らませる。仲の良い兄妹のような姿がそこにはあった……

麗らかな昼下がり。庭にあるテーブルに腰掛け、すずかはライダーが淹れてくれた紅茶を飲みながら春風を感じていた。その膝では猫が一匹心地良さそうに眠っている。それは向かいに座っているライダーも同じ。膝に乗った猫にどこか躊躇いながらも、その背を撫でている。

月村家は猫屋敷と呼んでもいい程猫がいる。その世話もノエル達の仕事の一つなのだが、ライダーはこの仕事だけが唯一苦手だった。彼女は蛇の属性を持っている。それがどうも猫と相性が良くないのか、あまり懐かれれないのだ。

「はやてちゃん、か。また会えるといいな」

「会えるでしょう。彼女もよく見かけます」

すずかの呟きにライダーはそう答える。彼女は平日も暇を見つけては図書館を訪れている。なのではやての事も知ってはいる。だが、彼女の傍にアーチャーがいる事には気付いていない。

受肉し、存在が完全に確立された状態ではサーヴァントとさえも気配は人とそう大差ないものになってしまうのだ。それにいかなる運命の悪戯か、ライダーがはやてに遭遇する時に限って彼女は返却

のみで帰ってしまうのだ。よって待っているアーチャーと鉢合わせる事もなかった。

「そうだった。それにしても……ライダーも大分手馴れてきたね」

「そうでしょうか？ 未だにこれだけはファリンに勝てません」

それ以外なら圧勝なのですが、と言いながらライダーは猫の喉を触る。それが嬉しいと言わんばかりに猫はご機嫌な声を出した。それにやや嬉しそうな笑みを浮かべるライダー。そんな彼女を見て、すずかは小さく微笑む。

「らしいね。ライダーに勝てる唯一の仕事だって、ファリンも自慢してたっけ」

胸を張ってそう言っていたファリンを思い出しながら、すずかはどこか苦笑するように言った。すると、それに応じるように後ろから声が聞こえた。

それ以外でも頑張っただけだね。

その声に振り向くすずか。そこには姉の忍がいた。手には一冊の本が握られている。機械工学系の物だ。そうして突然現れた忍は、当然のように空いてる椅子に座って紅茶を無言で催促する。

ライダーもそれを分かっているから、座った時点でカップに紅茶を注ぎ出しているのがこの家に慣れた事を如実に示している。程なく出てきた紅茶に満足そうに頷き、忍はカップに口をつけた。

「もう、お姉ちゃんったら自分で注ごうよ」



「人に淹れてもらうから美味しいんじゃない」

それに一応ライダーもメイドなんだからと、忍は笑う。ライダーもその言葉に頷き、すずかにこう告げた。

「そうですよスズカ。シノブはものぐさなだけです」

「っ！……ちょっとライダー！」

紅茶を噴出しそうになりながら、忍はライダーを軽く睨む。それに何でしょうと言いたそうな顔でライダーは首を傾げる。そんな反応を見て、更に不機嫌な眼差しを向ける忍。そしてその二人を笑いを堪えながらすずかは見ていた。

「誰がものぐさよ、誰が！」

「シノブですが……？」

「違っでしょ！」

「何がです？」

そんなやり取りが展開され、すずかはもう限界だった。堪えていた声を出し、その笑い声に二人は口論を止めた。すずかが笑う事は珍しい訳ではない。

だが声を上げて笑う事はあまりない。今もお腹に片手を当て、片手で何とか声を殺そうと口を覆って笑っている。そのためだろう。膝で眠っていた猫が起き出し、どこかへ行ってしまふ。それを眺めずすずかは申し訳ない気持ちを抱くも、声を抑える事が出来ずいた。

忍とライダーはやや唾然とした表情でその光景を見つめていたが、やがてそんな風に笑うすずかにどちらともなく微笑む。

「ま、もういいわ。何か気が削がれたし」

「同感です。スズカは心を癒す力でもあるのでしょうか？」

「さて、ね。……ライダー、もう一杯もらえる？」

「ええ、分かりました」

穏やかな昼下がり。月村家の庭を爽やかな風が吹き抜けていた……

それから一カ月後、図書館に楽しげに語らうすずかとはやての姿があった。あの後も度々出会った二人は当然のように本の話をするようになり、もう友人と呼んで差し支えない関係になっていたのだ。

「今日もライダーさん来てへんの？」

「うん。気を利かせてくれてるんだと思う」

そう、二人が楽しげに話すようになってからというものの、ライダーは意図的にすずかと図書館に行く事を避けるようになった。それは、学校が同じであるのは達と違って、すずかと中々会う事が出来ないはやてに配慮したためだ。

「そか。優しい人やな、ライダーさん」

「それ、ライダーに伝えとくね。きっと照れると思うけど」

「あ、ええなあ。照れるライダーさんとかわたしも見たい」

はやては既にライダーとも会話する仲になっていた。と言っても平日にたまに会えば、くらいのものが。ちなみに何度かその胸に手を出しそうになって踏み止まった事が多々ある。

もつとも、はやてが気付いていないだけでライダー自身はそんな彼女の葛藤を見ていたのだが、何も言わないだけだったりする。

「そや。今度、わたしの家に遊びに来て。面白いゲーム買ったんよ」

「そうなんだ。……じゃあ、来週の日曜日は大丈夫？」

「よっしゃ。なら、来週な」

「うん。来週ね」

はやてが出した小指にすずかも小指を絡ませ、互いに笑顔を見せる。

「いつか、アリサちゃんやなのはちゃんにも会わせたいんだけど…」

「…」

「あゝ、良く話してくれるお友達やな。写真で顔は知っとるし、わたしも会いたいけど……」

そう言つて二人揃つて苦笑い。二人の共通の話題はやはり本。だがアリサはともかく、なのはあまり本を読まないイメージがある。そうすずかは勝手に思っているのだが、それが意外と正解なのだから笑えない。

それを聞いているはやても一人会話に入れずオロオロするなのは想像した。二人の苦笑いは、つまりそういう事であった。

「あ、でもゲームはなのはちゃんも好きみたいだから」

「おお、なら何とかなるか」

そう言つてまた笑う。今度は水を得た魚のように元気な姿のなのはを思い浮かべたからだ。すずかは親しい友人を勝手な思い込みで動かす事に苦笑し、はやては直接話した事もない相手へ先入観を抱いている事に苦笑した。

「なんや、わたし達けっこうヒドイ事考えてる気がする」

「ふふ、同じく」

そう言つて笑みを浮かべ合いながらすずかは思う。きっと、アリサやなのはともはやては仲良くなれると。何しろ、あのライダーと物怖じせずに話す事が出来るのだから。

なら、アリサやなのはにも同じように接する事が出来るはず。そうすずかは結論付け、いつか来るだろう日々を思いを馳せる。はやてを加えた四人で楽しく過ごす、そんな光景に……

-----



空白期（H&Amp;A）

八神家、リビング。そこに難しい顔をしたはやてがいた。その向かいにはアーチャーが座っている。その二人の間には、様々な名前が書かれたチラシが置かれている。そのあちこちに×印が打たれているのだが。

どこか重苦しい空気漂う室内。とはいえ、実際ははやてが思っているだけなのだが。そんな中、搾り出すようにはやてが呟く。

「……なあ」

「何だ？」

「みーちゃん、てのはどうやる……？」

「……単純だが、いいとは思ってぞ」

「ぶぐ、もうちょうシリアスさを出さんかい」

どこか呆れたように答えるアーチャー。それに不満そうな表情を浮かべるはやてだが、どこか楽しそうだ。こうして、八神家に現れる猫はみーちゃんという名前に決まった。これは、その名前が決まった日の様子……

庭に出て、今か今かとみーちゃんを待つはやて。それを横目に苦

笑しつつ洗濯物を干していくアーチャー。時間から考えてそろそろ来る頃かと思い、アーチャーがはやてに食事の入った皿を渡す。

それは、みーちゃん用にされた皿。新しく買うと言って聞かなかつたはやてだったが、アーチャーの「無駄遣いは許さん」の一言に沈黙。それに二人では皿を沢山使う事もないので、一枚ぐらいみーちゃん用にしても問題は無かった。そのため、この日から八神家に”みーちゃん皿”と呼ばれるものが出来たのだった。

「おつ、来た来た」

可愛らしく声を出しながら、扉を降りるみーちゃん。それをいつも以上に笑顔で迎えるはやて。それに気付いたのか、みーちゃんはどこか不思議そうに首を傾げた。

が、はやてが皿を置くとそれもすぐに元に戻り、食事に駆け寄り食べ始める。まさしく猫まっしぐらという奴である。そんなみーちゃんの反応に満足そうな表情のアーチャー。はやてはそれに気付かず、嬉しそうにみーちゃんを眺めていた。

「おー、相変わらずよー食べるなあ」

「そうだな」

「うーん……でも、昨日はもうちょうゆっくり食べとった気がするなあ」

はやての呟いた何気ない一言にアーチャーも日々の事を思い出し、注意深くみーちゃんを見つめた。確かに初めて自分の作った食事を与えた時と今では、食べ方が若干違うように感じた。

(そういえば……あまり気にしていなかったが雰囲気もどこか時折

違う気がするな)

それが何故かは分からなかったが、アーチャーはそれを頭の片隅で覚えておく事にした。どうしてか、流していいような気がしなかったのだ。この時から、アーチャーの中で再びみーちゃんへの疑念が生まれ始めた。そして、それが思わぬ形で功を奏すのだがそれはまだ当分先の話。

やがてみーちゃんが食べ終えたのを見て、はやてが両手を広げて微笑みかける。それに応じてみーちゃんがはやてに近付いたところで……

「おいで、みーちゃん」

「っ?!」

「おわっ!?! ……どないしたんやろ」

呼びかけに驚いたのだ。明らかに呼ばれたのが自分の名前であると理解したかのように。それにはやても驚いた。だが、はやては突然呼びかけた事に驚いたとしか感じなかったのか、そのまま不思議そうにみーちゃんを見つめた。

するとみーちゃんも立ち直ったのか、再びはやてに向かって近付きその膝に乗った。それをどこか訝しげに見つめる者がいる。アーチャーだ。しかし、その視線を直接みーちゃんに向ける事はせず、洗濯物を干しながらそれに隠れるように見ている。

そして、はやてと戯れるみーちゃんを見つめながらある事を考えていた。それは、あの図書館前での襲撃以来感じなくなった監視の目との関連。



(あの仮面の男の視線を感じなくなつて久しいが……もしや……？  
いや、流石に考え過ぎか。だが、あの猫にはまだ何かある気がする。  
注意だけはしておくか)

そんな風に考えるアーチャーに気付かず、はやてとみーちゃんは  
楽しそうに遊ぶのだった……

「みーちゃん、ばいばい」

塀に登り、はやて達を見つめているみーちゃん。それに笑顔で手  
を振るはやて。アーチャーは苦笑混じりにそれを眺め、軽く手を振  
る。それに満足したのか、みーちゃんは一声鳴くとそのまま去つて  
行った。

それを見送り、はやては二度ほど頷いてアーチャーへ視線を向け  
た。その視線から何を言いたいかを察し、アーチャーはピシヤリと  
告げる。

「首輪はダメだ」

「何でや!?!」

どうして分かったという表情のはやて。それにアーチャーはため  
息一つ。仕方ないといった表情で告げた。

「先程の名前を呼んだ時の反応を見ただろう? あれは、おそらく

別の名で呼ばれているのだ。だからこそ、驚いたのだろう」

「そうなんか？ わたしはてっきり突然声を掛けたからや思ってた」

「それもあるかもしれん。とにかく、飼い猫の可能性も出てきた。首輪は、もう少し様子を見よう」

「うつつ……しゃくないか。でも、最後はもう受け入れてくれとったなあ」

初めこそ名前を呼んでも反応が悪かったみーちゃんだったが、徐々に慣れたのか最後は嬉しそうに鳴き声を上げていた。それを思い出し、はやては笑みを浮かべる。それにアーチャーは内心微笑みながらも、こつ咳く。

「ただ諦めただけかもしれんぞ」

「何で人の喜びに水差すんや！」

その一言にはやてが怒る。それに皮肉屋スマイルで「何、私は自分の経験から言ったただけだ」と返すアーチャー。そんな言葉にはやては一瞬笑みを浮かべるも、すぐに怒りの顔に戻し「どついう意味や！」と言い返す。

そこから始まるいつもの口論。だが、そこにあるのは怒りでも呆れでもない。この他愛ないやり取りを心から楽しんでいる。そう、喜びと嬉しさがそこには溢れている。

そして始まりは口論でも、それがやがてその日の話へと変わるのもいつもの事。昼食や夕食の献立をチラシヤ冷蔵庫の中身を確認し、

相談しながら決めていく。

最近はやても作れるものが増えてきており、簡単な食事ならば一人でもこなせる程に成長していた。だが、味は未だにアーチャーには遠く及ばず、更なる精進を誓いはやてはアーチャーの教えを受けているのだ。

「今日は……牛肉が安い、か」

「あ、なら肉野菜炒めはどうやる。そろそろ野菜使い切らんと……」

「そうだな。なら、それは夕食にしよう。片栗粉でとろみをつけ、中華丼仕立てにすればいい」

「おう、じゃ、わたしスープ作る。卵とワカメで中華スープ！」

「ほう……では頼む。さて昼食だが……」

「な、それなんやけど……」

こんな感じで会話する二人。とても子供と大人の会話ではないが、それでもどこか楽しそうに二人は話す。何を作るか。誰がやるか。チラシを前に色々意見を出し合う。

はやての要望をどこか嫌がりながらも、それを叶えてやるアーチャー。アーチャーの意見を納得しながらも、どこかで反論するはやて。でも、結局最終的には両者とも受け入れてしまうのだから仲がいい。

そんなこんなでこの日も献立を決め、はやての勉強が終わり次第買い物に行く事で決着となった。

「よっしゃ。ならさくつと終わらせよか」

「そうか。では三分間で片付けろ」

「どこの巨大ヒーローや！」

そんな馬鹿げた会話もまたご愛嬌。ともあれ、アーチャーから分らない場所を教えてもらいながらのはやての勉強も終わり、二人は強い日差しの中へと出かけるのだった……

外の暑さが嘘のように感じる店内。そこにアーチャーとはやてはいた。梅雨に入り、蒸し暑い日が続く中、はやての楽しみは晴れた日のみーちゃんとの戯れと図書館でのすずかとの会話。そして、スーパーでの買い物なのだ。

別に雨が降っても構わないのだが、アーチャーが風邪を引く事もあると言って中々出させてくれない。そのため、彼女は雨の日は退屈を感じる事がある。

（ほんま、過保護なんやから……）

そう思いながらも、その優しさがはやては嬉しいのだ。だからこそつい甘えてしまう。雨の日の買い物は、アーチャーも普段よりも早めに終わらせて帰ってくるのだ。

その理由。それははやてを一人にしておくのが心苦しいため。だが、それをはやては気付きながらも口にする事はしない。ただ、熱いお茶を準備して出迎えるだけ。

それがここ最近の彼女のルール。そして、はやての淹れた熱いお茶を飲みながら、二人でするその日の会話が彼女なりの雨の日の楽しみ。

（雨の日が楽しくなるなんて思わへんかったわ。アーチャーが来てくれてから、つまらない日がないもん）

「どうした？ 何か気を惹く物でもあったのか」

そんな風に考え笑うはやてに気付き、アーチャーが不思議そうに問いかける。それにははやては余計に笑みを深くして首を振る。

「何でもないわ」

「そうか。さ、今日もしっかり見極めてもらうぞ」

「よっしゃ！ 任せて」

これもいつもやり取り。食材の見分け方を実践しながら、はやてに覚えさせるクイズ形式。これも最近のはやての楽しみ。まず何のヒントもなしにアーチャーが選んだ二つの品物を見比べて、どちらが質がいいのかをはやてが見極める。

例えそこで正解していても、その根拠を聞いて間違っていれば指摘し、不正解扱い。不正解でも、目を付けた根拠が合っているなら誉める。そんな授業のような状況がはやてには堪らなく楽しい。そして、正解した時の一瞬見せるアーチャーの笑みが好きなのだ。

今日は牛肉の見極め。それをはやては不正解。目の付け所も良くなかったのだが、アーチャーはどこか仕方ないといった表情で告げ

た。今回はかなり厳しいものにした事。だから、はやてが間違えるのも仕方ないと。

それを聞き、アーチャーからそういう場合の見極め方を教わるはやて。同様にその話を周囲の主婦達が聞いて成程と頷いていた。そして、そのままはやて達はお菓子売り場へと向かう。すずかと知り合って一月が経ち、最近はたまにすずかが遊びに来るようになったのだ。

そのため、手軽に摘めるスナック菓子をはやては欲しがっているのだが……

「これだな」

そう言っただけでアーチャーがカゴに入れるのは、新潟で取れた米を使った煎餅。とてもではないが小学生が好んで食べるお菓子ではない。

「……なあ、どうしてもあかんの？」

「スナック菓子はあまり体にいいものではない。煎餅などは流石に自宅では作れんが、その類が欲しいなら私がそれより美味しいものを作っただけよ」

そう、アーチャーが買うのは煎餅やアラレといったもの。スナック菓子はほとんど買わせてくれないのだ。どうしてもと言えば、苦々しい表情で一つ買ってくれるが、それでも野菜等を使った比較的にいいものしか買わない。

はやてもそれが分かっているので強くは言わない。確かにアーチャーの作るおやつはどれも美味しく、すずかも驚いた程なのだ。



- - - - -

空白期。今回ははやてとアーチャー。他の組よりも家族度が高い二人。ただ、会話がかなりアレですが……

さり気無くA・Sの布石も入ってますが、これは別になくても構わない程度です。なのでさらりと流してくれても構いません。



## 交流編その2

「じゃあ、また明日」

「うん。またな」

互いに手を振り合い、はやてとすずかは別れた。いつものように図書館で会話し、共に連れ立って外に出た所で、また若干言葉を交わして別れる。

二人が友人となって早三ヶ月。最初は図書館のみの付き合いだったが、今ははやての家にも遊びに行く仲になっていた。そして、それに伴い……

「今度はなのはちゃん達も一緒だからね」

「分かつとる。楽しみにしとるな」

やっと都合をつけ、はやてとなのは達の初顔合わせが行われる事となったのだ。明日が待ちきれないといった顔のはやて。それを微笑ましく思うアーチャー。

この時の二人は知らない。その楽しみにしている明日が、将来を左右する出会いの日だったと……

家までの帰り道、はやてはずっと翌日の事を話していた。何をするか、何を話すか、考え出したらキリがない程話題が湧き出してく

る。そんなはやてに、アーチャーは内心微笑ましく感じながら冷徹に告げた。

「相性最悪ならどうする？」

「おう、それは大丈夫や。わたしにはアーチャーがおるし」

アーチャーとうまくやっていけるなら、大抵は平気やから。はやてがその口の端を吊り上げて言い切り、アーチャーの方を見上げた。それにアーチャーも負けじと笑みを浮かべて呟く。思い込むのは勝手だが相手は子供だという事を忘れるな、と。

そんな大人らしからぬ切り返しにはやては頬を膨らませてブーイング。それを相手に、事実だと切って捨てるアーチャーへ大人げないと呟くはやて。それにアーチャーは皮肉屋スマイルで返す。そんないつもの雰囲気。

「さて、今日はどうする？」

「そやなく、軽く蒸し暑いし……涼しげなもんがええ」

「承知した。なら、冷やし中華に棒棒鶏バンバンジーといこう」

「おっ、中華やな。なら、わたしはササミ裂くのやりたい！」

嬉しそうに宣言するはやてにアーチャーは笑みを浮かべ、ならついでに錦糸卵でも作ってもらうかと返す。それにはやては少し不満顔。アーチャーから家事を習い出してかなり経つが、未だにその腕は彼に遠く及ばないのだ。

だからだろうか。それを知っているアーチャーを睨み、文句を述べるが悉くあしらわれてしまう。そんな会話が車椅子の立てる音と

混ざりながら、夏の空に消えていった。

その頃、すずかと言えば家路を一人歩いていた。足取りはどこか軽く、浮き立つ気持ちを如実に示している。はやてと同様にすずかもまた、なのは達と過ごせる機会を待ち望んでいたのだ。

「……時間、かかっちゃったな」

すずかはそんな事を呟くと、入道雲が流れる空を見上げる。本当なら、もっと早くはやてとなのはやアリサを会わせられるはずだった。しかし、前準備として互いの事を知っておいた方がいいとすずかが考えた事と、急になのはが予定が空しくなってきたのが重なった。

そのため様々な情報をやり取りする事にし、なのはとアリサの方からはやてに会いたいと言い出してくれたのだ。はやてにその話をした時、嬉しかったのかその目が涙目になっていたのをすずかは見た。

「私が会って欲しいなんて言うのは、何か違う気がしたんだよね……」

二人がはやてに会いたいと思ってくれるようにしよう。自分のために都合を付けさせる事に罪悪感を感じていたはやてのため、すずかが選んだ方法がそれだった。

おかげで時間は掛かったが、はやても何の躊躇いもなく会う事を快諾したし、なのはとアリサも優先的に予定を空けてくれた。これなら今度会う時は楽しい時間になるに違いない。

そこまで思い、すずかは笑う。はやてがかなり読書好きと教えた時、なのはは予想通りに感心しアリサに突っ込まれていた。なのは

とは大違いね、と。

(それから、読み易くて面白い本ない？　って聞かれるようになったよね)

そう、なのはは国語が苦手だったがアリサ命名のはやて効果により、その成績を向上させていた。明日会う時にお礼を言わなきゃとなのが言っていたので、おそらくはやては戸惑い、理由を知って笑うだろうとすずかは予想している。

「……っと、いけない。足が止まってた」

まだお昼前とは言え、もう日差しは真夏の太陽が激しく照り付け南国並み。日射病にならないようにしなきゃ、と思いつくは家路を歩く。その足取りは、心境に呼応するように先ほどよりも一層軽くなっていた……

「明日のトレーニングは中止にしたい、ですか？」

「ごめんね、セイバー」

「いえ、それはいいのですが……どうしてです？」

セイバーが小次郎と再戦した翌日から、なのはは彼女とのトレーニングをやりたいと申し出た。最初は、休日に行っているランニングかと思つたセイバーだったが、なのはが望んだのはもっと本格的な

ものだった。

さすがにそれはとセイバーは止めたのだがなのはの意志は強く、士郎監修のメニユー以外の事を絶対しないという条件で二人のトレーニングが始まった。

そのおかげか、今では体力と反射神経、動体視力ならアリサにも勝てる自信がなのはにはあった。

なのはがそんな事を言い出した理由。それは、少しでもセイバーに追いつきたいと考えたから。置いていかれたくないと、思ったから。セイバーに守ってもらっただけじゃなく、自分も彼女を助けられる存在になりたいと心から思ったのだ。

そのために苦手な運動方面を鍛えようと考えた。長所を伸ばす前に欠点を少しでも改善しておこうと思ったからだ。そのため、アリサやすずかと中々遊ぶ事が出来なくなった。

だが、アリサからは小次郎の一件で理解を得ていたし、すずかからは自分が納得するまで頑張つてと励まされた。それもあって、なのははより二人と仲良くなった気がしていた。

「明日、すずかちゃんのお友達のお家に遊びに行くの。だから」

（はやてちゃん、だっけ。本好きの明るい賑やかな子だつてすずかちゃんは言ってたけど）

「そうでしたか……わかりました。では、明日は休養日とします」

「ありがとう、セイバー」

笑顔でお礼を言うなのはにセイバーも笑みで返す。もう少しした

らお盆になる。そうになったらセイバーだけじゃなく、家族ぐるみでの修行が待っている。キャンプの用意を持って二泊三日という日程のものだ。

まあ、実際はキャンプでしかないのだが、なのはにとっては山登りだけでも結構なトレーニングとなる。その時に今日の分を取り戻すくらい頑張ろう。そう思い、決意を改めるのはであった……

「明日は何を着て行くのかしら？」

アリサは上機嫌だった。それは明日、八神はやてに会えるからだ。何故それがここまで嬉しいのか。それは、はやてがすずかから見せてもらった写真の感想にある。

はやてはアリサの髪の色を見て羨ましそうに「キレイな髪の毛やなあ……」と言ったのだ。それをすずかから聞いた瞬間、アリサは即決ではやてと会う事を承諾した。

そう、アリサは自分の髪の色等にコンプレックスを持っている。そのためはやてが素直に自分の髪の色を褒めてくれたのが嬉しかったのだ。しかし、なのはがあ的一件以来自分を鍛え始めたため、今日までそれが延びてしまったという訳だ。

（でも、それも今日でおしまい。なのはもやっとトレーニング休んで会う気になったし、楽しみね）

すずかの話によれば、はやては親戚の人との二人暮らしで関西系の訛りがある子。趣味は読書と料理との事。それを聞き、自分も何

か料理でも習おうかと思ったアリサだったが、それを止めた人物がいた。

バニングス家の専属庭師にして、アリサのボディガードの佐々木小次郎である。彼はアリサからそう相談を受けた際、即座に答えた。

止せ止せ。ありさが炊事など無理よ。

どうしてよ？

生粋の箱入り娘ならば確かに家事は出来た方が良いが、生憎ありさは虎の。

トラじゃなあああい！！

その時のやりとりを思い出し、思わず拳を握るアリサ。しかしそれども、ふと緩められる。

「…………お淑やかになれば、小次郎はアタシの傍にずっといるのかな…………？」

思い出すのは、あの日セイバーと小次郎が戻ってきた後の事。疲れた顔のセイバーとどこか嬉しそうな顔の小次郎が帰ってきたのは、二人がアリサ達の前から消えて三十分ぐらい後の事。

二・三言セイバーに何かを告げ、小次郎は楽しみに帰路についたのだが、その道すがらアリサは何も聞けなかった。初めて見た表情の小次郎。それをもたらしたのがセイバーだったと言う事は、アリサの心に強い衝撃を与えたのだから。

あの日以来、小次郎はアリサの許可を得て早朝の高町家に通うよ

うになった。その理由は後日なのが教えてくれたため納得できたが、それでもアリサの気分は晴れなかった。

結局、小次郎がセイバーの所に行っているのが気に喰わないのだろうとアリサは考えている。アリサはまだ恋愛感情など理解できない。好きと愛してるの違いなど明確に分からない。でも、好きと嫌いの違いは分かる。そして、それでは小次郎は……

「好きになれる訳ないでしょ、あんな奴」

そう吐き捨てるように言って、アリサは誰に聞かせるでもなくポツリと呟く。

でも、嫌いにもなれないのよ……

アリサは知らない。それが小次郎に対しての思慕の思いだとは。恋慕ではなく思慕。自分を知らず導いてくれる小次郎。そんな彼に兄にも似た感情を抱いているのだから。

小次郎の興味を自分にだけ向けさせたい。そんなアリサ・バニングス、小学一年生。その心は態度や行動に比べ、未だに歳相応の幼さを残したままであった……

「「「「「こんにちは」」」」」

「おっ、いらっしやい。とりあえず上がって」

「「「「「お邪魔します」」」」」



元氣良く挨拶を交し合うのは達。声がキレイに揃っているのは仲がいいからなのか。そんな三人にはやては笑みを一つ浮かべて、リビングへ三人を案内する。

そこにはお茶の用意をするアーチャーの姿があった。その様子がやけに様になっていたため、見慣れたすずかとはもかく初見のなのはとアリサはやや呆気に取られたように見つめていた。

「あ、お邪魔してますアーチャーさん」

「ん？ ああ、すずかか。それと、髪を結んでいる方がなのはでブルンドの方がアリサか」

初対面の少女達を簡単に呼び捨てするアーチャー。だが、そんな事を気にするような事はない。既にすずかによってアーチャーの事もある程度聞いていた二人は、その聞いた通りの人なのかと理解しそれぞれ自己紹介と挨拶を終える。

それにアーチャーは軽い笑みを浮かべ、挨拶と共に自己紹介を返しなのは達をテーブルへと招いた。はやてはアーチャーがなのは達へも相変わらずな対応を取る事に軽く呆れつつ、どこか嬉しそうに車椅子を動かしていた。

「さて、まずは座ってくれ。それと、君達は紅茶で平気かな？」

「はい」

「ええ」

なのはとアリサの返事を聞き、グラスに注がれていく紅茶。そのアーチャーの動作は実に様になっていた。それに感心するような声

を漏らす二人にはやてとすずかは微笑み一つ。

その光景は、自分達が同じものを初めて見た時とまったく同じ反応だったからだ。きちんとティーポットを使い、水で紅茶を淹れ、それを冷蔵庫で冷やすという手間を掛けたアーチャー謹製のアイステイ。それを四つ。目にも涼やかなグラスに入れられ、手前に置かれる。好みで使えるようにミルクまで添えて。

「ふえ〜……」

「……やるわね」

「ふふっ」

「えっと、ま、アーチャーはこういう人なんよ」

一切の無駄なく動くアーチャーの所作に感嘆の声を上げるなのはとアリサ。それに慣れたとばかりに笑うすずかと、どこか照れくさそうなはやて。

そんな四人に構わず、アーチャーは既に茶菓子のシフォンケーキを切り分けている。ちなみに今日のこの時のために、アーチャーは二日前から材料や茶器を準備していたりする。

キレイに四等分されたそれを皿に載せてグラスの横に置き、アーチャーは仕事は終わったとばかりにリビングから出て行くこととする。それをはやては止めなかった。同じくすずかも。

そんな二人の反応になのはとアリサだけが少し気にしていたが、はやての笑みに理由を思いついたらしく、その顔に納得の色が見えた。

「優しい人だね」

「ちょうイジワルやつたりするんやけどな」

はやての言葉にアリサが心から納得するように「確かにそんな感じね」と返した途端、全員笑う。と、そこでなのはがある事に気付いた。

「にははは……って、まだはやてちゃんに自己紹介してないよ!？」

「あゝ、そういえばそうね。……何か、とつくに終わらせてた気がしてたわ」

「だね。じゃ、まずははやてちゃんから……」

すずかの言葉にはやては頷くと、なのは達の顔をしっかりと見つめて微笑んだ。

「こうして会うんは初めまして、やね。わたしは八神はやて言います。はやてって呼んでくれると嬉しい」

「初めましてはやてちゃん。私は高町なのは。なのはでいいよ」

「初めましてはやて。アタシはアリサ・バニングス。アリサでいいわ。それと、髪の毛褒めてくれてアリガト」

笑顔で互いを見つめ合う三人。それを嬉しそうに見守るすずか。その光景は、まるで以前からの友人であったかのような雰囲気を感じられるくらい、何の違和感もなかった。

それから、四人はとにかく話した。学校の事や家の事、家族の事

に趣味の事などなど、喋り足りないと感じるぐらい話した。予想通り、なのはのお礼の言葉にはやてが困惑し、理由を聞いて納得しつつ笑った一幕もあったが。

そして途中にアーチャー作のお昼を食べて、それから夕方までゲームをしながら過ごした。更におやつとしてアーチャーが差し入れたホットケーキと冷房で体を冷やしすぎないようにとの配慮からのホットココアを平らげ、さすがにこれ以上は無理だと思う時間まで四人は遊び続けた。

「じゃあ、またね」

「今日は楽しかったわ」

「またね、はやてちゃん」

玄関で思い思いに手を振る三人。それを心から嬉しく思い、はやても負けじと手を振り返す。

「うん。わたしも楽しかったわ。また遊ぼな〜！」

はやての声に三人は笑顔で頷いて家路を歩き出す。そのまま三人が見えなくなるまで、はやては玄関先で手を振り続けた。そんな光景を見ながらアーチャーは一人笑みを浮かべていた。

だが、一つ気になっていた事があった。それはなのはから感じた魔力量。そこから自分のある推測が当たっている事を確信したのだ。

（あれだけの魔力を隠しもせず、それに対して動きがない。やはり、この世界に魔術師はいない。……だが）

以前自分を襲撃してきた相手を思い出して、アーチャーは眉間に

皺を寄せる。あの仮面の男は確かに魔術を使ってきた。なら、どう  
いう事なのか。そこで思いつくのは自分と同じく……

イレギュラー  
(異端者、か)

そう考えれば納得がいく。この世界とは違う世界からやってきて、  
何らかの理由である本に目を付けたが何か事情があり直接行動には  
移せない。でなければ、アーチャーが現れる以前にあの本が奪われ  
ているだろう。

だとすれば、あの謎の魔術は異世界のもの。ならば、自分が知ら  
ないのも頷ける。だからこそ監視していつか行動出来る機会を待っ  
ているとアーチャーは結論付けた。

そんな風に思考に耽るアーチャーをはやては不思議そうに見つめ  
ていた。難しい顔で物を考えている時のアーチャーは、何か自分の  
知っている彼ではない気がしているからだ。

そこへ湿気を含んだ生温い風が吹き抜けた。その不快さに顔をし  
かめるはやてとアーチャー。揃って思うのは、早く家の中へ戻ろう  
という事だった。

「む、そろそろ家に入ろう」

「そやな。な、今日は晩御飯何？」

「豚が安かったのな、生姜焼きにしようと思っている」

そんな会話をしながら二人は家の中へと戻っていく。楽しげに笑  
みを浮かべながら。それはいつもの日常。穏やかで緩やかな平和な  
時間。だが、その時間がいつまでも続かない事を二人を見つめる猫  
だけが知っていた……



#### 遭遇編その4

今日も賑わう喫茶翠屋。その賑やかな店内の一角だけが沈黙に支配されていた。そこにいるのはメイド服のライダーとエプロン姿のセイバー、そして Tシャツにジーンズ姿のアーチャーだった。

三者に共通しているのは困惑。その内容は違えど浮かべている表情は同じ。先程から一言も発せず、ただ時間だけが過ぎていく。どうしてこのような事態になったのか。それは今から三十分程遡る……

「な、翠屋さんに行ってみたいんやけど」

キツカケははやてのそんな一言。つい最近出来た友人、高町なのはの両親が経営する喫茶店。中々評判が良く、アーチャーも何度か近所の付き合いで聞いた事があった。

弓兵アーチャー。既にその身は近所で評判の主夫となっている。故にご近所の井戸端会議さえ顔を出す事も容易なのだろう。本人が聞けば情報収集だと言いつ張るだろうが、その様子を見た者がいれば違和感が無さ過ぎると指摘するぐらいに。

「それは構わないが、どうして急に行きたいと？」

「あのな、なのはちゃんが昨日言っとったけど、明日から三日くらい出掛けるらしいんよ」

「それで？」

「そやから、見送る代わりに気いつけて行ってきてって言いたいや。今日はお家の手伝いする言うとったし」

そんなはやての言葉をアーチャーは笑う事はせず、ただ黙って立ち上がる。そして、そのままはやての部屋へ行き、手にある物を持って現れる。それは麦わら帽子。夏の日差し対策にアーチャーが買った物だ。ちなみにはやてへの誕生日プレゼントでもある。

「なら、これを身に付けてくれ。今日も日差しが強い」

「うん。それじゃ……」

「ああ。行くとしよう」

アーチャーの言葉に笑顔で頷くはやて。それにアーチャーは笑みで応える。手渡されたお気に入りの帽子を被り、ご機嫌と言わんばかりにはしゃぐはやてを見ながら、それに呆れながらもどこか嬉しそうに相手するアーチャー。

なのは達と友人になってから一段と明るくなったと思いつつ、アーチャーは車椅子を押す。そんな二人を真夏の太陽が激しく照らしていた……

まだ朝と呼んで差し支えない時間にも関わらず、夏の太陽は燦々と光と熱を放っていた。そんな中、汗を流しながら庭仕事をする二



人のメイドの姿があった。

「お姉様、終わりました」

「こちらも終わりました。さ、次はノエルと合流し屋敷の掃除です」

疲労の色を見せるファリンにライダーは容赦なく次の仕事を告げる。その言葉にファリンが崩れ落ちた。どうやら休みたいらしい。潤んだ瞳でライダーを見上げるファリン。それを困った顔で見つめるライダー。

そんなお見合いがたつぷり三分。先に根負けしたのはファリンだった。何せ、その間も二人を真夏の太陽は容赦なく照りつけるのだ。いかな自動人形とはいえ、そんな中でじっとしていれば嫌になるというものだ。

「あゝ、もう限界です!」

そう言うや否や屋敷へ走り出すファリン。それを見送り、ライダーはため息一つ。そして、その後を追うように歩き出すと先の方を走るファリンへ向かってこう言った。

「そんなに急ぐと危ないですよ」

「ふえ?」

その声の原因なのか、はたまた既にそれが決まっていたのか。ファリンはライダーが声を掛けると同時にキレイに躓き

「あつっ!」

地面と二つの意味で熱いキスをした。それはもう見事なまでに。そのあまりの光景にライダーでさえ足を止める程だった。まるで漫画のように沈黙が流れる。ややあつて我に返ったのか、ライダーが動き出した。

「……大丈夫ですか、ファリン」

急ぎ足でライダーはファリンへ近付く。数々のドジをしてきた彼女の中でも、今回ののは中々痛そうだった。故にライダーの声にも心配の色が見える。そんなライダーの声にファリンはゆっくりと起き上がり、呟いた。

「なんで私だけこんな目に……」

その目はまさに涙目。世知辛い世の中を恨むような呟きをしているファリンに、ライダーは内心微笑ましいものを感じながらそれを表に出さずに手を差し伸べた。

それをファリンは掴んで立ち上がり、トボトボと歩き出す。その後をライダーは追うように歩き出した。だが、ライダーはファリンの背中を見つめてある事を考えていた。

それは、すっかり意気消沈しているファリンを何とか励ましてやりたいとの思い。元気で明るいファリン。その彼女が自分をお姉様と呼んだ時、ライダーは不思議とすんなりそれを受け入れられた。

以来、すずかとは違う意味でファリンはライダーの中で妹のような存在に変わった。それはきつと、ファリンが無邪気で素直な性格なのも影響している。物事を考え過ぎるライダーにとって、思った事を正直に表現出来るファリンはある意味羨ましい存在でもあったのだから。

だからこそ、今のファリンを見る事はライダーにとって辛い。普段の明るく元気なファリンへ戻って欲しい。そう思い、ライダーは何か出来る事はないかと考える。

(何かないでしょうか？ ファリンを元気付ける方法は)

これまでのファリンとの出来事を思い出すライダー。まだ一年も経っていないが、それでもその思い出は山のようにある。共に料理を作り、焦がして失敗した事や、買い物帰りに団子を買って二人だけで食べた事など。ファリンとだけに限っても数え切れない程思い出があるのだ。

(……そうです。ファリンは甘い物が特に好きでした)

そんな中でも多いのが食べ物に関する事。それに関連して思い出すのは、友人となった相手の顔。それを振り払おうとして、はたとライダーはある事を思いついた。

「ファリン、翠屋のシュークリームはいりませんか？」

「え……？ 欲しいですけど……どうしてです？」

「仕事を頑張っているファリンへ私からのささやかなご褒美です」

元気付ける意味合いも込め、優しく微笑むライダー。それが伝わったのか、ファリンも徐々に表情を笑顔に変えた。こうしてライダーは残りの仕事を事情を話すと苦笑しつつ了解したノエルとファリンに託し、愛車を駆って翠屋へと向かう。

凄まじいスピードを出す自転車。風となってライダーは行く。その先に予想だにしない相手が待っているとも知らずに……

「いらつしやいませ」

入口のドアの鈴が音を立ると同時にセイバーとなのはの音が重なる。喫茶翠屋。その看板娘なのはと名物店員となったセイバーの笑顔がやってきた客達を出迎える。

夏休みのためか、最近はモーニングが終わった後も客足が中々途切れないのはそれもあるのだろう。そう分析した土郎の意見を聞いて、要因に自分が含まれない事を気にして美由希が少し落ち込んだのは内緒の話。

「モモコ、ケーキセット二でモンブランとショートを」

「はい」

「シロウ殿、ドリンクはアイスのブレンドとカフェオレです」

「よしてきた」

セイバーの声に即座に動く高町夫妻。セイバーの後ろではなのはと恭也がオーダーを聞きまわっている。

「ご注文を繰り返します。ガトーショコラにアイスティーですね？」

「セットが三つですね。かしこまりました」

男性客にはセイバーや美由希が、女性客には恭也かなのはとなつていて、余裕がない時以外はそれで動くようになっていく。一部の男性客は可愛らしいのは接客して欲しいと思っただけかもしれないが、得てしてそういう事を思う者ほど上手いかないものである。

「はい、二百六十円のお返しです。ありがとうございました」

笑顔で見送る美由希。レジは基本その時空にいる者がする事になつていたので、当然誰がするかは運次第だ。夏休みに入り、忙しいと言つてもお昼や午後のピークに比べればまだ軽い。そのためか高町家の面々には余裕がある。

特に既に三ヶ月以上を働き続けているセイバーにとって、この程度は自分一人でも何とか回せるレベルであつた。勿論、手伝いをよくしている恭也達から見てもセイバーの上達ぶりは凄まじく、特に美由希はどこか凜とした雰囲気漂わせる彼女に尊敬の念すら抱いた。

そうしてそんな忙しさが落ち着き、それぞれが小休憩を取り始めた頃、彼らが現れた。

「いらっしゃいませ」

「えっと、わたし、なのはちゃんの友達で八神はやて言いますけど……なのはちゃんいますか？」

「なのはの友達？ ちょっと待ってて」

笑顔で出迎えた美由希だったが、相手が妹の友人と分かるとその笑みの質を変えて、店の奥へと消えた。それに対し、少し不安顔の

はやてを見てアーチャーは笑みを浮かべて囁いた。

「心配するな。営業妨害ではないし、後でシュークリームを買って帰るだろう」

暗に、客でもあるから気にするなと、そうアーチャーは告げた。それをはやても分かったのか、若干表情を和らげる。

「そや、な。……って、美味しそうなケーキやな」

「まったく……。む、確かにこれは……」

視界に入ったショーケースへ視線を移すはやて。その変わりよりの早さに呆れつつも、同じく視線を移しその目を鋭くするアーチャー。その目は、腕利きパティシエだった桃子のケーキが己の域と同等かそれ以上である事を読み取っていた。

一方のはやては、目にも鮮やかな品揃えに心を奪われていた。はやても女の子。甘い物は好物とまではいかないが、好きではある。そんな風にショーケースを眺めている二人に、なのはは声を掛けるに  
くかった。

何しろ質こそ違い、二人は食い入るようにケースを見つめている。そんな光景になのはは苦笑いを浮かべつつ、軽めに声を掛ける事にした。

「いらっしやい。はやてちゃん、アーチャーさん」

「あ、なのはちゃん」

「邪魔しているぞ」

良かった、聞こえた。そう内心思いながら、なのはは用件を尋ねた。それにお盆のキャンプに出かけるため、見送り代わりに来た事をはやてが伝えてなのははに満面の笑顔を向けた。

「そやから、気いつけて行ってきてな」

「ありがとう、はやてちゃん！」

わざわざ自分にそう告げるために来てくれた事になのはは心から喜んだ。まだ友人となって日は浅い。それでもはやての気持ちかなのはには伝わったのだ。

そんなやり取りを端から見ていた土郎達だったが、そのはやての思いにその顔を綻ばせていた。セイバーと出会う前は孤独感を抱いていただろうなのは。それが今はこんな優しい友人を得ている事に嬉しく思ったのだ。

そこへ来店を告げる鈴の音が響き渡る。音に反応し、アーチャー達が振り向いた先には……

「ら、ライダー……だと」

「アーチャー……ですか」

見事なメイド服に身を包み、楚々として立つライダーの姿があった。ちなみに裾がまた擦り切れ汚れていたりする。

「お、ライダーさんや。お久しぶりです」

「ハヤテ……？　そうですか。貴方の言っていた親戚と言うのは……」

…」

「にゃ？ アーチャーさんもライダーさんの知り合いなの？」

何とも言えない雰囲気醸し出していたアーチャーとライダーだったが、それを見たなのは言葉に彼は敏感に反応した。

「なのは、それはどういう意味かな？」

「えっと、実は私の家には」

「セイバーがいるのです」

「なん……だと……」

アーチャーの問いかけに答えようとするのはだったが、それをライダーが遮った。その言葉にアーチャーは今までにない程の驚きを浮かべる。そんな彼らを前に、なのはは一人いじけるようにはやてへ枝垂れかかった。

「うつつ……はやてちゃ〜ん。私が言いたかったのに……」

「まあまあ、氣い落とさんとして」

そんななのはをはやてが慰める。そして、そのなのはの声が聞こえたのか、店の奥からセイバーが顔を出し。

「なのは、どうしたので……」

固まった。それはもう見事にアーチャーの顔を見て硬直したのだ。



「……とりあえず、奥の席にどうぞ」

きつと何か事情があるんだろう。そう判断した美由希の提案に三人は静かに動き出す。そして、なのはとはやては店の奥にある休憩所へと向かう。おそらくまた色々あるんだと、そうなのはが予感したから。

それにはやてにも話を聞かなければならない。そうなのはは思い車椅子を押した。はやてはそんななのはの雰囲気疑問符を浮かべるも、初めて入る店の裏側にちよつとだけ興奮しているのだった……

「……まさか、私以外のサーヴァントが現界しているとはな」

「感知出来なかったのでしょうか？ 当然です」

ライダーのその言葉にアーチャーの表情が変わる。それは納得。以前の、いや昔のアーチャーならばそんな事はないと一蹴しただろう。だが今の彼には心当たりがあった。

「そうか。君達も受肉しているのだな」

その言葉にライダーが頷いた。それだけでアーチャーは分かった。何故はやてがなのは達と出会ったのか。それはきつとこの世界が滅ぶ要因に彼女達に関するからだ。

あくまでも推論だ。明確な証拠はない。それでも、アーチャーとしてはセイバーとライダーへ言わずにはいられない事がある。それ

はあの本の事。解析しようとし、何故かそれを拒絶するような反応を感じた物の事だ。

だがその前に確認しておく事がある。そう思い、アーチャーは二人へ問いかけた。この召喚をどう考えていると。その言葉に二人はため息を吐いた。それが何よりの答え。

「貴方と同じ結論です」

「おそらくですが”世界”に呼ばれたと思っています」

「そうか……」

ラインが繋がっていないのに魔力を自ら生み出している。そして、仮初ではない肉体を得ていた。更には、失っているはずの記憶まで持っている。ここまで条件が揃えばそう答えを出すか。そう考え、アーチャーは小さく息を吐いた。

「やはり、貴方も自分の事を把握していたのですね」

「ああ。守護者として召喚されたのは初めてではないのでね」

ライダーのどこか納得するような言い方にアーチャーは嫌そうに言葉を返す。それを聞いてセイバーが何かを言いたそうに視線を向けるが、そうさせる事をアーチャーはしない。

そのため、アーチャーは切り出した。はやての家にある謎の本の事を。そして監視を受けていた事と謎の魔術を使う襲撃者と出会った事を。それを聞いて二人は表情を変えた。

「……どうやらその本が私達の召喚に深く関係しているようですね」

「ああ。おそろくだがそうだろう」

「でも、何故その襲撃者はその本を？」

「分からん。だが、あの本はあまり良くない類の物だ。今は何かある訳ではないが、いずれ事件を起こすだろうと読んでいる」

そこで三人は黙り込んだ。出来る事ならば、その本を処分するな  
どして安全を確保したい。しかし、下手な事をして余計な問題を起  
こすとも限らない。そう考えたのだ。

そんな重たい沈黙を破るように、セイバーがアーチャーへこんな  
事を尋ねた。それははやくとの出会い方だ。もしかすると自分と同  
じように召喚された時、彼もまた孤独に怯える少女に出会ったので  
はないかと思っただのだ。

そして、そんなセイバーの予想は当たっていた。アーチャーが語  
る出会いの思い出。それはやはり少女の支えになろうとしたサーヴ  
アントの姿だったのだから。

それを話し終えたアーチャーへセイバーとライダーは笑みを浮か  
べていた。それに不思議そうな表情を返すアーチャーへ、二人は揃  
って告げた。同じだと。

私もライダーもそうだったのです。目の前の少女から孤独感  
を感じ、それを取り除く事になったもので。

私は姉のような扱いで、セイバーは友人になって欲しいと言  
われたそうです。

……そうか。揃いも揃って身近な存在となる事を望まれたと

いう訳、か……

そう呟くアーチャーは、いつもの皮肉屋としてではなく、あの誓いを思い出した際の顔をしていた。そう、即ち”エミヤシロウ”としての顔を。

その表情にセイバーとライダーは声を失う。目の前にいるのはアーチャーだった。だが、同時に別の衛宮士郎でもある。自分達を一人の女性として扱い、不器用ながらも他者の夢を自分の夢に変え、前に進み続けた『正義の味方』がそこにいた。

それとは至った場所は違う存在ながらも、出発点は同じなのだ。二人は知らない。彼はもう掃除屋として己を呪い続けた男ではない。在りし日の『想い』を取り戻し、パートナーの少女に大丈夫だからと笑顔で告げた『正義の味方』だとは。

(あの笑み……やはりアーチャーも『シロウ』なのですね)

(彼も以前のままではない、と言う事ですか。となるとあまりスズ力を接触させない方がいいかもしれません)

その笑みに抱く思いこそ違え、二人は確信する。この男は信頼に足る相手だと。

「……アーチャー、話があります」

「何かな？」

「私とセイバーは、守護者として世界に動かされる事をよしと思っ  
ていません。故にいざとなった際、私達は世界を相手に戦います」

「……そんな事が出来ると思うのか？」

信じられないとばかりに問いかけるアーチャー。それもそうだろう。彼は”世界”の強大さを知っている。その強制力を誰よりも知っているのだ。それでも、ライダーとセイバーはアーチャーを見据えて言い切った。

出来る出来ないではなく、やるのです。

その宣言にアーチャーは目を閉じた。思い出したのだ。自分があの誓いを思い出した時の気持ちを。もう諦めない。そう自分は誓ったはず。故に彼は笑った。その雰囲気は先程までとは別人のものだった。

「……そうだな。それぐらいの気概がなければ相手に出来んだろう」

「アーチャー……？」

「何、中々愉快だと思ってね。」世界”を相手に戦う、か。いいだろう。いつも使われるばかりではないと教えてやるのも一興だ」

「……犠牲が出るかもしれませんか？」

予想外にあっさり乗ってきた事に違和感を感じつつ、セイバーはアーチャーが一番嫌うだろう予想を告げる。それに対してアーチャーが返したのは、想像だにしない言葉だった。

よく言う。それを出さないようにしながら守るのだろうか？

その言葉はいつもの皮肉屋の顔で告げられた。それに思わず言葉

を失うセイバーへアーチャーはこう続けた。それに犠牲を出す事を許容出来ても、それを最初から肯定するようなセイバーではないと。それを聞いたライダーがそれはアーチャーもだと返すと、彼は一瞬言葉に詰まる。その瞬間、セイバーがおかしそうに笑い出した。それにつられるようにライダーも笑い、アーチャーはその二人の反応にやや渋い顔をするも、最後には一緒になつて笑つてみせた。

しばらく三人の笑いがその場を和ませる。だが、それもやがて終わり、アーチャーがある事を告げた。

「本の事をしばらく放置したい？」

セイバーは理解出来ないような声を出してアーチャーへ視線を向けた。自分達が召喚された原因と思われる物を放置する。その理由が分からなかったのだ。それを感じ取り、アーチャーは自身の推測を述べた。

「ああ。あれがいつ問題となるか分からないが、あの襲撃者の行動からして突発的に何かを起こす訳ではなさそうだ。もしそうなら、あの監視者が身近に潜んでいた理由が分からん」

「成程。もしそれが急激に問題を引き起こす物なら、近くには万が一の際に巻き込まれかねません」

「そういう事だ。きっと何か予兆があるのか、或いは鍵となるものが必要なんだろう。守護騎士との言葉からして、あの本を守る存在がいるのかもしれない」

その結論にセイバーも納得とばかりに頷き、守護騎士との言葉からある事を思い出してアーチャーへ告げた。それは小次郎の存在と

あの推測。サーヴァントが七騎全て召喚されている可能性だ。

それを聞いてアーチャーも有り得ないとは言わなかった。既に自身を含め、四騎も海鳴に召喚されている。しかも、それが揃ってあの第五次聖杯戦争を戦った者となれば納得せざるを得ない。

「では、この街にランサーやキャスターだけでなくバーサーカーもいるかもしれない？」

「ええ。偶然で片付けるには些か問題がありますので」

「私とライダーだけなら単なる推測で済んだのですが、アサシンまでするとなると冗談では済まない気がするのです」

セイバーはそう言って、現にと前置いて告げる。なのは達の出会いが自分達を出会わせているのだと。こうなるとなのは達が出会い、親しくなっていく相手がサーヴァントを傍に置いている可能性が高い。

だがその意見を受け入れつつ、アーチャーはこう反論した。召喚時期が自分達四人は多少とはいえずれている。ならば、残る三人はまだ召喚されていない可能性もあると。故に捜す必要はあるだろうが、下手に動き回っても無駄に終わる可能性がある。それを考慮し、アーチャーはこう締め括った。

「今は彼女達に知り合った者達の中にランサー達が共に居るかを確かめてもらおう方がいいだろう」

「そうですね。それで分かればよし」

「分からないでも、聞いた事で現れた際に教えてもらえるかもしれない

「ませんね」

これで話は終わった。そう思った三人は、気を緩めるように息を吐いた。これで当面の行動は決まった。後は時が来るのを待つのみ。そう考え、セイバーはふと視線をある場所へ動かした。

「……そういえば、彼女は足が不自由なのですか？」

「ああ。どうも生まれつきらしくてな。原因は不明だそうだ」

「それは大変ですね。原因不明とは」

「アーチャー、もし良ければ私が力になりますよ」

セイバーは自身の宝具であるアヴァロンの使用をアーチャーへ提案した。それをアーチャーは受けようとして、表情を一変させた。その変化に戸惑うセイバーとライダーだったが、その理由に二人も何となくだが気付いた。

「あの本が足の病気の原因ではないか。そう考えたのですね、アーチャー」

「……あの本ははやてが生まれた時からあるらしい。しかも、どうも彼女が言うには妙な愛着があるそうだ」

「そうになると下手に宝具を使うのは止めた方がいいかもしれません。その魔力が本へ影響する可能性もあります」

ライダーの締め括りに二人も頷いた。未知の存在である謎の本。アーチャーが感じた恐怖にも似た感覚。そこから考えても、決して



良い物ではない事は明白。ならば活動を促進される可能性を持つ行動は取るべきではない。

そう判断した三人は、話題を別の事へ変える事にした。本に関する事はもう粗方決めた。今すべきは今後の事を見据えた事だと思ったのだ。そこでライダーが挙げた話題はこんな事。

「ハヤテは、スズカが遊びに来て欲しいと言っても中々色好い返事をしてくれないそうですが、何故です？」

はやては何度かすずかに誘われる機会にはあった。だがすずかの気遣いが災いし、強く誘うまでには至らなかったのだ。すずかは、車椅子のはやてに家まで越させるのは悪いと思った。はやては、車椅子の自分が行く事ですずか達に気遣いさせたくないと思った。

そんな互いの気持ちがあったため、未だにはやては自宅以外ですずか達と遊んだ試しがなかった。それをアーチャーが答えると、セイバーがならばとばかりに笑顔を見せた。

「話は簡単です。ハヤテもなのは達も互いへ気を遣い過ぎなので、から、それをしなくてもいいと言えればいいでしょう」

「確かにそれでいいのかもしれませんが。互いに少し相手の気持ちを汲み損ねている部分があるようですし」

「かもしれん。あの年頃ならば普通はそこまで気を回さないのだが、どうも彼女達はそこが子供らしくないからな」

話が纏まったと頷くセイバーは、そのまま手をアーチャーへ差し出した。それに不可解と言わんばかりの表情のアーチャーだったが、ライダーは思い当たる節があるために苦笑した。そんな中、セイバ

「は凛々しい顔を緩めて笑う。」

「これは希望なのですが……アーチャー、私と友になってくれませんか？」

「なっ……」

言葉を失うアーチャー。ライダーは小さく「やはりそうきますかと納得の顔。」

「私はライダーと友になりました。アサシンとは友ではないですが、共に剣の腕を競う相手として認め合いました。後は貴方です」

その言葉を聞いてアーチャーは答えに窮する。それを横目にライダーはセイバーに同意する。中々出来ない経験でしたと、笑いながら。そして、握手をした事も教えて、ライダーはアーチャーを見る。その目は、はっきりさせなければセイバーは納得しないと告げていた。その視線を受け、アーチャーはセイバーへ目を向けた。セイバーはやや緊張の面持ちでアーチャーの答えを待っていた。

「……友では些か困ると言ったらどうだ？」

「どうという意味です？」

「何、君とは友ではない関係でいたいのだよ。私としての理想は……そうだな……ふむ、同士では駄目だろうか。あの聖杯戦争で最初から手を組んだ仲である私達には相応しいと思うのだが」

そう告げ、アーチャーはセイバーを見つめた。その申し出にセイバーは少し考え込み、やがて満足そうに頷いた。そしてそれを見て

アーチャーは嬉しくもどこか悲しそうな笑みを浮かべて差し出された手を握る。

気付いたのだ。目の前のセイバーが”エミヤシロウ”として経験した聖杯戦争ではない聖杯戦争を経験していると。何故ならアーチャーは最初からセイバーと手を組んだ事は無かったのだから。

(やはり彼女は”あの”聖杯戦争を経験したセイバーか。私が魔術使いとして初めて戦ったあの聖杯戦争を……)

アーチャーが複雑な想いを抱いている事を知らず、ライダーは目の前の光景に苦笑しつつもその手に自分の手を重ねた。

そして視線をアーチャーに向け、小さく告げる。変わりましたねと。その言葉にアーチャーはため息を吐いてこう返した。

「それは君もだ」

「そうですね。みな変わっています」

「きつとなのは達の影響でしょう」

笑みを浮かべ合いながら、三人はその視線を動かす。そこには、あまりにも話が終わらない事に業を煮やしたなのははやての姿があった。その姿を見てアーチャーは苦笑した。

確かにそれは認めざるを得ない。そう思いながら、純粹で素直な性格のセイバーが一番強い影響を受けているだろうとも感じていた。そこへセイバーが何かを思い出したようにライダーへ視線を向けた。

「そう言えば、何故ライダーはここに？」



照り付ける夏の日差し。響き渡る蝉の声。時折吹く風もどこか熱を感じさせる。だが汗が流れるなのにとっては、そんな熱風でも一瞬の涼しさをくれる有難いものだ。

今、なのは達高町家は家族六人での修行という名のキャンプへと来ていた。お盆に入ったのでお店を休みにしての家族旅行。電車とバスを乗り継ぎ、とある山へとやってきたなのは達だったが、その道のりはそれなりに厳しく、なのは達の額にも汗が流れていた。唯一セイバーだけが平然と歩いていたが、その額にも僅かではあるが汗が流れている。

「もうそろそろだな」

「そうだね。恭ちゃん、なのは達は？」

「……意外としっかり歩いてるぞ」

視界に見えてきた川辺に土郎が隣を歩く美由希へ声を掛ける。それに笑みを浮かべて答える美由希。そして、そのまま視線を後ろを歩く恭也へ移し、そう問いかけた。

恭也はどこか嬉しそうに答え、視線を後ろへ向ける。そこには桃子と会話しながら笑みさえ浮かべるなのはがいた。対する桃子の方が少し疲れている程だったから、なのはがいかに体力をつけてきたのか分かるというものだ。

セイバーとは言えば、一番後ろを歩いていた。それはなのはが疲れた際おぶってやるうとの配慮なのだろうが、どうやらその心配はいらないようだ。その証拠にセイバーもどこか嬉しそうに笑ってい

る。

「なのは、凄いわね。こんなに……体力ついていたのね」

「にははは、セイバーとのトレーニングの成果です！」

「うふふ、そうね……私も何か始めようかしら？」

笑顔で語り合うのはと桃子。それを眺め、微笑むセイバー。視線の先では、士郎達がもう川辺にテントを張り始めていた……

テントを張り終えた士郎達は早速とばかりに訓練を　　するのではなく、手にしたのは釣竿。なのはが不思議そうにそれを見つめるが、セイバーはそんな彼女へ笑みを浮かべて告げた。

この山での滞在中は基本自給自足なのだ。つまり、魚や木の实などを自分達で調達しなければ食事にはありつけないのだ。それを聞きなのはは驚きを見せるが、同時に疑問も浮かんだ。そして、それを確かめるべくセイバーへと問いかける。

「どうしてセイバーはそんなに落ち着いてるの？」

「ご飯食べられないかもしれないのに。そのなのはの言葉にセイバーは自信満々に答えた。もっとも、それによって気楽そうな顔をしていた士郎と恭也に戦慄が走ったのだが。」

「それは当然です。シロウ殿達が魚を沢山釣ってくれると私は信じ

ています。ええ、信じていますとも」

だからうるたえないのです。そう言い切ったセイバー。その言葉の裏に込められた『裏切ってくれるな』という想いを感じ取り、二人は他愛のない話をしていたのだがそれをピタリと止め、無言で竿を川へと投げ入れる。

その体から流れるは剣士の雰囲気。退路を絶たれた者が放つ決死の覚悟。それを全身から滲ませて、二人は手にした竿へ神経を集中させた。

それを見て、美由希は思わず咳かすにはいられなかった。

「これ……本当に修行になってるよ」

言外に二人にはとの意味を込めたその咳きを、桃子は苦笑しながら聞いていた。その視線は必死の形相で浮きを睨む士郎達へと注がれている。

セイバーはそれに気付かず、なのはと二人で飯盒を準備していた。そう、持ってきた食材は白米と二日目のカレー用の材料のみ。流石に調味料もあるがそれも基本的なものだけなのだ。

そして、セイバーとなのはは米の量を計り、それを汲んだ川の水で洗い出す。美由希はほのぼのとキャンプを楽しむのはと、死地に赴いたような士郎達の対比を感じ、桃子に断言した。

「きつと、ウチでのキャンプは字で書くと修行って読むんだね」

「……美由希、それは少し笑えないわよ」

「だよね……ごめん」

そんな風に美由希を注意する桃子の視線の先では、魚を一匹ずつ釣り上げ、静かにガッツポーズをする土郎達の姿があった……

「お兄ちゃん、これは？」

「ん？ それは……大丈夫だ」

「せ、セイバー、それは流石に毒キノコだよ」

「そうなのですか？ 言われた通り地味な色ですが……」

「真っ白でしょ?! 毒だつて、それ！」

手にしたキノコを恭也へ見せるのは。それを見た恭也から大丈夫との言葉をもらい、なのはは嬉しそうに手にした籠へそれを入れる。一方のセイバーは美由希の指摘に不満そう。確かにセイバーの手にしているものは真っ白な色をしていた。しかもかなり大きい。

それを見てなのはと恭也は、セイバーがそれを選んだ理由がすぐに分かった。だがそれを言う事はしない。だから視線をセイバー達から外し、他の物を探するのは当然の事といえた。

ちなみに色で毒があるかないかを判断するのは危険である。素人はキノコに手を出してはいけないとよく言われるのはそのため。何せ、白いキノコでも食べられる種類はあるのだから。



何故恭也がなのは達といるかと言うと、彼女達が木の実などを探すと聞いて釣りを土郎に押し付けるように任せただけからだ。表向きの理由は魚だけでは絶対食料が不足すると判断したためだったが、その本当の目的は違う。もつとも、土郎はそれを誰よりも理解していたため、恭也に対し「裏切り者」！と叫んでいたが。

一方、残った桃子は土郎と一緒に恭也の使っていた竿を使って釣りをしていた。釣果は、桃子が十七匹に対し、土郎は四匹という結果に終わった事だけ書き記す。原因は、土郎に余裕がなかったため。そして、その気迫で魚を怯えさせてしまったからだろう。

楽しくキノコや木の実等を採用するのは。一方、セイバーは何か先程からいやに大きい物ばかり見つけていた。食べられる物から食べられない物まで実に様々だ。

それもあつてか、なのは達は何だかんだで楽しく採取をしていた。このまま和やかで賑やかな時間が過ぎる。そんな風に誰もが感じていた。なのはがある物を見つけるまでは……

「ん？ 今、何か動いたような……？」

キノコを探すなのはの視界を一瞬何か横切った。それが気になり、なのはは視線を横切ったモノが見えた方へ動かし、固まった。そこにあつたのは蜂の巣。しかも、ただの蜂ではない。地面に巣を作っている蜂。そう、スズメバチの一種だ。

この時、なのはが幸運だったのは騒がなかった事と季節が秋ではなかった事。もしこれが秋ならばスズメバチは攻撃的になっていて、危険度は段違いに跳ね上がるのだ。

「？ どうしたのですかなのは。何か見つけたの」

一点を見つめて動かなくなったなのは不思議に思ったセイバーは、その声を掛けてゆっくりと彼女の後ろへと近付き……

「……動かないでください、なのは」

事情を理解し、セイバーはそう告げた。そんな言葉になのはが心の中で叫ぶ。

(動きたくても動けないよっ！)

そんななのはの内心を知らず、セイバーは蜂の巣を確認しその表情を凜々しいものへと変える。するとその雰囲気を知ったのか、恭也と美由希も二人の傍へ近付いて……

「……そういう事が」

「どうする？ 恭ちゃん」

二人も蜂の巣を確認し表情を変える。これがクマならば何の問題もなかった。それなら、セイバーや美由希、恭也がいれば恐れる事はなかった。

だが、スズメバチとなると話は別だ。まず数がはつきりしない。そして的が小さい。最後になのはがいる事が最大の問題。自分達の身を守る恭也達ならともかく、なのはでは自分の身を守る事も出来ないからだ。

そんな事を考える恭也と美由希。しかし、セイバーは躊躇う事無く手にした籠を恭也へ渡し、なのはを抱き上げてその場から走り去る。その行動に恭也と美由希は一瞬呆然とするが、空気の流れを感じ取って蜂が動き出したのを見て慌てて走り出した。

逃げる二人を追うズメバチ。まるでマンガかアニメだが、本人達にとつては笑える話ではない。下手をすれば死に至る事もあるズメバチは、下手な刺客よりも恐ろしい存在なのだ。

「セイバー！ 逃げるならそう言ってくれっ！」

「違います！ これは逃走ではありません！ 戦略的撤退ですっ！」

「同じ事だよ！ って、蜂が意外と速いつ？！」

「にゃああああ！ 蜂が追い駆けてくるよ〜！！！」

なのはを抱き抱えたセイバーと、山菜が入った籠を抱えた恭也と美由希は走る。この時、もう少し冷静になって考えれば、きつともっとマシな結果が待っていただろう。

だが、生憎四人にはそんな余裕がなかった。だから単純な事を忘れていたのだ。そのまま走ればどうなるかという事を……

「……あつ……」「」「」

そう、段差になっていたのだ。下との距離約五メートル。普段なら何でもないが、突発的に落ちれば如何にセイバー達でも驚くもの。そのまま自由落下するが、そこは御神の剣士と最優のサーヴァント。三人は何とか着地。

しかし息を吐く暇もなく、まだ蜂が追ってくるのですぐさま走り出す。そうして土郎達の待つ川辺へと戻った時、なのははポツリと呟いた。

「キャンプって……ホントに修行なの」

そのなのはの呟きにセイバー達は何も言い返せなかった……

士郎が起こした火を使って鍋を暖める桃子。その中身はなのは達が取ってきたキノコ等だ。それを味噌で味付けしただけの山菜汁。しかし、その味はセイバーの保障付き。味見をしたセイバーが満面の笑みを浮かべたのだから。

その横にはなのはが頑張って起こした火がある。そこで飯盒を暖め、その前でなのはは士郎から炊けたかどうかの判断の仕方を教わっていた。そこだけ切り取ればまさにキャンプと言えるだろう光景だ。

恭也と美由希は木の枝に魚を刺して別の火で焼き魚をしているし、セイバーは先程から何かを思い出しているのか、遠い目をして空を見上げている。

(まるで……あの頃のようにですね。野営を思い出します)

それは昔の記憶。まだセイバーが一人の王として生きていた頃の思い出。辛い事や悲しい事ばかりしかない。そう思っていた頃の記憶。だが、こうして静かに思い返してみれば笑顔があったと、セイバーは感じていた。

ほとんど悲しみや憎しみばかりの時代だった。それでも確かにあった笑顔がある。それを思い出し、セイバーは微笑む。今のような考えや感じ方が出来るのはある少年との出会いがあればこそだったからだ。

(こうして考えると私も大切な事を忘れていた。シロウ、貴方が教え……いえ、思い出させてくれた事は今も私の中で生きています)

あの日、過去に囚われていた自分を悟らせてくれた言葉。それをセイバーは噛み締め、小さく呟く。

「無かった事になど出来ない。過去をやり直す事なんて、望んではいけない……」

その言葉が今の自分に繋がっている。そうセイバーは思い、視線を後ろへと向ける。そこには楽しそうに笑うなのは達がいた。

「……私にも、守りたい『家族』が出来ました。いつか……貴方にも話せる日がくると信じています」

その時、貴方はどんな顔をするのでしょうか、シロウ。

そんなセイバーの声は肌寒さを感じる山風に乗り、静かに空へと消えた……

その後、桃子特製の山菜汁にセイバーが改めて感激し、初めてのキャンプになのはがはしゃぎ、焚き火を囲んでの家族の会話に全員がその絆を改めて感じた。

いつもよりも綺麗な星空になのはと桃子が感動し、そんな二人に土郎達は笑みを浮かべる。土郎が淹れたコーヒーや紅茶を飲みながら、高町家はなのはの眠気が限界に達するまで話し合った。

「クスツ……とうとう寝ちゃったわ」

桃子に寄りかかるようになのは静かに寝息を立てていた。それを見てセイバー達は微笑む。生まれて初めての経験を連続でしたのだ。その疲れは相当のはず。それを知るからこそ、士郎達は早く寝た方がいいと言ったのだが……

やだ！ まだ起きてる！

と言つてなのは聞かなかったのだ。それは意地ではなく、純粹に寝たくないという気持ち。もつとこの時間を過ごしていたいという素直な想いだった。そんな事を思い出しながら士郎はなのはの寝顔を眺めてしみじみと呟いた。

「なのはも……本当に変わったな」

「そうだね。セイバーが来て変わって、小次郎さんと出会った日からまた変わったよ」

どこか遠い目をする士郎に美由希も同意するように答えた。その言葉に恭也も頷き、セイバーへ視線を向けると笑みを浮かべた。

「本当にセイバーが来てくれて良かった」

「そうね。私もそう思う。こんな風に皆でキャンプなんて、昔じゃ考えられないもの」

その桃子の言葉に全員が苦笑する。そう、この山登りを兼ねた修行自体は昔からやっていた。だが、なのはや桃子を連れてくる事は

ないはずだったのだ。

しかしセイバーと出会い、なのはが自分を鍛え始めた事でそれが変わったのだ。毎年のキャンプに自分も行きたいと、そうなのが言い出したのだから。

そんな高町家の言葉を聞いて、セイバーは照れるでもなく穏やかな表情を浮かべていた。確かに自分が来た事で変わった部分はある。それでも、その一番の要因はなのはとその家族にあると思っていたのだ。

「ですが、その下地はなのはの中に元々あったものです。私は、なのはのキツカケになっただけに過ぎません」

「うっん。セイバーがなのはを、私達を変えてくれたのよ」

「そうだぞ。あのままじゃ、どれだけなのはに寂しい思いをさせた事か……」

「それに、あたし達の相手としても凄く助かってるし」

「そうだな。おかげで自分の限界を二つ程超える事が出来た気がする」

口々にセイバーの意見を柔らかく否定していく高町家の四人。そして同時にセイバーが来てくれた事を感謝する。その言葉の節々に込められた想い。それがセイバーの心に沁み込んでいく。

常識的に考えれば、怪しい者でしかなかった自分を高町家は暖かく受け入れてくれた。そして、今では本当の家族のように接して

いや、本当の家族として接している。そう考え、セイバーは噛み締めるように答えた。

「そうですね。そう言ってもらえて……嬉しいです」

(本当に……私は幸せです)

その想いを表情に表すセイバー。その美しい満面の笑みに土郎達も嬉しそうに笑みを返す。こうして夜は更けていく。セイバーの心に”暖かい何か”を残して……

翌朝なのはは驚いた。何とセイバー達が昨日の蜂の巣を持ち帰ったからだ。今後の登山客の事を考え、退治したのだという。なのは巢に興味があったのだが、土郎の「気持ち悪いぞ」の一言で見るとを止めた。

その日の朝は、昨日取ってきた山菜の残りを使った炊き込みご飯。その味に五人が舌鼓を打つ中、一人離れた場所でセイバーは……

「……ダメだ。私には出来ない……っ！」

密かに珍味と言われている蜂の子を食べようとしたが、その見かけや蜂の幼虫という事に抵抗感を拭えず断念していた。そんなセイバーを他所に、なのは達は山の恵みを堪能する。

そして朝食が終わった後、土郎達御神の剣士は鍛錬のためなのは達と別れて動き出す。それを見送り、なのははセイバーや桃子と三人で水切りに興じる事になる。



桃子がまず最初にやってみせたのだが、何とそれが五回も跳ねた。それを見たセイバーが負けるものかと挑戦し、投げ方が悪かったのか一回で沈んだ。あまりの事に愕然とするセイバーとそんな彼女を見て苦笑する高町親子。

にやはは、セイバーでも苦手な事があるんだね。

な、何を言うのです！ 今のは少しばかり石が悪かったのでしょう。

ふふっ、そうね。そういう事にしておこうかしら。

そんな会話の後、満を持してなのはが投げた石は綺麗に三回跳ねて川へ沈んだ。その結果に喜び、なのはは桃子へ笑顔を見せる。一方でセイバーは難しい顔で川辺の石を見つめていた。

何としても桃子に勝つ。そんな執念さえ感じさせる程に。その様子を見て、桃子が微笑みながらアドバイス。なるべく平らになっている方が回数が伸びると聞いて、セイバーと一緒になつてなのはもそういう石を探し始めた。

結局最終的にセイバーの記録は六回となり、本人としては満足出来る結果で終わった。その影には平らな石を見つけ出す事を手伝ったなのはと、投げ方のコツを教えた桃子の協力があった事を追記しておく。

(楽しい事って、あつと言う間だよ)

帰りの電車の中、なのはは外の景色を眺めてそんな事を考えていた。二泊三日のキャンプ。だが、それが終わりを迎えるのは想像以上に早かった。二日間の内、一日は士郎達の鍛錬で桃子とセイバーの二人以外とは遊べなかつたのもあるが、それでも早かつたとなのはは感じていた。

ふと視線を動かしてみれば、向かいの座席では美由希がシートにもたれて寝ているし、恭也はセイバーとトランプをしている。おそらくポーカールだろうとなのはは思った。何故なら、恭也が何度も悔しそうな顔をしているからだ。

(セイバーって、対戦になると強いんだよね)

賭け事や勝負事になるとセイバーは無類の強さを発揮する。それをなのはは良く知るからこそ、ゲームでの対戦をセイバーとはしない。初めこそなのはが圧倒していても、セイバーが慣れ始めると恐ろしい程に強くなるのだ。

(でも、勘がものを言うものは本当に強いからなあ……)

そんな事を思い出し、なのはは小さく笑う。それを隣の士郎が気付き、不思議そうに尋ねた。

「どうかしたのか？」

「……ううん。何でもないよ、お父さん」

その答えに士郎は若干不思議には思ったものの、笑みを浮かべてなのはの頭に手を置いた。

「そうか。で、楽しかったか、なのは」

「うん。またみんなで行きたいな」

（そうだ。今度は私が釣りをやろう！ それでセイバーと勝負するんだ。うん、そうしよう！）

そんな事を考えなのは笑う。それに土郎も笑う。そしてそんな二人に気付き、桃子が「何？ お母さんも仲間に入れて」と言ってきたので、それになのは笑顔を浮かべて答えた。

「あのね、また来たいなって。それで、今度来る時は……」

桃子と土郎に来年の事を楽しそうに語るなのは。それを聞きながら微笑む二人。こうしてなのはのキャンプは終わりを迎える。その胸に多くの思い出を残して……



空白期 (S & a m p · R)

それは、まだなのは達が二年生になる前の事……

「ドライブ……ですか？」

「そう。ライダーも見事に免許取ったし、初運転を兼ねて五人でお出かけ。いいでしょ？」

「行きましようライダーお姉様！ 紅葉が綺麗ですよ」

そう言つてファリンが見せたのは旅行案内のチラシだ。そこには美しい紅葉の写真が印刷されており、確かに目にも鮮やかであった。それを見たライダーは少し思案するが、何かを思いついたのか笑みを浮かべて頷いた。

「……いいですね。では、紅葉狩りにでも出かけましょう」

ライダーの答えに互いの手を合わせる忍とファリン。そんな二人を見て苦笑するすずかとノエル。そこからどこへ行くかをドライブであるライダー抜きで決め始める忍。そんな彼女へノエルが苦言を呈するも、ファリンがきつとどこに決まっても大丈夫と言つて忍を援護。

すずかはそんな三人を他所にライダーへ何故承諾したのかを尋ねていた。その問いかけに対し、ライダーは意味ありげな笑みを浮かべてこう返す。それはいずれ分かります、と……

月村家五人での外出。実はそれは結構珍しい。何だかんだで高町家との繋がりが強い月村家。そのため、何かイベントがあるたびになのはや恭也を誘ってしまい、五人だけでというのは中々なかったのだ。

それを考えライダーは今回の外出に頷いた。たまには家族水入らずもいだろうと考えて。その事にすずかが気付くのは、この日の写真をアルバムへ飾る時までお預けとなる。

月村家はいつもノエルが車を運転する。しかし、それではノエルの負担ばかりになるからとライダーが告げ、運転免許を取りに行つたのがそもそもそのキツカケ。その裏には合法的に車へ乗れるようになりたいとのライダーの思惑があった。

それを気付かない忍ではなかったが、ライダーの乗り物に対する欲望は嫌と言う程理解しているために敢えて何も言わなかった。そう、彼女はあの自転車を製作した。その改良などをライダーはよく頼みに来るのだ。その頻度が高いため、忍はライダーの持つ一面を誰よりも知つたのである。

今回はライダーが運転するため、助手席にノエルが座っている。後部座席には忍とファリンに挟まれる形ですずかが座っていて、三人で楽しげに話していた。

それを聞きながらライダーとノエルは微笑み合い、視線を前方に向ける。既に車は海鳴市を離れ、郊外を走っていた。目指すは紅葉で有名な溪流だ。

「大分人気が無くなってきましたね」

「そうですね。さて、そろそろ看板などが出て……あ、あれですら

ライダー」

ノエルの指差す方へライダーは視線を向ける。そこにはガイドブックに乗っている紅葉の名所への案内があった。その指示を記憶し、ライダーはゆっくりと加速する。

実はそれは珍しい。本来ならばライダーは速度を限界まで出したがるのだ。しかし、今回は自分以外の者が乗っているために安全運転を心掛けている。後は、呆気無く速度が出るのにもやや不満がある様子。だが、一番の理由は……

「あ、あれ見てすすか」

「どれ？」

「あ、凄いです。赤や黄色が一面に……」

すすか達が景色を楽しめるようにとの配慮だ。何気ない車内の会話を出来る限りしてもらいたい。今のように、みんなが喜んでくれる時間を少しでも長く出来るようにと考えていたからだった。

（私も……やはり変わったのですね）

今までは季節の移り変わりにそこまで意識を向けた事等なかった。だが今は違う。春夏秋冬を楽しみ、愛でる。そんな日本人の心がライダーにも芽生えてきたのだ。その原因は勿論あの衛宮邸での日々と……

（スズカ達のおかげですね）

季節毎の風物詩や旬の食べ物。それらを欠かす事無く教えてくる

忍とフェアリン。それを時に嗜め、時に補うノエル。そして、そのやり取りを微笑み、慌て、楽しむすずか。そんな中で暮らしていれば、ライダーも変化するというものだ。

だがその変化をライダーはむしろ喜んでいた。興味を持てる事があまりなかった以前に比べ、今は趣味が段々出来てきた事もその影響だろう。まあ、それもサイクリングやサーフィン等の何かに乗るといふものばかりなのだ。

そんな事をライダーが考える間も車は進む。やがて見えてきた観光客用の駐車場へ入り、本来なら躊躇うような難しい場所へあつさりライダーは車を入れる。

そのテクニクに忍達だけでなく、誘導員達や他のドライバーさえ軽い驚きを見せた程だ。そして五人は車を降りると、視線の先に見える大勢の人波にややため息を吐きながらゆっくりと歩き出す。

ライダーだけは持ってきたリュックを背にした。その中身はフェアリンとライダーがノエルと共に用意した食事だ。綺麗な景色の中で食べる事を意識し、遠足のような気分でフェアリンが提案したのだ。

「さて、じゃあ紅葉を楽しみながら歩くとしましょうか」

忍の声を合図に歩き出すライダー達。視界一杯に広がる紅葉の世界。鮮やかな黄色や紅を楽しみながら五人は歩く。途中にある売店を冷やかし、道行く人との僅かな会話をしつつ、五人は景色を堪能していた。

「この辺りなら良さそうですね」

やがて、あまり人のいない場所を見つけたライダーがそう言ってリュックを置いた。そのリュックから大きめのビニールシートを取



り出し、地面へ敷く。その途端、ファリンがそれに真つ先に座ろうとしてノエルに注意された。

「先にすずかお嬢様です」

「はい……」

「別に気にしないのに……」

すずかは苦笑しながら靴を脱いでシートに座る。見上げれば鮮やかな紅。見渡せば色取り取りの山々。そんな景色を眺めて、心から来て良かったと思うすずか。その表情にライダー達も笑みを見せる。そして忍に続くようにファリンも座り、ノエルとライダーも静かに座って景色を眺めた。誰も何も言わず、ただ紅葉を眺める。その色合いや周囲の空気に心が落ち着くのを感じながら。

（凄いなあ……。こんなに綺麗な紅葉は初めてかも）

（良い雰囲気ね、ここ。……今度は恭也と二人で来たいかも）

月村姉妹は共に向かいの山々を見つめて、思いを馳せ……

（美しいですね。これが紅葉……。秋の情緒、ですか。良いものです）

（赤に黄、それに緑。本当に綺麗ですね……。あ、お土産に一枚持って帰ろう）

メイド姉妹も風に揺れる葉を眺め、思い思いに心を動かし……

（この国は、本当に情緒というものを大事にしますね……。これだ

けの人が、ただの葉を見るために動く。まさに雅のためですか。アサシンは本当に日本人なのですね)

ライダーはその場を訪れている人の数を思い出し、小次郎の事を考えて小さく笑みを浮かべる。

そんな風にどれ程過ごしただろうか。やがてファリンが思い出したかのようにリュックを引き寄せた。その行動の意味を理解し、ノエルとライダーは苦笑する。すずかと忍はその中身を知らないため、不思議そうにその行動を見つめた。

ファリンがリュックから取り出したのはランチボックスと水筒。それを見た瞬間、すずかと忍も理解し笑い出した。それにつられるようにライダーとノエルも笑う。

「花より団子ね、ファリンは」

「ち、違いますよ。そろそろすずかちゃんもお腹が空くだろうと……」

「ふふ、ありがとうファリン。確かにもうお昼だもんね」

忍の言葉にファリンがどこか顔を赤くしながら反論するも、日常の彼女を知られているために説得力がなくどこか声も弱い。それにすずかは笑みをを見せて、そのランチボックスを受け取った。

その中身はファリン作のおにぎりとノエルとライダーが作ったおかずの二段重ね。水筒の中身は緑茶である。それを見て、すずかは嬉しそうに「遠足みたいだね」と呟いた。

その呟きを聞き取り、ライダー達三人が我が意を得たりと嬉しそうに笑みを浮かべる。忍はそんな三人を見て、何を意図してリュック

クを用意したのかを察して小さく微笑んだ。

「じゃ、早速頂きましょ」

「うん」

「じゃあ、ライダーお姉様が号令を」

「私、ですか？」

「ええ。今回はライダーがある意味主役ですから」

ファリンの言葉にライダーはどこか困った顔をするが、ノエルの主役との言葉に苦笑した。そして、観念したように手を合わせる。

「では、いただきます」

「「「「いただきます」」」」

綺麗に揃う月村家の声。それを合図にランチボックスの蓋を開けるすずか。そして中身を見てすぐに笑みを浮かべた。本当に遠足のお弁当のようだったからだ。

そのメインであるファリン作のおにぎりは概ね好評だった。概ねというのは、中身を入れ忘れていたり、あまりに力を入れて握ったせいで固くなっていたものがあつたため。

一方、ライダーとノエルのおかずは何の問題もなかったのだが、それを忍が「面白みがない」と言った。それを聞いてライダーが「では、今夜はシノブが面白みのある”美味しい料理”を作ってください」と返し、忍を沈黙させる一幕があつた。

その時の忍の表情にすずか達が声を出して笑ったのは言うまでもない。そんな賑やかな食事も終わり、お茶を飲んで一息吐いた後、ノエルは散歩を兼ねた行動をファリンと起こした。

「では、私とファリンは売店に行ってきます」

「あ、私も行くわ……すずかは？」

「私はもう少しここにいる」

そのすずかの答えに忍は笑みを返すと、ライダーへ視線を向ける。それに気付き、ライダーも視線を向けて首を横に振る。もう少しこの景観を眺めていたかったのだ。それを悟り、忍は笑みを返すと靴を履いた。

「じゃ、行って来るわね」

「うん」

「気をつけて。後、無駄遣いをしないように」

動き出す忍へ平然とライダーが告げたのは、どう聞いても子供への注意としか思えない言葉だった。当然、それに忍が反応しないはずもなく……

「ライダー……私を何だと」

思っているのか。だが、忍のその言葉は言う事が出来なかった。

「お嬢様、置いて行きますよ」

「くっ！ 分かったわよ。時々ノエルも私の敵になるわよね……」

まるで自分の発言を遮るように歩き出したノエルに、忍はブツブツ呟きながら後を追う。それを笑いを噛み殺してすずかは見送った。そして、その後姿が見えなくなったところでライダーが言った言葉が、すずかの我慢を決壊させた。

「子供としか思えないです」

呆れたように言い切ったライダー。それが先程の忍が問い質そうとした事の答えと分かり、すずかは吹き出した。その笑い声を聞きながらライダーも笑う。紅葉が風に揺れる。それにより紅葉が枝から離れ、ユラユラと舞い落ちた。

それに気付いたすずかが視線を上へ移した瞬間、突風が吹き抜ける。一瞬目を閉じるすずか。風が止んだのを感じ取り、すずかがその目を開けるとそこには……

「わぁ……」

「……綺麗ですね」

地面の紅葉や枝の紅葉が辺り一面に舞い散っていた。まるで紅葉の雨。そんな中、ライダーがふと手を差し出した。すると、その手に一枚の紅葉が吸い込まれるように静かに乗った。

それを見たすずかが、自分の手を同じように差し出す。するとその手にも吸い込まれるように紅葉が乗った。ライダーの紅葉はやや黄色が残るものの真紅。すずかの紅葉は黄色と赤が半々。それを見てライダーが微笑む。

「まるで、人間のようですね」

「え？」

「大人を真紅とすれば、赤子が緑。黄色は子供で、赤と黄が半分ずつなら……」

「……子供から大人へなり始めてる？」

すずかの言葉にライダーは頷き、ことう続けた。

「まさに今の私達です」

「……そうだね。私はいつ真っ赤になれるかな？」

「それは何とも。ですが、いつか必ずなれるはずですよ」

どこか楽しそうにライダーへ問いかけるすずか。それにライダーも楽しそうに笑って答えを返す。そして彼女達は揃って視線を手にした紅葉へと向けた。

（いいものです。こんな穏やかな時間を……貴方達ともっと過ごしたかったです、サクラ）

（ライダーって、やっぱり時々詩的な表現するなあ。あれ？ でもライダーのもし黄色があった気がする……）

静かに風が吹き抜ける。それを感じながら手にした紅葉を眺める二人。それからそこに会話は無かった。それでも、すずかもライダー



## 空白期

照りつける真夏の太陽。どこまでも続く砂浜。そして、視界に広がる大海原。ここはバニングス家のプライベートビーチ。なのは達は小学校二年生となり、夏休みの思い出作りにここへ来ていた。

はやても連れて行きたいとアリサが提案した海水浴。初め、その話を聞いたなのは達は揃って難色を示した。それははやての事を思っただった。海水浴場は人が凄いし、車椅子のはやては絶対来ない。そうなのはとすずかが言うと、アリサが自慢げにこう答えたのだ。

大丈夫よ！ アタシのプライベートビーチに行くんだから！

その時、なのはとすずかは思った。大財閥のお嬢様というのは、やはり伊達ではないのだなと……

車で海鳴から走る事、実に二時間弱。その浜は静かで、眼前には穏やかな海が広がっていた。その近くには、おそらく宿泊用なのだろう。オシャレなペンションのような建物まである。そんな光景を眺め、どこか人事のようにはやては呟いた。

「は、すごいな」

「まったく……さて、はやて」

「ん？」



「……水着に着替える前に、課題を片付けるのではなかったのか」

その呟きに同意するアーチャーだったが、その後にはやや苦い顔ではやてを見つめた。課題とは通信教育で課せられたもの。言わば夏の宿題というものである。確かにはやては出かける時、それを片付けてから遊ぶと言っていたはずだったのだ。

アーチャーの目の前にいるはやては、既に赤を基調としたワンピースタイプの水着を着ていた。見れば、なのはやすずかも水着になっている。なのははピンクのワンピースタイプ。すずかは水色の同じタイプだ。ちなみにアリサは鮮やかなオレンジの同じタイプ。このためだけに水着を四人で新調しにいったのだ。

「それがな、アリサちゃん達は宿題持ってきてないん言っんよ」

「……分かった。今回は大目に見よう」

はやての視線は、みんな持ってきてないのに自分だけやるのは嫌だ。そんな想いを込めたものだった。それを感じ、アーチャーはそれ以上の追求を止めた。そうしても何の意味もないからだ。

それに子供らしく過ごせる夏の時間にケチをつけるのもどうかと考えたのだ。なので視線をはやてから後方へと移してアーチャーは歩き出す。そこには車から降ろした荷物を運んでいる小次郎がいた。その横には恭也もおり、それを手伝っている。

アーチャーもそれを手伝うべく、近寄ったところで

「いい所に。アーチャー、これを立ててきてください。スズ力達の休憩スペースを作らなければならぬので」

水着姿のライダーに呼び止められた。車を降りる時まで確かに普段着だったはずの。ライダーはやや戸惑うアーチャーにパラソル等一式を手渡し、車のトランクを閉めた。

その道具を受け取り、アーチャーは何かを察したのか苦笑いを浮かべる。その視線は前方にある海へと注がれていた。そこに見える一人の女性がライダーが水着となった原因だろうと踏んだのだ。

「……了解した。ライダー、君も着替えたのか」

ライダーはその言葉に困った顔で頷いた。ライダーが着ているのは黒のビキニタイプ。勿論選んだのは言うまでもなく忍だ。その忍はといえば紫の水着に着替え、すずか達と一緒に海で遊び始めていた。それを見ながら、二人は息を吐く。

「……無理矢理です。私はまだいいと言ったのですが……」

「成程。やはり車内ではやてと話し合っていたのはそれだったか」

今回の外出はなのは達高町家が四人、月村家は三人、アリサと小次郎、はやてにアーチャーの計十一人という団体だ。故にバニングス家が手配したマイクロバスをライダーが運転し、ここまで来た。

ちなみにノエルとファリンはお留守番。日帰りのため、すずか達の夕食等の支度をするのだそうだ。ファリンは行きたがっていたが、ノエルに止められ渋々またの機会と相成った。

「まあ、いいのです。セイバーに比べれば……」

「私がどうかしましたか？」

ライダーの声に反応したのは車内から現れたセイバーだった。そ

の姿も既に水着になっている。白いビキニタイプの水着。それにアーチャーは一瞬とはいえ見とれた。だが、それを感じさせないよう意識を切り替えるところ尋ねた。

「君も既に着替えたのか？」

「ええ。海で泳ぐのは初めてなので、楽しみだったのです」

そう答えるセイバーは歳相応の少女の表情で笑った。それにアーチャーもライダーも笑みを浮かべる。とても微笑ましいと思っただ。それにセイバーは気付き、照れくさそうに顔を伏せた。すると、そんなセイバーを呼ぶ声が聞こえてくる。

「セイバー、早く早く〜！」

「あつ、はい。今行きます！」

楽しげに手招きするなのはに答えると、セイバーは急いで浜へと向かう。その後ろ姿を見つめ、二人は眩く。

「子供だな（ですね）」

余談だが、セイバーは最初海面を走ってなのは達を驚かせた。精霊の加護によるものだったが、セイバーは海にも適応されて喜んでいた。まあ、その後はさすがに普通に泳いでいた。

なのは達は知らない。その時セイバーが取った行動。それは、かつて彼女が衛宮士郎と行ったプールでやった行動とまったく同じだった事を……

「これで終わりですか？」

「うむ。すまぬな美由希殿。手伝ってもらったつもりはなかったのだが……」

「いいんですよ。私はまだ泳ぎたいって気分じゃなかったんですから」

そう言って美由希は笑う。着替え終わって浜に向かおうとしたところ、建物の方へ荷物を運ぶ小次郎を見かけ、つい手伝いを申し出たのだ。だから既に眼鏡は外し、いつでも泳げる状態だった。小次郎はそんな美由希に笑みを浮かべ、ぽつりと一言。

「しかし、水着と言うのは些か破廉恥なのだ。露出が多いと思うのだが……？」

「え、ええつと……水の抵抗を減らすために生地は少なく薄くしてあるんですよ」

美由希の格好は南国系の色使いでパレオつきのもの。それをまじまじと見つめる小次郎。その視線に邪気はなく、純粹な興味だった。だが、当然その視線にどこか慌てたように美由希は答える。

ここまで遠慮なく男性に注視される事などないし、彼女としても今回の水着は少し思い切ったのだ。何せ行く先はバニングス家のプライベートビーチ。そんな庶民が行ける場所ではない海で遊べるとなれば、少々大胆な水着を着てもいいだろうと思ったためである。

小次郎は美由希の答えに納得するも、まだ何か気になるようで……

「美由希殿は、見られて良いものなのか？」

「あ、小次郎さんなら大丈夫です。って、あの、気にしないんじゃないかと、その……」

しどろもどろになる美由希。男性として見ていないと言ったようで、それを訂正するべきかと考えたのだ。そんな美由希を不思議そうに眺め、小次郎は呟く。

まあ、その姿も中々雅なものよ。

その呟きが美由希の動きを更におかしくしたのだが、それに気付かず小次郎は歩き出す。美由希もそれを見て、やや動揺したままついていく形で歩き出した。

向かう先は賑やかな声のする浜。そこではなのは達が海で遊び回っていて、はやてはさすがと砂を使って城を作っている。しかし、そんな光景を見ても小次郎が抱くのはまったく浮かれたものではない。

（ふむ。泳ぐのは鍛錬の一環と考えておった時代とは違うか。しかも海では、な。やはりこの時代は面白きものよ）

（小次郎さんって結構大胆だな。あんなにジロジロ見られたの初めてだよ。でも、不思議と嫌じゃなかったな？ ……恥ずかしかったけど）

一方の美由希は先程の小次郎から受けた視線を思い出し、頬を赤くしていた。邪心があれば美由希とて嫌悪感を抱いたし、そもそも

そんな相手ならば即座にどうこうするだけの気持ちを彼女は持っている。

だが、小次郎は無垢な子供のような存在だった。知らない事に純粹な興味を示し、水着姿の美由希相手に少しも邪な目を向ける事など無かつたのだから。

「美由希殿、良ければ私に泳ぎを教えてくださいぬか？」

そこへ小次郎は美由希へそんな頼み事をした。彼としてはきつと泳法なども自分の知るものと違うのだろうと考え、教えてもらおうと思っただけだった。それを聞いた美由希は小次郎が泳げないと取った。なので、どこか意外そうな表情を一瞬浮かべる。

「え？ ああ、いいですよ。じゃ、迷惑にならないようになのは達のない方へ行きましょうか」

それでも小次郎の申し出に笑顔で応じ、美由希は先導するように歩き出す。この後、なのは達が遊ぶ場所から離れた所で二人だけの水泳教室が開かれる。

そこではクロールなどを披露する美由希とそれを見よう見真似で覚える小次郎の姿があった。その子供のような小次郎に美由希は微笑み、見事な泳ぎを披露する彼女へ彼も感心する。

そんな二人の水泳教室は昼まで続いた。美由希が小次郎を意識し出すのは、これが最初のキツカケだった……

運んでいた荷物を降ろして恭也は息を吐く。視線の先にあるクーラーボックスの中身は、スポーツ飲料などのドリンク類だ。小次郎が運んでいた方のクーラーボックスには昼食用の食材が入っている。昼は浜でバーベキューをする事になっているのだ。

そのため、現在アーチャーが下拵えをするべく建物内の厨房で働いている。まあ格好は水着なので中々シユールだろうが。少し様子を見てこようか。そんな風にからかい精神を發揮しようとする恭也と、そこへ聞き慣れた声があった。

「……何ぼくつとしてるの？」

「いや、アーチャーさんの様子を少し見てこようかと」

「あ、その顔はからかうつもりね。やめておきなさいよ。アーチャーさんって意外と繊細なんだから」

そう言っただけで忍は恭也の腕に胸を押し付ける。その感触に慌てて周囲を確認する恭也。幸い誰も見ていなかったが、忍はそんな恭也に口の端を吊り上げると耳元に顔を近づけて囁いた。

「もう、別に初めてって訳じゃないクセに」

「っ！？ 忍！」

からかうような囁きに恭也が微かに声を荒げるが、それはただの照れ隠しだと忍は知っている。だからスツと恭也から体を放すと悪戯めいた笑みを見せて走り出す。勿論、去り際に。

「恭也のムツッリ」

捨て台詞を忘れずに。それに恭也は呆れながらもため息を吐いて追い駆ける。まだ水着にはなっていないが仕方ないと。ここで追い駆けなければ、確実に後で拗ねるか文句を言われるからだ。

（つたく、忍の奴も子供みたいなどがあるんだからな。……ま、そこが可愛いところでもあるのか）

さり気無く惚気ながら恭也は走る。その視線の先には浅瀬が見える。それも人目に付きにくいような感じの。それに気付いて恭也はまさかなと小さく呟いた。いくら何でも忍はそんな事を考えていないだろうと。

この後二人はライダーが捜しに行くまで姿を見せなかった。現れた時、何故か恭也が若干バツが悪そうにしていたのと、忍の肌艶が良くなっていたのは後で分かる事である。

恭也と忍が揃って浅瀬に消えた頃、浜の方では水飛沫を上げてはしゃぎ合うのはとセイバーがいた。互いに水を掛け合い笑っている。ライダーは先程から黙々と泳ぎ続けていた。

その速度は凄まじく、何度も沖と浜を往復しているのだろうか、最早それが何回か分からぬぐらいの速さだった。すずかとはやても最初こそ波打ち際で遊んでいたが、今は砂浜で芸術に挑戦していた。

そして、そんな光景を眺めてアリサは満足そうに頷いて視線を横へと移す。そこには褐色の男性がいた。

「……ね、まだ？」



「もう終わる」

ポンプを使い、ビーチボールを膨らませているアーチャー。それをまだかまだかと待つアリサ。バーベキューの下拵えを終え、浜へと戻ってきたアーチャーを出迎えたのは意外にもアリサだった。

アリサは軽く驚くアーチャーに無言でポンプとビーチボールを手渡し「小次郎が美由希さんとどこかへ行ったのよ」と告げた。そして、それだけでアーチャーは全てを理解した。

「……終わったぞ」

「ありがとう！」

そして、現状に至る。小次郎に代わりアリサの要望を聞いてやっていたのだ。お願いや頼むからと言わず要求を突きつけるアリサに、アーチャーがきんのあくまの姿を思い出したのは言うまでもない。

恐るべきは過去の記憶か、それとも刷り込まれた世話焼きの性か。とにかくアーチャーはアリサにはどこか逆らえない時があった。アーチャーから手渡されたビーチボールを抱え、走っていくアリサの後姿を見つめながら彼は思う。

（はやてもだが、アリサもどこか凜達を思い起こさせる時がある。主にはやては口調でアリサは言動だが……）

彼は気付いていない。アリサはともかく、はやての場合は自分が少なからず原因になっているとは。それでも、アーチャーは楽しそうになのは達へ声を掛けるアリサを眺めて微笑む。このまま守護者として動く事無く時間が過ぎてくれる事を心から願いながら……

砂浜に対角線を描くように座るなのは達。その四対の視線はビーチボールに注がれている。ちなみにセイバーはライダーと遠泳対決をしていた。お昼までには帰ってくると言っていたのでなのは達は心配していない。何故なら、セイバーが食事時に帰らないなど絶対に有り得ないのだ。

「ほら！」

「ほい」

「え？ え？ あうっ！」

アリサからはやてへ、はやてからなのはへ打ち返されたボールはその上を通り過ぎる。それを何とか打ち返そうとしたのはだったが、そのままひっくり返ってしまった。

そう、これはその場から動かずに何度打ち返せるかを競うルールはやてが同じ条件になる遊びにこだわる、アリサ提案のボールゲームなのだ。意外とこれが楽しくも難しいため、すずかもアリサも先程から何度も打ち返せず悔しい思いをしていた。

「なのはちゃん、大丈夫か？」

「な、何とか。でも、少し砂が口に入ったかも……」

何度か砂を出そうとするなのは。それをアリサは笑みを浮かべて見つめていた。何しろ、なのはは打ち返した回数が一番少ないのだ。

原因はなのはの運動神経だけではない。はやてから打ち返されるボールのコントロールにもあった。

打ち返せるように調整するアリサやすずかと違い、はやてはボール遊びなどやった事があまりない。なので、中々上手い場所にボールを打ち返す事が出来なかったのだ。

「ごめんなあなのはちゃん。わたしがもっと上手に返せればええんやけど……」

「いいよいいよ。私が運動音痴なのもあるんだし」

すまなさそうに謝るはやてになのはは笑顔で答える。それにはやても笑みを返して告げる。

「よっしゃ！ なら、次は絶妙な球を返したるな！」

「うんっ！ 私も頑張るよ」

互いにガッツポーズを見せ合うのはとはやて。この後、初めて継続回数が三十を超え、四人の盛り上がりは凄いものとなるのだが、それはまた別の話……

煙が立ち上る砂浜。そこにはバーベキューセットを前に鋭い目で串を睨んでいるアーチャーがいた。その周囲にはセイバー達が集まっていた。視線は全て串に向けられている。

串には野菜や魚介に肉などが刺さっている。どれもアーチャーに

よる”仕事”が施されていて堪らない匂いを出していた。なのは達もその匂いに我慢出来ず、遊びを切り上げて今か今かと待っている。

離れた場所で泳いでいた美由希と小次郎も匂いで昼時と理解したのか、砂浜に戻ってきた。唯一恭也と忍はまだ姿を見せず、ライダーはそんな二人を捜してくると言っこの場を離れている。

「いい匂いだよね」

「まったくです……」

「なのは、セイバー、くち。涎出てるよ」

美由希の微笑みながらの指摘に慌てて口元を拭うのはとセイバー。その視線の先にあるのは目にも鮮やかな串の数々。魚介の串には、アーチャー特製の醤油ダレが塗られており、それが網に落ちると何とも言えない香ばしい匂いを漂わせる。

更に、肉の串にはアーチャー作バーベキューソースが塗られているので、それも網へ落ちる度に食欲をそそのるのだ。二つの匂いによる相乗効果は高い。

何せ、なのはのように涎とはいかないまでも、アリサやすすかですえその匂いには食欲を刺激されていて、先程からお腹が鳴らないか心配しているのだから。

「……これ、何で作ったんや？」

「後でレシピを教えよう。それとさり気無く串を確保しようとするな。それはまだだ」

タレを真剣に見つめながら、シレッと魚介大目の串を手にして  
いるはやてにアーチャーのストップがかかる。それに苦い顔で従うは  
やてだったが、小さく「ケチ」と言うのは忘れない。

はやてが手にした串はもう食べられる状態になっていた。だがア  
ーチャー基準ではまだ完全ではないのだ。最高の状態で食べてもら  
う。そのために一切の妥協を許さない男、アーチャー。

「何とでも言え。君には体の事を考慮した健康串をくれてやろう」

「それはおおきに。でも、わたしは野菜よりもお肉とか魚とかが必  
要や思うんよ」

「心配いらん。きちんと今日の夕食で食べさせてやる」

「わたしはこれが食べたいんや！」

いつものような会話を繰り返す二人になのは達は苦笑い。仲が  
いいのは結構なのだが、今ははやての大声がお腹に響くのだ。食欲  
を刺激する匂い。滴るタレとソースの音。見るからに美味しそうな  
串の数々。それになのは達の我慢も限界を迎えるところで……

「よし、ここから先はもういいぞ」

「……やったあ！」「……」

思い思いに串に手を伸ばすのは達。それを微笑ましく見ている  
美由希と小次郎。セイバーは既に串を両手に確保しているところが  
恐ろしい。しかも、肉と魚介の大目のものだ。そんな抜け目ないセ  
イバーに視線を送っていたアーチャーだったが、それに彼女が気付  
き。

「な、なんですかっ！」

「……いや、何でもない」

どこか恥ずかしそうな声を返した。そんなセイバーにアーチャーは懐かしさを感じて微笑むと、黙々と串に食材を刺しては網に置いていくのであった……

その頃ライダーは困惑していた。気配を探って二人を見つけたのだが、そこで展開されていたのは所謂”情事”というもので……

(さて、いつ声を掛けるべきでしょうか)

視線の先では忍が恭也に馬乗りになっている。どうやら互いに行為に夢中になり、周囲の気配に気付かないようだ。何せ、ライダーは何とか自発的に気付いてもらおうと先程から気配を敢えて出しているのだが、それが効果なしなのだから。

故にライダーはこの方法は無意味と判断した。ふと視線を後方へと向ければ、すずか達が楽しそうに食事をしているのが見える。それを微笑ましく思う反面、ライダーは自身の空腹を感じていた。受肉した事により三度の食事が欠かせないものになったためだ。

それに今日の昼食はアーチャー作。それはライダーにとっては中々味わえないものなので。

（何か手はないでしょうか？ このままではセイバーに粗方食べられてしまいます）

何としても食べたかったのだ。勘違いしてはいけませんが、ライダーは食欲魔神ではない。ただ、どこか土郎の料理を思わせる味に彼女は郷愁にも似たものを感じているのだ。

と、そこでライダーはある事に気付いた。恭也と忍が互いに息を切らせて抱き合っていたのだ。どうやら終わりを迎えたらしい。それを認識するや、ライダーは静かにそこから若干離れた。ここしかない。そう感じ取ったのだ。

「シノブ、キョウヤ、どこですか？ もう、昼食の時間ですよ」

我ながらワザとらしい。そう思いつつ、ライダーは声を出した。その瞬間、二人のいる方から物音がする。慌てる息遣いやうるたえる声まで聞こえたのだ。

ライダーはそれを確認し、息を吐いて空を見上げる。そこには雲一つない青空がある。見事な晴天。まさしく夏空だ。そんな天気を嬉しく思うも、ライダーはそれが先程の光景の原因に思えた。

「……この暑さが二人を狂わせたのでしょうか」

思わず言ったその咳きは幸運にも二人に聞かれる事はなかった。だが、二人が姿を見せた途端、ライダーは棒読みに近い感じでこう言った。

ああ、こんなところにいたのですね。捜しました。では、私は先に戻っていますので。

二人が言い訳をする暇すら与えず、役目は終わったとばかりにライダーはその場から走り去った。それを二人はただ呆然と見送るしか出来ない。この後浜へ戻った二人が見たのは、どこか安堵の表情を浮かべながらアーチャーから串を手渡されているライダーの姿だった……

そんなこんな海水浴も終わりを告げ、太陽の光が茜色に変わります。後ろ髪を引かれる思いのなのは達だったが、それでも誰も文句を言わずに車へと乗り込んだ。

夕日を浴びながら走るマイクロバス。その車内では、なのは達子供組が安らかな寝息を立てていた。すずかとはやてが互いにもたれあいながら眠り、アリサは小次郎に寄りかかって眠っている。

それを微笑みながら見つめる美由希と忍。アーチャーはライダーの話相手をし、小次郎はアリサが起きぬように気遣いながら、水平線に沈む夕日を眺めていた。そして、なのははといえば……

「すー……」

「はは、こうなるよな」

セイバーにもたれかかって眠っていた。恭也がそんなのはに上着をかけて小さく笑う。何故なら、なのはがセイバーの手をしつかりと握っていたからだ。

そんな微笑ましい光景を見て恭也は心から思う。こんな時間がず





女性用の水着が全然思いつかずバリエーションが出せないの。

## 空白期 (Y & amp; p . c)

「凄いいじゃないですかマスター！ 現場監督ですよ、現場監督っ！」

「うん、そうなんだけどね。と言うか、はしゃぎ過ぎだよキャスター」

「何言ってるんですか！ はしゃいで当然です！ 遂にマスターが偉い立場になっただんですからね！」

興奮気味に告げるキャスターを見て、ユーノはやや苦笑しつつも内心とても喜んでいた。それは家族同然のキャスターが一番に自分の任された立場を祝ってくれたから。

場所はスクライア一族が暮らす世界。ユーノは魔法学院を卒業し、故郷へ戻って以前と同じように遺跡発掘などの手伝いをしていた。当然魔法学院を出た事で彼の魔法技術等は向上し、それに比例して一族内でユーノを重用する傾向は強まっていた。

そして、遂にその日が来た。大人達ではなく、彼がある発掘現場を監督として任される事となったのだ。それはユーノが更なる成長の経験としてくれるとの期待を込めた一族の者達の決断。

このままでいけば、一族の長となる可能性も高いユーノ。そんな彼の将来性を重んじた長老の判断を周囲も支持したための結果だった。勿論それをユーノもどこかで感じ取っている。だからこそ彼は冷静でいようとしていたのだ。

（小さな現場だけど、僕が責任を負って大人達を指示する事もあるんだ。長老もその助けになればってこれを託してくれたんだし）

そう思いながらユーノは先程長老から渡された宝石を触る。それは真紅の宝珠。レイジングハートと言う名のインテリジェントデバイスだ。長老曰く、とある遺跡発掘で見つけた物で一族の中で使える者がいなかったために今まであまり日の目を見なかったそうだ。これをユーノが託されたのは、部族の中で一番優秀な魔法技術を持っている事に加え、キャスターを使い魔として生み出したと思われる彼の可能性に賭けたため。ユーノならばこれを使いこなせるのではと、そう考えたのだ。

「それにしても豪儀ですねえ。まさか監督就任祝いまでくれるなんて」

「そうだね。でも、これは僕にも使いこなせないかも……」

「何故です？」

「実は……さっき試しに起動パスワードを言ってみたんだ。でも、やっぱりバリアジャケットの展開とかは無理だった」

ユーノはそう返すともう一度レイジングハートを触る。

【ごめんね、レイジングハート。僕も君のマスターには相応しくなかった】

”あまり気にしないでください。貴方はこうして起動させる事は出来たではありませんか。それだけでも十分です”

【……ありがとう。僕じゃ魔法使用の補助とかにしか使えないけど、支えてくれると助かるな】

”分かりました。私に出来る範囲で助けます”

念話で語り合うユーノとレイジングハート。それを聞き取る事が出来ないキヤスターだったが、雰囲気から何かを感じ取って小さく微笑んだ。きっと自分の力の無さを悔いているのだろうと。

正直、普通に同世代の者達から見ればユーノは十分優秀だ。しかしユーノの目から見れば、学院で自分以上の者達は沢山いたのだ。だからこそ彼は自分を磨こうとする。

何せ、ユーノは学院で知ったのだ。自分が攻撃魔法の適正が低い事を。彼がならばと支援や回復などの魔法を重点的に磨いたのはそのためだった。

それを知らないキヤスターではあったが、学院での日々がまた少しユーノを成長させたとは理解して一人頷いたのだ。一段と男らしさを増しましたねと嬉しそうな声で告げて。

(行き過ぎると問題ですが、自分を未熟だと思って精進しようとする姿勢は高得点ですよ、マスター。そのままいい男街道を歩いてくださいね)

そんな事を考えて笑うキヤスターの視線の先には、初の現場監督として何をするべきかを考えて頭を悩ませるユーノの姿があった……

「今回の事、ちゃんと理解してますね？」

「うん。僕に経験を積みませようとしてくれてるんだよね」

「はい、正解です。つまり、これがマスターの初仕事ですよ」

キャスターの言葉にユーノは不思議そうな顔を返す。自慢ではないが、彼はもう何度か仕事をしてきているのだ。それをキャスターも知っている。なのに何故初仕事と表現したのか。それがユーノには疑問だったのだ。

「あの、キャスター。僕はもう何度か仕事をしてきてるんだけど？」

「あのですね、マスター。仕事と言うのは、責任を追う立場でやってこそ初めて仕事と言えるんです。今までは……マスターは自分の事だけ考えて、自分がミスをしなければ良かったですよね？」

その問いかけにやや真剣な表情で頷くユーノ。理解したのだ。キャスターが言いたいのは、今回は一層周囲の事へ気を配らないといけない。誰かがミスをしたら、それは全てユーノのミスとなるのだと。初仕事という表現はそこから来ている。ユーノはそう思い、改めて任された事の重みを感じた。

（そうか。今度は自分の責任だけじゃない。他の誰かの事も僕のする事になるんだ。自分の事だけ考えればいいって訳じゃなく、周囲の事にもちゃんと目をやらないといけない。監督っていうのはそういう大変な立場なんだ）

どこかで分かっていたはずの事。だが、それをこうして改めて言われる事で強く意識する事が出来る。ユーノはそう思ってキャスターへ礼を告げた。それにキャスターが気にしなくていいと返すのはいつもの事。

その後話するのはキャスターによる魔術講座だ。とはいえ、魔術についてはほとんど語り尽くしてしまったため、現在はサーヴァントやそれを使って行っていた”本来の聖杯戦争”についてが主となっていたが。

「……と、言う訳で、元々は聖杯を満たすための素とするために召喚してたんですよ」

「酷い……死者の魂をそんな風に利用するなんて」

「そうかもしれません。でも、それを平気で出来るのが魔術師と呼ばれる存在なんです。根源に辿り着くためなら何でもする。それが魔術師として正しい在り方ですし」

キャスターの言葉にユーノは思わず拳を握った。目的のためなら手段は選ばない。それがどれだけ恐ろしく間違っているかは子供でも分かる。例え誰かを犠牲にすれば世界が平和になると言われても、その犠牲を最初から肯定した者に平和や正義を語る資格はないのだ。そう思っユーノはやり切れない怒りを抱く。魔術師の在り方とその行動理由に。根本から人として間違っているその生き方に彼は強い不快感と嫌悪感を感じたのだ。

（自分さえ良ければ他はどうなってもいいなんて間違ってる！ そんな事をすれば、今度はその犠牲にされた誰かが同じ事を繰り返すだけじゃないかっ！）

「それが正しいなんて、魔術師はそれでいいの？！ 自分が根源なんてものへ辿り着ければ他はどうなってもいいなんて……」

「そうですマスター。その気持ちを無くさないでください。それが

無くなった者は人じゃありません。ただの悪魔ですからね」

「キャスト……？」

「自分が生き残るには他者を犠牲にするしかない。それが当然の中、いつまでもそれを嫌い、回避出来ないか足掻いた人がいました。でも結局自分が生き残るために犠牲を出す事しか出来なくて……それを悔い、でも前を向いて歩く事しか出来ず悩み続けた。そして、殺してしまった人の分まで生き残る事では償えないと答えを出したんでしょうね。最後まで他者を犠牲にしながら戦い抜きました。でも、その人は助ける事が出来たんです。最終的には一人しか生き残れないはずの枠組みの中、奇跡的に助ける事が出来た命があったんですから」

遠い目で話すキャストにユーノは何も言えなくなる。その表情がどこか寂しそうだったからでもあるが、何よりキャストの声が懐かしそうに優しくかったためだ。きつとキャストにとって大切な人だったんだろう。そう思ってユーノは黙ってその話を聞いた。

犠牲を肯定したくない。それでもそうせざるを得なかった。キャストはその人物の事を褒めもしなかったし、称えもしなかった。だが、貶しも否定もしなかった。ただ、それが人のあるべき姿ではないかとユーノへ語りかけるように言葉を紡ぐだけだったのだ。

「……ねえキャスト。その人は、君のマスターだった人？」

「えへへ、やっぱり分かっちゃいますよね。そうです。ここへ呼ばれる前に一緒に聖杯戦争を戦った方ですよ」

「そっか。魔術師の中にもそっという人はいるんだね」



「あ、正確にはあの方は魔術師じゃありません。教えたはずですよ。魔術師とは人らしい心を捨てる事が出来る存在だと」

「じゃあ……その人は？」

「言うなれば……魔術使いぐらいが精々ですねえ。出来る事なら戦いたくない。そんな雰囲気でしたし」

ユーノの質問にキャスターはそう返してふと思う。あの助ける事が出来た眼鏡の少女は今頃どうしているのだろうと。自分の主人の事を覚えているだろうか。もしかして再会を果たしているだろうか、と。

自分と共に過ごした主人と全て同じではないが、彼も生きている。願わくば今度は普通の人生を送って欲しい。キャスターはそう思っ  
て静かに目を閉じる。それを見つめ、ユーノは一人呟いた。

犠牲を出すしかないとしても、最後までそれを肯定せず足掻く事……か。

いつか自分もそんな決断を迫られるかもしれない。遺跡発掘は危険もある。その際、自分がそういう判断を下さないといけない事が今後ある可能性はないと言えない。そう考え、ユーノは誓う。何があっても、決して最後まで犠牲を出さない事を諦めないと……

日も暮れ、辺りを夕闇が覆い出した頃、ユーノの暮らす家には食欲をそそる匂いが充満していた。その原因は言うまでもなくキャス

ターの料理。ユーノが学院で生活する間、彼女は異世界の料理を勉強していたのだ。その甲斐あって、彼女はまた一つその腕を上げたのだから。

「さ、召し上がれ」

「えっと……いただきます」

「はい、どうぞ」

キヤスターによって日本式の食事作法を仕込まれてしまったユーノ。それ故に彼が手にしたのも箸だ。それはユーノが学院時代にミッドで買った物。管理外世界である地球の日本だがそこ出身の子孫などがあるため、少ないながらもその手の物を扱う店をユーノが調べて訪れたのである。

その苦労はそれなりにあったが、彼は勉強や実習で疲れた体で嫌な顔一つせずに調べた。それは、自分を愛し大切に扱ってくれる家族となったキヤスターに喜んでもらうために。

二人きりの食事だが、それでもユーノからすれば嬉しかった。キヤスターと出会う前は部族の者達と食べていたが、それとは違う温かさを感じる事が出来る。それは言うなれば一体感だ。

部族の者達もある意味では家族と言えた。しかし、やはり常に一緒とはいかない。だがキヤスターは違う。寝食を共にし、常に傍にいる。表向きは使い魔と言ってはいるが、ユーノにとっては実質姉のような存在だ。

「うん、やっぱりキヤスターの料理を食べると落ち着くよ」

「嬉しい事言ってくれますね。でも、それはあまり子供らしくない

ですよ」

「仕方ないじゃないか。同世代と遊ぶ事なんてほとんど無かったんだ」

キャスターの苦笑混じりの言葉にユーノはさらりと返す。しかし、その声に微かな寂しさが込められているのをキャスターは感じた。ユーノがどこかで同年代の友人を求めていると。

(マスター……そうですよ。やっぱり同い年のお友達は欲しいですよ。私もいつまで一緒にいられるか不安な部分もありますし、出来るなら親しい友人が出来るといいんですけどお……)

世界によって召喚されたとすれば、その要因がなくなり次第消える事になりかねない。そうなれば、ユーノがまた一人になってしまう。それをどこかで懸念し、キャスターは心から願った。

いつかユーノが親しい友人を得る事を。同性も異性も関係なく、他愛ない事を話して過ごせるそんな間柄の者達と出会う事を。願わくば早い方がいいと。そんな事を思うキャスター。彼女は知らない。その願いは予想を超える形で成就する事になるとは。

「それにしても、サーヴァントのクラスが七つあるとしたら他のクラスも召喚されてるのかな？」

「どうでしょう？　もしかすると私だけかもしれないですよ」

「それならそれでもいいんだけど。英霊なんて呼ばれるサーヴァントならないと思うけど、もし悪い人の元に現れていたら大変だから」

「……実はサーヴァントには反英雄と呼ばれる存在もいるんですよ、マスター」

ユーノの告げた仮定。それをキャスターは否定せず、ある事を語り出す。それはサーヴァントに関する事。英霊達はその名の通り、死後英雄として祭り上げられた者達がほとんどだ。だが、その中には一般的な概念で英雄と呼ばれる事になった者達とは一線を画す存在もいる。

それは、明確な悪を行った事で善を浮き彫りにしたという点から英雄と扱われた反英雄と呼ばれる者達だ。つまり、そういう者達ならば悪人の元へ召喚される可能性は高い。

キャスターが例として挙げたのはこの世全ての悪と呼ばれる事になったアンリマユだ。その話を聞いてユーノは疑問を抱く。反英雄と聞いてどれ程の悪人かと思ったのだが、聞いているだけではそれが悪人とは思えなかったのだ。

「キャスター、その人が反英雄とは思えないんだけど？」

「マスター、明確な悪と言うのは何も悪人だからではありません。この場合、彼は周囲全てから悪と認識された事。これが重要なんです」

「……その人以外全てが悪と認めた。だからその人は存在して目に見える悪となった。だからその人以外は善となる。それだからその人は善を明確にしたって事？」

ユーノの問いかけにキャスターは頷いた。そして、彼女はこう告げた。自分も反英雄に近いのだと。それに表情を驚きへ変えるユーノ。そんな彼へキャスターはかつての自分の話を語った。

傾国の美女と言われた事もある。ある時は恐ろしい獣の妖怪として暴れた事もある。それらの要素があるのが自分だと。困惑するユーノヘキヤスターはこう締め括った。自分のように複数のクラスに該当する者は、召喚者の人間が持つ要素に近いクラスへ分類されると。

「おそらくマスターは穏やかですし、ちょっと寂しがりやな部分もありますからこの姿だったんですよ」

「魔術師であるキャスターとして呼ばれたのは、僕にキャスターが他のクラスになる要素がなかったからって事？」

「多分そうですね。バーサーカーになるにはマスターが大人しすぎますし、他のクラスにも中々当てはまらないかもしれません」

「そっか。でも良かったよ。キャスターがキャスターとして召喚されて」

心から安堵して笑うユーノ。聞いただけが、狂戦士となったキャスターなど想像出来なかったのだ。それにそうなっていたら自分はこんな楽しく温かい日々を過ごす事は出来なかったはずだ。

そう考え、ユーノは息を吐いた。そんな彼の反応にキャスターは微笑む。彼女も同じ気持ちだったのだ。愛される事もあつたし愛する事もあつた。だが、それはいつも異性としての関係。今のような家族としてのものではなかったのだ。

(どこか私らしくないですけど、これはこれでいいものですよねえ。あー、子供欲しいって思う気持ちが出てきそうだなあ)

受肉した今ならそれも可能かもしれない。そんな事を考え、キャ



## 空白期 (F&amp;P・I)

時の庭園。そこでランサーがしていた事と言えば、厳しく激しいフェイト達の訓練とリニス先生にフェイト達と共に魔法の勉強。そして……

「具合はどうだ？」

「いつも通りよ。それなりね」

プレシアの精神安定だった。それが意味では一番大きな役割ともいえる。こればかりはリニスでも出来ない事だったのだから。

いつもの口調で問いかけるランサーの声に、柔らかい声で答えるプレシア。ランサーがプレシアの治療に手を貸すようになって既にかかりの時間が経ち、初めこそ声にも棘があった彼女もそれが大分和らいだ。表情も穏やかなものへなり始め、本人が客観的に見れたのならそれはアリシアと共に過ごしていた頃に近い印象を受ける程に。

そうなった一因はランサーが注意した事が挙げられる。言葉や態度に棘があったプレシアへランサーはこう言った。心を休ませなければ、体が休まらないと。それにプレシアも納得し、段々とはあるが口調を穏やかにしていったのだ。

現在、プレシアの部屋にはリニスがない。リニスはアルフとフェイトと共に昼食の支度をしているのだ。その際、つまみ食いをするようにしたランサーはリニスから注意させると同時に言われたのだ。プレシアが話をしたいと言っている。

「そりゃ良かった。で、話があるって聞いたんだが？」

「……アリシアの事を何とか出来るかもしれないわ」

「へえ、そりゃすげえ。どんな話が教えてくれ」

口調こそ軽いが眼差しは鋭くプレシアを見つめるランサー。その輝きと力強さにプレシアは言いようのない安心感を覚える。プレシアは知らない。自分がランサーに向ける視線が、何時の間にか単なる信頼出来る相手へ向ける視線ではなくなってきた事を。

出会ってからの時間、プレシアはランサーと過ごす事が多かった。そこでランサーが聞きたがったのはアリシアとの日々だった。その理由は単純に興味があったからなのだが、それがプレシアに意外な効果をもたらしたのだ。

アリシアとの楽しかった日々を思い返す事で生きたいとの気持ち強くし、その度に彼女が誕生日プレゼントとして望んだものを意識して、フェイトの事を従来とは違う観点で考えるようになり出したのだから。

「まだ真実かは定かではないのだけど……」

プレシアが話す内容へ耳を傾けるランサー。そんな彼にプレシアは内心で感謝する。出会えていなければ、自分はアリシアへ合わせる顔を失っていただろうと思いつながら。

プレシアがランサーへしたのはジュエルシードと呼ばれるロストロギアの話だった。その情報を聞いた時、ランサーは疑問に感じた事があった。それはその情報をどこから入手したのかという事。

それにプレシアはどこか悪戯っぽく笑った。その笑みにランサー



は少し驚く。するとプレシアは益々笑みを深めてやや楽しそうに答えを告げた。

「……管理局に少し、ね」

「へえ……バれないようにしたんだろっな？」

「誰に言ってるのかしら？ そんな簡単に分かりはしないわ。それに分かる頃には、ジュエルシード自体は行方不明よ」

（こんな風に会話を楽しいと思えるなんて久しぶりね。アリシアが生きていた頃以来かしら……？）

そう思い、プレシアはおかしそうに笑う。ランサーはそんなプレシアにやや不思議そうな表情を浮かべるが、別に悪い反応ではないと思いついたのか特に何も言わなかった。

だが、そのプレシアの笑みがどこか少女のような雰囲気に見えた。だからだろう。からかいたくなつたのだ。あまり見せない顔を覗かせたプレシアへの軽い礼代わりも兼ねて。

「結構可愛く笑うじゃね〜か」

「っ？！」

「ま、お前がそう言うなら心配ないな。信頼してるぜ、プレシア」

ランサーの言葉に動揺して頬を赤く染めるプレシア。それを見て、満足そうにランサーはその場を静かに離れる。そして、そのまま扉まで歩き、プレシアの方へ視線だけ向けて告げる。

「俺がお前を信じるように、お前も俺を信じる。絶対損はさせねえ」  
そう言い切ってランサーは部屋を出る。その後姿を見送ってプレシアはどこか見惚れたように呟いた。

「損どころか、もう十分得をさせてもらっているようなものよ」

そして、こんな事を思っただけでプレシアは目を閉じる。

(ランサー、貴方が私を信じるのなら、私も貴方を信じるわ。それが……例えばどんな事であっても……)

それはこう思っているから。自暴自棄となった己に、ランサーがどんな結果をもたらしてくれたかを知っているからだ。

貴方に会えた事であの子との約束を思い出せた。それだけでも、私は得をしてるわ……

テストロッサ家の食卓は戦争だ。といっても、それはランサーとアルフが取り合うだけで、リニスとフェイトは別に争う気はないのだが。

「あ、それアタシの！」

「へっ、俺の視界に入ったのが運の尽きだ」

今日もまたランサーがアルフの食べようとしていた鳥のもも焼きを奪い取り、笑みと共にそれにかぶりつく。それを悔しそうに睨みながら、アルフも負けじとランサーお気に入りのローストビーフを鷲掴み、その口へとほうばる。

それにランサーが怒りながらもどこか楽しそうにその手を料理へ伸ばす。アルフも笑顔を浮かべてそうはさせじと手を伸ばす。それを見ながらリニスとフェイトは苦笑い。食事が賑やかなのはいいのだが、些か騒々しすぎるのだ。

故に、リニスがやれやれといった表情で立ち上がり、料理の載った皿を取り合う二人に対して……

「いい加減にしてください」

バインドを施す。それも幾重にも重ねたものだ。ランサーとアルフがそれに身動きを封じられた瞬間、水を打ったようにその場が静まり返る。そう、それはリニスが我慢の限界寸前の合図。それ以上騒ぎ、料理を取り合うなら一切の食事の支度を自分達でやれという暗黙の宣告。

実際、以前同じ事をされて反抗した二人はリニスの食事を三日間お預けにされたのだ。フェイトとリニスだけ美味しそうに料理を食べる中、二人が許されたのは保存食の缶詰とレトルトだけ。

それでも最初こそ平然と食べていた二人だったが、流石に同じものばかり三日も続けば嫌になるもの。結局リニスに謝って許してもらった経緯があった。

「ふ、二人共、仲良く食べよ？」

「そそそ、そうだね。フェイトの言う通りだ」

「お、おう。いや、俺はこれをアルフに取ってやろうとだな……」

言い訳を始める二人に対し、リニスが返した返答は大きな音を立て椅子に腰掛ける事だった。その表情はとて素晴らしい笑顔。だが、ランサーとアルフは知っている。あの笑顔の下には般若の顔が隠れているのを。

だからこそ無言で座る。そして、黙って食べる。普段なら使わないナイフやフォークを使って。それを見てリニスが満足そうに頷く。フェイトはそんな三人を見て小さく呟いた。

「リニス、二人のお母さんみたい」

その呟きに気付かず、リニスはただ黙って二人が食べ終わるのを見つめていた……

食事の後片付けをフェイトとアルフに任せ、リニスとランサーはある部屋に来ていた。そこはデバイスルーム。かつてリニスがバルデイツシュを製作して以来、整備以外では使われていない部屋。だが、今日からある試みをする事になった。

「ではランサー、これに太陽のルーンを」

「おう」

リニスが手渡したのは、一般的に”ストレージ”と呼ばれる魔法

のデバイス。バルディッシュが”インテリジェント”と呼ばれるのは、優秀な人工知能を有しているためである。

そのためインテリジェントデバイスは使いこなせれば便利なのだが、コストが高い事と適性があるためにいまいち汎用性に欠けるのだ。何せどんな優秀な魔導師でも適応出来なければインテリジェントは使いこなせないのだから。

それに対しストレージは何のくせもなく誰でも使える。が、その反面これといった強みもないのだが、コストが低いために大抵の魔導師がこのストレージを使っているのだ。

だからこそ主流として使われているストレージを強化する事をリニスは考えた。道具としての機能。それをコストを掛けず高める。そこで注目したのがルーンだった。

力を象徴する”太陽”と守りの”大鹿”を刻む事で、魔法の威力やバリアジャケットの防御力を底上げ出来ないかと考えたのだ。

「……終わったぜ」

「では、早速」

だがリニスもいきなり二つのルーンを刻む事はしない。一つずつ試し、それぞれでデータを得てから二つを試す事にしていった。そして、まず太陽のルーンを刻まれたストレージを手に、ランサーへ向かって魔法を放つ。

「バインド」

「ぬっ……」

見た目は普通のバインド。だが、リニスは確信した。それがいつもよりも強化されている事に。何故ならランサーが解除するのに手間取っているからだ。

普段ならば、ただのバインドなど五秒ともたない。それが、今のバインドは実に十秒以上ランサーを拘束しているのだ。それでもバインドはランサーに解除された。その様子を見つめていたリニスは早速とばかりに感想を尋ねた。

「……どうですか？」

「話を聞いた時はどうかと思ったが……厄介だな、これは」

言葉とは裏腹にランサーはどこか嬉しそうに答えた。そう、これはあくまでも実験。魔術と魔法の融合。その目的はアリシアの再生とプレシアの治療に役立てるため。

今回の事でルーンがデバイスに影響を与えるのは分かった。そして、それが魔法の構造の脆さを補強しているのはランサー自身が感じ取った。これを応用し、治療系の魔法も効果を上昇させる事が出来ればプレシアの病気も何とか出来るかもしれない。

そう考えたランサーは、微かな光明を見い出したと思って密かに拳を握る。アリシアの方はまだ不安要素が強いが、プレシアの体については何とか出来そうな部分が出て来た。

「では、次は大鹿をお願いします」

「おう！」

想像以上に上手くいった事からそんな事を考えたランサーは、気合を入れるように返事を返した。リニスから手渡されたデバイスへ

先程よりも意気揚々とルーンを刻むのがその表れだ。

そうして大鹿のルーンを刻まれたデバイスは、結論を言えば守りに関するもの全てが向上していた。シールド等の身を守る魔法に留まらず、バリアジャケットの強度や相手からの魔法に対する耐性も向上している事が後に分かる。

これを基にデータを取り、後にリニスとランサーはインテリジェントにも適応させる事にする。だが、それは守りと力を別々に付与させる事となった。二つを刻む事にしなかったのだ。それには理由がある。それはこの後の実験が原因。

「では、最後に両方をお願いします」

「うっっ！」

最後に二つを組み合わせたデバイスを使ったのだが、これが予想だにしない結果をもたらしたのだ。

「では、まず……」

バリアジャケットを展開しようとリニスがデバイスを起動させた瞬間、それから恐ろしい程の魔力が放出される。それをランサーは感じ取ると瞬時にその手へ槍を出現させ、リニスの手からデバイスを弾き飛ばす。

そして、リニスの傍へ駆け寄るとかばうようにその体を抱き寄せた。それが完了するかしないかのタイミングでデバイスが爆発する。その音に目を閉じるリニス。ランサーはリニスを守りながら、その視線を床に散ったデバイスへと向けていた。

爆発した原因は分からないが、おそらく二つのルーンに加護にデ

バイスが耐え切れなかったのだらうとリニスは結論付けた。処理能力や許容量などがあるように、魔術の付与も耐久限界があるのだらうと。その推測にはランサーも納得した。

元々この世界にない魔術。それに魔法世界の道具が適応出来ただけでも凄い事なのだ。故に欲張り過ぎてはいけない。これは本来有り得ない力なのだから。

「しかし、これだけでも収穫だな」

「そうですね。ただ……まだバルディッシュには」

「ああ。壊れないとは言い切れないからな」

ランサーの言葉にリニスは無言で頷く。そう、まだ永続的に使えると分かった訳ではないのだ。それも含めた実験をしなければならぬ。だがそう思うもりニスはどこか笑顔だ。

「でも、一步前進です。いつか完全に魔法と魔術を融合させてみせます」

「頼む。しかし、俺が他の魔術も使いりゃなあ」

そう言っただけランサーは悔しげな表情を見せる。他の魔術も知識としてはある。だが、使えなければ意味がない。何せその知識の中には上手くすればプレシアに使えるものもあるのだ。

だが、それをどうすれば使えるのかがランサーにはわからない。効果は知っていても使用法を理解していない。それがランサーの知識の欠点。聖杯戦争の際、座から得た情報はあくまでランサーとして役に立つものだったのだ。



だがキャスターとして召喚されていても、それはきつと変わらな  
いだろう。何故ならば、それは彼が生きた時代には無かった魔術な  
のだから。

そんな悔しそうなランサーを見つめ、リニスは胸の動悸を落ち着  
かせようとしていた。先程の爆発から自分を守ったランサー。その  
胸に抱かれ、リニスは改めて感じたのだ。自分が強くランサーを意  
識しているのを。

（さっきのランサーの顔、とても雄々しかったです……あれが”漢  
”の顔というものなのですね）

リニスは山猫を素体とした使い魔である。つまり、普通の男より  
も強い男に惹かれ易いのだ。それも、理性ではなく本能で。故に心  
奪われる。嘘偽りない想いをぶつけるランサーに。自分を飾らない  
その生き方に。どこまでも実直に、どこまでも豪胆に己を貫き通す  
ランサーに。

そんな風にランサーへ想いを寄せるリニス。だが、それを口には  
しない。まだ、そんな事を言い出せる状況ではないからだ。それを  
深く理解しているからこそ、リニスは尽くす。プレシアに、ランサ  
ーに。いつか全てをやり遂げた時、その時がこの想いを明かす時な  
のだと。

（その時、貴方は私を受け止めてくれますか？）

そんなリニスの想いを知らず、ランサーは砕け散ったデバイスへ  
何かを重ねるように見つめるのであった……

リニスによる勉強が終わったフェイトは、もう楽しみとなりつつあるランサーの話を自室で聞いていた。光の御子と呼ばれ、ケルトの大英雄となったランサーの思い出は純粋な物語としても心躍るものがあるからなのだが、今日はランサーの昔話ではなく……

「俺達サーヴァントが魔力を使うのは何も魔術だけじゃねえ。中には魔術を使えない奴もいるしな」

「じゃ、何に使うの？」

「基本は宝具を使うために魔力を持つてんだ」

彼らサーヴァントに関する話だった。そこからランサーが簡単に宝具を説明していく。それはサーヴァントに一つはある切り札。絶対的な効果を持つ反面色々と容易に使えない理由がある物。

それはサーヴァントの正体に繋がる事が多いため。正体を知られば弱点なども知られる事に繋がりがねない。何故なら彼らサーヴァントは英雄と呼ばれる存在。伝承や逸話などには彼らの情報が溢れているのだから。

そんな説明を聞いてフェイトは納得するように頷き、自分なりの結論を告げた。

「じゃあ、その宝具って言う物がランサーの奥の手なんだ」

「そつなるな。ま、おそらく使う事はないと思うがよ」

「そうなの？」

「俺が宝具を使う事になるとすりゃ、それは相手がそれだけの強さ  
って事だからな」

ランサーはそう言って笑うとフェイトへ真剣な声で告げた。自分の宝具は一撃必殺。故に使う事自体が勝利へ繋がる。自分がそこま  
でしないといけない相手など、この世界にはおそらくいないだろう  
と。

「一撃必殺って……それだけ凄い威力なの？」

「違う。俺の宝具は基本使った瞬間に相手の心臓を貫く事が確定す  
る。ま、投擲に対して絶大な効果を発揮する宝具を持つてる奴や運  
がかなり良い奴は生き残る事もあるがそれでも深手を負う。いいか  
？ つまり、どんな事をしても確実に俺の宝具は相手の体を貫くつ  
て事だ」

ランサーの告げた内容にフェイトは息を呑んだ。それはとても恐  
ろしい事だったからだ。ランサーは冗談を言う事はあるが嘘は言わ  
ない。それを知っているフェイトはランサーの言葉を信じた。

それと同時にランサーが言った使う事はないだろうとの意味も理  
解した。ランサーの強さはフェイトが身をもつて知っている。たっ  
た一人で自分達三人を相手に出来、尚且つ勝利出来るのだ。しかも、  
全力を出しているとは思えない状態で。

（ランサーの宝具、か。それを使った相手って今までどれだけいた  
んだろう？）

ふと抱いた疑問。それ程の攻撃をランサーが放つ事になった相手

はいたとすれば、それはどれだけの人数になるのだろうか。その疑問をフェイトはランサーへ問いかけた。すると、ランサーは少しだけ懐かしむような目をし、もう会う事はないだろうと前置いて告げていく。そして最後に語ったのは……

「最近でならセイバーって奴とアーチャーの野郎だ。さっき挙げた生き残った例。それをやってのけた奴らさ」

「えっと、運がかなり良い人と投擲に有効な宝具を持ってた人？」

「おう。正解だ」

フェイトの言葉にランサーは笑みを浮かべ、その手でその頭をやや乱暴に撫でる。それが見た事のない父のように感じられ、フェイトは嬉しそうに笑った。

いつも訓練は厳しいがそれ以外では優しく賑やかなランサー。突然現れ、その日からフェイトの日常を変えた存在。アルフと口喧嘩するのは当たり前。リニスと二人でプレシアの世話をしている男。

今や彼はテストアロツサ家に欠かせない者となっていた。プレシアにもリニスにもアルフにも、そしてフェイトにも。本来彼女達へもたらされる結末。それを少しずつ変化させ、良い方向へと動かしているのだ。

フェイトのくすぐったいと言う声とランサーの笑い声が室内に響く。それを誰かが見ればこう言っただろう。仲の良い親子だ、と……

「よお」

「……フェイトはもう寝たよ」

「だろうな。だと思って来た」

深夜と呼んで差し支えない時間。急にランサーがフェイトの部屋を訪れた。だが、目的はフェイトではなくアルフだったようで、ニヤリといった笑みを見せて彼女を手招きした。

それに不思議がるアルフだったが、ランサーの表情からは悪意を感じなかった。なので、仕方ないとばかりにいそいそと部屋を出ると、部屋を出た所でランサーが手にしているものにアルフの視線が向く。そこにあつたのはワイン。しかもグラスを二つ持っていたのだ。

「ワインなんてどうすんのさ？」

「決まってるだろ？ 飲むんだよ」

当然といえば当然の答えにアルフは沈黙。そして、どこか頭を押さえながら告げる。

「アタシさ、飲んだ事ないんだけど」

「ならこれが初めてか。良い女は酒もいけるにこした事はねえ。今日で慣れとけ」

「いや……あゝ、もういいや」

まだ反論しようと思ったアルフだったが、ランサーがあまりにも楽しそうに笑っているのを見て、それを打ち切った。それにも興味があったのだ。アルコールというものに。だから、何の不満も抱かずランサーの部屋までついていく。

部屋に入るなり二人してベッドへ腰掛け、グラスを持つ。ワインについて何も知らないアルフ。だからだろう。ランサーがコルクを指で摘んで抜くのを見ても、アルフはそれがおかしい事だとは思わなかったのだ。

後に、コルクを取るための道具があるのを知った時も「ああ、そうなんだ。でも、ランサーならそれ無しで開けれるよ」とむしろ笑ったぐらいなのだ。

「ほら」

グラスへ注がれる赤い液体を眺めるアルフ。その鮮やかな色合いにアルフは思わず「キレイ……」と呟いた。それを聞いて、ランサーが笑みを浮かべる。そのアルフの声がとても艶めいていたからだ。

「……よし、んじゃ」

「えっと、乾杯……でいいの？」

「そうだな……アルフの初めての飲酒に乾杯ってな」

「はいはい……」

軽く合わせられる事で澄んだ音を立てるグラスとグラス。会話にはムードの欠片もないがそれが自分達らしいとアルフは思い、試しとばかりにワインを口に入れる。苦いような辛いような、でもどこ

かクセになるような不思議な味が口の中に広がる。

美味しいとは言えないが、不味いとも言えない。それがアルフの感想。だが、ランサーは勢い良く飲んでいいる。グラスからではなくこのまま直接飲みたいと言いながら。

(は、いい飲みっぷりだねえ)

ランサーが三杯目を飲み干す間にアルフはやっと一杯目を飲み終えた。それを見て、空になったグラスへランサーがお代わりを注ぐうとしたのだが……

「アタシはいいよ。後はランサーが飲みな。ほら」

「つと……へへ、わりいな」

ランサーから瓶を取り上げ、残りをグラスに注いでゆくアルフ。それを嬉しそうに受けるランサー。この酒盛りはアルフにとって大事な思い出の一つになる。何故ならこのワインを空にした後、ランサーがぼんやりと呟いたのだ。

「……やっぱ、良い女と飲む酒は美味いぜ」

「っ?!」

(こ、こいつ、また良い女って……)

ランサーの呟きにアルフはやや嬉しそうに顔を背ける。それをランサーは特に気にもせず、空瓶とグラスを持って立ち上がる。

「俺はこれを片付けてくる。お前はフェイトのところに戻りな」

「……そうする」

そして、そのままランサーは上機嫌な表情のままふらりと部屋を出て行き、ドアが閉まる瞬間ぽつりと一言告げた。

「……ありがとよ、付き合ってくれて」

「あつ……」

アルフが言葉を返そうとした時には、もうドアは閉まった後だった。静まり返る部屋に残され、アルフは呟く。

「……何さ。お礼を言うのはアタシの方だったのに」

こっちこそ誘ってくれて嬉しかった。それを言いたかったアルフ。ランサーはリニスが欲しいと言い、彼女はそれを嬉しく思っていた。だからアルフは彼女を応援していた。少なくとも今まではそう思っていた。

だが、今日の事で気付いた。自分もランサーに惚れていると。リニスとランサーが一緒にいるのを見ると、最近どこか心がざわつくのを感じていたのだ。その理由が今夜のやり取りで分かった。

(どうしよう……アタシ、ランサーが好きなんだ……)

先程から感じる顔の火照りは決してワインのせいだけではない。ランサーの去り際の言葉。それがずっと頭の中で繰り返される。そして、同時に不安に思う。自分はお世辞にもリニ스와違い女らしくない。行儀も悪いし、言動も女性らしくない。全てがリニ스와違う。



(アタシじゃ……敵いつこないよ、ね)

初めての恋。初めての想い。でも、それは叶えるはずもなければ叶えていい訳にもいかない。リニスはアルフにとっても姉のような存在。その幸せを邪魔したくないのだ。しかし、しかしである。

(辛いよお……苦しいよお……誰か教えておくれ。アタシ、どうすりゃいいのさ……)

ランサーのベッドに横たわるアルフ。考えるのはリニスとランサーの笑顔。そして、それを見つめる事しか出来ない自分。そんな想像をし、アルフは泣いた。

きっと、リニスとランサーが二人でプレシアの世話をするようになった頃なら、まだ彼女はそれを心から祝えただろう。だが今はもうそれが出来ない。度重なる訓練や食事、そして今回のようにたまたま過ごす二人の時間。それがアルフを変えてしまったのだ。

それは使い魔ではなく、一人の女へ。何も知らない子供から、恋を知った女性へと。この日を境に、アルフはランサーをどこか熱っぽく見るようになる。それにリニスは気付くも何も言わなかった。それは気を遣ったのでもなく理解出来なかったのでもない。それは自分も同じだったから。だからリニスは言わない。アルフの成長と変化を嬉しく、どこか複雑に思いながら。

(ランサー、アルフまで変えてしまうなんて……いえ、私も変わったのです。本当に貴方は……凄く漢なのです)

(アタシ、決めたよ。いつかこの気持ちをアンタにぶつける。それでどうなっても、アタシは構わない)



## 無印序章

彼、ユーノ・スクライアは困惑していた。それは目の前にいる一組の男女だけではない。彼の隣で驚いている女性もその原因だった。キャスターは突如として現れた二人組を見た瞬間、その男性の姿に目を見開いたのだから。

男は全身を青い服で包み、その手に赤い槍を持つている。女性、とは言っても少女であるが、彼女は黒を基調とした格好をしており、それから感じる魔力からバリアジャケットだと予想した。

問題は彼らが空間転移で現れた事。そう、ここは輸送船の貨物室。ユーノが発見した古代遺失物を時空管理局へと運んでいる途中なのだ。キャスターが直感で”厄介な事になりそう”と判断したため、ユーノは自身が護衛のような役目を自主的に買って出たという訳だ。

「……ランサーですか。まさか私の知っている相手と出会うとは思いませんでした」

「へえ、俺を知ってるとはな。そういう貴様は……魔力量や雰囲気からキャスターと言うところか？」

二人のサーヴァントは対照的な表情をしていた。キャスターはランサーを警戒しているが、彼はどこか不思議そうな顔をしているのだ。そこには、当然ではあるが互いの性格の差がある。

ランサーは相手が誰だろうと敵対するなら倒すだけ。キャスターは自身が正面切つての戦いに向いてないと理解しているので、出来るだけマスターの安全を確保出来ない状況で戦いたくないのだ。

「ランサー、もしかして……」

「あの人はサーヴァント!?」

フエイトの言葉を継ぐ形でユーノが告げた言葉。それに両者が同時に頷いた。

「ああ、そつだ。間違いねえ」

「マスター、以前教えたサーヴァントのクラスを覚えてますね？あれはランサーです。高い俊敏性と恐ろしい程の槍捌きが特徴で、あいつの場合は更にルーン魔術を使えるんです。それと宝具に注意してくださいね。あれを使われたら大抵殺されますよ」

「ほう、そこまで知られているとはな。で、お前はどこで俺と会った。生憎俺には記憶がないんだが」

「さてどこでしょうね？ その記憶がない時点で私は貴方を敵と考えるしか出来ません」

聖杯戦争に呼び出された事が一度しかないランサー。だからこそキャスターの言葉には色々と聞き捨てならない部分があった。悟ったのだ。相手が自分の真名を知っていると。

キャスターはランサーの発言から最悪の状況と誤解していた。自分のはあのムーンセルでの記憶が残っている。にも関わらず相手はそれを覚えていない。つまり、純粋なサーヴァントとして召喚されたと把握したのだ。

(宝具の説明が曖昧だが、奴の視線は俺の槍をしっかりと捉えていた。どうやらこれがどういいう物かまで知ってるな、ありゃ)

（不味いですね……あの時はランサーのマスターが結構まともだったし、サーヴァント同士を戦わせてマスターは手出しされない事前提で援護するシステムだった。でも、今はそんな決まりがない）

キャスターが一番警戒しているのはランサーが自分ではなくユーノを狙う事。サーヴァントである自身であればランサー相手でも多少持ちこたえる事が出来る。しかしユーノはそもいかないのだ。

「敵、ね。そうだな。お前が俺を知っていようと関係ない。邪魔するなら貫くのみだ」

「ランサー……私は最初の打ち合わせ通りでいいね？」

「おう」

ランサーが真剣な表情をしたのを見て、フェイトも気持ち切り替えた。それを感じ取り、ランサーは嬉しそうな声を返して槍を構えた。

「マスター、いざとなったら一人でも逃げてください」

「駄目だ！ 僕も戦う！」

「いけませんよマスター。教えたはずですよ。サーヴァントとは英雄と呼ばれた者達が多いって。特に目の前の相手は、たった一人で国を守るために戦い抜こうとした猛犬なんですから」

ユーノの申し出をやんわりとだがはつきり断るキャスター。最後の言葉にランサーが小さく笑みを浮かべた。それはキャスターへの肯定ではなく、自身が抱いた予想が確信に変わった瞬間だった

からだ。

そして緊張感が張り詰める。しかしランサーもキャスターも動くとはしない。そう、ランサーに対してキャスターは有利な立場にいるのだ。それは情報量。ランサーの事をあの聖杯戦争で知ったキャスターは、それを小出しにする事で彼へ心理戦を仕掛けたのだ。

自分はお前の事を全て知っていると。それに対し、ランサーはキャスターの事を何も知らない。キャスターと当たりはつけたものの、本人はそれを肯定も否定もしていない。しかも、フェイトはランサーと呼んだにも関わらずユーノはキャスターと呼ばなかったのもそれに拍車をかけた。

そこには、キャスターによるユーノへの魔術講座が関係している。そこで彼女は語ったのだ。どんな時でも情報が決め手になると。知る事は弱点にもなるが武器でもある。故に必要ならば敢えて明かす事もあると。

(フェイト……は動けないか。あの小僧がいるもんな。かと言って俺も下手に動けねえ。ああは言ったが、あいつがあんななりでライダーとかセイバーとも限らないからな。せめて小僧が名を呼べば判断出来たんだが……)

かつてのアーチャーとの初戦を思い出し、ランサーはやや慎重になつていた。あの時は自分だけだったから身軽に動けたが、今はフェイトがいる。もし自分の隙を突いてフェイトを攻撃されれば厄介だ。そう考え、ランサーは相手の出方を窺っていた。

(どうしよう……まずあのサーヴァントは私よりも強いはず。速度では勝てるだろうから、それで隣の子を押さえれば少し状況が好転しそうだ。でも、そうなるにあのサーヴァントが何をするか分からない)

フェイトはランサーがすぐに動かないのを見て自分が動こうとした。しかしランサーと同じくキャスターを警戒し、それを出し抜けたとしても不安が残るために動けない。そのユーノは唯一状況を把握し、自分の出方がこの均衡を崩す事に気付いた。

(ランサーはキャスターを警戒してる。キャスターは正面切ってはランサーに勝てないから動かない。あの子は僕を押さえたいけどキャスターがいるからそれも出来ない。つまり、僕が下手に動くとなんか変わる)

そう考え、ユーノは視線をちらりと動かした。そこにあるのは一つのケース。中身は彼が発掘したロストロギアのジュエルシードだ。ランサー達の狙いはおそらくこれだろうと察し、ユーノはどのようにかしてケースを確保しようと考え始める。

そんな時だった。ランサーとキャスターの脳裏に聞こえる声があった。それは両者共にどこかで聞いた事があるような声。そして同時にどこか嫌な印象を受けるもの。

喜べ。これでお前達の願いは叶う。

その声に二人がどこで聞いたかを思い出そうとした瞬間、輸送船を震動が襲う。それに対して全員が反応を示すと同時に貨物室へ切羽詰った声が響いた。それは輸送船の乗組員のもの。

『大変だっ！ 小さいが次元震が起きた！』

「「っ?!」「」

「何ですって?!」

「あ？ 次元震？」

その言葉にユーノとフェイトの表情が変わる。キャスターは一人状況を理解出来ていないランサーへ深刻な表情で説明する。

「つまり、この次元世界全体を揺らす地震みたいな現象で、下手をすればこの輸送船ごと粉々になるんですよ！ 戦ってる場合じゃないって事です！」

「……チツ！ ついてないのは相変わらずか」

自身の不運を嘆き、ランサーは槍を下ろした。それにキャスターは内心安堵の息を吐く。状況が悪いのは変わらないがユーノを殺される事だけは回避出来たからだ。

「一先ず脱出を考えないと！」

「お嬢ちゃんも転送魔法は使えますか？ 出来るのなら早く脱出を」

「出来るけど……あまり得意じゃないからすぐには無理。ここへはリニスに送ってもらったし」

「おい、何かやばいぞ。この感じ……不味いっ！」

ランサーが声を出しながらフェイトを抱き寄せるのと、キャスターがユーノへ駆け寄るのは同時だった。一際大きな音と共に震動が起き、貨物室へ亀裂が走ったのだ。

それは図つたかのようにケースの下へ生じてそれを落下させる。咄嗟にユーノが手を伸ばすが僅かに届かず、ケースはそのまま落下



していく。その際の衝撃で鍵が壊れたのか、口を開けたままで。

「いけないっ！ このままじゃ！」

「駄目です！ 危険過ぎますっ！」

未だに輸送船は次元震の影響で揺れている。今飛び出せばどうなるか分からない。慌ててケースを追いかけようとするユーノを押さえ、キャスターはそう考えながら視線を消えていくケースへ向けた。それは中身であるジュエルシードをばら撒くように落下している。それが何を引き起こすかは定かではない。それでも、キャスターには一つの確信めいた予想があった。あれを放置すれば大きな災いとなると。そして、それが自分を世界に使役させるキツカケになるとも。

（そんな事にはさせない。まずはこの状況をどうにかしないと。それにしてもあの時間こえた声……あれは確かにどこかで……）

キャスターがユーノを押さえながら色々な事を考える中、ランサーもまたフェイトをしっかりと押さえていた。

「放してランサー！ あれがないと母さんが……母さんがっ！」

「落ち着けフェイト！ 気持ちは分かるが、今は自分達の安全を確保する方が先だ」

プレシアから聞かされたジュエルシードを狙う理由。それを思い出し、フェイトは焦りを滲ませた声を出していた。不治の病に犯されている。そう教えたプレシアはフェイトへこう告げたのだ。その病気を治す術はジュエルシードと呼ばれるロストロギアしかない。

(こうなるとプレシアの体の事を教えたのは不味かったか？ いや、だが今はそれしか理由を用意出来ねえからな)

フェイトにもプレシアがすぐに危なくなる状態ではないと教えている。それでもやはり、愛する母が死ぬしかない状態ならば一秒でも早く治してやりたいと考えるのがフェイトなのだろう。

ランサーはそう結論付け、小さくため息を吐きつつフェイトを自分へ向けて頬を張った。その痛みでフェイトが呆気に取られる。当然とするフェイトへランサーが真剣な眼差しを向けた。

「今はお前が出て行ったらどうなる。お前の体にもしもの事がありや、プレシアの容態が余計悪化するだろうが」

「っ！」

「一先ず撤退だ。いいな」

ランサーの指摘に息を呑み、フェイトは黙って頷いた。丁度次元震の揺れも何故か収まっていたため、フェイトは予めバルディッシュへ設定してあった時の庭園の座標を頼りに転送魔法を使用した。

「じゃあな」

「あっ！」

「待ちなさい！　せめて狙った理由だけでも教えていけ！」

あっさりと逃げるランサー達に気付いてユーノが声を上げる。そんな彼に続くようにキャスターが文句と共に魔術を使おうとするも、

既に二人は消えた後。そして、貨物室に一時の静寂が戻ったのを契機に輸送船が激しく揺れ始める。

次元震の影響で機関部へ損傷が出たために爆発しそうだったのだ。それを焦る声で告げる念話へ応じ、ユーノはキャスターと共に貨物船から脱出するために飛び出した。

他の乗組員と共に貨物船から離れるユーノ達。まるでそれを待っていたかのようなタイミングで爆発する輸送船を見つめながら、キャスターは一人呟く。

”世界”の意思……だったんですかね、あの声は。

その日、海鳴市に二十一もの宝石が降った。だがそれに気付いた者は誰もいない。何故なら、それは突然現れたからだ。音もなく、ただ静かに海鳴へそれは現れた。災いを呼ぶ種として……

それから数日が経ったある日。高町家から元気な声が響き渡った。

「いってきま〜す」

「いってらっしゃい。気をつけて」

微笑むセイバーに手を振って見送られ、なのはは手を振り返しながら笑顔で走り出す。もうあの”始まりの夜”から四年以上が経ち、なのはは小学三年生になった。

未だに運動能力は自信無しだが、体力や動体視力ならセイバーの

折紙つき。あの日から続けるトレーニングの成果だ。ただ、やはり速く走ったりするのは苦手なので。

「にやっ?!」

転びそうになるのはよくある事。

「っと、危ない危ない」

しかし、そこで転ばなくなったのもまた成長。最近、特技にバランスと書こうかと考えるのはだった。そのまま彼女はいつもの場所目指して急ぐ。それはバス停。とは言っても公共のではない。彼女が通う聖祥大付属小学校行きスクールバスの停車場だ。

(良かった。間に合った)

視界に見えてきたバス停へ丁度見慣れたバスが到着する。なのは速度を落としながらバスへ向かう。呼吸を整えながらバスへ乗り込むと、そこには親友と呼べる二人の少女がいた。

学校に向かうバスの中、なのははずかさとアリサの三人で会話に花を咲かせる。これももういつもの事。そして、その話題がセイバ―達になるのもいつもの事だった。

「でね、小次郎の奴ったら、少しは女子らしさが出てきおったかなんて言ってるさ」

そう言って、笑みを浮かべるアリサ。昔はどこか気にしていた自分の容姿もここ二年程は自慢するようになり、その理由をなのは達は「はやて効果」と呼んでいる。

「小次郎さんらしいね。あ、そうだ。今度小次郎さんにウチの庭もお願いしていいかな？ ライダーがその方が景観が良くなるだろうって」

微笑みを浮かべながら相槌を打つすずか。後半の辺りで浮かべた表情は、頼み事をするためかどこかすまなさそうだ。

「じゃあ、お兄ちゃんやアーチャーさんにもお願いしようよ。その方が早く終わると思うの」

名案とばかりに告げるのはだがそれに二人は苦笑い。

「それじゃ、庭仕事そっちのけで戦い始めるでしょ」

「アーチャーさん一人でやる事になると思うよ」

そんな二人の言葉になのはは不満顔。だが、少し想像して……

「ごめんなさい」

心から謝った。会った途端に互いの得物に手をかけ、ジリジリと間合いを測る恭也と、悠然としながらも一時も目を離さない小次郎それを横目にため息を吐くアーチャーの姿を幻視したから。

その行動にわかればいいと言わんばかりに頷くアリサ。すずかは小さく笑みを浮かべるのみ。そんなこんなで、この日も過ぎていくはずだった。下校時になのはが謎の声を聞かなければ……

(くそっ……封印しなきゃいけないのに)

全身を傷だらけにしたユーノは、霞む視界を何とかするべく意識を強くする。眼前にいるのはジュエルシードの思念体。だが、彼の傍にキャスターはいない。彼女は別行動をしているのだ。

その後、ユーノは救助に来た管理局員へジュエルシードを回収してくれるよう頼んだ。その調査の結果判明した落下場所は管理外である地球。故に局員は難色を示した。

何と言つても管理外ですからね。それに封印処理もしてあると伺っています。では急がずとも大丈夫でしょう。あの世界は魔力保有者が滅多にいない世界ですから。まあ出来るだけ早目に動くようにはしますよ。

難色を示した事に食い下がるユーノへ局員が告げたのはそんな返答だった。確かに封印処理はしてある。だがそれは慣れないユーノが施したものが大半。しかも、二十一ものジュエルシードを手分けしてやったのだが、発掘チームのスクライアの中にユーノ以上に魔力が多い者等いないため、その処理は正直不安定だった。

それもユーノは告げたのだが、局員は出来る限り善処すると返してそれ以上取り合おうとはしなかった。結局それに業を煮やしたユーノは、ならばと自力で地球へ赴く事を決意。渡航許可と魔法使用とデバイス使用の許可を取り、レイジングハートを手にキャスターと二人で地球は海鳴へやってきたのだ。

ユーノは封印処理が綻び、ジュエルシードが暴走する事を懸念した。なのでキャスターと二手に分かれて行動する事にしたのだ。キャスターは封印魔法を使えないが、見つけた場所を魔術で隔離する

事は出来る。人払いの魔術だ。

それと共に暴走を起こしたとしても暴れる事が出来ないような処理は出来る。なのでユーノは渋るキャスターを説得し、連絡用のレイジングハートを託してこうして単身行動していたのだ。

何とか無くしてしまった内の一つを封印し、順調に行ってくればと思っていた矢先に二つ目を発見したユーノ。キャスターへ報告して安全に処理しようとした途端、そのジュエルシードが何かの願いを受け変貌したのだ。

必死に戦ったユーノだったが、元来戦闘をした事などそこまでのい彼には少々荷が重かった。攻撃魔法も得意ではない故に有効な術を持たぬユーノ。そんな彼に思念体が倒せるはずもなく、現状のようになり込まれていた。

思念体はユーノを睨みながら距離を取る。それを見て、ここしかないとの思いがユーノに生まれた。弱った体に鞭打ち、飛び掛ってきた思念体に何とか封印魔法を展開したユーノだったが、相手はそれに耐え切って逃げるようにその場から離れていく。

それを見つめながら、ユーノは意識が遠のいていくのを感じた。戦闘による緊張感。魔力使用に伴う疲れ。様々な要素が重なり、その体は眠りを欲したのだ。

(ダメ……なんだ……あれ……ほっと……)

ユーノの思いとは裏腹に、体は緊張から開放された事も手伝い急速に眠りへと落ちていく。その直前、ユーノの体が光に包まれた。そして光が収まったそこには、一匹のフェレットらしき動物が傷だらけで眠っているのだった……

時の庭園。その一角にあるプレシアの部屋。そこにランサーとリニス、それに部屋の主たるプレシアの姿があった。あの出来事から今まで、彼らはジュエルシードの行方を独自に追っていたのだ。

「まったく困ったものね。てっきりあっさり回収してくると思っていたのに……」

「……面目ねえ」

やや憮然とした顔のプレシア。それをリニスは黙って見ている。ランサーと言えば、まるで悪戯を見つけた少年のような表情でプレシアを見つめ返している。

「……ま、仕方ないわ。まさか次元震が起きるなんて予想できなかったもの」

「未だに原因不明なところも気になりますね。あ、でも既にジュエルシードの落ちた場所はある程度絞り込む事が出来ましたからご安心を」

リニスの言葉と同時に出現するモニター。そこにはミッド文字で色々と書かれているが、ランサーにはさっぱり読めなかった。

「さすがだぜリニス。で……どこだ？」

「もつ……あれ程ミッド文字を覚えてくださいと言ったのに。第九十七管理外世界。現地惑星名称”地球”です。まだ何処にとまでは



分かりませんが、日本と言う島国なのは間違いありません」

ランサーの問いかけにリニスが呆れた。彼女はランサーへ何度かミッド文字を教えた。しかし、それがまったく意味を成していない事に内心苦笑していたのだ。そんなリニスの告げた言葉にランサーが息を呑む。

その反応に気付かぬまま、プレシアが安堵の息を吐いた。もし落下したのが管理世界であれば、彼女の考える計画は大幅な変更を余儀なくされていたからだ。

「そう。でも管理外でよかったわ。管理局もつかつに手を出さないでしょうし」

「はい。おそらく派遣されるとしても、かなりの時間を要するはずですよ」

「なら、なるべく早めに……ランサー、どうしたの？」

先程から黙っているランサーにプレシアが意識を向ける。それにつられるようにリニスも視線を向け、言葉を失った。ランサーはこれまで見た事ない程、嬉しそうな笑みを浮かべていたからだ。

そんな表情に何も言えないリニスとプレシア。それに気付く事なくランサーは呟く。何故ならば地球とは彼が生きていた場所。それ故に思う事があったのだ。

「そうか……この世界にもあったのか。他のサーヴァントもいたって事からすると……これならうまくすりゃ……」

ランサーの独り言に二人は何も言えないまま、ただその呟きに耳を傾ける。その内容は二人を驚かせるには十分なものだとは知らず

に……

楽しい下校時間。なのは達も例に漏れず、三人仲良く会話をしながら歩いていった。今月からなのはも二人と同じ塾に通う事になり、そこへ向かう途中、アリサが塾への近道と言ってわき道に入り、少し経った時だった。

【助けて……】

「ふえ？」

突如として頭に響いた弱々しい声になのは立ち止まってしまふ。それに不思議そうに首を傾げるアリサとすずか。一体どうしたのだろうと思ったのだ。そんな二人の視線に、なのはは恐る恐る尋ねた。今、何か聞こえなかった、と。それに二人は互いの顔を見合わせ、小さく笑う。場所は少し薄暗さもある場所。故になのはが怖がらせようとしているのだと考えたのだ。

「何も聞こえないよ」

「なのは、怖がらせるならもつと雰囲気出しなさい」

「ち、違うよお。本当に何か」

聞こえた。そう言おうとした時、再びなのはの頭に先程の聲がした。

【助けて……誰か……】

「やっぱり聞こえる」

先程よりもはっきりと聞いたからか、なのはの口調は強かった。そのなのはの言葉に二人も互いの顔を見合わせ、何かを感じたのか頷いた。そして向けられた視線は、なのはを信じると言わんばかりの力強さがあった。

それを嬉しく思い、なのははお礼を告げると同時に走り出す。助けてとの言葉から急ぐべきだと考えたのだ。三人は揃って道を駆けしていく。その途中、アリサがなのはへ問いかけた。

「で、どこから聞こえるのよ？」

「こっち！　こっちから聞こえる！」

なのはは時折聞こえる声を頼りに走る。それを先導としてアリサとすずかも追走した。そして、しばらく走った先にいたのは……

「フェレット、かな？」

「怪我してる……」

「まったく、酷い事する奴もいたものね！」

全身に傷を負ったフェレットの姿だった。見るのが痛々しい程の姿に三人の表情も曇る。なのはがハンカチを取り出し、フェレットの体をそれで包む。静かに揺らさないようにと配慮しながら持ち上げて、なのは達は息を吐く。

「どつする？」

「この子がなのはちゃんに声を掛けてたのかな？」

「まあ、状況的にそうでしょ。……この子もサーヴァントとか言わないわよね？」

不思議〓サーヴァント。アリサの中ではサーヴァントとはそういう扱いなのだ。それを聞き、なのはは苦笑気味に笑う。

「それはないと思うけど……」

「とにかく、手当てしないと」

雑談に流れていきそうな空気をすずかの発言が戒める。それに二人も頷き、ゆっくりと歩き出した。そんな中、アリサはフェレットに微かな警戒心を抱いていた。理由はある。なのはだけに聞こえた声に傷だらけの体。そして何よりそのいた場所。

（何であんな場所にいたのかしら？ 何も無い場所まで逃げてきた？ それとも……今は何も無い場所になった？）

そこまで考えて、アリサは頭を押さえる。よくは分からないが厄介な事が起きようとしている。そんな予感を感じたからだ。それは隣を歩くすずかも同じだった。もっとも、すずかはアリサとは違う意味で嫌な予感を感じていた。

もし、このフェレットが自分達の日常を壊す存在だったらどうしよう。そんな感情がすずかの中に漠然と生まれていた。アリサが冗談で告げたサーヴァントじゃないかとの言葉。それがどうも引つ掛



なのはが魔法と出会うのを期待していた方、申し訳ないです。それは次回に。

## 無印一話

塾へ向かう道を行きながら、なのは達の頭はある事で埋め尽くされていた。

（（あのフェレット、一体何なんだろう……）（））

アリサは疑念、すずかは不安、なのはは困惑。思いこそ違え、その相手は先程病院に預けてきた動物であった。あの後、アリサが携帯で獣医で検索をし榎原動物病院という場所を見つけ、そこへ三人で運んだのだ。

手当てをしてもらい、診察した獣医さえ疑問に感じたフェレットらしき動物。それになのは達は揃って苦笑い。そんな和やかな雰囲気では会話していると、意識を取り戻したフェレットがゆっくりと周囲を見回し。

「ふえ？」

「なのはを……」

「見てる……ね」

その視線をなのはに向け、しばらく見つめた後にまた意識を失ったのだ。その行動が余計に三人の中へ何とも言えない気持ちを生む。明日、様子を見に来ると獣医の女性へ言っただけで病院を後にした三人ではあったが、その心中は決して穏やかなものではなかった。

やはり何かある。そう思わせるには謎のフェレットの行動は十分だった。しかし、だからと言ってもう放っておこうとは思えないのが三人の優しさだろう。三人はどこか後ろ髪を引かれる思いで塾を

目指すのだった……

塾での勉強も終わり、二人と別れたなのは帰宅すると家族に今日の出来事を話した。とは言っても、当然のように声を聞いたというのは伏せて。なのはもまだどこか半信半疑だった事と、何故かまだ話す時ではないと感じたからだ。なのはのそんな思いを知ってか知らずか、家族達は中々核心をついた質問を浴びせる。

「でも、よくそこに動物がいるのが分かったな？」

ギクリと言わんばかりになのはが表情を変える。それに全員が気付くが誰も何も言わない。それはなのはが自分で話してくれるのを待っているからではない。

知っているからだ。なのはが話さない時は、何か理由があるからと。故に、内心笑みを浮かべながら土郎達は質問する。

「それに、そっちは塾とは反対方向なんだよね？ 何でそっちに？」

「フェレットみたいらしいが捨てられてたのか？ 傷だらけだったそうだが……」

「ウチでは飼うのは厳しいけど、どうする？」

矢継ぎ早に繰り返される問いかけに、なのはは答える暇もなくオロオロするばかり。そんなのはを見て、セイバーが微笑み助け舟を出すことにした。



「まあ、それくらいにしましょう。まずは食事です。さ、なのは」

「う、うん。いただきます」

「……………いただきます」「……………」

セイバーの言葉にほっとした表情を浮かべるなのは。それを笑顔で見つめる土郎達。少しからかいすぎたか、と思いながらもどこか楽しそうな家族の顔。それになのはも気付きながら、心で感謝。

(ありがとう。ちゃんと分かったら、絶対話すから)

心から信じあえる家族。その暖かい心遣いを改めて感じるなのは。食卓に浮かぶ笑顔は変わる事無く輝いていた。

「それで、一体どうしたのです？」

風呂に入り、後は寝るだけとなったなのはへセイバーはそう問いかけた。食事終わりに、なのはが視線でセイバーに話があると言いたそうだったからだ。

そんなセイバーに、なのははどこか自分でも信じられないという顔で本当の事を話した。帰り道で突然脳裏に声が聞こえてきた事から始まる異常事態を。

「……………で、病院に預けてきたの」

「……頭に直接声がした。それに間違いはないですか？」

「う、うん。確かにそんな感じだった」

セイバーの固い声をなのは若干不思議に思いながらそう断言した。その答えにセイバーはしばらく黙り込んでしまったが、何か意を決した表情でなのはを見つめる。

「……なのは、それはきつと魔術です」

「魔術？ あのおとき話なんかの？」

なのはの言葉にセイバーは頷き、少しだけ自分に関する話をした。自分はその魔術が存在していた世界の出身であり、なのはにはそれを使う魔力があると。そして、おそらくその動物が魔術で生み出された使い魔だろうという事を。

なのははセイバーの話を聞いてどこか納得していた。急に現れ、今や大切な存在のセイバー。それが魔術と呼ばれるもので召喚されたとしたら、そういうものかと理解できてしまったからだ。

それに、あのフェレットが魔術を使えるのなら更に納得。セイバーによれば、なのはには魔力があるがアリサやすずかにはそれが無い。だからこそ声が聞こえたのはなのはだけだったと理由付け出来たからだ。

「じゃあ、あの子は……」

「ええ。何処かにマスター」

「主人がいるはずですよ」

「なら」

その人を捜そう。そう言おうとした時、なのはの頭にまたあの声が聞こえてきた。

【キャスター、聞こえるかい！ 力を貸してっ！】

「っ！？ セイバー！」

「……声が、聞こえたのですか？」

「うん！ しかもキャスターって人を呼んでる！」

「何ですって?!」

なのはの言葉に驚きを浮かべ、セイバーはその身を鎧で包む。それだけでなのはも何かを悟ったのか、急ぎパジャマを着替え始めるとセイバーは部屋の窓を開け放つ。

夜風が吹きぬけセイバーの髪を揺らす。その後ろから普段着に着替え終わったなのはがセイバーに近寄って。

「行きますよ、なのは」

「うん！」

その腕に抱かれ空を舞う。それに空を飛ぶような錯覚を覚えつつ、なのははセイバーを案内する。声の聞こえる方へ、あの動物病院へと……

ユーノは焦っていた。未だに完治していない体に魔力、それで弱っているとはいえ思念体を相手しなければならぬからだ。さつきからキャスターへ助けを求めているが、今のままではおそらく間に合わないだろうとユーノは思った。

理由は簡単。キャスターからの返事があつたのだ。位置を特定したが、彼女の現在位置からではすぐとはいかない距離だと。その声はいつもの明るいもので、それでも余裕で間に合うと言つてはいた。しかしユーノには分かった。その声には微かな焦りが混ざっている。

大丈夫です。絶対助けてみせますからね、マスター。

故に、ユーノは懸命に足掻いていた。満足な結界も張れない上に自分の体調は完全じゃないときていけば、もう絶望過ぎていつそ笑えるくらいだ。それでも、キャスターが絶対助けると言つたのだ。

(なら諦めるものか！)

あの時から自分を支えて守ってくれているキャスター。それが今全力で助けようと行動している。そう思い、ユーノはそれを信じる事にした。

(時間を稼ぐんだ……キャスターが来てくれれば何とかなる！)

思念体の攻撃を何とかかわしつつ、ユーノは必死になって逃げる。生き残る事が今の自分出来る事。そんなユーノの奮戦に応えるように奇跡が舞い降りた。

それは騎士だった。青いドレスに鎧を纏い、その腕には少女が抱き抱えられている。まるでおとぎ話だとユーノは思った。そんな彼の前に騎士は降り立つと、思念体へ睨むような視線を送り鋭く告げる。

「なのは、その動物と共に下がっていきませんか。ここは危険です」  
「分かった。気を付けて、セイバー」

抱えた少女から返事を受け、騎士は小さく頷いてゆっくり降ろす。そして少女へ微笑み、すぐさま思念体へと視線を向けて手に不可視の武器を携える。

ユーノはそれを見て剣だと確信した。見えた訳ではない。でも、それを剣だと知っている。何故ならばその理由は。

(セイバー……まさか彼女もサーヴァント!?)

セイバーに驚くユーノになのはは急いで近付き、その体を抱き抱えた。セイバーが危ないと言ったのは相手が強いからではない。自分達まで巻き込みかねないからだ、となのはは理解したのだ。

だからこそ、なのはが出来るのは少しでもセイバーの負担にならない事。その考えからなのはユーノへ優しく声をかけた。彼がキヤスターのマスターであるとセイバーが教えた以上、その境遇はどこか自分と近いと考えていたのだ。

「大丈夫？ もう平気だから」

「……えっ？ あ、ちょっと待って！」

「話は後！今はセイバーに任せよう」

突然喋り出すユーノになのははは大して驚く事無く走り出す。やはり魔術で変装しているのだと判断したのだ。走りながら、なのはは後ろを見た。そこではセイバーが思念体相手に剣を振り下ろしていた。

（負けないでね、セイバー）

自分が知る限り無敵の存在。その勝利ではなく無事を願いながらなのはは急ぐ。その離れ行く足音を背に、セイバーは鋭い一閃を放つ。それは見事に相手を捉え切り裂いたのだが。

「なっ……再生した!？」

セイバーの会心の一撃を受け、思念体は確かに一度動きを止めた。しかし、その与えた傷が瞬く間に消え、再び動き出したのだ。さすがにセイバーもそれを予想出来るはずもなく、僅かばかり意識を乱した。

それを隙と見たのか、思念体はセイバーから離れて行く。その向かう先は彼女の後ろ。つまり逃げているなのは達だ。その理由を考えるまでもなく、セイバーは走り出した。

「なのは達へ手出しはさせないっ!」

その視線の先には必死で逃げるなのはの姿がある。このままではセイバーが先回りするのは難しい。だが、無理に先回りしようとなると使える手段は一つしかない。

「風を解き放てば……しかし、周辺にどう影響するか」

海鳴の町はセイバーにとって守るべきもの。いたずらに力を振るえば、ここに住む者達に迷惑を掛ける事になる。その思いがセイバーを迷わせる。そして、下した答えは。

「なのは！ 右に跳んでくださいっ！」

そう叫ぶと同時に、セイバーは思い切り勢いをつけ思念体目掛け突撃した。その勢いを加え、思念体はアスファルトに激突する。一方のセイバーは反動で逆方向に跳ね返されたが、何とか体勢を整えて着地。すぐになのは達の下へ駆けつけ、剣を構える。

「無事ですか？」

「うん。セイバーも大丈夫？」

「ええ。しかし……」

セイバーの視線の先では丁度思念体が体を起こしているところだった。あれだけの衝撃を与えたにも関わらず、ダメージを負っていない気がまったくない。

それに気付いたセイバーはどうすればいいのかと考える。そんなセイバーの脳裏に浮かんだのは、絶対にして最強の切り札の存在。彼女の宝具だった。

(……駄目だ。アレは使えない。威力が大き過ぎるし、何よりも被害が尋常ではない)

そう結論付け、セイバーは眼前の相手を睨む。もうなのは達を逃がす訳にはいかない。下手に逃がせば、先程の二の舞になる。かと

いって、このままではギリ貧だ。有効な手立てが使えないし、他に何も思いつかない以上、セイバーには打つ手がない。

そんな時だった。思念体の周囲へ動きを封じるように魔力が走ったのは。それに驚くセイバーとなのは。しかし、一人ユーノは喜びを滲ませた声で叫ぶ。

「来てくれたんだね、キャスター！」

「はい。間に合うと言ったはずですよ、マスター」

ユーノの声に笑顔で応じるキャスター。そして、彼を抱えるなのはと守るように立つセイバーを見てその表情を少しだけ変えた。

「それにしても……まさかここにもサーヴァントがいるなんて」

「それはこちらの台詞です。それであれば何なのですか？」

「簡単に言えば魔力で出来た影つてとこですなえ。でも、私達じゃあれを倒す事は出来ないのが厄介なところですよ」

「そつだ。キャスター、レイジングハートをこの子へ！」

話し出すセイバーとキャスターの会話を聞きながら、なのはは理解出来ずただ不思議そうな顔をするだけ。ユーノはそれに構わず、ある可能性へ賭けてある事を提案した。

なのはがどうしてここへセイバーを伴って現れたのか。その理由を彼はこう判断した。念話を聞いたのだと。もしそうならばレイジングハートを完全に起動させる事が出来るかもしれない。

「いいんですか？」



「ね、君は僕の念話を聞いたんだよね？」

「念話？ えっと、頭に声が聞こえる感じの？」

「やっぱりそうだ。キャスター、彼女なら或いは」

ユーノの問いかけになのは不思議そうにそう尋ねる。なのはにとつては、ずっと自分の理解出来ない場所で話をされているのだ。セイバーはユーノとキャスターの話から何か思念体へ有効な手立てがあるのだろうと察し、ただ見守った。

キャスターはユーノの言葉から真剣なものを感じ取り、黙って懐から真紅の宝石を取り出した。それを見たなのはとセイバーは一瞬だが息を呑んだ。それから不思議な力を感じたからだ。

「今は時間が惜しい。このデバイスを使って、あれを封印して欲しいんだ。それ以外、あいつを止める術はないんだ」

「いいけど……どうすればいいの？」

「まず、僕の言う通りに続けて」

キャスターから受け取ったレイジングハートから不思議な温かさを感じながら、なのははそれを手で握り締めた。そして、ユーノが告げる起動パスワードを噛み締めるように呟いていく。

それを聞きながら、セイバーはキャスターと共に思念体を警戒していた。今はキャスターの魔術で動きを封じられているが、いつ暴れ出してもおかしくなく思っていたからだ。

「キャスター、貴方は先程こう言いましたね。ここにもサーヴァン

トがいるとは、と」

「おや、これはうっかりしてました。ま、貴方はマスターを助けてくれましたし、どうも敵ではなさそうですね。じゃ、助けてくれたお礼に特別に教えてあげましょう。ここに来る前、私達はランサーに会いました」

「ランサー……ですか。もしや、赤い魔槍を持つ青い騎士ですか？」

「嘘っ！？ 驚きました。貴方もあのランサーを知ってるんですか？ あの猛犬を」

「ええ、彼は私と戦った事のある相手です。そうか。なら、まだそうと決まった訳ではないようですね」

キャスターの告げた表現に、セイバーはランサーは自分の知る相手と確信し安堵した。何せキャスターがああ魔女ではなかったのだ。もしかするとランサーも自分の知らないサーヴァントである可能性があると思っただのだ。

そんなセイバーにキャスターはやや不思議そうな顔をする。あの聖杯戦争で彼女はランサーと戦った。そこから考えれば、目の前の相手はそこで戦った事になる。

（でも妙ですね。このセイバーが早い段階で負けるとは思えない。もしかして私は何か勘違いをしているんじゃない……？）

ランサーと出会い、キャスターはここで出会うサーヴァントはあのムーンスルで散った者達だろうと考えたのだが、セイバーの雰囲気から一石を投じた。もっと情報を得るべきかとそう思ったのだ。

不屈の心は、この胸に！ レイジングハート、セットアップ  
ッ！！

なのはとユーノの声が重なり、光を生み出す。なのはの願いが、祈りが、想いが光になってその身を包む。それに微かに困惑するのはだったが、ユーノが告げた「自分を守るものを想像して」と言うアドバイスに気持ちを切り替える。

自分を守るもの。そんな事を想像した時、真っ先に浮かんだのはセイバーの鎧。でも、違う。なのははそう思っただけの想像をする。自分はセイバーじゃない。ならば身を守るのは鎧ではなく服だ。そしてその元になるのは。

（セイバーが、私にピッタリって言ってくれた学校の制服！）

光が収まった時、セイバー達は見た。純白の衣装に身を包み、天使のような雰囲気を漂わせ、ゆっくりと降りてくるなのはの姿を。手にしたのは杖。その先端には紅い宝玉が輝いている。その輝きに恐怖を抱いたのか、思念体がキャスターの魔術を強引に破りなのはへ飛び掛った。だが……

「「させません！」」

セイバーの鋭い一撃がそれを阻止し、キャスターの魔術がその動きを再び封じる。それを好機と見てユーノが叫ぶ。

「今だ！ 封印をつ！」

「うん！ お願い、レイジングハート」

”シーリングモード、スタンバイ”

なのはの声に応じ、姿を変えるレイジングハート。そしてそれが終わるのを見計らい、ユーノは告げる。自分だけの呪文を唱えてジュエルシードの封印処理を、と。

その言葉になのはは頷き、心を研ぎ澄ませる。この三年近い修行の日々で士郎やセイバー達から教わった事を思い出し、告げる。

「リリカル！ マジカル！ ジュエルシード、シリアル21！」

”封印”

光がリボンのように放たれ、思念体を絡み取る。そして、そのまま光が包み込むように思念体を覆い……

「終わったのですか……？」

「みたいですねえ」

それが消えた先には菱形の宝石だけが残されていた。ただ、そこに何かがいた痕跡は被害という形で残されてはいた。ゆっくりとユーノが宝石に近付き、なのはへ視線を送る。

「レイジングハートでこれに触れて」

「うん」

言われた通りになのはがレイジングハートを宝石に近づけると、それをレイジングハートが自分の中へ吸い込んだ。それを見届け全員が小さく息を吐く。その顔には、どこか達成感さえ漂っていた。

だが、一人だけそんな雰囲気からすぐに脱する者がいた。セイバーだ。それに気付いたキャスターはどことなくその理由に気付いたのだろう。やや苦い顔をしていた。

「……宝石は、これ一つですか？」

「えっ……？ いえ……まだ、あります」

「……そうですか」

気まずそうに答えるユーノの声にそう呟き、セイバーは鎧を消して普段の格好へ戻す。そのまま静かになのはへ近付き　その体を抱きしめた。

「すみません、なのは」

「えっ？ えっ？」

何が起きているのか分からない。それがなのはの素直な感想だった。自分はただ、セイバーを助ける事が出来て嬉しかった。でも、何故かセイバーは自分に謝っている。

その状況が理解出来ず、戸惑うなのは。ユーノは何となくだがそのセイバーの言葉から事情を察し、申し訳なさそうに頂垂れた。その彼へキャスターがそつと近づく。

「マスター、仕方ありません。これは止むを得ない事だったんですから」

「でも……彼女を巻き込んだのは事実だ。これだけは僕のミスだから」

そう言い合う二人の視線はなのはとセイバーへ注がれている。

「せ、セイバー？ どうしたの？」

何かされたかな、となのはが先程までの事を思い返そうとして、セイバーの言葉で思考が止まった。

なのはを……巻き込んでしまいました。

それは奇しくも先程のユーノの言葉と同じ。だが、込められた想いが違う。ユーノが自分の起こした不手際の事件に巻き込んだと思つたのとは違い、セイバーは裏の世界。つまり、魔術や魔法などの非日常に巻き込んでしまったと感じていた。

セイバーが思念体を倒せるなら良かった。それならば、なのはには今日の事は一夜の夢だとしてもらえばよかった。ユーノの手伝いを自分がし、なのはには変わらず、日常を暮らしてもらえば良かった。だが、あれを封印出来たのはなのは。

つまり、セイバーでもキャスターでも倒せない。そして、この騒動を起こした原因はまだ残っている。となれば正義感が強く優しいなのはが選ぶ答えはただ一つ。

（なのはが……戦わざるを得なくなるっ！）

自分が付いていれば確かに危険は減るだろう。でも、戦場に絶対はない。今回すら危うくなのはに危険が及ぶところだった。そう考え、セイバーは思う。次も守りきれるとは限らないと。

故にセイバーは悔やんだ。己の未熟を、至らなさを、何より思うのはある人物と同じようなキツカケとなり得た状況にある。

(これでは、シロウと同じではないですかっ!!)

優しいなのはの事だ。またこのような事が起きると分かれれば、決して見過ごしたりはしないだろう。それはまるで誰かが傷付く事や悲しむ事を嫌がり、自ら戦いに身を投じた『衛宮士郎』と同じ。

しかし、まだ衛宮士郎には魔術使いとしての力と覚悟があった。だが、なのははただの子供だ。力を得たと言っても、それを日々鍛錬していた訳でも、ましてや無敵な訳でもない。

そんな葛藤を続けるセイバーをなのははただ黙って抱き締め返す。その腕に自分の想いをありったけ込めて。

「なのは……」

「セイバーは悪くないよ。悪いのは、きつとこんなものを生み出した人。だから、セイバーは悪くない」

そう言って、なのはは優しく囁いた。

それに、セイバーは私を心配して来てくれた。だからもう気にしないで……ね？

そう言って微笑むなのはにセイバーは瞳を閉じ静かに答えた。

まったく、なのはには敵いませんね。

笑みを浮かべて告げるセイバーになのはも笑う。それを見つめてユーノは思う。この二人に自分がすべきは、言葉なんていう簡単な謝罪じゃない。この笑顔を守るために全力を尽くすという行動によ





## 無印二話 前編

「とりあえず、現状を確認しましょう」

あの戦いの後簡単な自己紹介をし、帰る道すがらセイバーがその話を切り出した。それをキャスターも考えていたらしく、小さく頷きどこか落ち着ける場所へ行く事となり、なのはの案内で四人は公園へと向かう。

「それにしても、君は凄いね」

「どうして？」

キャスターの腕に抱かれながら、ユーノはなのはへ感心するような声を出す。その理由が分からず、なのはは首を傾げるだけ。

「レイジングハートを完全起動させられた事ですよ。マスターでも一部起動させるだけが精一杯だったんですから」

「インテリジェントデバイスには相性があるからね。きっと君はレイジングハートと相性がいいんだ」

「相性、ですか。色々とあるのですね、これには」

ユーノの言葉にセイバーが不思議そうな声を出しながら視線をなのはの手元へ向けた。そこには輝く紅い宝石がある。そんな時、視界の中に公園が見えてきたため、なのはが先導してベンチへ座った。隣にキャスターが座り、セイバーはその前に立つ。キャスターを警戒してではなく、話すにはその方が位置取りとしていいと考えた

からだ。そしてユーノが話し出す。自分とキャスターが来た理由と魔法の事。それとジユエルシードの事を……

ユーノの話聞き、セイバーはジユエルシードの本質を見抜いて言葉を失う。手にする者の願いを叶える力。それは、彼女が昔望んで止まなかったものに似ていたのだ。

(まるで聖杯です……では、まさかジユエルシードは願望器……？  
そうだとすれば、それは誰でも発動出来る恐ろしい物っ!?)

自分の中の推測が正しければ、最悪の場合『抑止力』が働いてしまう。そこまで考えてセイバーは気付いてしまった。今、この海鳴にはサーヴァントだった者達が四人もいる。しかも受肉しているため、その能力を僅かだが向上させている。

そんな自分達が、以前から懸念していた場合の『守護者』として使役させられたらどうなるか。まさか自分達が召喚されたのは、アーチャーが警戒する本ではなくこの事を世界が予感していたからなのか、という考えが浮かぶ。

セイバーはそんな己が想像に身震いした。それは、この愛する街を、人を、友を、自らの手で滅ぼす事になるのだから。予想していた事態が近付いてきた。そんな事を考えたためだろう。セイバーの表情は強張り、恐ろしいものになっていた。

それに気付いたのだらうなのはが静かにセイバーの手を握る。その暖かさに我に返るセイバー。そして、そんなセイバーになのはは笑った。安心させる意味合いを込めて。

「怖い顔してたよ。どうしたの？」

「えっと、少し考え事を」

「そっか。でも、そんな顔するなら……考え事禁止だよ」

にっこりと笑うのはを見てセイバーもまた笑みを浮かべる。それは困りますと答え、手を握り返す。その手の温もりを嬉しく思い、なのはもセイバーも笑顔を浮かべる。

それを見て、ユーノとキャスターも笑みを浮かべる。そこからは言葉はなかった。しかし、確かな何かがあるのをユーノもキャスターも感じていた。

（なのはとセイバーは強い絆で結ばれている。だから、言葉なんかなくてもいいんだ）

（あらあら、こちらも強い絆で結ばれているようですね。姉妹とでも言えばいいでしょうか。ちよっといいかも）

そこでユーノは思う。今の自分にも同じような存在がいると。それに二人は自分さえも受け入れてくれたではないか。なら、羨ましがるのでなく、その域にまで二人にも信頼されるようになればいい。

まずは、今後の事となのはの魔法に関する知識を増やさなければ。そう考えるユーノ。それは自分の手伝いのためではなく、なのはの身を守ってもらうためのもの。危険に巻き込んだ自分に出来る数少ない恩返しだと、強く心に言い聞かせて……

一 先ず自宅に戻る事にしたなのは達。ユーノとキャスターの事を説明して一晩だけでも泊めてもらうためだ。そんな彼女達を待つていたのは恭也と美由希だった。二人は玄関前で待ち伏せなのはを問い詰めようとしたが、その傍にいる明らかに普通の気配ではないキャスターを見て困惑した。

「えっと……なのは、その人は？」

「キャスターさんって言うて……その、セイバーの親戚みたいな人」

「ええ。突然こちらに来たので迎えに行っていたという訳です」

「どうも初めまして。私はキャスターと申します。以後、お見知りおきを」

美由希の問いかけになのはが笑顔で告げた内容に一瞬だけセイバーとキャスターが驚くも、すぐに気を取り直してそれに合わせるように言葉を紡ぐ。恭也と美由希はそれに何か事情があると理解し、無断外出の理由をここで詳しく聞き出す事を諦めた。

そしてなのは達は二人と共に家に入った。リビングへ向かうと土郎と桃子が待つてましたというように座っていた。それを確認し、セイバーが頭を下げた。

なのはを夜分遅くに連れ出してしまいすみません。

それに誰も怒る事はしなかった。ただし、その理由をちゃんと話して欲しいと返す。それを聞いたキャスターがならばと前に出て、

ユーノを床にそつと降ろした。それを不思議そうに見つめるのは達。

「マスター、変身魔法を解いて構いませんよ。セイバーを受け入れている事。それがこの方達を信頼出来る証拠です」

「……そうだね。分かった」

キャスターの言葉に答えた直後、ユーノの体が光った。そして次の瞬間には、そこになのはと同年程度の少年が立っていたのだ。その出来事に誰も言葉がない。唯一キャスターだけは平然としていた。

彼女は周囲を見渡すとやや真剣な表情で切り出した。今から話す事を信じて欲しいと。それに士郎達が頷いたのを見て、ユーノが先程なのは達へ聞かせた話を始めた。

次々と語られる高町家の者達の常識を超えた話。それでも何も言わずに最後まで聞くとところがこの家の者達らしい。全てを聞き終えた瞬間、士郎が噛み締めるように告げる。

「魔法、か。まさか本当に存在してるなんてな」

そんな士郎の呟きは家族全員の感想だった。とてもではないが信じられない。だが、既に目の前で動物が人へ変わる瞬間を見せられた以上それを信じるしかない。それに理由はもう一つある。

それはセイバーという存在がいたから。誰に知られる事もなく現れ、重症だった士郎の体を癒した人物。それがその話を笑い話に出来ない理由。そのため、士郎達がそれぞれ今後の事を考えて沈黙する中、なのははセイバーへある事を問いかけていた。

「セイバー、これからどうしよう?」

そのなのはの問いかけにセイバーは微笑み、それは自分で考えて欲しいと言い切った。その言葉になのはは困惑した。今までなのはセイバーと相談した時、彼女はセイバーの意見をほぼ採用してきたからだ。

そんななのはの心境を知っているかのように、セイバーは真剣な表情で告げる。

「これからのなのはの道は、なのはの意志で決定してください。私の言葉に囚われるのではなく、貴方の意志で貴方だけの道を」

その言葉になのはが息を呑む。それが何を意味しているかを理解していたからだ。そんななのはの反応にセイバーは嬉しく思いつつ、最後にこう言い切った。

私は、その道を共に行きます。なのはがそれを望む限り。

そう断言しセイバーは微笑む。それは、なのはの背中を後押しする力。どこか手を引かれていたなのはを、優しく隣へと並ばせるような、そんな笑顔。

それを受けてなのはは決心する。自分の道を、自分で決めて、自分で歩こうと。それにもう不安はない。何故ならば、今彼女は聞いたのだ。望む限りその道は一人ではないと。

(セイバーが隣に居てくれる……なら、もう何も怖くない!)

そう思っただけなのはが笑顔になるとセイバーもまた笑顔を返す。それを眺め、キャスターは安堵していた。セイバーならば例え世界が

使役しようとしても抗えるような気がしたのだ。

高町家の人々を、何よりもなのはを大切に思っているセイバー。その心ならば自分と同じように世界に従うを良しとしないと感じ取ったから。故に自然と笑みが浮かぶ。頼もしい味方を得たと、そう思っている。

(色々と不安のあった出会いでしたけど、ランサーと違ってセイバーとは友好的な関係を築けそうですね。マスターのお友達も出来そうですし……悪くない出だしかもしれませぬ)

そんな事を思い、キャスターはソファへ視線を動かした。そこには士郎達とユーノの姿がある。

「申し訳ありません。僕が、僕がもつとしっかりしていれば……っ！」

「そんなに自分を責めないの。ユーノ君は悪くないわ」

「そうだよ。こうして頑張ってるんだし」

悔やむようなユーノの言葉に桃子と美由希がそう慰める。彼の口から語られた事情を聞いて、ユーノを責める人間は高町家にはいなかった。確かに自分達だけで行動した事は無謀で無計画だ。

しかし、それを誰が責められる。幼い少年が己の危険も顧みずに行った行為を否定出来る訳がない。最善の手を打ちたかった。だが、それが出来なかった。だから自分に出来る最大の事を。そう考えての判断だったのだから。

「でも……なのはさんを巻き込んでしまいました」

それでもユーノが悔やんでいるのはそこ。無関係の人間を自分が至らないばかりに巻き込んでしまった。その後悔の念はそう簡単には忘れられない。すると、それを聞いていたなのはが苦笑した。

「それはもう言いつこなして言ったのに。それに、さん付けも敬語も禁止ね。私、そんな事をいつまでも気にするような子じゃないよ」

「あ、ありがとう、なのは。……本当にありがとう」

軽い調子で答えるなのはにユーノはそう言っ頭を深々と下げた。その目からは涙さえ流して。それに慌てるなのはと、それを微笑ましく見つめる士郎と桃子。恭也もユーノの涙を見てその気持ちに共感し、顔を背けていたりする。そんな恭也をからかいながらも、美由希はセイバーやキャスターと視線を合わせて笑う。

静かで優しい雰囲気 indoors を包む。そして、ユーノが落ち着いたのを見計らい士郎が家長らしく告げた。

「じゃあ、しばらくはそのジュエルシードの情報集めと探索だな」

その発言に全員が頷く。それぞれの結論として出たのは、封印出来るのがなのはしかない事や発動して出現する相手はセイバーでも倒せない事からそういう事に落ち着いた。

当面はそれぞれで情報収集に努める事になり、見つけたならそこから出来るだけ離れずなのは達を待つか、それに誰も手を出せないようにする事になった。ちなみにその手段だが、キャスターが作った人払いの呪符を近くに貼り付ける事となった。

「あたし達は、学校でそれとなく聞いてこうか」



「そうだな」

「俺達はお客さんからだな」

「それと、見つけても持つてこようとしないようにしなくちゃ。壊れやすいとか言って、ね」

それぞれで今後の動き方を確認し合う家族達を見て、なのははセイバー達へ視線を向ける。

「私達は？」

「とりあえず、なのはは学業を優先です。ユーノも昼間は休養していてください」

「えっ、でも……」

それはさすがに。そうユーノが答えようとした時、キャスターが優しく告げた。

「確かに急いだ方がいいかもしれませんが、マスターは今回のような事があつた事を忘れてはいけませんよ？」

「そうだね。それにいざつて時はユーノ君の力も貸して欲しいし」

キャスターの意見を笑顔で肯定するのは。そんな二人の言葉にユーノもどこか力を抜いた表情を浮かべる。それに笑みを浮かべ、互いを見合う二人。

「……そうだ、ね。じゃあ、またしばらくさっきの姿になってるよ。あの姿の方が治りも早いから」

「ええ、もう戻っちゃうの？」

ユーノの発言に不満そうな声を上げたのは桃子と美由希だ。せっかく可愛い息子や弟が出来たみたいで嬉しかったのに、とそんな風な事を言いながらユーノを見る桃子と美由希に全員が苦笑い。

なのでユーノが、食事時くらいはと言うと嬉しそうに桃子がユーノを抱きしめた。美由希はと言えばお風呂一緒に入ろうよなどと発言し、ユーノが顔を真っ赤にして丁寧に断るのだが、それを見ていたキャスターが一言。

「駄目ですよ。昔からマスターは私とだって入ってくれなかったんですから」

「そうなの？ 意外とおませさんなのね、ユーノ君は」

桃子が悪戯っぽく告げた言葉にユーノ以外が笑った。言われた人は恥ずかしさから違いますと否定したが、それが余計に周囲の笑いを助長する。こうして魔法とのファーストコンタクトは幕を降ろす。ユーノとキャスターは一先ず客間に泊まる事となり、この日は解散となった……

その頃、海鳴市から若干離れた遠見市にある高層ビルの屋上に突然三人の人物が現れた。その者達は自分達の周囲を見渡し、見られ

ていない事を確かめると男が話を切り出した。

「無事に到着、と。さて、まずはあの町があるかどうかから調べなきゃな」

「ねえランサー。探すのは何て町だっけ？」

「アルフ忘れたの？ 確か”冬木”って所だよ」

その言葉に思い出したと納得し、歩き出すアルフ。それに続くようにランサーとフェイトも動き出す。まずは今後の寝床となる場所で眠り、明日からの調査に備えるためだ。

「それにしても、あのサーヴァントもここに来てなきゃいいんだが」

「あの狐耳の相手だよな。もし来るとしたら……厄介かな」

「どついう奴かは知らないけど、ランサーの敵じゃないさ。それに今回はアタシもいるんだしね」

非常階段へのドアを開けて笑うアルフに二人も笑みを返して頷いた。数の上で優位に立てるのならば簡単に負けはしない。そう言えるだけの事をランサーから仕込まれているフェイトとアルフ。故に不安はない。

例え相手がランサーと同等だとしてもだ。ならばそちらをランサーが抑えている間に自分達が残りを片付け、加勢すればいいのだから。そんな事を思いつつフェイト達は歩く。ここで経験する出会いが大きな意味を持つと知らずに……

翌朝、ランサー達はまず当初の目的である『冬木市』を探すために本屋へとやって来ていた。あの幻の四日間現代に順応していたランサーは、どうすれば一番安全に情報が得られるかを理解していた。そのために、無料で情報が得られる場所の一つである本屋に来たのだ。

「ええっと、地図地図……」

「フェイト、読める？」

「全然。ミッドとは違う文字ばかりだから」

置いてある本を見ながらボソボソと話すフェイトとアルフ。ミッド出身のフェイトからすれば、漢字に平仮名、片仮名や英語等様々な文字が溢れる日本は、理解し難い言語体系を使っている世界なのだと思わせるのに十分だった。

彼女は後に、日本の公用語が漢字や平仮名と片仮名三つの文字を含めて”日本語”としている事を聞き、大いに驚く事となる。

「お、ここだ」

フェイトがアルフと英語を見て「ミッド文字に似ている」と少し驚きながら語り合っているのを横目に、ランサーは地図のコーナーへ辿り着いていた。

とりあえず日本全国の地図を手に取り、目次で細かく調べる。そこに自分の求める町の名がない事を理解し、ランサーは己の悪い方の推測が正しい事を知る。

（冬木はなし、か。つまり、ここは完全に別の世界って奴だな。くそっ、共通点はサーヴァントが召喚出来るだけってか。魔術師の嬢ちゃん達がいりゃよかったんだが……）

ランサーが期待していたのは、ここに冬木が存在し衛宮士郎達が住んでいる事だった。ルーンしか使えぬ自分と違い、現代の魔術を使える凜達ならば、アリシアやプレシアの事を何とか出来る方法を知っているかと思ったのだ。

しかし冬木はなく、おそらく魔術師もない。何故なら。

（あの嬢ちゃん、第二魔法を求めてる家系だとかカレンが言ったな。なら、その家系がない訳がねえ）

つまり、ここが士郎達のいた世界の平行世界ならば遠坂家がない訳がない。その逆もまたしかり。なら、この世界に魔術師は存在しない。詳しく調べれば違うかもしれないが、ランサーは直感からそう悟った。

「はあ……行くぞ、フェイト、アルフ」

「う、うん」

「どうしたのさ？ 探し物は見つかったのかい？」

些か気落ちしたようにも見えるランサーを不思議に思いながら追い駆ける二人。そのアルフの問いかけに、ランサーはややぶつきらぼくに答えた。

「欠片すらねえ」

そう言ってランサーは悔しそうに小さく呟いた。

きつとあいつらなら、手を貸してくれただろうによ……

そこにはあの日々で培った信頼が見える。魔術師らしからぬお人好しの集団であった衛宮邸の面々。彼らならばきつとプレシア達の事を助けようとしてくれただろうと。特に士郎は絶対に。そうランサーは断言出来るのだから。

まさか俺が小僧の事をここまで信じてるとはな。もし会えたのなら、そう教えて驚かしてやりたいもんだぜ。

それが叶わぬ事を知りながらランサーは歩く。こうなったら、残る手段はあのサーヴァントよりも先にジュエルシードを手に入れる事しかないと思いつながら……

「じゃ、行ってきます」

「はい。気をつけて」

「行ってらっしゃい、なのは」

「お勉強、頑張っつてね」

セイバー達に見送られ、なのはは走り出す。昨夜決まった方針。

そしてユーノからの提案により、なのははかつてない程緊張していた。実は今日の夜からユーノによる魔法の勉強が始まるからだ。

自衛のために使って欲しい。そうユーノはその提案の趣旨を告げた。それをなのは達は有難く受け入れた。ユーノの気持ちと覚悟を感じ取ったからだ。

そして、なのはが緊張している理由はもう一つある。

(アリサちゃんとすずかちゃん、はやてちゃんも驚くよね)

親友達にも魔法などの事を打ち明けようと決めたからだ。それはその近くにセイバー達と同じような存在がいるから。

隠し事みたいで、何か嫌だから。

それがなのはの結論。それを聞き、セイバーは笑って賛成してくれた。きつと理解し、手伝うと言い出します。そう付け足してさえくれたのだ。

そんな事を思い出していると、なのはの前にスクールバスが止まる。それに意を決してなのはは乗り込んだ。

私立聖祥大付属小学校。そこがなのは達の通う学校。その屋上にあるベンチに座ってお昼のお弁当を食べ、なのははアリサとすずかにゆっくりと打ち明けた。それは昨夜起きた事の顛末。一切隠さずなのはは語った。魔法の事、シユエルシードの事、そして自分の決

意を。

「……で、なのははこれからも、ジュエルシードだっけ。を封印してくのね？」

「うん。私しか出来ないし、それに」

そこで一旦言葉を切り、なのはは告げた。

何よりもこの街を、皆を守りたいから！

そんななのはの言葉にアリサはどこか諦めムード。すずかは笑って、なのはらしいと頷いている。その言葉にアリサも同意し言い放つ。

「確かにね。でもいい？ ぜええええつたいに危ない事は極力避けなさい。後、もし手が必要なら言う事！ 小次郎を貸すから」

「アリサちゃん、小次郎さんは物じゃないよ」

「そ、そうだよ。気持ちは嬉しいけどね」

二人の言葉にアリサはフンツと顔を背けて言い切った。

「小次郎はアタシのもんよ。だって、アタシのサーヴァントなんだから」

ここにアーチャーがいれば、きっと懐かしんだらう。それ程、今のアリサはあかいあくまにそっくりだった。自信に満ちている表情、その雰囲気。そして、微かに照れているところまで完璧に。



そんなアリサになのはとすずかは笑みを浮かべる。すると、すずかが何か思い出したように問いかけた。

「そういえば、ユーノ君だったけ？ 男の子なんだよね？」

「うん。そうだよ？」

何か問題あったかなあ、という顔なのはにすずかは悪戯めいた笑みを浮かべて告げた。

「良かったね。もしキャスターさんがいなかったら、なのはちゃん  
の事だから知らずに着替えとかしてたでしょ？」

その発言に固まるなのは。そんな事はないと言おうとして、否定出来ない自分がいたのだ。おそらくあの時キャスターがいなければ、そしてユーノへ変身魔法を解除するよう促さなければ、なのはは彼が男だと知らないままだった。

つまり、特に意識せず過ごしていた事になる。更に下手をすれば一緒に風呂まで入ったかもしれない。何せ、ユーノの姿はフェレットだったのだ。可愛いとさえ思っていたのだから、その可能性は十分ある。

そこまで考えなのは顔を赤くする。同年代の男の子と入浴する事を平然と出来る程、なのはは子供ではない。そんなのはにすずかもアリサも微笑み一つ。その場はすずかやアリサも必要なら手伝う事と、いずれユーノ達と二人を会わせる事でお開きとなった。

麗らかな春の日差しを浴び、ユーノはある事を考えていた。それは全てが終わった後、管理局にランサー達の事を教えるか否かだ。ジュエルシードを奪いに来たのは間違いない。でも、とユーノは思う。

（悪人じゃない。そんな気がする）

あの時、ランサーはその気になれば宝具を使ってキャスターへ痛手を負わせる事が出来たはずだ。それでも、それをしなかった。それがどうしてもユーノには引つ掛かる。何故力尽くで奪っていかなかったのだろうと。

「僕達を殺すつもりは無かった……のかな」

そう、その一点がずっとユーノの中で引っかかっていた。その気になれば、自分達を殺して奪えばいい。でも、まるで最初から危害を加えるつもりがなかったようにユーノは感じていた。

だからこそ、最後はあっさり撤退したのではないか。ユーノはそこまで考え、決意する。

（もし、また会う事があればその時にジュエルシードを何故必要とするのか聞こう。あの子が言っていた母さんがって言葉も気になる。きつと、何か深い訳があるはずだ）

あの時、フェイトと呼ばれた少女が叫んだ言葉。その意味と何故ジュエルシードを求めるのか。それが知りたい。おそらくランサー達もここに来るはず。ならその時が勝負だ、とユーノは思う。

「事情を教えてくれれば、僕達でも力になれるかもしれない。キャ



## 無印二話 後編

「これでよし、と」

「見事なものですな。さすがはキャスターと言ったところでしょうか」

月村邸の中庭でキャスターは息を吐いた。この海鳴の霊脈を押さえてジュエルシードの発見に役立てようと思った彼女は、魔力の流れを辿りこの月村邸までやってきたのだ。そこで丁度庭仕事をしていたライダーと出会い、現状となっていた。

最初こそキャスターに警戒心を抱いたライダーも、彼女が事情を説明し高町家で世話になってしていると聞いてそれを解いた。そして簡単にだがジュエルシードの事を聞き、ならばと庭の中へと招き入れたのだ。

「それ程でも。でも、これで出来るのは精々発動を感知するぐらいです。ジュエルシードに限らず、この世界の魔力は少し私達の魔力とは違いますからねえ」

「そうなのですか？」

「私はキャスターだから分かるんですが、微妙に色が違うと言っか何と言うか。とにかく、まったく同じではないんですよ」

「成程。だから魔術では細かい事まで分からないと？」

「残念ながらそういう事です」

ライダーの結論に肯定を返すキャスター。と、そこでライダーは

思い出した事があつたので聞いてみる事にした。

「そう言えば……キャスター、貴方はその耳と尻尾をどうやって誤魔化しているのです？」

「あー、これですか。一応幻惑の術を使って大抵の人には見えてないですよ。ま、普通じゃない人には通用しませんけど」

そう苦笑してキャスターが指差したのは猫と戯れるファリンだった。それにライダーは納得。何せ、ファリンはキャスターを見るや不思議そうに小首を傾げたのだ。

どうして狐の耳と尻尾なんて着けてるんですか？

その際、キャスターは一瞬驚きを浮かべた。だが、ファリンが耳と尻尾をアクセサリーの類と勘違いしていると気付いて、好きなのだと言つて誤魔化したのだ。その事をライダーは思い出して問いかけたという訳だ。

その後、キャスターはライダーと今後の事についての話し合いをする事を決め、今夜高町家へ集まる事とした。それをライダーは小次郎へ伝え、キャスターはセイバーへ伝える事で合意。アーチャーへはライダーが向かう際に八神家へ立ち寄つて教える事となつたのだった。

「良かったね、アリサちゃん」

「何が？」

学校が終わると同時になのは急いで教室を出て行った。昼の話をはやてにもするのだそうで、もう連絡はメールでしてあるとの事だ。それを見送り、アリサとすずかは帰り道を歩いていた。だが、突然すずかがアリサにそんな言葉をかけたのだ。

「変わらなかったね、なのはちゃん」

「……そうね。確かになのはは変わらなかった」

「私達も、だよ？ アリサちゃん」

アリサが言おうとした事を読んでいたかのようなすずかの言葉。それにアリサは言葉を失う。そんなアリサにすずかは笑みを向け、言い切った。

「それはこれまでもだし、これからもだよ。何があったって、私達の絆は変わらない」

「すずか……」

「変わる自分、変わらぬ絆。私は、そう思ってるから」

そう告げて、すずかは微笑み一つ。アリサはそんなすずかに一瞬呆気に取られるが、すぐにいつもの表情を浮かべると強く頷いた。

「そうね！ 何があったって、アタシ達はアタシ達なんだから！」

「うん！」

言って互いに笑い合う。変わらぬ日常などない。変わらないのは、自分達の絆だ。そう思ったところではたとアリサが呟く。

ユーノって奴が男なら、初めての男友達が出来るのかしら？

そうなるといいよね。ちょっとドキドキするかも。

楽しそうに話すアリサとすずか。ユーノの知らない所で静かに友達候補が増えつつあった。後に彼は語る。初対面で友達になろうと言われたのは、生まれて初めてだった、と。

はやては瞳を輝かせていた。なのはの話に出てきた魔法という言葉に胸がときめいたからだ。すずかの好きな本をはやては良く借りて読んでいるせいもあるのだろう。彼女の好きなジャンルはファンタジーなのだ。

更にアーチャー達というある種のファンタジーの存在も大きい。まあ、それを聞けば本人達は否定するだろうが。故になのはの語る話も疑う事なく、すんなり受け入れた。

だがそれはアーチャーがいるからだけではない。話している相手がなのはだからだ。嘘が嫌いで隠し事も嫌い。そんななのはが作り話をする訳がない。それに信じる理由がもう一つ。

(なのはちゃんは、わたしを親友や言うてくれた)

なのはは言った。親友のはやて達に隠し事をしたくないと。その言葉に、はやては顔にこそ出さなかったが心の中で涙した。知り合ってもう一年半以上経ち、何度も遊び時にはお泊り会もした。大事な友達。そう思っていたのだが、なのはは更に上いく親友と言い切った。それにはやても思わず「わたしもなのはちゃん達は親友や思つとる！」と返したのは当然の事と言える。

もつとも、なのははそんなはやての声に若干驚いていたりしたが。

「で、そのジュエルシードやったか。それを探すんやな？」

「うん。当面は皆で手分けして、かな」

なのはの言葉にはやては笑顔で頷き、どこか不敵な笑みで問いかける。

「なら、人手は多い方がええよね？」

「ふえ？ う、うん。そうだね」

「よっしゃ、ならわたし達も探すの手伝うわ！」

「ええ　　っ!？」

さすがにそれは。そうなのはが言おうとした時だった。はやてが淋しそうな表情で呟いた。

「わたし、基本家から出れないんよ。理由がないと出させてくれん



のがおるからな。やから、出るつて言つても決まつた場所ばかりや。そやから、この町も詳しく知つとるとこ少ないんよ」

そんなはやての独白をなのはは黙つて聞き入る事にした。それを見て、はやては「おおきにな」と笑つて続きを語つた。

なのはの手伝いを通じてもつとこの町を知りたい。それを理由に様々な場所へ行きたい。そして、勉強が終わつてしまつと暇ばかりになるから一石二鳥だとも。

そんな言葉を聞きなのはは迷つた。確かにはやて達は一番時間に制約が少ない。アーチャーもはやての世話を生業にしているようなものだし、護衛としても申し分ない。

しかし、なのはは一点だけ不安があつた。それは。

「でも、最悪怪物と戦うはめになるんだよ？」

それははやての身の安全だけを考えた言葉ではない。アーチャーが傷付く事もあるのだ、とはやてに告げたのだ。そんな事を分かっていたのか、そこでキッチンで作業をしていたアーチャーが口を出す。

「心配はいらん。聞けば、その怪物とやらは魔力で出来ているらしいな。なら、私には絶対的な武器がある」

だから心配はいらない。そんな自信と安心を感じさせる言葉なのはもはやても笑つた。何だかんだでアーチャーは優しいと思つたからだ。今もその気になればはやてを嗜める事が出来たはず。でも、そうせずにはやての弁護をした。つまり、そういう事だ。

「おおきにな、アーチャー」

「何、私がおの程度の相手に遅れを取るなどと思われたくないだけだ」

そんなアーチャーの言葉に二人は笑み一つ。声にこそ出さないが、思いは同じ。だからこそその笑顔。

「それじゃ、はやてちゃん気をつけてね。アーチャーさん、はやてちゃんをお願いします」

「ああ。それとセイバーへ言っておいてくれ。一度ライダー達を交えてキャスターと話がしたいとな」

「はい、伝えておきます」

「気いつけてな。あ、わたしにはユーノ君を紹介してな」

そのはやての言葉に頷き、なのはは八神家を後にする。その背に午後の日差しを受けながら。そしてその直後、なのははジュエルシードの発動を感知した。八神家を後にした直後、感じた感覚。それがジュエルシードの発動だとユーノが念話で教えてくれたのだ。

そして、今はそのユーノと合流し、反応のあった場所へと向かっていた。既にそこにはキャスターが向かっているだろうとユーノは告げる。そう、キャスターは今日の内にこの街全体の霊脈を押さえると言っていたからだ。

【でも、本当にいいの？ セイバーは呼ばなくて……】

【今から呼びに行ったら時間かかっちゃうよ。それにセイバーを

待ってる間に誰かが傷付いたら、セイバーも私も嫌だから。大丈夫、無理はしないし、キャスターさんがいれば安心だよ】

ユーノの言葉になのははそう言い切る。誰かを守れる力があるのなら、迷う事無く使う。それはなのはが教えられた御神の言葉。そして、セイバーからも、自分が例え無力でもそれが許せないと思うのなら絶対にさせてはいけないと言われているのだ。

ならば自分は出来る事をする。戦う事は出来なくても、誰かを守る事は出来るはず。そうなのはは思う。そんななのはの言葉にユーノも感じるものがあつた。彼がこの世界に来たのは、ジユエルシードが原因で誰かが傷付いたり、悲しんだりするのを防ぐためだったからだ。

なら、自分もなのはのように行動しよう。それが今の自分出来る唯一の手段なんだ。そうユーノは思い、なのはに告げる。

【今から結界を展開するから、なのははレイジングハートを！】

【うん。よろしくユーノ君】

ユーノは周囲に結界を展開させた。一瞬にして景色が色褪せていく。そして、なのははポケットからレイジングハートを取り出し、告げる。

「レイジングハート、セットアップ！」

”スタンバイレディ、セットアップ”

なのはの声に応じ、起動するレイジングハート。起動コードなしでそれを行うなのはを見てユーノは確信する。なのはの持つ魔法の

才能はまさしく天才レベルだと。バリアジャケットを展開したなのは、ユーノと共に神社の石段を駆け上がる。そして、その先にいたものは。

「げ、原生物と融合してる……」

「犬、だね」

恐ろしい外見をした怪物。だが、その雰囲気から弱っていると二人は感じた。その理由を二人はすぐ気付いた。その傍には飼い主であろう女性を守るキャスターの姿があったのだ。

「あれ、意外と早いですねえ。なら、一応魔術で弱らせておきましたから、後はお願い出来ます？」

「分かりました。ユーノ君は念のためにあの人を診てもらっていい？」

「了解。気をつけてね、なのは」

ユーノがキャスターの傍へ行き、女性へ回復魔法をかけ始めた。その間にレイジングハートが形を変え、封印態勢に入る。それをなのが力強く構えた。

「リリカルマジカル！ ジュエルシード、シリアル16！」

”封印”

輝く光がリボンのように怪物を包み込む。そして、それが激しく輝いて消えた先には大人しくなった犬の姿とジュエルシードが残さ

れていた。あっさり終わった事に安堵するなのは。キャスターはそんなのを見て小さく笑みを浮かべる。

（頼もしいですね。いくら弱つてるとはいえ、こういう相手と向かい合っても怯えない所は）

これならこの回収作業も楽に終わるかもしれない。そんな風に考えてキャスターはふと視線を動かした。そこには回復魔法をかけ終え、結界魔法を解除して息を吐くユーノがいる。

「これでいい。もう少ししたら意識を取り戻すはずだよ」

「良かったあ。あ、キャスターさん、ありがとうございます。凄く楽に終わらせる事が出来たから」

「いえいえ、一宿一飯の恩は大きいですからね。これぐらいは当然の事です」

胸を張るキャスターになのはとユーノが笑ったところで小さな声が聞こえた。どうやら女性が意識を取り戻し始めたらしい。そう判断したキャスターはなのは達を連れて物陰へ移動した。

その直後、気を取り戻して女性は周囲を見渡す。その足元には先程の犬がいる。女性は不思議そうに首を傾げ、立ち上がるとその腕に犬を抱えて歩き出した。

それを後ろから見送るなのはとユーノ。キャスターはそんな二人を微笑ましく見つめていた。

「助ける事が出来て良かったね」

「うん。なのはとキャスターのおかげだよ」

「マスターも、ですよ。マスターがここへ来なければ今の結果はないと言う事をお忘れなく」

お姉さん口調で分かりましたかと締め括るキャスターに、ユーノとなのはが苦笑する。

「でも、確かにそうだよ。レイジングハートをユーノ君が渡してくれたから封印出来るんだし」

「なのは……」

「助け合っていこ？ それに、私はユーノ君と友達になりたいんだ」

そんな風に笑顔で告げるなのは。その顔は夕日の柔らかい日差しを浴び、朱が入っているように見える。ユーノはその笑顔に見惚れた。しかし、それも一瞬。すぐに気を取り直して戸惑いながら尋ねた。

「と、友達？ 僕と？」

「うん。駄目、かな？」

「だ、ダメじゃないよ！ むしろ………嬉しい」

噛み締めるようなユーノの声。それに喜びが滲んでいる事を気付いてなのはが嬉しそうに笑う。

「にはは、よかったあ。断られたらどうしようかと思ったよ」

「断るなんてそんな……なのはとなら、友達にならない方がおかしいよ」

あまりにはつきりした口調で告げるユーノ。それになのはは目を丸くするも、言われた事を理解し照れくさそうに笑う。それにユーノも自分の言葉を思い返し、照れ隠しからその顔を横に向ける。

そこから少し、二人に会話はなかった。それを眺め、キャスターは満足そうに笑う。願っていたユーノの同年代友人。それが出来たからだ。だが、その瞬間キャスターには思い出す言葉があった。

喜べ。これでお前達の願いは叶う。

それがもしこの状況までも想定してのものだとすれば、やはりあの声は世界の声だったのだろうかと思っただ。そんな事を考え出し、難しい顔をするキャスターに気付かず、ユーノがそろそろ帰ろうと告げて動き出した。

「私ね、男の子の友達って初めて出来たんだ」

「そうなんだ。僕も女の子の友人は初めてだから一緒だね」

共に笑みを見せ合う二人。その離れ行く気配に気付き、キャスターも慌てて歩き出した。その三人の背を夕日が淡く照らす。神社の石段を降りながら楽しげに話すのは達。こうして二つ目のジュエルシードも無事に封印されたのだった……

ジュエルシードを封印したなのは達が高町家に戻ると、セイバーが申し訳なさそうに出迎えた。直感が働かなかったため、発動に氣付いた時にはユーノの展開した結界が消える瞬間だったのだ。

その原因はキャスターがいたため。なのはへの危険がない故にセイバーの恐ろしい程の直感も反応しなかったのだ。それをセイバーが知るのはこのすぐ後。

「すみません。力になろうと思っていたのですが……」

借りてきた猫のように頂垂れるセイバーをなのはは微笑んで見つめる。そして、ユーノがさっきの状況を説明し、キャスターがいたから気にしなくてもいいと告げた。

「そうですか。キャスター、まずはお礼を。なのはを助けてもらいありがとうございます」

「いえ、気にしなくていいですよ。私もなのはちゃんがないと封印は出来ませんから。お互い様です」

「そう言ってもらえると助かります。今後も私は中々動けない事があるでしょうから、二人の護衛を頼みます」

そう告げるとセイバーは頭を下げる。それにキャスターがやや苦笑し、真面目ですと返した。そこからキャスターがライダーと決めた事を告げると、セイバーは士郎へ道場の使用許可を取っておくと返した。そんな会話を聞きながらユーノがなのはへ相談を開始。

「何か連絡手段を用意した方がいいね。セイバーはキャスターと違って接近戦が出来るから、今後の事を考えていざという時のために



さ

「そうだよな。念話が使えればいいんだけど……」

セイバーは魔法が使えない。それはキャスターが出来ない事からも明白だ。魔法は『リンカーコア』と呼ばれるものが必要で、それがセイバーにはない。しかし魔力はある。

そんなセイバーの質問を受けて昨夜キャスターが告げた理屈は、魔法は使用にリンカーコアが不可欠で魔法は使用に魔法回路が不可欠と言うもの。おそらく魔法回路はリンカーコアと似て非なるもの。故に魔力があってもそれは魔法を使えるエネルギーとは成り得ないのではないかと。

その推測はこの後正しさを立証される事となる。セイバー達は一切魔法が使えないと。逆もまた然りで、なのは達は魔法が使えないのだ。もっとも、これが完全に判明するのはなのは達が管理局と関わるようになってからの話。

「では、やはり持つしかありませんか……」

なのは達の会話を聞いていたセイバーが少し苦しそうな表情で咳く。

「あ、そうだね。そうしようよ」

「……何の話？」

自分の知らない所で話が進んでいると感じたユーノが尋ねると、それを聞いていた美由希が答えた。

「携帯だよ、携帯電話。そっちの世界にはないの？」

知らないのだろうかと思ってそう問いかける美由希にユーノは頷く。そこから始まる携帯講座。ユーノはそれを面白そうに聞き入っている。そんな二人を横目に、セイバーとなのはは以前もらった力タログを眺め、思案中。

実は、セイバーに携帯を持たせる案は前にもあった。だがセイバーが「持っているだけでお金がかかるなど、私にはもったいない」と言って断ったのだ。

「やっぱり画質がいい奴だよ」

「ですが、基本料金が……」

「むむ……。なら、容量の大きい奴は？」

「通話料が高いです」

「……じゃ、シンプルな奴」

「それは……なのはと同じものでいいです」

静かにイライラしていたなのはに気付き、セイバーは一瞬息を吞んで模範解答を出した。その発言にジト目のなのはだが、セイバーのすまなさそうな顔を見て大きく頷く。それを眺めていたキャストが苦笑混じりに一言。

力関係はなのはちゃん为上ですねえ……

こうして、後日セイバーに携帯が持たされるのだが、パケットゲ



## 無印三話 前編

夜の学校。そこに立つはなのはとユーノ、セイバーの三人。ジュエルシードの反応を感じ、こうして行動するのも既に慣れたもの。セイバーがまず相手の動きを惹きつけ、ユーノが結界を展開。そしてなのはが最近習得した魔法でセイバーを援護する。

「レイジングハート！」

”デイベインシューター”

射撃魔法。それは、なのはのセイバーやユーノを援護したいという思いが生んだ力。その光弾は意志を持つかのように怪物へ向かっていく。セイバーの動きに合わせてるように軌道を変えながら魔力弾が怪物を襲う。

そして、それをかわしたところをセイバーが斬りつけ、怯んだ隙にユーノがバインド。その拘束によって身動き出来なくなった相手を見て、セイバーとユーノが揃って声を上げる。

「今です！」

「なのは！」

「リリカルマジカル！ ジュエルシード、シリアル13！」

”封印”

そこをなのはが封印する。これが最近確立されつつあるパターン。前衛をセイバー、中衛をユーノ、後衛なのはのチーム。これが見事

にはまり、ここ二戦はものの三分とかわらずに封印出来ていた。レイングハートがジュエルシードを収納し、この日も無事終了。

ちなみにここにキャスターがいないのは訳がある。昼間の間は、仕事があるセイバーに代わりキャスターがジュエルシードを搜索している。それを悪いと思つたセイバーがならばと夜は自分が受け持つ事にしたのだ。

とはいえ、キャスターも結局眠らず留守番をしているのだからあまり意味はない。それでも、あまり前線を受け持つ事に長けていない彼女としてはセイバーの申し出は嬉しいものだった。

「これで四つですか」

「うん。でも、まだ沢山あるから」

「油断大敵、だね。とりあえず帰ろ？　少し疲れたよ」

少し辛そうな表情のなのは言葉にユーノが頷く。

「そうだね。シューターの制御は慣れない内は結構神経を使うだろうから」

「しかし、見事なものです。私の動きに合わせてくるとは」

「ふふん、セイバーの動きはずっと見てきてるからね」

笑顔。それは、そのなのは言葉にセイバーとユーノが浮かべたもの。高町家に向かって歩き出す中、三人は他愛ない会話を交わす。ユーノ達が高町家にやってきてまだ二週間弱。

いや、もう二週間弱と言うべきか。怪我も完治し、既に身の上話

までさせられた彼は密かに桃子と美由希の『高町ユーノ計画』が始まっている事を知らない。

それを裏で食い止めているのは、誰であろう恭也と土郎だった。

恭也は、あくまで友人としてユーノとなのはを関係させるべきと主張。土郎は、本人の意思なくそういう事は不味いと常識的意見。

結果、ユーノ本人に聞いてから養子縁組の話は進める事となり、彼の知らぬ所で二人の計画は事実上停止されるのだった。キャスタ―はそれならそれもいいかと思っっているため、敢えて中立の立場なのがらしい。

こうしてこの夜は終わりを迎える。帰り道を歩きながらなのはは思う。そろそろユーノをはやて達に会わせないといけないと……

翌朝、高町家にある道場からいくつもの音が響いていた。それは木刀がぶつかり合う音。

「どうした。そのような動きでは、私の剣閃はかわせぬぞ」

「くっ……まだです！」

小次郎の木刀が振り下ろされる。それをユーノが防御魔法で防ぐ。それと並行してチェーンバインドを展開、小次郎を捕らえようとするのだが……

「何度も同じ手は食わん」

「なっ……」

既に同じ事をされた小次郎はバインドに敗えて木刀を絡ませてその場を離脱。そして素早く代わりの木刀を手に取り、ユーノへと迫った。それにユーノは転送魔法で対抗しようとするが、発動までの僅かな時間は小次郎にとっては絶好の好機。

「これは少しばかりの礼よ」

そう言っただけで構えるは小次郎の極め技を放つためのもの。それを見ている事に緊張が走る。中でも、それが今まで凄腕の父や兄を倒している事を知っているのは息を呑む。

(あれって……燕返しだよ)

それはもう幾度となく兄や父が敗れた技。動体視力に自信があるなのはにさえ、未だに見切れない無敵の剣技。その名を燕返し。その小次郎の必殺剣がユーノを襲う。そう、それは想像以上に健闘したユーノに対する小次郎なりの気遣い。

その身は未熟なれどその意気やよし。それを表すための、秘剣。だからこそ見ているキヤスターも動かない。これは男の戦場だと分かっているのだ。それでもその表情はどこか辛そうだ。

「がっ……」

咄嗟にユーノが展開した防御魔法と衝突する小次郎の剣閃、だがその鋭さがそれを打ち砕き、容赦ない小次郎の一撃がユーノに直撃する。いくら加減はしてあるとはいえ、それは意識を刈り取るには十分だった。崩れ落ちそうになるユーノを見て恭也が立ち上がる。

「そこまで！」

「ユーノ君っ！」

その声と同時に観戦していたのはが駆け寄る。その表情は不安一色だ。それが早朝の高町家の定番になり始めてもう一週間。キツカケは些細なものだった。ユーノがなのはのやっているトレーニングを見て、このままではいけないと思っただ事が始まり。

そこから土郎や恭也に頼み、自分を鍛えてほしいと言い出したのだ。勿論、同じ男としてそれを分からね二人ではない。その日のうちから、ユーノは恭也と美由希の弟子となった。御神ではなく、あくまで剣術としてのだったが。

「どうです？ ユーノの奴は」

「……ふむ、初めは些か戸惑ったが慣れればどうという事はない。

しかし、内心見くびっておったわ。初見では厄介なものかもしれぬ」

「小次郎さんにそこまで言わせるとはねえ。……あたしも負けてられないかな」

「いや、実際良くやったと思うぞ。俺達も勝ってはいるが魔法には結構手を焼いたじゃないか」

土郎の言葉に恭也は頷く。小次郎同様、恭也も最初はユーノを甘く見ていた。しかしキヤスターによって様々な事を教えられた彼は、実的確なバインド展開とシールドの強度を活用し、恭也に対抗したのだ。

それに恭也は驕っていたと気付かされたのだ。神速を使い試合に



は勝ったが、恭也にとってユーノはそれ以来美由希とは違う期待を抱かせる相手となった。

美由希もセイバーも試合結果はそうだった。ユーノは戦闘をするタイプではなく、むしろ学者や研究者といった人間だ。だからこそ、ユーノは頭を使う。どうすれば自分が勝てるのか。そこまで流れを作るにはどうするのか。そういう考えを既にキャスターによって持たされていたのだ。

士郎も恭也も美由希も、そしてセイバーでさえユーノを倒したのには使う必要はないと思っていた『神速』や『魔力放出』を使っただった。それだけ魔法の使い方が上手く、また巧みだったのだ。それに、初見ではどの魔法がどんな効果を持っているか分からないのも強みの一つ。

故にユーノは意外に善戦していたのだ。だが、恭也達は知らない。それは、日々ユーノが高町家の修行風景を仔細漏らさず観察し、キャスターと相談した結果なのだ。

そんな小次郎達から離れた場所で、なのはとセイバーがユーノを見つめていた。

「大丈夫ですよなのは。アサシンは加減していましたから」

「それは分かってるけど……」

セイバーの言葉になのはも同意するがそれでも心配なのだ。何せ、小次郎は恭也や士郎に勝てる男。その初試合を見た時、なのはの小次郎を見る目が変わった。それまではアリサの家の庭師だと思っていたのだが、実は凄腕の剣士なのだと知ったからだ。

「ちょっとやり過ぎじゃありませんか！ マスターがお馬鹿になつたらどうしてくれるんですっ！」

「その心配はなからう。頭は避けた上に威力もあの魔法で幾分削がれた。負けたとはいえ、中々見所のある戦をするものよ。惜しむらくは戦いの才はあれど力はない事か」

キャスターの文句に小次郎はそう返してユーノへ視線を向ける。その目は心から勿体無いと思っっているものだ。それに気付き、キャスターも文句を言うのを止めた。小次郎がユーノを買ってくれたのを理解したからだ。

「ユーノの奴、さすがに遺跡発掘をしてただけあつて体力はあるな」

「うん、結構頑張りやさんだし……男の子してるよ」

恭也の言葉に美由希も笑顔で同意する。ここだけの話、士郎と恭也にとつてユーノは数少ない男仲間。そして、境遇故に甘えなかつた恭也と違い、ユーノはどこか遠慮はあるものの歳相応の甘さを残していたりする。

士郎は恭也に出来なかつた分ユーノを息子同然に可愛がり、恭也は恭也で弟と思って面倒を見ていたりするのでやはり高町家は甘い。そして、そんな家族同然の扱いにユーノが密かに涙したのはキャスターと彼だけの内緒の話だ。

「では、私はこれで失礼する」

「はい。今度は俺とやりましょう」

「いや、父さんじゃなくて俺が先だ。第一、この前やったばかりじ

やないか」

「はいはい。それは後でね。まず、道場の片付けしよっか」

「いつもすまぬな。私も手伝いたいが」

小次郎はそう言って困り顔。そう、小次郎は一度も道場の片付けや掃除をした事がない。本来ならば小次郎とて武士の端くれ。道場に対し礼を払うのだが、それが出来ない理由があった。

「いいですって。アリサちゃん、待つてるんですから」

「……すまぬ」

美由希の言葉に小次郎はそう答え、軽く頭を下げる。それに笑顔で手を振る美由希。そう、小次郎が高町家に入入りするようになってから始まったアリサの軽いジョギング。その護衛のために小次郎は時間に追われているのだ。

それがアリサなりの抵抗なのは小次郎以外全員理解している。だからこそ美由希も微笑ましく小次郎を送り出す。ドアを開け、小次郎の姿が道場から消えるのと同じくして、ユーノが微かに声を漏らした。

「う……」

「ユーノ君、大丈夫？」

なのはの声に意識を覚醒させたユーノは、周囲の様子を確認しポツリと呟いた。

「……また、負けた」

その眩きと共にユーノの視界が滲む。土郎や恭也達と戦い敗北続きのユーノ。それは当然なのだが、それでも次は負けないと意気込んで臨んだ小次郎との試合。

小次郎の何とも言えない佇まいに一度は飲まれかけたユーノだったが、その瞬間ランサーと対峙した事を思い出し、それを跳ね除けたのだ。最初は小次郎も様子見の部分があって、ユーノ優勢に展開されていた試合。

だが、ユーノのチェインバインドに小次郎の片腕が捕らえられた後から状況が一変した。ユーノが勝負を決めるため、一気呵成に攻めようとした瞬間、小次郎がバインドを引き千切ろうとしてバインドが軋み、ユーノの驚きを誘ったのだ。

バインドが力任せで軋みを上げるといふ光景にユーノの意識が逸れたのを感じた小次郎は、咄嗟に距離を詰め自由に動く足で彼を蹴り飛ばした。その攻撃でバインドを解いてしまったユーノは先ほどの流れを経てやられてしまったのだ。

「ユーノ君……」

声押し殺して涙を流すユーノになのは何も言えなかった。それは下手な言葉は余計ユーノを傷つけると思ったから。なのは知っている。何故、ユーノが自分を鍛えようと思ったか。それが昔の自分と同じだったからだ。

(守られてるだけじゃ……嫌なんだよね)

セイバーによって守られるのはとキャスターによって守られる

ユーノ。立場は同じなのだ。しかも、現在行っている封印作業でユーノは基本援護役。昨夜のように的確に相手の動きを制限し、二人のサポートをしている。

だが、ユーノも男だ。女の子であるなのはに守ってもらっているような状況が嫌なのだろう。そう判断し、なのははユーノから視線を外した。その気持ちが分からないでもないからだ。

「なのは、今は一人にしておきましょう」

「セイバー……うん」

静かに声を掛けるセイバーになのははそう応じて道場を後にする。去り際、一度だけユーノの方を振り向いて呟く。

ユーノ君は強いよ。絶対に……あの時の私よりも。

その視線の先には士郎と恭也に励まされているユーノがいた。キヤスターと美由希は涙を流しながらそれに応じているユーノを見て微笑んでいる。そんな光景を見て、なのはは改めて思う。男の子とは泣いて強くなる者なのだ、と……

「初めまして。アタシ、アリサ・バニングスよ」

「初めまして。私は月村すずかです」

「は、初めまして。僕はユーノ・スクライア。スクライアは部族名

だから、出来るのならユーノって呼んでほしい」

あれからしばらく後、なのは達はグラウンドに来ていた。今日は士郎が監督兼オーナーをやっているサッカーチームの試合があるためだ。翠屋JFCというチームで、その応援とユーノ達の紹介を兼ねてアリサ達を誘ったからだ。

「そ、じゃユーノね。アタシはアリサでいいわ」

「私もすずかでいいよ。よろしくユーノ君」

「こ、こちらこそよろしく、すずか。それと……あ、アリサ」

どこか緊張するユーノに笑みを浮かべるなのは達。だが彼女達は知らない。ユーノが緊張している理由。それは普段から聞いている小次郎のアリサ話が原因だと。

彼は「本当は虎の娘」や「気に入らなければ骨の髄までしゃぶられる」などと吹き込んでいたのだ。それを真顔で言うものだから、ユーノは素直に信じてしまった。即ち、アリサとは恐ろしい少女である。小次郎は真面目で腕の立つ武人。それがユーノの評価だから当然と言える。

「じゃ、マスターの次は私ですねえ。キャスターと言います。どうぞよろしく」

「「よろしく」」

既に名前と簡単な話をライダーや小次郎から聞いているため、アリサもすずかも笑顔で返事を返す。そう、セイバー達五人のサーヴァントはあの二回目のジュエルシード封印作業の夜に話し合いをし

ているためだ。

「ユーノ君、もう一人紹介したい子がいるからもう少し待ってね」

「あ、はやてちゃんだね」

「やっぱりはやても会わせてって言ったのね」

なのはの言葉で俄かに盛り上がる二人。それを横目にユーノは視線をグラウンドへ移す。そこでは多くの少年達がボールを追い駆け、走り回っている。

それがサッカーと言うスポーツだとユーノは知っていた。高町家で土郎やセイバーがテレビを見ながら、あーでもないこーでもないと言いながら熱中しているのを何度も見ていたからだ。

（楽しそうだな……）

小さい頃から遺跡発掘等の仕事や勉強に従事していたため、ユーノは同年代と遊んだ経験が少ない。学院時代でさえ勉強などに打ち込むあまり、結局友人らしい友人などは出来なかったのだから。

だからだろうか。眼前の光景がユーノには少しだけ羨ましく見えた。そんなユーノの横顔をキャスターが黙って見つめる。その表情はどこか複雑だ。

（マスター、混ざりたいんですね。なのはちゃんという友人が出来てもやっぱり同性の友人も欲しいですもんね）

だが、ユーノがそれをここで得るのは難しい。魔法を隠し、出身を隠し、自分のほとんどを隠して過ごさねばならないからだ。そう考え、キャスターが小さくため息を吐く。それに気付いてなのは達

も視線をユーノへ動かした。

(あれ？ ユーノ君、どこか寂しそう……)

(何よ、あんな顔して。あ、参加したいのか。でも試合じゃそれも出来ないから悲しいってとこね)

(サッカーが珍しいのかな？ ……でも、何で寂しそうなんだろう？)

三人の少女は同い年にも関わらず、どこか物悲しい雰囲気を漂わせるユーノを見てその寂しさに気付く。そんな四人を遠くから呼びかける者がいた。その独特の喋り方になのは達三人がそちらへ振り向く。

「おーい。今着いたで〜！」

「……はやて(ちゃん)！」「……」

アーチャーに車椅子を押されながら、はやては嬉しそうに手を振る。それに駆け寄る三人。それを見つめ、ユーノはなのはから聞いた親友の名前を思い出していた。

(そうか。彼女が八神はやてか。昔から足が不自由って言ってたな)

楽しそうに笑う四人を見てユーノも笑う。初めて得た同年代の友人達。それがあんな風に笑っていられるように早くジュエルシールドを回収しなければ。そんな思いがユーノの中に強くなる。

すると、ユーノの視線がアーチャーと合う。その瞬間、アーチャーが口の端を上げた。その笑みの意味するものがユーノは分からず



困惑の表情。それにアーチャーは益々笑みを深くする。

(まったく……どこにもいるものなのだ。子供らからぬ顔をす  
る者というのは)

これまで見た事のあるなのは達のそういう顔を思い出し、アーチ  
ャーは苦笑い。どこまで似た者と出会うのだろうかと思ったのだ。  
そんな彼は車椅子をなのは達へ託し、セイバーと話そうかと思って  
歩き出そうとした所にキャスターがやや不機嫌そうな顔で近付いた。

「マスターを見て笑うとはいい度胸してますね、アーチャー」

「気に障ったのなら謝ろう。私としては思い出し笑いのつもりだっ  
たのだ」

「どういう事です？」

「いや、はやて達も同じように子供らしくない顔をする時があるな、  
とな」

そのアーチャーの言葉にキャスターもそれならばと納得し、視線  
をはやて達へ動かす。四人に呼ばれ、ユーノが少し嬉しそうに車椅  
子へと駆け寄っていく。その光景がとても幸せそうに見える、知らず  
キャスターとアーチャーに笑みが浮かぶ。

「よろしくな、ユーノ君」

「「こちらこそよろしく、はやて」

笑顔を向け合う二人。それになのは達も笑みを浮かべる。そこか

らある程度喋ったところで試合開始の時間となり、なのは達は応援席で観戦する事に。ユーノはアーチャーやキャスターと共にセイバーと同じベンチで観戦している。

一緒にとなのはが誘ったのだが、アーチャーが男同士の話がしたいと申し出たため、なのは達少女四人での観戦となっている。キャスターはセイバーからサッカーの良さを教えると言われて無理矢理に近かったが。

「ユーノ君って可愛い顔しとるな」

「そうだね」

「女顔って奴よね」

「でも、さっきはすごく男の子っぽい顔してたよ？」

「おっ、何や面白そうな話やな。すずかちゃん、それ詳しく」

「お、応援しようよ〜」

興味をユーノに示すはやてへなのはが困ったようにそう言った。

何せ翠屋JFCが苦戦していたのだ。それに気付いて三人が頷いて声を上げる。すると四人の声が効いたのか、それまで一進一退の攻防をしていた試合が一気に翠屋JFCのペースに変わった。

いくつになっても男なんてみんな素直で単純なもので、美少女が応援してたらいいとこ見せようとするもの。そのため、普段以上に頑張り出す翠屋JFCの面々。

それを別の場所から見ながらユーノは苦笑い。自分もきつと同じような事をされたら、目の前の少年達のように張り切る姿が浮かん

だからだ。

「何か面白い事でもあったかね？」

「いえ、何か分かる気がして」

ユーノの答えにアーチャーは楽しそうに笑みを浮かべ、視線をなのは達へ向ける。

「まあ、確かに彼女達は可愛いからな」

「はやてもですね」

「……何故わざわざはやてだけを個別で告げる？」

ユーノの言葉にアーチャーは少し嫌そうな表情を浮かべた。何となく理由は分かるが、それでもやはり思う事はあるのだ。そんなアーチャーへユーノは笑って答えた。

「だってアーチャーさん。さっき、はやてだけ視線合わせなかったですから」

思っていないのかと思いました。そう続けたユーノにアーチャーはややムツとした顔でそれを否定。確かにはやてへ視線は合わせなかったが、それは彼女が自分の視線に敏感だからだ、と言ったのだ。それを聞いたユーノは「いや、それってどうなんです？」と思っただが言うのはやめた。嫌な予感しかしなかったからだ。

「そこですっ！ ラインを上げてっ！」

「行け行けっ！ 相手は逃げ腰ですよっ！」

そんな風にユーノとアーチャーが会話する横で、セイバーとキャスターは試合が動いたのを見て盛り上がったのか、声を張り上げ応援するのだった……

「今日はみんな良く頑張った！ そんなに長く時間は取れないが祝勝会だ。英気を養い、次も勝つぞ！」

上機嫌の土郎の言葉に翠屋JFCの少年達が歓声で応える。あの後、試合は翠屋JFCの勝利に終わり、そのままの雰囲気ですべて祝勝会となったのだ。

そんなお祝いムードの店内とは別に、なのは達は外にあるオープンカフェスペースでくつろいでいた。セイバーは中でチームの少年達と楽しそうに話している。

「いやあ、初めてサッカーを生で見ただけど結構面白いもんやね！」

「だよ。私も思わずハラハラしちゃった」

やや興奮気味に話すはやてにすすかも同意し笑みを浮かべる。

「アタシとしては、もう一度盛り上がり欲しかったわね」

「それって逆転されてから逆転し返せって事？」

「アリサ、それはちよつと無理だよ。あの後半を見たよね？ 相手に戦意が残ってなかったじゃないか」

少し不満げな表情で告げるアリサになのは不思議そうな声を出し、それにユーノが苦笑しながら否定する。それにアリサがあくまで希望だとかや呆れた声で返し、周囲が苦笑する。実にらしいと思つたのだ。

今日出会つたばかりのユーノでさえそう感じるのだから、アリサというのやはり大したものだろう。そんな賑やかな雰囲気のまま話すのは達。その隣のテーブルにはアーチャーとキャスターの姿があつた。

「どうです？ そちらの成果は？」

「さつぱりだ。やはり反応が分からないというのが厳しいな。何か手があればいいのだが……」

ジュエルシードについて話し合う二人。アーチャーはキャスターからジュエルシードの詳しい説明を受けた時、迷う事なく「破壊するべきだ」と主張した。その提案理由自体はキャスターも理解出来たので文句を言う程度で終わったのだが、やはりどこか険悪な雰囲気になつた。

それをセイバー達が何とか緩和させ、アーチャーにその決断を保留させたのだ。その次の日、それをどこから聞いたはやてが「人様のもんを勝手に壊したらあかん！」と言い放ち、アーチャーは澁々ではあるが引き下がつた事で現在に至る。

そして、破壊出来ないなら一刻も早く回収するべきと思ひ、はやてと探索するのは勿論、深夜もアーチャーは一人で探索していたのだ。それを知っているのはセイバー達サーヴァント四人だ。セイバ

ーとキャスターは本人から聞き、後者二人は偶然出会った。

その時分かっただのは、ライダーや小次郎も早く少女達へ日常を取り戻してやるうとの気持ちからアーチャーと同じ行動を取っていた事。それを知った時、三人揃って苦笑を浮かべお互いに変わったと言い合ったのだ。

「でも、貴方達も協力してくれたおかげで大分探索範囲が絞れました」

「そう言ってもらえるとやっている甲斐もある。ライダーや小次郎にも伝えておこう」

「残り十七。マスターが広域探索魔法を使えばもっと効率も上がるんですけどねえ……」

「出来ない事を言っても仕方ない。それより例の方はどうだった？」

「……ええ、貴方の推測通りです。どうも魔法生まれの使い魔のようですね。しかも双子でした」

アーチャーの問いかけにキャスターは平然と返す。それはあの五人での話し合いで共有し合った情報から派生したものだ。アーチャーの話した仮面の襲撃者。それが使ったものをキャスターは魔法と判断したのだ。

そこから地球が管理外と呼ばれ、基本魔法世界の人間は来ていないはずとの話を聞いたアーチャーがならばとキャスターへ頼んだのだ。少し気になる猫がいると。

キャスターが霊脈を押さえた事により、海鳴市で起きる事は彼女

が把握出来るようになった事を利用してアーチャーが逆に猫を監視したのだ。その結果、キャスターは見た。あの猫が人気の無い場所で人型へ変化し、どこかへ消えるのを。

それとその猫がどこかへ連絡しているのを聞いて名前も把握していたのだ。双子の姉はリーゼアリアと言い、妹の方をリーゼロッテと言う事まで。残念ながら主人の事までは分からなかったが、どうも管理局の人間らしい事は確実だ。そこまで語り、キャスターはため息を吐いた。

「何故管理局があの子を……いえ、あの本を監視するんでしょうね？」

「分からないが、ジュエルシードと同じく……ロストロギア、だったか。それだとすればある程度納得は出来る」

「とてつもない危険物。だから、それが害を及ぼさないように見張っている？」

「好意的に取れば、な。これまでの事を考えればそうはいかんだろ」

そこまで聞いてキャスターが微かに視線を動かす。それにアーチャーも気付いてため息を吐いた。そこで二人の話題は変わった。それは早くジュエルシードを回収するための方法だ。

それを話す二人を離れた場所で見つめる猫がいた。だが、彼女は知らない。その細心の注意を払った行動さえキャスターの前では無意味だと。そう、キャスターは猫が監視に来た事を察知し、アーチャーへ知らせたのだ。

「中々厄介なものだ」

「ですねえ。出来る事なら早く終わらせたいですけど……」

「それもランサーがいつここへ来るかで変わるか」

「そうですね。その時がある意味での転換期かもしれません」

猫の監視を暗に含めての言葉。それに気付いてキャスターも鬱陶しいとばかりに返す。そんな二人とは違い、なのは達はそれぞれの趣味や得意な事を話題にして会話に花を咲かせるのだった……

楽しい時間はあっという間に過ぎるもの。あの後も五人の話は止まる事がなかった。ユーノは幼い頃から部族の大人達と発掘などの仕事をした事があるため、その時の話はなのは達にとっては非常に興味深いものがあった。

逆にユーノはアリサやすずか、はやての話に興味を持った。大人顔負けの知識量を持つアリサとすずか。家事等の話やアーチャー仕込みのサバイバル知識。それらは知識欲旺盛なユーノには得るものが多い話だったからだ。

そんなユーノとは対照的になのはは少し不満気味。自分と話をしている時より、ユーノが三人の話に夢中だったからだ。でも、となのははユーノを見る。そのユーノの表情はともイキイキしていた。だから。

（もう、今回だけだからね。……次はないよ？ ユーノ君）



許す事にした。歳相応の表情をしているユーノに免じて。そしてなのは笑顔を浮かべると、話が一段落したのを見計らってこう切り出した。

「ね、五月の連休なんだけど……」

「ゴールデンウィークがどうかした？」

「何かあるの？」

アリサとすずかの言葉にユーノが不思議顔。それを見てはやてがゴールデンウィークの解説をする。それに補足や雑学をアリサとすずかが入れ、終わるのを待って再びなのはが語りだす。

それは遊びの誘い。毎年恒例の家族旅行。今回は泊まりを視野に入れたもの。その誘いに喜んでと応じるアリサとすずか。はやては迷っていたが、アーチャーが「なら、私が骨休めで行かせてもらおう」と言った途端「一人は嫌や！」と怒りながら叫び、誘いを受けた。

もつとも、それがアーチャーなりの後押しなのは今日のやりとりからユーノですら理解している。こうして連休の温泉旅行は、高町家とユーノ達だけではなく、月村家にアリサと小次郎やはやてとアーチャーが加わる団体旅行となる。

まだなのは達は知らない。この旅行に更なる参加者が加わる事になる事を……

とある高層マンションの最上階にある部屋。そこが現在のランサー達の拠点。そのリビングでランサー達はモニター越しにリニスと会話していた。

「…………マジか」

「はい。間違いないと思います」

断言するリニス。それを聞いてフェイトが噛み締めるように声を出しながら拳を握る。

「ジュエルシードが…………この近くに」

「まだその街と決まった訳ではありませんが、おそらく」

「なら、早速…………」

そう言っただけ動き出そうとするアルフをランサーが無言で手を出し制止した。それに続こうとしたフェイトも同様だ。ランサーは視線をリニスに向けたまま、自分に言い聞かせるように告げる。

「ダメだ。まだこの街にないって決まった訳でもねえ。海鳴って場所についても、もう少し情報を集めるんだ」

（そうだ。俺はこいつらに頼りにされてる。そんな俺が慌てたらフェイト達が余計焦っちゃう）

「でも！」

「焦るんじゃない。急いで事は仕損じる……この国の言葉だ。どんな時でも冷静さをなくすな。あの時も言っただろ。お前に何かあったからじゃ遅いんだよ」

どこか焦りを見せるフェイトへランサーは内心の焦りを押し殺し、そう言っただけで黙らせる。それにアルフも黙らざるを得ない。フェイトはランサーの弟子のようなもの故に。アルフは信頼し頼れる漢故にその絆は既に断金。かの三国志に登場する小霸王孫策と美周朗周瑜が交わした友情。それにも勝る繋がりなのだ。

「それに、いざって時は俺が熱くなっちまうからな。余計お前達には冷静でいてもらわないといけねえ」

人懐っこい笑みでそう言われてしまえば、フェイトも何も言い返せない。そのまま、ランサーがフェイトの頭を撫でれば尚の事。それを見てリニスとアルフは笑みを浮かべる。

くすぐつたいと言いながらも嬉しそうなフェイトと、満面の笑顔でどうだと言わんばかりに撫で続けるランサー。まさに兄妹と呼ぶに相応しい光景が、そこにあつた。

「で、プレシアの様子は怎么样い？」

「……良くはありません。緩やかではありませんが悪化しています」

フェイトがランサーとじゃれているのを横目にアルフとリニスは小声でそんな会話をしていた。フェイトに聞かれれば焦ると知っているからだ。ジュエルシールドをプレシアの体を治すために求めていると思っただけが故に。

本当は違っただけ、それもあわよくばと思っただけの事なので嘘と



## 無印三話 後編

祝勝会も終わりを告げ、翠屋からぞろぞろと少年達が出て行く。それを横目になのははアリサ達へ問いかけた。

「ね、この後はどうするの？」

「私はお姉ちゃんとお出かけ」

「アタシはパパとショッピング！」

「わたしは特にないけど……」

「夕飯の買い物をして帰るとしよう」

はやての視線にアーチャーがそう答える。それに笑顔で頷くはやて。なのははユーノを見て念話で尋ねる。どうする、と。別に直接聞いてもいいのだが、この和やかな雰囲気でジュエルシードの話は場違いな気がしたからだ。

ユーノもそれは同じなのか、さして驚く事もなくその問いかけに答えた。

【今日は完全休養に当てよう。キャスターが言うには探索範囲も大分絞れてきたらしいし】

【いいの？ 別に私は平気だよ？】

【でも、朝の魔法訓練や夜の練習なんかで疲労はしてる。士郎さん

からも言われたでしょ？】

無茶は目をつぶるが無理は許さない。なのはが魔法の訓練を始めた時、士郎はそう言った。それはなのはの我慢強さを考慮しての発言だった。昔からどこか自分の事を後回しにして、他者の事を優先するところがあつたなのは。

だからこそジュエルシードに関しても、無理をどこかですると士郎達は読んでいた。そのため、なのは本人に強く言い聞かせたのだ。休める時に休むのも大切な事だと。

【分かったよ。……もう、ユーノ君までお兄ちゃんみたいな事言う  
〜】

【みんな、なのはが心配なんだよ】

そんな会話と並行して二人はアリサ達とも会話する。マルチタスクと呼ばれる技能で前線魔導師には必須とも言われるものの一つだ。なのはも最初はかなり苦労したが、持ち前の才能がすぐにそれを習得してみせた。

ユーノは会話相手となり、セイバーは会話相手としてそれぞれ苦労をかけた成果である。当時、キャスターはそんな訓練風景を眺め、大変ですねえとのほほんとしていた。

「あれ……？」

念話を終えたなのはの視界に少年が映った。その手にはジュエルシードのようなものが握られていて、それを彼はポケットに入れた。それを見てなのはを考える。それが本当にジュエルシードなのか、と。もしかしたら見間違いかも。そんな事を思い、なのはは立ち上がった。

突然立ち上がるなのはに不思議そうな表情を浮かべるアリサ達。その視線を受けながらも、なのははテーブルを離れて動き出す。それをユーノ達は黙って見守る。

「ちよつとごめん」

そう言つて、なのははその少年へ近付いた。振り向く少年になのはは疑問に思つた事を聞く。

「菱形のキレイな石がさつき見えたんだけど、見せてもらえないかな？ 友達の落とし物に似てたから」

そんななのはの言葉に少年も素直にポケットから先程のものを取り出す。それは間違いなくジュエルシードだった。なのははそれを確認して頭を下げた。

友達の落とし物に間違いないから返してもらえないかと。そんななのはに少年は笑顔で頷き、ジュエルシードを渡す。偶然拾つたんだと語る少年に、事情に気付いてやってきたユーノがなのはと揃つて礼を述べる。それを照れくさそうに受ける少年。そこへマネージャーらしき少女が現れて。

「何があつたの？」

「えつと、実はね……」

少年から事情を聞き、少女は笑みを浮かべて少年を誉める。それに益々照れていく少年。それになのはとユーノがまた礼を述べていると、それを端から見ていたアリサが呟く。

「……で、いつまでアタシ達はこの寸劇を見てればいいのよ」

「あ、アリサちゃん、寸劇は酷いと思うよ。せめて……小芝居、かな？」

「何気にすずかちゃんも言うなあ……」

そんなこんなの様子とりが実に五分弱続いたとな。

アリサ達と別れて、なのはとユーノは土郎と共に高町家に帰宅。と言っても土郎は少し休んでまた出勤のだが。一緒に風呂に入るかとの土郎の誘いを断り、なのはは昼寝タイムとばかりに部屋へ。ユーノが代わりにそれを受け男二人のまったりタイム。ちなみにセイバーはそのまま仕事中。サッカーチームの少年達との会話で、やる気十分だった。キャスターはそんな彼女と共に軽い手伝いをしている。一度やってみたかったとは本人の談。

いえ、少しだけこういう事をしてみたくて。

キャスター、貴方には案内とオーダーの受付などを頼みます。レジや電話対応などは私か桃子へ。他に分からない事があれば何でも聞いてください。

別れる前の光景を思い出し、セイバーの指示を受けながら今頃は愛想良く接客しているんだろうなど、そんな事を考えてぼんやりするユーノ。そこへ突然声を掛けられた。



「なあユーノ君」

「はい？」

士郎の背中を洗いながらユーノは小首を傾げた。力加減は良いはずだった。何せ、もうこれで士郎の背中を流すのも五回目。既にもう慣れた感さえあるのだから。故に何を聞かれるのだらうとユーノが思っていると、士郎は静かにこう言った。

「良かったら、うちの子になってくれないか？」

それは真剣な声。でも、どこか優しく穏やかな声。何でもないと告げられた言葉にユーノは手が止まった。その言葉自体は何度が言われた事はある。桃子や美由希がよく冗談めかして言うのだ。

でも、こんな風に真面目に言われた事はない。それが意味する事がユーノに理解出来た時、その目から何かが溢れそうになった。そんな彼に気付いたのか、士郎は苦笑気味に声を出した。

「別に養子になれて訳じゃない。ようは気持ちの問題さ。ここにいる間だけでいい。ここを自分の家だと思って欲しいって意味だ。キヤスターさんは早い内にそうなってくれたみたいだが、君はどこか他人行儀が抜けないからな」

「そ、それは……僕はやっぱりお世話になってる居候ですから」

「俺はそんな風には思ってないんだよ、ユーノ君。初めて君の身の上を聞いた時、ある事を思ったからね」

士郎の言葉にユーノは黙る。それは続きを促す沈黙。真剣に聞き入るとい証。それを感じ取り、士郎は軽く笑い「ま、まずは風呂

に浸かるう」とユーノを促す。

「……どうして君となのはが出会ったのかって考えた時に思ったんだ。もしかしたら君は、俺達夫婦に神様がくれた贈り物なんじゃないかって」

「贈り物、ですか？」

「ああ。恭也は色々あって普通とは言い難い子供時代を過ごさせてしまった。それで男の子も欲しかったんだが、俺も母さんも結局なのは一人で手一杯になってな……」

そう言っつて士郎は息を吐く。そしてユーノの方へ視線を向け、笑っつて告げた。

「だから、俺は君を息子として扱いたいんだ。セイバーと同じような存在と出会い、なのはと同じような思いを抱いていた君を、この家に居る間は普通の子供でいさせてやりたいとね」

「士郎さん……」

その言葉に感激して瞳を潤ませるユーノ。それに士郎は笑っつて返す。

「こら、男が簡単に泣くな」

「な、泣いてません！ これは……その……汗です！」

そう言っつてユーノは手に湯をすくっつて顔を洗うと俯いてしまう。照れと恥ずかしさと色々な感情が混ざり合ったのだらう。それを見

て優しく微笑み、その頭へ静かに手を置く土郎。

後にユーノは語る。自分を育ててくれた家族はスクライア一族だが、自分を『子供』にしてくれた家族は高町家だった、と。

そんな会話が風呂場で行われている時、なのははベッドに横になりぼんやりとある事を考えていた。それはユーノが話してくれた襲撃者の事。それも自分と同じ年ぐらいの少女の事だった。

自分がひよんな事から集める事になったジュエルシード。それを狙いユーノの前に現れたという『犯罪者』。だが、ユーノの話ではそういう人間には見えなかったとの事。

「フェイトちゃんって名前なんだよね」

あの日に設けられた話し合いでキャスターが話した内容は色々と衝撃だった。だが、キャスターの話と状況からセイバー達は一つの結論を導き出した。それはランサー達の事情を聞きだし、何故ジュエルシードを求めるかを把握する事。

ランサーがジュエルシードを必要としているのにはフェイトが大きく関わっているのは間違いない。だからこそ、それを確認してから対処を決めるという事でセイバー達の見解は纏まったのだ。

「……ジュエルシード、何で必要とするんだろ？」

自分と同じぐらいの少女。それが何故ジュエルシードという危険なものを欲しがるのか。もし可能なら、それを聞いて手伝える事なら手伝いたいとなのはは思う。それはランサーというセイバーと似た存在がいるから。

きつと、その少女も自分と同じく寂しさを感じていたのだろうと思っただから。だから出来る事なら友達になりたい、となのはは思う。少女達がジュエルシードを集める本当の意味をなのはが知るのは、

その少女と出会って二週間程の時間が必要となる。

その頃、月村家では小次郎がいつもの格好で庭仕事をしていた。以前ライダーがまずかへ言っていた事を実行に移していたのだ。

「これでどうであろうか？」

「……良いかと思いますが、小次郎様はご納得していないのですか？」

「そうではない。この庭を一番知っているのはのえる殿である？ そなたの主観で判断して欲しいのだ」

小次郎はそう言うと言と視線でノエルへ再度問いかける。これでどうだと。それを理解し、ノエルは小さく笑みを浮かべて頷いた。それに小次郎も納得し、次の場所へと移動する。その後ろをついていくノエル。

今日も暖かい日差しと心地良い風が吹く過ごし易い一日だ。そこでノエルはふとこの後の事を考えて立ち止まる。ライダーは忍の護衛として出かけていったし、ファリンは別の場所で猫達の世話の真つ最中。つまり自由に動けるのは自分しかないのだ。

（私が小次郎様の昼食を用意するべきですね。ファリンに任せるのは少々不安ですし）

庭仕事の報酬という訳ではないが、小次郎へ食事を出す事は既に忍の判断で決まっていた。その支度を出来るのが自分しかない事を思い出し、ノエルは先を歩く小次郎を見る。

「小次郎様、申し訳ありません。私は屋敷の方へ戻らせて頂いてもよろしいでしょうか？」

「何か用事でも残っておったか？」

「いえ、小次郎様への昼食を準備しようと思ひまして」

「そうか。それはかたじけない。ふむ、ならば庭の景観は食事後に見てもらふ事にするか。のえる殿、気を遣わせてすまぬな。こちらは私の判断で終わらせておく故、後で判断してもらえるか？」

「かしこまりました。では、また後ほど」

そう言つてノエルは小次郎に背を向けて歩き出す。それを少し見送つてから小次郎も小さく笑みを浮かべて歩き出した。気配察知に長けるアサシンのクラスである小次郎。故に彼は気付いているのだ。ノエルとファリンが普通の人間ではないと。

しかし、それを知っているからこそ余計に思つのだ。彼女達はそう思わせない程に人間らしいと。特に妹であるファリンはライダーなどよりも感情の起伏が激しい。

不思議なものよ。かつて人であつた私よりもあの者達の方が余程人らしいとはな。

そう呟いて小次郎は愉快だとばかりに笑みを見せる。視線を上げればそこには輝く太陽がある。その日差しを浴びながら小次郎は願う。このまま大きな事が起きないままで日々が過ぎていく事を。

「でも、あれね。ユーノって歳に似合わず博学よね」

「そうなの？ どんな話をしたか教えてくれる？」

「遺跡発掘をしてたんだって。向こうの世界じゃその気になれば小さな子供でも働けるみたい」

忍の問いかけにさすがが答えた内容。それにライダーが少しだけ驚きを浮かべた。

「では、ユーノはもう働いていると？」

「はい。ジュエルシードを発掘した現場はあいつが責任者をしてたらしいし、結構大人達に信頼されてみたいですよ」

ライダーが尋ねた事にアリサがはつきりと答えた。それにライダーは感心した。そう、ライダーもユーノと既に顔だけは合わせているのだ。あのサーヴァント五人での話し合いの後、ユーノと偶然出会ったために。

どうもキャスターと同じような存在を見たかったようで、ユーノはメイド姿のライダーと作務衣姿の小次郎の姿を見ると、面食らった表情を一瞬見せてから我に返って挨拶をしたのだ。

だからライダーはユーノがどのような姿かは知っているが、どういふ事をしてきたかまでは知らなかった。あの少年が遺跡発掘の現場で責任者をしていたなどは想像さえしなかったのだから。

「うん。だから面白い話が聞けたよ」

「ま、まだ話のストックはありそうだし、また今度にも聞き出してやらなきゃ」

楽しそうに笑うアリサにすずかも笑みを浮かべる。次はいつ会えるのだろうと盛り上がる二人。そんな会話を聞きながらライダーはふと思う。

(ユーノ・スクライア……彼もスズカ達と同じく孤独を抱えていたとすれば、きっと今のようになったのはキャスターの存在が大きいでしょうね)

そんな事を考えるライダーの前でアリサとすずかは別れた。アリサは父と共に買い物へ行くために。すずかは忍と共にこのまま外出をするために。ライダーは念のためにアリサを父との待ち合わせ場所まで護衛する事になっている。

出来ればいつかユーノにもバイオリンを聞かせてやろうと笑顔で言い合って離れる二人。ライダーはすずかと忍を気をつけてと見送り、アリサと共に歩き出す。

父と久しぶりに過ごせると嬉しそうに語るアリサへ微笑みを返しながらライダーは相槌を打つ。すずかとは違う少女との仲も良好のようだ。二人はそのまま待ち合わせ場所まで会話を絶やす事無く歩くのだった……

「みーちゃん、ご飯食べたやるか」

「心配ない。今まで一度でも残した事があつたか？」

「ないなあ。あの子、ほんま不思議な子やな」

以前のような雰囲気は消え、今はすっかり大人しくなつてはやてもよく遊んでいる相手。結局首輪は付けてない。

「そうだな。何せ、首輪を付けるかという話の翌日には首輪をしていたからな」

「みーちゃんつて、実は飼い猫なんやけど毎回こつそり首輪外してたんちやうかつて思ったもん」

「それともこちらの言葉を理解し、飼い主に首輪を付けてもらったのかもしれない」

「冗談めいて言っているが、アーチャーはそう確信している。キャスターから得た情報が正しければ、みーちゃんはちゃんとした主人がいるのだから。」

そんな話を話しながら二人は笑う。いつものスーパーへ着き、買い物カゴをはやてが抱える。入口のチラシを改めて確認し、アーチャーが動き出す。そんないつもの流れ。

果物や野菜を目利きしカゴに入れていくアーチャー。それを見て、はやても目利きの勉強。たまにアーチャーから出される目利きクイズにはやてが頭を捻るのもいつもの事。最近は目利きも上達し、アーチャーの出題もかなりシビアなものになっている。



今回の鯖も本当に些細な差で見極めなければならぬ問題だったが、はやては何とか正解をもぎ取った。

「む、出来るようになったな」

「どや？ わたしも大したもんやろ」

既に一般的な小学生レベルを遥かに超え、はやての家事スキルは大人顔負けになりつつある。だがはやての目指すアーチャーや桃子はかなりの高み故、未だに彼女は自分が未熟と考えているのだから恐ろしい。

「では、そんなはやてに今日の夕食を任せよう」

「おう、それはええな。なら、助手のアーチャー君に献立は決めてもらおうか」

「そのまま作るはめになるので謹んで断る。昼食は焼きそばでいいか？」

「あ、目玉焼き乗せてな」

打てば響くような会話が出来て、軽口を言い合える相手。そして一緒にいて心地良い人。それがはやてのアーチャーへの評価。こんな他愛もないやりとりが、はやてにとっては何よりも大切な時間。

「ぬ、レジが混んでいるな」

「そやな。どこも並んどる」

混雑しているレジ。今日は休日。本来ならばアーチャー一人なのだが、はやてが今日は一緒に行きたいと言ったため、こうして買い物をしにきたのだが……

「邪魔になつとるかな？」

「気にするな。喋るカートと思えばいい」

アーチャーの発言にははやてのパンチが炸裂。それを笑みと共に受け止めるアーチャー。そんな光景を、周囲は微笑ましく見つめていた……

「原因不明の次元震、ね」

そう呟いてリンディはため息を吐いた。もうすぐ言い渡されるだろう辞令。それはつい最近起きた謎の次元震を調査せよとのもの。クロノとエイミーがアルクエイドを連れて地球に行くために休暇を取っている事を考慮して、リンディは三人に黙って任務を受ける事にした。

事件の概要を表示させ、リンディは今回の任務についての情報を整理していく。そこで一つ引っ掛かる部分を見つけ、その目が止まる。それは関係者についての記述。

「ロストログアの輸送船が巻き込まれたけど、乗組員は全員救助されたのね。それは凄くいい事なんだけど……」

そこまで眩き、リンディが目をやったのは一つの報告書。そこにはユーノの顔が表示されている。

「積荷がロストロギアな上に管理外に落下したと知り迅速な回収を要望したが、封印処理をしてあるからと動きの遅い管理局に痺れを切らし、渡航許可などを自力で取得し使い魔と共に単身行動、か。少し耳の痛い部分もあるけど、担当者の言い分も理解出来るわ。ユーノ・スクライア君は遺跡発掘の責任者としての気持ちは強いよねでも、良くも悪くも子供らしい決断だわ」

そう言ってリンディは楽しそうに笑った。実に年頃の少年らしい行動だと思ったからだ。きつとクロノならこっちは出来ないと思い、少しだけ苦笑。クロノならば合法的に管理局が動かざるを得ないような手段を考え、それを実行するだろうと考えたのだ。

「そうだわ。クロノが日本へ着いたら一応教えておきましょう。教えないと後で気にしそうですものね」

丁度うってつけのように落下したと思われる場所へ向かうのだ。少しぐらい奮戦する少年を助けさせてもいいだろう。そう考え、リンディは小さく呟く。

何かしら……少し嫌な予感がする。何事もないといいのだけど……

彼女は後に知る。そのジュエルシードが落ちた街に彼女が忘れる事の出来ないロストロギアも存在していると……



## 無印四話 前編

海鳴市を一望出来る高台。早朝という事もあり、そこには人気がなかった。ただなのはユーノ、セイバーを除いては。そこに立つのはバリアジャケット姿なのは。それを見守るようにユーノとセイバーが見つめる。

「じゃ、なのは

「うん。レイジングハート」

”フライヤーフィン”

魔力で出来た羽がなのはの体を空に飛ばす。飛行魔法。それはなのはの才能を信じたユーノが薦めたものの一つ。その読み通り、なのはは見事にそれを物にし、今や飛ぶ事に何の不安もなかった。

飛行時特有の浮遊感に笑みを浮かべつつ、なのはは意識を次の事へ移す。体の動きを制御しつつ、なのはは次の魔法を準備。今から試すのはある意味でなのはの成し得たかった事なのだから。

「いくよ、レイジングハート！」

”はい、なのは”

なのはの声にレイジングハートが答え、それに彼女は笑顔を浮かべる。本来ならばレイジングハートはなのはをマスターと呼ぶ。しかし、それを良く思わないのはは何度も言っただけを変えさせたのだ。

なのは、と。マスターではなく名前と呼んで欲しいと。主従では

なく、助け合う友人として。そんななのはの言葉にセイバーが出会った夜を思い出したのは言つまでもない。

”フラッシュムーブ”

レイジングハートが発動させた魔法は厳密に言えば高速移動魔法なのだろう。しかし、なのはが目指したものは御神の奥義である『神速』だ。昔から出来たらいいなと思っていた技。それを魔法ならと意気込んで考えた。

その意気込みを込めた発案をレイジングハートに告げ二人で完成させた魔法。それ故になのははこれを『瞬間移動魔法』と呼んで、レイジングハートと共に後で喜んだ。

「まさか本当に……」

「凄いや……やっぱりなのはは天才かも……」

そう、今回の練習はなのはの考案した新魔法のお披露目だった。それが危険ではないか、またちゃんと制御出来るのか。それを判断するためにセイバーがいる。だが、それ故にこの魔法が何を意図して考案されたか理解した。

だからこそセイバーは苦笑い。そう、セイバーは知っている。なのはが昔から羨ましそうに神速を駆使して戦う恭也達を眺めていた事を。

（本当にシロウ殿の子ですね）

肉体ではなく、魔法でそれを実現したなのはにセイバーはクスリと笑う。その視線の先には満面の笑顔を浮かべるなのはの姿があった……

「あれ？ 恭ちゃんにユーノ君……お出かけ？」

「はい。なのはと恭也さんとすすかの家に」

「ま、俺は付き添いみたいなものさ」

恭也の何となしに放った言葉に美由希の視線が鋭くなる。それを感じ、ユーノはそろそろと離れ出した。巻き込まれないためだ。それを察知した恭也はユーノを掴まえようとするが、それより早く美由希が動く。

「そんな事言つて、どうせ忍さんとイチャイチャするんでしょ！」

「お、おい。別にイチャイチャなんて……」

「いいなあ、あたしも恋人欲しいなあ」

ジト目の美由希。それに無言の恭也。だが、その視線は逃げたユーノへ向けられている。

（何とかしてくれっ！）

（無理ですよ！）

そんな視線のやりとり。高町家の女性は基本怒らせると怖い。特

に桃子には誰も頭が上がらない。余談だが、ユーノは女性陣から大事にされているので未だにそんな経験無し。それをこっそり妬んでいる恭也であった。

ちなみに恭也もユーノも知らないが美由希は密かに小次郎といい仲になりつつある。唯一アリサは何となく気付いているがそれをどうこう言う事はない。未だに自分の気持ちをはっきりとしない上に、相手はなのはの姉という事もあり黙認しているといったところだ。

一方、当の本人である小次郎は美由希がそういう対象として見ているなどとは知らない。今はただ、セイバーと同じ女剣士として興味を抱いているに過ぎないのだ。

「お待たせ」

そして、救いがないと絶望しかけた恭也を助けるべく天が助けを遣わした。出掛ける準備を終えたなのはがリビングに姿を見せたのだ。それに安堵するユーノ。恭也は顔にこそ出さないが内心両手を合わせ感謝していた。

美由希はそれを知ってか知らずか若干満足顔だったりする。ちなみにキャスターだがあの手伝い以来桃子に気に入られた事もあり、セイバーと同じように翠屋を手伝う事になった。

今はセイバーと共に笑顔で仕事をしている。セイバーは週四日程の手伝いでキャスターは週二日から三日程でシフトを組まれていた。最初は狐耳と尻尾を隠していたキャスターだったが、桃子がそれをアクセサリーとして周囲に認知させればいいと告げた事を受け、念のために誤認の魔術も使ってセイバーとは違った意味で看板娘となりつつある。

「よし、バスの時間も近いし、行くぞ二人共」



「はい」

「うん」

急いで歩き出す恭也とユーノ。それに不思議そうな表情のなのが続く。

（何があっただらう？）

そんな事を考えるのはだったが、状況も知らない彼女に答えが出せるはずもない。程なくして玄関に着き、靴を履いて歩き出す。

「いつてらっしや〜い」

出掛けるなのは達を笑って見送る美由希。それに手を振って応えるのはとユーノ。晴れ渡る青空。吹き抜ける春風。それを感じながらなのはは呟く。

……今日は良い事がありそう。

なのは達がバスに乗り込み月村邸を目指していた頃。海鳴の街に三人の人物がやってきた。一人は豊かな胸元を強調するような白いタンクトップにデニムのパンツというラフな格好。

もう一人の男も同じくラフなもので、白いTシャツにジーンズ。そして、そんな二人とは正反対に可愛らしい格好をした少女がいた。

青いブラウス、青いスカートという上下青で決めた金髪の少女。何故青で固めたのかは、それが敬愛する男のイメージカラーだろう。

「さてと、これからどうすんの？」

周囲を見渡し、アルフが軽い口調で問いかける。

「ま、まずは探索魔法だったか？ あれを使って調べてくしかねえ」

それを受け、ランサーがあっさりと返事をして首を解すように動かしだした。

「そうだね。じゃ、どこか人目に付かない場所を探さなきゃ」

フェイトの言葉に二人は頷き、ゆっくりと歩き出すのだが。

「あ、ハンバーガーだよフェイト」。少し早いけどお昼にしようよ」

「お、あつちはフライドチキンがあるじゃね〜か。なら、こっちでサイドメニューと行こうぜ」

歩き出して早々、駅前の飲食店に持ち前の食欲を剥き出しにする二人。そんな二人へフェイトは慌てるように首を横に振る。

「だ、ダメだよ。まだ何もしてないし、朝ご飯食べたばかりだよ！」

そんなフェイトの正論も空しく、ランサーとアルフの要求は止まる事はなかった。結局フェイトが折れる事になり、少しどころかかなり早い昼食を買ってそれらを食べる場所を探す事になるのは、彼女にとって後の良い思い出となるのであった。

こうして海鳴の街へ遂に六人目のサーヴァントが到着する。彼はまだ知らない。ここにかつて刃を交えた相手が四人もいるとは。更に輸送船で出会った相手もいる事も。

そして、いずれここへ現れる最後のサーヴァント。実はそれら全てが揃う事こそがある結末を引き寄せるために必要だとは、この時誰も知り得なかった……

大邸宅と呼んで差し支えない月村家を前にユーノは立ち尽くす。それを恭也となのはが微笑みながら見つめていた。それは大抵の間がこうなる事を分かっているからだ。それと同じリアクションをした二人だからこそ、ユーノの気持ちは良く分かる。

そんなユーノに声を掛け二人は歩き出す。立派な玄関に辿り着きベルを鳴らす恭也。それを待つていたかのように扉が開き、ノエルが顔を出した。

「お待ちしておりました。恭也様、なのはお嬢様。そして、ユーノ様ですね。お名前はすずかお嬢様から伺っております」

恭しく頭を下げるノエルに恭也となのはは笑みを浮かべる。

「久しぶりだな、ノエル」

「お久しぶりです、ノエルさん」

「ええつと……初めまして。僕、ユーノ・スクライアです」

そのノエルのメイド然とした振る舞いと雰囲気、唯一彼女と初めて会うユーノだけが動揺していた。その様子にノエルは楽しげに笑うと仰々しい程の自己紹介をした。

「お初に御目にかかります。私、月村家のメイド長をしております、ノエル・K・エアリヒカイトと申します」

それに益々困るユーノに、なのはも笑みを浮かべて「気にしなくてもいいよ。ノエルさんはこういう人だから」と告げた。それに恭也も頷き苦笑い。その内慣れる。そう言って恭也となのはは歩き出す。

既にノエルがその前を案内するように歩いているのを見て、ユーノも慌ててその後を追う。しかし、その視線はあちこちを珍しそうに見つめているのだった。

「なのは達、そろそろ来るかな？」

「うん。もう来るんじゃないかな？」

「……相変わらずずかずかちゃんちは猫屋敷やな」

優雅にファリンの淹れた紅茶を飲むアリサとずずか。それぞれの膝には当然のように猫が乗っている。かくいうはやてもその膝に猫を乗せているのだが、一匹ではなく二匹なのが二人との違いだ。

猫達を優しく撫でながらはやては周囲を見渡す。見渡す限り、そこかしこに猫がいる。どれもノンビリしている光景に笑みを浮かべるはやて。出来る事ならみーちゃんをここへ連れて来たいと思っっているのだが、人様の猫と分かってしまった以上それが出来ないのだ。

「みーちゃんもここやつたらお友達沢山出来るのに……」

「そうだね。でも、里親が決まってる子もいるからいつまでもとはいかないかも」

「あゝ、お別れが近い子もおるちゅゝ事が」

「ま、それでも猫天国には変わらないわ」

「ですね」

アリスの言葉にはやても頷く。すずかはそれに苦笑一つ。そしてその横のファリンが笑顔でそう同意する。そのテーブルの横では、忍とアーチャー、それにライダーが談笑していた。

まあ、もっぱら話しているのは忍で、二人は紅茶のお代わりを注いだり猫の相手をしながら相槌を打っているだけなのだ。ちなみにアーチャーは、来た途端にライダーから無言で手渡された執事服を着ていたりする。

これが月村家でアーチャーが過ごす時の決まりになったのは今から一年と半年前。はやてのお泊り会の礼だと言って、その日の夕食をアーチャーが作った際、給仕から何まで完璧にこなす姿を見て忍がはやてに持ちかけさせたのが始まり。

以来、アーチャーが来るたびにこの執事服が定番になった。無論、彼は必死に抵抗した。だがそれも忍の強権とはやての懇願の

名を借りた半ば脅迫により失敗し、彼はもう抗う気もなくして今に至る。

余談だが、アーチャーは執事服を着せようと迫る忍とはやてにかつての魔術の師である”あかいあくま”と、とある縁で知り合った名門魔術師である金髪令嬢の”きんのあくま”の姿を見たとか。

彼女達もアーチャーに執事服をよく着せようとした。それをおぼろげに思い出し、懐かしさを感じたアーチャーは渋々を装って執事服を着る事にしたのだ。それを知る者は生憎ここにはいないため、真相は誰にも分からないのだが。

「失礼します。恭也様達がお着きになりました」

「恭也」

控えめなノックと共に開かれたドア。そこからノエルが現れ、その後ろから恭也の姿が見えた途端、忍は席を立つ。それに息を吐くライダーとアーチャー。小声で「やっと開放されました」とか「まったくだ。私は相談員ではないぞ」などと言っているが、それは幸い忍には聞こえていない。

「お、おい忍」

「じゃ、私達は部屋に行ってるから」

「ふふ、では後でお茶をお持ち致します」

抱きつくように恭也に寄り掛かり、その腕に自分の腕を絡め、忍は笑顔でそう告げて歩き出す。その光景を微笑ましく思い、ノエルは笑みを浮かべて言葉を返した。そんな光景を眺めてしみじみとは

やてが呟く。

「なんや、見せ付けられたな」

言葉にこそしなかったが、なのはやアリサはうんうんと頷いた。それにすずかは苦笑い。ユーノはそんな光景を横目にアーチャー達の下へ。そしてノエルとファリンはドアの前で一礼し、お茶の用意をするべく去った。

「こんにちは、アーチャーさん。お久しぶりです、ライダーさん」

「ああ」

「久しぶりですね。元気そうでしたです」

ユーノとライダーが出会ったのは、あのサーヴァント五人による高町家道場で行われたその会議の後。それ以来となるのだから久しぶりとの言葉は相応しいと言える。

ちなみにライダーが元気そうでしたと言ったのは、ユーノがセイバー達と鍛錬を行っているのを聞いているからだ。それをセイバーから聞いた際にライダーが「殺さないように」と真顔で告げ、いつかの戦いを再現しそうになったのは二人だけの秘密。

「アーチャーさんはやての付き添いですか？」

「ああ。……後はファリンの指導だ」

「本当に助かっています。アーチャーが教えるようになってから、ファリンのドジも大分減りました」

事の始まりは、アーチャーが初めて月村家で働いたその日。ファリンがその動きに感動し、弟子にしてほしいと申し出たのだ。無論アーチャーは断ろうとしたのだが、ファリンの懇願とノエルや忍からも頼まれれば嫌とは言えなかった。

それ以来、暇を見つけてはファリンの家事の先生じみた事をしてきた。と言つても、はやてが勉強をしている午前限定だが。それでもファリンは少しずつではあるがドジの頻度を下げていったのだから大したものだろう。

そこから世間話を始めるユーノ達とは対照的に、なのは達は関心を話ではなく猫に注いでいた。

「にはは、ホント人懐っこい子ばかりだね」

「アタシも欲しいけど、犬がいるからなあ」

「わたしは毎日遊びに来るみーちゃんです。でも、こうして遊んどると飼い猫も憧れるな」

「もしその気なら誰か貰ってくれていいから。いつでも言って」

それぞれ膝に猫を乗せ、楽しそうに撫でたり抱えたりするのは達。とそこへお茶の用意を済ませたファリンが戻ってきた。それを見ながらなのはが尋ねる。

そういえば今日はライダーは働かないのかと。ライダーはそれに些か苦笑した。そしてその視線をすずかへ動かして告げる。

「スズカが今日はお休みだと言うものですから……」

確かにそう言うライダーの格好は普段のメイド服ではなくTシャ



ツにジーパンというものだ。なのはとユーノはその格好に納得し頷いた。だから格好が普段着だったのかと。

その横でファリンがアーチャー監視の下紅茶を注いでいく。その目はいつになく真剣だ。一つ一つの所作に全身全霊で挑むファリン。それを見ているすか達もどこか緊張している。やがて全てのカップに紅茶を注ぎ終わり、ファリンは小さく「よしっ」と呟いた。

「皆様、どうぞ」

笑顔で告げるファリン。それに笑みを浮かべるすか達だったが、ライダーは苦い顔でアーチャーは呆れ顔。そんな二人を見て何かミスでもしただろうかと思い、ファリンは不思議そうに小首を傾げた。その彼女へアーチャーが告げたのはその予想の斜め上。しかし、言われれば当然の内容。どこかライダーも察しているのだろう。表情が苦いものから渋いものへと変化していた。

「もてなす相手を緊張させてどうする」

「あつっ！」

正論と言えば正論。それが理解出来たファリンはシヨンボリと肩を落とし、ライダーの傍へ近寄って。

「お姉様　っ！」

泣き付いた。いじめられた子供のよう。それをライダーはどこか苦笑しながら受け止める。

「分かっていますよファリン。貴方は頑張りました」

「私、私い……一生懸命やったのに〜！」

そう言っただライダーの胸に顔を埋めるファリン。それを優しく撫でるライダー。そんな光景を微笑みながら見つめるのは達。アチャーはやや慥然としているが、はやてはファリンを見て「……ええなあ」と呟いていた。その理由は……言うまでもない。

「ホント、平和だな」

そんな光景を見て噛み締めるようになるのはは呟くのだった……

「穏やかなとこだね、ここ」

「そうだね」

アルフの言葉にフェイトは頷いて笑う。ここなら母さんも少しは良くなるかな。そんな思いがフェイトの中を一瞬過ぎる。だが、それは出来ない。リニス曰く絶対安静なのだ。

そう思い直し、フェイトは拳を握る。早くジュエルシードを集めて何が何でもプレシアに届けなければ。そんな風にフェイトが考えて拳を握る。すると。

「ま、早いとこジュエルシードを見つけねえとな」

そんな軽い声が聞こえてきた。ランサーはそう言っただクビを一つ。おかげで緊張感の欠片もない。それを見て、フェイトは握り締

めていた拳から力が抜けていくのを感じた。

そう、フェイトとアルフは知っている。それがランサーなりの気遣いなのだと。無駄に力む事無く事に当たれるように。それを分かっているから、二人は笑みを浮かべて頷く。

「でも必要以上に焦る事はないんだよね。下手な事したら、その方が問題になるんだしさ」

「そういつこった。それによ、俺達が本気になれば出来ない事はねえ。だろ？」

「うん、そうだね。ランサーの言う通りだと思う。今は出来る事をやるだけだ」

揃って笑顔のままフェイト達は言葉を交わす。余計な力を抜くように。適度な緊張感を保つために。時間の余裕は多くはない。しかし、だからと言ってそこまで切迫している訳でもないのだ。それを考え、それぞれが逸りそうになる心へブレーキをかける。

そこへ優しい風が吹く。微かに海の匂いを含んだ風が。それを感じ、ランサーが笑みを浮かべ、アルフは顔をしかめる。潮の香りが鼻をおかしくしそうだからだろう。そんなアルフを見てフェイトは小さく笑う。

その光景がとても嬉しく思えたのだ。見上げた空はどこまでも青く広がっていて、吸い込まれそうな印象さえ受ける。そんな感想を抱いてフェイトは呟いた。

……今日は良い事がありそう。

それは奇しくもなのはが呟いたのと同じ言葉だった……



## 無印四話 後編

月村家の庭にあるテーブル。そこに座り、なのは達は談笑していた。話題はもっぱら連休中の旅行についてだ。何をするかや何を持っていくか等、止まる事なく話が弾む。会話の中心はアリサとはやて。それになのはがたまに加わり、すずかとユーノは時々訂正や抑え役になっている。

「やっぱりトランプは必須でしょ！」

「いや、ここはドローンとボードゲームや」

「UNOとかはどうかな？」

「オセロとかもいいと思うよ」

「…………ごめん。卓球、っていうのはダメかな？ やってみたいんだけど…………」

はやての方を気遣うように見ながらユーノが言うと、一瞬なのは達が驚き互いに顔を見合わせる。車椅子のはやてを気遣えばあまり歓迎出来るものではないからだ。

「はやて、どうっ？」

「せやなあ、確かに温泉言えば卓球や。うむ、ユーノ君の提案を許可する」

偉そうな口調で言い切るはやてに全員が笑顔を浮かべた。すぐに

ユーノが感謝を込めた声で礼を述べれば、気にしなくていいとはやてが笑い、そんな態度にすずかが微笑む。なのはもはやてが気にしていない事に安堵したのだが、何かを思い出したかすぐに苦い顔となった。

それに目ざとくアリサが気付き視線を向ける。その目はどうしたのかと尋ねていた。すると、なのはは周囲へやや真剣な顔を見せて告げた。

「私、その時ははやてちゃんと見学してるね。ほら、一人じゃ退屈だし話し相手をしたいの」

「あー、なのはちゃんの気持ちは嬉しいけど、そんな心配いらへんよ。わたしも卓球やつたるから！」

「え……その、あ、危ないから念のために止めといた方がいいと思うなあ」

そのどこか情けない声に四人が笑う。それはなのはが言った言葉の裏まで理解しているから。なのはは運動音痴。そしてはやてが一人参加出来ないと考え、乗り気でなかったのも手伝って見学を申し出たのだ。

それを四人が察していると分かり、恥ずかしそうにしながらもなのはは拗ねた口調で笑わないで欲しいと呟いた。そんななのはの言葉が余計に四人の笑いを誘った。

そんな友人達の反応になのはが軽く怒り、それに笑いながらではあるがユーノとすずかが謝ろうとする。だが、アリサとはやてはそんななのはを指差しておかしそうに笑った。

そんな五人の様子を離れた場所から眺める者がいた。ライダーだ。

彼女は楽しそうに笑い合う五人を見て微笑む。

( いいものですね。願わくば、こんな時間がずっと続いてくれればいいのですが…… )

そう思ってライダーは首を振る。こみ上げる不安を振り払うように。あの日、キャスターからジュエルシードの話を聞いた時、ライダーもセイバーと同じ発想に辿り着いた。

即ち、自分達が召喚されたのは世界がジュエルシード暴走に備えたものなのではないのか、という推測に。無論まだあの本が無関係と決まった訳ではないが、ライダーは周囲がキャスターの話を聞いた時同じような事を考えたのが分かった。

だからこそ、ジュエルシードを一刻も早く回収しなければとの思いが強かった。しかし、今日ここに残っていたのには訳がある。そう、一つ気がかりがあったのだ。

それはすずかの事だった。最近あまり遊んでいない事もあり、今日は休みと言われたのですずかと接するべきかと思つてここに残っていたのだ。だが……

( あの様子なら構わないかもしれませんが )

ライダーの視線の先には、なのはに心から謝っているすずか達の姿があった。その親しげで楽しそうな雰囲気を確認し、ライダーは静かにその場を離れる。

行つてきます、スズカ。

誰ともなく呟き、ライダーはその身を宙へ躍らせる。探索に出かけ、ジュエルシードを見つげるために。一刻も早くすずか達が平穩

な日常を過ごさせるようにと願いながら。

同じ頃、厨房にはアーチャーに指導されるファリンの姿があった。

「変に力むな。肩の力を抜け」

「は、はい」

優しくファリンに声をかけるアーチャーだが、ファリンはどこか緊張している。それを内心微笑ましく思いながらもアーチャーはため息一つ。これでまた同じミスをやらかすと悟ったのだ。

仕方ないか。そう言うようにため息を吐いてアーチャーはファリンの背後に立ち、その手を優しく支えた。

「えっ……？」

「いいか？ 下手な力はいらん。ただ、心を込めて注げばいい」

「あ、はい」

「君は張り切りすぎるくらいがあるからな。少し気を抜くぐらいで丁度良い」

そう告げ、アーチャーはそっとファリンから離れる。それに気付かぬまま、気負っていない表情で紅茶を注ぐファリン。心なしかどこか楽しそうにも見える。



(……もしかしたら、凜のうっかりも変な力の入れようが原因かもしれん)

ファリンの姿を見ながらそう考え、そんな事はないかとアーチャーは微かに笑う。例えそうだとしても、もうおそらく会う事はない相手だ。ならば、こんな事を考えても仕方ない。そう結論付け、アーチャーはファリンへ視線を戻して言い放つ。

「今のは中々良かったぞ、ファリン。今の感じを忘れるな」

その声でファリンは既にアーチャーが離れている事に気付いて振り向いた。アーチャーはそんなファリンの行動でそれを悟ったように、やや苦笑する。

「な、何で笑うんですか？」

「いや、実に君らしいと思ったただけだ」

「それって褒めてくれてるんですよね？」

「さてな。さ、ではもう一度だ。飲んでくれる相手の最高の笑顔イメージしろ。いつでも目指すものはそれだ」

真面目な表情でファリンへ告げるアーチャー。その言葉にファリンも元気よく頷いた。弓兵アーチャー。だが、その言葉と格好も相まってか、その在り方はどう見てもアーチャーではなくバトラーだった……

ここ忍の部屋では、恭也達が優雅に紅茶を飲みながら外の声に笑みを浮かべていた。視線を動かせば、そこには楽しそうに語らうなのは達の姿がある。

「外は賑やかみたいね」

「そうだな」

「すずかお嬢様も、ご友人が増えて楽しそうで何よりです」

忍の言葉に恭也とノエルも笑顔で答える。ただノエルは微かに困ったように笑い「些か元氣過ぎる時もあります」と続けた。それに忍は苦笑しながら頷いた。

昔はどこか内向的だったすずかだったが、なのは達と友達になつてからというもの見違える程に外に出るようになった。特にはやてと仲良くなつてからは彼女の家によく遊びに行くようになった事も大きい。

すずかは歩ける事が幸せな事だとはやてと接して十分理解させられたのだ。故にすずかははやての分まで歩こうというくらい活動的になつたのだから。

「しかし、ユーノの奴も大変だな。すずかちゃんはともかく、アリサちゃんはやてちゃんはいつもパワフルだからな」

「そうね。でも、それぐらいどうにかできないと恭也には勝てないわよ」

「……怒った母さんを止められるなら、俺は負けを認めてもいいな」  
「桃子様が怒る事などあるのですか？」

ノエルの問いに恭也と忍は無言で頷く。心なしかその顔は青い。恭也は語る。桃子の数少ない怒り話を。それを不思議そうに聞くノエル。忍は恭也の横で若干震えていたりする。

それは去年のクリスマス。忍も手伝い、翠屋は大忙しだった。事件の内容を簡単に言えばこう言う事だ。

「酔っ払いがやってきてな。そいつがセイバーに絡んだ。セイバーは何とか穏便に済ませようとしていたんだが……」

「その男が、事もあるうにセイバーを突き飛ばしたのよ。恭也も土郎さんも運悪く接客中だったもんだったから」

「それを見ていた母さんが黙ってその酔っ払いの前に満面の笑顔で立ちはだかった。ただそれだけだ。それで誰も動けなくなっただ。やや酔いが醒めたのか怯える相手へ母さんはこう言っただ……」

そこで思わず息を呑む恭也と忍。思い出しているのだろうか、その表情は少しだけ青い。

私の娘に何て事してくれるんですか。早く出て行ってもらえないと大変な事になりますよ……

恭也と忍は声を揃えてそう言うと、何かを思い出したのか少し震えた。

「……警察を呼ぶ、ではないところに言い知れない恐怖を感じますね」

ノエルの呟きに二人は何も言わず、ただただ頷くだけだった……

「ほらほら、ここがいいの？」

「おっと……ごめんね。今のは嫌だった？」

盛り上がっていた話も落ち着き、五人はそれぞれ猫を相手に過ごしていた。ユーノも恐る恐るだが猫の相手のやり方を少しずつ覚えていた。時々なのはやすずかから助言を貰い、ぎこちなくだが猫を触っている。

「はあ、癒されるな」

「ふふつ、そう言ってくれると嬉しいな」

「にゃ、どこ行くの？」

まったくと寛ぐはやてにすずかが笑顔で答えた横で、なのはの抱えてた猫が突然逃げ出すように走り出した。それを追いかけるようになのはも走り出す。そんな微笑ましい光景に四人も笑みを浮かべ合った。

「なのは、僕もついてくよ」

「じゃ、アタシも。丁度いいし、軽く動くと思いますか」

「賛成や。少しは自然と触れ合わんと」

「じゃあ、私が車椅子押してくね」

単純に好意からなのはの心配をしたユーノに続くようにアリサが立ち上がる。それに呼応してはやてが頷くとすずかも楽しそうに立ち上がった。四人は先を走るなのはを追う形でその後ろを歩き出す。その視線の先でなのはが転びそうになるが、それを何とか踏み止まった。そのバランス感覚に四人が思わず感嘆の声を上げる。それを聞いてなのはが少しだけ自慢そうな笑みを返すも、猫の事を思い出して慌てて走り出すのだった。

「っ!？」

「フェイト!」

なのは達が猫を追いかけて走り出した頃、ジュエルシールドが発動した。その反応をフェイトは感じ取り、表情を一変させる。精神リンクしているアルフもそれが何かを感じ取ったようでフェイトを見つめている。

「ジュエルシールドか」

ランサーの声に無言で頷くフェイト。それにランサーは目つきを鋭いものへと変える。アルフも既に先程までのノンビリムードではなく獐猛な表情をしていた。そんな二人の変化に呼応し、フェイトも表情を厳しいものに変えて視線を動かす。

見つめる先は反応のある場所。周囲に人がいない事を確認し、フェイトは呟く。

「バルディッシュ、セツトアップ」

” イエッサー ”

黒いバリアジャケットに身を包みフェイトは空を翔ける。それに続くようにアルフも舞い上がった。ランサーは最速のサーヴァントたる速度でそんな二人を追う。その三人の視界の先に程なくして大きな屋敷が見えてくる。

(待ってて母さん。すぐにジュエルシードを集めて帰るから!)

フェイトが月村家に辿り着こうとしていた頃、なのは達は目の前の状況に戸惑っていた。ジュエルシードが発動したのを感知し、念のためと接近戦の出来るセイバーへ連絡したのだがその直後目の前に現れたのは、事もあるうに巨大な猫だったからだ。

「……ねえ、これがジュエルシードって奴の影響なの？」

「う、うん。どうもあの猫の大きくなりたいてって願いに反応したみたい」

呆れるようなアリサの言葉にユーノはどこかバツが悪そうに答えた。それもそうだ。何せ、ジュエルシードが発動して生まれる相手

は大抵厄介と思わされる要素があつたと話していたのだから。

よつて困惑するユーノ。その後ろでははやてとすずかが猫を見上げてている。だがその表情は揃つて感心するようなものだ。

「おゝ、これだけ大きいと餌とか大変や」

「そうだね。でも背中に乗つてお昼寝とか出来るよ」

「あ、それはちよいいいかもしれん」

「ね。あ、だけど遊び相手はライダーじゃないと無理そう」

「そ、そんな事言つてる場合じゃないよ、二人共」

ノンキに話すはやてとすずかに若干脱力しかかるのはだが、視線をすぐに猫へと戻す。猫はなのは達を見て楽しそうに鳴き声を上げるだけで、まったく危害を加える様子はなかった。

その光景に思わず誰もが笑みを浮かべる。だが、なのははそれを振り払うように首を振った。安全だとしてもこのままでいいはずはないと気付いたのだ。

(元に戻してあげないと不味いなあ。見世物とかになつちやうし)

なのはがそう考えてレイジングハートを握り締めた瞬間、ユーノが結界を展開した。色褪せていく景色にアリサ達が軽い驚きを見せる。

「なのは、これでいいから。早く封印を」

「うん。レイジングハート」

”スタンバイレディ。セットアップ”

これならセイバーを呼ぶ必要も無かったかもしれないと思うのはとユーノ。レイジングハートが輝いた瞬間光に包まれ、一瞬にして姿を変えたなのは。その光景を見ていたはやて達が歓声を上げる。そして、なのはが早速封印をしようとした時だ。後ろから何かが近付いてくる感覚をなのはは覚えた。だからだろう。それが無性に気になった振り返ったのだ。すると、その視線の先には。

「魔導師……？」

「しかも、あの時の小僧も一緒かよ」

「げ、何か子供が大勢いるよ」

三人の人物がいた。その中の一人になのはは強く心奪われる。黒いバリアジャケット、金色の髪、そして　どこか助けを求める瞳に。

一方のフェイトも、なのはの姿に何か心惹かれるものを感じていた。自分とは正反対の白いバリアジャケット、栗色の髪、そして　どこか優しげな瞳に。

「「貴方は……誰？」」

出会いは突然に。この日、なのは達はフェイト達と対面した。そんな互いの問いかけに二人は目を丸くする。まったく同じ言葉を、同じ様に聞かれたのだ。

それで驚いたのはなのはとフェイトだけではない。ランサー達や



ユーノ達も面喰らっていた。特に一度は完全に敵対する状況で出会ったランサーとユーノは。

（初対面の相手に警戒心もなしかよ。フェイトらしいっちゃあらしいが……）

（初めて会った時より心なしか表情が柔らかい……？ でもどうして……）

戸惑う一同を猫の声が現実に戻す。それになのはとフェイトも視線をそちらへ移し、それぞれデバイスを構えた。

「とりあえず……」

「今は封印が先、だね」

頷き合うように声を掛け二人は告げる。

「レイジングハート」

”シーリングモード”

「バルディッシュ」

”シーリングフォーム”

その声に応じ形を変えるレイジングハートとバルディッシュ。それを見て感嘆の声を上げるはやて達。一方、警戒するようにランサーとアルフはなのはから視線を外さない。ユーノもフェイトから目を逸らす事無く見つめる。

その視線の先で二人による封印が終わろうとしていた。本来ならば手を貸し合うはずではなかった場面での協力。二人の魔法少女が思うは猫を元に戻して助ける事とジュエルシードを封印する事。

「リリカルマジカル！」

「ジュエルシード、シリアル14！」

”封印”

光がリボンのように猫を包み、雷がその周囲を覆う。そしてそれが共に消えた時、そこには元の大きさに戻った猫とジュエルシードが残されていた。それを確認するや、フェイトが弾かれるようにそこへ向かいジュエルシードを回収する。

「これで、やっと一つ」

嬉しそうに呟くフェイト。だが、それを見てユーノが思いの丈を込めて尋ねる。

「どうして君達はジュエルシードを必要とするっ！　それがどんなものか知ってるの！」

「それは……」

「ランサーさん！　聖杯を知る貴方はアレの危険性を知っているはずだ！　それに願うものもない貴方が何故ジュエルシードを？」

気まずそうに顔を伏せるフェイト。いくら母親のためとはいえ人の物を盗もつとしている。そんな罪悪感が彼女の口を塞いでしまう。

それを見て、ユーノの質問の矛先はランサーへと移る。それはセイバー達から聞いた彼の話も影響していた。

根は優しく正義感溢れる漢。そうセイバーが断言した。故にその彼なら答えてくれるとユーノは思った。それに答えてくれるだろう単語も含めたのだから間違いないと。

「聖杯に願うものがないだと？ 小僧、お前のサーヴァントがそれを教えたのか？」

「いえ、キャスターじゃない。僕にそれらの事を教えてくれたのはセイバー達です」

「なっ?!」

ユーノの口から告げられた名前にランサーは思わず表情を変える。彼が聖杯に願うものはないと知っている相手がいるとすれば、それはあの聖杯戦争を戦った者しかない。その条件で言うセイバーとは、彼があの日本家屋の庭でやりあった相手しかない。

そう気付いてまさかとの思いを抱くランサー。そこへ響く声があった。

「そっだよ！ 理由を聞かせて！ どうしてジュエルシードが欲しいの?!」

フェイトへ懇願するようになるのはが叫ぶ。先程の封印作業。その時分かったのだ。フェイトも優しい心の相手だと。それだけではない。もう一つフェイトを信じる理由がなにはあった。それは……

(あの子。確かフェイトちゃん、だよ。すごくキレイな目をしてた)

悪人の目はどこか濁りがある。そうセイバーや士郎は言った。ならば彼女はそうではない。必ず理由があるはずだ。そうなのは思うからこそ問い質す。何故犯罪に手を染めてまでジュエルシードを求めるのかを。

そうですね。それは私も是非聞かせてほしいです。

……マジかよ。

突如として辺りに響いた声。その声に聞き覚えがあったランサーは視線を向けて複雑な声を上げる。彼の視線の先には青いドレスの騎士がいたのだ。

「……セイバー（さん）！」「……」

姿を見せた完全武装のセイバーに驚きを隠せないフェイトとアルフ。それとは対照的に喜びを見せるのは達は、セイバーを先頭に集合する。片やランサーを前に立て、なのは達を見つめるフェイト達。アリサとアルフが牽制するために睨み合おうとするが、それをすずかとフェイトに窘められて渋々従っていた。

「……まさか本当にお前がいるとはな」

「私だけではありません。ライダーにアーチャー、アサシンもいます。それに貴方が出会ったキャスターもです」

「そうかよ」

セイバーの言葉にランサーは一縷の希望を見出し始めた。凜達魔

術師はいないがセイバー達サーヴァントがいる。ならばまだ手はあるかもしれない。

だがそこでランサーは疑問に思った事があった。セイバーの挙げた名前の数である。そう、何せ揃い過ぎているのだ。後一つクラスがいれば七騎勢揃いとなるのだから。

「おい、バーサーカー以外全員いるってのか？」

「……ええ。バーサーカーは確認出来ていませんが、この海鳴に六騎も揃っています」

その瞬間、ランサーは舌打ちをした。気付いたのだ。自分が知らず世界の手のひらの上で躍らされていた事に。ジュエルシードを狙い、ここへ来る事。それ自体が予定調和だったと。

「なら、この召喚はやっぱりそついう事か」

「……断言出来ませんが可能性はあります」

セイバーの苦い声にランサーは頷いて沈黙した。と、そこでふと視線を感じたので顔を動かした。そこにはなのはがいた。自分が見られている事に気がついたのか、なのはは若干驚いた表情を見せると戸惑いながらも笑みを返した。

今度はそれにランサーが驚きを感じ、小さく笑みを浮かべる。直感で感じたのだ。いい女になると。故につい笑みを見せたのだ。

(へえ、結構将来有望そうじゃね〜か)

(な、何だろう？ 何か変な事したかな？)

そんな風に互いを見ているのはとランサーだったが、その彼の視線を快く思わないセイバーがやや大きめの声で問いかけた。

「それで、何故貴方がジュエルシードを集めるのです」

「……ま、簡単に言えばこいつのためだ」

そう答え、ランサーがフェイトの頭に手を置く。それになのは達の視線が一斉にフェイトへ向けられた。それに若干の恥ずかしさを感じ、フェイトは顔を伏せた。そんなフェイトの様子に笑みを浮かべるなのは達。

セイバーはそんなフェイトを眺めて内心頷く。想像していた通りだと。ランサーの目的が自分のためではなく他者のためだった事だ。そして、その相手も見たとこ悪人と言う訳ではなさそうだ。だからこそ余計に聞かねばならない。そう思ってセイバーは視線を少しだけ鋭くした。その迫力にアルフが半歩退いた。しかし、ランサーはやや苦笑していた。セイバーのしている事は逆の立場なら彼がやっている事なのだ。

「では、ジュエルシードを何に使うつもりです」

「あゝ、それは」

どう答えるべきか。そうランサーが思った瞬間だった。

母さんが病気なんです！ それを治すには、もうジュエルシードしかなくなつて……

ランサーの言葉を遮ってフェイトが叫んだのだ。それに込められ

た思いが嘘偽りない本物だとセイバー達には感じられる程に。何故なら、そう叫んだフェイトの表情は深刻且つ焦燥感が色濃く見えたのだ。

それに間違いはないか。ランサーへそう問いかけるような視線を送るセイバー。それをどこかバツが悪そうにだがランサーは頷く。そんなランサーの態度にセイバーは何かを直感で感じ取るが、それを敢えて聞かずに告げる。

「……いいでしょう。信じる事にします」

「セイバー、お前まさか……」

「ユーノ、どうですか？ 何とかならないでしょうか」

そんなランサーの声に対してセイバーは鎧を消し、自分にもう戦う意思はないとばかりに視線をユーノへと向ける。それにユーノはどこか考えながら告げた。

「病気を治したいって事なら……おそろくだけど暴走の危険性もないと思う。健康な状態に戻りたいって事だから」

「まあ、確かにそれで暴れる事はないかもしれないけど……」

「健康についてお願いして暴れ出したら、本末転倒よね」

そうアリサがすずかの言葉に続き、はやてとなのはが頷く。

「でも……あくまで推測に過ぎないし、ジュエルシードでどこまで効果があるかは分からない。それにジュエルシードは基本的に危険物なんだ」

「そうですね……ユーノ、ではどうします?」

「元々封印して保管するつもりだったけど……人助けみたいだし、ね。おそらく不治の病……なんだね。それなら確かにジュエルシードみたいな危険なものにでも縋りたくなるよ」

ユーノは途中でフェイトへ視線で問いかけ確認を取る。その力なく頷くフェイトを見て、ユーノは理解を示した。周囲の視線がそんな彼へ集中する。あくまでジュエルシードはユーノの物だと思っ  
ているからだ。

そんな気持ちを察してユーノはやや考え込む。ジュエルシードは管理局へ保管を頼んだロストロギア。だが、それでは救えない命があると聞いて見捨てる事が出来るユーノではない。

(どうする? ロストロギアの個人使用は色々と問題がある。でも、それでしか守れない笑顔が、命がある。僕は……どうしたい?)

周囲を静けさだけが包む。やがてユーノは大きく息を吐いて顔を  
上へ上げた。そしてなのはへ視線を向けて苦笑する。その意味を理  
解し、なのはは笑って頷き、レイジングハートに告げた。

「レイジングハート、ジュエルシード出して」

” いいのですか? ”

「うん。困ってる人を助ける力があるなら迷う事無く使いなさい、  
だよ」

” 分かりました。なのはがそう言うなら ”



そうして放出される二つのジュエルシード。それをなのはとユーノがそれぞれ手に取り、フェイトの方へ歩き出す。それを呆然と見つめるフェイトとアルフ。ランサーはなのはとユーノに一瞬だが衛宮士郎と遠坂凜の姿を見た気がして目を見開いた。

(……へっ、そうか。セイバーのマスターは相変わらずのお人好しで、あの小僧は思い切りの良さが嬢ちゃんに似てやがるのか)

自分が見た錯覚の理由を理解してランサーが小さく苦笑する中、フェイトは自分の目の前でジュエルシードを差し出す二人に戸惑っていた。

「えっ……?」

「本当ならダメだけどこれで助かる命があるなら、ね。でも暴走の可能性がない訳じゃない。だから、使う時は絶対に言って欲しい。僕だけじゃない。キャスターも力になるから」

「私とセイバーもだよ。……お母さん、治るといいね」

戸惑うフェイトに微笑んでジュエルシードを手渡すなのはとユーノ。それを反射的に受け取り、フェイトは少し呆然とそれを見つめる。しかし、ややあってから我に返って顔を上げると二人を歓喜の表情で見つめた。

「あ、ありがとう！ 本当に、本当に……」

そう言いながらフェイトの視界が滲み出す。初めて感じる他者の優しさ。悪い事をした自分へ目の前の者達は怒るのではなく、理由

を聞こうとしてくれ、尚且つ許してくれた。それだけではない。助ける約束までしてくれたのだ。危険だから力になる、と。

その気持ちに触れ、フェイトは流れる涙を拭う。それになのはとユーノが少し慌てて何か拭く物をとポケットを探ろうとして……

「あんた達、ホントにありがとよ〜！」

「にゃ!？」

「ちよ、ちよつと!？」

アルフに後ろから抱きしめられた。そんな彼女の目にも光るものがある。そんな光景を見て微笑むセイバー。ランサーはといえば、未だに泣き続けるフェイトへと視線を向けていた。

そこには既にフェイトへ駆け寄りハンカチを差し出すはずかと、同じように近付き励ましの言葉を掛けるアリサとはやての姿がある。そこでも微笑ましいやり取りが繰り広げられていた。

(……これで、少しは望みが持てる、か)

ジュエルシードは全部で21もある。セイバー達が協力してくれるなら、心配していた探索時間も短縮できる上に懸念しているプレシアの事とアリシアの事も何とかなるかもしれない。

そうランサーは考え、視線を再びセイバーへと移す。いつの間にか彼女はランサーの隣へと近付いていた。

「アレがヤバイもんだってのは重々承知してる。だがよ」

「分かっています。封印出来る人間が増えたのですから、分担して発見に当たりますよ」

「……迷いがねえな」

「当然です。私達はなのは達の笑顔を守るために動いているのですから」

「世界のためにじゃなく、な」

「ええ。貴方もそうでしょう?」

「ま、そういう事にしといてやるぞ」

セイバーの問いかけに面白くないとばかりに返すランサー。そんな彼に小さく微笑むセイバーだったが、すぐに表情を引き締めてこう告げるのを忘れない。

今はそちらの事情を詳しくは聞きません。話したくなったら話してください。

自分でさえ高町家の者達へ詳しい話をしていないのだ。そんな自分がどうして相手にそれを強要出来ようか。そう考えて放たれたセイバーの言葉にランサーは一瞬言葉を失う。

セイバーが見抜いていると確信したからだ。自分がまだ何か隠している事を。だからこそ、セイバーは敢えてそう言ったのだ。それはランサーの性格を知っているが故に。

いつか本当の目的を自分達に告げると信じて。それを分からぬランサーではない。だから、と自分に言い聞かせる。それを話すのは今ではないと。それはジュエルシードが全て集まった時だ。

故にランサーは本来言いたい事ではない言葉を掛ける。それにあ

りっただけの想いを込めて。

「すまねえな」

「構いません。それより行きましょう。ライダーやアーチャーも交え、色々と話し合いたい事もあります」

「あいつはここにいいのかよ。……あまり気は進まねえが、しゃべらないか」

「今日はここへ顔を出しているだけです。本当は彼女と共に暮らしているので別の場所で生活しています」

セイバーのはやてを指差しての説明にランサーが納得しながら後を追う。それに呼応してなのは達も歩き出した。フェイトはすずかにハンカチのお礼を言って、尚且つなのはとユーノに改めて礼を述べた。

アルフはアリサから耳と尾について聞かれて平然と「狼だから」と答えている。それを聞いてキャスターと同じかと納得し、はやてはこの後の事を予想して笑う。

その近くを先ほどの猫が何事もなかったかのように鳴きながら通ってゆく。それに微笑ましいものを感じ、笑みを浮かべるなのは達。するとなのはが何かを思い出したようにその足を止める。

「えっと……。私、高町なのは。貴方の名前を聞かせて欲しいな」

「え……？ あ、うん。フェイト、フェイト・テストロツサ」

「じゃあ僕も。ユーノ・スクライアって言うんだ」



- - - - -

アニメ第四話終了。無印最終イベントの「名前を呼んで」は普通に終わります。

ジュエルシード自体ではなく、それをどうやって使ってアリシア復活へ繋がるのか。それが無印の肝になるかもしれません。

## 無印四話 おまけ

あの後、セイバーとランサーはなのは達と別れ、すずかに断りを入れて厨房でフアリンとお茶をしていたアーチャーを連れ出し、共に一室を借りて話し合いを始めた。生憎ライダーは出掛けてしまったため、おそらく昼には戻ってくるとの予想を立て、先に互いの情報と状況、そしてジュエルシード収集の目的を伝え合ったのだが……

「で、ジュエルシードをその母親の治療に使いたいと？」

「……ああ」

アーチャーの確認にランサーの表情が曇る。それを見てアーチャーもセイバー同様にランサーが何か隠している事を悟った。だが、それを尋ねる前に、アーチャーは確かめなければならない事があった。

「……色々と言いたい事があるが、その前にランサー、君に聞いた  
い事がある」

「何だ？」

「霊体化出来るか？」

「……お前らも気付いてるんだろ」

どこか確かめるような問いかけにランサーは声を低くして返す。その言葉が何よりの答えだった。ランサーも受肉している。それはこれまでの推測を裏付ける要素だ。

「そうか。では、君にある事を教えておきたい。我々を守護者として世界が召喚した原因。それはジュエルシード以外にもう一つあるかもしれないのだ」

「何？」

「先程車椅子の少女がいたでしょう。彼女の傍にはアーチャーの解析を拒絶するような反応を見せた怪しい本があるのです」

そこから二人はランサーへ本に関する事を教える。その本を監視し、アーチャーを襲撃した者が魔法世界の者である事。そして、まだ確定した訳ではないが、その本がジュエルシードを呼び寄せたのではないかと、そう考えている事を。

それを聞き、ランサーも納得した。何故自分がフェイトに呼び出されたのか。その理由が分からなかったがそれならば理解出来る。セイバーとアーチャーの告げた、なのはやはやてとの出会いもランサーには人事ではなかった。

どこかで孤独に怯える少女。それはフェイトにも当てはまったからだ。確かにアルフヤリニスはいた。だが、フェイトが一番相手にして欲しかったのはプレシアだった。

それを良く知るランサーだから、フェイトが孤独に怯えていたと断言出来る。それだからここここまで足掻いているのだ。それにフェイトにとっては初めて出来た同年代の友人達なのだ。そこから考えてもこの出会いが世界によって仕組まれたものと考える事は出来る。

「……で、君の本当の狙いは何だ」



「……今はまだ言えねえ」

「アーチャー、待ちましょう。ランサーは騙し討ちや偽る事は出来ない人です。少なくとも、口にした事は本当の事だと思えます」

そんなセイバーの言葉にアーチャーはどこか突き放したように返した。

「だが、アレは聖杯よりも厄介な代物だ。それを本当に治療に使うなら、全部集める必要はない」

「何が言いたい……」

「本当は治療などと言う目的ではないのだろう。……何か”奇跡”でも狙っているのかね？」

その言葉にランサーの表情が真剣なものに変わる。それを感じ取りアーチャーも表情を変える。室内に流れ出す険悪な雰囲気。一触即発。そんな言葉がピツタリ状況に、セイバーは大きく息を吐いた。

「何をしようと勝手ですが、ここはスズカ達の家です。戦うなら外でどうぞ。ですが、貴方達が争うのを見てハヤテやフェイトがどう思うでしょうか？」

「「……ちっ」「」

揃って舌打ちするアーチャーとランサー。それをヤレヤレと思っ  
て見つめるセイバー。こうしていつかの戦いが再現される事はなく

なったが、二人は改めて思う。やはりこいつとは相容れない、と。

一方、そんなセイバー達とは離れたすずかの部屋では、なのは達少女五人が楽しげに会話していた。ユーノは、アルフと共に忍の部屋へ事情を説明しに行った。それと、なのは達少女ばかりで多少居辛かったというのもある。

「それで、ランサーと出会ったの」

「……ホントに似てるね」

「うん。私も突然ライダーが現れたから」

「アタシもそう。急に出てきて、驚いたの何のって」

「わたしもそやね。気が付いたらおったわ」

フェイトの語ったランサーとの出会いになのは達は納得顔。何しろ、多少の違いこそあれ大筋が同じなのだ。何の前触れもなく現れ、自分を守り助けてくれる存在。そして、今では家族と呼んでもいい程の仲。それが五人に共通する感覚。故に話し出すと止まらない。

フェイトの話をキツカケに、なのはが、すずかが、アリサが、はやてが、それぞれサーヴァント達との出会いを話していく。

それを聞きながら、フェイトは驚き、感動し、頷き、笑った。すずかとアリサだけは話が話だけにありのままとはいかなかったが、

それでもフェイトは食い入るように聞いていた。

「……皆、同じだね」

それを聞き終え、フェイトが噛み締めるように小さく言った。

「うん。だから、友達になれたのかも」

「そうだね。確かにそれも一つの要因かな」

なのはの言葉に笑顔で答えるすずか。それを見て、フェイトが羨ましそうに呟いた。

いいな。

それを聞いてみんなが笑う。そんななのは達の反応に、どうして笑っているのか分からないといった顔でフェイトがうろたえる。そんなフェイトに、なのはが全員を代表して優しく告げた。

「フェイトちゃんも友達だよ？」

「……え？」

「そうだね。嫌じゃなければ、だけど」

「い、嫌なんて……」

「ならいいじゃない。仲良くしましょ、フェイト」

「で、でも……」

「なんや？ フェイトちゃんはわたしらの事嫌いか？」

「そ、そんな事っ……」

ない。そうフェイトは言った。強くはない。でも確かにはつきりとそう言い切った。それに四人は顔を見合わせ、笑って頷いてこう言った。

「……これからよろしく！ フェイト（ちゃん）っ！」「……」

「う……うん！ よろしく、なのは、アリサ、すずか、はやてっ！」「！」

喜びを噛み締めるように、流れる涙を拭う事もせずフェイトは笑顔を浮かべる。その笑顔は、これまでにない程の輝いたものだった。そしてなのは達はユーノもきつと同じように友達になってくれるだろうからと告げ、フェイトを更に喜ばせるのだった……

その頃、高町家では二人の剣士が談笑していた。

「やっぱ、小次郎さんは強いですねえ」

「何の、美由希殿も中々のものよ」

道場に座って汗を拭きながら語り合う二人。そう、美由希が一人

留守番したのは小次郎が来る事を知っていたからだ。普段からアリサの護衛としてバニングス家に住んでいる小次郎だが、基本彼女が望まない限り行動を共にする事はない。

それは、小次郎に自由でいて欲しいとアリサが思っている事と、彼女の邪魔をしないようにと彼が考えた末の結論。なので、今日は自分の好きなように過ごしてほしいと思い、アリサが小次郎に暇を与えたのだ。

昨日、試合終わりに美由希へ小次郎がそうなるだろうと伝え、それを知るが故に美由希はこうして残っていた。

「でもいいんですか？ アリサちゃんの傍にいらなくて」

「構わん。何せ、月村家にはライダーがある。それにはやてが来るならアーチャーもいよう。心配はいらぬよ」

小次郎の言葉に美由希も納得。何しろ、アーチャーは恭也と一度手合わせをしたのだが、それを見ていた土郎が戦いのプロだと言う程の男であり、ライダーはセイバーと互角に渡り合うとは本人達の弁。

それを思い出せば、そんな者を相手に勝てる者がいるはずないと美由希は思った。何せセイバー達の実力は彼女も良く知っているのだ。試合でも中々勝てなければ、勝負となれば方に一つも勝機はないと。

「さて、そろそろ昼時か。暇するでしょう」

「えー、もう少しいいじゃないですか」

「気持ちは嬉しいが何分腹が減ったのでな。昼餉を食べに戻ろうと」

思っ」

「あ、じゃ、あたしが作りますよ。ね？ それならいいですよね？」

美由希の言葉に小次郎は少し考えるが、何か思いついたのか頷き告げた。

「ならば、飯と塩でむすびを頼む。それならば私にも出来よう」

「え？ 小次郎さんも作るんですか？」

「美由希殿に甘えるだけでもゆくまい。私の分は美由希殿が、美由希殿の分は私が作ろう」

それでどうだ。そんな表情で美由希を見る小次郎。勿論、美由希が満面の笑みで頷いたのは言うまでもない。ちなみに、恋する乙女の力か美由希のおむすびは普通に食べれるものだった。小次郎の幸運が高い事が影響したのかもしれない。

そんな風に二人は穏やかな時間を過ごす。無論、昼食を終えた後にまた剣を交えたのは言うまでもない。最後までいい雰囲気とはいかないのが美由希らしさなのだろうか。それとも小次郎らしさなのだろうか。それは誰にも分からない。

「……帰ってきてみれば、とんでもない事になっていたのですね」

ライダーの言葉にセイバーが深く頷く。昏になったので一度戻っ

て来たライダーが見た物は、不機嫌な顔をするアーチャーとランサーの二人だった。良く見れば、セイバーが鎧姿になっている。それからライダーは何が起こりかけたのかを理解した。

「相変わらず仲が良いんですね」

「「良くない」」

ライダーのどこか呆れた声に二人が息ピッタリにそう返す。それに微かに笑みを浮かべるセイバーとライダー。それは、まるで子供の喧嘩のような雰囲気を感じられたからだ。

だが、そんなアーチャーがふと時計に目をやり、気迫十分に立ち上がった。それに訝しむような視線を送るランサー。対して、その理由が分かるのか嬉しそうなセイバーとそれに苦笑するライダー。

「昼食の時間だ。君も食べるかね、ランサー」

その一言にランサーが拍子抜けしたのは言うまでもなかった。しかし、なら腕前を見せてもらうかと挑戦的な言葉を返した事でアーチャーの目に剣呑な光が宿る。それはその喧嘩買ったとばかりのもの。

そんなアーチャーにため息を吐くしかないライダー。一方でセイバーはこれでいつもより美味しい料理が出てくるかもしれないと考え、一人密かに微笑むのだった。

その頃、忍達はユーノの話に驚いていた。何しろ自分を襲撃しジエルシードを奪おうとした相手に協力すると言ったのだから。そんな忍達の反応に、アルフはどこか居辛そうに頬を掻いている。

彼女はその襲撃に関っていないが関係者である事には変わらない。故に申し訳ない気持ちがあったのだ。短時間ではあるがユーノ達と話しフェイトへの対応などもあつてか、正直に話していれば良かったのではないかと思う部分もあつたのだから。

「……そうか。それがお前やなのは答えなら俺は何も言わない」

「恭也……」

「ありがとうございます！」

ほつとしたように笑顔を見せるユーノ。アルフはそんな結論を出した恭也に何かしらのシンパシーを感じた。

（今の言い方、こいつやあのチビちゃんがそう言わなかったら文句がある！ みたいな言い方だねえ）

その思考が自分に似ているとアルフが気付かされるのは、高町家と深く関わるようになってからの事。

「ただし、もしなのは達に何かあつたら……」

「それはないよ。アタシらだって、好きであんな事したんじゃないさ」

「恭也さんの気持ちは分かります。でも大丈夫ですよ。ランサーさんはセイバーやキャスター達と同じ存在ですから」



アルフとユーノの言葉に恭也も理解はしたようで放ち始めていた殺気を消した。それに安堵の息を吐くユーノ。忍も今の恭也と同じ思いらしく、どこか諦めたように呟いた。

「ま、信じるしかないわね。私達の『家族』の目を……」

丁度そこヘライダーが顔を出す。アーチャーがランサー達の間も昼食を用意しようとしているのでその許可を忍に取りに来たのだ。その話を聞いて呆れつつも納得して笑う忍と恭也。一方でユーノとアルフはまだそこまでアーチャーの事を知らないために不思議顔。そんな二人ヘライダー達がアーチャーの事を簡単に教える。それはからかうのが好きな恭也や忍とそれを黙認するライダーのせいで多少どころかなり脚色されたものとなる。

そのため、後日二人からアーチャーの話聞いてキャストとフイトは驚き、一人ランサーだけは二人が騙されていると気付いて大笑いするのだった……

「ノエル、そちらはどうだ？」

「大丈夫です。もう仕上がります」

「ファリン、いけるな？」

「任せてくださいっ！」

執事とメイドの三人組が厨房の中で忙しく動き回っている。チーフがアーチャー、サブにノエル、新人ファリンと行ったところであろうか。食事についてもアーチャーはファリンの教師的立場だった。唯一の違いはノエルもそれに含まれる事か。

忙しく働きながらも指示を出し、料理を作り、そして全体を把握する。まさにアーチャー劇場だった。アーチャーやノエルの指示に応じながら元気良く動くファリンとは対照的に、アーチャーの指示を受ける前に様々な事をこなしているノエル。

そんな彼女達を眺めて笑みを浮かべるアーチャー。どこか記憶の彼方にある光景を思い出しているのだ。ファリンが大河、ノエルが桜に重なるために。衛宮邸での日々の中には料理を大河が手伝う事もあった。その時はファリンのように自分や桜の言う事に応じて動いていたのだ。

(こんな風に昔を思い出せるとはな……磨耗したはずの記憶が少しずつ戻っているのだろうか?)

有り得ないと思いつつ、アーチャーは知らず微笑みを浮かべる。それを見てメイド姉妹も嬉しそうに微笑む。滅多に見れないものを見たからだ。そうして厨房で三人が笑みを浮かべて料理を続けている頃、そこから離れた食卓で今か今かと料理を待つ者がいた。

それはセイバーとはやてだ。食欲から楽しみなセイバーと料理人として楽しみなはやて。その姿勢こそ同じだが、興味を抱いているところが決定的に異なっていた。

「せ、セイバー……落ち着いて」

「そうだぞ。フェイトちゃん達もいるんだから」

ただ、それに耐えられないとばかりになのはと恭也がセイバーを制する。初めて見るセイバーの様子にフェイトとアルフは軽く驚いていた。それもそのはず。セイバーの第一印象があまりに絵になるものだったため、そのギャップはかなりのものだったのだ。

唯一ランサーだけはそんなセイバーを知っているので懐かしそうに笑っていたりする。

「そ、そうでした。私とした事が……」

「あ、えつと……気にしないで」

「そうだよ。アタシらだって、早めに昼を食べなきゃあんたみたいになってるぞ」

アルフの言葉にライダーが反応する。それは単純な疑問。

「そうなのですか？ まだ食べられるようですが一体何を食べたのです？」

「ん？ ああ、ハンバーガーとフライドチキンだろ。それを……」

アルフの語る食べ物量の量に呆れ返る一同。ランサーもだよ、とアルフが言っただけで余計に沈黙。ファストフードだけとはいえ、それだけを食べて尚まだ食べるアルフとランサーに全員が呆れていた。

感情も突き抜けると、それが元々のモノと別のものに変わる事がある。今回はまさにそれ。本来であれば驚きだったのだが、度を越したために呆れてしまったのだ。

そんな話をしているとアーチャー達が料理を運んできた。そのメ



本来なら温泉話ですが、その前に必要なアバンを（長くてとてもアバンなんてものじゃないですが）

次回は幕間。八神家へ訪れるフェイト達。その一日目をお届け。

## 幕間1〜フェイト、来訪〜

それは、フェイト達と出会った次の日の事。はやては起きてからずっとそわそわしていた。どれぐらいかと言えば、食事中に鳴ったインターホンに慌てて出ようとしてむせたぐらいにだ。生憎、それは回覧板を届けに来た近所の人が鳴らしたものだだったが。

それにもめげずはやては未だに意識を目の前のドアへ向けている。それを見ながらアーチャーは今日何度目か分からないため息を吐いた。心なしかはやての腕の中でみーちゃんもため息を吐いたような気がして、アーチャーは更にため息を吐く。

「朝食を食べてから来ると言っていただろう。それに荷物もある。おそらくまだ来ないぞ」

「分かつとる。でも、もしかしたらがあるやろ」

これなのだ。既にこのやり取りも四回目。はやてはもうずっと玄関前でスタンバイ中。朝食が終わった後からこうなのだ。何だかんだ言いながら、アーチャーも洗濯などを終えてそれに付き合っているのだから優しいものだ。

そんな二人を見てみーちゃんも感化されたのかそわそわ。はやての腕の中でキョロキョロと顔を動かしている。彼女はいつものように食事を終えはやてと戯れて帰るつもりだったのだが「みーちゃんも紹介せな」の一言によりこうして捕らえられていた。

そんな風に過ごす事、実に三十分。待ちに待った瞬間が訪れる。鳴り響くチャイム。それに反応しドアを開けようとするはやて。アーチャーがさり気無くみーちゃんを抱え上げそれをサポート。そしてドアの先には……

「い、こんにちは……」

どこか緊張した面持ちのフェイトがいた。

「いらっしやい！ よう来てくれたな」

「え、えっと、短い間だけどよろしく」

「こちらこそよろしくや。仲良くしよ」

ニコニコ笑顔のはやて。それにつられてフェイトも笑顔を見せる。一方、そんな親しげな雰囲気の二人とは対照的に玄関先で対峙するような男二人。その後ろでアルフが気まずそうな顔をしている。

「そこどけよ」

「馬鹿を言つな。まず女性が先だろう」

「あー……アタシはランサーの後でもいいよ」

アーチャーの言葉にアルフは内心苦笑しつつそう告げた。

「ほら見る。こう言ってるじゃねーか」

「レディファーストを知らぬとは、やはり”猛犬”の名は伊達ではないな」

「やけに突っかかるな。分かった、やってやるよ。……表出る」

アーチャーとランサー。おそらく聖杯戦争で一番対峙した回数が多いからだろうか。その相性は複雑としか言いようがない。二人の殺気に当てられ、慌てるように逃げ出すみーちゃん。その声にはやてが顔を出す。

「何いつまでも玄関におるんや！ みーちゃん怖がらせてへんと早くランサーさん達をリビングまで案内し！」

はやての言葉にアーチャーが苦虫を噛み潰したような顔をし、対するランサーは勝ち誇ったような表情を浮かべる。そんな子供のような反応に小さく笑みを浮かべるアルフ。だが、ランサーの天下も長くは続かない。はやてに続くようにフェイトも顔を出し、「ランサーもアーチャーさんを怒らせないようにね」と言っただからだ。

今度はそれにランサーが苦い顔。それにほくそ笑むアーチャー。そして、そんな二人を見てアルフが一言。

「……ホントはあんた達、仲良いだろ」

「「良くない」」

その一致した声に揃って笑い出すはやて達三人。その笑い声を聞きながらやや居辛そうな顔をするアーチャーとランサーを見て、更にその音量が大きくなるのだった……

それからややあってリビングには仲良く話をするはやてとフェイ



トの姿と、その横で色々と質問し合っているアーチャーとアルフがいた。ランサーと言えば、ソファーに座り我が物顔でテレビを見ていたりする。

「でな、この子がみーちゃん言うんよ」

「へえ……触つてもいい？」

「ええよ。もう、大分大人しなつたし」

恐る恐る手を出すフェイト。それをみーちゃんは黙って見つめられるがままに撫でられる。それが自分へ触らせてくれていると理解し、フェイトは少しだけ感心したような声を出した。

「……本当に良い子だね」

「やる？ ここまでするのは苦労した」

「のは私だが？」

話している途中でアーチャーに遮られ、気分を害したようにはやてが口を尖らせる。フェイトはそんなはやての顔に笑みをこぼした。そのはやてとアーチャーのやり取りがすごく自然だったからだ。きっと本当に家族のようなんだろう。そうフェイトが思つて視線をランサーへ向ける。

それに気付いたのかランサーもフェイトへ視線を向けた。それにフェイトは少し驚くも、微かに笑みを浮かべて「何でもない」と返す。そんな二人から視線をアルフに戻してアーチャーは話を再開する。

「……で、使い魔だったか？ そちらでは死んでいても蘇生可能な  
のか」

「ま、そうだね。でも動物限定だよ？ 人間を使い魔にしようなん  
て考えないからね」

「……その言い方では出来ない事はないという事か？」

「どうなんだろう？ リニス辺りにでも聞かなきゃ分からないけど……  
…出来ても多分誰も思わないと思うよ」

アルフの発言にアーチャーが疑問符を浮かべた。その疑問を理解し、アルフが笑って答える。使い魔にするという事はつまりその体に新しい魂を与える事。動物なら別の自我を得て喋り出しても納得出来るだろうが、人間はそうもいかないだろうと。

その言葉にアーチャーも納得がいった表情を浮かべる。確かに別人のようになってしまっただけでは生き返っても意味がない。それはその生き返らせなかった故人ではなく、同じ姿をしたまったくの別人に  
してしまうのだ。

その結論に行き着き、アーチャーは合点がいったとばかりに頷いた。そんな彼へアルフは残る要素を説明するべく口を開く。

「後、使い魔は主人と契約を交わすのさ」

「ふむ、使い魔なのだからそれは当然か」

「ちなみにアタシはずっとそばにいる事だよ」

アルフの言葉にアーチャーは笑みを浮かべた。実にフェイトらし

いと思ったからだ。そして視線をフェイトへと向ける。そこには、はやてと楽しそうに語らうフェイトの笑顔があった。

「……アタシはね、あの子の笑顔のためなら何だってするよ」

「奇遇だな。私もはやてを笑顔に出来るのなら努力は惜しまんつもりだ。何しろ自分の生活に関わるのでね」

その発言にアルフは一瞬声を失ってから笑い出した。素直じゃないと思っただけではない。その在り方の根本がランサーと同じだと気付いたからだ。どこまで似ているのかと思っただろう。そんなアルフへアーチャーは笑みを浮かべてこう締め括った。

ちなみにセイバー達も同じ考えをしている。

そのアーチャーの言葉にアルフは嬉しそうに笑う。

そりゃ心強いね。

まったくだ。

そう言い合う二人の視線の先には笑い合うはやてとフェイトの姿があった。それを眺め、ふと二人は思うのだ。もしサーヴァント召喚という出来事が無ければこれがどうなっていたのだろうと……

昼になり、アーチャーはアルフとランサーを連れ買い物へと出か

けた。無論少女二人も共に行くと言ったのだが、アーチャーから「今日ぐらいはゆっくり話をし情報交換をしておけ」といういつもの気遣いを受け、はやてがフェイトをゲームに誘った事で決着となった。

みーちゃんは、さすがにあまり引き止めるのも悪いと思ったはやてとフェイトに見送られてここにはもういない。こうして八神家に残ったのははやてとフェイトだけとなったのだが……

「さ、何しよか？」

「私、ゲームとか全然知らないからはやてに任せるよ」

そう言っつてフェイトははやての手伝い。ゲーム機を取り出しはやての指示通りに配線を繋いでいく。そして、某メーカーの人気配管工がタイトルのカーアクションゲームを二人で始める。始めての事に戸惑うフェイトを誘導して進むはやて。

その内、フェイトも操作に慣れたのか段々熱が入り始める。徐々にコツも掴み、はやてに迫る勢いでフェイトはレースを展開する。そんな様を見てはやても感嘆の声を出した。飲み込みが早いと感じたのだろう。

「あ、スターや」

「これなら……はっ！」

「おおっ！ フェイトちゃんやるな！」

「うん、大分コツは掴んだからね。はやて、置いてくよ？」

「ぬ、あんま調子乗ると……こっちゃん……」

無敵が切れた途端、はやての操作キャラが投げた緑こうらがフェイトの操作キャラに炸裂。堪らずスピンするフェイトのキャラ。

「す、凄い……」

「当然や。ゲーム得意なのはちゃんにもわたしは勝てるんやから」

回転するフェイトのキャラを抜き去り、再びトップに踊り出るはやてのキャラ。それに追いつこうと走り出すフェイトのキャラだったが。

「ゴール！」

「うつつ……追いつけなかった」

的確にアイテムを使い、時にはCPUさえ壁に使うはやてにフェイトは二位を取るだけで精一杯だった。結局そのレースははやてが一位で終了となった。しかし、フェイトの中にある闘争心に火がついたためにそのまま終わる事は無かった。

「はやて、もう一回いい？」

「ええよ。何度でもかかってき」

こうしてフェイトの要望で第二回戦が開始される。そんな二人の戦いはアーチャー達が帰ってくるまで続いた……

スーパーへ向かう道。アーチャーは隣を歩くランサーへ視線を送る。それに気付きランサーも頷く。アルフもその意味を理解しているようで真剣な表情で歩いている。

「…………あの猫が例の襲撃者だ」

「成程な。ああして傍で見てるって訳かよ」

「猫素体の使い魔か。アタシ達を少しだけ警戒してる感じだったね」  
周囲に気配等を感じないと把握し話し出す三人。アーチャーはあの月村家での再会に際してランサーとアルフにだけ教えたのだ。みーちゃんの正体を。あの仮面の男が監視をしなくなっても尚、何故こちらの事を把握していたのか。キャスターによってそれが判明したおかげで見えて来た事もあると。

「となると…………」

「ああ。もしかしたらジュエルシードについて独自に動いてるかもしれないな、ありゃ」

「ま、アタシらと違ってこそこそしないといけないだろうから難しいだろうけどな」

「そうだろうが…………早目にこの事件を片付けるに越した事はないな」

アルフの指摘に同意するも小さな不安要素である事に変わりはないため、アーチャーは慎重な意見を告げる。ランサーもその辺りは

同じ意見なのか無言で頷いた。だが、アルフは人懐っこい笑みを浮かべて陽気に告げた。

「そうだね。フェイトにあの……なのは、だっけ？　きつちり役割分担も出来るしさっさと終わるさ」

そんな明るい声にアーチャーは苦笑するしかない。楽観的だと言う事は出来る。しかし、今はそれぐらいの余裕を持っているべきかとも思っただのだ。

「そう願いたいな。さ、今日ははやての事だから歓迎会として色々と贅沢を考えると考えるはずだ。なので夕食は豪華にいくが昼食はそれなりを覚悟してもらおうか」

「ケチくさい事言っていないで昼も夜も奮発しろ（して）よ」「」

アーチャーの主婦のような言葉にランサーとアルフが文句を返したのは言うまでもない。だが、その表情はどこかからかいが混ざっているように見えた。賑やかな三人の時間はまだ続くのだった……

アーチャー作の昼食は、肉が食べたいとランサーとアルフがうるさかったので以下のメニューとなった。鳥肉の竜田揚げに人参、大根、里芋の煮物。それに豚肉の冷しゃぶサラダと豆腐とワカメの味噌汁という和食だ。

フェイトは初めて見る食材　特にワカメに首を傾げ、はやてから海草と聞くと「そんなものも食べるの？」と軽く驚きながらも

完食した。アルフとランサーは肉料理ばかり食べ、アーチャーとフエイトからお叱りを受けそれをはやてが笑って見ているという微笑ましい一幕もあり、終始和やかに食事は終わった。

そして、食事の後片付けはフエイトとはやてがやると言い出し、アーチャーはその言葉に甘え食後のお茶を淹れていた。アルフはランサーとテレビにご執心のようで二人してひっきりなしにチャンネルを変えている。

あまりにも忙しくチャンネルを変えるのでアーチャーがそれを注意し、ランサーがそれに別にいいだと返す。アルフはそれを仲裁する事もなく、サングラスを掛けた男性が司会の番組を眺めていた。

（何か、ええな。家族が増えたみたいや）

（何だろ……すごく楽しい。リンスがいた時とは違うけど……うん、これも家族みたいだ）

洗い物をしながら聞こえてくる話し声にそんな事を思うはやてとフエイト。ふと互いに顔を見合わせ、笑みを浮かべる。

「とりあえず……」

「うん。そうだね」

二人は頷き合ってから後ろへ振り向き、言い合いを続けるアーチャーとランサーに向かって。

「いい加減にし（て）」





## 無印五話 前編

「改めて見ると凄いやね、この人数」

「確かにこれは凄いな」

美由希の呟きに恭也も同意。ワゴンタイプの車が二台。それだけの規模になった今回の旅行。先頭車両は土郎がドライバーを務め、助手席に桃子で、後部座席にノエル、恭也、忍、小次郎、美由希、ファリンが乗っている。二台目はドライバーをライダー、助手席にアーチャー。後部座席がセイバー、ランサー、アルフにキャスター、そしてなのは達子供組となっている。

大人組と子供組に別れ、更にフェイトやはやての事を考えて仕方なくランサーとアーチャーを同席させているのだが、その緩衝役としてセイバーとライダーがいたりする。何しろ、二人がその気になった場合、物理的に止められるのはセイバー達ぐらいだからだ。

「今頃、すずか達は楽しく遊んでるでしょ」

「だろうな。まあ、ランサーとアーチャーが大人しくしておれば、だが」

「あの……小次郎さん？　そう言われると不安になるんでやめてください」

「大丈夫ですよ。あの二人もすずかちゃん達の前では喧嘩はしないはずですよ」

不安そうな表情の美由希にファリンはそう笑って告げる。その言葉に頷くノエル。あの出会った日、二人の仲とフェイト達に対する態度を見た彼女もファリンの意見に賛成だった。

「その通りです。お嬢様達の前で迂闊な事をすれば、後が怖いのを御二人共知っていらっしやいますから」

「ですよ。フェイトちゃんもはやてちゃんも、ああ見えて気は強いですからね」

姉の肯定に嬉しそうにファリンが告げる言葉で全員が笑みを浮かべるが、はたと忍が呟く。

「……でも、はやてちゃんってそんなに大人しそうには見えないけど」

「忍さん、それは言わない約束よ」

「でも、はやてちゃんは出会った時は大人しい子だったとアーチャーさんは言っていたぞ？ 二人で暮らすようになって今のような活発さを取り戻したらしい」

土郎の言葉に納得の忍。だからこそ、これを言わねばならない。そう思い忍は断言する。

「じゃ、因果応報って事ね」

その言葉に今度こそ全員が声を出して笑った。

大人組がそんな風に盛り上がっている頃、なのは達はと言えば……

「ダウトッ！」

「え、何でわかるんやろ」

「アリサ、すごいね。これで三回連続だよ」

トランプに興じていた。後部座席を倒して後ろの辺りに円を作りながらのトランプ大会。本当はフェイトへの軽いレクチャーだったのだが、勝負事にムキになるアリサが徐々にヒートアップし、現状に至る。

種目もババ抜き、七並べ、ポーカーと来てダウトとなっていた。この後はおそらく大富豪となるだろう。その証拠に、先程なのはがユーノに大富豪のルールを教えている。アリサも、フェイトへ同じように説明をしていたから間違いない。

「どないしょ？ カード、こんなに増えてしもた」

「うーん、でもこれなら逆に……」

はやて・すずかペアが手札を見ながらひそひそと小声で作戦会議。それを見つめて同じようにアリサ・フェイトペアも考える。残りのなのは・ユーノペアは困り顔。何しろ現状手札が一番少ないのだ。つまり、口で言う数と手札が合わない事の方が多い。それを考えて不安そうな表情をなのはは浮かべていた。

「どしする？」

「……とにかく順番を考えて、これを最後に出来れば……」

「えっと……あ、そっか。ユーノ君、あつたまいい」

ユーノの作戦に笑顔のなのは。それに照れ笑いのユーノ。その向かいで同じくカードを睨むアリサとフェイト。

「で、これを何とかスルーさせれば……」

「でも、もしはやて達が三のカード全部持ってたら？」

「ぬ……でも、やるしかないわ。女は度胸よ！」

「あ、アリサ……かつこいい」

冷静なフェイトの懸念にアリサはそう言い切った。その凛々しさに憧れの眼差しを向けるフェイト。そんななのは達を眺めながら、笑みを浮かべるセイバー達。運転しているライダーも、バックミラーでその様子を見て微笑んでいる。

「すっかり仲良くなりましたね」

「ですねえ。微笑ましいものです」

「だな。ま、こっちとしても大助かりだ」

「……ジュエルシードも、こんなに早く見つかるようになるとはな」

アーチャーの言う通りフェイト達が探索魔法を使い、それで発見したものをなのは封印という流れでジュエルシード探索は恐ろしい程効率が上がったのだ。

それは、フェイト達が封印の事まで考えて探索をしなくても良くなった事が影響している。魔力消耗の事を考慮せず探索のみに全力を傾ける事が出来るようになったフェイトは、広範囲探索魔法をアルフとともに行使しその成果を挙げていた。

一方のなのはもそんなフェイトに負けられないと魔法の勉強に力を入れ、先日本人の要望で初めて行ったフェイトとの模擬戦において、新しい魔法『デイベインバスター』を習得した。

キツカケはフェイトの放ったサンダースマツシャー。デイベインシューターを同じように撃てれば。そんななのはの思いにレイジングハートが応えた結果がその魔法に変わった。その習得と戦闘結果によって、自身の得意属性が集束と放出である事と防御が異常に頑強だとユーノとフェイトに言われ、現在なのははもっと凄い魔法の開発と防御の強化に余念がない。

ただし、それを知った土郎やセイバーからあくまでも程々にと強く念を押されはしたが。特にセイバーがなのはにそう言ったのは、自身が使用する聖剣の事を思い出してであった。

あれも魔力を集束し放つモノ。故にデイベインバスターも体に掛ける負担が相当な魔法だと直感から察し、なのはを心配したのだ。ちなみに、なのはがフェイトとの模擬戦を希望したのは魔法を実戦レベルで磨いているフェイトから色々学びたいとの思いからだった。

「ですが、まだ残りは少なくありません。慎重に行かないと」

「そつだな。ライダーの言う通りだ。だからこそ」

「休める時に休む、だろ？」

アーチャーの言葉を遮ってやや不敵に笑うランサー。そんな顔を見てアーチャーは不満そうな表情を見せるも、渋々といった感じで口を開いた。

「……ああ、そうだ」

「何でそんな顔すんのさ？　そこまで言いたかったのかい？」

そんなアーチャーを見て嬉しそうなランサーと不思議そうなアルフ。そのアルフの言葉にアーチャーは苦い顔を返すのみ。何故ならアーチャーは言葉を遮られたから苛立っているのではないからだ。

そう、ランサーが固い言い方しようとするなど言わんばかりに笑みを浮かべたからの苛立ちだったのだから。その相手がランサーでなければ、おそらくアーチャーもこうはつきりと反応を示したりはしない。どこかこの二人は互いを変に意識しているような部分があるのだろう。

そんなアーチャーを見て同じように小さくため息を吐くセイバーとライダー。キャスターはランサーとアーチャーの関係性を理解してどこか呆れたような表情だ。しかし、この二人が実は一番噛み合うのも彼女達は知っている。

（どちらも生き残る事に関しては一流ですからね）

（まったく、似た者同士なのですから……）

（一度主人を決めたらとことんついていく性格の癖に……）

どこか苦笑を浮かべつつ、それを眺めるセイバーとキャスターに横目で見つめるライダー。そんなライダーの視界に近付きつつある目的の旅館の姿が映り出す。それに気付いてキャスターが感嘆した声を出した。

「あつ！ 宿が見えてきましたよ〜！」

その言葉でなのは達も揃って手を止めて視線を前へ向けた。その眼前の光景に楽しそうな声を上げて話し出すのを眺め、知らず微笑むセイバー達。こうして賑やかな旅行は始まった……

時の庭園のプレシアの部屋。ベッドを囲むように様々な機械が置かれている。そんな中、リニスが空になった食器を片付けながらプレシアに告げた。

「ランサーの報告では、ジュエルシードも順調に集まっているようです」

「みたいね。……この分なら間に合うかしら？」

「間に合うに決まっています。弱気な事を言わないでください」

「そう、だったわね。ごめんなさい」

リニスの咎めるような声にプレシアは笑みを浮かべて謝った。あの日、ランサーからの報告を聞いた二人は驚いた。何しろランサー



と同質の存在が地球の海鳴で暮らしていて、尚且つジュエルシード発見者の少年と共に協力してくれるとの事だったからだ。

当然初めは疑ったプレシアだったが、ランサーの「俺を信じる」との言葉に黙らざるを得なかった。それだけプレシアはランサーに全幅の信頼を寄せていた。何せ手土産とばかりにジュエルシードを二つ送ってきたのだから。

「……今頃ランサー達は……温泉、だったかしら」

「ええ。現地の療養施設で完全休養するそうです」

「……まあ肝心な時に倒れられても困るもの。大目に見るわ」

「プレシアも連れて行けるなら連れて行きたい。そうフェイトとランサーが言っていましたよ」

リニスのどこか窺うような言葉にプレシアは笑みを微かに見せて「そう……」と呟いた。

いつか、あの子”も”連れて行けたらいいわね。

そんなプレシアの言葉は外に漏れる事なく消える。ただ、彼女の心の中にだけその変化の痕跡を残して……

旅館に到着した一同は男性陣が荷物運びで働く事になり、その間女性陣は賑やかにこれからの事を話し合っていた。ただし、なのは

達は既に行動を決めていたので五人で早速お風呂へ直行する事に。それに呼応し、美由希に忍、アルフもそれに便乗する事になった。

「じゃ、行くわよ」

「あ、待つてよアリサちゃん」

先陣を切るように歩き出すアリサを追いかけろすずかを見て、なのはも後に続けと歩き出した。その隣を追随するように歩くフェイトだったが、その目が温泉の効能と言う物に気付いて足を止めた。それになのはも気付いて足を止める。するとフェイトが不思議そうになのはへ視線を向けた。

「ね、なのは。これ何て書いてあるの？」

「えっと……この温泉の効能の説明だね」

「効能？」

「その……確か温泉って病気とかに効くんだ」

「えっ？ それ本当？」

「うん。あ、今度はフェイトちゃんのお母さんも一緒に来れるといいね」

なのはの言葉にフェイトは小さく頷く。そう、”今度”を必ず実現させるんだ。そのためにジュエルシードを早く集めないと。そんな思いを胸にフェイトは歩く。そんなフェイトの気持ちを知ってか知らずか、なのはも思う。

(フェイトちゃんのお母さんを早く治すためにも、後で念のために探索魔法を試してもらおう。この辺りにもあるかもしれないから)

再び歩き出すなのは達の後ろで、はやてがすまなさそうにアルフを呼び止めた。一人車椅子のはやては、お風呂場まで車椅子では迷惑になると思いアルフに運んでもらおうと考えた。その思いを気遣い、アルフは二つ返事でその体を抱え上げようとした。だが次の瞬間、それを横からライダーが制止するように取り上げた。

「アルフ、ダメですよ。ハヤテはこう見えて油断ならないのです」

「へ？ どういう事だい？」

「……ハヤテ、何故アルフの胸部を凝視しているのですか……？」

セイバーの言葉にアルフがハツとする。そう、ライダーの抱え方ははやてが胸に手が届かないように肩で担ぎ上げているのだ。その意味を理解しアルフは苦笑い。そして、同時にライダーに感謝した。

「すまないね」

「いえ、気にしないでください。……さ、行きますよ」

「うう……ライダーさんがイジワルや」

「あはは、はやてちゃんって男の子みたいだね」

「ホント、ある意味女の子で良かったわ」

「……なのは達が聞いていなくて良かったです」

どこか呆れたような美由希と忍。やれやれと息を吐くセイバー。そんなセイバーの発言に内心アルフとライダーが呟く。

（もしかしたら、聞かせた方が良かったんじゃない？）  
（……？）

そう、この時の予想が当たるにはこれから数年の時間が必要となる。女性らしい体つきへ変化し始めたなのは達をはやてがからかい混じりに強襲するのだ。だが、それはまた別の話……

浴衣になり部屋で寛ぐ士郎と桃子。恭也とノエルも浴衣に着替えてまったりとしている。ファリンは、急須でのお茶の淹れ方をアーチャーから教わっていた。小次郎とランサーは既に行かない。早速とばかりに人目に付かなさそうな場所まで試合をしに行ったのだ。

本当は恭也も行きかけたのだが、ノエルとファリンから忍をほったらかしにしたら黙ってないと言われたために仕方なく諦めた経緯がある。ユーノはキャスターと共にランサー達を追いかける形で散歩へ出かけた。万が一に備えて結界魔法を展開するためだ。

「それにしても驚く事だらけだな」

「そうね。フェイトちゃん達の事もだけど……ランサーさんの事も、ね」

「セイバーに勝てるかもしれない。それだけでも俺にとっては驚きだよ」

恭也のその言葉に頷く土郎。何せセイバーは未だ負け無し。土郎でさえ、魔力放出を使われれば勝つ事はまず不可能だ。しかし、恭也も土郎も何度か追い詰めた事はある。だがそれは魔力放出を封じた状態のセイバーだ。本来ならば勝ち目はまったくない。

ちなみにセイバーは何度か魔力放出無しで勝とうとしているが、元来の負けず嫌いが影響しそれを出来ずに使ってしまったている。どうしても追い詰められると自らに課した縛りを忘れてしまうのだ。それを知るのは、本人とそれを内心悔やんでいる様子に気付けるなのはのみ。

「勘違いするな恭也。私や小次郎、それにライダーやキャスター……は少し厳しいかもしれないがそれでも可能性はある。つまり誰もが条件や状況によってはセイバーに勝てるのだ。何もランサーだけとは限らん」

「そうです！ アーチャーさんは強いんです！」

「……何故そこでファリンが意気込むのですか？」

ノエルの指摘に顔を赤めて俯くファリン。彼女は兄のようなアーチャーを慕っているのだ。それを察して微笑ましく見つめる土郎と桃子。既にアーチャーは恭也と戦術論を交し合いそれに気付いていない。そんな穏やかな時間が静かに流れていた。

「今頃ランサーさんと小次郎さんは試合の真っ最中だろうな」

「ユーノ君とキャスターさんだけを見物客にね」

湯のみを手にして土郎と桃子は語り合う。その横ではファリンとノエルが何時頃温泉へ入りに行くかを相談していた。忍達がなのは達と一緒に入っている事もあり、そろそろ入りに行くべきかと思っていたのだ。

こうして緩やかに各々が過ごす中、一部だけ静かに熱気を帯び始めている者もいた。そんなアーチャーと恭也の論戦が白熱し始めた辺りでノエルとファリンが温泉へ行くこうと二人へ提案する事になるのだった……

何かがぶつかり合う音が響き渡る森の中。その中の少し開けた場所で向かい合うように佇む小次郎とランサーの姿があった。その手にはそれぞれの得物が握られている。そして、互いに嬉しそうな笑みを浮かべて得物を向け合った。

それを少し離れた場所で眺めるユーノとキャスターがいた。しかし、目の前の戦いを邪魔しないためか口を開こうとしなかった。その代わり、その目は少しも両者の動きから目を離さないようにしていた。

「やるじゃね〜か」

「お主こそ。以前と違うのはそちらも同じか」

「へっ……そういつだった!」

ランサーの神速とも言える突きが小次郎を襲う。だが、小次郎は

それを軽々といなす。それが数十合。剣舞と呼んでもいい程の動きでランサーの攻撃をいなし、流し、逸らす小次郎。

ランサーはそんな小次郎に喜びを噛み締めていた。死力を尽くすとまではいかないが、それでも全力を出せる相手との戦いはやはりランサーにとって何も勝る生き甲斐なのだ。

（前よりも技の冴えが上がってやがる。……こいつはおもしれえ！）

（ほう……更に速くなるというか。……良かろう）

どちらともなく一旦得物を引く。先程までの火花散る戦いが嘘の様に静まり返る。静寂。だが、それもほんの一瞬。再び始まる閃光の如き打ち合い。だが、その速度は先程とは比べ物にならない。

先程が”目に見えない”速さなら、今回は”目に映らない”速さ。もう、刀や槍を動かしているのかも分からないのだ。途中から見ればおそらくそう言う事しか出来ない。

（す、凄い……僕にはもう二人が何をしてるかも分からないや）

（むむむ、さすがはランサーですね。しかも、あの時よりも速度が増してませんか、これ。でも、アサシンの割りにその速度へ対応している小次郎も大したものかも。あのむかつくアサシンもですけど、本当にこれでアサシンって対サーヴァント戦に向いてないんですかねえ……？）

ユーノは強い男に憧れる少年の瞳で両者の姿を見つめ、キャスタは以前戦った際よりも速い槍捌きのランサーとそれに対応している小次郎に疑問を抱く。

二人が圧倒される試合の様相。これを見たのが御神の剣士である士郎達ならまだ辛うじて”目に見えない”速さかもしれない。だが、常人には既に理解の範疇を超えている。セイバーを持ってしてもこれを完全に捉えるのは至難の業だろう。最速のサーヴァント、ランサー。そして、絶技のサーヴァント、小次郎。スピードvsテクニクともいうべき戦いが展開されていた。

「オオオオオオツ!!」

「はあああああつ!!」

互いに咆哮を上げ、速度とその冴えをそれぞれ研ぎ澄ます。心は熱く、されど思考は冷静に。そう小次郎が思えばランサーは心も思考も熱くなれと思う。だが願うものは同じ。それは強者との戦い。ならば今の状況を喜ばずして何を喜べと言うのか。

そんな事を頭の片隅で思いながらランサーと小次郎は互いに得物を一旦引いた。だがただ引くのではなく弾くようにしてだが。そうして両者は相手を見つめてどこか笑みを浮かべながら言葉をぶつけ合う。

「チツ！ 埒が明かねえな、おい！」

「それはこちらの台詞よ。少々腕が疲れたわ」

「なら……」

「勝負……」

互いに構えるは必殺の構え。己が絶対の自信を託せる唯一無二の攻撃。



「刺し穿つ……」

「秘剣……」

その瞬間、魅入られるように見つめていたユーノとキャスターが同時に我に返った。

「ダメですよっ!」「」

突然の声に思わず気を逸らす二人。その視線の先には血相を変えたユーノと呆れた顔のキャスターがいた。

「何考えてるんですか! 今使おうとしたの宝具ですよね? お互いにつ!」

「試合に夢中になるのは構いませんが殺し合ってどうするんです。フェイトちゃんとアリサちゃんを泣かせるつもりですか?」

ユーノが告げた言葉に冷静になったのかランサーと小次郎はややバツが悪そうに互いへ視線を向け合う。更にキャスターが告げた言葉がとどめだった。二人の顔に微かに苦笑が浮かぶ。いくら戦いに夢中になっていたとはいえ、二人して本気になりすぎていたと言いつつながら。

確かにあのまま続けていたらどうなったか分からなかった。互いに殺す気はなかったが少々熱くなり過ぎたようだ。そう笑って告げるランサーと小次郎。そんなやりとりを聞きながらユーノとキャスターは呆れながらもほっと一息。

「見に来て良かったね、キャスター」

「そうですね。これだから戦うのが好きな男は……」

苦笑するユーノとため息を吐きながら最後には呆れるキャスター。そんな二人を見てランサーと小次郎は小さく笑う。自分達もだが主従ではなく姉弟にしか見えなかったからだ。こうしてランサーが汗を流しに行こうと言い出し、四人は一路旅館へ向かって歩き出すのだった。

湯煙立ち込める大浴場。それを前にしフェイトは驚きからか声を失う。ただ大きなお風呂だと聞いていたフェイトにとって、温泉大国日本の大浴場は常識の範疇ではなかった。

「……大きい」

「そっか。フェイトちゃん達のところには温泉ないんだっけ？」

「驚いてるとこ悪いけど、ここよりも大きなお風呂もあるのよ。この国の人達はお風呂好きだから」

呆然と呟くフェイトに美由希と忍が声を掛ける。忍の言葉を聞き、信じられないと言わんばかりの表情をするフェイト。それが可愛らしくて二人の笑みを誘う。そんなフェイトとは対照的にはやては目の前の光景に心躍らせていた。

美由希、忍、アルフ、それにライダーと魅惑的な”おっぱい”が並んでいるのだ。ちなみに後日女湯で起こった事件を聞いたアーチ

ヤーは、はやてが女性の胸に執着するのは無意識に母を求めているからではと分析した。父性を自身が担っているからだろうから母性を誰かに欲しているのだと。

(何とかして触ったらなアカンな)

そんな少女らしからぬ事を考えるはやてを現在セイバーが抱えている。結局、セイバーとライダーも美由希達に誘われ風呂に入る事にしたのだ。既にライダーはずかの背中を洗うため、セイバーにはやてを預け現在仲良く洗い合っている。

眼鏡を掛けたまま入浴しているため、時折曇ったレンズを拭いて見えるようにしているところが地味に可愛らしい。ずずかはそんな彼女に先程から笑みを浮かべっぱなしなのだ。

アリスはなのはと楽しそうにしながら洗いあっている。残るアルフは簡単に掛け湯をし早々に湯船に浸かっていた。そんなそれぞれの現在位置を把握し、はやては一人密かに頷いた。

「ハヤテ、まずは体を洗いましょう」

「へ？ あ、そうやな。セイバーさん、お願いします」

「ええ。では行きましょう」

はやてを抱えなのは達の近くへ向かうセイバー。そのセイバーの胸を注視するはやて。

(む、もう少し大きければ良かったんやけど……残念っ！)

(何でしょうか？ ハヤテから何かイラッとするものを感じます)

持ち前の直感で侮辱された事を感じ取るセイバーだが、生憎それがどういうものかまでは理解できない。はやては一瞬セイバーの表情が変わったのを見て、勘付かれたかと若干慌てたが何も言われなかったのでよしとした。

そんな二人の視界の隅で楽しそうに笑うのはとアリサがいた。話題は目下のところ一番の問題であるジュエルシードに関して。フエイト達と協力するようになって既に回収出来た個数は半分を越した事もあり、余裕さえ感じ始めていたのだから。

「でも、良かったわね。もう半分切ったんでしょ？」

「うん。後八個だからね。頑張って終わらせるよ」

そう答えてなのはがグツと手を握る。それにアリサも手を握って頷いた。

「その意気よ！ 全部終わったらお祝いしましょ。フエイトのママも一緒に、ね」

「そうだね！ 全快祝いつて言う事で」

「なら、場所はどこにする？」

そんな二人の話が聞こえていたのか、さすががそう話に入ってきた。だがそれを嫌がるなのは達ではない。むしろそれに頭を捻りだした。それを眼鏡の曇りを拭き取ったライダーが見つめ、可愛いと思っただのか柔らかい声で助言を出す。

「いつそ、どこか小さなレストランでというのもいいかもしれませ

ん。料理も出ますし、広さや椅子も貸切にすれば十分です」

ただし多少高くつきますが、と締め括ったライダーの発言になのはが閃いたような顔をした。

「あ、じゃあ翠屋にしよう！ お母さん達も参加出来るし、お金もそこまでかからないよ」

なのはの言葉にアリスもすすかも笑顔で頷く。ライダーはそんな三人を見つめて微笑む。

（本当にナノハは良い子です。フェイトが加わり、どうなるかと思っっていました。彼女も良い子でした。スズカ達との関係も増々深めているようですね）

こうすれば翠屋の名前を挙げるだろうとライダーは思い、先程の提案をした。月村邸やバニングス邸という選択肢もあったが、それよりもアットホームな雰囲気がある翠屋の方が適していると考えたのだ。

フェイトの母親の話ライダー達サーヴァント組はランサーからある程度は聞いている。訳あってフェイトとは距離を置いているらしいが、それも病気のためだとランサーは言っていた。

（詳しい事情は分かりませんが、おそらくその人も辛いのでしょう）

ライダーの想像はある意味正しかった。プレシアがアリスアを思うが故にフェイトを遠ざけているのはまさにそれ。だが、憎む気持ちももう大分薄れ出していた。その要因となっているのはアリスアとの約束だとは流石に誰も知りえないのだが。

もっとも、そんな事を知らないライダーは娘と距離を置かなけれ

ばならないという一点について辛いだろうと思っている。そんなライダー達とは離れた位置でフェイトは美由希達に家族の話をしていった。

「リニスさん、か。じゃ、フェイトちゃんにとってはお姉さんなんだ」

「はい。私に色々な事を教えてくれた優しい姉さんです」

「色々な事って、魔法も？」

「はい。家事なんかも少し教えてもらいました」

嬉しそうに答えるフェイト。先程から話すリニスの話に美由希や忍は感心したり驚いたりしていたのだが、その度に彼女の事を誉めているからだろう。フェイトは自分が誉められているみたいに嬉しくなってきたのか、どこか誇らしく語っていた。

それを微笑ましく思いながら美由希と忍は聞いている。自分達も妹がいる身だからだろうか。リニスと呼ばれている女性に親近感を抱き、それを自慢げに話すフェイトになのはやまずかを重ね、笑みがこぼれていた。

（なのはもあたしの事、こんな風に話すのかな？）

（すずかもこんな感じに思ってくれてるのかしら？）

姉として思う事は同じ。だからこそフェイトの話は二人にとってリニスと会ってみたいと思わせるには十分。こんなに思われている人なら、きつと良い人に違いない。同じ『姉』として是非一度話をしたいと二人は思った。

そしてそんな一同を湯船から眺めながらアルフが呟く。

「何かいいね、こづいづの……」

そんな賑やかで、そして穏やかな時間をしみじみ感じながらアルフは思う。絶対全て上手くいく。そんな風に思えるように流れが良い方向に向かっている、と……

「では行きましょうか、恭也様」

「ああ」

「さ、アーチャーさんも行きましょう！」

「分かった。だからファリン、あまり引つ張らないでくれ。浴衣が乱れる」

嬉しそうにアーチャーの浴衣の袖を掴むファリン。それに微かに呆れながらもついていくアーチャー。そんな二人を見つめて微笑むノエル。恭也もそんなファリンに笑みを浮かべた。四人は大浴場に向かつて歩いていった。土郎と桃子は誘われた際、しばらく二人で話をすると返して部屋に残っている。

四人が会話しながら歩いていると、大浴場の入口でランサー達とばったり出くわした。疲れながらも笑みを見せるランサーといつも

と変わらない表情の中に微かに喜びを滲ませる小次郎。そして少し苦笑するユーノとキャスターの姿があった。

「お、何だ。お前達もこれから風呂か？」

「ええ。ランサーさん達もですか？」

「何分汗を掻いたのでな。それに温泉に来たのに入らぬ訳にはいくまい？」

「そうですね。入らなきゃ損です！」

そんな会話をしている恭也達を他所にアーチャーとノエルはユーノとキャスターへと視線を向ける。

「……………何があった」

「あの二人、後少して宝具を使うところでした」

「それは……………お二人も大変でしたね」

「まったくですよ。私達が止めなきゃどうなってた事か……………」

そう答えてキャスターは頬を軽く膨らませた。その隣でユーノがキャスターを嗜める。アーチャーは二人から視線を動かし、ランサーと小次郎を見つめて黙って手を自分の額に置いた。

何を考えているのだ、あの二人は……………

ノエルはそんなアーチャーの呟きに反応しどこか楽しそうに告げ



た。あの二人らしい、と……

恭也達がランサー達と出会った頃、部屋に残った士郎と桃子は静かにお茶を飲みながら視線を窓の外へと向けていた。そこには緑に覆われた山々と晴れ渡る青空が見える。

「……何だか不思議ね」

「……だな」

桃子の呟くような言葉に士郎はそう応じる。

「セイバーが家に来て、貴方が治って……」

「小次郎さんやライダーさん、アーチャーさん達と知り合い……」

「ユーノ君となのはが出会った……」

そう言いあつて二人は笑う。そう、全てはあの日。セイバーが高町家に来た時から始まったのだ。人の縁は奇跡の巡り合わせだと二人は考える。それに文字通りセイバーとの出会いは”奇跡”だったのだから。

それからしばらく士郎も桃子も何も言わなかった。会話せずとも互いの想いは伝わっている。もう何度考えただろう。もしなのはがセイバーと出会わなかったら、と。その度に頭を過ぎるのはなのは



五話前半。キャスターが加わったために加筆修正が多めです。

次回は後編。お待ちかね？の入浴シーンからどうぞ。

無印五話 後編

「美由希さん、キレイな肌しとるなあ」

「そうかな？」

「ちよう触つてもええ？」

「別にいいよ」

「じゃ……ほね」

「キャツ！ はやてちゃん、胸を触るのはどうかな？」

「ちよ、美由希さんくすぐりたい！」

「……いいわね、あれ」

「……何やら嫌な予感が」

「ラ～イダ～ッ！」

「な、シノブっ？！ やめてくださいー！」

「おおっ、忍さんに負けてられんな。……ていー！」

「キャンー！ ーら、はやて！ 何すんのやー！」

「アルフさん可愛いー！ あたしもやりますー」

「な、ファリン?! ちょっとっ! 止めなってば!」

「……なのはちゃん、逃げよ」

「そうだね。……何か近くにいと危なさそうだもん」

「フェイト、アタシから離れるんじゃないわよ」

「あ、アリサ? あれ止めなくていいの?」

このようになのは達にノエルとファリンとキャスターが加わった女湯は騒然としていた。原因ははやてが美由希の胸を触った事に端を発している。その後、それに反撃した美由希。それを見ていた忍が面白がってライダーの胸を揉んだ後からはやてが本領発揮。

湯船を器用に泳ぐように移動し油断していたアルフを触ったのだ。それに驚いたアルフを面白がったファリンまでそれに参加。その様子を見ていそいそなのはとすずかが離れ出し、アリサもフェイトを守るように隅の方へと移動した。

「止めなさい。ハヤテもアルフも」

「ファリンと忍お嬢様もです」

「やられたままなんて嫌なんだよ! あんたもやられれば分かる…

…さっ!」

「そうよ! ノエルもされたら分かる、わ……よっ!」

「」「ぶあっ?!」

何とかそれを収めようとしたセイバーとノエルだったが、逆に悪乗りした忍と自棄になったアルフが二人に襲い掛かった。キャスタ―は一人、そんな騒ぎから離れて我関せずとばかりに体を丁寧に洗っていた。下手に関われば自分もやられると気付いているのだ。

「賑やかですねえ。いい事です」

そんな呑気なキャスターの言葉は喧騒に消えた。一方、眼前の光景を他人事のように眺めるはやて達。まあはやては隙あらば触ろうと考えているらしく手をどこか卑猥に動かしていた。

そんなはやての視界の先では、アルフと忍が嫌がるセイバーとノエルの胸をこれでもかとはかりに揉みしだいている。それを見て悪戯っぽい笑みを浮かべて美由希とファリンも参加し、アルフと忍の胸を鷲掴みし出した。

それに意気込んで参加しようとするはやてだったが、そんな彼女をアリサが全力で止めた。フェイトはオロオロしながら助けを求める視線をなのはとすずかへ向けている。

「こ、これどうしようっ?」

「……………えつと」

「関らない方が……………いいよ?」

フェイトの言葉に気まずそうな声で返すのはとすずか。自分達の無力さを知っているのだ。そんな中、忍から解放され静かに離れたライダーがその会話を聞いて一言。

混沌としていますね……

そのどこか疲れた咳きになのはとすずかがゆっくり頷いた。フェイトだけは近くから聞こえる声に視線を動かして困惑する。はやてがアリサと言い合いを始めていたからだ。

「わたしはいい思い出になる思ってたやな！」

「嘔吐くなっ！ どう見てもただ楽しんでたじゃないっ！」

「やって……わたし、こないな大人数でお風呂入った事ないから」

「……………て言いながらしっかり向こうに視線を向けてちゃ説得力ないわよ！」

神妙な声と仕草で同情を引こうとするはやてだったが、その視線を追いかけていたアリサに隙は無かった。結局はやてはそのままアリサに取り押さえられ、フェイトはなのはとすずかと静かに湯船の隅の方で語らい、ライダーはキャスターの隣へ移動して髪を洗い始めるのだった……

そんな女湯の喧騒とは対照的に露天風呂に浸かる男性陣は実に静かだった。いや静寂を装っているだけとも言える。水面下では、ラonserとアーチャーの激しい戦いが繰り広げられているのだから。

「いいじゃね〜か。俺だけが痛い目みるだけなんだからよ」

「直接的には、な。だが、貴様が覗く事を知りながら止めなかった時点で我々も同罪にされる事を理解しろ」

先程からこんなやりとりが何度交わされているか。そんな事を思いながらユーノは湯船に顔を沈めるがその顔は赤い。何しろ、先程から女性陣の艶っぽい声が微かとはいえ聞こえてくるのだ。忍にアルフ、美由希やファリン。特に本気で嫌がっているセイバーやノエルはかなり大きな声を出しているためによく聞こえる。

恭也は無言を貫いているが顔が心なしに赤い。それがのぼせ始めているからとユーノでさえ思わない。ならば内風呂へ行けばいいのだが、悲しいかなそこは男の性というもの。と、そんな欲望に忠実な二人とは違って、平然と達観した笑みすら浮かべている男が一人。小次郎だ。

「……些か淑やかさには欠けるが、あれはあれで女子らしくて良い」

「れ、冷静ですね……」

「何、少々枯れておるだけよ」

「……俺も、小次郎さんのように達観出来れば」

隣から聞こえる会話や声も何のその。普段と変わらない表情の小次郎をユーノも恭也も尊敬の眼差しで見つめた。そんな三人とは離れた場所で、ランサーとアーチャーが湯船から出て手拭いを腰に巻いた状態で睨み合っていた。

「どうしても止まる気はないのか」



「へっ……ここで行かなきゃ男が廃るだろ！」

「……最早、言葉では止まらんか」

そう呟いたアーチャーの手に干将・莫耶が握られる。それに無言で槍を構える事で応じるランサー。見る者全てを威圧する気迫が両者から流れるが、忘れてはならない。彼らは、全裸の上に手拭一枚でそれを行っているのだ。だからこそ、それをちらりと見やっつてユーノと恭也は思う。

（お願いだから、せめて戦闘服でやってください……）

ちなみにそんな二人を止めたのは、遅れてやってきて事情をユーノから聞いた土郎だった。その時の土郎の剣幕は凄まじいものがあり、娘と妻を持つ父は強しとユーノと恭也は強く思う事になるのだが、それはまた別の話。

それぞれの大浴場の騒動も土郎と桃子の大人が参加する事で終わり、男性陣も女性陣もそれぞれがどこか疲れた顔をして歩いていた。特に騒いでいた者達は説教を受けたため余計だろう。まあ、例外としてまったく関係なかった小次郎とやりたい事が出来たはやてだけは満足そうだったのだが。

そんなこんな温泉旅行だが何も騒ぐ事ばかりではない。夕食を終え、夜の闇が色を濃くし出すとまず恭也と忍が二人で抜けた。それを見て美由希が小次郎を夜の散歩に誘い、アルフも負けじとラン

サーを誘う。小次郎もランサーも二人の誘いを快く承諾し、それを見ていたファリンがならばとアーチャーに声を掛けようとして言葉を失う。

「少しお話があるのですが、いいでしょうか？」

「構わんさ。何だね？」

「ここでは何ですので……」

「……分かった」

予想外にノエルがアーチャーと連れ立って大広間を出て行ったのだ。それを不思議そうに見送るファリン。何故姉がアーチャーへ声を掛けたのだろうと、そんな事を考えていたのだ。そんな彼女を微笑ましく見つめる士郎と桃子。何となくだがファリンの雰囲気は幼く感じられたのだ。

なのは達はもうここにはいない。食事が終わると六人で外へ出て行ったのだ。夜の散歩と星を見るついでに探索魔法でこの辺りを調べてみると言つて、子供達は和気藹々といった雰囲気のまま仲良く談笑しながら大広間を後にしていた。

「ファリンちゃん、気になるなら追いかけたら？」

「え？ ……あ、はい。そうします」

桃子の言葉にその場で考え込んでいたファリンが動き出す。おそらくノエルの話はファリンが想像出来るようなものではないと二人は予想している。だからこそファリンをけしかけた桃子に士郎は何も言わない。ただ、少しだけ苦笑は浮かべていたが。

そして、それを見ていたライダーは隣で満足そうにしているセイバーにこう呟いた。今の桃子が彼女の記憶の中にある一人の女性と重なるものがあつたからだ。

「今のモモコは、どこかタイガと同じ匂いがしませんか？」

「……否定はしません」

「それは肯定と同じですよ、セイバー。それにしても……」

「何です？」

「相変わらず良く食べますね」

そう言つてライダーは少し呆れたように額を押さえた。そうなのだ。セイバーは一人でお櫃一つ半を平らげていた。最初はみなと同じようによそつてもらつつもりだったのだが、セイバーの食いつぶりを知っている桃子が別にお櫃を持ってきてもらったのだ。

それにフェイトだけが驚いていたのは言うまでもない。他の者達はむしろ納得さえしていたのだから。自分の大食らいを指摘され、セイバーは少し照れながらも顔を背けた。

「い、いいではないですか。折角モモコが気を利かせてくれたのです。それを無駄にする訳には……と、そろそろ行きましょう」

「スズカ達の所にですか？」

「ええ。一応、念のためです」

セイバーの言葉にライダーは笑みを浮かべ立ち上がる。それに続

くようにセイバーも立ち上がるのだが。

「私を忘れてもらっちゃ困りますねえ」

キャスターがそう言っただけで微笑みを浮かべたのだ。そんな彼女に二人も同じ笑みを返し頷いた。

「忘れてなどいません。では、三人で散歩がてら護衛と参りましょう」

「女三人と言うのが少々悲しいですけどね」

「それもまたいいと思いますが？ それに、私は一度ガールズトークと言うものをしてみたかったです」

セイバーの言葉に意外そうな表情を見せるライダーとキャスター。しかし、すぐに楽しそうに笑い出して頷いた。それがどこか馬鹿にされたようにも見えてセイバーはややムツとした表情を浮かべた。

「そ、そんなに笑う事もないでしょう！」

「ふふっ、すみません。少々意外だったもので」

「ライダーに同意ですけど、そうですね。確かに失礼だったかもしれませんね。ごめんなさい。でも、いやあセイバーも乙女なんですね」

「その……いけませんか？」

戸惑うように小首を傾げるセイバー。その愛らしさにライダーと

キャスターが優しく笑みを見せると揃って首を横に振った。それに安堵したような息を吐いて歩き出すセイバー。その後ろを少し遅れてライダーとキャスターが歩き出す。その背中を見送り、士郎と桃子は嬉しそうに笑みを見せて言葉を交し合った。

セイバーもなのはと同じで友人を増やしてるな。

ええ。楽しそうで何よりね。

それは紛れもなく娘の幸せを喜ぶ親の姿だった……

月の光と星の輝き。それと僅かな照明の明かりだけを頼りになのは達は歩く。先頭はユーノ。その両隣にアリサとなのは。フェイトはずかと共にはやての車椅子を押している。ユーノは地球での星の読み方を話していた。

何故ユーノがそれを知っているかと言えば、彼は幼い頃から発掘や遭難した際の位置を知る方法の一つとして役に立つからと、部族の大人から星読みというものの自体を教わっていたのだ。

そして、その習得したものと同じように地球の星読みもある事を知り、何かの役に立つかと思って覚えたという訳だ。結果、見事話のタネとして役立ったのだから幸いと言える。

「で、あの北極星を基点に位置を把握するんだ」

「ホント、色々知ってるわね」

「ユーノ君って博学だよな」

「そ、そんな。ただ興味があつて覚えたただけだよ。それになのはやアリサだつて機械や外国の知識は凄いいじゃないか」

感心するアリサとなのはの視線に照れるユーノ。照れ隠しなのか本音なのか分からないが、同時に二人の知識を褒めるのが彼らしい。そんな会話を後ろで聞いていたフェイト達もそれに同意するように頷いていた。そこでユーノは話を星から星座などにまつわる逸話へと変えた。その時に美しく時に美しい内容になのは達は聞き入った。ユーノはそんななのは達に、いくつかはキャスターから教えてもらったけどねと言いながら苦笑する。そんな話をしながら六人は歩く。見上げれば満天の星空。淡く月が輝く中、夜の闇と星の光が彩る世界。普段では感じる事のない幻想的とも言える光景。それが少女達の心に何かを刻む。

それぞれが抱く思い。それは違う形だけれど願いは同じ。

（いつか、またみんなで来たいな。……うん、絶対）

（今まで夜空なんて意識しなかったけどこんなにキレイだったんだ……。きつと……。友達と一緒にだから、だよな）

二人の魔法少女は囁み締めるように夜空を眺め……

（旅行なんて始めてやけど、やっぱり楽しいな。……はよ足治して今度は自分の足で歩くんや。みんなと一緒に）

（キレイな空……。いつもとは違う感じがする。また来年も……。みんな

なで来れたらいいな)

(何て言うのかしら? 一生の思い出でいいのよね、この場合。…うん。もっと増やしていきたいな、こういうの)

はやては決意を、すずかは祈りを、アリサは願いを抱き……

(ミッドも地球もどこでも星空の輝きは同じなんだな。だけど、きつとこの光景は今だけのものだ。なのは達と、友達と見るこの星空は……)

ユーノは初めて得た同年代の友人達との時間という事を改めて実感し、心から嬉しく思っただけを浮かべていた。

こうして夜空を見上げて子供達は自然と表情も穏やかになって笑みが増える。そして互いにそれに気付いて顔を見合わせ微笑み合った。

「必ずまた来ようね!」

なのはのその言葉に五人は笑顔で頷くのだった……

なのは達が夜空を見上げていた頃、別の場所では……

「……ね、恭也」

「何だ？」

「私達の一族の話、覚えてる？」

忍の言葉に恭也は無言で頷く。夜の一族。その事は忍から既に聞いている。それがキツカケで恭也は忍と付き合っているのだから。

「すずかがね、そろそろなのはちゃん達に話そうと思ってるらしくて」

「……そうか」

「うん。前々から考えてたみたいなんだけど、なのはちゃんが魔法の話をしたでしょ？ あれが決心させたみたい」

忍の発言に恭也も納得する。すずかは優しく素直な子だ。故になのはが包み隠さず話した事は大きな後押しになったのだろう。自分だけ隠し事をしているのはきつと気が引けたのだ。それなら、その話をしようと思っても無理はない。そう恭也は思った。

「でも、ちょっと問題があって……」

「ん？ なのは達なら受け入れると思うが……？」

「違うの。そこじゃなくてね。その……」

言い淀む忍。それを不思議そうに見つめる恭也。忍は少し考え、恭也に一度視線を向けて「ホントに分からない？」と尋ねた。それに真顔で頷く恭也を見て忍が鈍感と呟いたのは仕方ないとも言える。何故ならば恭也はその忍が悩む事を知っているのだから。



「いい？　なのはちゃん達だけなら問題ないの。問題は男の子のユーノ君」

「……そういう事が」

そこで恭也も納得がいった。夜の一族の秘密を打ち明ける事はあの意味の契約でもある。同性のなのは達ならさして問題ではないが、異性であるユーノだけは話が別だった。

異性に一族の秘密を話す事はある意味で求婚と同義と言える。別に結婚する必要はないのだが、一生秘密を守る事を誓ってもらう以上その傍から離れる訳にはいかないと心理もあるためだ。

「そ。すずかの性格からして彼にだけ打ち明けないなんてありえない。だけど……」

「打ち明ければあいつを伴侶にせざるを得ない、か」

「……まあ、別に強制って訳じゃないけどね」

そう告げて忍は夜空を軽く見上げて呟く。何故妹がそこまで意識してしまうのか。その原因が何となくだが分かっているからだ。

それを強く意識してるのって、やっぱり私達が原因かしら……

そんな忍の呟きは、既に思考を巡らせ始めた恭也には届く事無く、ただ静かに夜の闇へと消えていくのであった。

夜風が髪を揺らし、それを心地良いと感じながら美由希は小次郎と歩いていた。先程から会話はない。だが不思議とそれを美由希は嬉しく思っていた。

(何たるな。……こついの、結構好きかも)

どこか小説かドラマみたいな雰囲気だ。そんな風に感じながら美由希がちらりと視線を横にやれば、小次郎もまた美由希を見ていたようで視線が合う。それに若干気恥ずかしくなりながらも、美由希は笑みを返してみた。それに小次郎も柔らかく笑みを返した。

その瞬間、トクンと美由希の鼓動が速くなる。それと共に顔の辺りが熱くなった。そんな自分を見られたくなくて、美由希は出来るだけ自然を装いながら顔を背けた。

(あゝ、どうしょ。絶対顔真っ赤だ、これ)

そんなうつろたえる美由希に小次郎は不思議顔。すると美由希が眼鏡を外し、息を吐いて顔を押しさえ始めた。それを見て小次郎は前々から感じていた疑問を尋ねてみる事にした。

「美由希殿」

「へっ?! あ、ええつと……何ですか?」

「何故眼鏡を掛けておるのだ? 見えていない訳ではなからう?」

そう言われて美由希はどこか納得したように笑うとその理由を答えた。これは切り替えみtainなもので、眼鏡を外す時は基本御神の

剣士としての自分なのだ。その切り替えを自分でつける意味合いも込めて眼鏡を掛けていると。

（なるほどな。美由希殿もやはりこの時代の剣士であるが故に自らはじめをつけているか。……古き時代の私にはなきものよ）

それを聞き、小次郎は納得したように頷く。そして、眼鏡を掛け直す美由希を見て何気なく告げた。それも以前から感じていた事。そこに他意はない。ただ心から小次郎はそう思っていたのだ。

しかし、掛けぬ方が美しいと思うのだが……？

その一言が美由希の顔を茹蛸のようににしたのは言うまでもない。意識している男性からの偽りない言葉。その後しばらく、褒められた美由希は不自然にわたわたし、小次郎を大いに困惑させる事となる。これもまた二人だけの思い出と変えて……

散歩中に見つけた池の近くの芝生。そこに座ってランサーとアルフはぼんやりと景色を眺めていた。先程探索魔法を使ったフェイトからこの辺りに一つジュエルシードがあると連絡を受けたが、慌てて探す事はしなかった。

なのは達も散歩がてら辺りを探してみるとしている事もあって、ランサー達もしばらくは休息体制でいようと決めたのだ。まあ、それでも周囲をそれとなく探してはいたのだが。

「……いいよね、こんなのも」

「そうだな。悪くねえ」

二人の視線の先には水面に映る月影一つ。その儚さがどこか今の時間を表している気がして、アルフはその考えを振り払うように視線をランサーへ向ける。その目に強い決意を灯して。

「ねえ、ランサー」

「ん？」

「あたしって、さ……いい女かな？」

「当たり前だろ」

アルフの問いかけにランサーは躊躇う事無く笑って言い切る。それに覚悟を決めてアルフは真剣な眼差しでランサーを見つめ。

「リニスよりも？」

尋ねた。踏み出そうとした一歩。それは仲間じゃなく『女』としての第一歩。どこか不安そうな表情のアルフ。それを感じ取りランサーは先程までの笑みを消し、真摯な雰囲気を漂わす。

「リニスよりもなんて言えねえ」

その言葉にアルフは小さく「……そうだよ」と呟く事しか出来ない。やはり自分では女らしくない。そう思っただ沈んだ雰囲気の中でアルフへランサーはそのままの表情でこう言い切った。

お前はお前だからな。リニスと比べてどうすんだよ。どっちも違う部類のイイ女だ。だから、んな顔すんな。

そう言つて、ランサーはアルフの方へ向かつて笑みを見せる。それは人懐っこい笑顔。リニスもアルフも好きなランサーの心からの笑み。それにアルフは心から嬉しそうにランサーへ抱きついた。

それに若干驚きながらもランサーも笑って受け止める。イイ女との言葉は人によりけり。しかし、ランサーにとって言えばイイ女のもっとも重要な条件はその生き方が輝いている女性だろう。そこから考えればリニスもアルフも当てはまる。共に己が全てを賭けて守ろうとするものがあるのだから。

アルフの温もりはどこか嬉しそうに笑みを浮かべるランサー。その嬉しい胸に顔を埋めながらアルフは思う。

(ごめんよりニス。でも、アタシだって本気なんだ。ランサーは、渡さないからね！)

(一体何がどうなつてんだか今一つ分からねえが……ま、いいか。本当にツイてやがるぜ、今回は。ん……?)

今回の召喚に対し満足そうに感じたランサーの視界のどこかで何かが光った。それが妙に気になり、ランサーはアルフを優しくひき放しその光ったものを探しに池に近付く。すると、そこには池に沈んだジュエルシードがあった。

「おいおいどこまでついてんだ、こりゃ」

今までにないぐらいいついてる。そう思うも浮かべるは獰猛な笑み。そんな表情のままランサーは後ろのアルフへ声を掛けた。

「アルフ。フェイトを呼んでくれ」

「……どうしたっていうんだい？」

「さっき反応があったんだろ？ そのジュエルシードがここにあったんだよ」

こうしてアルフの甘い時間は脆くも崩れ去った。ちなみに、後日この事をアルフから告げられたリニスが複雑そうな思いでランサーを見つめたのは本人だけの秘密。

なのは達が星を眺めていた頃、アーチャーはノエルと自身が割り当てられた部屋にいた。部屋割りは、男性陣が士郎、恭也、ユーノでまず一つ。ランサー、アーチャー、小次郎で一つ。女性陣が桃子、美由希、忍、セイバー、キャスターで一つ。ライダー、ノエル、フアリン、アルフで一つ。最後になのは達五人で一つとなっている。

「で、話と云うのは」

「……薄々勘付いておられるとは思いますが、私とフアリンの事です」

ノエルの言葉にアーチャーは小さく息を吐いて尋ねた。

「何故今になって……」

「すずかお嬢様の決意を聞いたからです」

ノエルは語る。自分の事を親友達に隠して生きるのは辛い。嫌われてもいい。この旅行が終わったら本当の自分を知ってもらいたいんだ。そうすずかは旅行前にノエル達に宣言した事を。

それを聞き、自分も世話になっっているアーチャーに己の事を隠している事が嫌になったのだ。だからこそこの旅行中に全てを話しておきたい。そう思ったのだと。

「……そうか。では君達は……」

「はい。自動人形と呼ばれる存在です」

ノエルの話にアーチャーは驚きを見せなかった。既に夜の一族の話自体は忍から聞きだしている。その身に纏う霧囲気が薄い記憶の中にある使徒や真祖に近かったからだ。当然ではあるが、その事を絶対に話さないと誓わされたりもした。余談ではあるがその時の霧囲気は、かのあかいあくまと同質だったとはアーチャーの談。

だからアーチャーはノエル達の事も勿論聞いていた。しかし驚かないのはそれだけが理由ではない。ノエル達がどんな存在だろうとも彼女達がすずか達をどれだけ愛し、また家族として暮らしているかを知っていたからだ。

その心が作り物などではなく紛れもない本物だと感じていた。故にその話を聞いてもアーチャーには別に驚くべきものはなかったのだ。あの誓いを思い出す前の彼ならば違ったかもしれないが、今の彼にはそれだけでよかったのだから。

（私もやはり変わったな。凜、君との再会はこの召喚のためにあっ

たのかもしれないぞ)

ノエルの語る話を聞きながらアーチャーは微かに笑みを浮かべる。そんな彼に気付く事もなくノエルは話を終えた。

「……以上が、私達の話です」

「そうか。で、この事を忍は知っているのか？」

「はい。許可は頂きました」

「そうか……」

そう言つてアーチャーは少しだけ目を閉じた。それにノエルが一瞬息を呑んだ。拒絶されたと思つたのだろうか。それを感じ取つたアーチャーは、少しだけ笑みを見せると目をゆっくりと開けて告げた。

「そろそろ時間も遅くなつてきた。風呂にでも行こうと思つが君はどうする？」

「……いいのですか？」

「それが何を指しているかは知らんが、一つだけ言つておく。私は君達姉妹がどんな存在だろうが構わん」

アーチャーの言葉にノエルの表情が変わる。それは驚き。それを無視し、アーチャーは言い切つた。

「ただ、はやての……その周囲の幸せを邪魔するのでなければそれ



でいい。……それに君達は言ってみれば私の教え子でもある。情が無い訳ではないからな」

呆然となるノエルを見て、そこでアーチャーは一旦咳払いをした。その後の彼はどこか照れているようにも見えたとは後のノエルの談。

つまり、そういう事だ。

そう言つて素早くアーチャーは立ち上がつて背中を向ける。そんな行動にノエルは静かに笑みを浮かべた。それと同じくして笑みを浮かべた者がいた。襖の前でこっそり盗み聞きしていたファリンだ。彼女は音を出る限り殺して部屋に入り、今のように襖の前で聞き耳を立てていたのだ。

（良かった。アーチャーさんに嫌われなくて本当に良かったっ！）

何を話しているのだろうと興味本位で聞き耳を立てたファリンだったが、聞こえてきた内容は思わず言葉を失うものだった。しかし、アーチャーの答えを聞いて心から安堵した。色々な事を教えてくれ、またライダーと同じく面倒を見てくれる兄の如き存在。そんな相手に全てを受け入れてもらえた事。それがファリンには嬉しかったのだから。

だが、この後ファリンは当然二人に見つかり盗み聞きをしていた事を軽く説教される。しかし、その両者の雰囲気はどこか優しかったのは言うまでもない。そう、二人は最初からファリンがいる事に気付いていたのだ。それを察してファリンも怒られているのに笑顔を浮かべ続けた。姉と兄の優しさを感じて……

ジュエルシードを回収し、笑顔で会話に花を咲かせて歩くのは達。それを後ろから見守り、微笑むのはセイバー達サーヴァント三人娘だ。その思いは奇しくも同じ。この笑顔がずっと続きますように。その願いを三人は心から祈る。

「ちよつといいですか、セイバー」

「何です？」

するとライダーが足を止めセイバーに声を掛けた。それに不思議そうに振り返りセイバーも足を止める。キャスターはその呼びかけから何かを察したのか、足を止める事無く離れるように歩き続ける。その心遣いに内心感謝し、ライダーはセイバーへ告げた。

「馬鹿な話だと私自身思います。ですが、敢えて聞きます。サクラ達とスズ力達を会わせたいと思った事はありませんか？」

「……そう、ですね。ないと言えば……嘘になります。きっとそれが叶うなら楽しいでしょう」

そう答えセイバーは空を見上げた。そこには満天の星空がある。ライダーもそれにつられるように見上げて呟いた。

この星空を、サクラ達も見ているでしょうか？

私達がそう思うなら………そうでしょう。

その呟きに答えるセイバーの声はどこか懐かしむ響きがあった。もうきつと戻る事は出来ない時間。会う事の出来ない者達。それらを思い、二人は遠い目をしていた。そんな二人をやや離れた位置で見つめる者がいる。

その者　キャスターはセイバー達と同じように視線を上へ動かした。そこに輝く星空はとても美しく、どこか悲しくも見えた。それが何故かは分からないがおそらく自分の心境が原因だろうと結論付け、キャスターは一人呟いた。

　　どうやらセイバー達にも以前のマスター達との思い出があるようですね。いつか再会出来るといいんですけど……

楽しかった旅行も、あつという間に終わりを向かえ、宿を引き払う土郎達。それを眺めセイバーがライダー達にある提案をした。それにノリノリで応じるキャスターと苦笑混じりに了承するライダー達。

「さ、ミュキ。お願いします」

「はい。じゃ、撮りますね。はいチーズ」

旅館をバックに微笑むセイバー。それとは対照的に無表情のアーチャー。ライダーはどこか笑みを浮かべ、小次郎は普段の顔。ランサーとキャスターは面白そうに笑顔を浮かべVサインまでしている。このサーヴァント達の写真はそれから始まるセイバーのアルバムの最初を飾る事になる。そして、それを見ていたなのは達も参加し



幕間2くすずか、吐露すく

夜も深まり、明かりも消えた室内。だが、そこにあるのは安らかな寝息などではなく……。

「でな、みーちゃんがな……」

「そうなんだ……。あ、そういえばこの前ね」

真つ暗な室内に布団が五つ。そこでうつ伏せになって顔を出し、なのは達は楽しいお喋りタイム。普段ならもう寝ている時間でも、大人もいなければ保護者もない状況ではこうなるのが子供というもの……

「にやはは、それじゃアーチャーさんが可哀想だよ」

「でも、はやてつたら楽しそうに笑ってたんだから」

「当然や。あれはアーチャーが悪い」

自信満々に言い切るはやてに、アリサもすずかも笑みを浮かべる。大抵、この五人　フェイトがいない頃は四人で話す時、よく話題になるのはサーヴァント達だ。

何しろ身近な共通点であり話に事欠かない。面白い話から大変な話まで実に多岐にわたる事もあり、気が付けばこういう流れになるのは当然と言える。もつとも、セイバー達はセイバー達で話し出すとなのは達の話題に終始するのでどっちもどっちだろう。

「そういえばフェイトちゃん」

「何？」

「ランサーさんって魔術が使えるんだよね？」

なのはの問いにフェイトは頷く。それに興味を持ったのはファンタジーが好きなはずかだ。

「ランサーさんの魔術ってどんなの？」

「キャスターさんやなのは達のととは違うんでしょう？」

「えっとね……ランサーの使える魔術は……」

すずかとアリサの言葉にフェイトは少し考えて話し出す。以前、ランサーから聞いた事を思い出しながら……

フェイトが語ったのはルーン魔術に関する話。それを聞いてなのは不思議顔。何故なら、なのはがセイバーから聞いた魔術はそれとはまた違ったものだったからだ。

「……私が聞いたのとは違うんだね」

「なのははセイバーさんに聞いたの？」

「うん。ええっと、強化とか流動とか何だか色々あるんだって」

アリサの言葉になのはは必死に記憶を辿る。そして出てきた単語を告げたのだが、それでどういう事が出来るのかはなのにも理解出来ていない。だが、アリサはその単語だけで大体の事を察したように頷いてこう言った。

「つまり、魔術っていうのも分類があるって事ね。ルーンとかも魔術で、強化とかも魔術なんですよ。分かり易く言えば……そうね。学校の教科と一緒に」

学問という括りで国語や算数等に分けるように、魔術も大きな一つの括りでありそれを細かく分類するとルーンや強化等に別れていくのだろう。そうアリサは説明した。それにフェイトも頷き、魔法も同じようなものだからとそれを後押しした。

その言葉に納得し、なのは達は身近な例えで語ったアリサに尊敬の眼差しを向ける。それをどこかくすぐったそうに思いながらも満足でもない感じのアリサ。

「でも、セイバーさんは魔術使えないんだよね？」

「そうなの。だけど魔力はあるんだって。魔法も魔術も使えないのに……」

「セイバーは宝具に魔力を使うんだよ。サーヴァントは大抵そうだってランサーも言ってたし」

さすがの言葉に苦笑いのなのは。その発言を聞いてフェイトが笑みを浮かべながらそう言った。だが、そのフェイトの発言に四人が揃って首を傾げた。そしてそれに今度はフェイトが不思議顔。

「……知らないの？」

フェイトの言葉に頷く四人。宝具等と言うものは初めて聞く言葉だった。そこでなのは達はふと気付く。自分達があまりセイバー達の事を知らない事に。聞いた事は何度かある。答えてくれた事もある。だが……

(サーヴァントが何なのかって事は聞いてなかったなあ。……あれ？ 私、知らない事多い？)

(小次郎の奴、アタシにはまだ早いとか言ってたのよね。それにしても……宝具って何よ？)

(ライダーの本当の名前は教えてもらったけど宝具なんて初めて聞いたよ。どんなモノなんだろう？)

(うーん……アーチャーは昔の事聞くとめっちゃ表情怖なるからなよし、聞くならランサーさんや)

(し、知らなかったんだ……教えちゃっても良かったのかな……？)

それぞれ思う事はあれど、ここで隠す事でもないように思えたために詳しい話をと頼むのは達。フェイトは少し迷ったものの、ランサーが自分に教えてくれたのだからセイバー達も聞けば教えたはずと納得して語り出す。

それは宝具の事やサーヴァントの事だった。彼らは英霊と呼ばれる存在で異世界から来た者達。ランサーは本人曰く「人間としてはとつくに死んでる」らしく、大抵のサーヴァントがそうだと言う事。

そして、彼らには”宝具”と呼ばれる切り札があり、その使用



には基本魔力が必要だと言う事。ランサーは名前の通り槍がそれなのだ。ちなみにランサーは同じ話をプレシアにした際、死者蘇生ではないと明確に断言した。魂のみになり、都合により仮初の肉体を与えられる事を伝えたのだ。

それを聞いたプレシアは、どこか悔しそうな表情で黙る事しか出来なかった。しかも、人間の力ではなく世界によって束縛される事まで告げ、それを聞いたプレシアは完全に興味を失った。同時に、世界に縛られる事になっても自分を貫けるランサーに改めて感心したのも事実だったが。

なのは達もセイバー達が死者と言われてもそれ程驚きはしなかった。初めて出会った時の異常さから、むしろその方が納得出来ると思えた程だ。それに例え死者だとしても今こうして過ごしているのは事実。触れるし話も出来る以上、とても死んでいるなどと思えなかったのも驚きを少なくした要因だった。

そんな中、その話を聞いてアリスは一つの疑問を浮かべる。小次郎はアサシンと名乗っていた。宝具とやらは何なのかだけではなく、そのクラスの意味だ。アリスはアサシンの意味を知ってはいる。だが、小次郎の風貌や言動などが”暗殺者”という言葉とは少しも合致しないので困惑していたのだ。

そんなアリスとは多少違うが宝具が見当もつかないのはさすがも同じ。ライダーは魔眼の事を話してくれたがそれが宝具とは思えなかったのだ。そんな二人とは違ってクラス名から宝具の見当が付け易い者達がいた。

「じゃ、アーチャーの宝具は弓やな？」

「そう……だね。多分そうだと思うよ」

「セイバーは？」

「剣士って意味だと思うから……剣、かな」

その名から予想が付けやすいのはとはやてにフェイトは少し不安そうであるもののそう答えていく。それを聞き、なのははセイバーが手にする見えない剣を思い出す。どんな剣なのか分からないがセイバーの切り札ならおそらく凄いものに違いないとなのはは確信していた。

一方のはやてはアーチャーが弓を持っているところを見た事が無い。故に、何とかその姿を想像しようとするが思いつくのはいつもの皮肉屋スマイル。しかもそれが宝具を想像出来ない自分を馬鹿にしているように思えてきて、はやては表情を苦いものへ変えた。

(……ダメや。全然想像できん。それどころかイライラしてくるわ)

頭を軽く押さえながらはやてがそんな事を考える横で、さすがなのはに質問中。内容は、セイバーとライダーは昔一緒に暮らしていたらしいが何か聞いてないかという事。

それになのはは以前セイバーから聞いた衛宮邸の話語り出す。それを聞きすずかは聞き覚えのある名に気付く。そう、それはライダーが教えてくれた自分自身に似ている女性の名。

「ね、今桜さんって言った？」

「ふえ？ う、うん。セイバーが話してくれたよ。凜って人の妹さんでお料理上手なんだって」

「……凜さん……妹……」

「すずか？」

「どうしたのよ？」

何かを呟き出したすずかに困惑のなのはと戸惑うフェイト。アリスは不思議そうに声を掛け、はやてはその声で意識をすずかへ向けた。

「あのね、その桜さんって人の事、セイバーさんは何て言ってた？」

どこか恐る恐ると言った感じのすずかになのはは疑問を感じながらも思い出す。セイバーが桜をどう言っていたかを。そして、若干の間が開いてから……

「優しくて、暖かで……強い人って言ってたよ」

「……そっか。やっぱりライダーの言ってた通りなんだ」

なのはの答えを聞いてすずかは噛み締めるように呟く。ライダーの言っていた彼女自身と桜を家族や友人と呼んだ相手。その一人がセイバーなのはその答えで確信出来たからだ。

そんなすずかへなのはが何気なく言った言葉が大きな衝撃を与えた。

「そういえばセイバーが言ってたけど、その人も少し普通の人は違ってたんだって」

思わず息を止めるすずか。その表情は恐怖一色に染まっていた。幸い下を向いていたから顔は見えないだろうが、心臓の鼓動が早鐘

のように響いていた。破裂しそうな思いを秘め、すずかはそのま  
耳を澄ます。するとなのはの言葉にはやてが反応し

「何が違ったん？」

「確かね、魔術師の家で生まれて養子に行っただって。その時の  
決まりか何かで凜さんと他人みたいに接しなきゃいけなかったんだ  
って言ってた」

「それは嫌だね」

「でもね、セイバーが言うにはその決まりも色々あって無くす事が  
出来たから姉妹に戻っただって」

「そうなの。でも、複雑よねその状況。姉妹なのに姉妹じゃないっ  
て」

アリサの言葉になのは達は頷く。なのはもフェイトも知らない。  
自分達も似た様な環境にいるなどと。その過程こそ違い、姉妹でな  
いのに姉妹という表現は二人にも当てはまるものがあるのだ。すず  
かは内心安堵しつつも小さく「……それだけ？」と尋ねた。

それになのはは記憶を辿ってセイバーとの話を思い返そうとして  
いた。しかし中々それ以上の事を思い出せず難しい顔を浮かべるな  
のは。そんななのはを横目にはやてが疑問に感じた事をすずかへ尋  
ねた。

すずかちゃんは何か知つとるんか？

えっ？

不意打ちの質問。すずかははやての問いかけに思考が止まった。彼女にとってそれを答える事はかなりの勇気が必要だったからだ。確かにこの旅行が始まる前に自身の秘密を打ち明けようとは決めた。だが、それはあくまで自分のタイミングで踏ん切りをつけてやらねば出来ない事。

そのためにすずかははやての顔を見つめたまま固まる。そんな様子に気付かず、はやては自身が抱いた事を告げた。

「いや、セイバーさんが知つとるって事はライダーさんもやる？  
そやからすずかちゃんに聞いて……みたん……やけど……？」

後半尻すぼみになっていくはやて。段々すずかの表情が曇っていったからだ。まるで聞かれたくない事を聞かれたような反応。それが今のすずかの顔に如実に出ていた。

そんなすずかの内心は揺れていた。それはライダーが話してくれた事を話すか否か。桜が自分のように人には言えない苦しみを背負っていた事を。

(……………どうしよう？　桜さんはライダーの大切な人だし、それに内容も内容だから……………)

自分と非常に似た部分がある桜。その人に無断でその秘密を少しとはいえ話す。それがすずかにとっては色々と思う事が多いのだ。それでも、彼女に話さないという選択肢は無い。しかし、その条件としてすずかはある事を挙げた。

「一つだけ約束してくれる？」

「約束？」

「うん。……桜さんの事、悪く言わないで欲しいんだ」

それは切実な願い。すずかとしてはライダーの大切な桜を嫌って欲しくない事と、自分の憧れでもある桜の事を勝手に話す事に対するせめてもの償いだったのだろう。

だが、それは彼女の本心からの想いでもある。無意識にすずかはこの話を自分の話と同じに捉えていたのだ。

「実はね……桜さんには、人に言えない秘密があつたの。受け入れてくれる人の方が少ないような内容の……ね」

すずかは桜の事を全て聞いた訳でない。ただ漠然とそう言われただけなのだ。自分と桜は良く似ていると。それ故、すずかは明確に桜が抱いていた秘密を知らない。

だが、その状況の辛さと言い出せない申し訳なさは痛いほど理解出来ていた。今の自分がまさにそうなのだから。親しい友人達へずっと隠している事がある。それはやはり優しいすずかには重たいものだから。

「詳しい話はライダーもしてくれなかった。でも、その秘密を親しい人達に隠して生きるのは凄く辛かったんだと思う」

だからだろう。語るすずかの口調にも熱が籠る。それは普段の彼女からは考えられないもの。

「けど、けどね？ 話したくなかった訳じゃなかったんだよ？ ただ、それを話して嫌われるのが怖かったの！」

その目に涙を浮かべてすずかは語った。それは奇しくも桜の想い

を明確に言い当てた。そして、同時に自分の想いも……

そんなすずかをなのは達は息を呑んで見つめていた。普段は大人しくどこか物静かなすずか。そんな彼女が感情を露わにして告げた言葉。そこに何かがあると察したのだろう。だからか、やや間を置いてアリサが言った。

「……気持ちは何となく分かるわ。でも、アタシがその桜さんに会えるならこう言ってる。例え貴方がどんな人でも、セイバーさんやライダーさん達のように貴方を大切に思ってる人は嫌ったりしないって」

「うん、私もかな。それに受け入れられないって言っても、きっとそれはその人を良く知らないからだよ」

「フェイトちゃんの言う通りや。わたしもアリサちゃんと同じ気持ち。わたしなんかは逆に話してくれたら嬉しいわ。ああ、わたしの事そんなに信頼してくれてるんやって思えるから」

そんな三人の答えにすずかは意外そうな表情を浮かべていた。そのすずかになのはが笑顔で最後に告げる。

「それに、すずかちゃんがそんなに大事に思う人だもん。きっと、私達も嫌ったりしないよ」

そのなのはの言葉に三人も力強く頷き返したのを見て、すずかは涙を一筋流し嬉しそうに頷く。

そうだね。なのはちゃん達ならきつとそうだよ。

にやはは、ちよつと単純かな？

なのはが言った一言にアリサが「一緒にするな」と嘯み付いて、はやてが「そうやそうや」と離し立てる。それを横目にフェイトは時計へ視線を移し「あ、こんな時間だ……」と呟いた。

すずかは賑やかになるなのは達を眺めて旅行前の決意を新たにした。桜のように自分も勇気を出そうと。自分を支えてくれた者達へ秘密を打ち明けたらう桜のように。

（すずかちゃん、やつといつもの顔に戻ったや。……そんなに好きなんだね、桜さんの事）

出来るなら一度会ってみたい。そんな事を思いながらなのは周囲の状況に意識を戻してこう切り出した。

「と、とりあえずそろそろ寝ようよ」

その言葉にはやてとアリサが止まるはずもなく、話を逸らすなとかえって逆効果となる。その口勢に困り果てるのはを見て、フェイトとすずかが苦笑い。こうして五人の夜は更けていくのだった……

余談だが、翌朝五人は桃子達に説教される。理由は言うまでもない。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -



幕間その2。本編に絡む大事な話です。

すずかの桜に対する想いがメインでしたがどうだったでしょうか？

……何気にすずかかって本当桜に似てますよね。特に成長した姿とか  
なんて……

## 無印六話 前編

「分かった。じゃ、アルクエイドの用事が終わり次第向かってみる事にする」

『あくまでも詳しい事情を聴く程度にね。局員としての行動は許されていないのだから』

「言われなくても分かってるよ。じゃあまた連絡するから」

『ええ。彼の向かった場所はその時にね。とりあえずは楽しんでいらっしやい』

そこでデバイスを使った通信が切れた。クロノは母親の言葉に小さく苦笑すると入っていたトイレの個室のドアを開けた。そして、必要はないのだが一応用を足したと思われるので手を洗ってエアータオルで水気を飛ばし、最後に持っていたハンカチをズボンから取り出して手を拭きつつ歩き出した。

クロノはそのままエイミー達がいる場所を目指して歩く。空港内は多くの人で賑わっていて、行き交う人々はどこか忙しく見える。クロノはそんな光景はどこでも同じなのだなと思いつつ視線を動かした。その先には、待合スペースのソファに座って寛ぐエイミーと一人ある方向を眺めるように立ち尽くすアルクエイドの姿があった。

「あ、お帰りクロノ君。思ったよりも長かったけど何か頼まれた？」

「ああ。どうもここへ来ている少年がいるらしいんだが訳ありらしい。出来ればその彼に会ってみて欲しいそうだ」

「そつか。じゃ、そつちが先？」

「いや、一先ずアルクエイドの行きたい街を目指す」

そう言つてクロノはエイミイの隣へ静かに腰を下ろした。そこでクロノは軽く肩を解すように動かす。どうやら思ったよりも凝っているようだ。そんな様子を見てエイミイが小さく笑つた。十四歳とは思えない行動だったからだろう。それにクロノは少しだけムツとした顔を見せるも、気にしないように肩を動かす。

「しかしやつと着いたな。想像以上に長かつた……」

肩も少し解れたのかクロノは疲れたような声を出した。そして、その左横にある自分の荷物と持たされていたエイミイの分の荷物を見て小さく息を吐く。エイミイはそんな彼に同意するように息を吐いた。イギリスから日本まで飛行機で揺られる事数時間以上の旅路は、転送魔法などに慣れた身では飛行機での移動は中々疲れるものだった。

それもそうだろう。何せ管理世界同士を行き来する時に生じる誤差とは比べ物にならない程の時差があるのだ。朝に出発した三人は、日本へ到着した時には日が暮れていた事に軽い驚きを感じただから。

「ほんとだね。でも、こういうのも偶にはいいかも。旅してるって感じするよ」

「それは分からないでもないが……」

エイミイの意見に苦い顔を返すクロノ。魔法文化がない世界であり、管理外世界の地球。そこでは自分達の常識や認識が通用しない部分があるのが当然だと彼も知っている。それでも人は楽な方へ、便利な方へと体が慣れるものだ。特に最近はアースラでの移動ばかりだったのだから余計だろう。

そのままクロノへこの後の事を打ち合わせようとエイミイが話を切り出そうとしたところで、その視線が少し不思議そうに動いた。その視線を追いかけるようにクロノも視線を動かす。そこにはアルクエイドがいた。彼女はやや怪訝そうな表情を浮かべてある方向を見つめ続けていたのだ。

「……アルク、さっきからどうしたの？ 何かこの先にあるの？」

そんなアルクエイドをある程度眺めていたエイミイだったが、一向に彼女が意識を自分達へ向けてくれそうにないと判断したのだろう。立ち上がってその隣へ並んだのだ。そこからなら何か見えるのではないか。そう考えたエイミイはアルクエイドへ声を掛けながら同じ方向を見つめ続けた。

だが見えるのは行き交う人々だけであり、何か変わった物は何一つとして見当たらない。するとアルクエイドは信じられないとばかりに小さく呟いた。その音量が小さすぎてエイミイは顔をアルクエイドへ向けて再度聞き返す。

「え？ ごめんアルク。もう一回言ってくれませんか？」

「……妙な魔力の流れを感じるんだ。この方向から」

「それって……まさか」

アルクエイドはエイミイの声を無視するように顔をクロノへ向け

た。その表情だけでクロノはアルクエイドが何を言いたいかを理解した。真剣な眼差しだったのだ。

「……先に行きたい場所が出来たという事でいいか？」

「うん。魔術師がいるかもしれないんだ。少なくとも……魔力の流れをいじれる奴がいる」

「分かった。その場所は分かるんだな？」

「任せて」

それだけ話すとアルクエイドはすぐさま背を向けて歩き出した。

クロノはその後を追うべく荷物を手に立ち上がったところでエイミイにその手を掴まれた。その行動に何かあったのだろうかと思つて視線を動かすクロノ。そんな彼へエイミイはアルクエイドの荷物をその手へ握らせた。

「これもクロノ君が持つてね。女の子に重い物を持たせちゃダメだよ」

「……………君つて奴は」

笑顔で断言して歩き出すエイミイの背中をため息交じりに眺めるクロノ。それを知つてか知らずかアルクエイドを呼び止めるように声を掛けるエイミイ。その呼びかけに振り向いてキョトンとした表情を見せるアルクエイド。とりあえず時間を考え宿を確保する事にした三人は、そのまま夜の街へと足を踏み出すのだった。

アルクエイドが感じたものはキャスターがジュエルシードの発動を察知するための魔術。こうしてクロノ達はジュエルシードの事を

知らずに海鳴へと足を向ける事になった。そこで彼は忘れる事の出  
来ないロストロギアと出会う事になる。そして気付くのだ。自分が  
アルクエイドと出会ったのはある意味で運命だったのだと……

「ん〜……つと、今日も平和ですねえ」

いつものように庭で伸びをし、キャスターは降り注ぐ日差しを受  
けながら笑みを浮かべた。あの旅行から帰ってからの朝は比較的静  
かに始まった。しかし、道場からは時折稽古の音らしきものが聞こ  
えてくるのはいつもの事。それにも慣れたキャスターは特に意識を  
向ける事もせず、今日の予定を立てようと思考に耽ろうとしたこ  
ろである気配を感じて息を呑んだ。

(これは……でもまさかそんなっ!?)

顔色を変えてキャスターはすぐに道場へと向かった。セイバーの  
力を借りるためだ。今、海鳴の霊脈は彼女が押さえている。そのた  
め、キャスターは感じたのだ。何か分からないが恐ろしい存在感を  
伴った相手がこの街へ入った事を。それはサーヴァントではない。  
そう、彼女はおぼろげながらその相手に心当たりがあった。

それを考えれば最悪セイバーだけでは足りない可能性もある。自  
分の予想が外れて欲しいと思いつながらキャスターは走る。その存在  
が少しずつはあるがこの家のある方向へ近付いてきているのだ。  
目的は自分だろうかと考えたところでキャスターは道場の戸を開け  
た。

「セイバー、ちょっと話があります」

「話、ですか？」

「ええ。少しいいですか？」

「……分かりました。なのは、申し訳ないですが残りのトレーニングはイメージトレーニングだけにしてください」

「はい」

「ごめんなさいなのはちゃん。少しセイバーを借りますね」

なのはへ申し訳なさそうに告げてキャスターはセイバーと共に歩き出した。閉まった戸を眺めてなのはは小首を傾げた。

「キャスターさん、何かあったのかな？ ちょっとだけいつもと雰囲気違った気がしたけど……」

独り言を言いながらなのはは視線を前に戻した。そこには激しい打ち合いをする小次郎と恭也と、それを見学している美由希と土郎そして道場の隅で額から汗を流しながら腕立てをするユーノの姿があった。

彼はキャスターや土郎達と相談し、自分が一番鍛えるべき事を理解した。それは基礎体力を増やす事。いくら遺跡発掘などで力仕事をしていたとはいえ、それは働いたための力を身に着けるだけ。戦うために必要な力は実戦を繰り返す事でしか身に着かないのだ。それを養うための基本は体力だ。それと恭也から言われた言葉も影響している。

魔法をただ使うだけじゃ駄目だ。それをお前だけの切り札に変えろ。

僕だけの切り札……？

そうだな……魔法をアレンジしたらどうだ？ バインドだったか。あれがお前は得意だから、それをお前にしか出来ない魔法へ昇華すればいい。

恭也からの助言を受けてユーノは現在体を鍛えながら魔法のアレンジを考案中。言われるまで彼も考えもしなかったのだ。バインドなどの支援魔法に手を加えて使う事などは。だからこそユーノは何か手はないかと考えを巡らせる。

だが早々いい考えが生まれる訳ではない。しかし、ユーノはキャスター達を頼る事はしなかった。まず自分だけで精一杯足掻く。それでも無理な時こそ周囲の手を借りるべきだ。そう自分を鍛える面から決めたために。

（僕は今まで周囲に支えられてきた。これからはそれに簡単に頼る事無く、自分で自分を支えられるようになりたい。だから……今は自分一人で足掻くんだけ！）

（ユーノ君、頑張るなあ。よしっ！ 私も負けないように頑張ろう！）

同い年のユーノが頑張る姿を見てなのはも気合を入れ直し、手にしていたレイジングハートが課すイメージトレーニングを始めるのだった……



どこかのどかな雰囲気が漂う街並みを眺めながら歩くアルクエイドとエイミー。それとは違ってやや無表情のクロノ。海鳴の地に近付くにつれアルクエイドは魔術が使われている確信を得た。故にクロノは警戒心を抱いていたのだ。魔術師について簡単に聞いているクロノとしては、自分達がどれだけ歓迎されない存在かを理解しているのだ。

魔法と魔術。同じ魔力を使う術なれど目的とするところは違う。魔法は、どちらかと言えば暮らしを便利にする道具としての目的で生まれた技術だ。しかし、魔術は根源と呼ばれるものへ辿り着く事を目的として生まれた技術なのだから。

(そもそもその目的意識が違う相手との交渉になるな。とりあえずは相手に敵視されないように気をつけるか)

アルクエイドが出会った魔術師の中には善人と呼べる相手もいたらしいが、大抵は根源に辿り着けるのなら何でもするというのが魔術師。そう聞いているクロノとしてはこの街で魔術を使っている相手を警戒せざるを得ないのだ。

何せアルクエイドの感覚を信じるのなら、この魔術を行使している相手は相当の使い手だろうとの事。戦うとしたら厄介な存在となるかもしれないとまで言われたのだ。そんな事を思い出して微かに険しい顔になるクロノに気付かず、エイミーはアルクエイドと気楽に会話をしていた。

「どう？ やっぱり嫌な予感する？」

「うん……するにはするけど魔術のせいじゃない感じ。えつとね、この街で魔術を使ってる奴は魔力の流れを操作してるんだ。でもそれだけじゃない魔力の流れみたいなのを僅かに感じるの」

「どついつ事？」

「簡潔に言えば、嫌な予感を感じさせている原因は使われている魔術ではなく別の魔力反応だ。……そういう事でいいか？」

「うん」

二人の会話を聞いていたクロノが告げたまとめにアルクエイドが嬉しそうに頷いた。だが、その表情が一瞬にして変わった。それは疑問符を浮かべるようなもの。アルクエイドはその表情のまま前方へと振り返った。その先にはセイバーとキャスターが立っていた。クロノはキャスターを見て何かを考え込む。どこかで見た事があるような気がしたのだ。それがどこだったかを思い出そうとするも、中々出てこないのかやや難しい顔を浮かべている。そんな三人を見つめ、セイバーは視線をアルクエイドへと合わせた。

「……成程、確かにあれは恐ろしい相手のようですね。それでどうしますか、キャスター。……キャスター？」

アルクエイドと対峙した瞬間、直感が告げる警告にセイバーは若干表情を険しく変えると隣のキャスターへ対処をどうするかを尋ねる。しかし、キャスターはその声に答えずに前方にいるアルクエイドの姿を見て茫然となりながらも思わず呟いた。

「……………やっぱバースーカーでしたか」

「なんですって？」

「あれは……私が戦ったバーサーカーなんです。確かにあいつは消滅する前に離脱したけど……」

疑問が消えないとばかりに困惑するキャスターを横目にセイバーはアルクエイドを注意深く見つめた。バーサーカーと言うには理性的な感じがしたのだ。その証拠にアルクエイドはセイバー達を見ても不思議そうに視線を向けるだけ。と、そこでセイバーは気付いた。

「本当にバーサーカーなのですか？ ……彼女は狂気に犯されているように見えません」

「あ、そういえばあの時正気に戻ってました。そっかそっか、すっかり忘れてましたねえ。あら？ でも、なら余計どうして？」

セイバーの告げた言葉に思い出したとばかりにキャスターが小首を傾げると、それを聞いていたのだろうアルクエイドがはつきり告げた。

それがどうもあそこからこの世界に繋がっちゃったみたいなんだ。だからこうしてここにいます。

その明るい声にセイバーが意外そうな表情を浮かべる。普通であれば、サーヴァントである自分達と対峙すればどこかに注意している兆候が見えるはずなのだ。しかし、セイバーは相手からそんなものを一切感じていない。むしろ子供のような純粋な好奇心しか感じないのだから。

セイバーがそんなアルクエイドに違和感を覚えている中、キャスターはある事に気付いた。それは、これで変則的ではあるが聖杯戦

争で召喚されるサーヴァント七騎が揃った事になるのだ。

(あの時聞いた声。あれはこれを既に予期していた……？　だとすると……)

(私達の知らないキャスターとバーサーカー。何故この二つのクラスだけが例外となったのでしょうか？　そこに何か訳があるとすれば……)

(あれはキャスターだっけ。で隣のも……サーヴァントみたいだね)

それぞれに思う事があるためにその場で立ち尽くす三人。その沈黙を破ったのは黙って成り行きを見守っていたクロノだった。

「そろそろいいだろうか？　僕らは君達に聞きたい事があるんだ」

「どこか静かな場所がいいんだけど……案内してもらえますか？」

クロノの申し出に本来の目的を思い出してエイミも続く。その意図を理解したのかセイバー達も互いを見やり、小さく頷き合うとクロノ達を先導するように動き出す。それについていくクロノだが、同時にアルクエイドへ小声である事を尋ねるのを忘れない。

「アルクエイド、彼らは魔術師なのか？　こちらへの敵意を感じないんだが」

「あの二人は魔術師じゃないよ。あー、でも片方は魔術師と言えない事もないなあ」

「ね、ね、それってどっち？　金髪の子？　それとも狐耳のアクセ

「サリーしてる子？」

「狐耳の方だよ。キャスターって言って……魔術師のサーヴァントなんだ」

セイバー達から離れすぎず近付きすぎずの距離を保って歩く三人。その会話はセイバー達には聞こえていなかったが、クロノが自分達に対して疑問を抱いている事は雰囲気から感じ取っていた。その理由はこの後の話で分かるはず。そう考えて二人は二人で会話をしていた。

「彼女がバーサーカーだったのは間違いないのですか？」

「ええ。でも、どうも彼女は無理矢理そのクラスに召喚されたみたいで」

「どういう事です？」

「さつきも少し言いましたけど、彼女は戦いに負けた後に本来は消滅するはずだったんです。それが今のような状態へ戻った後、体を消滅される前に空間に穴を作って離脱したんですよ。そこから分かるのは、彼女は聖杯戦争のシステムから独立していた存在だったという事。そして……」

そこでキャスターは言葉を切った。その後によく言葉を言い出すのを躊躇っているのだ。セイバーはそんなキャスターの気持ちを察し、ならば代わりにとばかりに口を開いた。

「世界」に干渉出来る存在ではないか。そう言いたいのですね？

その言葉にキャスターはゆっくりと頷いた。やがてセイバー達は高町家へ到着すると門の前で一度立ち止まった。そしてクロノ達へ振り返り、ここは自分達が世話になっている家だと告げてこう続けた。ここなら誰かに邪魔される事もなく話が出るからと。

それは暗にクロノ達の話が誰かに聞かれては不味いものだとして理解していると伝えていた。クロノ達もその言葉に頷いた。だが、三人を代表してクロノだけが「配慮に感謝する」と告げた。その声に若干の安堵感が混ざっているのは、二人の雰囲気から敵対する可能性が薄そうだと把握したからだろう。

そのままキャスターはクロノ達を伴って道場へと向かう。セイバーは一人玄関へと向かった。もうそろそろ朝食の時間だからだ。そのため、桃子達が自分達を待たなくていいようにと告げようとしていた。その内心は苦渋の決断を強いられたと思っているのだが。

そんなセイバーが離れていくのを足音で把握し、クロノは視線を前を歩くキャスターへ向けたまま念話を送った。

【エイミー、どう思う？】

【そうだね。アルクと同じでいい人達だと思うよ。次元漂流者と同じ捉え方でいいんじゃないかな？】

クロノの抽象的な質問にもエイミーは不思議がる事もなくあっさり答えた。執務官としての性か、クロノはまだどこかセイバー達を警戒していた。それはエイミーも理解出来るのだが、ここではそれが不味い方向に働きそうだと思うので言葉を返す。

魔術を使っているがそれにも何か理由があるのではないか。エイミーはそう告げて締めくくりとした。その意見にはクロノも同意

見だったようで、そうだなと返して意識を切り替えた。これからする話は交渉ではなく事情を聞き出す事になると。

(この地球に住んでいた魔術師ではないなら、やはりこの地球には魔術師はいない事になる。それだけでも確かめられればいい)

そう考えると同時にクロノはふとある事が気になった。それは魔術師はいなくても魔術自体は存在している事。そしてアルクエイドが感じた嫌な予感。その原因である別の魔力反応。それらが気になってきたのだ。

その事もそれとなく聞いてみるかと考えてクロノは道場の中へ足を踏み入れた。初めて見る内装にやはりここは異世界なのだなと感じるクロノとエイミー。アルクエイドは一段床が高くなっていて事に気付き軽く首を傾げた。しかし、その疑問を口にする前にキャスターが履物を脱いで道場へ上がったので納得した。

(そっか。ここで靴を脱いで上がるんだ)

理解したとばかりにニコニコと笑みを浮かべながら靴を脱ぐアルクエイド。それに倣うようにクロノとエイミーも靴を脱いでキャスターの後に続く。そして向かい合うように座るキャスター達。ややあつてからセイバーが姿を見せ、何も言わずにキャスターの隣へ腰を下ろした。

まずは自分達の自己紹介からとクロノが口を開いた。それにエイミーとアルクエイドも続き、ならばとセイバーとキャスターも名乗った。だがどこか空気が張り詰めているように誰もが感じていた。警戒している訳ではないが、妙な緊張感があるのだ。それを感じ、セイバーは話を切り出す事にした。

「それで貴方達の目的は何ですか？」

「この街で魔術を行使している理由を聞かせてもらえないだろうか？ 僕はそれが知りたいんだ」

セイバーの問いかけにクロノは迷う事もなく切り出した。腹の読み合いは必要ない相手だと悟ったのだ。下手にそれをすれば余計な問題を起こしかねないと判断したのもある。セイバーはそんなクロノの言葉にやや意外な印象を受けた。

（魔術師ではないのに魔術行使の理由を問い質す、ですか。どうやら彼らは魔術を危険視しているようですね）

「この街には今厄介な物が存在しています。それが力を発動させた時に感知出来るようにキャスターがこの地の霊脈を押さえているのです」

「厄介な物？」

「ジュエルシードという物なんですけど……」

アルクエイドの問いかけに答えたキャスターだったが、その単語を言った瞬間クロノとエイミィの表情が一変した。

「ジュエルシード?!」

「知ってるの？」

「あれ？ あー、アルクは覚えてないんだ。ちょっと前に輸送船が次元震に巻き込まれた事件があったでしょ？」



「その輸送船が運んでいたのがジュエルシードと言うロストロギアだ。しかし……そうか。どこかで見た顔だと思ったんだ。君は確かその輸送船に乗っていた少年の使い魔だったな」

やっと思い出せたとクロノはやや納得したような声を出した。だが、同時にセイバー達はクロノ達の反応に驚きを浮かべていた。何故ならジュエルシードの事を知り、更にユーノ達が体験した事件を知っている事からある事実が浮かび上がったからだ。

「待ってください。つまり貴方達は魔法世界の住人なのですか？」

「しかも、確かあの事件の関係者は公表されていないはずです。それを知っているという事は……」

「あのね、クロノ達は管理局員なんだ。だから知ってるんだよ」

まさかと思つての問いかけにアルクエイドはあっさりと告げた。それに更なる驚きを浮かべるセイバー達。それを見てクロノは正体を隠す必要もないと理解し、真剣な顔で切り出した。それは自分達が管理局員である事とここへやってきた理由だ。

魔術の存在を危険視し、それがこの地球にもあるかを確かめに来たのだと。既にアルクエイドとの話から自分達の知る地球と彼女がいた地球は別世界である事を理解している事も告げた。それにセイバー達も納得しある程度の事情を話した。と、そこで揃つてある疑問を抱いた。

でもどうして管理局がここに？ ジュエルシードの回収に来てくれたんですか？

ここへ干渉するような行動は色々問題があると聞いていま

したが何故です？

その二人の疑問にクロノは一言で返した。

「ここへは局員としてではなく個人として訪れている。元々ここへは来る必要はなかったんだが、アルクエイドが魔術の反応を感じたから確かめに来たというところだ」

「そういう事。だからジュエルシードがここにあるなんて知らなかったんだ。でも、こうなると話は別だね。封印処理が甘くて事件を起こしてるなんて」

エイミイの言葉にクロノも頷いた。だからだろう。おもむろに懐から何かを取り出した。それは彼のデバイスであるS2Uだ。それを起動させるとクロノは迷う事無く通信機能を使った。相手は当然上司で母親でもあるリンディだ。

『はい。リンディです』

「クロノです。仕事のところ申し訳ありません」

『あら、クロノだったの。いいのよ。で、どうだったの？ 何か発見はあった？』

「それが……艦長、少し報告したい事があります。よろしいでしょうか？」

『……魔術師と遭遇したのですか？』

「いえ、やはりこの地球には魔術師はいません。確証も取れませんでした。」

報告したいのは別件です」

クロノの呼び方にリンディは声を母親から上司のそれへ変えた。休暇中の連絡にも関わらず、クロノが役職名で呼んだことからリンディはそういう対応を望んでいると把握したのだ。だからこそ口調を改める。

今、リンディは艦長室で調査報告を作成し始めていたところだった。周囲に人がいないため、魔術絡みの話をする事に支障はない。それをリンディの返答から悟りクロノは少しだけ息を吸った。これから告げるのは、自分達局員が暗黙の了解としていた事を批判する内容だったからだ。

「ジュエルシードをご存じですよ？　それが今訪れている街で問題を起こしかけたそうです。幸い、現地にユーノ・スクライアとサーヴァントがいたために大きな問題とはなっていないんですが、完全封印処理をするために現地の少女が協力したらしく、魔法を教えてくださいましたそうです。ですが、これは完全に我々管理局が招いた結果かと思います」

『ユーノ・スクライア君はともかくサーヴァントがいたとは？　魔術師はいないとの確証が取れたのではなかったのですか？』

「艦長、そこについてはまた別の機会にさせて頂きます。今重要なのはそこではないので」

『……そのようですね。しかし、ユーノ・スクライア君の報告では彼も封印魔法が使える、ジュエルシードには封印処理がされていたはずですが？』

「彼は一度ジュエルシードが暴走した際に戦闘し、傷を負った事と

魔力を使いすぎた事もあって封印処理が出来ない状態だったようです。それと、ジュエルシード自体の封印処理も若干甘かったのかと本人から直接話を聞いてみなければ分かりませんが、ここへ来た事から考えて彼はその危険性をおそらくこちらへ伝えただけです」

『つまり我々の判断が間違っていたと言いたいのですか、ハラオウン執務官』

「恐れながらそういう事になります。地球は管理外で魔力保有者が少ない世界。だからと言って楽観視して良かった問題ではなかったという事です。……相手は曲がりなりにもロストロギアだったのですから」

クロノのまとめにリンディは言葉を飲み込んだ。クロノの声は悔しさに満ちていたのだ。それは自分達管理局全体にある暗黙の了解に対してのもの。管理外へはうかつに手を出さない。それが今回は完全に裏目に出るところだったのだから当然だろう。

それが如実に現れている部分が最後の言葉だった。相手はロストロギア。こちらの常識や思惑を超える事さえあってもおかしくない代物なのだ。封印処理がしてあるからと言って後回しにしている物ではない。そうクロノは自分にも改めて言い聞かせていたのだ。

『……確かに貴方の言う通りでしょう。そうとなれば、今後大きな問題を引き起こさないように動くべきですね。とりあえず、ハラオウン執務官とリミエッタ執務官補はそのまま現地調査をお願いします』

「それは構いませんが……」

クロノの気持ちをリンディも感じ取り、やや声の調子を落とす

がらも一番いいであろう決断を下す。その配慮にクロノは戸惑う。上層部の判断を仰がずに独断で下していい内容ではなかったのだ。しかし、それをリンディも理解しているのだろう。はっきりとこう言い切ったのだ。

独断専行や今後に関する事の責任は私が負います。それよりも管理外世界の住人への被害の方が心配です。それに、貴方達なら処分されるような事態にはしないと私は信じていますから。

……分かりました。必ず信頼に応えてみせます。

頼みました。私は上層部へ報告と共に正式な貴方達の行動許可を取り付けてるのでこれで。何かあればすぐに報告を。

そこで通信は切れた。クロノはそこで一旦息を吐いた。予想はしていたが、やはり自分の母は大した者だと思つて。管理外での局員としての行動。それを独断専行で許可するのは、何かあれば始末書では済まない判断だ。それでも被害を考慮しての決断を下すところに、リンディの人としての在り方がある。

(母さんは局員としてだけじゃなく人として正しい事をしようとしている。僕も負けてられないな)

改めて尊敬出来る母親だと思い、クロノは視線をセイバー達へ向けた。

「聞いている通りだ。僕らも君達に協力する。それでジュエルシードはどれだけあるんだ？」

「全部で二十一ですけど、既に半数以上を私達で確保していて残り

は七つ。ま、楽勝です」

「ありゃ、それはまあ……確かに楽勝かもね」

クロノの確認に笑顔で返すキャスター。それにエイミーも拍子抜けしたのかやや苦笑した。何せここにはアルクエイドのように凄い力を持った存在が六人もいるのだ。しかも、それに協力する現地の魔導師もいるとなれば戦力としては問題ない。

それを考えての発言にクロノも異論はなかった。しかし、彼には一つまだ引つかかっているものがあつた。それはアルクエイドが感じた魔力反応。それがジュエルシードのものかもしれないと思つたのだが、念のために尋ねてみる事にしてクロノは口を開いた。

「すまないが、もう一つ聞きたい事がある」

「何でしょう？」

まだ何か気になる事があつただろうかとセイバーは思いながら問いかけた。どうやらそれは周囲も同じらしく、誰もがクロノの事を見つめていた。その視線を受けながらクロノはこう切り出した。

アルクエイドが妙な魔力反応を感じて、それが嫌な予感をさせるらしいんだ。何かジュエルシード以外の厄介な物に心当たりはないだろうか？

その問いかけは、このジュエルシード事件後起きるとある事件を大きく変える事になる。だが今はそれを誰も知らない……



## 無印六話 後編

「ジュエルシード以外の……ですか？」

「ああ。アルクエイドがこの街に着いた時に嫌なものを感じたのは言った通りだ。君達からジュエルシードの事を聞いた時はそれかと思っただが、どうも違うような気がする」

そう言つとクロノはアルクエイドへ視線を向けた。それが何を意図しているかを把握し、アルクエイドは顎に指を当てて思案するよくな表情を浮かべた。

「うーん………そうだね。その魔力は複数じゃなくて一つだけだから」

「あ、じゃあアルク、その位置とか分かる？ 分かるなら行ってみればいいんじゃない？」

「それは無理かな。あるっていうのは分かるけど、どこかってまではちよつと無理かも。凄い弱いんだ、その感覚」

アルクエイドの言葉を聞いてクロノが視線をセイバー達へ向けた。その視線を受け、セイバーとキャスターは小さく息を吐く。そう、彼女達には心当たりがある。それははやての家にある謎の本。ロストロギアである可能性の高いそれは、キャスターでさえ調べる事は叶わなかった。

「………実は、この街にはもう一つロストロギアと思わしき物があるのです」



「なんだって？」

「ある一冊の本なんですけど、鎖で縛られていて尚且つ監視している存在までいるんですよ」

「謎の本にそれを監視している存在？ 怪しさ爆発だね」

エイミイの表現に思わず誰もが小さく笑った。いや、クロノだけはやれやれといった風に息を吐いていたが。しかし、そこでセイバーとキャスターは同時にある考えを抱いた。

（詳しい話はアーチャーがいる時にすべきですね。それにフェイト達の事もありますから少し話し合う時間もいりますし……）

（細かな説明はアーチャー本人がするべきですし、マスターに同性の友人が出来るチャンスかもしれません。今はこれで一旦切り上げますか）

セイバーはフェイト達の目的がジュエルシードの使用であるためにクロノ達をこのまま留まらせる訳にはいかないと思い、キャスターは本の説明をアーチャーに委ねると共に、ユーノの密かな願いである同性の友人を得られる機会を整えるために時間を空ける必要を感じていた。

両者は互いへ視線を送ると小さく頷き、クロノ達へ時間を置いてからまた来て欲しい旨を伝えた。本の詳しい説明を出来るアーチャーを呼ぶためと朝食を取らせて欲しいとの理由を告げて。それにクロノ達も理解を示し、自分達も食事をしてから出直してくる事にした。

待ち合わせ時刻を決めて、クロノ達は道場を後にし高町家から離れた。その背を見送り、セイバー達も一旦家の中へと戻る。その途中でセイバーがこう告げた。ロストロギアの知識がありそうな管理局員の手が借りられるのは予想外だったが、同時に厄介な問題も抱える事になる可能性がある。それにキャスターは忘れていたとばかりに表情を変えた。

「そういえばそうでした。ランサー達はジュエルシードを使いたいですもんね。数を減らしたら色々と疑われちゃうかあ」

「ええ。これはすぐにでもランサーとアーチャーを呼んだ方がいいでしょう。生憎私は仕事がありますので、貴方がユーノを交えてフイト達と相談してください」

「分かりました。じゃ、ご飯を食べたらすぐにでも」

「お願いします」

話しながらリビングへ向かう二人。そこには丁度食事を終えて少し語らうなのは達の姿があった……

「収穫はあったね」

嬉しそうなエイミイの声にクロノはいつも通りの表情を返した。

「ああ。まさかロストロギア絡みの事件が起きかけていたとはな」

「しかももう一つロストロギアがあるんでしょ？ それも気になるよね」

「そっちは監視者がいるんだっけ。面白くなってきたかも」

「えっとさ、アルク、あたしが言うのも何だけどその言い方はちょっと問題だよ？ 下手をしたら世界が消えるとか有り得るのがロストロギアなんだからさ」

笑顔で言い放たれたアルクエイドの言葉にエイミイがややたしなめるように告げる。彼女としても気持ちは分からないでもないのだが、やはりそこは局員として言わねばならない事だった。クロノも同意見なのか無言で頷いていた。そんな二人を見てアルクエイドは少しだけ不思議そうな顔をするものの、そういう事かと納得したように頷いた。

「うん、そっか。ごめん。私の面白くなってきたっていうのは、監視してる奴が誰かって事に対して言っただつもりだったんだ」

「あー、成程ね。それなら納得。あたしも気になるもん」

「謎の本、か。僕らの手におえる物ならいいんだが……」

「そこは大丈夫でしょ。アルクだけじゃなくて他のサーヴァントもいるんだし」

「そこも気になっている部分だ。まるで誰かが意図したようにこの街へサーヴァントを集めている。そのキツカケはジュエルシードでこの街には謎のロストロギアまである。作画的な物さえ感じるぞ、

これは」

そう言うってからクロノは視線を上に向けた。広がる空は青く澄み渡っていて、不安などどこにも感じさせないものだ。にも関わらず、クロノは何故か嫌な予感がしていた。

（本のロストロギア。今はまだ何も動きを見せていないらしいが、アルクエイドだけでなく他のサーヴァントさえ嫌なものを感じている。まさか”アレ”なのか？ いや、そんなはずはない）

本のロストロギアと聞いた瞬間から彼の脳裏に浮かぶ一冊の書。どうしてそれが真つ先に浮かんだのかは分からない。特に根拠もなければ理由もない。だが、どうしてかクロノにはそれではないかとの予想があつた。それが事実だとすれば、そこまで考える前にクロノは思考を打ち切つた。

（下手な先入観は捨てよう。詳しい話を聞けば何か分かるはずだ）

「さて、とりあえずは朝食を取る場所だがどこにする？」

「あたしはどこでもいいよ。クロノ君の奢りならね。アルクは？」

「私もどこでもいいよ。あ、でも出来れば雰囲気の良いところでお願いしたいな」

「二人してどこでもと言いながらしつかり希望があるじゃないか。まあアルクエイドのはいいとして、エイミィは自分が最年長だといつ自覚を持って」

「可愛い部下に奢つたつて罰は当たらないよ、クロノ君」

その答えにクロノがため息を吐いた。エイミーはそこでアルクエイドへウインク一つ。それで何かを悟ったのか、アルクエイドは満面の笑みを浮かべるとクロノへ顔を近付けた。その行動だけでクロノは嫌な予感を抱き、表情を若干曇らせた。

「ね、クロノ。私はお金持っていないから支払い出来ないよ？」

「……考えたなエイミー」

「クロノ君、ここは男らしくドーンと奢ろうよ。ね？ あたし達とデートしてると思ってるさ」

そんなエイミーの発言に少しだけクロノが呆れる。何がデートだ。そう思うも確かに何も知らない者が見ればそうも取れない事もない。しかも、エイミーもアルクエイドも美人である。クロノがそんな事を考えた瞬間、見事な一致でエイミーとアルクエイドは微笑みかけた。それをクロノが不思議そうに見つめると、二人はその表情のまま……

「「クロノ（君）、お願い」」

甘えるような声で告げたのだ。それにクロノは一瞬だが微かに「うっ……」と息を呑む。年上の女性二人にそこまで言われたら断る事は出来ない。そう思ってしまったのだ。そうなってしまった時の男は弱い。クロノもその例に漏れず反論する事は止めた。しかし、仕方ないとばかりにわざとらしく大きなため息を吐く。それが彼女の精一杯の抵抗だった。

「分かった。確かに僕はエイミーの上司でアルクエイドのマスター

だ。食事代ぐらい持とう」

クロノの言葉を聞いた二人は嬉しそうにハイタッチ。それにクロノは呆れつつもどこか笑みを浮かべた。こうして、そのまま三人の目的は周囲の店の選別を兼ねた散歩へと変わるのだった……

八神家 リビング。朝食を終えたはやてが日課である通信教育での勉強を始めたのを見て、フェイトはランサーとアルフの三人でジュエルシードの探索へ向かおうとしていた。そんな時、まるでその行動を止めるかのように八神家の電話が鳴り響いた。

「あ、えっと……私が出るね」

「いや、私が出よう」

控えめに電話へ手を伸ばそうとしていたフェイトを柔らかく遮り、アーチャーはそう告げた。洗い物を丁度終えたばかりだったのもあり、視線だけでランサー達へ出かけてもいいと促しつつ受話器を手にするアーチャー。

彼は勧誘かいたずら電話の可能性があると予想したのだ。それに対処するにはフェイトは素直すぎる。しかし、それを言うとフェイトはそれを欠点と思いかねない。そう判断し、アーチャーは自分が出る事にしたのだから。

「はい、八神ですが」

『アーチャーですか？ 私です』

「キャスターか。一体どうした？」

『ランサーはいますか？』

「ああ、まだいるぞ。代わった方がいいなら代わるが？」

アーチャーは視線を動かしてランサーを見た。それで何か察したのかランサーは自分を指さしている。それに頷きを返してアーチャーは何か告げてから受話器をランサーへ差し出した。キャスターからだ、そう告げて。

「何か用か？」

『フェイトちゃん達も含めて話したい事が出来ました。そちらへ行くので待っていてくれます？』

「……………何があつた？」

キャスターの声がどこか困ったように聞こえたため、ランサーは怪訝そうに声を返した。受話器を持ちながら両手の人差し指でバツ印を作つてフェイト達へ探索中止を呼びかけながら。それにフェイト達も疑問符を浮かべながら履いていた靴を脱ぎ出す。

『その……………局員と接触しました。しかも、私と戦ったサーヴァントと共にいまして、こちらに協力してくれる事になったんですよ』

「はあ？ 一体どういふこつた？」

『とにかくその事も含めて色々であったんです。あ、その関係であるのこの情報が得られるかもしれないんですよ。なのでアーチャーにも外出をしないでいるようにと伝えておいてくださいね』

そこで電話は切れた。ランサーはやや不満そうではあったが事情を理解し、静かに受話器を戻すとアーチャーへ先程のキャストからの伝言を告げた。そしてフェイト達へも軽くだが聞いた事を話した。局員と接触し協力する事になったと。

それに一瞬言葉を失う一同だったが、唯一はやてだけは蚊帳の外だったためかあっさり告げた。そう別に悪い事ではないとはつきり言ったのだ。その言葉に全員がはやてへ視線を向ける。

「悪い事じゃないってどういう意味？」

「簡単や。局員ってお巡りさんみたいな人達やる？　なら、今回のお仕事はジュエルシードを探すのを手伝ってくれるだけのはずや。それと、ジュエルシードを届けるんがお仕事なら輸送船使わんと最初からその人達が運んだはずやし」

「つまり下手に警戒するよりも自然な対応をすればいいと言っのかね？」

「うん。ま、フェイトちゃんのお母さんの事を話すと色々ややこしいやろからそこは内緒やけど」

「じゃ、私達の事もそれらしい理由を考えておかないとね」

「そうだね。管理外で魔法を使ってる事も問題だけど、渡航許可もないしねえ」



「なら、そこんこはアーチャーに任ずとしようぜ。そういう事はお得意だろ?」

「確かに君よりは得意だ。しかし、何やら言い方に棘があるな」

そのランサーからの指名にアーチャーはやや不機嫌な表情を返した。アーチャーの指摘にランサーはにやりと笑って気のせいだろうと返しリビングへと戻っていく。フェイトとアルフはそのやり取りに苦笑するとそんな彼の後に続いた。

残される形になったアーチャーは憮然としながらも洗濯物を取りに行くため洗濯機へ向かった。はやては一人そんな光景を眺め、小さく苦笑してから問題へと視線を戻した。と、そこでふとある事を呟いた。

そういえば局員さんってどんな格好なんやる? やっぱ制服とか着とるのかな?

この後、はやてはクロノ達と出会った際にその事を質問して軽く苦笑される事となる。そこでエイミイがクロノへバリアジャケットを展開するよう告げ、はやては執務官制服に近い物が見る事が出来るのだが、それはまた別の話……

「へえ、ここのサーヴァントって意外と穏やかな雰囲気なんだね、みんな」

再び高町家道場を訪れたクロノ達を待っていたのはキャスターとアーチャー、それにランサーのサーヴァントにユーノとフェイトの

計五人だった。アルクエイドはそんな五人を眺めてどこか楽しそうに笑った。ちなみにアルフははやてと共に留守番中。はやてを一人にする訳にはいかないと考えたため、フェイトがそう頼んだのだ。

ランサーとキャスターが平然としている中、アーチャーは一人アルクエイドから感じる気配に内心で自問し続けていた。彼女から感じる気配にどこか覚えがあったからだ。それも、あまり歓迎出来ない類のものだった故に。

（この感じ……確かにどこかで。アレに近い気がするが……まさかな。だが、もしそうだとすると……）

アーチャーはある推測を立てつつある前では、キャスターがクロノ達へここにいないのはとフェイトの説明をしていた。そう、ユーノの存在には何も思わなかったクロノ達だったが、当然フェイトには疑問符を浮かべたのだ。そんな彼らへキャスターの口からなのはやフェイトの事が説明される。その内容はアーチャーがフェイト達と話し合って考えたもの。

「……そうか。君がランサーのマスターとはな。そのためか使った転送魔法が何らかの影響でここへ導き、ジュエルシード事件に巻き込まれたとは」

「は、はい。ランサーが一度地球に行つて確かめたい事があるつて、そう言った後に使ったからなのかも……」

「それでこの街からランサーさんが魔術の反応を感じた。なのはちやんつて子が魔法を使つてたから、フェイトちゃん管理外と知らずに事情を聞いてユーノ君のお手伝いをする事にした、かあ」

そう、あくまでフェイトは地球に偶然来てしまった人間としたの

だ。彼女がほとんど時の庭園から出た事がない事を利用し、世間知らずの子として。管理外世界との言葉は知っていても、それがどこまでは知らない。そういう事にしたのだ。

その案を提案したのはキャスター。最初はそんな都合のいい話では疑われると誰もが迷ったのだが、アーチャーも下手に色々考えるよりもいつそ開き直るぐらいの方がいいかと賛同し、フェイトはこうして偶発的に海鳴へ来た存在として振舞っていた。

アーチャー達がここまで大胆な嘘を吐いたにはある理由がある。それは、この状況を上手く利用した考え。おそらくクロノ達もここで考えているだろう事。かえって偶然を装った方が信憑性が増すだろうという予想。

「事情が事情だ。君の無許可渡航と魔法使用については注意で済ませる。意図的ではないし、魔法使用に関しても人道的な面が強いよ。うだ。だが……やはり何か作為的なものを感じるな」

「だね。やっぱり何かがジュエルシードをキツカケにサーヴァントを集めようとしてるんじゃないかな？」

「多分だけど”この世界”かもね。ジュエルシードがこの世界を壊しかねない物なのかも」

アルクエイドがいるために、クロノ達が出来すぎた展開へ抱く疑問はフェイトではなく状況へ向く事だ。その予想通りクロノ達が納得していくのを見て密かに安堵するアーチャー達。と、そこまで話し終えたところでアーチャーがアルクエイドへ視線を合わせた。

「私達としてもその可能性は高いと考えている。で、君がバーサーカーか。私はアーチャー、そしてとなりの男が」

「ランサーだ。よろしく頼むぜ」

「あー、出来ればその呼び方やめてくれない？ 今の私はもうサーヴァントじゃないし、クロノ達も名前で呼ぶから」

「真名で呼ばせているのか？ まあ確かにこちらでは問題ないかもしれないが……」

アルクエイドの発言にアーチャーはやや驚いた声を出した。だが、同時に気付く。ここでは聖杯戦争をしている訳ではない。ならば生前の名を名乗っていても問題はないのだ。更に言えばアルクエイドはミッドチルダにいた。そこでは地球の英雄などは知られていないに等しいのだから。

「へえ、随分と気楽なもんだな。ま、確かにここじゃ俺達が戦う必要もなけりや理由もねえ。真名を知られても問題はないか」

「うーん、本当は違うんだけどそんなとこでいいよ。私の名前はアルクエイド・ブリュンスタッド。アルクエイドでいいから」

その名を聞いた瞬間、アーチャーに戦慄が走った。彼は生前も遠坂凜と関わった。その関係でロンドンに同行した事もあるのだ。そしてそんな彼女の家である遠坂家は死徒であり魔法使いであるシュバインオーグの弟子。その関連で噂程度に聞いた事があった。そう、アルクエイドの名を。

真祖の姫、だと……？

あ、知ってるんだ。

アーチャーの眩きにアルクエイドはさらりと返した。しかし、アーチャーは戸惑いを隠せなかった。彼が知るアルクエイドの情報は少ない。だからこそ様々な事を考えていた。彼女はそもそも真祖を倒すべく生まれた存在。それぐらいしか知らないのだ。

アーチャーが戸惑う理由。それはアルクエイドが感情豊かに話し、敵意も殺気もないからだ。それがどうしても自分が聞いた相手の印象と合致しないため、彼はどういう事だと頭を悩ませていたのだから。

「真祖って……おいおい、これは面白い事になってきやがったな」

一方で表情を楽しそうにしたのはランサーだ。彼は一度も真祖と戦った事がない。それもあって、どれ程のものか試してみたいという気持ちを抱いたのだ。しかし、当然ながら真祖という単語の意味を知らない者がいるので、こう言い出す者がいても仕方なかったらう。

「ランサー、真祖って」

「フェイト、それはここで話す事じゃないよ。今はジュエルシードについて話さない」と

「そうですね。でもその前にアーチャー、あの本の事を」

真祖の事を知らぬために問いかけようとするフェイトへユーノが遮る形で口を挟む。彼は気付いたのだ。クロノとエイミィが真祖という言葉を聞いて不思議そうな反応を見せた事に。ユーノも真祖の事は知らない。だが、アルクエイドと共にいるクロノとエイミィが知らない事に嫌な予感を覚えたため、今は聞かない方がいいだろう

と判断したのだ。

キャスターもそれに合わせるように口を開き、アーチャーを誘導した。その言葉でアーチャーも我に返り、事前に打ち合わせた通りにあの本の事を話し出した。襲撃者が魔法を使った事を告げ、管理局であるクロノ達に調べて欲しいと告げて。

それにクロノとエイミィは驚きを浮かべたがすぐに承諾。管理外への無許可渡航及び不法な魔法の使用は基本的に許される事ではない。しかも、事情があったなのはのケースと違って、襲撃者にはその事情がないのも問題だった。

しかし、アーチャーからの情報を聞くクロノの表情がやや意外そうなものへ変わり出す。それは襲撃者の正体。アーチャーとキャスターによって判明しているため、それについて詳しい内容が明かされていったからだ。

「猫の使い魔だった?」

「ああ。私が怪しいと踏んだ相手をキャスターが見張ってくれてな。しかも双子だ。名を……」

どこかで聞いた事のある条件だ。クロノはそう思いながらアーチャーの言葉を待つ。その後のアーチャーが告げた名前に言葉を失う事になると知らず。そう、何故ならその名前は彼にとって忘れる事の出来ないものだったのだから。

「リーゼアリアとリーゼロツテだ」

「っ?! ……いや、そうか」

一瞬漏らした声を何とか押しとどめ、何とか平静さを取り戻して

返すクロノ。それが彼の精一杯だった。予想だにしない名。決して聞くはずのなかった二つの名前。それが彼に与えた衝撃は想像を絶した。アリアとロツテは彼の師匠とも呼べる存在。そして立派な局員だ。更に二人の主人は彼のもう一人の父とも言える相手であり、尊敬する男性なのだから。

（何故だ？ 何故管理外のこの街に彼女達がいて、そして謎の本を監視し魔法を使って人を襲った？ この事をグレアム提督は知っているのか？）

明らかに雰囲気がおかしくなったクロノに気付き、誰もが視線を向けた。それにクロノは気付けるはずもなく、珍しく動揺しながら思考に没頭していた。と、そこで彼はある推測を導き出す。それは謎の本とリーゼ姉妹から連想するロストロギア。

「……一ついいだろうか？」

「何だね？」

「その本を監視していた。それは間違いないか？」

「ああ。私が来る前はどうかしらないがここ数年は監視している。襲撃は一度きりで、その際私が得た情報は守護騎士という単語だけだ」

アーチャーの落ち着いた答えにクロノは冷静に考えて自分の予想が間違っていない事を把握した。それは謎の本と呼ばれている物が自分の父を死に至らしめたロストロギアだと。

「守護騎士……そしてアルクェイドや君達が嫌な感覚を抱く物……」

そしてそれは何の前触れもなく、気が付けば八神はやてという少女の下にあった」

「何か心当たりでもあったのか？」

クロノへ全員の視線が集まる。それにクロノは少しだけ息を吸うと静かな声で告げた。

間違いない。それはおそらく闇の書だ。

その言葉に表情を一変させたのはエイミーだった。彼女は局員であり、尚且つクロノとは浅からぬ付き合いだ。少しではあるが闇の書の事も知っている。そのため、クロノの告げた言葉が持つ意味を瞬時に理解したのだ。

「く、クロノ君。それが本当ならジュエルシード以上に厄介な問題だよ！」

「普通ならそうだが心配いらぬ。今回の主はその少女だ。しかもまだ守護騎士達はいない。なら守護騎士達が現れた時に御してくれば闇の書が完成する事はない。万が一従わない場合は彼らサーヴァントがいる。つまり暴走の危険はないに等しいし、今のところ何故か起動すらしていないようだからな」

「悪いが俺達にも分かるように話をしてくれねえか？」

「何か危険なロストロギアだという事だけは分かりました。けど、詳しい説明をお願いします。僕の友達に関わってるんです」

軽い口調ながらも目は真剣なランサーと表情を凜々しくするユ-



ノ。フェイトやキャスターも同じようにクロノ達を見つめていた。アルクエイドとアーチャーも同様に。それらの視線を受けてエイミイとクロノは互いを見合わせ、やがて小さく頷き合った。

少し長い話になると前置いてクロノは話し出した。それは彼の忘れられない記憶にして、忘れてはいけな記憶に繋がる物。幼い日に刻まれた悲しみとやるせなさ。そして後の決意と今の自分を作ったキツカケの事件。その原因となった忌まわしき古代の遺産の話。

それは、災いを呼ぶロストロギア。もう幾度となく多くの命を、世界を闇へ沈めてきた恐ろしい物。完成させた者に大きな力を与えると言われながら、実質は滅びしか与えない呪われた書。闇の書との名はそれらの事も影響しているんだと思う……

クロノはそこで一旦言葉を切った。そして意を決したように口を開いた。その内容に誰もが静かに耳を傾ける事になる。そしてアーチャー達は思うのだ。やはり自分達が召喚され、ここへ集められたのは世界の意思なのだ……

ユーノ達がクロノ達から闇の書について説明を受けだした頃、なのはは授業中だった。目の前で担任の教師が黒板へ問題を書き終え、分かる者はいないかと問いかけている。それを聞いてなのはは手を挙げた。見ればアリスは自信があるため元氣よく垂直に手を伸ばしていた。

それになのはは小さく苦笑。らしいと思っただけではない。アリスの顔は自分を当てると言わんばかりだったのだ。その気持ちが届いたのかアリスは指名され、きびきびと席を立つと黒板へ向かっ

た。その背を見つめながらなのはは、ふと今朝すずかから言われた事を思い出していた。

(それにしても、すずかちゃんが話したい事って何だろう?)

旅行が終わって初めての登校日。その日に話したい事があると切り出され、アリサ共々不思議に感じていたのだ。しかも場所は八神家とくれば余計に。フェイトやはやてにユーノにも話したい事だから。そうすずかはどこか真剣な眼差しで告げた事を思い出し、なのはは視線を動かした。

すずかは自身の答えが正解かどうかを把握しているためか、黒板も見ずにどこか上の空といった表情をしていた。その横顔を眺め、なのはは話したい事の内容を自分なりに推察した。きつと何か話す事に不安がある内容なのだろうと。

(でも、多分大丈夫だよすずかちゃん。私もみんなも何があったって友達だから)

なのはは届くはずはないと思いつつ心の中で声を掛ける。すると、それに反応するかのようにはすずかが何かに気付いてなのはを見た。それに微かに驚くも、なのはは笑みを返す。それにはすずかはどこか嬉しそうに柔らかい笑みを返した。

そこでチャイムが鳴り響き、授業は終わりを迎えた。担任が出ていくのを見送るなのはの前にアリサが近付く。すずかはまた何かを考えているようで自分の席に座ったままだ。

「ね、すずかどうしたの?」

「多分だけど、今日お話ししたい事に関係してるんじゃないかな?」

「やっぱりそれか。ま、アタシ達全員に話したいって時点ですよっばどの事だとは思ってたけど……」

そこでアリサは視線をすずかへ向けた。その横顔は微かに憂いを帯びている。アリサが何を思っただんな顔をしているのかはなのにも分かる。だから彼女はアリサの手をそつと掴むと告げた。

「心配いらないよ。何があっても私達は友達。……だよな？」

「……そう、ね。そうよ。魔法だのサーヴァントだのと関わったんだから、もう何があっても驚かないわ」

なのはの言葉に笑みさえ浮かべると、アリサは髪を掻き上げてそう断言した。その行動になのははアリサらしさを感じて笑顔を見せた。何があっても大丈夫。そうアリサも思っていると感じながら。

フェイトちゃんやはやてちゃんも同じ気持ちだろうし、ユーノ君も……うん、心配ないよね！

そう心から思っただんなのはは笑う。サーヴァント達が繋いだ友情。それは何があっても切れる事はないもの。きっとその思いは一つだと、強く信じて……

.....

六話終了。まじかるとの大きな違いがここですね。クロノ達との出会いがジュエルシード事件だけでなく闇の書事件の展開までも大きく変える事になります。

次回七話はさすがの打ち明け話を予定。それと次回から更新速度を四日から一週間にさせて頂きます。ご了承ください。

## 無印七話 前編

放課後、なのは達三人は八神家へと向かっていた。ユーノへはなのはが念話で八神家へ来てくれるよう連絡済み。はやてへさすががメールを送ったのでフェイトも待っているため、これですずかの要望通り六人全員が揃う事になった。

すずかからの大事な話という事でジユエルシードの探索は待機状態となっているのだが、なのははそこに微かな疑問を抱いた。普段であれば昼間に探索をしていれば結果を教えてくれ、していないならしていないと言ってくれるユーノがまったく何も言わなかったのだ。

(どうしたんだろ？ 今日は何があったのかな？)

そう思いながら歩くなのは。実は、先程からなのは達に会話は無い。決して意識した訳ではないが、何故か喋るのが憚られたのだ。しかし、その沈黙は気まずいものではなかった事もある。それは、すずかを中心に手を繋いでいるからなのだろう。

右手をなのはが、左手をアリサが繋ぎ、その互いの温もりを感じながら歩く三人。声にせずともその暖かさが告げていた。何があってもこの関係は変わらないと。それは、すずかがアリサに言った言葉。

(何があってもアタシ達はアタシ達。そう言ったのはすずかだから)

(絶対、変わらないし変えさせない。私の大切なモノは)

(どうしてだろう？ 不安が消えていく気がする。……そうだよ、ライダーが言ってた。世界は捨てたものじゃないって)

（（だから、きつと大丈夫））

同時に同じ結論を出し、笑みを浮かべる三人。それに気づき、三人は更に笑みを深くした。知り合ってもう三年が流れた。その間に出来た思い出は数知れず。それぞれに孤独を抱えかけていた時、ふとした事がキツカケで英霊達と出会った少女達。

その出会いがなくても友人にはなったかもしれない。だが、それはきつと今とは違う形となったはず。それがいいか悪いかは分からない。だが、一つだけ言えるのは彼らとの出会いが無ければ、今のような笑顔は出来ないだろうという事だ。

そんな三人の視界に八神家が見えてくる。そこにいる友人達も一つの出会いから結ばれた相手。そう思いなのは達は微笑んだ。少なくとも今の関係となった要因は彼らだと思い出したからだろう。笑みを浮かべたまま、三人は八神家へ近付いていくのだった……

八神家 はやての部屋。そこにすずかを始めたとした六人が揃っていた。その視線は、皆一様にすずかに注がれていた。彼女から大事な話があるというのは誰もが知っている。すずかは周囲の不思議そうな表情に少し逡巡するも、やがて意を決したのか語り出した。

「……………あのね、話って言うのは……………私達の一族の事なんだ」

その視線をしつかりと受け止め、すずかは自らの事を話す。その異常性をゆつくりと。それをなのは達は軽く驚きはしたものの、奇異の目で見たり嫌悪の感情を示す事もなかった。それは、すずかを良く知っているから。彼女がどうという人間で、どんな心の持ち主かを分かっているからだ。

それに加えて、なのは達が非日常へ慣れた事もある。何しろ、英霊や魔法などに関わっているのだ。よって、今更吸血鬼と言われてもなのは達にとってはそこまで驚く事ではない。よって……

「……どう？ 分かってくれた？」

「うん。すずかちゃんはずずかちゃんって事だね」

話を終えたすずかに、なのはが告げた一言が全てだった。それに頷いていくフェイト達。その表情は皆笑顔だ。それをすずかはどこか茫然としていた。それを五人は笑顔で見守る。やがて、なのは達の気持ちを理解し、すずかは瞳を潤ませて微笑んだ。

その行動が喜びと感謝の表れである事を察したなのは達は、そんなすずかに微笑みを返す。室内を包む優しい雰囲気。それもあってか、感受性が強いフェイトは一人瞳を潤ませていた。

（すずかは強いな。私が同じ立場なら、きつと泣いてると思うよ）

フェイトは涙を流さないすずかを見ながらそう思った。この中で一番なのは達との付き合いが短いフェイト。だからこそ、フェイトはずずかが自分の秘密を話し出した時、内心動揺を覚えると同時に嬉しさも感じていた。

それは、自分も秘密を話す『親友』に含まれたから。すずかは言った。親友であるなのは達にこれ以上隠し事はしてはいたくないと。

(私も……親友なんて……)

その言葉を思い出し、フェイトは視界が滲むのを感じて慌てて顔を背けた。だが、それをユーノが気付き、周囲に気付かれぬようフェイトへ向けて念話を送った。

【どうしたの？ フェイト】

【えっと、目にゴミが入っちゃって……】

【……そう。あまり擦らないようにね。眼球が傷付く事もあるから】

【わ、分かった。ありがとうユーノ】

【どういたしました。あ、フェイト。これだけは言っておくよ。僕も、きつとなのは達もだけど……フェイトの事はすずかと同じように思ってるから】

【えっ……？】

【”親友”って事】

ついその言葉に振り向いたフェイトに、ユーノはそう答えて微笑み一つ。それにフェイトは一瞬息を呑み、瞳から涙を流した。それに今度はユーノが慌てた。そんな彼の反応でなのは達もフェイトが泣いている事に気付き、何があったのかと思つてユーノを見つめた。

「ね、ユーノ君。何があったの？」

「その……何て言ったらいいの？」



「何よ？ 変な事して泣かせたんじゃないでしょうね？」

「いやいや、ユーノ君はそないな事せんやろ。でも、念話をしたんは間違いないな」

「フェイトちゃん大丈夫？」

「だ、大丈夫だよ。目にゴミが入ったせいで涙が出ただけだから」

すずかの問いかけにフェイトはそう返して笑ってみせた。それにユーノがどこか安堵するように息を吐き、先程の念話内容を簡単に伝えてなのは達はそんな事かと苦笑した。こうしてすずかの告白という出来事も無事に終わり、なのは達は連れ立って探索へと出かける事になった。

それを見送るべくはやて達は玄関へと向かったのだが、すずかはユーノへは別に話があると呼び止めはやての部屋に残った。そして少しした後、ユーノは部屋を出てなのは達と合流するべく外へ向かった。部屋には嬉しそうに笑みを浮かべるすずかが残された。それはついさっきまでユーノと話していた事が影響している。

（やっぱりユーノ君も優しいんだね。私の事を受け入れてくれただけじゃない。別にしきたりに縛られる必要はない、なんてね……）

そう思い、すずかは笑って部屋を出た。そして玄関先でなのは達を見送るはやてとアリサへ近付くと、二人と同じく笑顔でその背を見送った。

すずかは、ユーノにだけ別に話さなければならぬ事があった。それは契約の事。異性であるユーノには、伴侶となるか全てを忘れ

るかどちらか選んでもらわねばならないと迫ったのだ。

厳密に言えば結婚ではなく誓約に近いもののだが、姉である忍と恭也の馴れ初めを聞いていたさすがとしては、頭がその事で一杯になっていたのだ。

そしてすずかはやーノへ契約の事を話したのだが、それに対して彼の反応はすずかの予想を少し超えてきた。

すずか、それはさすがに不味いよ。

そ、そうだよ。いきなりこんな事を。

違うよ。僕が言いたいのはそのいう事じゃないんだ。

真剣な表情ですずかの目を見つめるやーノ。その目は怒りを宿していた。

僕が言いたいの、しきたりに無条件で従うのが不味いつて言ってるんだ。

やーノは語った。確かにしきたりは大切かもしれない。だが、それはあくまでも状況に合わせていかなければいけないのだ。無理に自分を伴侶になんてしないでいい。自分はすずかの秘密を誰にも話さないし、すずかが自分を心から信じてくれるのなら結婚なんてする必要はないから。更にやーノはそこまで告げてこう頼んだのだ。

友達には、本当に幸せになってほしいから。だからすずかが心から好きになった人へその誓約はしてもらって。

やーノはそう真剣な眼差しで告げて軽く微笑んでみせる。その力

強さにすずかは声を失った。ユーノが自分の将来を考え大切に扱ってくれたと感じたからだ。そんな言葉を失うすずかへユーノは心配しているだろう事への約束を告げる事にした。それは……

心配しないで。絶対すずか達の事は誰にも言わない。……墓まで持っていくよ。

先程までの真剣さを消したユーノはすずかを安心させるためにおどけるような雰囲気ですう言つと、なのは達と共に探索へと向かうためにはやての部屋を出たのだ。なのは達と共に離れていく後姿を見つめ、すずかはユーノの気持ちを嬉しく感じると同時に思う事があった。

(本当に好きな人、か。出来たらユーノ君へ話して相談に乗ってもらおうかな。男の子だし、色々助言をくれると嬉しいかも)

その事を思い出して笑うすずかを優しく風が撫せて行く。少女の心にあった影を爽やかに吹き飛ばすように……

「まさか、こんな街の真っ只中にあるなんて……」

「でも封印も終わったし、これで残りは六つだね」

どこかホッとした感じでユーノが呟くと、それを聞いてなのはが笑顔で言った。その言葉に頷くフェイトの表情も笑顔だ。何故なら残りのジュエルシードの場所は既に特定しているからだ。

「でも、問題はいくつもある。特に厄介なのがその場所だ」

「海の中、だからね」

「六つともそこにあるってのが厄介だねえ」

ユーノの指摘にフェイトとアルフが答えた。ちなみに今回の封印作業にはセイバーもキャスターもランサーさえも来ていない。セイバーは仕事が抜けられず、キャスターとランサーはアーチャーと話し合う事があるために高町家にいるためだ。

だが、それでもなのは達に不安がない理由はある。それはなのは達に遅れて現れた一人の女性。

「ですが、纏めて封印できれば手間も時間も短縮できます。管理局の人間もいるのなら負担も少なく済むはずですし、フェイト達にも都合がいいでしょう」

「だね。ライダーの言う通りだよ」

そう、すずかの迎えに来たライダーがいるからだ。封印に向かっている途中、後ろからライダーがなのは達に合流したのはつい三分程前。すずかの迎えのために八神家に着くなり、そのすずかに頼まれなのは達の手伝いをしにきたのだ。

実際、フェイト達が合流してからは発動前にある程度の場所を把握出来るようになった事もあり、ほとんどサーヴァント達がいなくても大丈夫な状況ではある。しかし、いつ何があるか分からないので大抵ランサーが同行していたのだ。

「でも、一度に複数のジュエルシードが発動したら大変なんだ。海

のジュエルシールドはいつも以上に慎重に行かないと」

ユーノの纏めになのは達は無言で頷く。その後も帰り道での話は海に眠るジュエルシールドをどう対処するかに終始した。そこで決まった方針としては、探索魔法で一つずつ位置を特定し、それを何とか一つだけを強制発動させ封印する事を繰り返すというものだった。さすがに海の中を潜って探索するのは骨が折れるし、何よりも時間の余裕もそう多くない。なのはやフェイト達は知らないが、アルフはランサーを通じて知っている。プレシアの容体があまり良くない事を。

「クロノ執務官に強制発動をお願いするとして、なのはとフェイトは封印処理かな」

「そうだね。私とフェイトちゃんの手分けすれば六つでも楽勝だよ」

「私もそう思う。体調はいいし、色々充実してるから」

ユーノの表情が申し訳なさそうに曇るのを見て、なのはとフェイトは笑顔で答えた。それにユーノが苦笑い。二人に気を遣わせた事を理解したのだ。すると、アルフがそんなユーノに一言。

「アタシもいるって事忘れんじやないよ」

アルフの案はこうだ。自分が探索と強制発動を担当し、フェイトとなのはだけでなくクロノにも封印を担当してもらおう。ユーノは行動時の飛行魔法を担当し、少しでもなのはやフェイトの負担を減らすようにすればいいと。

その案を聞き、ライダーが小さく「意外と頭も使うのですね」と言った。そんなライダーの発言に怒りを見せるアルフ。それになの

は達三人が笑ったのは当然の事だった。そのままなのは達は帰路に着く。

途中ライダーと別れ、まだ余裕があるのでなのはとフェイトはユーノとアルフと共に海鳴海浜公園へと来ていた。話し合いの結果、今日の内に探索だけでも終えておこうとなったからだ。位置を把握し、大体の場所を記憶して明日に備えるために。

ユーノが展開した結界の中、その作業をなのはとフェイトが始めた。それを眺めながらアルフとユーノは、邪魔にならないように念話である事を話し合っていた。

【これが終わったら、あんたはどうすんのさ？】

【僕？】

【当然だろ？ いつまでもここに居る訳にもいかないからね】

アルフの言葉にユーノは即座に言葉を返す事が出来なかった。きつと、これがなのは達と出会った頃なら迷う事無く帰ると言えただろう。だが、今のユーノにとって海鳴は友人達が暮らす街になっていた。確かにスクライアへ帰るのが正しいとは思っているし、帰る事に違和感はない。だが、それと同時に思う事もある。

士郎から”子供”にしたいと言われた日。桃子から”お母さん”と呼んでもいいと言われた日。美由希や恭也から”弟”のように思っていると言われた日。セイバーから”仲間”だと言われた日。そして、なのはから”親友”と呼ばれた事を。

それらの事が思い出され、ユーノは悩んだ。自分がどう思い、どうしたいのかを。それを自問する。するとその答えはユーノ自身が思ったよりもすんなり出た。

【……うん、スクライアの皆がいる場所へ帰るよ】

【そうかい。じゃ……】

きつとなのは達が寂しがるね。アルフがそう言おうとした瞬間、ユーノははっきりと告げた。

【でも、またここに遊びに来るさ。キャスターと一緒に、ね】

その言葉にアルフは一瞬面食らったような顔をした。だが、すぐに楽しそうに笑みを浮かべた。

【そうだね。何ももう会えなくなる訳じゃなかった】

【そういう事。で、そっちはどうするの？】

【あゝ、まだ分からないけど……多分時の庭園に戻るんじゃないかな】

アルフのその声に不安や嫌悪と言った感情はない。何故ならあそこにはリニスがいる。そして、まだどこか割り切れない気持ちもあるがフェイトの母のプレシアもいるのだ。そして、もしかすればそこにもう一人加わるかもしれない。

「終わったよ」

「これで六つ全部の位置は大体把握したから」

そう考えたところでアルフの思考は止まった。なのは達が戻って

きたのだ。そしてバリアジャケットを解除し、公園へと降り立つ。それを確認し、ユーノが結界を消して周囲の状況が元通りに戻った。

「少し疲れたかも。お腹も空いたから夕食が楽しみだ」

「私もだよ。今日は晩御飯何だろ？」

「桃子さんが朝言ってたじゃないか。シーフードカレーだよ」

歩きながらそんな会話をするのは達。それだけ聞けば歳相応の三人なのだろう。アルフはそんなフェイトを真剣な表情で見つめる。

いつか教えるからね、フェイト。フェイトにはお姉ちゃんがいるって。

そう呟き、アルフもまた歩き出す。その表情は普段の陽気なものへと変わり、三人の夕食話へと嬉々として加わって。そこで肉が食べたいと言い出すアルフにフェイトが苦笑。アーチャーの料理がまた食べたいと呟くのはへユーノはからかうように桃子に伝えておくと言いつつ走り出した。

それにどこか笑みを浮かべながらも、怒るようになるのはがそれを追い駆け、フェイトも置いてかれまいと走り出す。そんな姿を夕日が照らす。影が重なるように伸び、それがまるで三人の絆を表しているようだ。当の本人達はそれに気付かず公園を走り続ける。

（ユーノ君、たまに意地悪だよ。だけど、こういう事ってあまりないし許して……………やっぱりあげない）

（またやっちゃった。なのは達相手だと、時々言っちゃうんだよな。僕もこういう年相応な事を言えるのはやっぱりなのは達と出会えた



からだろうね)

(なのはとユーノって一緒に暮らしてるから仲が良いよね。私、なのは達とは結構仲良くなったけどユーノともそうなれるかな?)

(まったく、フェイトだけでも大変なのに……。守りたい”笑顔”が増えてくよ、困った事にさ)

追い駆けあう三人を眺め、アルフは微笑む。そんな彼女を皐月の風が撫でて行く。まるでそれは彼女の想いに同意するようだった……

「許可が下りたんですか？」

『ええ、ちよつと骨が折れたけどね。ジュエルシードが問題を起こしかけた事実がある以上、もう放置とはいかないって押し切ったわ』

どこか疲れた顔のリンディを見て、エイミイは何か上層部から言われたのだろうと察した。場所はクロノ達が宿泊しているホテルの一室。既にジュエルシードに関する話し合いは終え、クロノは一人未だにアーチャー達と話し合っている。それは当面の寢床に関するだ。

何せあまり滞在するつもりはなかった旅行である。クロノもエイミイもそこまで多く所持金を持っていなかったのだ。両替をしようにもミッドでの通貨を地球で換金出来る訳がなく、一旦帰る必要があった。しかし、それを知ったアーチャーが月村家を一時的な宿に

する事を提案したのだ。

それに難色を示したクロノだったが、いつジュエルシードだけでなく闇の書まである中局員が不在になる事は避けたいとの思いもあった。そのため、彼はエイミィとアルクエイドを先に帰して現在アーチャーと共に月村家を訪れていたのだ。

「クロノ君へは？」

『もう通達済み。あ、それと宿泊先の件だけど承諾をもらえたそうよ』

「そうですね。よかったです。あ。もし一旦帰還するにしても面倒な事になるなと思ってたんで」

『そうですね。念のために二人揃っていた方がいいでしょう』

普段の砕けた態度でエイミィに伝えるようにリンディも言葉を返す。これが局員としての雰囲気やリンディが少しでも見せれば即座に気持ちを切り替えるから大したものだろう。リンディがエイミィを気に入っているのは、そういう切り替えが的確に出来るところもある。故に早いところ息子であるクロノと上手くいってほしいと思っっているのだが、それは今は本人の胸の内にしまわれている。

「あ、それとさっき現地協力者の一人から連絡がありました。残りのジュエルシードは全部海の中だそうです」

『あら、なら意外と手早く終わりそうですね』

リンディの言葉に優しさが混ざる。それを感じ取りエイミィは憂

いを浮かべた。そして、意を決して告げた。それはまだリンディへ伝えていない事。詳しい話はクロノからした方がいいとは思っているが、心構えだけはしておいてもらおうとの気持ちからの報告。

「あの……艦長。実はジュエルシードよりも厄介な物がこの街にはありました」

『どつという事？』

エイミイの言葉にリンディがやや表情を険しくした。それにエイミイは一言だけ告げる。未確認だが闇の書と思わしき物があると。それにリンディが一瞬息を呑むものの、すぐに気を取り直したのか平然とそうですかと返した。

それにエイミイは内心で驚くも、その理由に気付いて納得する。今問題となっているのはジュエルシード。ならば先に解決すべきはそちらだとリンディは判断したのだ。なので、闇の書に関する詳しい話はクロノがするとリンディへ告げてエイミイは通信を切った。

（何だか本当にこの街に意図的に呼ばれた気がするなあ。クロノ君じゃないけど、あれが言いたくなる状況にならない事を願うよ）

いつだって世界はこんなはずじゃない事ばかりだ、ってね。

後に彼女は知る。その言葉を良い意味で使わせてくれる者達がいる事を。そして、奇跡とは起きるものではなく起こすものだ。七人の異邦人と七人の少年少女が結びし絆。それが希望と言う名の光で道を作り出していくのだから……



無印七話 後編

それは、もう戻らない日々。それは、忘れえぬ記憶。それは、大切な思い出。

「……あのね。私、妹が欲しい！」

「妹？」

「うんっ！……ダメ？」

可愛らしく首を傾げる金髪の少女。それに女性 プレシアは微笑んで答える。

分かったわ。アリシアのお願いだもの。

じゃあ、約束だよ、ママ。

それは遠く儂い幻。失ってしまった時間。だからこそ今なお胸を焦がす光景。だからだろう。プレシアは無意識に手を伸ばして目の前の少女を抱き寄せようとしたところで目が覚めた。

「夢………？」

「プレシア？ どうかしましたか」

「いえ、何でもないわ」

心配そうに見つめるリニスにプレシアは手を振って答える。それ

を何か気に掛けながらもリニスはそうですかと返した。今のリニスの頭は管理局員が海鳴にいる事で一杯だった。

（執務官と補佐の二人。ジュエルシードの封印を手伝うだけらしいですが、下手な動きを見せて疑われてはいけませんね。ここへランサー達を戻すには局員がいなくなるのを待つしかないでしょう）

それをリニスが聞いたのはいつもの定期連絡の時だった。アルフが少しだけ苦笑気味に「ちよつと困った事になった」と伝えてきたのだ。最初こそ局員がジュエルシードの回収を手伝う事になったと聞いて動揺したりリニスだったが、その内容を詳しく聞いて一先ず安堵した。

フエイトの事情をランサーのマスターだった事もあって上手く納得させた時点で危険はなくなったと言えたのだから。これならプレシアに聞かせても心労とはならないだろう。そう判断し、リニスは横たわるプレシアへ報告するようにクロノ達の一件を話した。

それに初めこそ表情を曇らせたプレシアも徐々に顔を安堵するようになり、徐々にいく。クロノ達が元々ジュエルシードを回収するために来ていた訳ではない。それが分かっただけでなく、フエイトの管理外滞在に関しても誤魔化しが一応成功していたからだ。

「それにしても、まさかここで介入してくるなんて」

「ですね」

「サーヴァント同士が惹かれあつたとしてもいづのかしら？」

「その可能性は……ここまでくるとないとは言い切れません」

「とにかくジュエルシードについてはランサー達に任せるわ。上手くやつてくれるでしょう」

プレシアの言葉にリニスは柔らかく笑みを浮かべて頷いた。感じ取ったのだ。プレシアがランサー達と言った意味を。無意識にフェイトもそこに含めている。知らない内にプレシアなりにフェイトへ信頼感を抱いているのだろうと。

それが嬉しくてリニスは微笑む。それにプレシアは気付くも何も言わず静かに目を閉じた。今は少しでも体を休めておきたいとそう考えて。ゆっくりと近づくタイムリミット。それを彼女は笑顔で乗り越える事が出来るのか。その答えはまだ誰も知らない……

「初めまして。僕はクロノ・ハラウンと言います。今日から数日滞在させてもらう事になりました。よろしくお願いします」

「初めまして！ あたし、エイミー・リミエッタです。少しの間ですがお世話になります」

「えっと、初めまして。私はアルクエイド・ブリュンスタッド、アルクでもいいよ。これからよろしくね」

朝、月村家に三人の来客があった。それを出迎えたのは当然ノエル。ノエルに食堂まで案内され、そこでライダー達と対面したクロノ達は開口一番そう挨拶した。一人ライダーだけはアルクエイドの事を既に聞いているため複雑な顔をしていた。

彼女は真祖。つまりは吸血鬼である。その意味は忍達が考えるよ

りも厄介だが、ある意味で親戚とも言えなくもない相手なのだ。それを思うと、この月村家に自分とアルクエイドが滞在する事になったのがある種運命だったようにも思えた。

（アーチャーの話では彼女と共にいる二人は真祖の意味を知らないらしいですし、あまり迂闊な事は話さない方がいいでしょうね。しかし、シノブもスズカも大したものです。感覚的にアルクエイドが自分達に近いと悟ったようですね）

自己紹介を受けた月村姉妹はアルクエイドの雰囲気から何かを感じ取ったのか、不思議そうな顔をしたのだ。その後特に接触する事はなかったが、二人して何かを気にしている素振りをみせていたのだから。

それを思い出しているライダーの視線の先では、前日の忍との話し合いもあってかクロノが彼女から色々と質問を受けていた。管理局についての質問が多いのは、やはり実態が中々把握出来ないからなのだろう。クロノもそこを理解し、出来る限り誤解を与えないよう慎重に言葉を選んでいった。

「成程、次元世界つてもものの安全を守るのが時空管理局ねえ」

「そんな認識で構いません。僕らは軍隊などではなく、その目的も治安維持が主です。確かに戦力としての面がある事は否めませんが、あくまでも守るための力であり倒すための力ではありません」

「そっか。で、色々と管轄やら何やらがあるのはこっちの警察とかと同じなのね。しかし、管理外への干渉は基本駄目と」

「ええ。なので干渉出来ても僕らはあまりいい顔をされないし、第一存在自体を知られていない事さえあります」



「それだから地球では魔法とかを秘密にしないといけない？」

「そうですね。まあ、中には貴方達のように存在を知っている人も少なからずいますが」

「基本的に他言無用」

「そういう事です」

忍の締めくくりに頷き、クロノは手元のティーカップを持ち上げた。そこからは気持ちを落ち着けるような香りが漂っている。それに少し表情を緩め、クロノは紅茶を口にした。忍もそれに続くように紅茶を飲み、静かに視線を動かした。

そこにはファリンと楽しげに会話するエイミイの姿があった。ノエルと言えば朝食の片付けを始めていて、今は厨房の方で洗い物の真っ最中だろう。ファリンがそれを免除されているのは、エイミイと仲良くなり始めている事に気付いたノエルなりの優しさだ。

「はー、戦艦の通信士なんですか」

「戦艦っていうのはちょっと違うけど、大体そんな感じですね。で、ついでにクロノ君の部下で補佐官もやってます」

ファリン相手に丁寧な言葉で話すエイミイ。一応世話になる現地協力者のため、彼女なりの分別の付け方だ。それでもファリンが普通に喋ってもいいと言えば即座に普段のものへと変えるだろうが。

「ふわぁ、エイミイさんって優秀な人なんですね」

「そんな事ないですよ。でも、多少人より仕事は出来る自信はない訳じゃないですけどね」

「いいなあ。私、結構ドジが多くて。今は昔よりも減ったんですけど……」

人付き合いが得意な性格のエイミー。彼女は月村家で一番自分と波長の合いそうな相手としてファリンを見出していた。集団と仲良くなるにはその中のムードメーカーと繋がりを持てれば良いとばかりに。結果、ファリンもエイミーの事を気に入ったのか会話は良好と言える雰囲気だった。

自身の事を悩むファリンにエイミーは人間誰にも失敗はあると自分の失敗談を挙げた。それで更にエイミーへ親しみを抱いたのか、ファリンは苦笑交じりに自身の失敗談を聞かせてエイミーの笑いを誘う。

そんな様子を眺め、ライダーは隣に座ったアルクエイドへ視線を向ける事無く問いかけた。

「それで、貴方は彼らとここで暮らしていくつもりですか？」

「それも最悪ありかもね。ま、でもその内帰るよ。今はまだ許してもらえないから帰らないけど」

「何故帰らないのですか？ 差し支えなければ理由を教えてくださいのですが」

「えっと、私さ”元の世界”と繋がってるんだ。だからそれを辿れば」

「……………成程。さすがは真祖と言ったところでしょっか」

さらりと告げられた内容にめまいを感じつつ、ライダーはそう返すのが精一杯だった。アルクエイドの言いたい事は理解出来たのだ。感覚を頼りに異世界を渡る。それが持つ危険性を指摘され、安全に渡れる方法が見つかるか、どうしても帰りたくなつた時でなければ行かせないとクロノ達から言われたのだらうと。

そこでライダーは小さく苦笑する。アルクエイドも自分達と同じで優しい相手と出会えたのだなと、そう強く感じたからだ。真祖でありながらクロノ達と共にいるのはその心の在り様が大きく関係しているに違いない。そう判断し、ライダーは別の事を考えた。

おそらくこれを凜が聞いたのなら怒りを通り越して呆れるだろうと。第二魔法である平行世界移動。遠坂の家が宿題として長きに渡り研究している課題だ。それをアルクエイドはその気になれば出来ると言つたに近いのだから。

だが、事實は違う。この世界はライダー達がいた世界の平行世界ではない。もし仮にそうだとすれば、どこかにあるはずなのだ。そう、冬木や魔術師といった共通点が。しかしここにはそれはない。それが意味するのはなのは達の世界はセイバー達が生きていた世界とは完全に違う世界だという事だ。

「それにしてもびっくりしたなあ」

「何がです?」

「この家だよ。普通じゃないよね、色々」

アルクエイドはそう楽しそうに笑って背伸びをした。ライダーはそのアルクエイドが言いたい事を察し、釘を刺すように鋭く告げた。

それを否定はしません。ですが、それを許可なく誰かに話せばただでは済まさないのですそのつもりで。

……へえ、それが自分の死に繋がるとしても？

アルクエイドの冷たい声にもライダーは臆せず無言で頷いた。真祖であるアルクエイドと戦えば無事では済まないと彼女も知っている。だが、そうだとしてもさすが達の秘密を簡単に話されては困るのだ。彼女達の笑顔を守る事。それが今のライダーにとっての使命なのだから。

そんな彼女の内心を悟ったのか、アルクエイドはどこか意外そうな反応を示す。だが、すぐに嬉しそうに笑って頷いた。それを横目で見てライダーは軽く放っていた殺気を消した。

「……何故笑っているのですか？」

「私が思ってたサーヴァント像と違いすぎるのよ、貴方もアーチャー達も。そうだなあ……一言で言えば人間らしいって感じかな？」

「人間らしい……？」

「そう。貴方達は普通のサーヴァントじゃない。守護者として召喚されてるに近いんですよ？ それが貴方達はみんな良い奴って感じがする。世界の都合で動いたりしない。自分の意思で動く。そんな強い気持ちで前面に出てる気がする」

アルクエイドはそう言うように楽しげに「ま、そもそも人間じゃない私と言える事じゃないけどね」と締め括った。それにやや茫然としていたライダーは我に返った。

「そんな事はありません。私も本当は人間ではないのですから」

その言葉に今度はアルクエイドが言葉を失う番だった。周囲はそれぞれに談笑しているとはいえ、下手をすれば聞かれてしまってもおかしくはない。アルクエイドはそれでもよかった。既にクロノに話しているし、エイミーもおそらく受け入れてくれる気がしていたからだ。万が一嫌われたとしても、それならすぐに元の世界へ戻れば良いと思っていたのだから。

しかし、ライダーは違うはずだ。何せ嫌われた時、この世界から元の世界へ戻る方法はないのだから。つまりここで守りたい者達から避けられながら生きていかなばならない。そうアルクエイドが考えていると、ライダーはその考えを見抜いていたのだろう。小さく口の端を上げて告げた。

私の正体をスズカは知っています。その時、彼女は泣きました。恐怖からではなく、私が死ぬまでの出来事の悲しさに。

すずか？ あの女の子が？

ええ。だから私は決めたのです。私の気持ちに想いを馳せて涙を流してくれたあの子のために戦おうと。守護者でもメデューサでもなく、あの子が受け入れてくれた”私”として。

ライダーはそう告げると席を立って「そろそろ仕事を始めます」とアルクエイドへ言いながら動き出した。その背中を見つめ、アルクエイドは思う。本当にこの家は面白いと。その顔に満面の笑みを浮かべながら……

「ジュエルシードの正体を知りたい？」

キャスターは珍しく朝に訪ねてきたランサー相手に訝しむように問いかけた。隣のアーチャーが何も言わないところから、キャスターはランサーの案は既に彼も承知済みだと悟る。時刻は朝八時半。場所は高町家のリビング。現在高町家はキャスターとユーノしかおらず、そのユーノと言えば自己鍛錬のために道場で魔法訓練などを行っている真つ最中だ。

「おう。お前さんならあれの本質を理解してるんじゃないかって思ってたな」

「……ま、確証はないですけどおそろくなら」

「それを教えてもらえないか？ 私個人としてもその辺りは気になるところだね」

「そうですね。簡単に言うのなら、ジュエルシードは根源に干渉する事が出来るんじゃないかと思ってます」

その言葉にランサーとアーチャーが揃って息を呑んだ。まさかそれ程とは考えていなかったのだろう。そんな二人へキャスターは少し呆れた表情を返して息を吐いた。

「考えてもみてください。あれは持ち主の願いを叶えるんですよ？それがどんな事であれ少なからず根源へ干渉するはずですよ。例えば猫が巨大になったのもただ大きくしただけに見えますが、普通そ

んな事を急激に起こせば体に何らかの異常が出るはずです」

「そうか。それが何の影響もなく行えた。封印した後も猫はそれまでと変わらず平然と生活している。それはつまり」

「体に負担を与える事のないように、根源へ干渉してその猫が元からその大きさだったと世界に認識させたってか？」

二人の出した答えにキャスターは頷いた。推測に過ぎないが可能性は高い。そう持論を告げ、キャスターはランサーへ視線を向けた。その眼には詰問するような鋭さが宿っている。その意味を理解したのか、ランサーは真剣な表情を返した。キャスターの次の言葉を予想したのだ。

「それで、もうそろそろいいんじゃないですか？ 本当の目的を話してくれても」

やはりか。そう思うもランサーは口を開こうとしない。しかし、その顔には迷っている気持ちがありありと浮かんでいた。そう、ランサーは迷っていた。確かにキャスターの言う通りプレシアの目的を話す事自体はいつかはしなければならぬし、ジュエルシードも残りが全て見つかっている状態なら機は熟したとも言えた。

しかし、しかしである。まだ言えない理由がない訳ではない。それはジュエルシードを全て一斉発動させた際の対策を練らねばならないからだ。それを確立させればもう何の問題もない。そうランサーは考えていた。

「それについて話す前にやりたい事がある」

「……どういう事だ？」

「残ったジュエルシード。それを一斉発動させて封印出来るかどうかだ」

その言葉にアーチャーとキャスターが片眉を微かに動かした。そしてその言葉の裏を即座に察し、二人は同時にため息を吐いた。

「成程な。つまり君は全てのジュエルシードを一気に使って何かをするつもりか」

「それが失敗した時の事を考えて、六つ程度の暴走も抑えられないでは話にならないと？」

「ああ、やらせてくれ。頼む」

その言葉を言い終わると同時にランサーは頭を下げた。そんな行動に驚きを隠せない二人だったが、そこまでする事に並々ならぬ決意を感じ取ったのか仕方ないとばかりに苦笑した。彼らとしてもジュエルシードの暴走に備えた手段を得ておきたいと考えていたのだ。

「……しょうがないですねえ。ま、クロノ執務官達へはそれらしい言い分を伝えればいいでしょう」

「何、彼らも私達の力を見せると言えば多少なりとも興味を示すはずだ。特にアルクエイドはな」

「安全第一で、とクロノ執務官辺りは言うと思いますが？」

「ならば強制発動のために流す魔力の調整を誤ったとすればいい。それならば彼らも納得するはずだ」



「まあ、確かに無理矢理発動させるためにやる事を調整するのは難しいですからねえ」

「お前ら……いい性格してんな」

不敵な表情で語り合うアーチャーとキャスターを見つめ、ランサーはどこか嬉しそうに笑みを浮かべた。そのランサーの言葉に二人は同時にこう返した。

「「褒め言葉として受け取っておく（おきます）」」

その瞬間、ランサーが一瞬面食らうもすぐさま笑い出した。その声を聞きながらキャスターも楽しそうに笑う。アーチャーは微かに口の端を上げてそんな二人を眺めた。ややあつて三人は再び話し合う空気感へ戻っていた。

「さてジュエルシードの暴走に対してだが、私の投影可能な物で確実に無力化出来る物がある。それと……これである程度暴走を抑える事が出来るはずだ」

そう告げたアーチャーの手に一本の槍が投影された。それはかのファイオナの騎士が使いし破魔の紅薔薇<sup>ゲイジャルク</sup>。魔力を槍先で突く事により無力化する力を秘めた魔槍である。

それを見てランサーは心底呆れたような表情をみせた。彼もそれを知っていたのだ。いや、直感で気付いたというべきだろう。アーチャーの言葉とその形状などから判断したのだ。

「お前がどんな奴か知らねえが、色々と反則だろこれ。まさか他の宝具も出せるんじゃないだろうな？」

「さてね。一つ言っておくが、私がこれを出せるのはたまたま生前この宝具を見たからだ。かの英雄王と出会った時だったかな。もし機会があれば戦ってみるといい。私がしている事が可愛く思えるレベルだぞ、あれは。それと私が投影出来るのは基本剣のみだ。これは槍なので正直あまり長時間は使えん。構造なども剣より脆くなっているから思ったよりもあっさり壊れるからな」

「うーん、私にはこれでも十分脅威なんですけどね。ま、ジュエルシールドも魔力で動いているのは間違いないから通用するでしょう」

キャスターがそう締め括ると同時にランサーが小さく「盾も使つてやがったくせに」と呟いた。それがあの教会前での戦いを意味している和理解し、アーチャーは軽い懐かしささえ感じて笑みを浮かべた。しかしランサーの呟きに答える事はない。それにランサーはやや不満そうな表情を返す。

と、そこで三人は同時にある事に気付いて顔を見合わせた。それは彼らの使う魔力とこの世界での魔力がまったく同じではない事を思い出したからだ。魔力には違いがないが宝具が本当に通用するのかを前もって確かめた方がいいのではないか。三人は視線だけで他の二人もそう考えた事を悟り、小さく頷くと視線をそのままある方向へ向けた。それは窓から見える道場。そこにいる魔法を使える少年に協力してもらおうと考えたのだ。

「魔法を無力化出来ればジュエルシールドにも間違いなく有効と言えるな」

「だな。うっし、ここはあいつの力を借りるとすつか。それと許可も取り直さねえと」

「じゃあ私はここでその結果を待つてますので後はお願いします。ま、多分私の本格的な出番があるとすればジュエルシールドが全て揃ってからでしょうし」

立ち上がる二人の男へそう告げてキャスターはひらひらと手を振った。その言葉に苦笑しつつ、二人は道場へ向かうために玄関へと向かった。その背を眺め、キャスターは深刻そうな表情を浮かべた。そう、一つ心配している事があったのだ。

それは彼女の持論が正しかった場合の事。もし根源へ干渉する力をジュエルシールドが持っているとなれば、その暴走は最悪抑止力を動かす事になる。一つであれば分らないがそれが二十一もあれば確実だ。

そうなれば自分達は守護者として世界に操られてしまうのではないか。そんな不安がずっとキャスターの頭の中を巡っていた。アルクエイドはサーヴァントではないのでそれから除外されるだろうが、自分達六人はそうではない。しかもアーチャーは過去に守護者として召喚された事があるとすれば不安も強くなるというもの。

(ランサーがジュエルシールドで何をするかは分かりませんが、それを行う際はアレを展開する必要があるかもしれないね……)

守護者とされぬために世界を誤魔化す事をしなければならぬ。案がない訳ではないがそれでも不安は尽きないのだ。その備えとしても決め手としても有効になるかもしれない手段。それがキャスターにはあった。問題があるとすればその持続時間だけ。長時間の展開は出来ないのだ。

その手段はキャスターの魔力を最大限高める場を作り出す事。しかし、その効力のため十分と持たない。それだけにキャスターにとつてはまさしく切り札。一度しか使えないとっておきのものなのだ。

から。

アレなら世界を騙す事も出来るかもしれない。でも、やっぱり不安は消えないなあ……

キャスターが一人今後の事を考えて思い悩んでいる頃、道場で魔法のアレンジへ挑んでいたユーノはアーチャー達からの突然の申し出に困惑していた。

「えっと、アーチャーさんにバインドをかければいいんですか？」

「ああ。支援魔法に関しては君が一番の使い手だからな」

「そんな……僕なんて」

「謙遜すんなって。お前さんが現状一番魔法の使い方が上手いってのは誰もが認める事だぜ」

ランサーの断言にアーチャーが静かに頷いて肯定を示すとユーノの表情が驚きが変わる。ユーノは密かになのはやフェイトに自分は負けていると思っていたのだ。攻撃魔法が使えない自分はいざという時役に立てないと。

しかし、アーチャーとランサーは知っている。戦場ではユーノのような相手が一番厄介だという事を。なのはやフェイトは攻撃が出来るためにどうしてもそちらへ意識を向けがちになる事がある。だがユーノは守りしか出来ないが故に生き残る事に関しては二人より

も上だ。そう、守る事にだけ意識を向ける事が出来るために。

それは時として攻撃よりも恐ろしい力となる。守り一辺倒な相手はその防御さえ突破出来れば何とか出来る。それは間違いないのだが、それはあくまでも突破出来たらの話だ。突破出来ず全てを凌ぎ切られたら。もしくは上手く捌かれたらどうなるか。

攻撃は最大の防御とも言う。しかし、自分の攻撃が一切通用しないというのは一種の悪夢だ。守りに自信があるのなら、防御は最大の攻撃とも言えるかもしれない。精神的にじわじわと追い詰められるのだから。

(僕には相手を倒す力はないかもしれない。そうずっと思ってた。でも違うのかもしれない)

アーチャーとランサーの評価を聞いて、ユーノはぼんやりと何か閃きそうな感覚を覚えていた。そんな彼へアーチャーがどこか生前の自分を見たのか助言を与えた。

「君は自分を過小評価しているかもしれないな。もっと頭を使ってみる。負けない戦いをさせたら君はかなりのものがある」

「負けない……戦い……」

「ま、簡単にいやあこいつみたいな戦い方だ。隙あらば倒すが無理なら生き残る事を優先する。俺やセイバーは相手に攻め込んで隙を生み出すんだが、こいつはそうじゃねえってこった。いけすかねえやり方だ」

アーチャーへ不満そうな表情を向けながらランサーはそう告げた。それにアーチャーは言い返す事もせずただユーノを見つめていた。

彼にはユーノの姿がかつての自分　　エミヤシロウに見えたのだ。  
守りたい相手がいる。だが自分の力では守る事が出来ない。それ  
も足掻こうとする姿に。

（昔の私ならばくだらん感傷と切って捨てただろうな。だが、分  
らないでもないな、彼の気持ちは。……俺もセイバーを守れる力を  
と何度思った事か……。彼女は俺に守られるような女性じゃないっ  
て、そんな事はどこかで分かっていたはずなのに）

気付かれぬ程度に小さく自嘲的な笑みを浮かべるアーチャー。そ  
んな彼を見ていたランサーは少々意外そうな顔を見ると、肩を竦め  
て首を傾げた。

（何笑ってたんだ、こいつ。何か小僧相手に思い出す事でもあるっ  
てのかよ？　相変わらず分からねえ奴だ）

「ま、とりあえずやってくれや」

今は本題を片付ける方が先か。そう判断しランサーは再度ユーノ  
へ呼びかける。それにユーノも気を取り直したように頷き、アー  
チャーへ手を向けると力強く告げた。

「チェーンバインドっ！」

次の瞬間アーチャーの体を魔力の鎖が縛り上げる。それを眺め、  
アーチャーは手を軽く開くとあの言葉を紡ぎ出す。

トレスオン  
投影、開始。

その手に歪んだ短剣が出現させるとアーチャーは迷う事無く鎖へ

突き刺した。その光景を見ていたユーノは目を疑った。魔力で出来た鎖が一瞬にして消えたのだ。まだアーチャーが突き刺した部分に変化が起きるならいい。それならば彼も納得出来ずとも理解した。

だが、鎖全てが消されるなど思ってもいなかったのだ。その衝撃からか少しの間沈黙するユーノ。一方でランサーとアーチャーは、これで自分達の推測が成り立つ事を確かめられたために表情は満足そうだった。

「予想通りだったか」

「ああ。これで暴走時の手立ては出来た」

手応えありとばかりのアーチャーの声にランサーも軽い笑み返して応える。すると、その瞬間ユーノが何かに気付いたように声を上げた。

「もしかして今のは宝具ですか？」

「……厳密に言えばその贋作だ。効果も本物より劣るがね」

「見た感じから察するに魔力に関する物全般の無効化ですね。でも、弓兵なんて名前にそぐわない宝具だ。……アーチャーさん、貴方の宝具は他者の宝具の贋作を作る事に関係してるんですか？」

「半分正解と言っておこう。だが詳しい話は断らせてもらう。私の切り札なのでな」

「そこまで望んでいません。でも、そうですね。あまりクラス名に囚われた考えは持たない方が良さそうですね、サーヴァントの宝具って」

「それについては同意だな。大抵はクラス名から直結する物ばかりだが、中には私のように単純にそうとも言えない者もいる」

その言葉にランサーも苦笑交じりに同調した。中には体そのものが宝具だった相手もいたと告げて。それにユーノが興味を示して詳しい話を聞きたがるのは当然と言えたかもしれない。彼も男。しかもまだ十歳にも満たない少年なのだ。

目の前にいるのは地球の歴史に少なからず名を遺した英雄。それが語る話は考古学者としても一人の男としても興味をそそられるものなのだから。そんなユーノの申し出にランサーは協力してくれた礼だとばかりに腰を下ろすと語り出す。アーチャーはそれに軽く呆れつつ、自分も礼をしない訳にはいかないと言ってその隣へ腰を下ろして話へ加わる。

こうしてユーノはランサーとアーチャーからキャスターの知るものとは違う聖杯戦争を聞く事になる。それは二人の男の物語にして”一人”の男の物語。有り得たかもしれない未来を拒み、決してそうはならないと誓った過去と、未熟で生きる価値なしと過去を否定し、それに忘れていた事を思い出させられた未来の戦い。

しかし、それをユーノが知る事は無い。アーチャーは教えない。ランサーもまた語らない。全てを語りたくない訳ではなく語る必要はないからだ。二人はこう思っているのだ。あれは決して英雄譚などではないと。

確かにそれぞれの誇りはあった。手に入れたものもあったのかもしれない。だがそれでもあれは優しい少年や少女達へ聞かせるものではない。だから聞かせるのはあくまでも戦った相手の事。まだ物語のようにも思える部分だけを語るのみだった……はずなのだが。







## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6636v/>

---

英霊達とリリカルマジカル頑張ります

2011年12月29日06時51分発行